

船 戸 遺 跡

—中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ—



1996.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

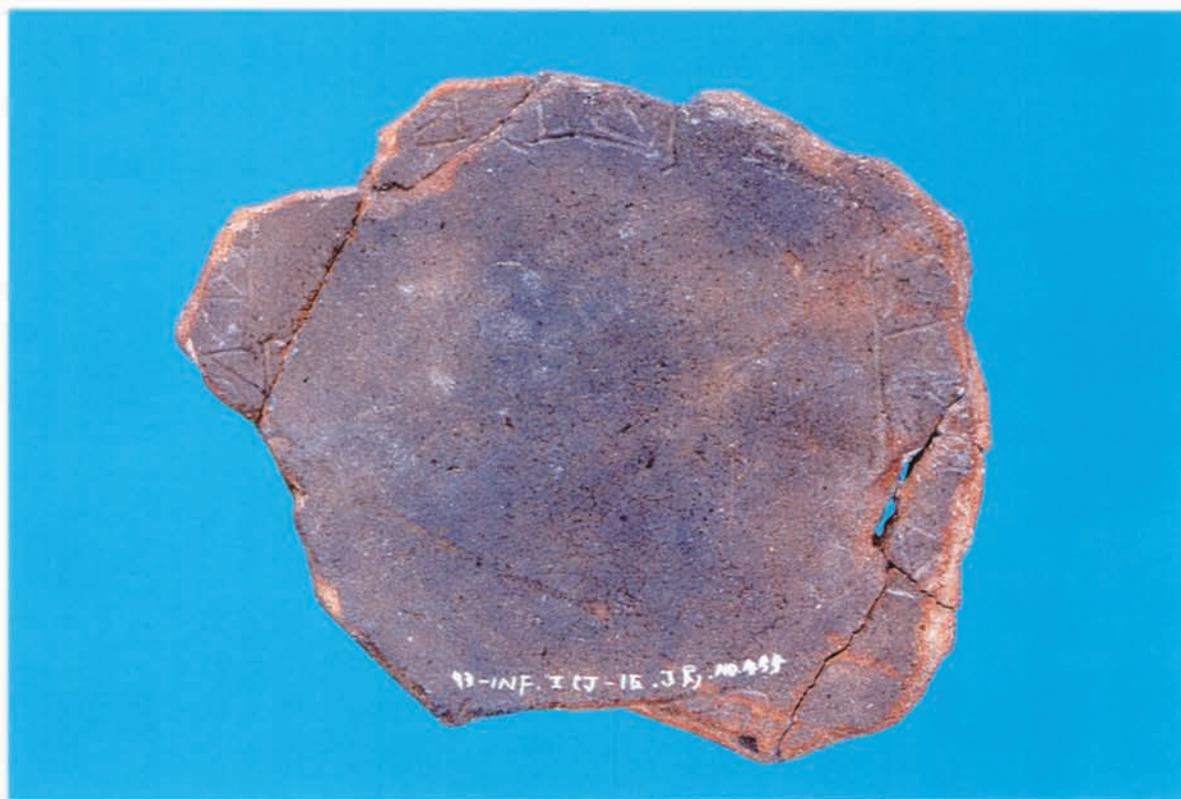
船 戸 遺 跡

1996.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



船戸遺跡航空写真



第I区出土縄文土器 (Fig. 19-11) (内面)



同 上 (外面)



SR1出土呪符



第 I 区SB10出土碇

序

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成4年度より建設省四国地方建設局の委託を受けて中村市と宿毛市を結ぶ高規格道路に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してきております。四万十川支流の中筋川に沿って、高規格道路が計画されているわけですが、中筋川流域は県下でも有数の遺跡が密集している地域です。特に古墳時代では、河川周辺で行われた祭祀遺跡が確認されています。さらに中世では、戦国の様相を垣間見ることができる山城跡が各集落に残っているようです。

本書は、平成5年度に実施した船戸遺跡の成果をまとめたものです。縄文時代から中世までの複合遺跡として大変貴重な成果を上げることができました。縄文時代は、線刻画土器や伊吹町式土器群が発見されましたし、古代から中世にかけては中筋川の河川を利用した河津の存在も指摘されています。この報告書が埋蔵文化財の保護・保全、さらには今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、調査・報告書作成について関係各位には多大な御指導と御教示を頂いたことに、厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 原 雅彦

例 言

- 1 本書は、高規格中村宿毛道路建設に伴う船戸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 船戸遺跡は、中村市森沢字船戸に所在する。
- 3 調査は、建設省四国地方建設局の委託を高知県教育委員会が受け、調査は高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。船戸遺跡の試掘調査は、平成2年12月3日から12月19日まで実施した。本調査は平成5年5月12日から平成6年2月17日まで実施した。本調査面積は、6000m²である。
- 4 発掘調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが主に実施した。調査体制は以下のとおりである。
 - (1) 調査担当
 - 出原 恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター 主任調査員）
 - 松田 直則（ 同上 主任調査員）
 - 曾我 貴行（ 同上 調査員）
 - 坂本 憲昭（ 同上 調査員）
 - 武吉 眞裕（ 同上 調査補助員）
 - 竹村 三菜（ 同上 調査補助員）
 - (2) 総務担当
 - 井上 幸雄（高知県文化財団埋蔵文化財センター総務課長）
 - 三浦 康寛（ 同上 主幹）
 - 山崎 詠子（ 同上 臨時職員）
- 5 本報告書の作成・執筆は、各調査員が分担し編集は松田が行った。文責は、執筆者名を文末に記した。
- 6 検出遺構に関しては、掘立柱建物跡（SB）、土坑（SK）、流路（SR）、柱穴（P）で標示している。出土遺物の実測番号は、写真図版中の番号と一致している。
- 7 現地調査及び本報告書を作成するにあたって、岡村道雄（文化庁記念物課主任文化財調査官）、池田誠（中世城郭研究会）、橋本久和（高槻市埋蔵文化財センター）、寒川旭（通産省工業技術院地質調査所主任研究官）、犬飼徹夫（愛媛県考古学協会副会長）、満塩博美（高知大学）をはじめ諸氏の御教示を頂いた。記して感謝する次第である。
- 8 遺構、遺物の測量及び写真撮影は各調査員が行い、調査区全体の航空測量は、アジア航空測量株式会社に委託した。さらに出土遺物の木製品処理は京都科学株式会社、種子及び土壌分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 9 発掘調査及び遺物整理、報告書作成については、下記の方々に協力頂いた。

発掘調査

浜田 昌一、正木 信邦、野並 櫛、伊与田茂一、植 恵、上岡 孝久、田所儀三郎、

立石 正吉、布 泰平、桑原 定、岡上 悦美、岡上 孝子、岡上 定美、岡上寿美子、
岡本 弘美、沖 和子、中山 末子、布 陽子、布 ツルキ、橋田 逸於、桑原 照美、
田所 洋子、多和 春喜、土居 澄子、中平百合香、能津 芳子、松本 菊美、宮崎 幸、
森 繁子、福本 澄子、林 延子、岡本 芳子、中山 昭子、大原千代枝、岡本 隆江、
上田 豊子、岡崎美代子、長崎 竹美、秋森 広松、岡本 正、川村 豊、才市 和子、
福谷 満子、両橋 安野

遺物整理、報告書作成

岡本 智子、小野 由香、吉富 紀子、吉本 睦子、宮地 佐枝、橋田 美紀、門田美知子、
臼木 由里、竹村 延子、矢野 雅

10 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所、中村市教育委員会の御協力を頂いた。また森沢地区長をはじめ地元住民の方々に、遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。

11 出土遺物、その他図面類の関係資料は高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	船戸遺跡の地理的歴史的環境	2
第3章	調査の方法	
	第1節 第Ⅰ区の調査方法	4
	第2節 第Ⅱ区の調査方法	11
第4章	第Ⅰ区の調査	
	第1節 検出遺構	
	1 縄文時代	17
	2 古代・中世	19
	第2節 出土遺物	
	1 縄文時代	29
	2 弥生・古墳時代	47
	3 古代・中世	56
第5章	第Ⅱ区の調査	
	第1節 検出遺構	
	1 中世	116
	第2節 出土遺物	
	1 縄文時代	117
	2 古墳時代	135
	3 古代・中世	149
第6章	考 察	
	1 縄文時代	165
	2 古代・中世	166
付 編	船戸遺跡における自然科学分析	

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺の遺跡分布図	Fig. 41	SR 1 出土遺物 6
Fig. 2	船戸遺跡測量基準点設定図	Fig. 42	SR 1 出土遺物 7
Fig. 3	調査区位置図及び基準点設定図	Fig. 43	SR 1 出土遺物 8
Fig. 4	第 I 区Grid設定図	Fig. 44	SR 1 出土遺物 9
Fig. 5	第 I 区検出遺構全体図	Fig. 45	SR 2 出土遺物 1
Fig. 6	第 I 区堆積土層断面図	Fig. 46	SR 2 出土遺物 2
Fig. 7	第 II 区全体図	Fig. 47	SR 2 出土遺物 3
Fig. 8	第 II 区堆積土層断面図	Fig. 48	SR 2 出土遺物 4
Fig. 9	SK1平面図・断面図	Fig. 49	SR 2 出土遺物 5
Fig. 10	第 I 区縄文時代遺物包含層遺存範囲・SK1位置図	Fig. 50	SR 3 出土遺物 1
Fig. 11	SB 1・2 実測図	Fig. 51	ピット群出土遺物 1
Fig. 12	SB 3・5 実測図	Fig. 52	ピット群出土遺物 2
Fig. 13	SB 4 実測図	Fig. 53	第 I 区包含層出土遺物 1
Fig. 14	SB 6・7 実測図	Fig. 54	第 I 区包含層出土遺物 2
Fig. 15	SB 8・10 実測図	Fig. 55	第 I 区包含層出土遺物 3
Fig. 16	SB 9 実測図	Fig. 56	第 I 区包含層出土遺物 4
Fig. 17	SR 1・2 実測図	Fig. 57	第 I 区包含層出土遺物 5
Fig. 18	SR 3 実測図	Fig. 58	第 I 区包含層出土遺物 6
Fig. 19	第 I 区出土縄文土器実測図 1	Fig. 59	第 I 区包含層出土遺物 7
Fig. 20	第 I 区出土縄文土器実測図 2	Fig. 60	第 I 区包含層出土遺物 8
Fig. 21	第 I 区出土縄文土器実測図 3	Fig. 61	第 I 区包含層出土遺物 9
Fig. 22	第 I 区出土縄文土器実測図 4	Fig. 62	第 I 区包含層出土遺物 10
Fig. 23	第 I 区出土縄文土器実測図 5	Fig. 63	第 I 区包含層出土遺物 11
Fig. 24	第 I 区出土縄文土器実測図 6	Fig. 64	第 I 区包含層出土遺物 12
Fig. 25	第 I 区出土縄文土器実測図 7	Fig. 65	第 I 区包含層出土遺物 13
Fig. 26	第 I 区出土縄文土器実測図 8	Fig. 66	第 I 区包含層出土遺物 14
Fig. 27	第 I 区出土縄文土器実測図 9	Fig. 67	第 I 区包含層出土遺物 15
Fig. 28	第 I 区出土縄文土器実測図 10	Fig. 68	第 I 区包含層出土遺物 16
Fig. 29	第 I 区出土縄文土器実測図 11	Fig. 69	第 II 区地震跡実測図
Fig. 30	第 I 区出土石器実測図 1	Fig. 70	第 II 区縄文時代遺物包含層遺存範囲
Fig. 31	第 I 区SR 3 X 層出土遺物 1	Fig. 71	第 II 区出土縄文土器実測図 1
Fig. 32	第 I 区SR 3 X 層出土遺物 2	Fig. 72	第 II 区出土縄文土器実測図 2
Fig. 33	第 I 区SR 3 X'層出土遺物	Fig. 73	第 II 区出土縄文土器実測図 3
Fig. 34	第 I 区包含層古墳時代出土遺物	Fig. 74	第 II 区出土縄文土器実測図 4
Fig. 35	SB出土遺物	Fig. 75	第 II 区出土縄文土器実測図 5
Fig. 36	SR 1 出土遺物 1	Fig. 76	第 II 区出土縄文土器実測図 6
Fig. 37	SR 1 出土遺物 2	Fig. 77	第 II 区出土縄文土器実測図 7
Fig. 38	SR 1 出土遺物 3	Fig. 78	第 II 区出土縄文土器実測図 8
Fig. 39	SR 1 出土遺物 4	Fig. 79	第 II 区出土縄文土器実測図 9
Fig. 40	SR 1 出土遺物 5	Fig. 80	第 II 区出土縄文土器実測図 10
		Fig. 81	第 II 区出土縄文土器実測図 11

- Fig. 82 第Ⅱ区出土石器実測図 1
 Fig. 83 第Ⅱ区土師器集中出土地点SX 1
 Fig. 84 第Ⅱ区SX 1 出土土器実測図
 Fig. 85 第Ⅱ区SX 1 周辺部出土土器実測図
 Fig. 86 第Ⅱ区包含層出土遺物 1
 Fig. 87 第Ⅱ区包含層出土遺物 2
 Fig. 88 第Ⅱ区包含層出土遺物 3
 Fig. 89 第Ⅱ区包含層出土遺物 4

- Fig. 90 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 1
 Fig. 91 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 2
 Fig. 92 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 3
 Fig. 93 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 4
 Fig. 94 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 5
 Fig. 95 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 6
 Fig. 96 第Ⅱ区古代・中世土錘実測図 1
 Fig. 97 第Ⅱ区古代・中世土錘実測図 2

目 次

- Tab. 1 船戸遺跡測量基準点成果表
 Tab. 2 第Ⅰ区縄文土器観察表 1
 Tab. 3 第Ⅰ区縄文土器観察表 2
 Tab. 4 第Ⅰ区縄文土器観察表 3
 Tab. 5 第Ⅰ区縄文土器観察表 4
 Tab. 6 第Ⅰ区縄文土器観察表 1
 Tab. 7 第Ⅰ区古墳時代観察表 1
 Tab. 8 第Ⅰ区古墳時代観察表 2
 Tab. 9 第Ⅰ区古墳時代観察表 3
 Tab. 10 第Ⅰ区古墳時代観察表 4
 Tab. 11 第Ⅰ区古代・中世土器法量表 1
 Tab. 12 第Ⅰ区古代・中世土器法量表 2
 Tab. 13 第Ⅰ区古代・中世土器法量表 3
 Tab. 14 第Ⅰ区古代・中世土器法量表 4
 Tab. 15 第Ⅰ区古代・中世土器法量表 5
 Tab. 16 第Ⅰ区古代・中世土器法量表 6
 Tab. 17 第Ⅰ区古代・中世土器法量表 7
 Tab. 18 第Ⅰ区ピット群土器破片出土表
 Tab. 19 第Ⅰ区土錘法量表・木製品一覧表

- Tab. 20 第Ⅱ区縄文土器観察表 1
 Tab. 21 第Ⅱ区縄文土器観察表 2
 Tab. 22 第Ⅱ区縄文土器観察表 3
 Tab. 23 第Ⅱ区縄文土器観察表 4
 Tab. 24 第Ⅱ区縄文土器観察表 1
 Tab. 25 第Ⅱ区古墳時代観察表 1
 Tab. 26 第Ⅱ区古墳時代観察表 2
 Tab. 27 第Ⅱ区古墳時代観察表 3
 Tab. 28 第Ⅱ区古墳時代観察表 4
 Tab. 29 第Ⅱ区古墳時代観察表 5
 Tab. 30 第Ⅱ区古墳時代観察表 6
 Tab. 31 第Ⅱ区古墳時代観察表 7
 Tab. 32 第Ⅱ区古代・中世土器法量表 1
 Tab. 33 第Ⅱ区古代・中世土器法量表 2
 Tab. 34 第Ⅱ区古代・中世土器法量表 3
 Tab. 35 第Ⅱ区古代・中世土器法量表 4
 Tab. 36 第Ⅱ区土錘法量表
 Tab. 37 船戸遺跡出土土器破片比率グラフ 1
 Tab. 38 船戸遺跡出土土器破片比率グラフ 2

図 版 目 次

<p>巻頭図版 1 船戸遺跡航空写真</p> <p>巻頭図版 2 第 I 区出土縄文土器</p> <p>巻頭図版 3 SR1出土呪符</p> <p>巻頭図版 4 第 I 区SB10出土碇</p> <p>PL. 1 船戸遺跡遠景（香山寺山頂より） 第 I 区調査前近景（東より）</p> <p>PL. 2 第 I 区航空写真（ピット、SB、SR1完掘） 第 I 区SB1・2・3、ピット群完掘状態（南より）</p> <p>PL. 3 第 I 区SB4・5・6、ピット群、SR1完掘状態（西より） 第 I 区SB、ピット群完掘状態（東より）</p> <p>PL. 4 SR2完掘状態（東より） SR3完掘状態（東より）</p> <p>PL. 5 第 I 区南北セクション SR1・2セクション</p> <p>PL. 6 縄文後期土器（深鉢）出土状態 縄文後期土器（鉢）出土状態</p> <p>PL. 7 縄文後期土器（注口土器）出土状態 縄文後期土器（深鉢）剥片出土状態</p> <p>PL. 8 縄文後期土器（深鉢）出土状態 縄文晩期土器（浅鉢）出土状態</p> <p>PL. 9 第 I 区出土縄文土器</p> <p>PL. 10 第 I 区出土縄文土器</p> <p>PL. 11 第 I・II 区出土縄文土器</p> <p>PL. 12 第 I 区出土縄文土器</p> <p>PL. 13 第 I 区出土縄文土器・石器</p> <p>PL. 14 第 I 区古墳時代高坏脚出土状態</p> <p>PL. 15 第 I 区古墳時代高坏脚部出土状態・甕底部出土状態</p> <p>PL. 16 第 I 区古墳時代甕出土状態・勾玉出土状態</p> <p>PL. 17 第 I 区甕</p> <p>PL. 18 第 I 区鉢・甌</p> <p>PL. 19 第 I 区高坏・鉢 SR2出土遺物</p> <p>PL. 20 第 I 区高坏 SR2・包含層出土遺物</p> <p>PL. 21 第 I 区壺・高坏・手捏ね土器・土製模造鏡</p> <p>PL. 22 第 I・II 区甕・勾玉・土錘</p>	<p>PL. 23 ピット、SR1遺物出土状態</p> <p>PL. 24 SR1遺物出土状態</p> <p>PL. 25 SR1木製品出土状態</p> <p>PL. 26 SR1・2遺物出土状態</p> <p>PL. 27 SR1・2出土遺物</p> <p>PL. 28 SR2出土遺物</p> <p>PL. 29 SR2包含層出土遺物</p> <p>PL. 30 第 I 区包含層遺物出土状態</p> <p>PL. 31 包含層出土遺物 1</p> <p>PL. 32 包含層出土遺物 2</p> <p>PL. 33 SR1出土木製品 1</p> <p>PL. 34 SR1出土木製品 2</p> <p>PL. 35 SR1出土木製品 3</p> <p>PL. 36 SB・SR2出土遺物</p> <p>PL. 37 ピット群出土遺物</p> <p>PL. 38 SR1出土遺物 1</p> <p>PL. 39 SR1出土遺物 2</p> <p>PL. 40 SR1出土遺物 3</p> <p>PL. 41 SR2出土遺物 1</p> <p>PL. 42 SR2出土遺物 2</p> <p>PL. 43 SR2出土遺物 3</p> <p>PL. 44 SR2出土遺物 4</p> <p>PL. 45 第 I 区包含層出土遺物 1</p> <p>PL. 46 第 I 区包含層出土遺物 2</p> <p>PL. 47 第 I 区包含層出土遺物 3</p> <p>PL. 48 第 I 区包含層出土遺物 4</p> <p>PL. 49 第 I 区包含層出土遺物 5</p> <p>PL. 50 第 I 区包含層出土遺物 6</p> <p>PL. 51 第 I 区包含層出土遺物 7</p> <p>PL. 52 第 I 区包含層出土遺物 8</p> <p>PL. 53 第 I 区包含層出土遺物 9</p> <p>PL. 54 第 II 区近景（南より）・（南東より）</p> <p>PL. 55 第 II 区東西ベルト土層断面（南より）・ 第 II 区南北ベルト土層断面（東より）</p> <p>PL. 56 第 II 区縄文時代土層断面（南より）</p> <p>PL. 57 縄文後期土器（深鉢）出土状態 縄文後期土器（浅鉢）出土状態</p> <p>PL. 58 縄文後期土器（深鉢）出土状態 縄文後期土器（注口土器）出土状態</p> <p>PL. 59 縄文後期土器（深鉢）出土状態 縄文後期土器（深鉢）・石棒出土状態</p>
--	---

- PL. 60 石鏃出土狀態
石器（石銛）出土狀態
- PL. 61 第Ⅱ区出土繩文土器
- PL. 62 第Ⅱ区出土繩文土器
- PL. 63 第Ⅱ区出土繩文土器
- PL. 64 第Ⅱ区出土繩文土器
- PL. 65 第Ⅱ区出土繩文土器・石器
- PL. 66 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 1
- PL. 67 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 2
- PL. 68 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 3
- PL. 69 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 4
- PL. 70 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 5
- PL. 71 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 6
- PL. 72 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 7
- PL. 73 第Ⅱ区古墳時代出土狀態 8
- PL. 74 第Ⅱ区甕・鉢・甗
- PL. 75 第Ⅰ・Ⅱ区弥生土器壺・須惠器甕・古式
土師器壺・鉢
- PL. 76 第Ⅱ区器台・高坏・鉢
- PL. 77 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 1
- PL. 78 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 2

第1章 調査に至る経過

高知市と松山市とを結ぶ一般国道56号線は、海岸線沿いに高知県中央部と県西南部とを繋ぐ重要な幹線道路である。この路線は高知県における流通の動脈でもあるために、絶対的な交通量が多く、朝夕にはその随所で深刻な交通渋滞が生じている。このような現状と、幹線道路としての更なる重要性に鑑み、この沿線の各所において道路改良計画が準備され、また進行中である。その中でも中村市と宿毛市とを結ぶ区間においても、建設省四国地方建設局中村工事事務所によって、「高規格中村宿毛道路」の建設計画が進められている。

高知県内の遺跡の分布状況という観点からみると、中村市は県内でも特に遺跡の密集して存在する地域の一つとして数えられるが、中村宿毛道路の計画路線に該当した中筋川流域の「中筋平野」周辺は、具同中山遺跡群をはじめとする大規模な遺跡が多く分布する地域として突出している。

この中村宿毛道路建設計画に関して、建設省四国地方建設局中村工事事務所と高知県教育委員会は、埋蔵文化財保護と開発との調整について、路線決定以前から度重なる協議を積み重ねてきた経緯があり、事業の進捗に伴って立会調査及び確認調査等を実施してきた。

今次調査の対象となった中村市森沢地区では、縄文時代から近世に亙る船戸遺跡が所在することが知られていた。そして、高規格中村宿毛道路の計画路線にはその大半が含まれており、事業の実施によって地下の埋蔵文化財に甚大な影響が及ぶことは明白であった。そこで、埋蔵文化財の範囲・深度・性格及び遺存状況等の基礎的な資料を得るため、平成2年度にその工事予定範囲に関して埋蔵文化財の確認調査を実施した。この調査によって、約8000m²の範囲に縄文時代～近世の遺構・遺物が遺存していることが判明し、また複数の時代の遺跡が上下関係をもって堆積している複合遺跡であるという成果を得た。

以上の確認調査の結果に基づき、建設省四国地方建設局中村工事事務所及び、高知県教育委員会の両者が、船戸遺跡の記録保存を目的とする発掘調査実施について合意し、平成5年4月1日付けで調査の委託契約を締結した。発掘調査は高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターがこれを実施した。発掘調査の期間は、平成5年5月25日から平成6年2月17日までであり、調査面積は6000m²である。(曾我)

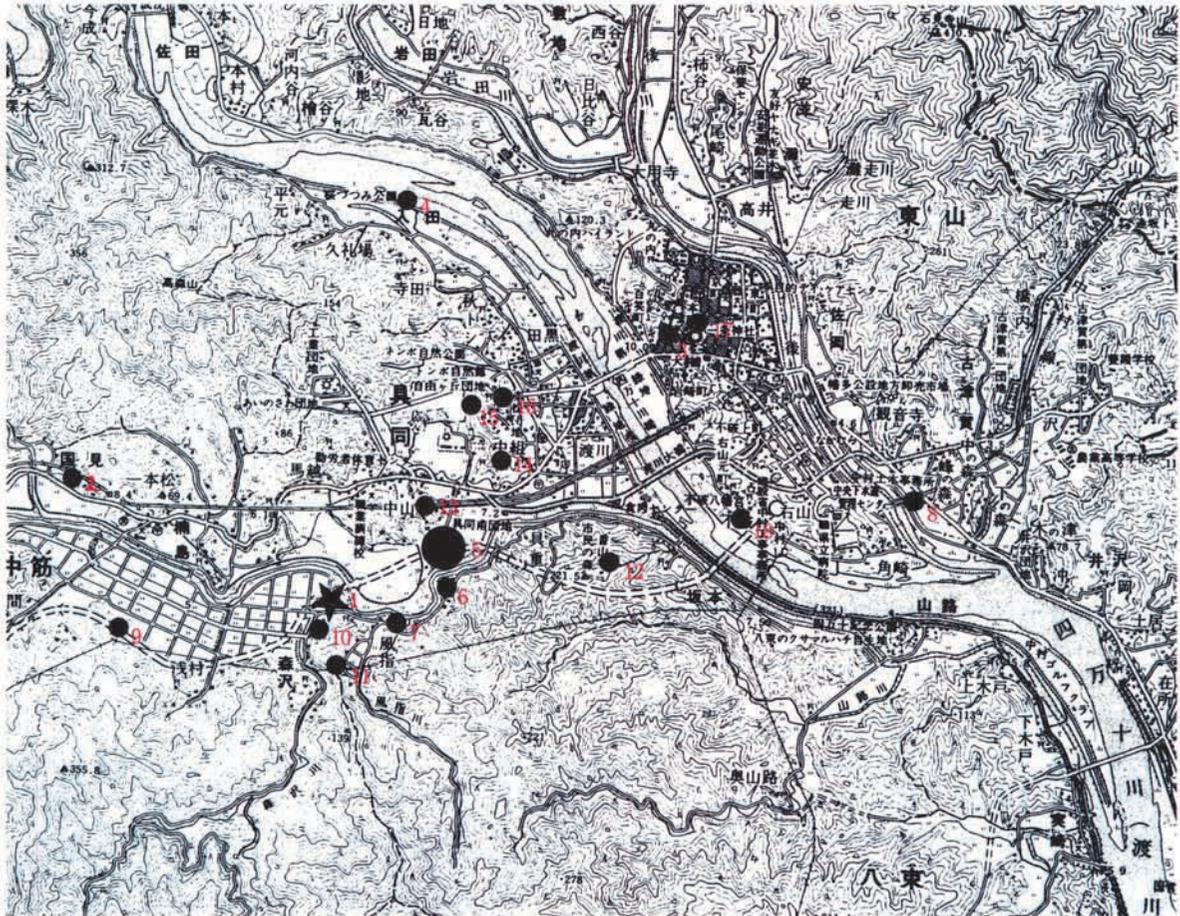
第2章 船戸遺跡の地理的歴史的環境

船戸遺跡は、高知市方面からは、国道56号線で四万十川に架かる渡川大橋を渡ったのち県道具同下ノ加江線を宿毛市方向に向かい中筋川に架かる森沢橋を渡ってすぐの右側に位置し高知県幡多郡中村市森沢（東経132度53分54秒、北緯33度1分51秒）に所在する。中村市は高知県の西南部に位置し、面積387.86km²、人口約36,000人で幡多郡の中心都市であるばかりでなく、高知県西南部の中心地となっている。中村市を地理的に特徴づけているものとして四万十川がある。中村市は四万十川によって形成されたといつてよいだろう。この四万十川は日本最後の清流として知られるが、また四国第二の大河でもある。支流も多く特に河口近く中村市で合流する中筋川は、洪水時、四万十川から水流が逆流し、たびたび大水害を引き起こしたことで知られるとともに、中筋平野を形成するなど中村市西部に大きな影響を与えている。

中村市のある幡多郡は高知県でも遺跡の密度の濃い地域として知られる。最も古い遺跡は旧石器時代までさかのぼることができる。旧石器時代の遺跡は現在まで高知県では9遺跡が確認されているが、その内6遺跡が幡多郡で中村市では2遺跡が確認されている。縄文時代の遺跡も四万十川流域では約70遺跡が確認され縄文時代の遺跡の集中地域になっている。その多くは後期の遺跡で特に宿毛貝塚、三里遺跡、片粕遺跡からは西南四国における後期の標式土器となる土器が出土している。

中村市の遺跡の分布は、四万十川流域、後川流域、中筋川流域の3地域に大別することができる。当遺跡は中筋川流域に所在するがこの地域では、近年河川改修に伴う具同中山遺跡群の発掘調査がすすめられ多大の成果があがっている。中村市の遺跡で注目すべきことは、中世の遺跡が多くあり、また具同中山遺跡群の調査を含め発掘調査が進んでいることである。中世の遺跡の充実は、応仁二年（1468）一条氏が応仁の乱をさけた荘園であった幡多庄に御所を営んだことと関係があるだろう。当時の繁栄は、中村市の中世遺跡から青磁や白磁、染付などの対明貿易によってもたらされた貿易陶磁器が多く出土することからも想像できる。

船戸遺跡は、中筋川右岸の森沢に所在し、古墳時代の祭祀、中世の集落遺跡として知られる具同中山遺跡群から約0.5km程の距離にあり、また風指遺跡、アゾノ遺跡もほぼ同じ範囲内に所在し、この地域では弥生時代以来連綿として集落が営まれたことがうかがえる。また当地域を知るうえで中筋川右岸の山上に所在する中世寺院跡である香山寺跡も見逃すことはできないであろう。中世城跡も周辺に多く所在するが最も近くには約0.2kmの山上に森沢北ノ城跡が残り同じ丘陵のやや南には森沢城跡が残る。この2つの城跡はこの地域の河津と考えられる船戸遺跡を監視し防衛のための城と考えられ船戸遺跡との関連をさぐっていくことで森沢地区の中世の姿のより立体的な復元が可能になると思われる。（坂本）



No	遺跡名	種別	時期	No	遺跡名	種別	時期
1	船戸遺跡	祭祀遺跡	古墳	10	森沢北ノ城跡	城跡	中世
2	国見遺跡	散布地	縄文・古墳	11	森沢城跡	城跡	中世・近世
3	中村貝塚	貝塚	縄文	12	香山寺跡	社寺跡	中世
4	入田遺跡	散布地	弥生	13	近沢城跡	城跡	中世
5	具同中山遺跡群	祭祀・集落跡	縄文～中世	14	栗本城跡	城跡	中世
6	アゾノ遺跡	集落跡	中世	15	扇城跡	城跡	中世
7	風指遺跡	集落跡	弥生・平安・中世	16	ナリカド城跡	城跡	中世
8	古津賀遺跡	祭祀・集落跡	古墳～中世	17	中村御所跡	城跡	中世
9	間城跡	城跡	中世	18	不破遺跡	散布地	中世

Fig. 1 周辺の遺跡分布図

第3章 調査の方法

第1節 第I区の調査方法

1 概況

船戸遺跡東半の第I調査区は、中筋川現流の右岸滑走斜面と至近距離に在る。ここでは、比高3m前後の洪積砂礫段丘が、流路埋積物や斜面堆積物及び水生シルトの累層に覆われて平坦化しており、調査前の地表海拔高度は、+5.8mから+6.5mの範囲を上下する。本区の約2/3を占める北西部は、過去に削整や掘穴の手が加えられた中位段丘面に当たり、古墳時代から中世に渡る遺物包含層や近世以降の耕作床土を部分的に遺留する外は、全面的な攪乱を受けている。残る南東部分には低位段丘が深く埋没する。ここでは、中筋川の滑走斜面に直続する砂泥堆積環境に中位段丘面からの流入や滑落作用が加わる一方、排水作用に伴う侵食と流路埋積を反復している。

2 調査方法

東西方向に長い調査対象地の東側半分を第I区とした。第I区は東西88m、南北32mを測る台形状の調査区である。南側は森沢川の堤防に、東側は中筋川堤防沿いの農道に面している。試掘調査の結果、調査区の北側部分は表土直下に地山層（戸内層—中位段丘）があり、南部の堤防沿いは歴史時代の沖積層が厚く堆積していることが明らかとなっていた。表土下20cmを重機を使って掘り下

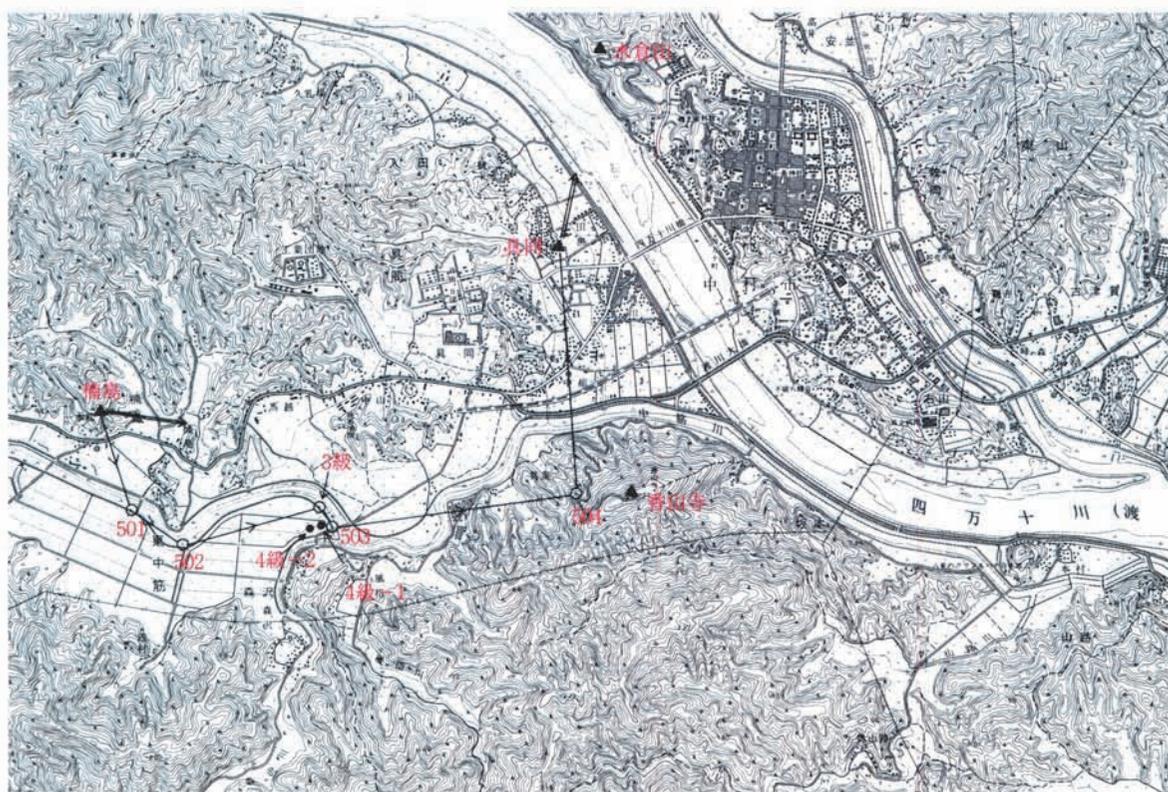


Fig. 2 船戸遺跡測量基準点設定図

(S=1/50000)

げ、その後は人力で少しずつ掘り下げていった。包含層遺物の取上げについては、図示したように調査区の長軸に沿って任意に4mの方眼を掛け、東西方向に0、1、2、3・・・南北方向にA・B・C・・・の番号を付して地点、レベル、層序等を記録した。検出遺構については、原則として20分の1で平面実測を行い、必要に応じてセクション・エレベーション図を作成した。また調査終了時に、航空写真撮影と航空測量を実施した。

3 基本層序

1) 縄文時代の遺物包含層

調査区中央部の南部では、縄文後期後葉の土器片を多く含む斜面堆積(JI～JX層)が遺存する。中位段丘縁辺の上部雨洗斜面には、この種の堆積が見られず、堆積安息角を超過する海拔5.2m前後の急崖水準から、海拔1.7m以上の低位段丘面に至るまで、滑落、漸動、流入が主因と見られる傾斜累層を形成している。ここでは、特に中層における土器片や炭化植物粒子の含率が高く、下層には角礫や亜円礫が漸増する。

2) 古墳時代遺物の主含層

段丘崖の雨洗斜面から安息角斜面にかけて遺存する酸化粘質土層(VI層)は、主として古墳時代初期の土師器片を包含するが、若干数の律令期遺物も挟在している。

3) 流路埋積層

低位段丘部分の東半部では、洪水性と見られる自然流路SR3が弧状に湾入する。侵食水準は低位段丘面に達し、腐植や砂礫を多含する還元シルト質の埋積土からは、古墳時代初期の土師器片を主体に、縄文式土器片や石器の他、少数ながら8世紀頃の須恵器片を検出している。SR3が埋積した後、さらに二時期の小流路が重なり、包含遺物の下限は各々10世紀代、14世紀代と考えられる。(武吉)

ポイント名	X座標 (m)	Y座標 (m)	辺長 (S)	方向角 (T)	標高 (m)
501	-3174.728	-56797.623	712.834	162° -23' -54"	11.4
502	-3410.590	-56472.265	401.881	125° -56' -23"	9.55
503	-3304.625	-55512.692	104.270	151° -56' -05"	11.00
504	-3105.049	-53914.140	1611.062	82° -53' -01"	122.22
3級基準点	-3212.622	-55561.745	931.850	77° -44' -00"	8.20
4級-1	-3273.472	-55587.755	66.179	203° -08' -49"	6.79
4級-2	-3326.874	-55724.617	146.924	248° -41' -12"	6.44

Tab. 1 船戸遺跡測量基準点成果表

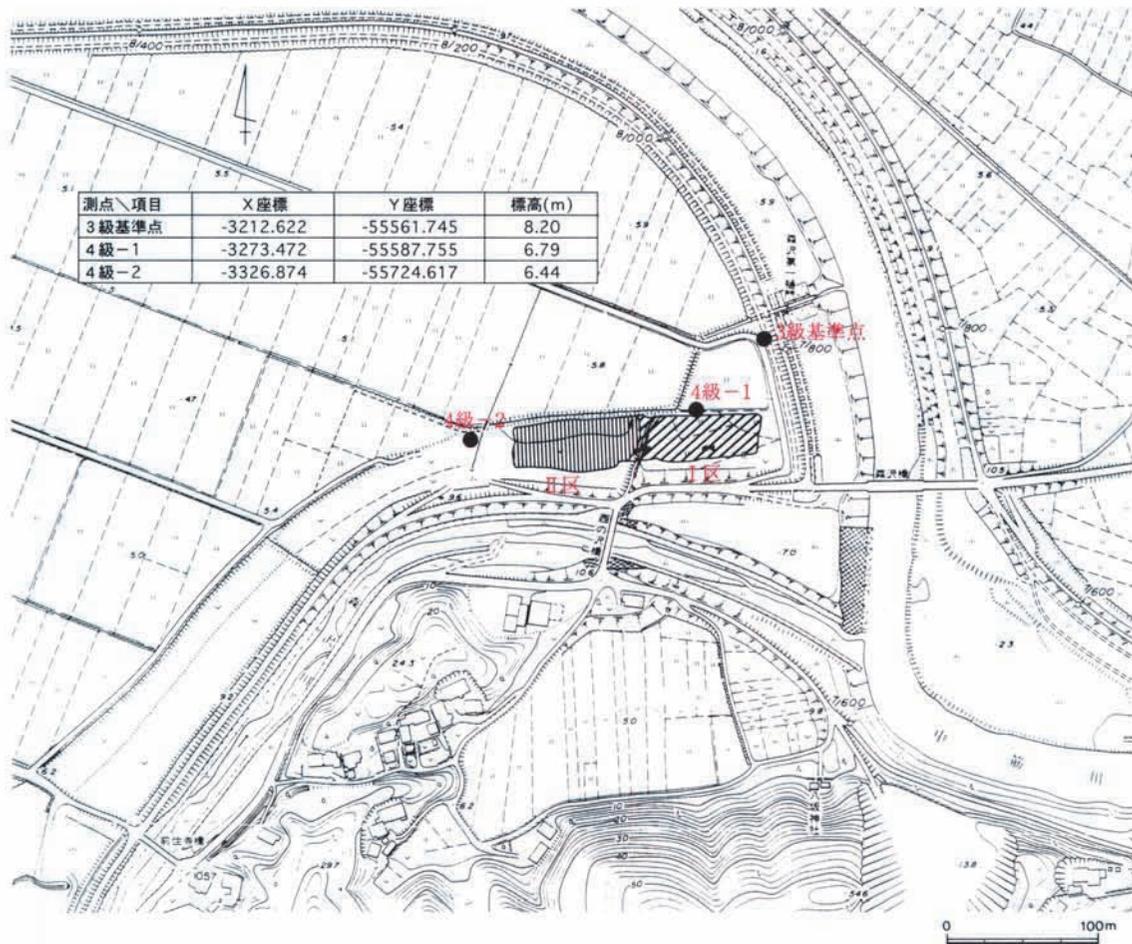


Fig. 3 調査区位置図及び基準点設定図

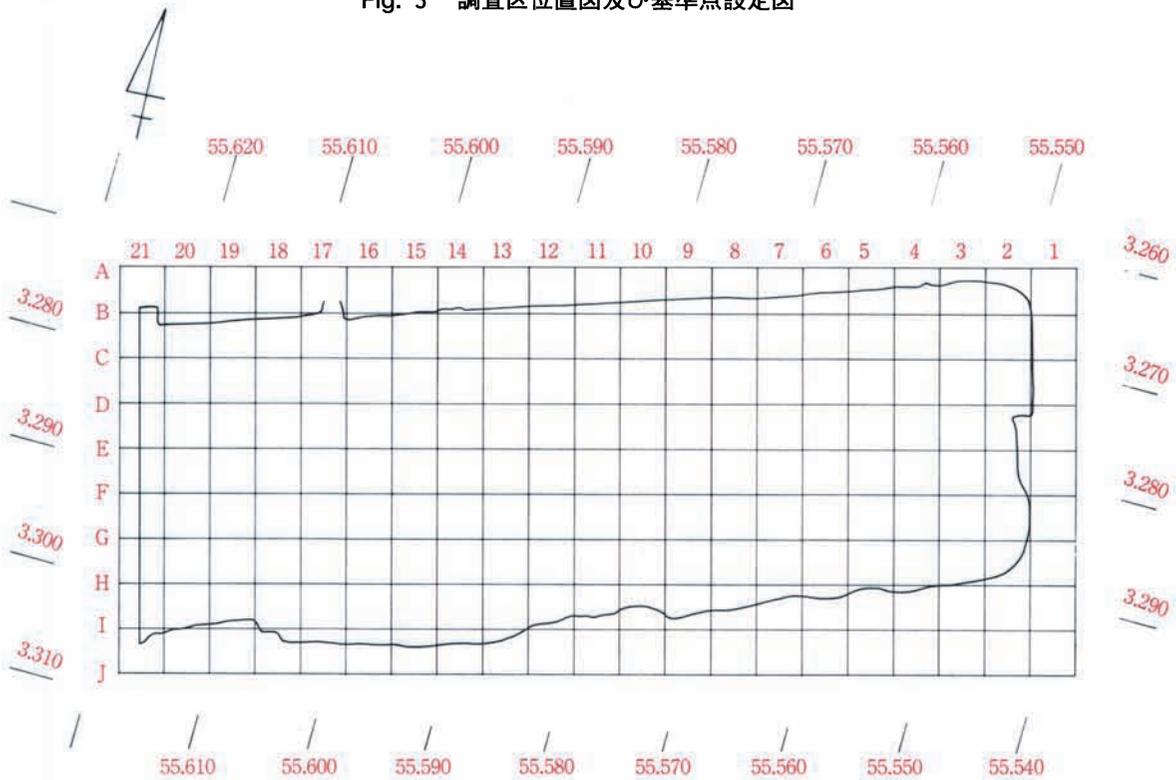


Fig. 4 第I区Grid設定図

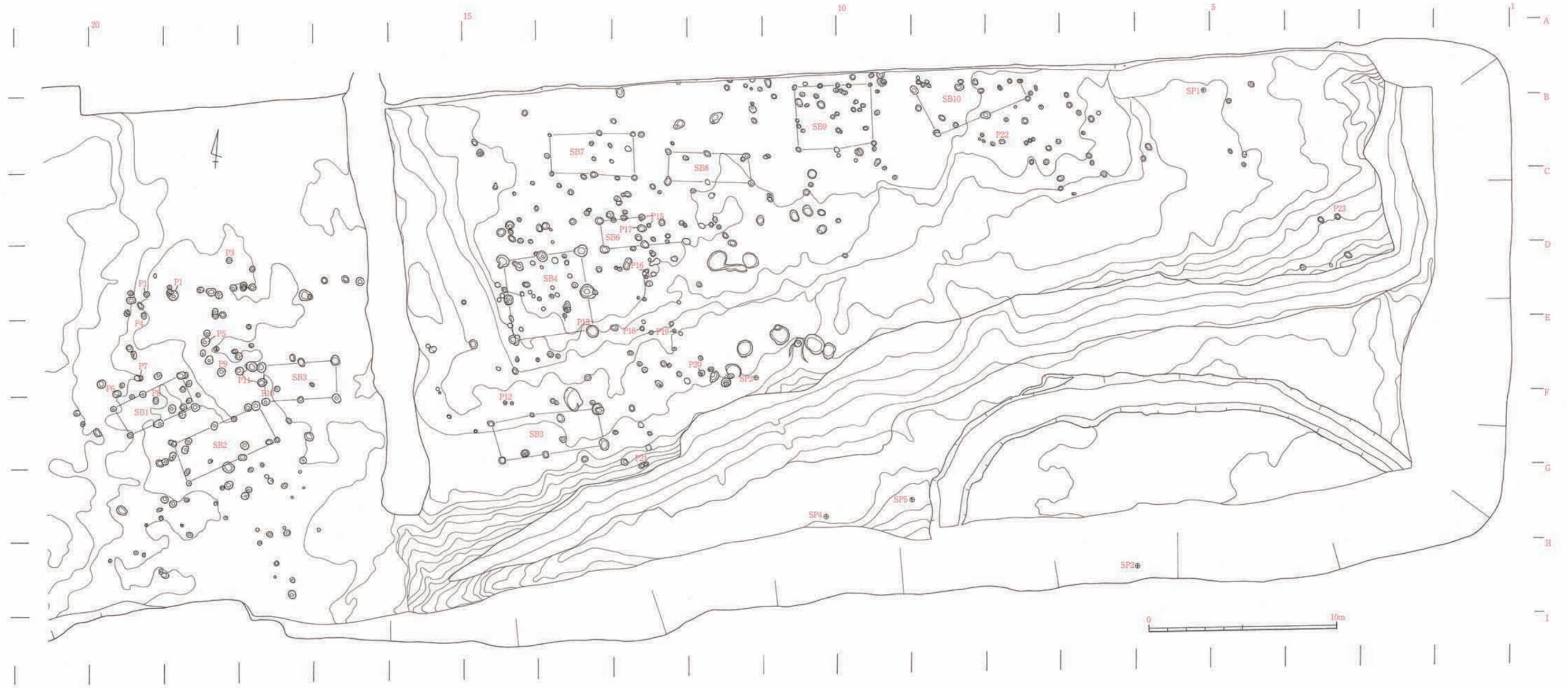
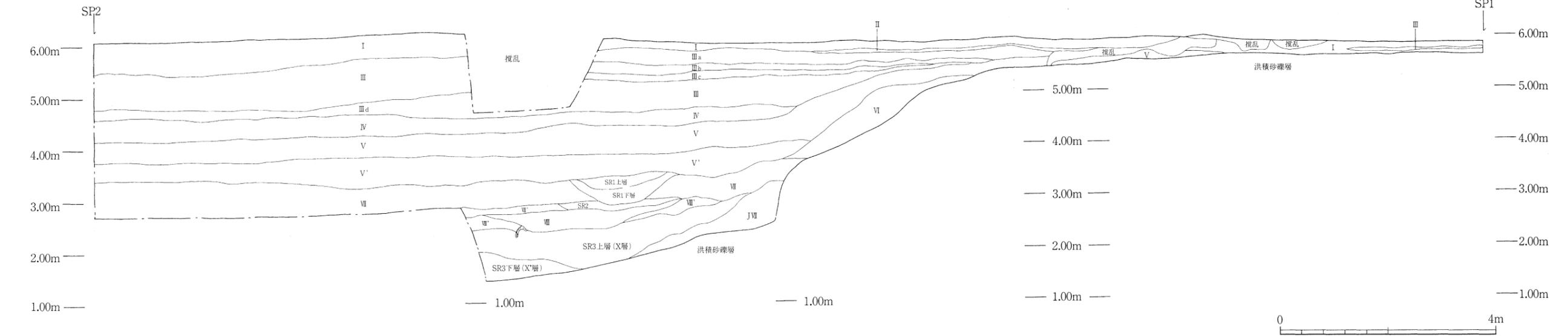


Fig. 5 第I区検出遺構全体図

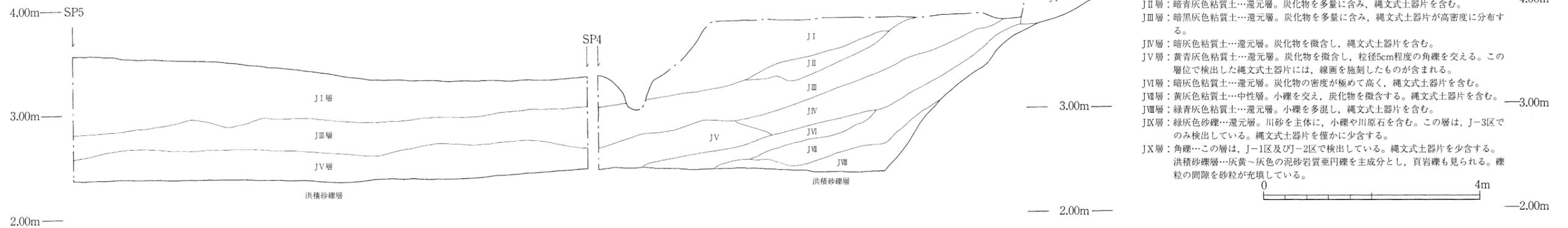
第I調査区Cバンク東面壁の堆積層序



第I層：灰色粘質シルト…近世以降の耕作床土であり、現在の表土となっている。
 第II層：褐色粘質シルト…酸化鉄集積層。
 第III層：褐色シルト…酸化鉄集積層。集積度はIIIa, IIIcで低く、IIIbでは高めとなる。III dでは、更に少量の炭化物を交える。
 第IV層：茶褐色シルト…酸化鉄集積層。集積度は高い。
 第V層：灰茶色シルト…酸化鉄集積層。粘性の弱いシルトであり、炭化物を多含する。また、8世紀から16世紀にかけての遺物を多量に包含する。
 第V'層：灰茶色シルト…酸化鉄集積層。酸化鉄の集積度はV層より低く、遺物の包含量が少ない。
 第VI層：明茶褐色粘質土…酸化鉄集積層。微量の炭化物を含み、径約5cm以下の礫粒を含む。古墳時代初期の土師器片を主とし、奈良・平安時代から中世に渡る遺物を少量挟在する。
 SR1埋積層：暗灰色泥砂土…腐植混還元層。炭化物や木片の他、主として13世紀前後の遺物を含む。下層はSD2を浸食する。
 SR2埋積層：暗褐色砂礫土…粒径約0.5～1.0cmの細礫を多含し、5cm径前後の礫粒を少含する。主として、奈良時代から平安時代前半にかけての遺物が多く見られる。

第VII層：青灰色粘質土…還元層。若干の炭化物と小礫を交える。奈良時代から平安時代前半にかけての遺物を主とする他、少量の中世遺物を挟在し、縄文式土器片や古墳時代の土師器片を含む。
 第VII'層：暗青灰色粘質土…還元層。色調が暗い他は、土質は第VII層と同様である。
 第VII''層：青灰色粘質土…還元層。締まりが強く、若干の炭化物や木片を含む。
 第VII'''層：暗青灰色シルト…還元層。細礫が僅かに混在し、少量の炭化物や腐植の他、若干の木片を含む。8世紀代の須恵器を主とする他、平安時代前半頃の土師器片を少含する。
 第VII''''層：暗青灰色シルト…還元層。粒径約2～4cmの礫を多含し、少量の炭化物や木片を交える。
 SR3 (X, X')埋積層：黒褐色シルト…腐植混還元層。1～3cmの礫粒を多含し、炭化物や木片を多量に交える。下層(X')では、腐植の密度が若干減少する。堆積層の締まりは強い。古墳時代初期の土師器片を主体に、縄文式土器片や石器の他、少数ながら8世紀頃の須恵器片を検出している。
 洪積砂礫層：灰黄～灰色の泥砂岩質重円礫を主成分とし、頁岩礫も見られる。礫粒の間隙を砂粒が充填している。低位段丘面の砂礫層表部には、縄文式土器片や頁岩礫石器、剥片類の分布が多い。

第I調査区J1バンク東面壁の堆積層序



J I層：青灰～褐青灰色粘質土…還元層。少量の炭化物を交え、上層では縄文式土器片と古墳時代の土師器片が混在する。
 J II層：暗青灰色粘質土…還元層。炭化物を多量に含み、縄文式土器片を含む。
 J III層：暗黒灰色粘質土…還元層。炭化物を多量に含み、縄文式土器片が高密度に分布する。
 J IV層：暗灰色粘質土…還元層。炭化物を微含し、縄文式土器片を含む。
 J V層：黄青灰色粘質土…還元層。炭化物を微含し、粒径5cm程度の角礫を交える。この層位で検出した縄文式土器片には、線画を施刻したものが含まれる。
 J VI層：暗灰色粘質土…還元層。炭化物の密度が極めて高く、縄文式土器片を含む。
 J VII層：黄灰色粘質土…中性層。小礫を交え、炭化物を微含する。縄文式土器片を含む。
 J VIII層：緑青灰色粘質土…還元層。小礫を多混し、縄文式土器片を含む。
 J IX層：緑灰色砂礫…還元層。川砂を主体に、小礫や川原石を含む。この層は、J-3区でのみ検出している。縄文式土器片を僅かに少含する。
 J X層：角礫…この層は、J-1区及びJ-2区で検出している。縄文式土器片を少含する。洪積砂礫層…灰黄～灰色の泥砂岩質重円礫を主成分とし、頁岩礫も見られる。礫粒の間隙を砂粒が充填している。

Fig. 6 第I区堆積土層断面図

第2節 第Ⅱ区の調査方法

1 調査の方法

第Ⅱ区は、今次の調査範囲の西半部に相当し、東西約85m、南北約30mの平面形が東西に長い長方形を呈する、面積約2600m²の調査区である。遺跡が沖積地に立地しており、かつ北側には現況の用水路と接していたため、調査区北壁側には鋼矢板を打設して、法面の崩壊等の予防に努め、調査の安全かつ円滑な進行を図った。

調査区の表土及び無遺物層は、重機（バックホー）を使用して除去し、遺物包含層の掘り下げ、遺構検出、及び遺構の掘り下げは人力によっておこなった。

遺構実測及び遺物の取り上げについては、第Ⅰ区と同一の任意の座標軸を採用し、一辺4mの区画（グリッド）を最小単位として実施した。なお、各土層断面の観察・図化は、基本的にこの座標軸に平行するラインにて実施した。また完掘後には、ジェットヘリコプターによる空中写真撮影、及び測量図化をアジア航測株式会社に委託して実施した。

第Ⅱ区は、全面の発掘調査を実施したが、その西半部では近現代の攪乱が地中深くまで及んでおり、遺構・遺物は殆ど認められなかった。一方、東半部では縄文時代後期から中世に亙る良好な遺物包含層を確認できた。なお、各土層から土壌サンプルを採取し、パリノ・サーヴェイ（株）に委託して花粉分析を実施した。分析の成果は付編に収録した。

2 層序 (Fig.8)

第Ⅱ区の基準となる層序は、Fig.8のA-A'、D-D'ラインに示したものである。その中でも更に基本となるものが、Ⅲ層：灰褐色粘質土、Ⅳ層：褐色粘質土、Ⅴ層：褐色粘質土、Ⅵ層：黄褐色粘質土、Ⅶ層：青灰色粘土、Ⅷ層：濃茶色粘質土、Ⅸ層：褐色礫、及びJ（黒）層・J（褐）層などのJ層群である。Ⅶ層以上はほぼ沖積地の水平的な堆積状況を呈し、これ以下のJ層群は地山地形に沿ってそれぞれ傾斜をもった堆積をなしている。

Ⅲ層は近世以降の水田耕作土とみられる。Ⅳ層は中世の遺物包含層で、その上面では地震に伴う地割れ跡が検出された。Ⅴ層は古代から中世の遺物を含む。Ⅵ層は縄文時代後期～平安時代の遺物包含層である。Ⅶ層は縄文時代後期～古墳時代の遺物包含層で、その上面では古墳時代前期の祭祀跡とみられる遺物集中出土地点1箇所が確認された。J層群は主に縄文時代後期の遺物包含層である。

3 成果の概要

1) 縄文時代

縄文時代後期のほぼ純粋な遺物包含層、及び縄文時代晩期の遺物を検出した。遺構は確認されない。

縄文時代後期の遺物包含層はⅡ区東端部の地山地形（いわゆる「岩盤」）の傾斜に沿って堆積したものであり、「J層」と呼称した。J層は斜面の立ち上がり部分にのみ遺存しており、その色調・土

質等によって数層に細分される。なお、遺物包含層の遺存範囲は約80m²である。遺物包含層からの出土遺物は、土器・石器・骨片等である。土器は約2000点（破片点数）が出土しており、主として後期後半に位置付けられるものである。石器は、石鏃・スクレーパー・剥片・碎片等約500点が出土しており、石材には姫島産黒曜石・サヌカイト・チャート等が使用されている。また、晩期の遺物は第Ⅶ層下部等から晩期中葉以降の土器が少量出土している。

なお、縄文時代の石器に関しては、特徴的とみられた石材のもの（剥片）5点を抽出して、パリノ・サーヴェイ（株）に石材の鑑定を依頼した。その成果は付編に収録されている。

2) 古墳時代

古墳時代前期の祭祀跡1箇所、及び第Ⅵ・Ⅶ層から土師器・須恵器等を検出した。

前期の祭祀跡は第Ⅶ層上面で検出したもので、約4m四方の範囲に土師器の壺・甕・高坏・器台・坏等、約30個体が配置（投棄）されていた。その他、第Ⅵ・Ⅶ層出土の古墳時代遺物は、総計で約500点（破片点数）を数える。

3) 古代

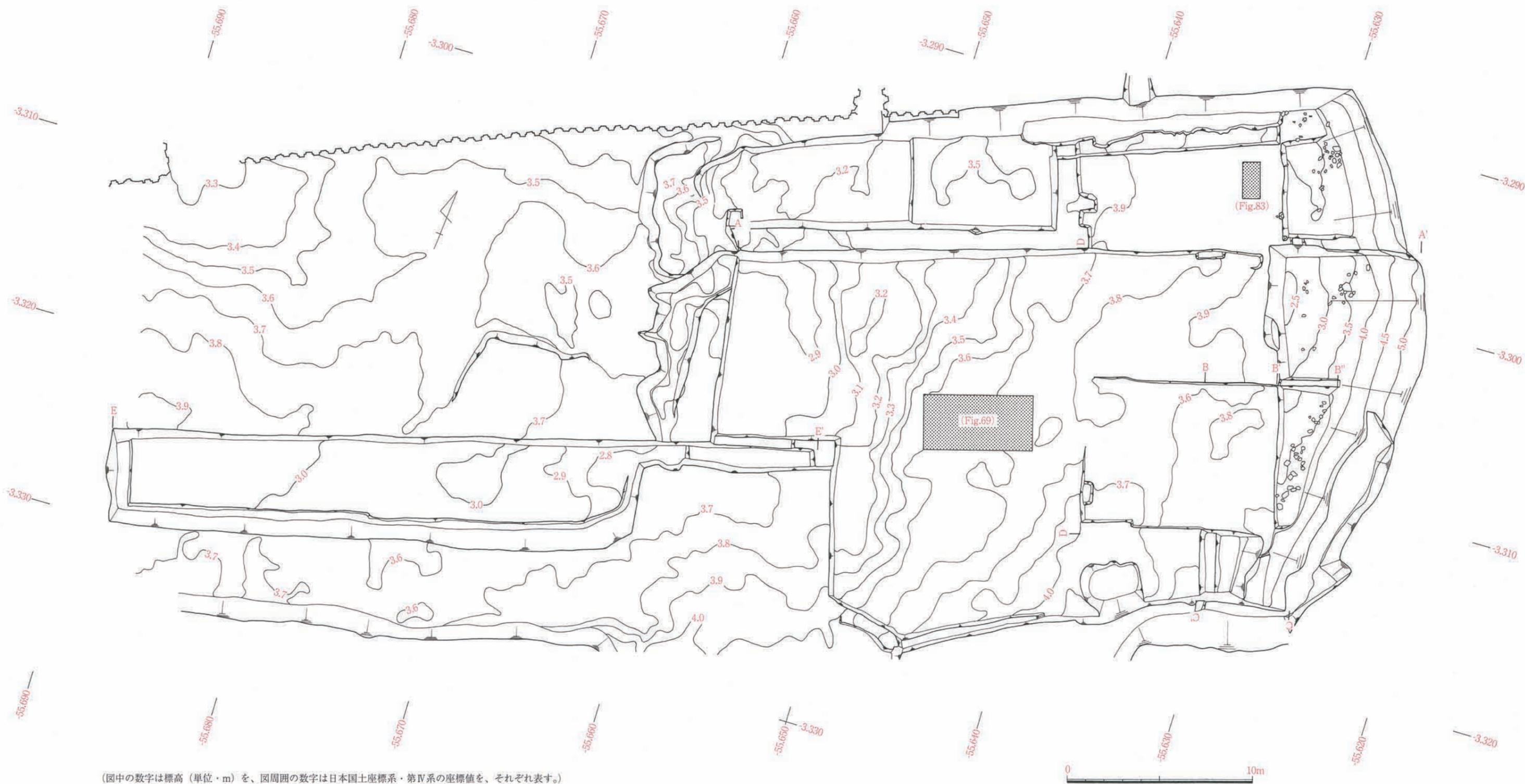
第Ⅴ・Ⅵ層から、土師器・須恵器・緑釉陶器・土錘等、約500点が出土している。当該期の遺構は確認されず、明確な遺物集中地点等もみられないことから、集落等の周辺部分に相当していたものと考えられる。

4) 中世

第Ⅳ・Ⅴ層から、土師質土器・青磁・備前焼・土錘等、約500点が出土している。遺構は確認されなかったが、第Ⅴ層を切る地割れ、及び液状化現象が認められ、戦国期の南海地震の痕跡を確認することができた。（曾我）



第Ⅱ区調査風景



(図中の数字は標高(単位・m)を、図周囲の数字は日本国土座標系・第IV系の座標値を、それぞれ表す。)

Fig. 7 第II区全体図

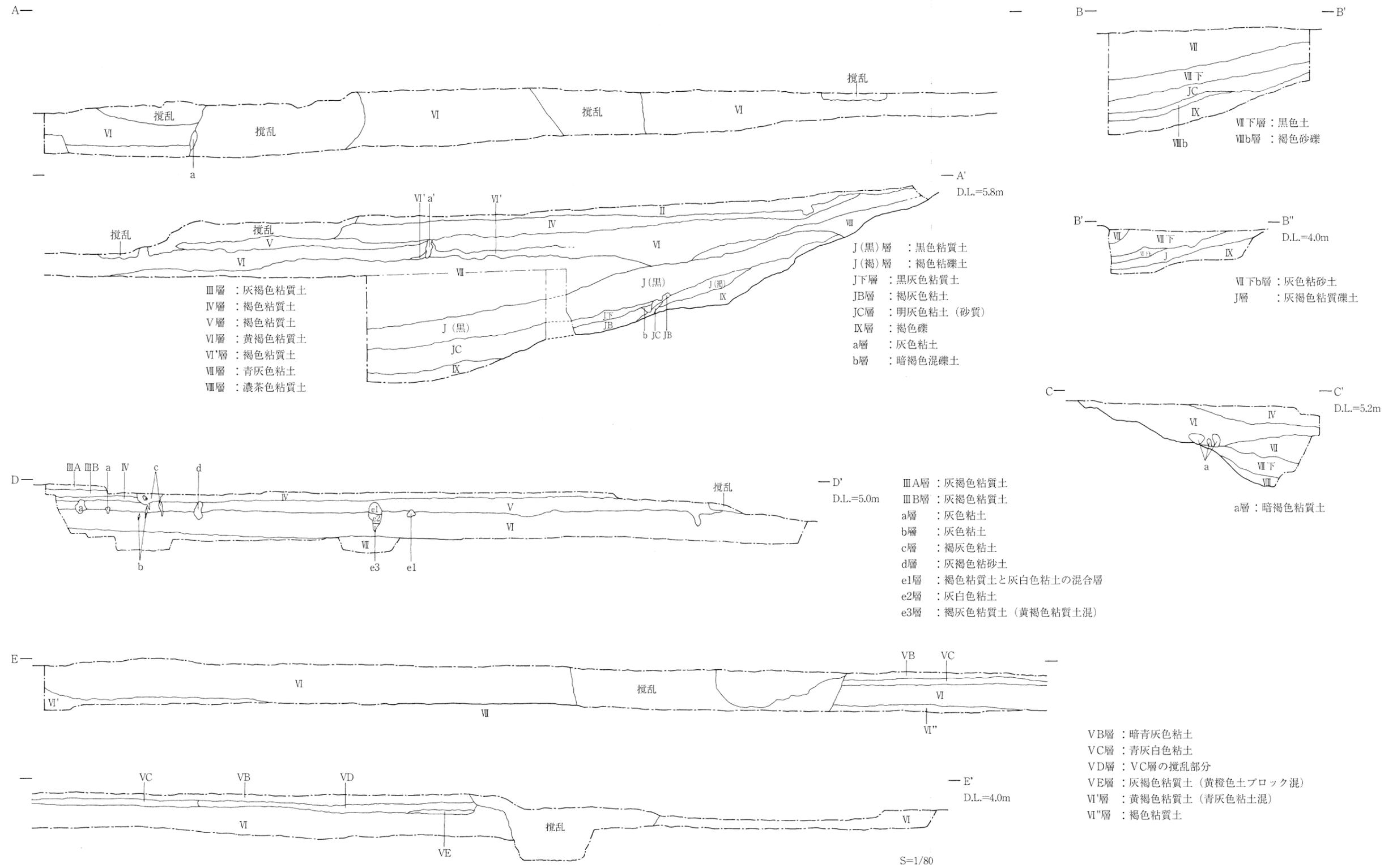


Fig. 8 第II区堆積土層断面図

第4章 第I区の調査

第1節 検出遺構

1 縄文時代

縄文時代の明確な遺構としては、ドングリ貯蔵穴SK1の1基のみを確認している。この遺構は、段丘凹底部のF7~G7グリッドに位置するが、後に湧入する自然流路SR3の淵底による侵食を僅かに南に免れ、その埋没当初の原況を遺留し得たものである。海拔+1.54mの水準で検出した穴口部は、洪積砂礫層を覆う約35cm厚の腐植土層の上面に在り、最大径1.25m、最小径1.05mの不整円形を呈す。掘方は垂直とし、掘削の相対深度は48cmを測る。穴底部は、締まりの強い洪積砂礫層を12~20cmほど抉った海拔+1.06m前後の水準に在り、ほぼ平坦面を成す。ドングリ貯蔵の状態に埋没しており、ドングリの集中は底部付近のe層、f層で見られ、特にe層での分布密度が高い。これら両層は、腐植混じりの灰色粘質土d層によって閉塞される。d層の上には、貯蔵穴を直接埋没する青灰色シルトのc'層部分が垂下し、その上部の窪みを腐植微含の青灰色シルトb層が充填する。貯蔵穴内のd層からは1点、f層からは2点の土器細片を得ている。いずれも無紋ながら、当遺跡で多量に得た縄文後期後葉の土器片と胎土の特徴が一致する所から、この貯蔵穴の使用、埋没時期についても、縄文後期後葉と見られる。(武吉)

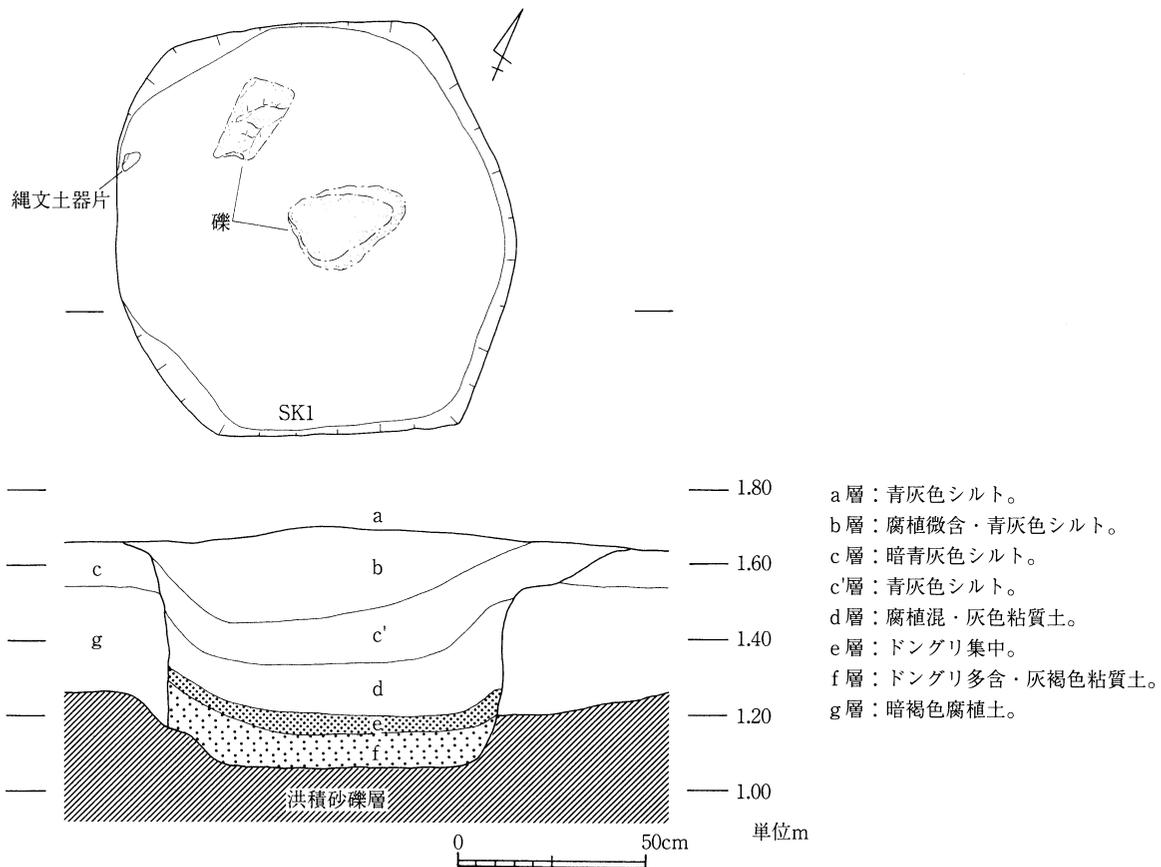


Fig. 9 SK1平面図・断面図

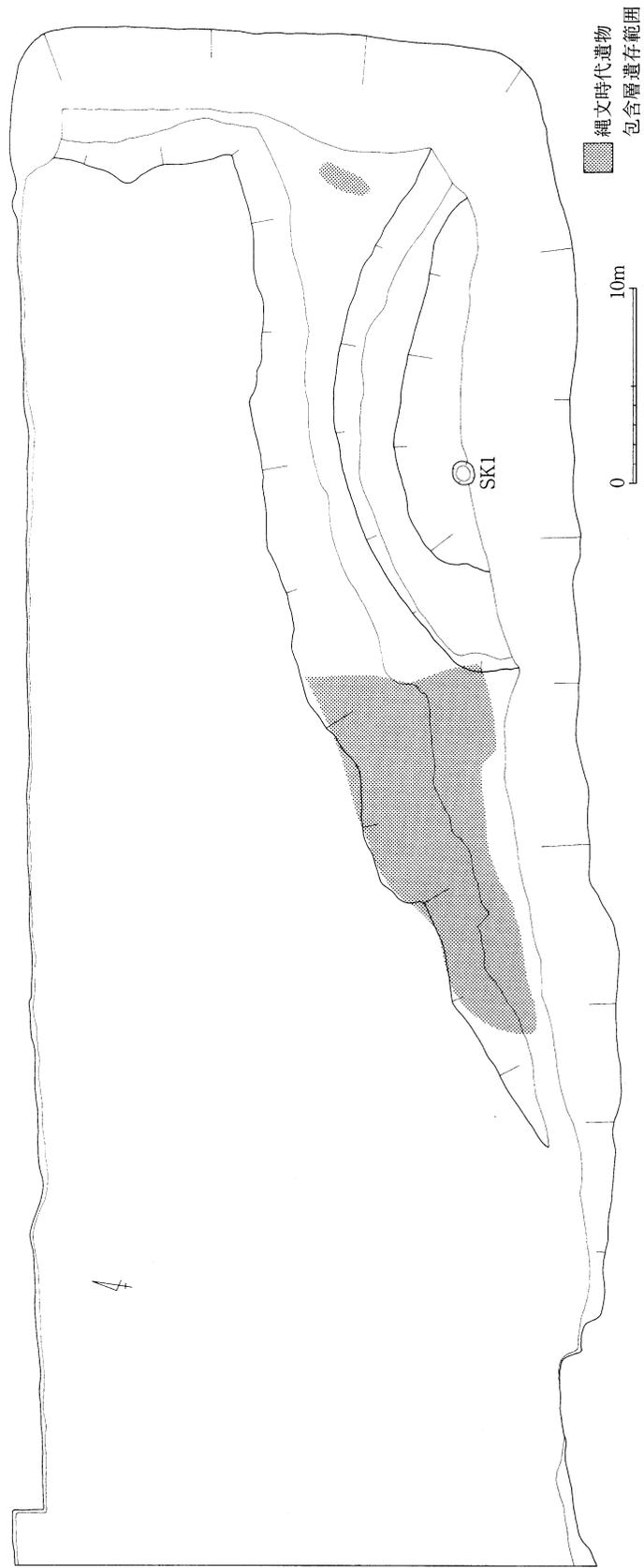


Fig. 10 第I区縄文時代遺物包含層遺存範囲・SK1位置図

2 古代・中世

船戸遺跡の古代・中世からは、掘立柱建物跡10棟、流路3条、ピット群を検出した。掘立柱建物跡は、I区のほぼ中央部付近でまとまりを持って検出した。流路跡は、南東部で検出し古代後半から鎌倉時代にかけて場所も流路方向とも同じである。

1) SB1

調査区西側のE-19、F-19・20の地山直上より検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。棟軸はN-63°-Eにとる。桁行は3.82~3.91m、梁間は1.78~1.88mを測る小規模な建物である。柱穴の規模は長径は30~42cm、短径22~34cmを測る楕円形を呈している。検出面からの深さは16~46cmを測る。埋土は単層の黒褐色土層で、P3よりFig35-1・2の土師質土器の底部片が出土している。

2) SB2

SB1の南に位置するF-18・19、G-19より検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。棟軸をN-63°-Eにとる。桁行は4.87~5.33m、梁間は2.19~2.27mを測る小規模な建物である。柱穴の規模は長径は28~44cm、短径22~34cmを測る円形から楕円形を呈している。検出面からの深さは22~33cmを測る。埋土は単層の黒褐色土層で、土師質土器細片が出土している。

3) SB3

調査区西側のE-17・18、F-17・18の地山直上より検出した1間×2間の東西方向の掘立柱建物跡である。棟軸をN-86°-Eにとる。桁行は3.79~3.88m、梁間は1.95~2.10mを測りほぼ長方形を呈す建物である。柱穴の規模は長径は32~52cm、短径24~42cmを測る円形から楕円形を呈している。検出面からの深さは10~24cmを測る。埋土は単層の黒褐色土で、出土遺物は土師質土器細片が多い。

4) SB4

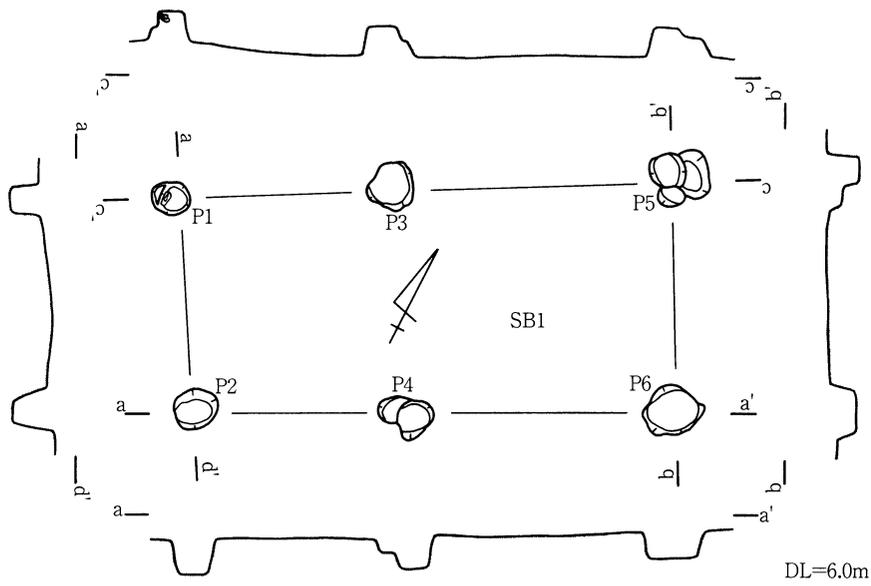
調査区中央に位置するD-14・15、E-14・15の地山直上より検出した2間×2間の東西方向の建物跡である。桁行は4.4~4.48m、梁間4.38~4.4mを測るほぼ正方形の建物である。柱穴の規模は長径46~82cm、短径42~80cmを測る円形から楕円形を呈しており、検出したSBの中では最大規模である。検出面からの深さは10~42cmを測り、高低差が大きい。埋土は単層の黒褐色土層で、出土遺物はP5よりFig35-4の青磁の劃花紋碗片、P6からはFig. 35-3・5の土師質土器片が2点出土している。

5) SB5

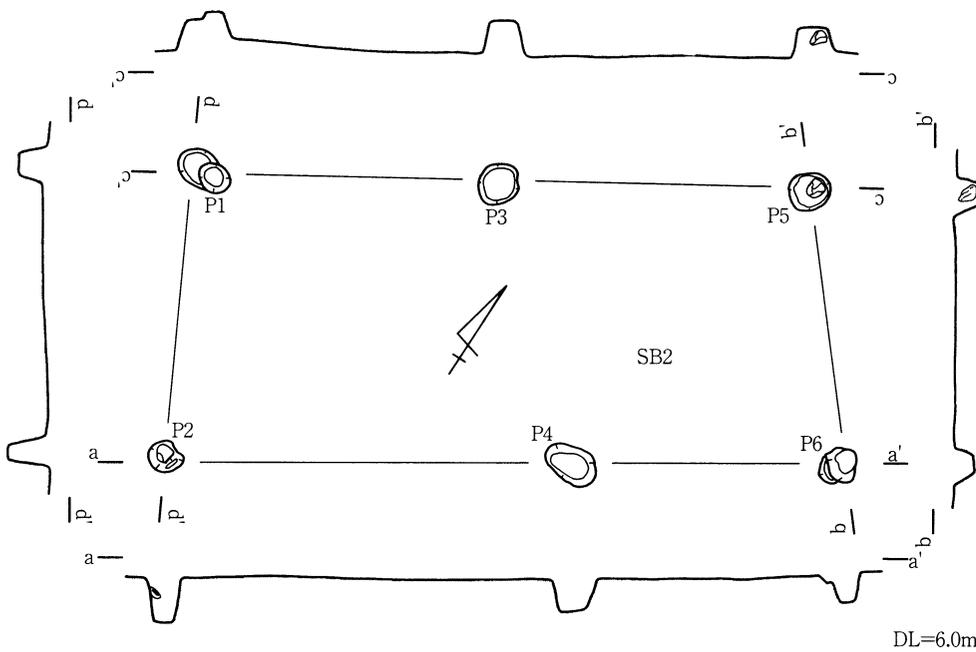
調査区のF-14・15の地山直上で検出した1間×2間の東西方向の掘立柱建物跡である。棟軸はN-83°-Eにとる。桁行は5.60~5.77m、梁間は1.86~2.12mを測る長方形を呈す建物である。柱穴の規模は東隅のP6が長径64cmを測る楕円形を呈している。他は24~44cmを測りほぼ円形を呈している。検出面からの深さは12~28cmを測る。埋土は単層の黒褐色土層で、出土遺物はP1よりFig. 35-6・7の土師質土器底部片2点が出土している。

6) SB6

調査区のほぼ中央に位置するC-13・14、D-13・14の地山直上より検出した1間×2間の東西方向の建物跡であるが、北東隅の柱穴が欠損している。棟軸はN-86°-Eにとる。桁行は4.38m、梁間は1.62mを測る。柱穴の規模は長径37~54cm、短径28~44cmを測る楕円形を呈している。検出面から



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
1 ~ 3	1.71	3.91	1 ~ 2	1.78	1.78	1	24	32	26	5.52	±3
3 ~ 5	2.20		2			2	28	34	32	5.52	±6
			5 ~ 6	1.88	1.88	3	24	38	36	5.60	±1、須1
2 ~ 4	1.76	3.82				4	24	30	26	5.60	±2
4 ~ 6	2.06					5	26	30	30	5.60	±5
						6	21	42	40	5.62	±13



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
1 ~ 3	2.43	4.87	1 ~ 2	2.27	2.27	1	24	34	30	5.60	±3
3 ~ 5	2.44		2			2	33	28	26	5.52	±5、瓦1
			5 ~ 6	2.19	2.19	3	26	34	34	5.60	
2 ~ 4	3.19	5.33				4	25	44	30	5.60	
4 ~ 6	2.14					5	22	34	30	5.60	±11
						6	20	28	22	5.66	

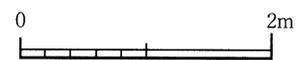
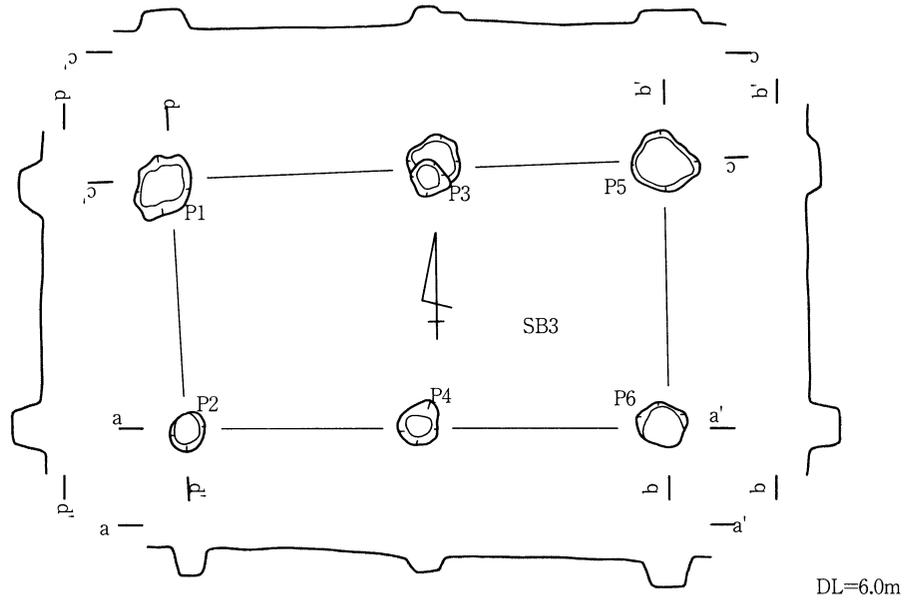
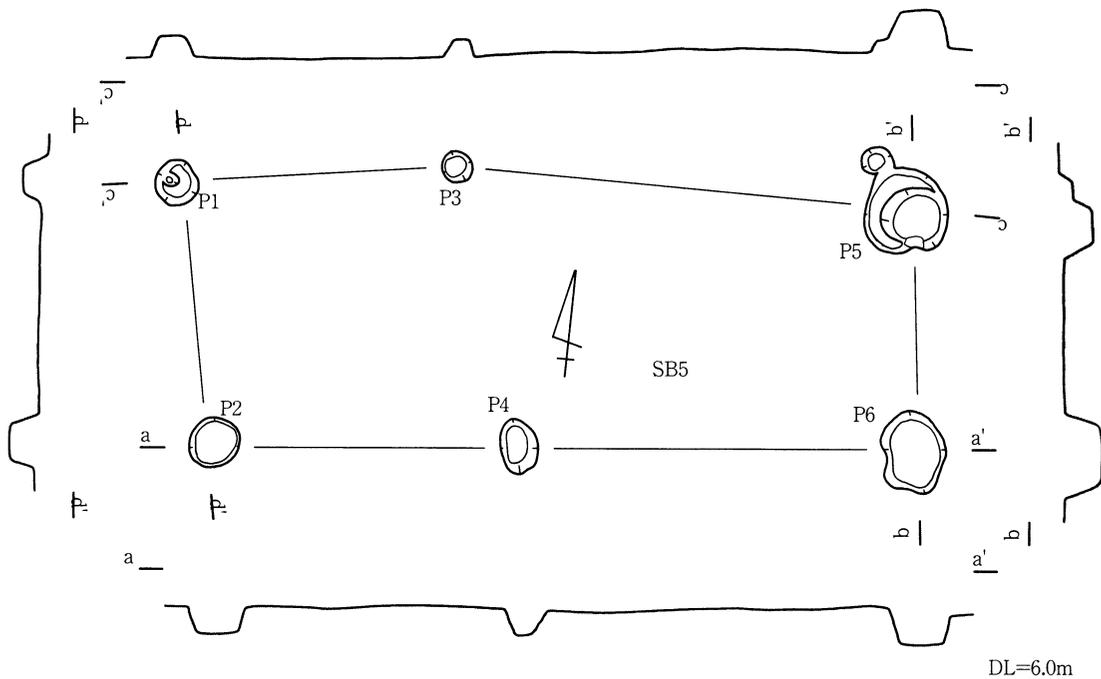


Fig. 11 SB1・2実測図



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
1 ~ 3	2.03	3.88	1 ~ 2	1.95	1.95	1	16	58	40	5.68	±13
3 ~ 5	1.85					2	22	32	26	5.62	±1
			5 ~ 6	2.10	2.10	3	14	34	24	5.64	±6
2 ~ 4	1.84	3.79				4	12	48	30	5.65	
4 ~ 6	1.95					5	10	52	42	5.67	±15
						6	24	38	32	5.52	±17



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
1 ~ 3	2.17	5.77	1 ~ 2	2.12	2.12	1	18	36	32	5.64	須1
3 ~ 5	3.60					2	20	42	38	5.52	
			5 ~ 6	1.86	1.86	3	12	24	24	5.68	緑色チャート片
2 ~ 4	2.45	5.60				4	20	42	30	5.52	
4 ~ 6	3.15					5	28	44	42	5.44	±19、瓦2
						6	28	64	56	5.42	±11



Fig. 12 SB 3・5実測図

の深さは8~23cmを測る。埋土は単層の黒褐色土で、土師質土器、須恵器片が出土している。

7) SB7

調査区中央北側に位置する。B-13・14、C-13・14の地山直上より検出した1間×2間の東西方向の建物跡である。棟軸はN-88°-Eにとる。桁行は4.39~4.41m、梁間は2.14~2.44mを測る。柱穴の規模は長径は37~54cm、短径18~30cmを測り円形を呈している。検出面からの深さは8~23cmを測る。埋土は単層の黒褐色土層であり、出土遺物は皆無である。

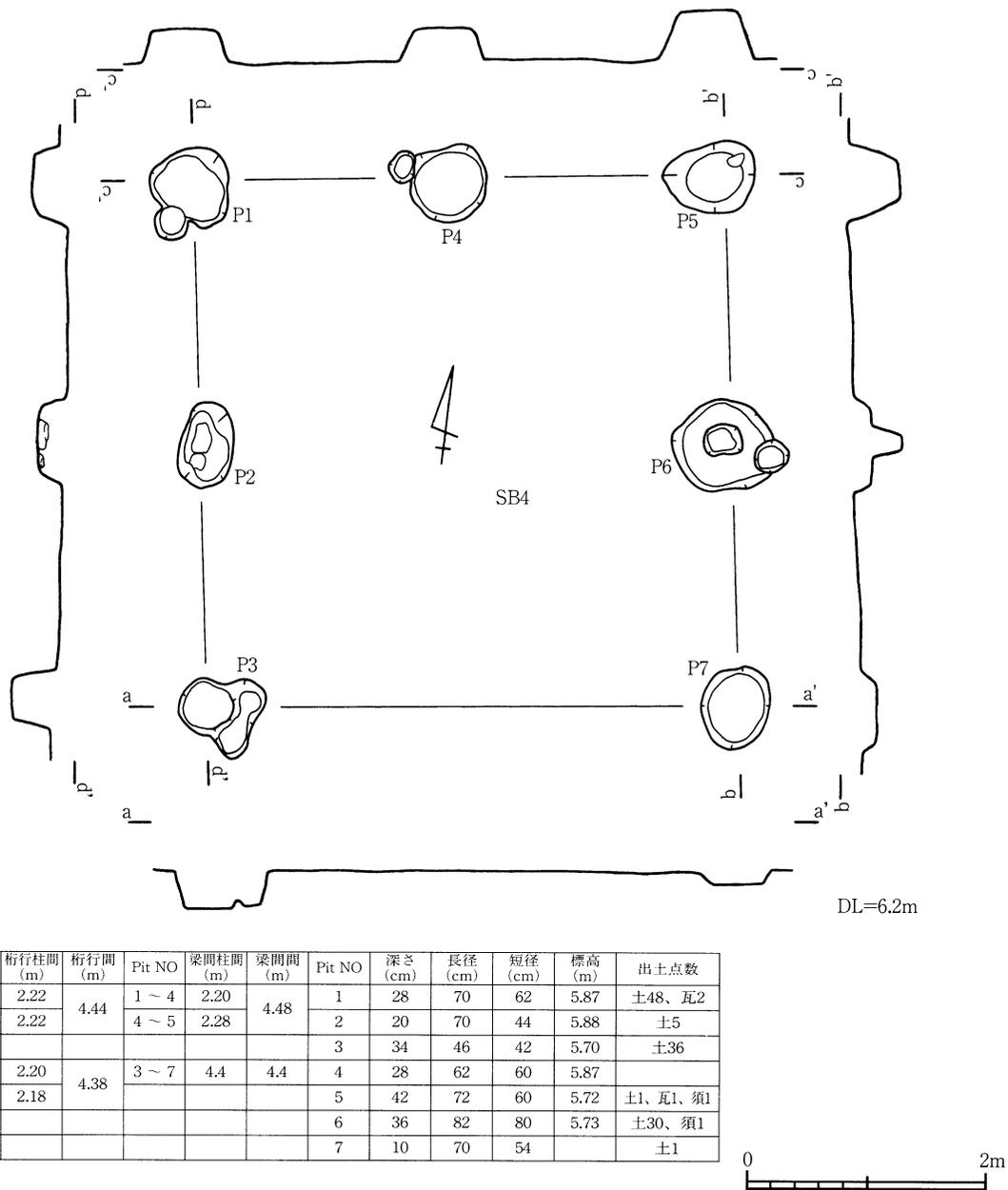
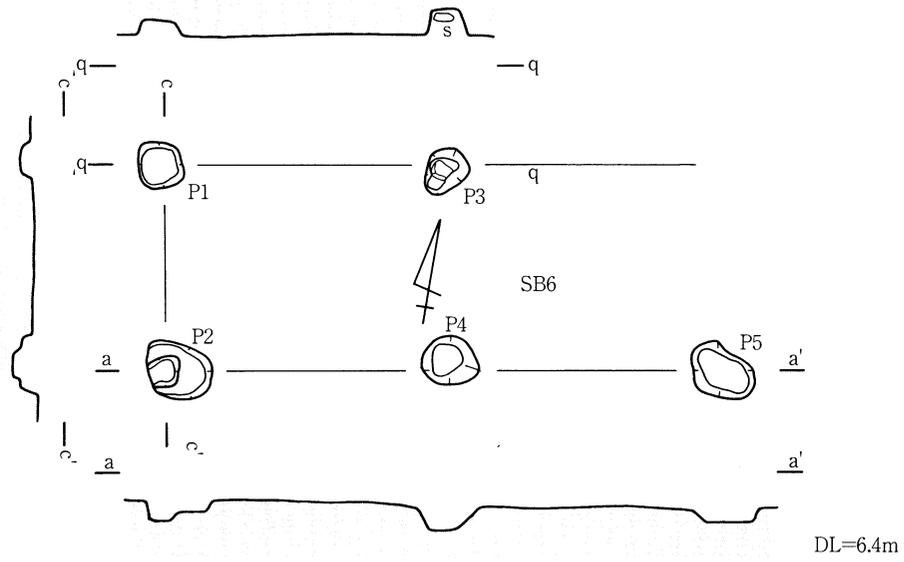
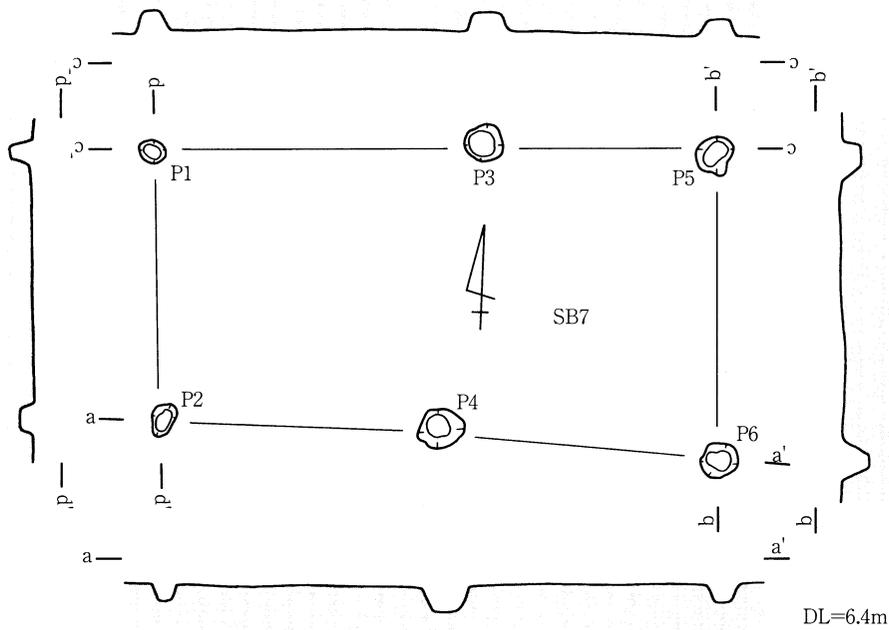


Fig. 13 SB4 実測図



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
1 ~ 3	2.20	4.38	1 ~ 2	1.62		1	8	37	36	6.08	須1
						2	18	50	44	6.02	土7
						3	23	40	28	5.98	瓦1、土4
2 ~ 4	2.18					4	18	44	38	6.06	土17、鉄3
4 ~ 5	2.20					5	10	54	34	6.00	



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数	
1 ~ 3	2.58	4.41	1 ~ 2	2.14	2.14	1	18	22	18	6.02		
3 ~ 5	1.83						2	12	28	18	6.08	
			5 ~ 6	2.44	2.44	3	12	30	28	6.02		
2 ~ 4	2.19	4.39				4	20	38	30	6.01		
4 ~ 6	2.20						5	15	32	26	6.06	
							6	12	30	28	6.00	

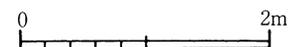
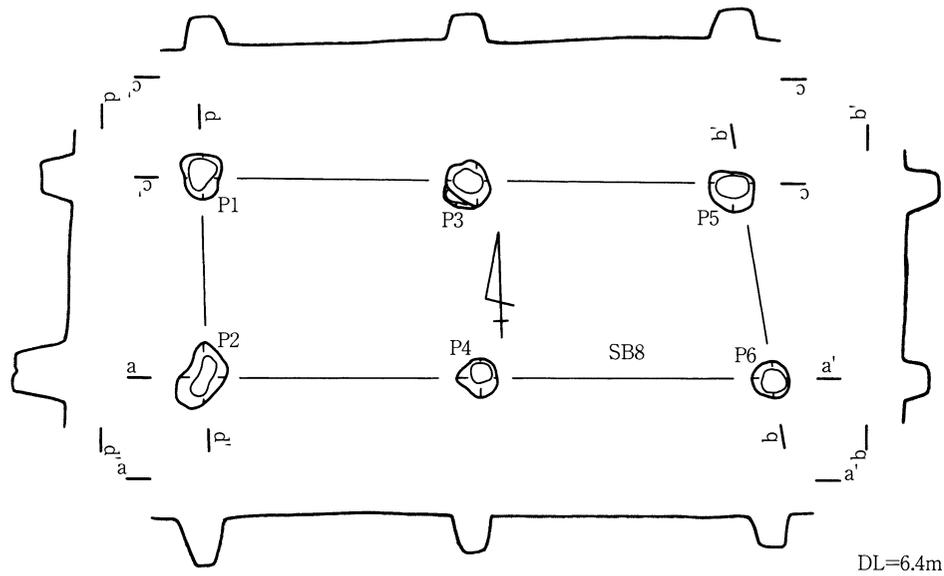
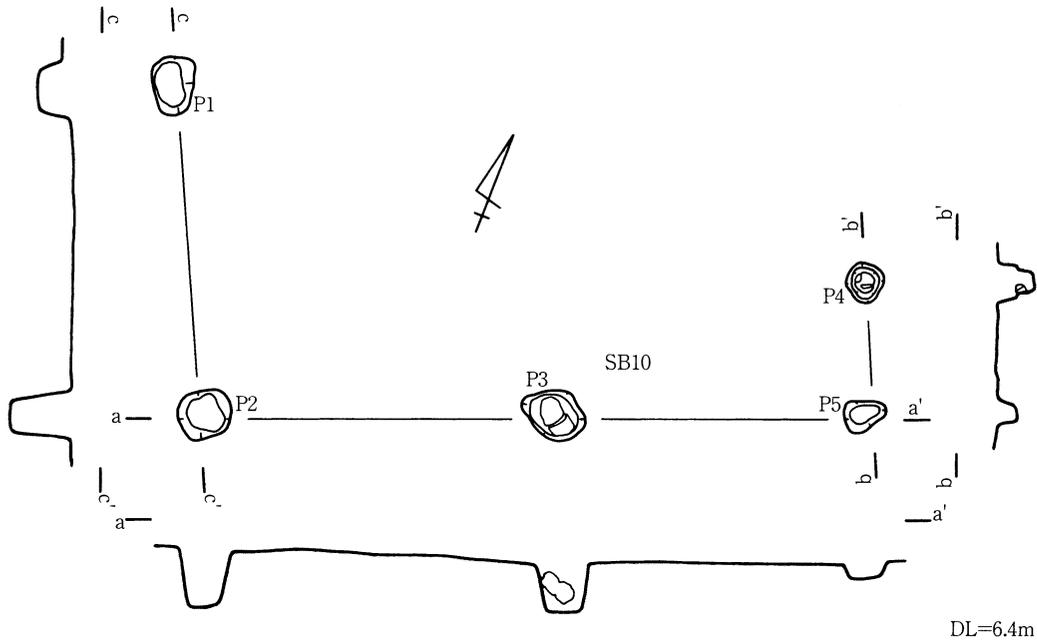


Fig. 14 SB 6・7実測図



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
1 ~ 3	2.09	4.23	1 ~ 2	1.56	1.56	1	23	38	30	5.94	染1、土5
3 ~ 5	2.14		2			2	40	50	30	5.76	土5、瓦1
			5 ~ 6	1.54	1.54	3	20	38	30	5.92	土16
2 ~ 4	2.15	4.46				4	28	30	26	5.86	土4
4 ~ 6	2.31					5	24	36	32	5.86	土6
						6	24	30	30	5.90	土2



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
2 ~ 3	2.80	5.28	1 ~ 2	2.62		1	22	46	32	5.92	鉄1、土1
3 ~ 5	2.48					2	46	40	38	5.72	
						3	40	44	36	5.70	
						4	28	32	28	5.83	土1
						5	16	34	24	5.95	



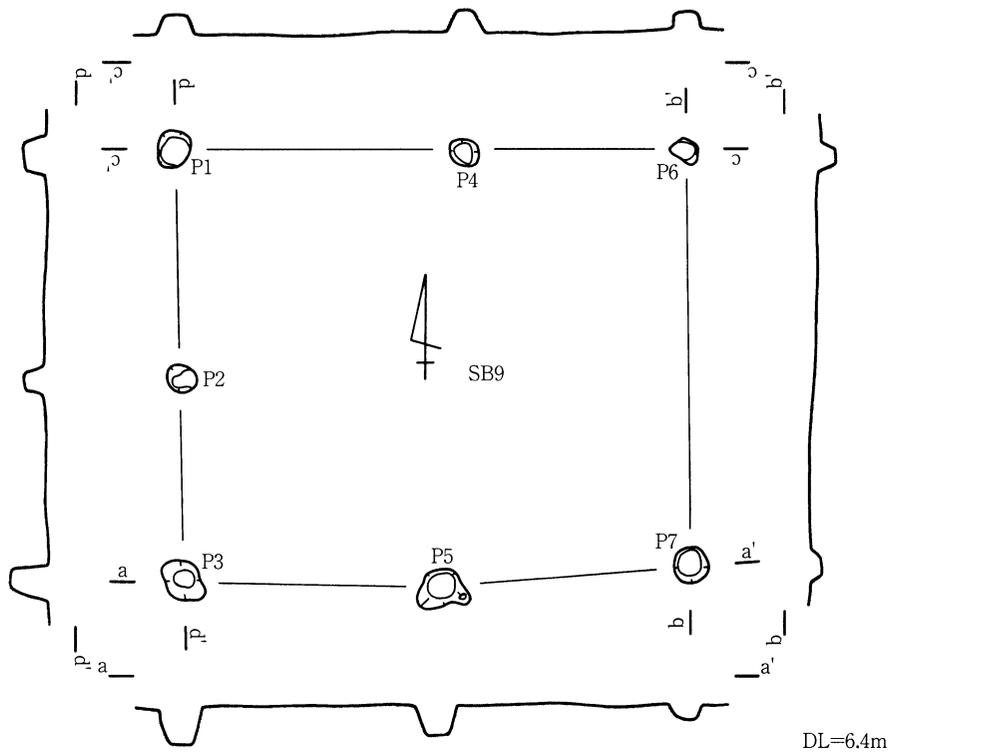
Fig. 15 SB 8・10実測図

8) SB8

調査区北側B-12・13、C-12・13の地山直上より検出した1間×2間の東西方向の掘立柱建物跡である。棟軸はN-88°-Eにとる。桁行は4.32~4.46m、梁間は1.54~1.56mを測る。柱穴の規模は長径30~50cm、短径26~30cmを測り円形から楕円形を呈する。検出面からの深さは20~40cmを測る。埋土は単層の黒褐色土層であり、出土遺物はP2よりFig. 35-9の白磁の口縁部、P5からはFig. 35-10の青磁碗の底部、P6からはFig. 35-8の瓦器碗片が出土している。

9) SB9

調査区東側のA-10・11、B-10・11の地山直上より検出した1間×2間の東西方向の掘立柱建物跡である。棟軸はN-88°-Eにとる。桁行は3.97~4.00m、梁間は3.27~3.40mのほぼ正方形を呈す。柱穴の規模は長径24~40cm、短径16~30cmを測る円形を呈している。検出面からの深さは10~28cmを測る。埋土は単層の黒褐色土層であり、土師質土器細片が出土している。



Pit NO	桁行柱間 (m)	桁行間 (m)	Pit NO	梁間柱間 (m)	梁間間 (m)	Pit NO	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	標高 (m)	出土点数
1~4	2.25	4.00	1~2	1.82	3.40	1	16	32	24	6.02	土3
4~6	1.75		2~3	1.58		2	18	23	23	6.00	
						3	28	40	28	5.90	
3~5	2.01	3.97	6~7	3.27	3.27	4	16	24	21	6.00	
5~7	1.96					5	22	36	30	5.94	
						6	12	24	16	6.02	
						7	10	26	26	6.10	



Fig. 16 SB9実測図

10) SB10

調査区東側、SB9の東隣に位置しA-8・9、B-8・9の地山直上より検出した1間×2間以上の建物跡である。棟軸はN-69°-Eにとる。調査区隅の検出であるため北側の調査区外に続くと考えられる。桁行は5.28m、梁間は2.26mを測る。柱穴の規模は長径32~46cm、短径24~38cmを測り、楕円形を呈している。検出面からの深さは16~46cmを測る。埋土は単層の黒褐色土層であり、出土遺物はP3からはFig. 35-13の石碇、Fig. 35-12の灰釉陶器、P4からはFig. 35-11の砥石が出土している。(竹村)

11) SR1

調査区南東部に位置し、東西方向の流路跡である。調査区のE-4~7、F-3~9、G-9にかけて包合層の第Ⅵ層を除去した段階で検出した。流路方向は、調査区の南東隅から弧状をえがき南西隅の方向を取る。規模は、南東部調査区ポイントの4ラインまで6mで、4ラインから8ラインまで16m、8ラインから9ラインまで6mで全体の長さは28mを測る。幅は、中央部で2~2.20m、南東部で1.20m、南西部で1.60mを測る。断面は、全体的にU字状を呈し、検出面からの堆積層は主に1~2層である。堆積層の上層には、褐灰色砂質土で下層は暗灰色混砂質土（炭化物・木片を多量に含む）である。検出面からの深さは、中央部で50cm、東西の端になると30~40cmを測る。底面の標高は、東部端で3.7m、西部端で3.1mを測る。(松田)

12) SR2

調査区南東のE-4~8、F-3~9、G-3・9のSR1の下層より検出した。F-3~4で6.96m、F-5~8で14m、F-8~G-9で8mを測る。全長約29m、最大幅3mを測りほぼSR1と同じ形を形成しており、F-8からG-9にむかっては南内側に蛇行している。SR1の下層からの検出であり、平面上では確認は難しく、断面で確認することができた。埋土は暗褐色砂礫土層である。遺構はⅧ層を掘り込んで形成しており、Ⅷ層の遺物が多数混入している。10世紀前半から中葉にかけての遺物が出土しており、この時期を中心に流れていたと考えられる。(竹村)

13) SR3

SR3は、中位段丘の南斜面に湾入した自然流路である。堆積については、延長33mにわたる凹岸(段丘崖側)を検出したが、離岸6.5m以下の既掘範囲は対岸に達していない。段丘側西端部、中央部、東端部では、埋積堆積の上面水準が、順次・海拔+2.8m、+3.2m、+2.6mを前後する一方、離岸5.0m地点における流路床の各水準は、順次・海拔+1.6m、+1.6m、+1.2m前後の値を得ている。このように、埋積堆積の水準が東端部で急傾斜するところから、その流れは西から東と推定し得る。この流路は、縄文後期後葉以後の滞水域堆積層を貫流し、侵食水準は段丘の洪積砂礫面に達している。埋積堆積物の主体は、腐植の混在によって黒褐色を帯びる還元シルトであり、1~3cm径の角礫や亜円礫を多く含む他、炭化物や木片を多量に交える。ここでは、侵食と堆積の反復や、比重別の沈降等がもたらす異相の層は基本的に見られず、全体として組成が均質で、締まりが強く、僅かに腐植密度の相対的な高低から、それぞれ上層(X層)と下層(X'層)に作業分層を設定するに止まった。この堆積状況は、洪水性の強い掃流作用によって運搬された物質が、比較的短時間内に流路内に充填した結果と考えられる。SR3の埋積層に含まれる遺物は、古式土師器が最も多く、次い

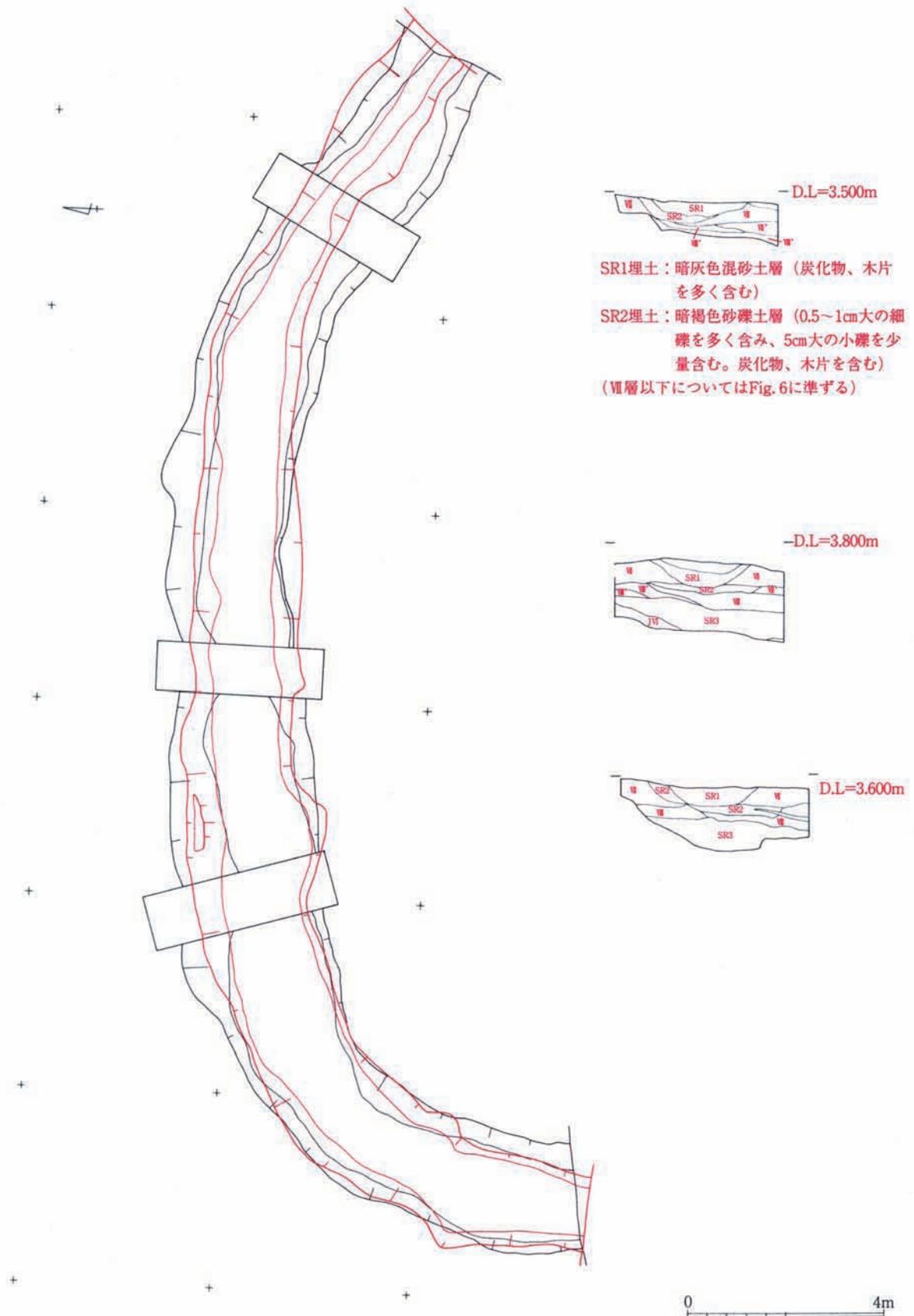


Fig. 17 SR 1・2実測図

で縄文土器や石器類、弥生土器も散見し得るが、流路埋積時期との関連で目をひくのは、僅か4点であるが8世紀代の須恵器片を挟在する点である。このことからSR3は、8世紀末か、それに近い時期に埋積したものと考えられる。(武吉)

14) ピット群

調査区西、北、中央部の地山直上において181基の柱穴を確認した。西側はD-18~20、E-19、G-17~20に集中している。北側はB-8~11、C-10~15、中央部ではD-12~15、E-12~15、F-13~15において集中して検出した。柱穴の規模は直径30~40cmを測り、円形と楕円形を呈するが、中でも楕円形が多い。埋土は単層の暗黒褐色土層が殆どを占めるが一部茶褐色土層もみられる。土層による時期差は明確ではない。(竹村)

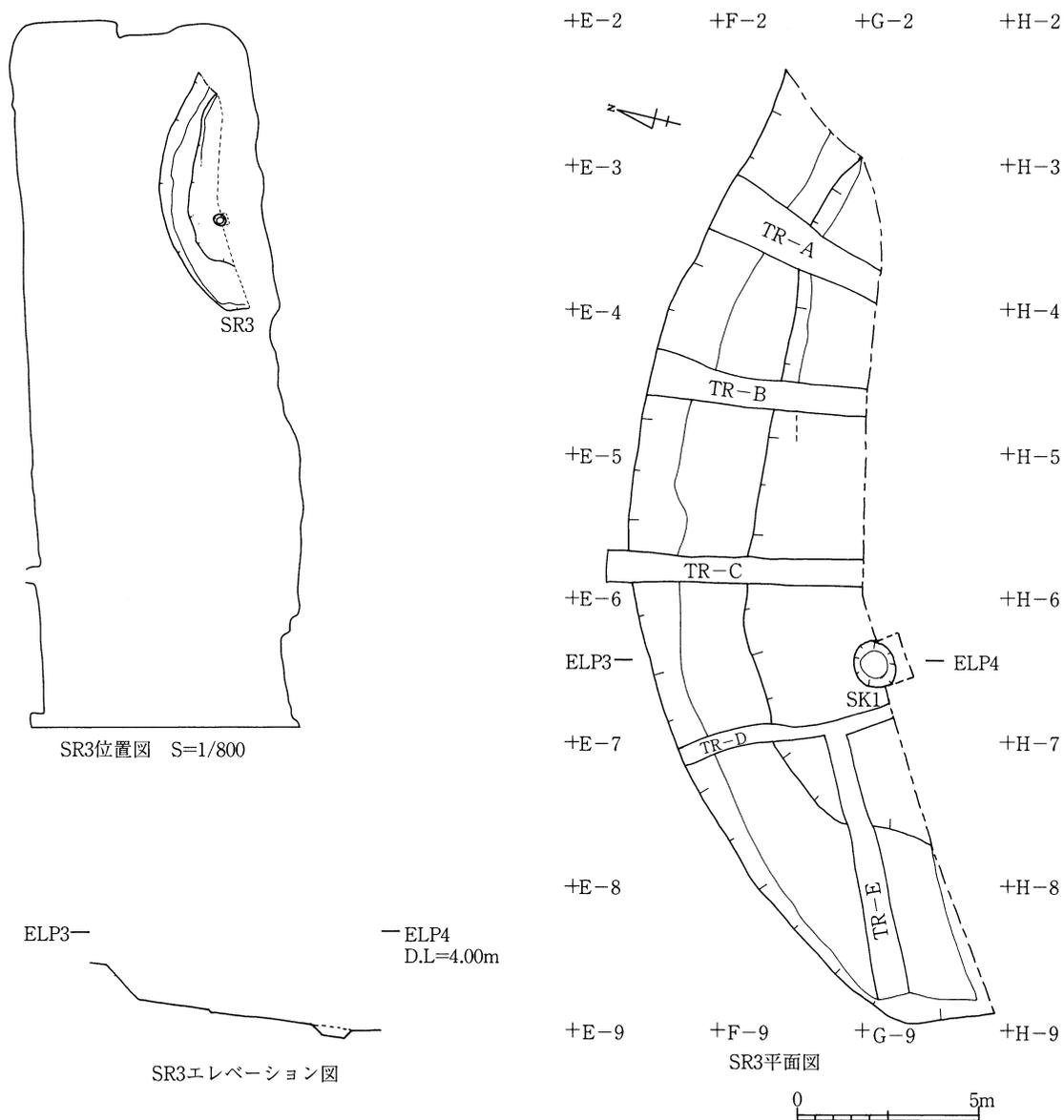


Fig. 18 SR3 実測図

第2節 出土遺物

1 縄文時代

1) 縄文土器 (Fig. 19~Fig. 29)

後期以前の土器 (Fig. 19-1~4)

Fig. 19-1~3は頸部片ないし胴部片で、外面に隆起帯を貼付する。Fig. 19-4は外面に沈線文を施す胴部片である。Fig. 19-1~4は胎土の特徴から、同一個体とみられる。縄文前期土器か。

平城式土器 (Fig. 19-5~7)

Fig. 19-5~7は口縁部片で、端部外面に沈線1条を巡らせる。Fig. 19-5は晩期の可能性がある。

片粕式・北久根山式系統の土器群 (Fig. 19-8~11, Fig. 20-1・2)

Fig. 19-8~10は有文深鉢の口縁部片である。Fig. 19-11は有文高杯の坏部片で、内面にヘラ描き文を施す。Fig. 20-1・2は有文深鉢の口縁部片で、Fig. 20-1は平縁、Fig. 20-2は山形口縁を呈する。

西平式・伊吹町式土器 (Fig. 20~Fig. 26)

Fig. 20-3~5は有文深鉢・口縁部片で、口縁部・胴部の文様帯に沈線文を施す。Fig. 21-1~10, Fig. 22-1~3は有文深鉢・口縁部片で、縄文地に沈線文を施す。Fig. 22-4~10は有文深鉢・口縁部片で、胴部文様帯に1段以上の刺突文を施す。

Fig. 23~Fig. 25-11は有文深鉢・口縁部片で、口縁部・胴部の両文様帯に縄文+沈線文・刺突文を施す。Fig. 25-11は沈線内の刺突文が押し引き沈線状のもの。

Fig. 25-12・13は有文深鉢（鉢？）・胴部片である。

Fig. 26は西平式の有文浅鉢である。

Fig. 26-2~4・8・9は刺突文を欠く。Fig. 26-12・13は多条の沈線と刺突文を組み合わせたものである。Fig. 26-14・15は縦位の沈線（3条）によって文様帯を区画したものである。

その他の後期土器 (Fig. 27・28)

Fig. 27-1~9は浅鉢である。

Fig. 27-1~4は有文浅鉢・口縁部片で、沈線と隆起帯とを組み合わせている。Fig. 27-5・6は沈線文を主体とする有文浅鉢・口縁部片で、非常に薄手である。

Fig. 27-11~17は注口土器である。

Fig. 27-18は縄文施文の深鉢である。

Fig. 27-19・Fig. 28-1~8は無文の深鉢・鉢の口縁部片である。

Fig. 28-9~17は土器底部片で、13~17は浅鉢である。

Fig. 28-18は土器片錘である。

晩期土器 (Fig. 29)

1~10は深鉢、11~18は浅鉢である。

1・2・4~7は突帯を有し、1・5~7は刻目突帯である。

15は外面に沈線・刺突文を施す。



Fig. 19 第I区出土縄文土器実測図1

2) 石器 (Fig. 30)

1~7は石鏃, 8・9は石錐である。10~12はスクレーパーである。

13・14は垂飾品で, 13は獣歯牙を模したものとみられる。

15は打製石斧である。16は石錘である。

17は石核で, 横長の剝片を剝取している。(曾我)

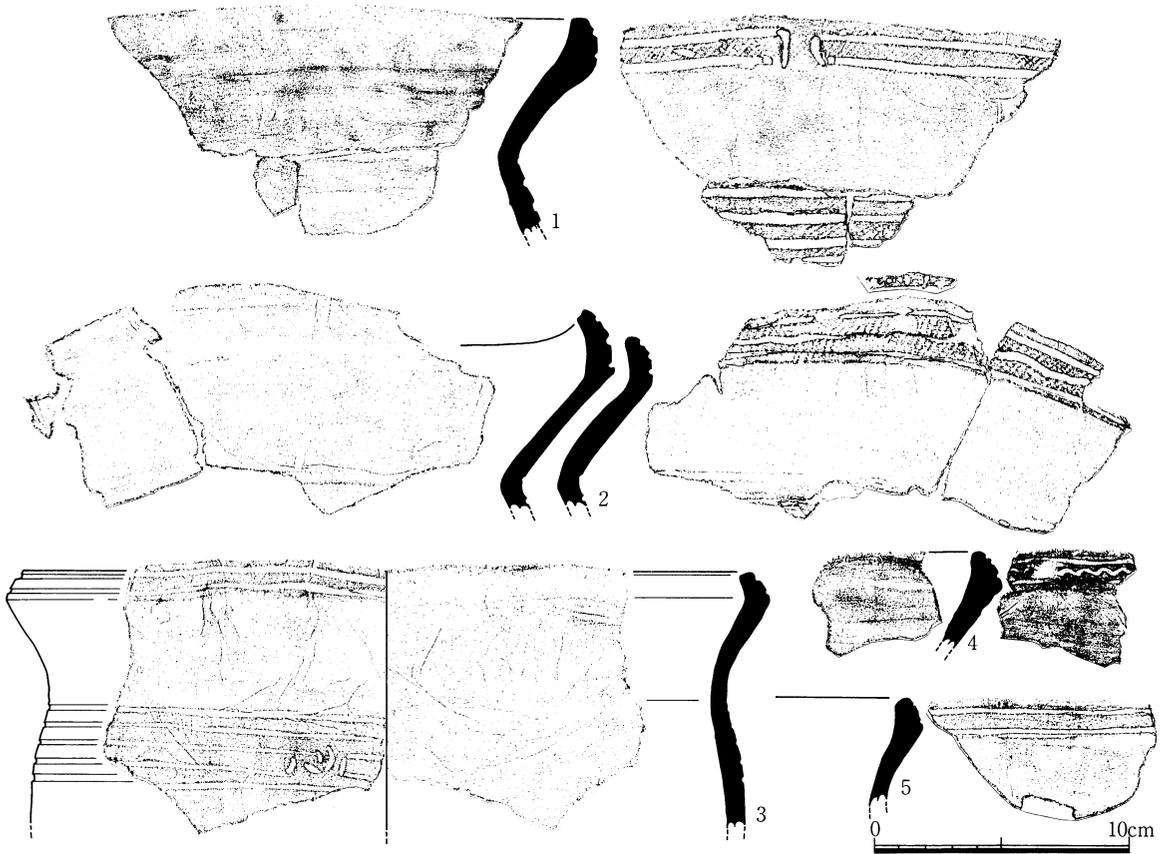


Fig. 20 第I区出土縄文土器実測図2

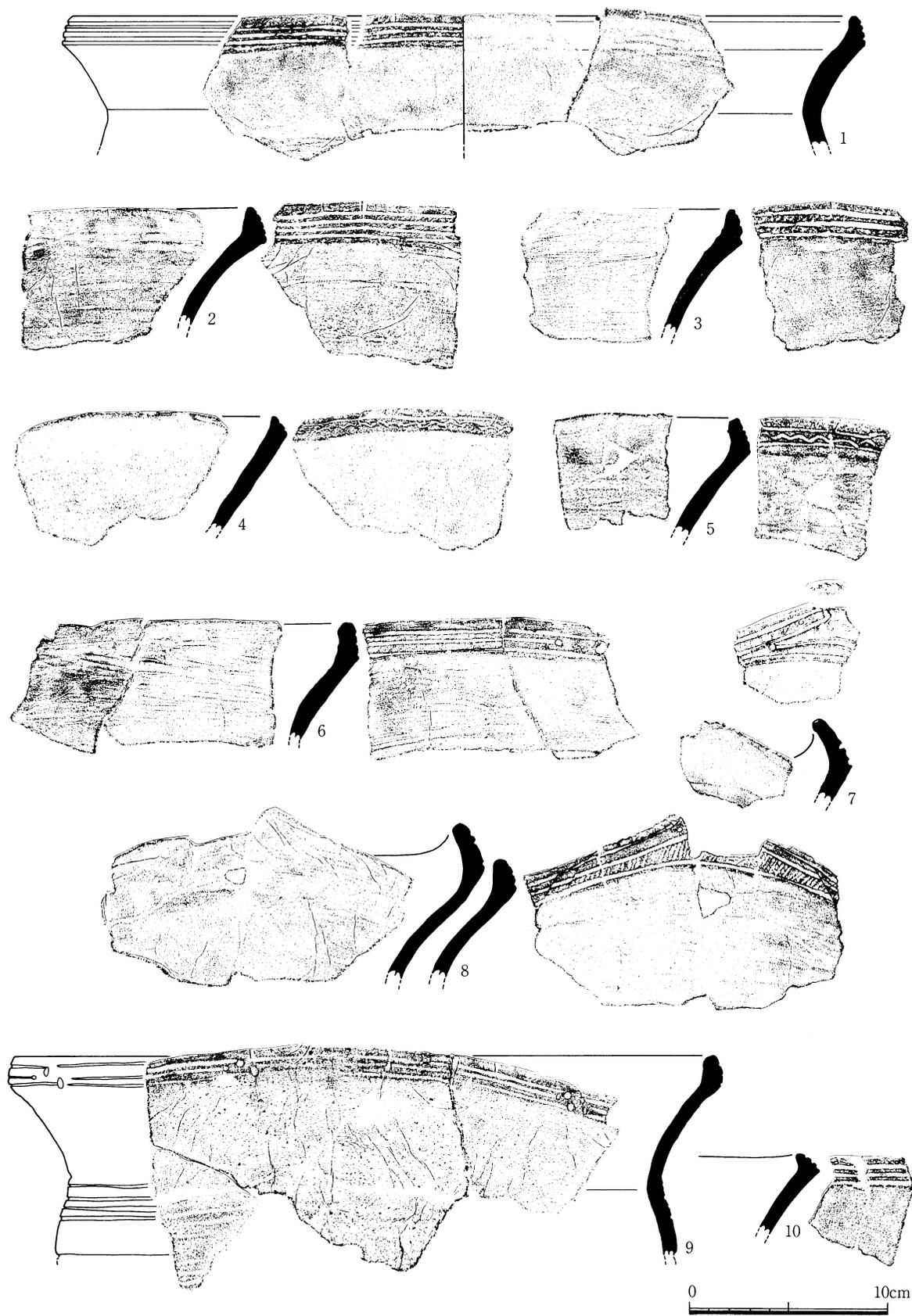


Fig. 21 第 I 区出土縄文土器実測図 3

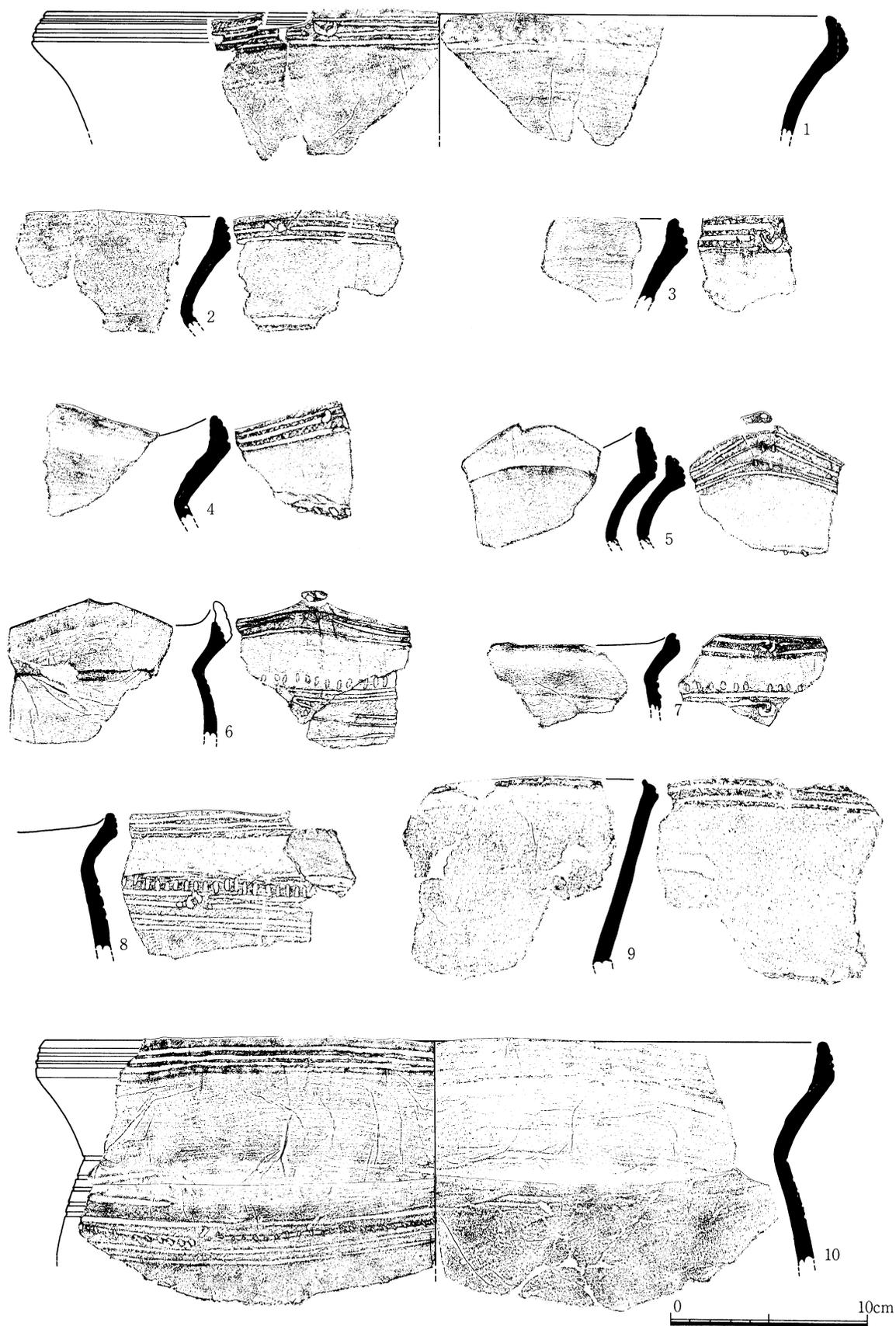


Fig. 22 第I区出土縄文土器実測図4

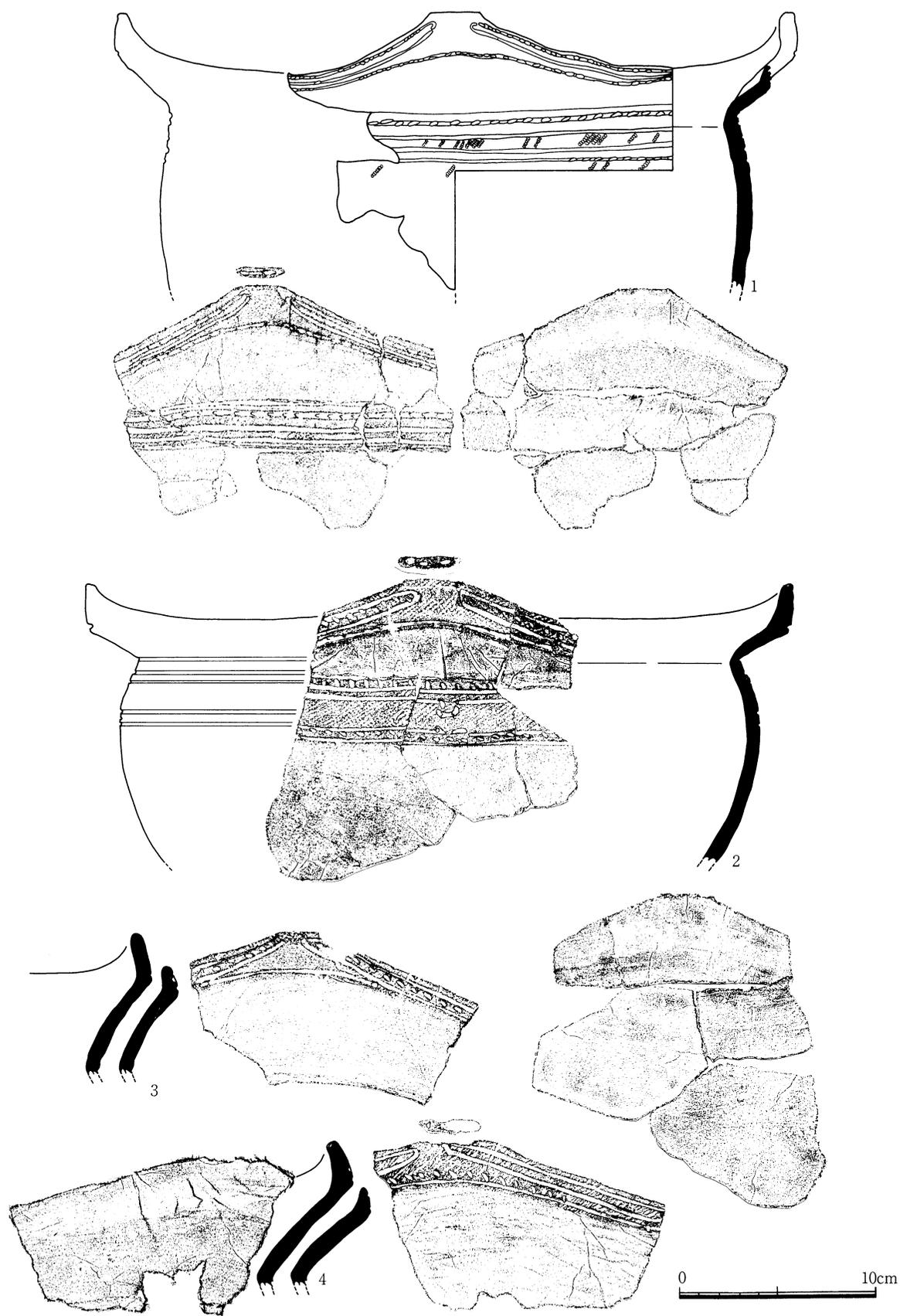


Fig. 23 第I区出土縄文土器実測図5

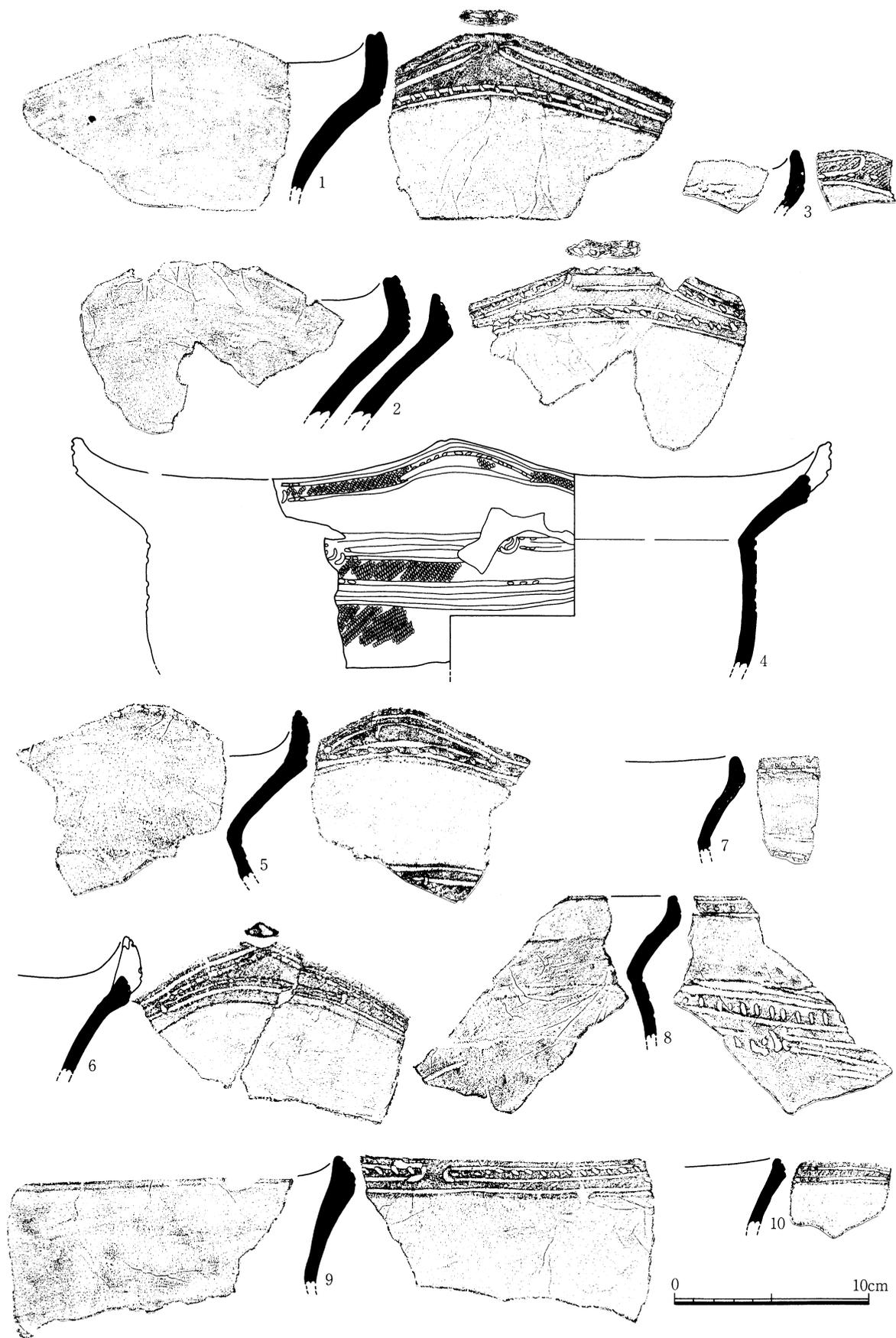


Fig. 24 第I区出土縄文土器実測図6

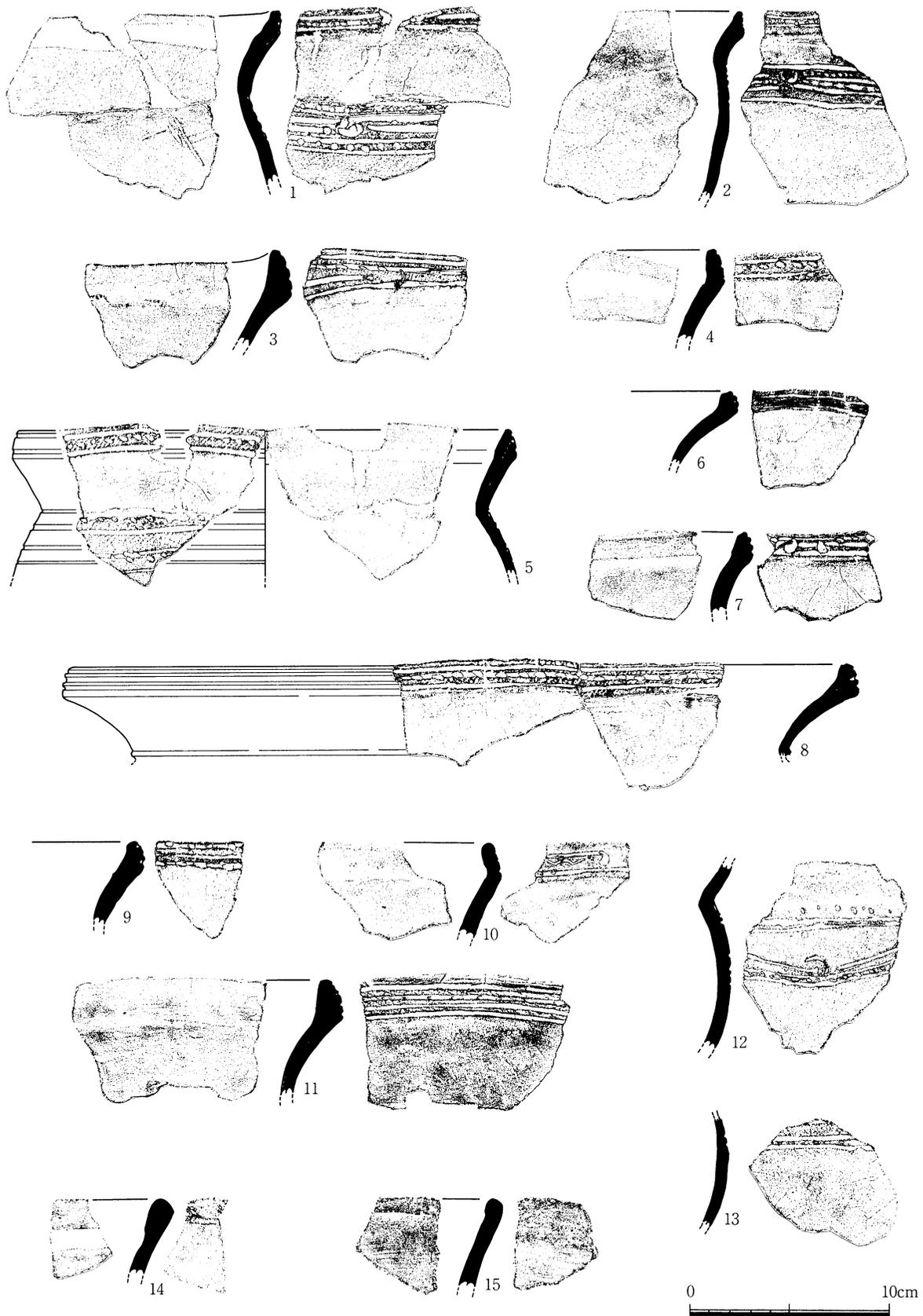


Fig. 25 第 I 区出土縄文土器実測図 7

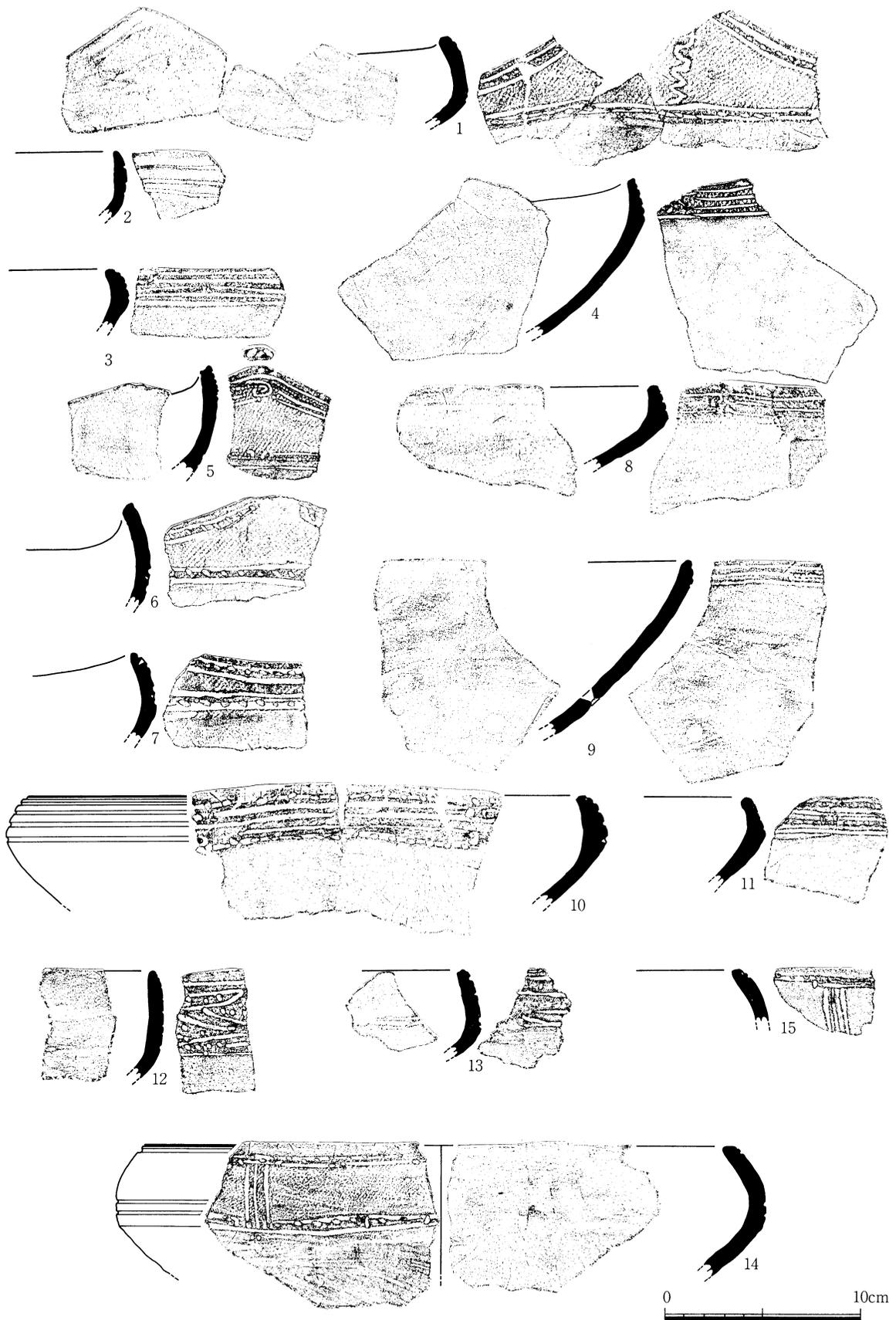


Fig. 26 第I区出土縄文土器実測図8

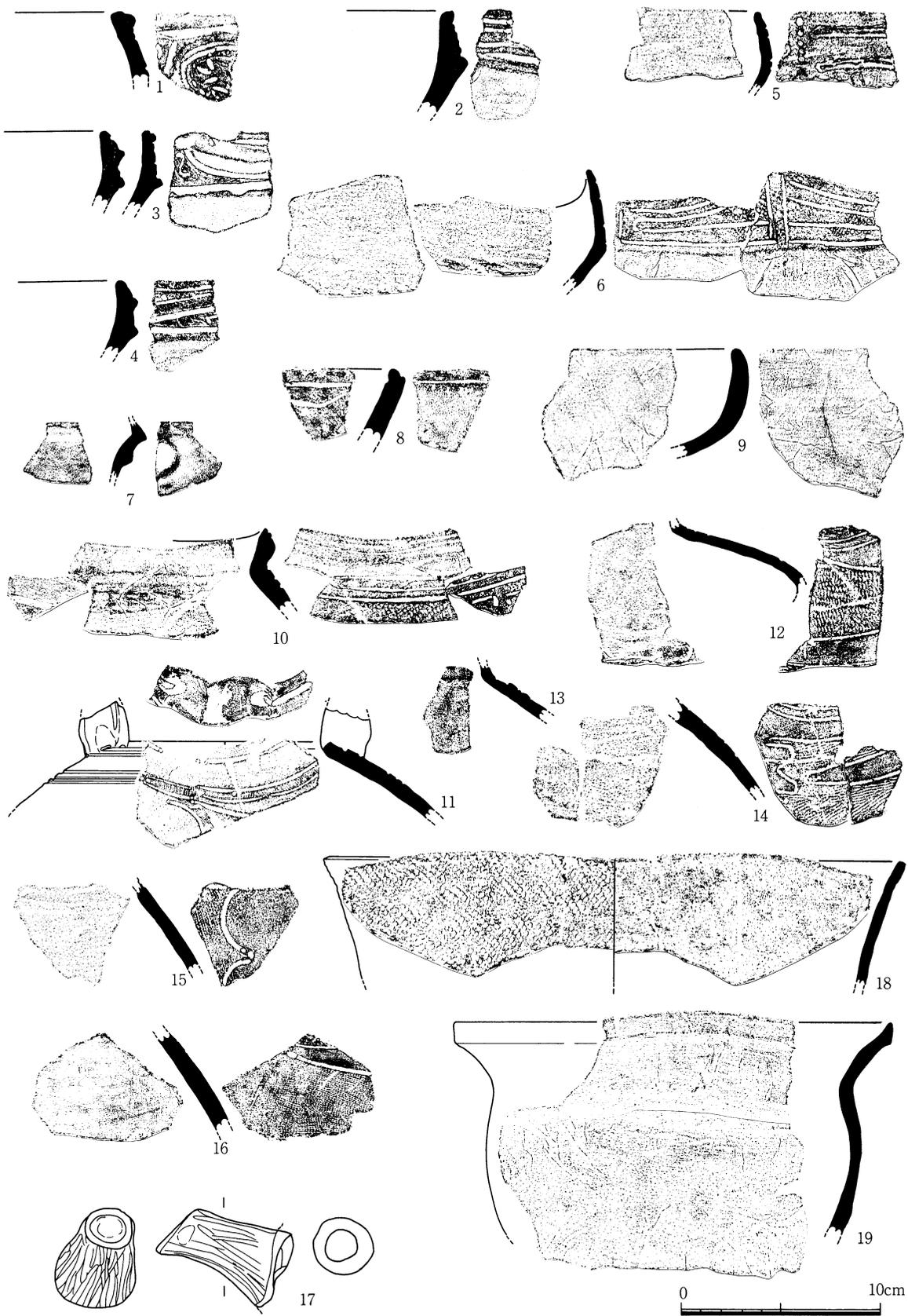


Fig. 27 第 I 区出土縄文土器実測図 9

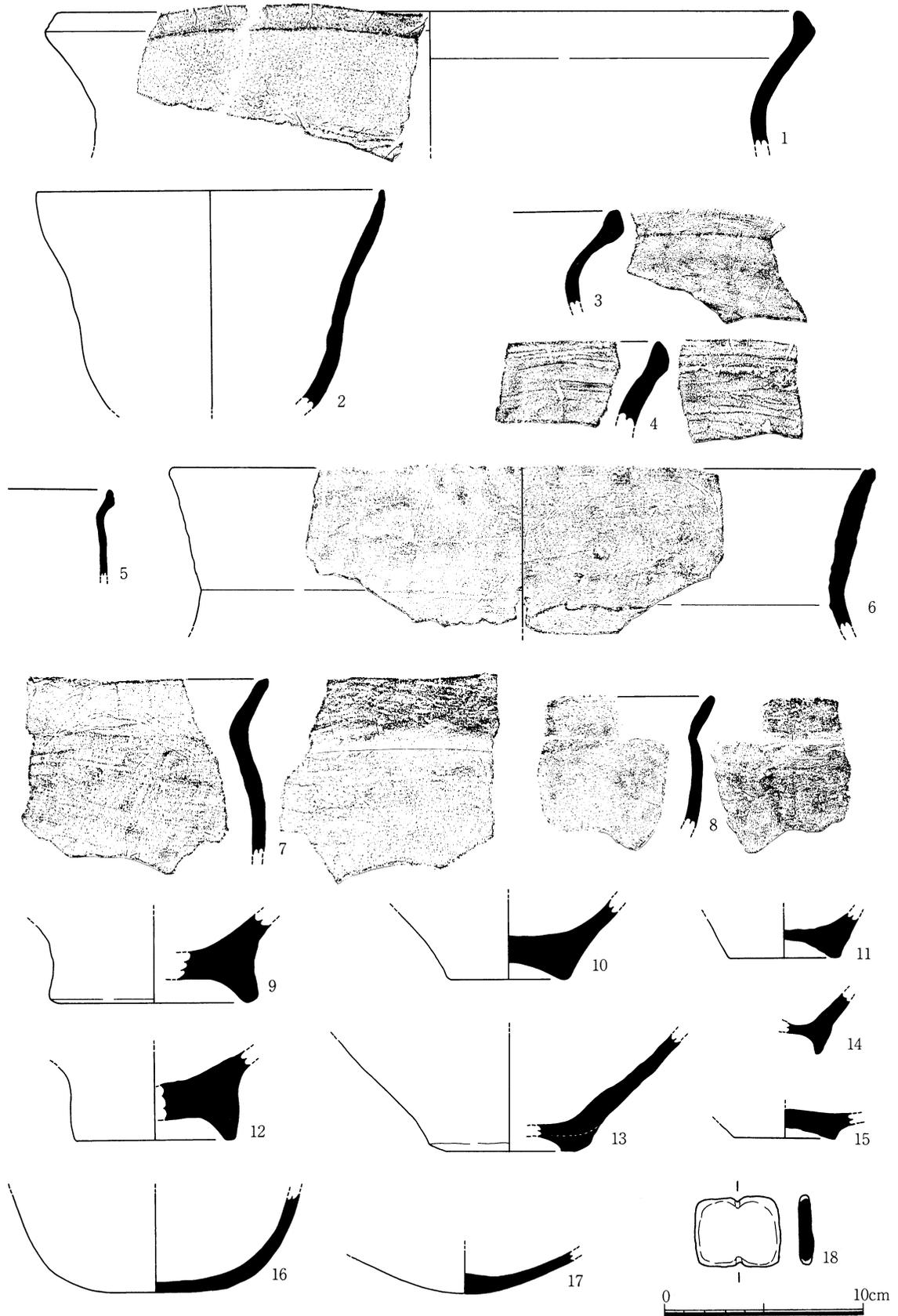


Fig. 28 第I区出土縄文土器実測図10

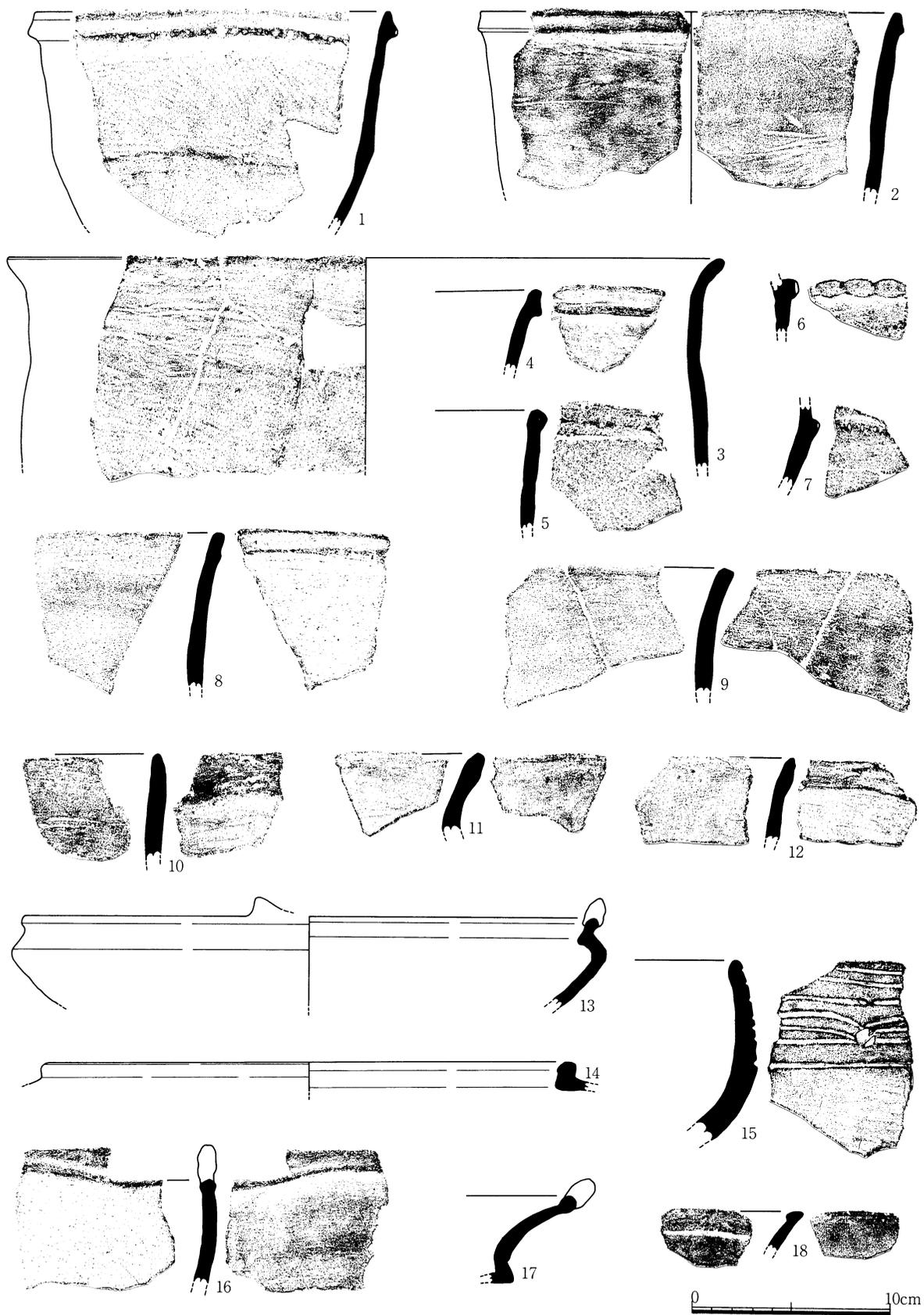


Fig. 29 第I区出土縄文土器実測図11

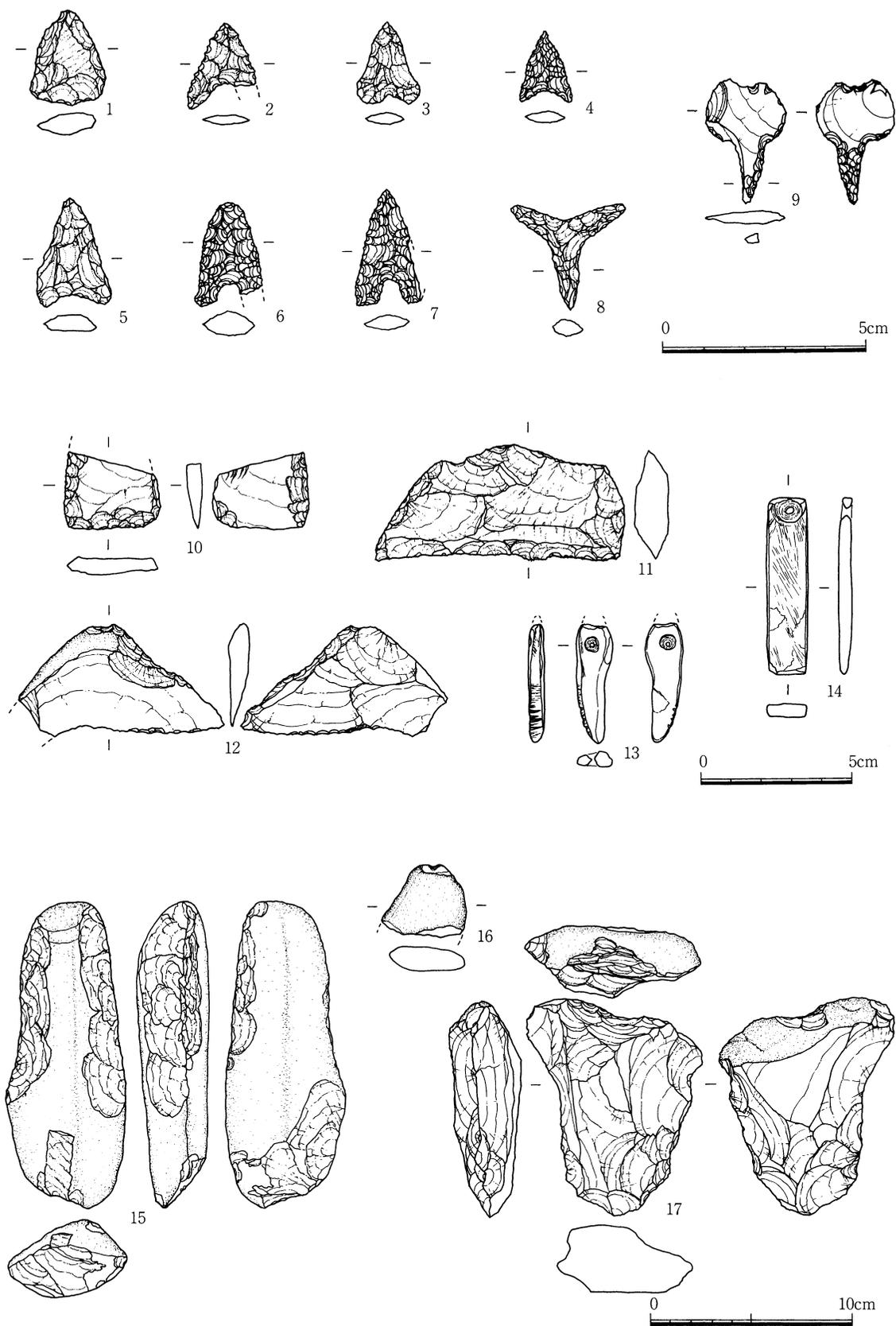


Fig. 30 第I区出土石器実測図1

Tab. 2 第I区縄文土器観察表1

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	質量 (cm)	文様・調整 外面 内面	色調 外面 内面	胎土	備考
Fig.19-1	JBA-1・JIV層	有文深鉢・頸部片	残高 5.4	隆帯, 縄文RL ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3 〃 〃	長石, 石英	前期
Fig.19-2	〃	〃・胴部片	残高 6.2	隆帯, 縄文RL ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3 〃 〃	長石, 石英	前期
Fig.19-3	〃	〃	残高 10.7	隆帯, 縄文RL ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3 〃 〃	長石, 石英	前期
Fig.19-4	J層	〃・胴部片?	残高 10.5	沈線 ナデ	黒褐 10YR 3/1 にぶい黄橙 〃 6/4	長石, 石英	前期
Fig.19-5	J1区・J層	〃・口縁部片	残高 3.7	無刻突帯?, ナデ ナデ	黒 5Y 2/1 〃 〃	石英	後~晩期
Fig.19-6	G-10	〃	残高 3.1	沈線, ナデ? ナデ	灰オリーブ 7.5Y 5/2 〃 4/2	石英, 長石	後期, 平城式
Fig.19-7	F-4, ATR・X層	〃	残高 3.7	沈線, ナデ	灰黄褐 10YR 4/2 オリーブ黒 5Y 2/2	長石, 石英	後期, 平城式
Fig.19-8	G-14・J1層	〃	残高 3.5	沈線, 縄文LR, ナデ ナデ	暗褐 7.5YR 3/3 〃 〃	長石, 石英	端面ヘラ描き文 後期, 片粕式
Fig.19-9	H-15, J層	〃	残高 3.5	沈線, 縄文LR, ナデ ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/4 〃 〃	石英	外面黒変 後期, 片粕式
Fig.19-10	J2区・J層	〃	残高 3.7	沈線, 縄文RL, ナデ? ナデ	灰黄褐 10YR 4/2 赤褐 5YR 4/6	石英, 長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 片粕式
Fig.19-11	J-1区・J層	高坏・坏部片	残高 3.2	ナデ, 指頭押圧 ヘラ描き文, ナデ	暗赤褐 5YR 3/4 〃 3/2	長石, 雲母	後期, 北久根山式
Fig.20-1	J層	有文深鉢・口縁部片	残高 8.5	沈線, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 〃 〃	石英, 長石	後期, 西平式
Fig.20-2	〃	〃	残高 7.8	沈線, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	明赤褐 5YR 5/6 にぶい黄褐 10YR 5/4	雲母, 長石, 石英	山形口縁, 端面刺突文 後期, 片粕式?
Fig.20-3	〃	〃	口径 27.7 残高 10.0	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	にぶい褐 7.5YR 5/3 〃 〃	長石, 石英	後期, 西平式
Fig.20-4	F-10・J層	〃	残高 3.8	沈線, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	褐 7.5YR 4/3 黒褐 〃 3/2	長石, 雲母	後期, 西平式?
Fig.20-5	F-11・J層下層	〃	残高 4.3	沈線, ミガキ, ナデ ミガキ	褐 7.5YR 4/3 明褐 〃 5/8	長石, 雲母 石英	後期, 西平式?
Fig.21-1	J層	〃	口径 39.4 残高 6.5	沈線, 縄文LR, ナデ ナデ	黒褐 7.5YR 3/2 褐 〃 4/3	長石	後期, 西平式
Fig.21-2	〃	〃	残高 5.8	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	にぶい橙 7.5YR 6/4 〃 〃	長石	後期
Fig.21-3	F-11・J層下層	〃	残高 6.2	沈線, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	明赤褐 5YR 5/6 にぶい黄褐 10YR 4/3	長石, 雲母 石英	後期, 西平式
Fig.21-4	J層	〃	残高 5.7	沈線, 縄文RL, ナデ ナデ	黄褐 10YR 5/4 〃 〃	石英, 長石	後期, 西平式
Fig.21-5	〃	〃	残高 5.9	沈線, 縄文LR, ナデ 条痕?, ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/4 赤褐 〃 4/6	長石	後期, 西平式?
Fig.21-6	J3・J層	〃	残高 5.8	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/2 〃 〃	長石, 石英	後期, 西平式
Fig.21-7	F-12・J層	〃	残高 4.1	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	黒褐 7.5YR 3/2 にぶい赤褐 5YR 4/4	長石, 雲母	端面刺突文 後期, 西平式
Fig.21-8	F-11・J層	〃	残高 7.8	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	明褐 5YR 4/6 暗褐 7.5Y 3/3	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig.21-9	J-3・J層	〃	口径 33.8 残高 10.0	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	黄灰 2.5Y 6/2 浅黄 〃 7/2	長石	後期, 西平式
Fig.21-10	G13・J層	〃	残高 4.1	沈線, 縄文RL, ミガキ, ナデ ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/3 〃 〃	雲母	後期
Fig.22-1	J層	〃	口径 39.4 残高 6.0	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ, 条痕 ミガキ, ナデ	にぶい橙 7.5YR 6/4 にぶい黄褐 10YR 5/3	長石	後期, 西平式
Fig.22-2	〃	〃	残高 5.6	沈線, 刺突文, 縄文RL, ナデ ミガキ, ナデ	明赤褐 2.5YR 5/6 〃 〃	石英	後期, 西平式
Fig.22-3	F-11・J層下層	〃	残高 4.2	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	褐 7.5YR 4/3 黒褐 〃 3/2	長石, 石英	後期, 西平式
Fig.22-4	F-13・J層	〃	残高 5.2	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/2 にぶい赤褐 〃 4/3		後期, 西平式
Fig.22-5	J層	〃	残高 5.8	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	黒褐 7.5YR 3/2 〃 〃	石英, 長石	後期, 西平式
Fig.22-6	〃	〃	残高 6.9	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	にぶい黄褐 10YR 4/3 暗褐 7.5YR 3/3		後期, 西平式
Fig.22-7	J2・J層	有文鉢・口縁部片	残高 4.0	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	明赤褐 5YR 5/4 〃 〃	雲母, 長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig.22-8	J-2・J層	〃	残高 6.9	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	黒褐 7.5YR 3/2 〃 〃	長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig.22-9	J・青灰	有文深鉢・口縁部片	残高 9.4	沈線, 斜行短沈線, 縄文RL, ナデ ミガキ, ナデ	灰褐 7.5YR 4/2 黒褐 〃 3/2	長石, 砂岩	後期, 西平式
Fig.22-10	J層	〃	口径 39.4 残高 11.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 〃 〃	長石	後期, 西平式
Fig.23-1	〃	〃	口径 28.6 残高 11.3	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	暗赤褐 5YR 3/4 〃 3/6	雲母, 長石	山形口縁, 端面ヘラ描き文 後期, 西平式

Tab. 3 第I区縄文土器観察表2

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	文様・調整 外面 内面	色調		胎土	備考
					外面	内面		
Fig.23-2	F-10, 11・J層	有文深鉢・口縁部片	口径 34.8 残高 14.1 胴径 32.6	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	黒褐 暗褐	5YR 2/2 〃 3/3	長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.23-3	J層	〃	残高 7.2	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	暗赤褐 赤褐	2.5YR 3/3 〃 4/6	石英, 長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig.23-4		〃	残高 7.4	沈線, 刺突文, 縄文LR (擬縄文?), ミガキ, ナデ ナデ	褐	7.5YR 4/3 〃	石英	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.24-1	J層	〃	残高 8.2	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	橙	2.5YR 6/ 〃	石英, 長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.24-2		〃	残高 7.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 にぶい赤褐	2.5YR 3/2 〃 4/3	長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.24-3	F-11	〃	残高 3.0	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	褐	7.5YR 4/4 〃	石英, 雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig.24-4	J層	〃	口径 37.9 残高 11.6 胴径 31.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	黒褐	5YR 3/1 7.5YR 2/1	雲母, 長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.24-5	F-9, 10・J1層	〃	残高 8.8	沈線, 刺突文, ナデ ナデ	橙 明赤褐	5YR 6/ 〃 5/	石英, 長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.24-6		〃	残高 7.1	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐	5YR 3/2 〃	長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.24-7	F-11・J層 ベルト	〃	残高 5.0	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	明赤褐 にぶい褐	5YR 5/6 7.5YR 5/4	長石	山形口縁 後期, 西平式?
Fig.24-8	J層	〃	残高 7.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ケズリ, ナデ	明赤褐 灰黄褐	5YR 5/ 10YR 4/	石英, 長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig.24-9	〃	〃	残高 6.6	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	赤褐	5YR 4/ 〃	長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig.24-10	G-10・J層	〃	残高 3.4	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ナデ ナデ	にぶい赤褐 黒褐	5YR 4/3 7.5YR 3/1	石英, 長石 雲母	山形口縁? 後期, 西平式?
Fig.25-1	J層		残高 8.7		赤褐	5YR 4/6 2.5YR 〃		
Fig.25-2	J2・J層	有文鉢・口縁部片	残高 9.3	沈線, 刺突文, ナデ ナデ	暗赤褐 黒褐	2.5YR 5/ 10YR 3/	石英, 雲母	後期, 西平式
Fig.25-3	J層	有文深鉢・口縁部片	残高 4.8	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	橙	7.5YR 6/6 〃	砂岩	山形口縁 後期, 西平式
Fig.25-4	G-11・J層	〃	残高 4.5	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐	5YR 3/4 〃 3/2	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig.25-5	H-15・J層	〃	口径 24.0 残高 7.2	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	赤褐 暗赤褐	5YR 4/6 〃 3/4	長石	後期, 西平式
Fig.25-6	G-14・J層	〃	残高 3.6	沈線, 刺突文, ナデ ナデ	暗赤褐	5YR 3/4 〃	長石	後期, 西平式
Fig.25-7	G-12・J層	〃	残高 4.1	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ナデ ナデ	褐 明赤褐	7.5YR 4/4 2.5YR 5/6	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig.25-8	J層	〃	口径 35.4 残高 4.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	明赤褐 褐	2.5YR 5/6 7.5YR 4/3	長石	後期, 西平式
Fig.25-9	F-12・J層	〃	残高 4.1	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ? ナデ	橙 灰黄	7.5YR 6/6 2.5YR 6/2	長石, 砂岩	後期, 西平式
Fig.25-10	G-10・J層	〃	残高 4.8	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ナデ ナデ, ミガキ?	にぶい赤褐	5YR 4/4 〃	石英	山形口縁? 後期, 西平式
Fig.25-11	J層	〃	残高 5.9	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 にぶい赤褐	5YR 3/3 〃 4/3	長石, 石英	後期, 西平式
Fig.25-12	〃	〃 頭-胴部片	残高 9.4	沈線, 刺突文, ナデ ナデ	黒褐 暗褐	7.5YR 3/2 〃 3/3	長石	後期, 西平式
Fig.25-13	JBA2・J層	有文鉢・胴部片	残高 5.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	明赤褐 灰黄	2.5Y 5/6 〃 7/2	石英, 角閃石	後期, 西平式
Fig.25-14		〃 口縁部片	残高 3.8	沈線, 刺突文, ナデ ナデ	にぶい赤褐 褐	5YR 4/4 7.5YR 4/6	長石, 石英	後期, 西平式
Fig.25-15	G-13・J層	無文深鉢・口縁部片	残高 4.4	ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐	5YR 4/6 〃	長石, 石英	後期, 西平式?
Fig.26-1	JBA2・J層	有文浅鉢・口縁部片	残高 4.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	赤褐	2.5YR 4/6 〃	長石, 石英	後期, 西平式
Fig.26-2	F-10・J層	〃	残高 3.4	沈線, ナデ ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	7.5YR 5/4 10YR 6/4	雲母, 長石	後期, 西平式?
Fig.26-3	I-3・J層	〃	残高 3.0	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ナデ ナデ	赤褐	5YR 4/6 〃	長石	後期, 西平式
Fig.26-4	J層	〃	残高 7.9	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 赤褐	2.5YR 3/6 〃 4/6	雲母, 長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig.26-5	JSK1・埋土	〃	残高 5.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	暗赤褐	5YR 3/2 〃	石英, 雲母, 長石	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.26-6	J層	〃	残高 5.3	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ?	にぶい赤褐 明赤褐	5YR 4/3 〃 5/6	砂岩, 雲母	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式
Fig.26-7	〃	〃	残高 4.3	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	にぶい赤褐	5YR 4/4 〃	砂岩, 雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig.26-8	JBA1・J層	〃	残高 4.1	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	明赤褐	5YR 5/6 〃	長石, 石英	後期, 西平式

Tab. 4 第I区縄文土器観察表3

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	文様・調整 外面 内面	色調 外面 内面	胎土	備考
Fig.26-9	JBA1・J層	有文浅鉢・口縁部片	残高 8.8	沈線, 縄文LR, ナデ ナデ	にぶい黄 2.5YR 6/4 にぶい黄橙 10YR 6/4	雲母, 長石	補修孔1, 外面にスス 後期, 西平式?
Fig.26-10	JB2・J層	〃	口径 27.4 残高 5.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	橙 5YR 6/6 〃 7.5YR 6/6	長石	後期, 西平式
Fig.26-11	J層	〃	残高 4.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	黒褐 5YR 3/1 黒 2/1	雲母	後期, 西平式
Fig.26-12	J1・J層	〃	残高 5.5	沈線, 刺突文, ナデ ミガキ, ナデ	橙 7.5YR 6/6 〃	砂岩	後期, 西平式
Fig.26-13	F-12・J層	〃	残高 4.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ	明褐 7.5YR 6/6 〃	長石	後期, 西平式?
Fig.26-14	〃	〃	口径 28.8 残高 6.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/4 〃	石英	後期, 西平式
Fig.26-15	F-11・J層	〃	残高 2.6	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/6 〃	長石, 石英	後期, 西平式
Fig.27-1	〃・J層青灰	〃	残高 3.4	隆帯, 沈線, 刺突文 ナデ?	黒褐 7.5YR 3/2 〃	長石	後期, 西平式併行?
Fig.27-2	JBA2・J層	〃	残高 5.1	隆帯, 沈線 ナデ	灰黄褐 10YR 4/2 褐 7.5YR 4/3	長石	端面沈線1 後期, 西平式併行?
Fig.27-3	F-11・J層	〃	残高 4.0	隆帯, 沈線, 刺突文, 縄文RL (擬縄文?), ナデ ミガキ, ナデ	明赤褐 5YR 4/6 〃	長石, 石英, 雲母	後期, 西平式併行?
Fig.27-4	〃	〃	残高 3.6	隆帯, 沈線, 刺突文, 縄文RL, ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/6 〃	長石	後期, 西平式併行?
Fig.27-5	J層	〃	残高 3.7	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	暗灰黄 10YR 4/2 〃	雲母	後期, 西平式併行?
Fig.27-6	〃	〃	残高 5.9	沈線区画文, 縄文RL, ケズリ, ナデ ナデ	明黄褐 10YR 6/3 〃	石英	山形口縁 後期
Fig.27-7	表採	〃	残高 2.8	隆帯 (円形), ナデ ナデ	オリーブ黒 5Y 3/1 〃	長石, 石英	後期, 西平式併行?
Fig.27-8	F-6, SD3・X'層	有文深鉢・口縁部片	残高 3.6	沈線, ナデ 沈線, ナデ	灰褐 7.5YR 4/2 にぶい褐 5/4	砂岩	後期, 彦崎KⅡ式?
Fig.27-9	JSK-1・埋土	無文浅鉢・口縁部片	残高 5.3	ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	黒褐 7.5YR 2/2 暗褐 3/3	長石	後期, 西平式併行?
Fig.27-10	〃	有文鉢・口縁部片	残高 4.1	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/3 黒褐 3/1	長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig.27-11	F-6・J層	注口土器・口縁部片	口径 9.7 残高 5.8	沈線, 刺突文, 擬縄文, ミガキ ナデ	オリーブ黒 5Y 3/1 〃	長石	後期, 彦崎KⅡ式併行?
Fig.27-12	J層	〃・胴部片	残高 3.5	沈線, 刺突文, 擬縄文, ミガキ ミガキ, ナデ	黒褐 10YR 3/2 黄灰 2.5Y 6/1	長石, 石英	後期, 彦崎KⅡ式併行?
Fig.27-13	〃	〃	残高 2.7	隆帯, 沈線, 刺突文, ミガキ ミガキ, ナデ	黒褐 10YR 3/2 黄灰 2.5Y 6/1	長石, 石英	後期, 彦崎KⅡ式併行?
Fig.27-14	J1・J層	〃	残高 4.5	沈線, 刺突文, 擬縄文, ミガキ ナデ	にぶい橙 5YR 7/4 〃	石英, 雲母	後期, 彦崎KⅡ式併行?
Fig.27-15	J4・J層	〃	残高 4.4	沈線, 刺突文, 縄文RL (擬縄文?), ナデ 条痕?	灰白 5Y 7/1 〃	石英	後期, 彦崎KⅡ式併行?
Fig.27-16	表採	〃	残高 5.0	沈線, 刺突文, 擬縄文, ミガキ ミガキ, ナデ	灰黄 2.5Y 6/2 灰白 7/1	長石, 砂岩	後期, 彦崎KⅡ式併行?
Fig.27-17	JBA2・J層	〃・注口部片	全長 7.5 全高 4.9 全幅 4.1	ミガキ ナデ	灰白 5Y 7/1 〃	石英, 角閃石	後期, 彦崎KⅡ式併行?
Fig.27-18	JBA1・J層	縄文深鉢・口縁部片	口径 28.8 残高 6.2	縄文RL, ナデ ナデ	にぶい褐 7.5YR 5/3 にぶい橙 7/3	長石, 砂岩	後期, 西平式併行
Fig.27-19	J層	無文深鉢・口縁部片	口径 22.0 残高 10.7 胴径 19.0	ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/3 〃	長石, 雲母	後期, 西平式併行
Fig.28-1	〃	〃	口径 37.0 残高 6.3	条痕, ナデ ミガキ, ナデ	黒褐 5YR 3/1 にぶい赤褐 4/4	石英, 雲母, 長石	外面黒変 後期, 西平式併行
Fig.28-2	J1・JV層	無文鉢	口径 17.4 残高 11.0	ナデ ナデ, 指頭押圧	黒褐 10YR 3/1 〃	長石, 雲母, 砂岩	後期, 西平式併行?
Fig.28-3	J層	無文深鉢・口縁部片	残高 4.7	ナデ ナデ	にぶい褐 7.5YR 5/4 灰黄褐 10YR 4/2	石英, 雲母, 長石	後期, 西平式併行
Fig.28-4	JBA1・J層	〃	残高 4.3	ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/1 明赤褐 5/6	長石	後期, 西平式併行?
Fig.28-5	J3・J層	無文鉢・口縁部片	残高 4.3	ナデ ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 黒褐 7.5YR 3/1	石英	後期, 西平式併行
Fig.28-6	J層	無文深鉢・口縁部片	口径 33.0 残高 8.0	ナデ ナデ	暗褐 2.5YR 3/4 赤褐 4/6	長石	後期, 西平式併行
Fig.28-7	JSK-1・埋土	〃	残高 8.8	ケズリ, ナデ ケズリ, ナデ	灰褐 7.5YR 4/2 黒褐 3/1	石英, 長石	後期, 西平式併行?
Fig.28-8	J3・J層	無文鉢・口縁部片	残高 6.6	ナデ ナデ	明赤褐 2.5YR 3/2 灰赤 4/2	石英, 長石	後期, 西平式併行
Fig.28-9	J層青灰	底部片	残高 4.5 底径 9.4	ナデ? ナデ?	明赤褐 5YR 5/6 黒褐 10YR 3/1	石英, 雲母, 長石	内面黒変 後期, 西平式
Fig.28-10	〃	〃	残高 4.0 底径 5.4	ナデ, 指頭押圧 ケズリ, ナデ	橙 7.5YR 6/0 にぶい黄褐 10YR 5/3	長石	後期

Tab. 5 第I区縄文土器観察表4

種図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	文様・調整	外面 内面	色調	外面 内面	胎土	備考
Fig.28-11	J層	底部片	残高 2.2 底径 5.4	ナデ		赤褐	5YR 4/6	長石	内面黒変 後期, 西平式
Fig.28-12	〃	〃	残高 4.4 底径 7.8	ナデ		赤褐 黒褐	5YR 4/6 10YR 3/1	長石	内面黒変 後期, 西平式?
Fig.28-13	F-10・J層青灰	底部片 (浅鉢)	残高 5.9 底径 6.3	ナデ		明赤褐 にぶい褐	5YR 5/8 7.5YR 5/4	石英, 雲母, 長石	底面縄文圧痕 後期, 西平式?
Fig.28-14	J3・J層	底部片	残高 3.1	ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ		暗褐	7.5YR 3/3	長石	後期, 西平式
Fig.28-15	F-11・J層	〃	残高 1.4 底径 5.0	ナデ		橙 灰白	7.5YR 7/4 5YR 7/1	長石	後期?
Fig.28-16	J層	底部片 (浅鉢?)	残高 5.0 底径 4.1?	ミガキ, ナデ, 指頭押圧 ナデ		黒褐	10YR 3/2	石英, 雲母, 長石	後期, 西平式併行
Fig.28-17	JSK1・埋土	底部片 (浅鉢)	残高 2.2 底径 1.8	ミガキ, ケズリ, ナデ ナデ		黒褐 にぶい赤褐	5YR 3/1 4/4	石英	後期, 西平式
Fig.28-18	J1・J層	土器片錘	全長 4.2 全高 3.6 全厚 0.7 重量 14.0g	ナデ		明赤褐	5YR 5/6	石英, 長石	後期, 西平式
Fig.29-1		有文深鉢・口縁部片	口径 18.0 残高 10.8	刻目突帯, 条痕, ナデ 条痕, ナデ		黒褐	7.5YR 2/2	石英	晩期
Fig.29-2		〃	口径 20.7 残高 10.0	無刻突帯, ナデ ナデ		黒褐	10YR 3/1	石英, 雲母, 長石	晩期
Fig.29-3	J層	無文深鉢・口縁部片	口径 35.8 残高 10.4	条痕 条痕, ナデ		灰オリーブ 灰	5Y 6/2 10Y 5/1	砂岩	晩期
Fig.29-4	J1・J1層	有文深鉢・口縁部片	残高 4.0	無刻突帯, ナデ ナデ		オリーブ灰 黄灰	2.5G 5/1 2.5Y 6/2	長石	晩期
Fig.29-5	E5	〃	残高 6.0	刻目突帯, 条痕 不明 (剥落)		黒褐	10YR 3/1 2.5Y 3/1	石英	晩期
Fig.29-6		〃	残高 2.7	刻目突帯, ナデ ナデ?		黒褐 暗赤褐	5YR 2/1 3/4	石英, 長石	晩期?
Fig.29-7	D-9・III層	有文深鉢・頸部片	残高 4.0	刻目突帯, ナデ? ナデ		にぶい赤褐 暗灰黄	5YR 5/4 2.5Y 4/2	長石	晩期
Fig.29-8	J層	有文深鉢・口縁部片	残高 7.8	無刻突帯, ナデ ナデ		灰黄 暗灰黄	2.5Y 7/2 5/2	長石	晩期
Fig.29-9	〃	無文深鉢・口縁部片	残高 6.2	ナデ		黒褐	2.5Y 3/1	石英, 長石	晩期?
Fig.29-10	〃	〃	残高 5.4	ミガキ, ナデ ナデ		黒褐	10YR 3/1	長石	晩期
Fig.29-11	F-10・J層	〃	残高 3.8	ナデ		赤褐 黄褐	5YR 4/3 10YR 4/3	長石, 雲母	晩期
Fig.29-12	JBA2・J層	〃	残高 4.1	ナデ		暗灰黄 黄灰	2.5Y 4/1 5/1	石英, 長石	晩期
Fig.29-13	G10	精製浅鉢・口縁部片	口径 29.4 残高 5.5 胴径 30.0	ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ		橙 黄灰	5YR 6/6 2.5Y 4/1		晩期
Fig.29-14	J層	〃	口径 26.1 残高 1.5	ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ		灰黄	2.5Y 7/2	石英	晩期
Fig.29-15		有文浅鉢・口縁部片	残高 9.1	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ		橙 黒褐	7.5YR 6/6 10YR 3/2	長石	外面黒変 晩期
Fig.29-16		精製鉢・口縁部片	残高 7.0	ナデ		黒褐	2.5Y 3/1 7.5YR 5/4	長石	晩期
Fig.29-17		精製浅鉢・口縁部片	残高 5.2	ナデ		黒褐 黄灰	10YR 3/2 2.5YR 4/1	長石	外面朱彩 晩期
Fig.29-18	J層	〃	残高 2.0	ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ		にぶい褐	7.5YR 5/3	石英	晩期

Tab. 6 第I区縄文石器観察表1

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	分量 (cm)	形態・調整等	石材	備考
Fig.30-1	表採	石鎌	全長 2.4 全幅 1.9 全厚 0.6 重量 2.5g	平基～円基	サヌカイト	完存
Fig.30-2	〃	〃	全長 2.1 全幅 1.7 全厚 0.3 重量 0.6g	凹基, 刃部は鋸歯状	サヌカイト	
Fig.30-3	〃	〃	全長 2.0 全幅 1.5 全厚 0.3 重量 0.6g	凹基	サヌカイト	完存
Fig.30-4	J層	〃	全長 1.8 全幅 1.3 全厚 0.3 重量 0.4g	凹基	姫島黒曜石	完存
Fig.30-5	表採	〃	全長 2.7 全幅 1.8 全厚 0.4 重量 1.8g	凹基	サヌカイト	ほぼ完存
Fig.30-6	〃	〃	全長 2.6 全幅 1.7 全厚 0.6 重量 2.4g	尖端部鈍い	チャート	
Fig.30-7	〃	〃	全長 2.9 全幅 1.6 全厚 0.4 重量 1.2g	凹基	姫島黒曜石	
Fig.30-8	〃	石錐	全長 2.7 全幅 2.8 全厚 0.5 重量 1.2g		頁岩	完存
Fig.30-9	攪乱層	〃	全長 3.1 全幅 2.0 全厚 0.3 重量 1.4g	把手部は扁平	姫島黒曜石	完存
Fig.30-10	表採	スクレーパー	全長 2.6 全幅 3.2 全厚 0.5 重量 5.1g		頁岩	
Fig.30-11	JIV層	〃	全長 3.6 全幅 8.1 全厚 1.3 重量 43g	礫皮面を残さない	サヌカイト	完存
Fig.30-12	表採	〃	全長 3.6 全幅 6.8 全厚 6.5 重量 16.2g	礫皮面を残す	頁岩	
Fig.30-13	JV層	牙形垂飾品	全長 4.0 全幅 1.3 全厚 0.5 重量 3.0g	下端部左側縁に刻み イノシシの牙を模倣? 両側穿孔	泥岩	
Fig.30-14	〃	板状垂飾品	全長 5.9 全幅 1.4 全厚 0.4 重量 6.15g	下端部は尖る 両側穿孔	砂岩	ほぼ完存
Fig.30-15	SD1・検出面	打製石斧	全長 15.1 全幅 6.0 全厚 3.3 重量 273.8g	片刃 基部側両側縁を加工	頁岩	完存
Fig.30-16	IX層	石錘	全長 3.5 全幅 4.1 全厚 1.2 重量 21.0g	扁平円礫素材 長軸側に抉り	砂岩	下半部欠失
Fig.30-17	J層	石核	全長 10.7 全幅 8.6 全厚 3.5 重量 281.0g	横長割片石核 主に左右両側から打割	頁岩	

2 弥生・古墳時代

調査区南部に形成されている遺物包含層のⅠ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅶ'、Ⅷ層中より土師器、須恵器、土製模造品、土錘、勾玉、叩石が出土している。これらの遺物はすべて他の時代の遺物と共に混在した状態で出土しており一括性は全く認められない。古墳時代の遺物は、Ⅴ層より最も多く出土している。他の層準からの出土は極少量であり図示し得たものは各層準1点のみである。(Fig. 34-1~11)

Ⅰ層出土の遺物：2は、丸底の甕或いは鉢の底部で、古式土師器に属する。

Ⅴ層出土の遺物：1は口縁部が片口状を呈し底部丸底の鉢である。3は手捏ね土器。4は須恵器提瓶の肩部細片、5は須恵器杯蓋、8・9はタルク製の勾玉、10は棒状の土錘である。1は古式土師器、3・5・8・9は5世紀代、4は6世紀後半に属する。10は弥生時代後期から認められるタイプである。

Ⅶ層出土の遺物：6は須恵器壺口縁部である。外面に断面三角形の突帯を巡らし突帯間に櫛描波状文を施している。精選された胎土を用い丁寧な横ナデ調整がなされている。初期須恵器に属する。

Ⅶ'層出土の遺物：11は砂岩の円礫を用いた叩石である。両主面中央部は叩打によるくぼみが見られ、側縁にも叩打痕跡が認められる。535gを測る。

Ⅷ層出土の遺物：7は土製模造鏡である。外縁の3箇所を欠損しているが全形状を知ることができる。直径7.1cmを測り、径5mmの鈕孔を穿っている。

SR3のX層及びX'層からは弥生土器、古式土師器、古代の須恵器が混在した状態で出土している。以下層準毎に遺物について述べるが、出土量の多い古式土師器については下記のように各器種毎に形態分類を行って述べることにする。

壺A類：器高10cm未満の小型の壺である。

壺B類：器高15cm内外を測る中型の壺である。口縁部が外反するものと直線的に伸びるタイプがある。

壺C-1類：二重口縁部を有する大型の壺で、口縁部が直線的に立ち上がるタイプである。

壺C-2類：二重口縁部壺で口縁部が朝顔状に外反するタイプである。

壺D類：口縁部が内湾気味に立ち上がる大型の壺である。

壺E類：所謂複合口縁部を有するタイプである。

甕A類：叩き成形で口縁部が「く」字状に外反するタイプである。

甕B類：叩き成形であるが口縁部の外反度が弱いタイプである。

甕C類：叩き成形痕の認められないタイプで、口縁部は総じて「く」字状に外反する。

甕D類：口縁部が直立気味に立ち上がるタイプで、中にはFig. 31-7のように口縁部が長く伸びるものも有る。

甕E類：胴部の張りが弱く、口縁部も緩やかなカーブを描いて外反するタイプである。

甕F類：内面ヘラ削りを施す薄手の甕、搬入品として存在する。

鉢A類：深い碗状のタイプである。

鉢B類：浅い皿状のタイプである。

鉢C類：口縁部が強く外反するタイプである。

鉢D類：口縁部が内湾するタイプである。

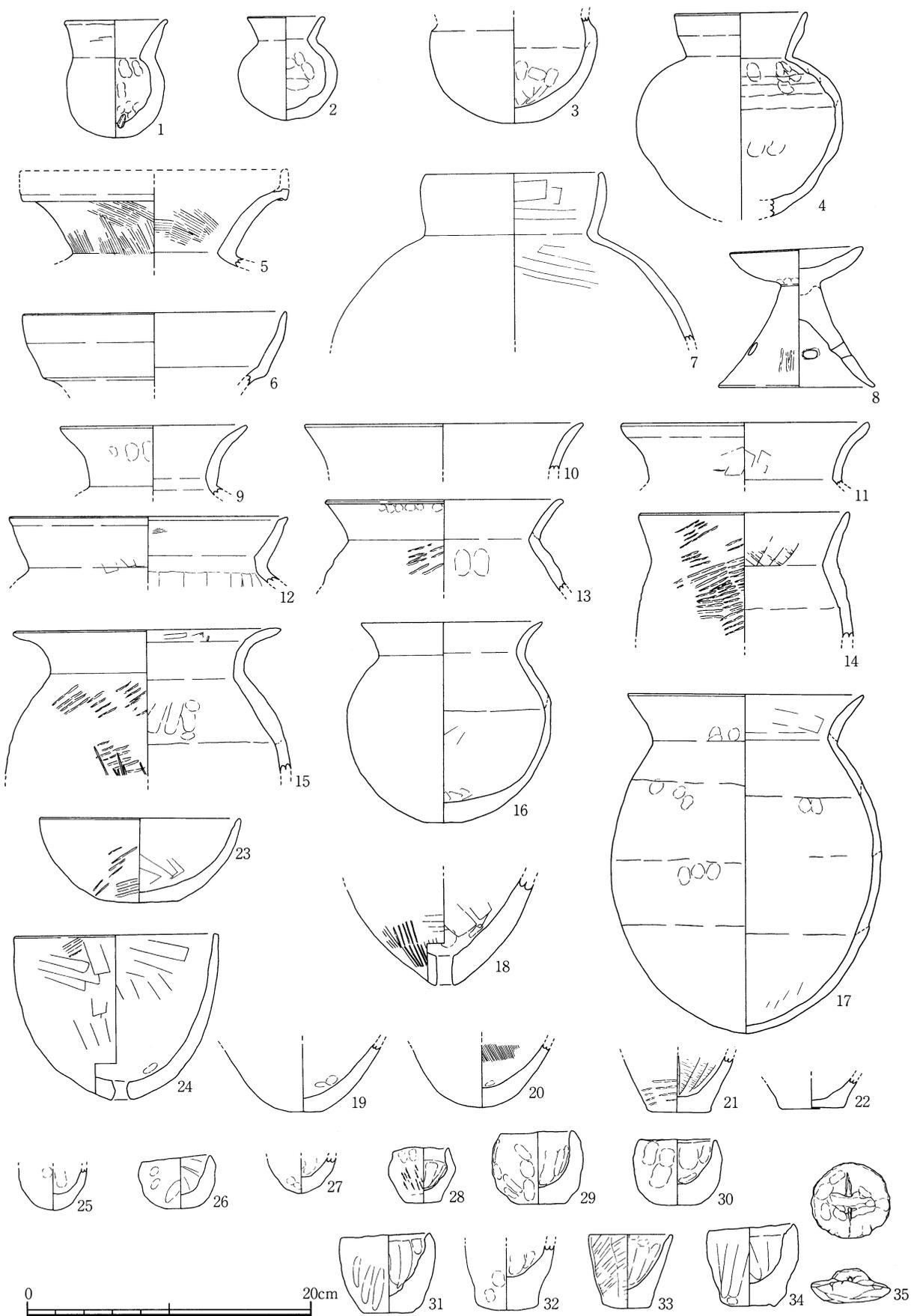


Fig. 31 第I区SR3X層出土遺物1

I区SR3X層出土の遺物：壺A類（1・2）・同B類（3・4・9）・同C類（5・6）・同D類（7）、甕A類（13・15）・同B類（14）・同C類（10・11・16・17）、鉢A類（23）、手捏ね土器A類（25～28）・同B類（29～34）、甌（18・24）、土製模造鏡（35）

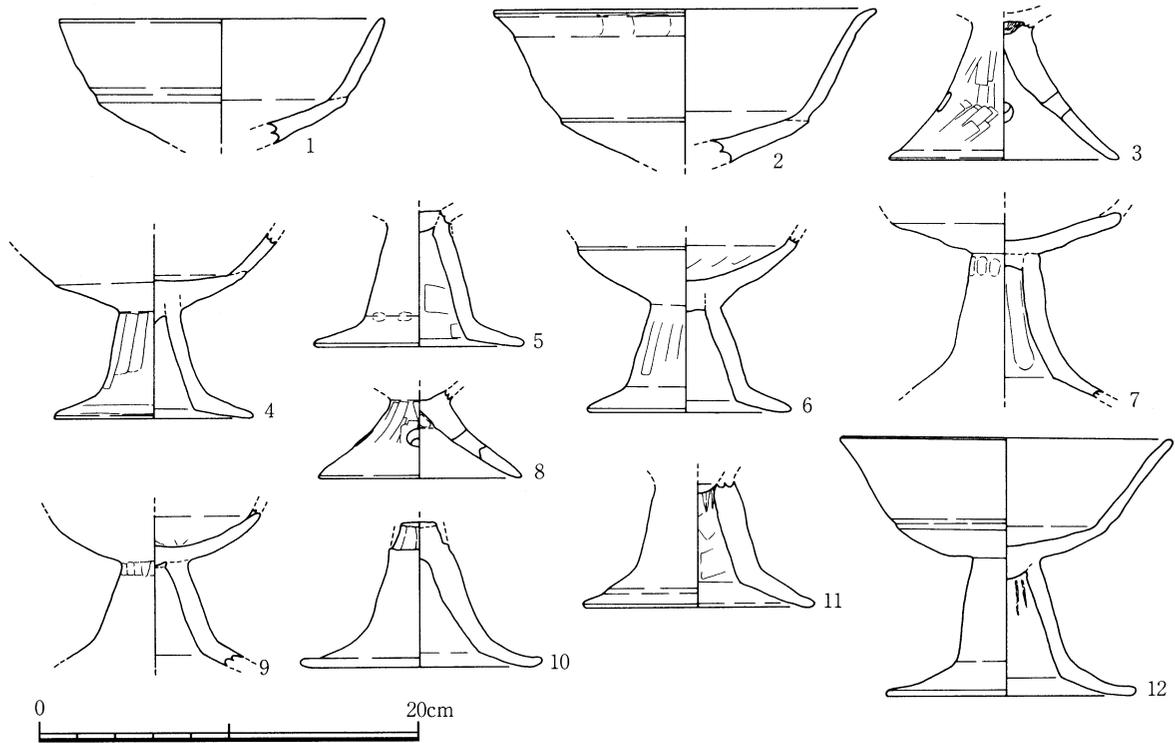


Fig. 32 第I区SR3 X層出土遺物2

高坏A類 (1・2・4・6・7・12)

鉢E類：台付鉢。

高坏A類：坏部が底部から稜をなして立ち上がり、脚は裾部が強く「ハ」字状に開くタイプとスカート状に開くタイプがある。

高坏B類：坏部が碗状を呈するタイプである。

手捏ね土器A類：器高4cm未満の小型品、丸底風の底部を有するものが多い。

手捏ね土器B類：器高5cm以上を測り、しっかりした平底を有するタイプである。

1) X層出土の遺物

①弥生土器：壺が1点、甕底部が2点、鉢が1点出土しており全て後期に属する。Fig. 31-5は、二重口縁壺で口縁部の立ち上がり部分が剥離欠損している。Fig. 31-21・22は甕底部でしっかりした平底を有し前者は叩き成形である。Fig. 31-23は鉢で叩き成形で平底である。

②古式土師器：壺、甕、鉢、甗、高坏、器台、手捏ね土器、土製模造鏡がある。

壺：A類 (Fig. 31-1・2)、B類 (Fig. 31-3・4・9)、C類 (Fig. 31-6)、D類 (Fig. 31-7) があり、壺B類は口縁部が外反するものと直線的に伸びるタイプがある。

甕：A類 (Fig. 31-13・15)、B類 (Fig. 31-14)、甕C類 (Fig. 31-10・11・16・17) がある。

鉢：A類が1点 (Fig. 31-23) が見られる。

手捏ね土器：A類 (Fig. 31-25~28) とB類 (Fig. 31-29~34) がある。

土製模造鏡：包含層Ⅷ層出土のもの (Fig. 34-7) に比べると一回り小振りであるが、鈕孔は

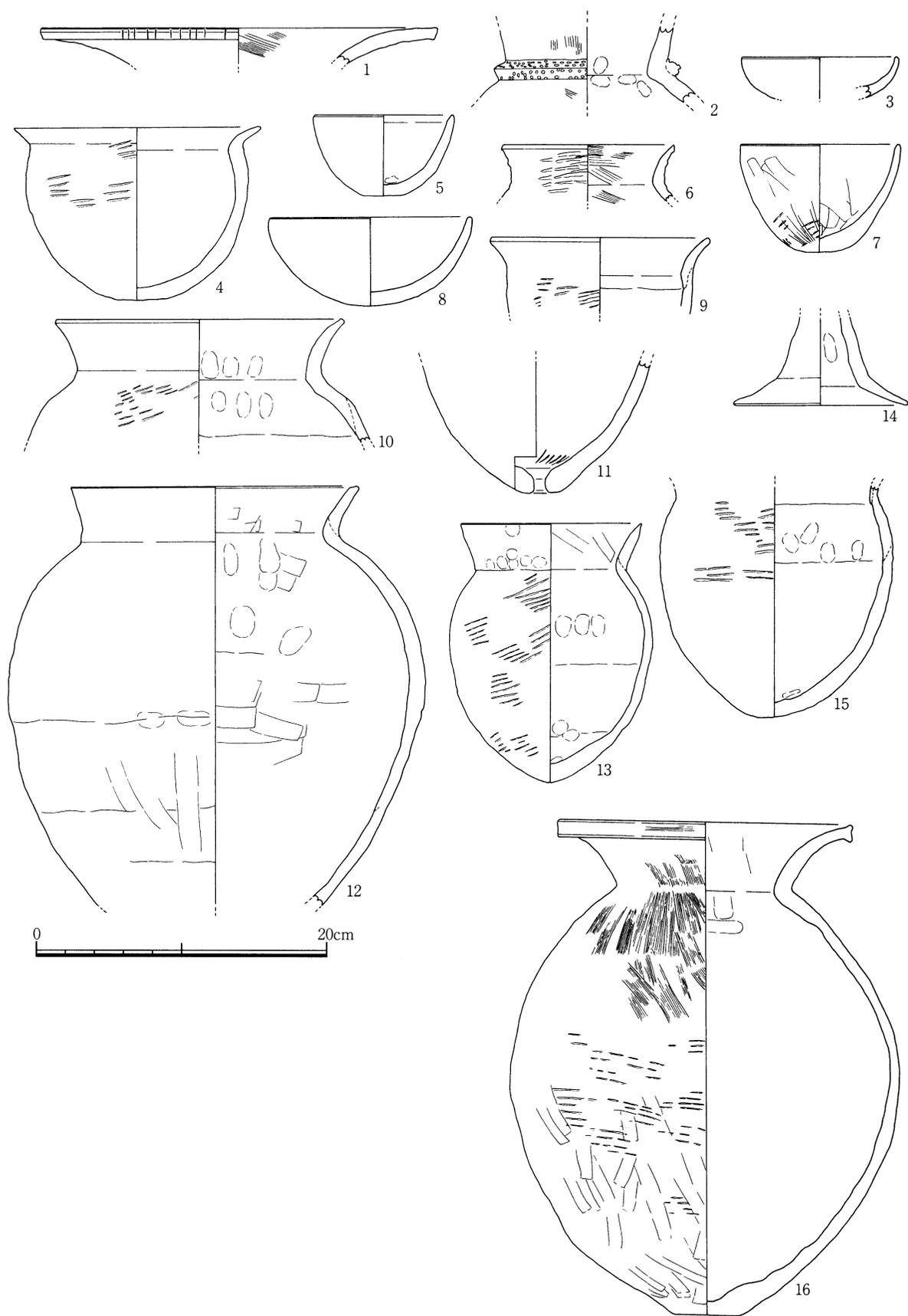


Fig. 33 第I区SR3 X'層出土遺物

弥生土器壺 (1·2·16)

古式土師器甕A類 (4·6·10·13·15) ·同B類 (9) ·同C類 (12)、鉢A類 (5·7·8) ·同B類 (3)、甑 (11)、高坏 (14)

貫通している。(Fig. 31-35)

甌：2点出土している。(Fig. 31-18・24) 両者共に叩き成形後ハケ調整を施し、焼成前に底部穿孔している。18は径1.1cm、24は1.4cmを測る。

高坏：A類 (Fig. 32-1・2・4・6・7・12) で占められている。10の脚部挿入部外面には面取りが見られ、11の内面には切り込みが認められる。

③須恵器：坏身の底辺部が1点出土している。包含層やSR2で見られる火礫を生じた坏や皿のグループと一致しており、8世紀中葉から後半頃に比定できる。(Fig. 50-3)

2) X層出土の遺物

①弥生土器：壺が3点出土している。(Fig. 33-1・2・16) 1はラッパ状に大きく開く口縁部を有し、口唇に刻み目を施している。2は頸部に断面三角形の太い突帯を貼付し突帯の全面に刺突を施している。16は胴部外面に叩き成形後ハケ調整を施した広口壺である。口縁部端部は強い横ナデにより上下に僅かに拡張されている。

②古式土師器

甕：A類 (Fig. 33-4・6・10・13・15)、B類 (Fig. 33-9)、C類 (Fig. 33-12) がある。12は肩部が大きく張り、口唇部は面をなす。13は尖底である。

鉢：A類 (Fig. 33-5・7・8) と鉢B類 (Fig. 33-3) がある。7は叩き成形である。

甌：Fig. 33-11。焼成前に穿孔し孔径8mmを測る。底部内面にはハケ原体による圧痕が巡る。

高坏：A類 (Fig. 33-14)。

③須恵器：坏蓋 (Fig. 50-1)、坏身 (Fig. 50-2)、甕体部片 (Fig. 50-4) が出土している。2は低い輪高台を有し、4の内面には同心円状の当て道具痕が明瞭である。(出原)

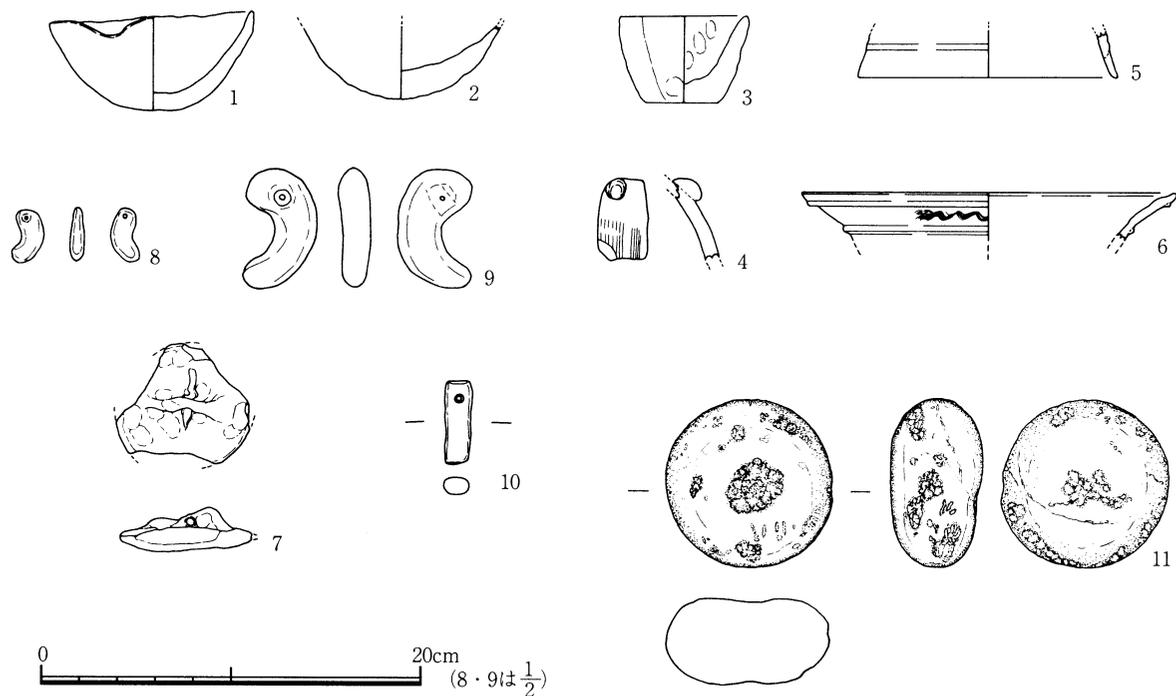


Fig. 34 第I区包含層古墳時代出土遺物

鉢A類 (1・2)、手捏ね土器B類 (3)、須恵器坏蓋 (5)・同提瓶 (4)・同壺 (6)、勾玉 (8・9)、土製模造品 (7)、土錘 (10)、叩石 (11)

Tab. 7 第I区古墳時代観察表1

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 31-1	SR3 X層	土師器 壺	7.0	8.2	6.9		風化礫の小礫を多く含む。灰白色。手づくね。外面ナデ調整。胴部内面に指頭圧痕顕著。内底に切り込みあり。	
〃 2	〃	〃	5.2	7.3	6.9		チャートの小礫を多く含む。黄橙色。外面ナデ調整。胴部内面指頭圧痕顕著。胴部の半分が黒斑で覆われている。	
〃 3	〃	〃			11.8		チャートその他の小礫、粗粒砂を多く含む。褐灰色。内面指頭圧痕顕著。	二次的な火を受けている。
〃 4	〃	〃	9.1	14.5			チャートその他の小礫、粗粒砂を含む。橙色。外面ナデ調整。内面指頭圧痕顕著	
〃 5	〃	〃	18.4				チャートの小礫を含む。赤褐色。二重口縁壺。内外面ハケ調整	
〃 6	〃	〃	18.4				頁岩、チャート、角閃石の粗粒砂を含む。二重口縁壺	
〃 7	〃	〃	12.4				頁岩、チャートの小礫、粗粒砂を含む。淡灰黄色。内外面ハケ調整。	
〃 8	〃	器台	9.1	9.7	10.9		頁岩、砂岩の小礫、粗粒砂を多く含む。暗灰黄色。接合部外面に指頭圧痕顕著。脚部外面下位にヘラミガキ。台部外面横ナデ調整。裾部に径1.1~1.2cmの円孔3個。	
〃 9	〃	壺	13.0				頁岩などの小礫を多く含む。口縁部内外面横ナデ調整。	
〃 10	〃	甕	19.4				頁岩などの小礫を多く含む。口縁部内外面横ナデ調整。	
〃 11	〃	〃	17.0				風化礫の小礫を多く含む。明褐灰色。口縁部内面ハケ調整後横ナデ調整、外面縦ハケ調整後横ナデ調整。	
〃 12	〃	〃	19.2				風化礫、チャートの小礫、角閃石その他の細粒砂を含む。明黄褐色。口縁部内外面横ナデ調整。	
〃 13	〃	〃	16.6				チャートの小礫、角閃石、雲母の細粒砂を含む。黄橙色。口縁部内外面縦ハケ調整後ナデ調整。胴部外面右上がり叩き。	外面煤ける。
〃 14	〃	〃	14.5				チャート、石英、砂岩の細粗粒砂を含む。橙色。外面右あがりの叩き風の仕上げ。口縁部内面右下がりのハケ調整後横ナデ調整。	
〃 15	〃	〃	18.8				チャートの細・粗粒砂を多く含む。灰黄褐色。口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面右上がりの叩き、不規則な沈線がタテ方向に入る。内面指ナデ調整。	
〃 16	〃	〃	12.5	14.1	14.0		砂岩、チャートの小礫を多く含む。灰白色。丸底。口縁部内外面横ハケ調整。胴部外面ナデ調整。底部内面へら状原体による。くもの巣状の圧痕あり。	
〃 17	〃	〃	16.4	23.8	18.8		チャート、頁岩の小礫を含む。灰白色。口縁部内外面横ハケ調整。胴部外面ナデ調整。内外面に粘土帯の接合痕跡を明瞭に認める。(5cm幅)	
〃 18	〃	甕					チャート、その他の小礫、粗粒砂を含む。橙色。焼成前底部穿孔径1.1cm。外面叩き後縦ハケ調整。	
〃 19	〃	甕底部					赤色、乳白色の風化礫を多く含む。橙色。丸底風。	
〃 20	〃	〃					頁岩、チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。丸底。内面右下がりのハケ調整。	

Tab. 8 第I区古墳時代観察表2

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 31-21	SR3 X層	甕底部				4.5	チャート、砂岩の小礫を含む。黄褐色。外面叩き、内ハケ状原体によるくもの巣状の圧痕。	外面煤ける。
〃 22	〃	〃				4.4	チャートの小礫を含む。	
〃 23	〃	鉢	14.0	6.0		5.6	頁岩などの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。外面右上がりの叩きが部分的に認められる。大半の部分は、ひび割れ状亀裂顕著。内ナデ調整。	
〃 24	〃	甌	14.0			11.6	チャート、砂岩の小礫を多く含む。橙色。焼成前内外から穿孔（径1.4cm）外面叩き後ハケ調整。	
〃 25	〃	手捏ね土器					砂粒をほとんど含まない。橙色。外面亀裂。	
〃 26	〃	〃	4.8	3.8			チャート、砂岩などの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。	
〃 27	〃	〃					砂粒を余り含まない。橙色。	
〃 28	〃	〃	4.0	3.9		2.4	チャート、その他の細粗粒砂を含む。	
〃 29	〃	〃	4.9	5.1		3.6	チャートの粗粒砂、雲母、角閃石の細粒砂を含む。内指ナデ調整、外面亀裂顕著。	
〃 30	〃	〃	5.3	4.6			チャート、長石、石英、角閃石の細粗粒砂を多く含む。内外面に亀裂顕著。	
〃 31	〃	〃	6.0	5.5		3.5	風化礫の小礫、各寸隻、長石、雲母の細粗粒砂を含む。赤褐色。亀裂顕著。	
〃 32	〃	小型鉢				4.3	石英、長石、その他の細粗粒砂を多く含む。黄橙色。外面亀裂顕著。	外面煤ける。
〃 33	〃	〃	5.3	5.2		3.3	チャート、砂岩などの小礫を含む灰黄褐色。内指頭によるナデ調整、外面叩き後右下がりのハケ調整。	
〃 34	〃	手捏ね土器	5.9	5.8		3.4	砂岩の小礫、角閃石、長石の細粗粒砂を含む。橙色。外面亀裂顕著。	
〃 35	〃	土製鏡					チャート、石英などの細粗粒砂を含む。黄褐色。直径5.5cm、厚さ2.5cm、	
Fig. 32-1	〃	高杯	17.0				風化礫の小礫、チャート、その他の粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。外面横ナデ調整、底部内面ヘラミガキ。	
〃 2	〃	〃	19.8				角閃石、風化礫の粗粒砂を多く含む。灰黄褐色。内外面横ナデ調整。	
〃 3	〃	〃				12.0	頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。脚部は直線的に下降、径1.1cmの円孔3つ。脚部外面は原体幅の狭いハケ調整。	
〃 4	〃	〃					頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。分割成形の状況をよく観察できる。脚部は内面に稜を有して強く外反。柱状部は板状工具でタテ方向のナデ調整。他の部位は横ナデ調整を基調とする。	
〃 5	〃	〃					石英、風化礫の小礫、その他の粗粒砂を含む。橙色。柱状部内面弱い削り。	
〃 6	〃	〃				10.6	石英、長石の小礫、細粗粒砂を多く含む。橙色。杯部内底にハケ原体による圧痕あり。外面はナデ調整を基調とする。	

Tab. 9 第I区古墳時代観察表3

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 32-7	SR3 X層	高杯					チャート、石英、頁岩の砂粒を多く含む。橙色。分割成形の状況をよく観察することができる。内外面ナデ調整を基調とする。	
〃 8	〃	〃				10.6	チャートの小礫、その他の砂粒を多く含む内外面、縦ナデ調整。径1.5cmの円孔3つ。	
〃 9	〃	〃					チャート、長石の小礫、細粒砂を多く含む。灰黄色。杯部内底くもの巣状の圧痕あり。内外面ナデ調整を基調とする。	
〃 10	〃	〃				12.8	チャート、風化礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。杯部挿入部多角形状に面取り、内外面ナデ調整。	
〃 11	〃	〃				12.0	チャート、風化礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。杯部挿入部多角形状に面取り、内外面ナデ調整。5つの切り込みあり。	
〃 12	〃	〃	17.2	13.6		13.0	チャート、頁岩の小礫を多く含む。にぶい橙色。杯部内底ヘラミガキ、他の部位はハケ調整。	
Fig. 33-1	SR3 X'層	弥生土師器壺	27.0				チャートの小礫、その他の細粗粒砂を含む。にぶい橙色。口唇部刻み。内面ハケ調整、外面ナデ調整。	
〃 2	〃	〃					砂岩の小礫、角閃石、雲母、長石などの細粗粒砂を多く含む。褐色。頸部下端に刺突を施した断面三角形の太い突帯を貼付。	
〃 3	〃	古式土師器鉢	10.6			3.0	チャート、頁岩の小礫を含む。にぶい褐色。ナデ調整。	
〃 4	〃	〃	16.8	11.9			小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。叩き成形、口縁部叩きだし、丸底。	
〃 5	〃	〃	9.4	5.5		3.8	赤色風化礫を含む。にぶい黄茶色。内外面ナデ調整。	
〃 6	〃	甕	11.6				頁岩、砂岩、チャートなどの小礫、粗粒砂を多く含む。黄灰色。口縁部叩きだし。	外面煤ける。
〃 7	〃	鉢	10.6	7.4			チャート、頁岩の小礫を含む。橙色。平底風丸底。叩きが底部付近に残る。内外面ハケ調整。	
〃 8	〃	〃	13.6	6.1			チャート、長石、その他の粗粒砂を含む。内外面ナデ調整。	
〃 9	〃	甕	14.8				頁岩、チャートの小礫を含む。灰黄褐色。胴部叩き成形。口縁部の接合痕が明瞭に見られる。	
〃 10	〃	〃	18.3				砂岩、チャートの小礫、雲母、角閃石の細粒砂を含む。灰黄褐色。内面指頭圧痕顕著。胴部は叩き後ヘラミガキ	外面煤ける。
〃 11	〃	甕					頁岩その他の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。内底はハケ状原体による圧痕が巡る。内外面ナデ調整。孔径8mm。	
〃 12	〃	甕	19.5				長石、頁岩などの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。口縁部内外面ハケ調整後横ナデ調整。口唇部は広い面をなす。頸部下端に接合痕を認める。	

Tab. 10 第I区古墳時代観察表4

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 33-13	SR3 X'層	甕	12.4	17.8	14.0		チャート、砂岩の小礫を含む。にぶい 橙色。口縁部内外面ナデ調整。口縁部 の接合痕跡が明瞭に見られる。胴部外 面右上がりの叩き。尖底。	外面燻ける。
〃 14	〃	高杯				11.9	チャート、石英、頁岩などの小礫、粗 粒砂を含む。橙色。脚部内面右から左 へのヘラ削り後ナデ調整。	
〃 15	〃	甕					頁岩、その他の小礫、粗粒砂を多く含 む。橙色。叩き成形、胴下半はナデ消 す。内面に分割成形痕跡を明瞭にとど める。	
〃 16	〃	弥生土器 壺	20.0	34.0	26.4	4.4	チャートの粗粒砂、小礫を多く含む。 灰白色。口唇部強い横ナデ調整により 上下に拡張される。胴部外面上半縦ハ ケ調整、下半は叩き痕が残る。	
Fig. 34-1	V層	土師器 鉢	10.5	5.0			長石、チャートその他の小礫、粗粒砂 を含む。橙色。内外面ナデ調整。	
〃 2	I層	土師器 甕					頁岩、長石、石英その他の細粗粒砂を 含む。橙色。丸底。	
〃 3	V層	手捏土器	6.7	4.5		3.6	頁岩、長石粗粒砂を含む。橙色。	
〃 4	〃	須恵器 提瓶					石英粒子を含む。灰色。外面カキ目、 肩部にわずかに鍵状を呈する把手を貼 付。	
〃 5	〃	須恵器 高杯蓋	13.4				石英細粗粒砂を含む。灰白色。内外面 横ナデ調整。	
〃 6	VII層	須恵器 壺	19.4				精選された胎土。灰色。内外面横ナデ 調整。外面2条の断面三角形の突帯を 貼付。突帯間に櫛描波状文を施文。	
〃 7	VIII層	土製模造 鏡					チャートその他の細粒砂を含む。橙色。 指頭圧痕顕著。直径7.1cm、	
〃 8	V層	勾玉					タルク製。黒色。全長1.4cm。孔径0.1 cm。	
〃 9	〃	〃					タルク製。淡い緑色。全長3.2cm、孔 径0.1cm。	
〃 10	〃	土錘					石英その他の細粒砂を含む。棒状を呈 し断面楕円形。長さ4.3cm、孔径3mm。	
〃 11	VII'層	叩石					砂岩。径8.9cm、厚さ4.6cm、重さ535g。	

3 古代・中世

遺構からの出土遺物は、掘立柱建物跡（SB）・流路跡（SR）・ピット群から出土しており、主に流路跡からのものが多い。掘立柱建物跡では、SB7を除くすべてのSBからは細片ではあるが、遺物が出土している。SR1は鎌倉時代を中心とした遺物が出土しているが、特に木製品の出土は注目される。自然流路という性格上と下層のSR2・3が同じ位置で流れていることから古墳時代から平安時代を中心とした遺物類の混入も認められる。これら混入品の中で、細片については特に図示していない。出土遺物の中で、土師器の食膳具については形態分類を行ったが編年的位置付けも含めて第6章の考察で行うことにする。ここでは、各遺構ごとに出土遺物の内容を説明していくことにする。

1) SB1 (Fig. 35-1・2)

1・2はSB1より出土した土師器の底部である。1は色調は黄灰色で全体に薄い作りである。底部外面には粘土紐痕が残存している。2は橙色の色調で全体に磨耗が著しいが共に坏になると思われる。

2) SB4 (Fig. 35-3~5)

3~5はSB4から出土した遺物である。3・5は土師器の坏の底部で色調は橙色、全体に磨耗が著しい。4は青磁の碗の口縁部片である。内面には劃花文の一部が見られる。オリーブ色の薄い釉が施されており細かい貫入がはいる。

3) SB5 (Fig. 35-6・7)

6・7はSB5から出土した土師器の底部である。6の色調は橙色で磨耗しているが、底部に粘土紐痕がみられる。7の色調は灰白色で底部には粘土紐痕がみられる。

4) SB8 (Fig. 35-8~10)

8~10がSB8より出土した遺物である。8は瓦器碗の底部である。底部外面には形骸化した輪高台が貼り付けられている。全体に粗雑化している。9は白磁の口禿の皿の口縁部である。灰白色の釉が薄く施釉されているが、口縁端部の釉は掻き取っている。Ⅸ類に属する。10は青磁の碗である。淡オリーブ色の釉が高台外面まで施釉されており、高台畳付、高台内面には施釉されていない。内面見込みには蛇の目釉剥ぎを施し、釉剥ぎ部分には重ね焼きの痕跡が見られる。14世紀から15世紀前半代に位置づけられる。

5) SB10 (Fig. 35-11~13)

SB10からは11~13の遺物が出土している。11は砥石片である。12は瀬戸の灰釉陶器の口縁部である。口縁部は「く」の字に屈曲し端部は丸くおさめる。外面と内面途中まで施釉されている。13は石製の碇である。砂岩質で長径32cm、短径18cm、重量は20kgを測る。柱穴の底から出土しており、碇として使用した後は柱穴の根石として再利用されたと考えられる。(竹村)

6) SR1 (Fig. 36~44)

土師器、須恵器、東播系須恵器、瓦器、貿易陶磁、土製品、石・金属製品、木製品類が出土している。土師器の一部と須恵器、石器に関しては、SR2・3からの混入品と考えられる。

土師器 (Fig. 36-1~22)

土師器は、坏・皿・甕・羽釜と古墳時代の手捏ね土器が出土している。坏は、すべて回転台によ

る成形で平らな底部を持つものと高台を有するもの、円盤状の高台を持つものに大きく形態が分かれる。

1~4は、細片で摩耗が著しいが、平底に分類される坏である。底部の切り離しは、1~3がヘラ切

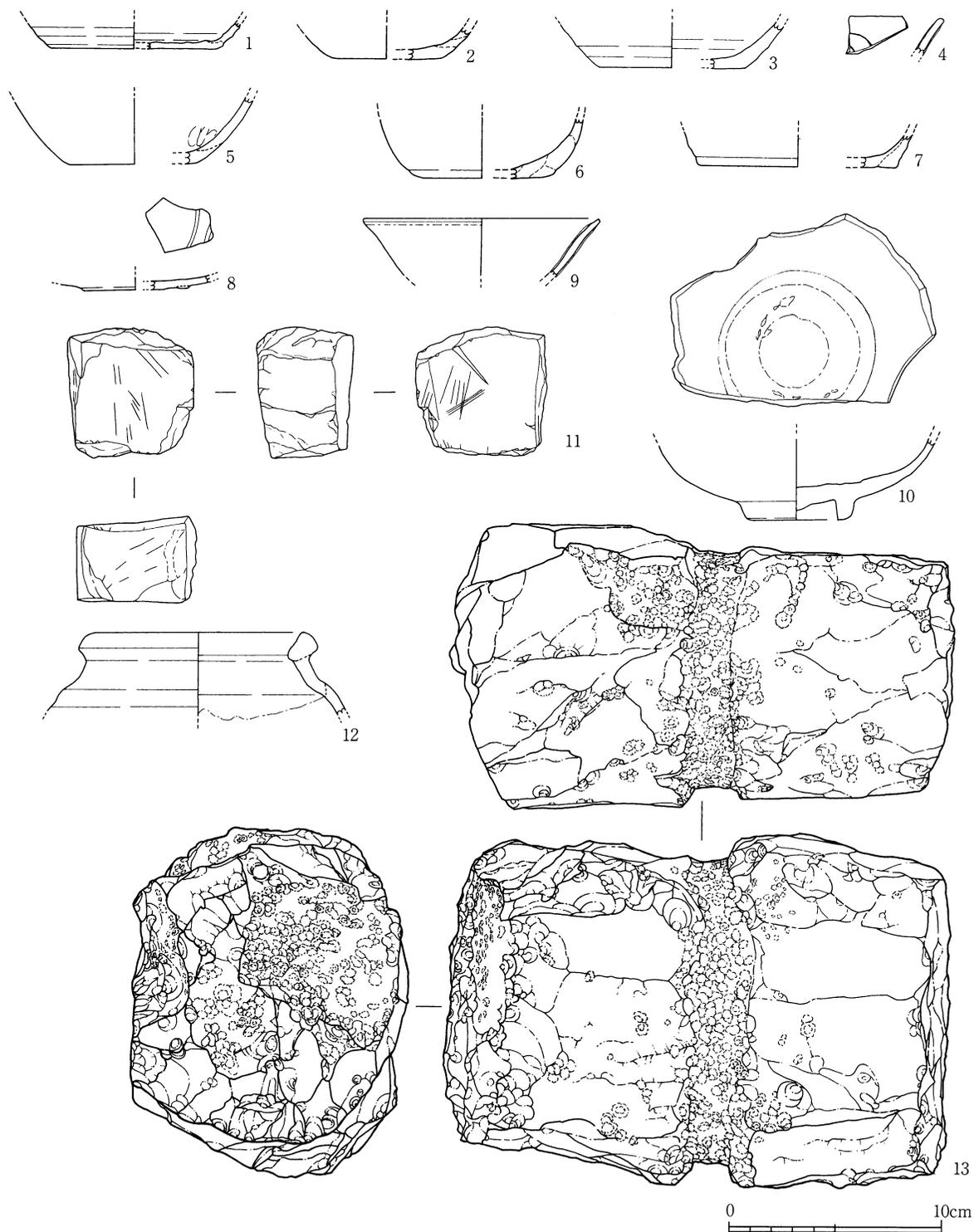


Fig. 35 SB出土遺物

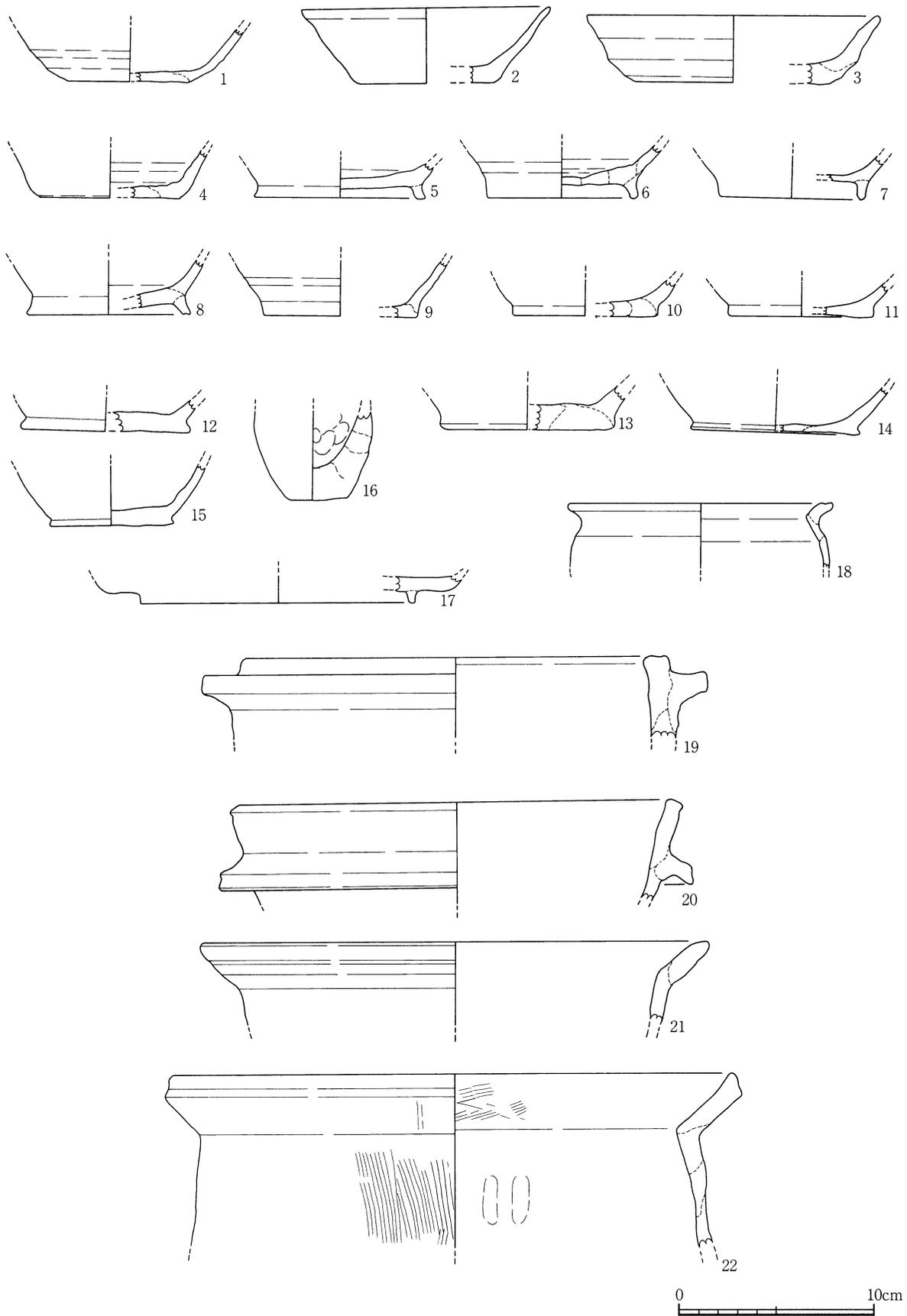


Fig. 36 SR 1 出土遺物 1

り4は回転糸切りである。形態の特徴としては、2のように底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものと、3のように器壁が厚く口縁部が外反するものが認められる。5～8は高台を有する坏であるが、底端部に高台を貼付し「ハ」の字状に開くものが多い。口縁部が欠損しているものがほとんどであるが体部は直線的に外上方に立ち上がる。9～15は円盤状の底部から粘土紐を巻き上げ回転台成形による坏類である。底部外面は、ヘラ切りによる痕跡が残るものもある。しかし中には13・14のように、円盤状の底部成形の際に残る粘土紐渦巻き痕跡も確認できる。16は、SR3からの混入で古墳時代土師器の手捏ね土器である。

17は底部破片であるが高台付皿と考えられる。底部端は、輪高台の外側2cmほど水平に張り出している。調整は摩耗が著しく不明である。18は、土師器甕で球形の胴部から肥厚気味の短い口縁部が外反する。口縁上端部を水平な口唇面とし、内面に浅い凹線が施される。19は羽釜の口縁部破片であるが、口縁上端より0.8cm下方の位置に断面台形状の鏝を有する。水平な口唇面の中央には浅い凹線が施される。内外面横ナデで内面の一部に指頭圧痕が残る。20も同じく羽釜の口縁部破片で、口縁は上胴部よりも厚みを増して外傾して立ち上がる。口縁端部は水平で、2.4cm下方に鏝を有する。口縁部内外面は横ナデで上胴部は横方向のヘラ削りが施される。鏝の上縁から口縁にかけて煤が付着する。21・22は、口縁部破片であるが長胴の甕で口縁部は「く」の字状に外反する形態である。21は、口縁部がやや肥厚し外面に浅い凹線状の窪みが観察でき、内外面横ナデが施される。22は、口縁端部がやや肥厚し上方にややつまみあげている。調整は、口縁部内面であるが一部に横斜方向のハケ目を施し、外面は胴部から口縁にかけてすべて縦方向のハケ目が施される。胎土は頁岩質と見られる灰黒色の砂粒を散見する。

須恵器・瓦質土器 (Fig. 37-1~15)

1は、坏蓋である。水平な天井部中央部に宝珠形つまみを付ける。中央部は平坦で、蓋縁は斜降し端部は丸くおさめる。内端面に浅い沈線が回り全体的に回転ナデ調整である。2～4までは皿である。2は底部中央が欠損するが平底で、口縁部にかけて直線的に立ち上がり平らな口唇面がわずかに内斜する。回転ナデ調整で、外底面にはさまざまな方向のナデ痕や擦痕が認められる。3も底部中央が欠損するが、底部端から緩やかな内弯弧状を呈し口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめられ直下の内外面に、一条の凹線が施される。摩耗が著しいが回転ナデ調整である。4は小破片であるが、復元口径が広い。平らな底部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がり端部は上方につまみあげた形態を呈する。回転ナデ調整である。5・6は須恵器坏である。5は、口縁部が欠損するが底部は平らで体部は直線的に立ち上がる。内面は横方向のナデが施され、外底の切り離しは右旋の回転糸切りである。糸切り痕の上には平行な多細線の板状圧痕が残る。酸化炎焼成の部分が多いが焼成は良好である。6は、高台付坏である。底部中央が欠損するが平坦な底部から屈曲し口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。高台は断面方形状で底端部から内傾し付けられる。外底面はヘラ切り痕が残る。回転ナデ調整であるが、内面には斜位のナデも認められる。

7～12は、甕片である。7は、胴部細片であるが外面には約4mm単位の格子叩き目、内面には同心円紋叩き目が施される。8の外面は、刻み目の鋭い平行叩き目が縦・横位に施される。内面は同心円紋を留めているがその後ナデている。9は甕の肩部片である。内外面の大半に二次被焼の煤が付着する。

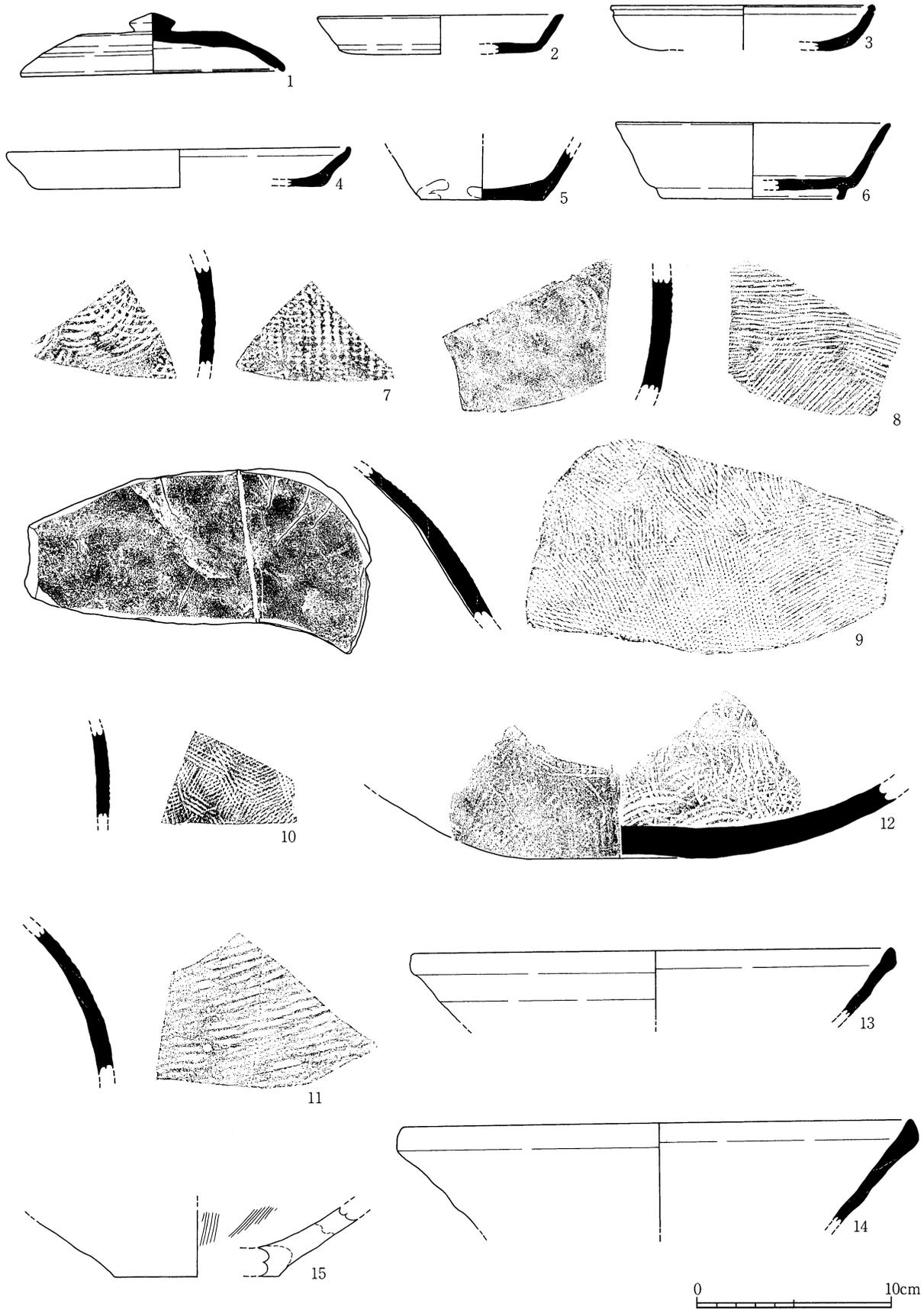


Fig. 37 SR 1 出土遺物 2

二次被焼の後、内面に斜直の深い刻線が鋭利な工具によって施される。外面には、刻み目の鋭く狭い平行叩き目を斜交している。内面は同心円紋をナデ消している。10は器壁が薄い胴部破片で、外面には刻み目の鋭い平行叩きを斜交している。内面の同心円紋をナデ消している。11は、甕の上胴部片と見られる。外面にはやや目の荒い平行叩きであり内面は当て具の痕跡をナデによって擦り消している。外面に自然釉が残る。12は、底部の中央がやや窪んでいる。外面に平行叩き目を施し、内面には同心円紋を留める。外底の中央付近に少量の窯屑が溶結する。

13・14は、東播系須恵器のコネ鉢である。13は体部中位以下が欠損しており、体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は肥厚し上方に拡張される。14も同様であるが、焼成は13と比較すると悪い。15は瓦質土器の播鉢である。底部片であるが、復元すると底径の小さい播鉢片である。内底縁部から体部内面にかけては、一単位8条若しくはそれ以上の播溝が施されている。体部外面にかけては横ナデ調整が施される。

瓦器 (Fig. 38-1~19)

1~19は畿内産の瓦器製品である。瓦器小皿(1)と碗(2~19)が出土している。中でも和泉型のものが大半を占めており若干楠葉型のものも出土している。1は小皿で、口縁はやや肥厚し端部は丸くおさめる。底部は指頭圧痕が残り、口縁部は横ナデが施される。2は、楠葉型の碗である。復元口径が14.6cmを測り体部から口縁部にかけて内弯して外上方に立ち上がる形態を呈する。口縁直下内面に浅い沈線が施される。体部外面には、斜行する結合痕跡が認められ、これは口縁下から底部にかけて斜め方向に走る。内面は盛り上がりを見せる。器表は摩耗が著しく調整の詳細は不明であるが口縁部は指頭圧痕が残る。

3~19は和泉型瓦器碗である。3は復元口径12.9cmで、体部から口縁部にかけて壁厚を均等とし、緩やかに内弯して外上方に立ち上がり端部は丸くおさめる。体部外面中央に粘土紐巻き上げと考えられる痕跡が認められる。口縁部は内外面横ナデで、体部は指頭圧痕が残り内面は間隔の開く圏線ヘラ磨きが施される。4は復元口径13.1cmで、底部から口縁部にかけて内弯して立ち上がる。口縁端部は若干肥厚し、外底面には細小な輪高台を付ける。内面は、平行方向のナデを施した後口縁部を横ナデし、さらに口縁部から見込みにかけて一連の渦巻状のヘラ磨きを疎間に加えている。5は復元口径12.8cmで、器壁は厚く口縁端部を丸くおさめる。高台は細く小さな断面逆三角形形状を呈し、高台内部の底壁は水平に近い。内面の手法は、不定方向のナデを全面に施した後見込みに連結輪状と考えられるヘラ磨きを加え、その後口縁から見込みにかけて渦巻状の暗文を加えている。外面は、体部を指頭圧痕が残り口縁部については横ナデとし、その直下に一圈のヘラ磨きが施されている。高台を貼付した後、その周囲にナデ調整を行う。6は口径13cm、器高3.2cmを測る。底部から体部にかけて、緩やかに内弯しながら外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。手法は、内面底部を縦横ナデ、体部は横斜ナデ、口縁部を横ナデした後口縁部から見込みにかけて渦巻状のヘラ磨きを加える。外面については、体部を指頭圧痕が残り口縁部を横ナデする。7は、復元口径12.7cmを測りやや深めの碗である。体部に、内弯気味に外上方に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。内面は横ナデが施された後、縦横格子状にヘラ磨きが施される。外面は口縁部横ナデで体部には指頭圧痕が残る。

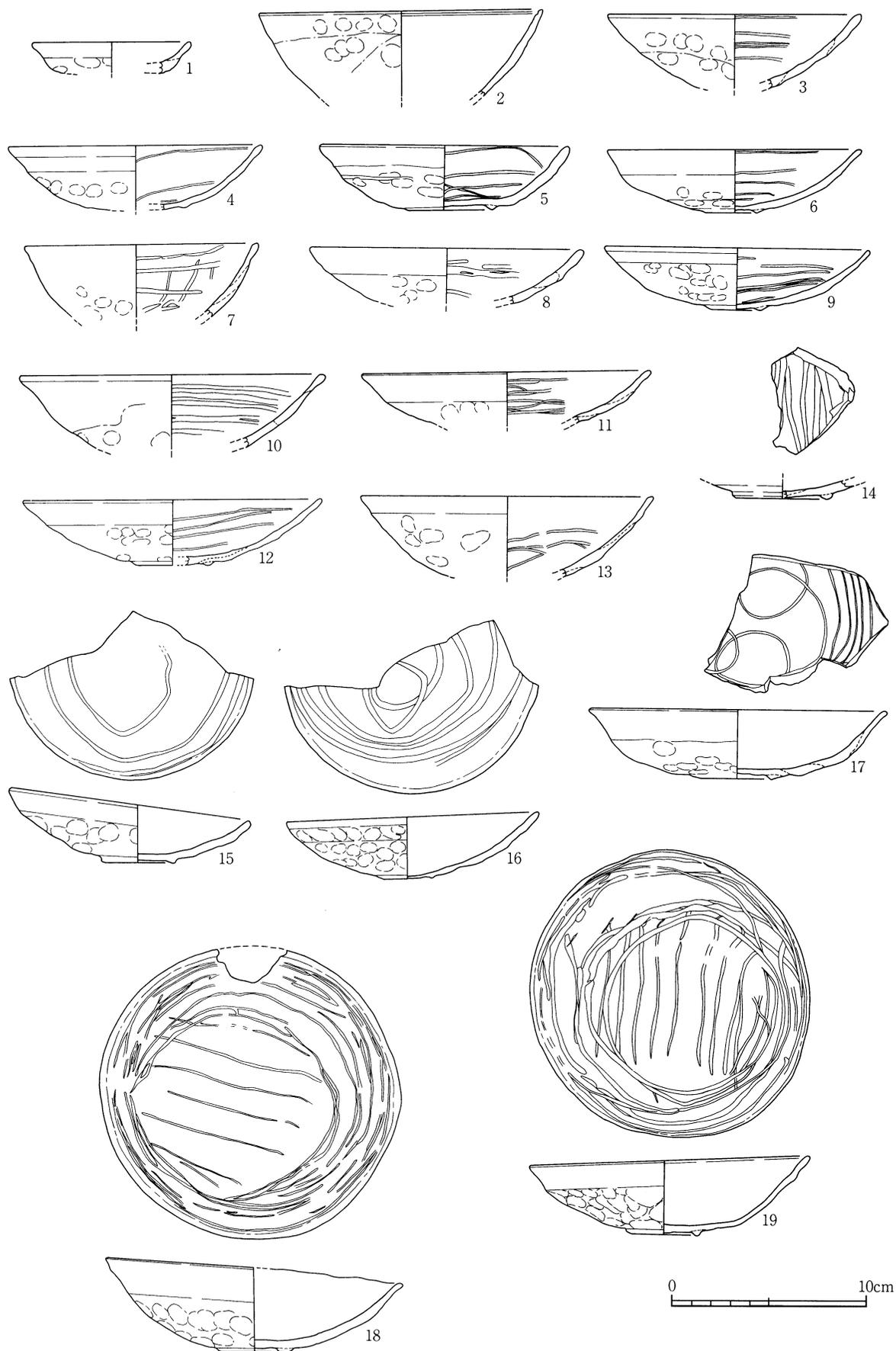


Fig. 38 SR 1 出土遺物 3

8は、体部から口縁にかけて器厚を均等に内弯して外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面は、横ナデ後円圏状のヘラ磨きが施される。外面は、体部を指頭圧痕の状態に留め口縁部は横ナデが施される。9は、復元口径13.6cm、器高3.1cmを測る。形態は、底部中央から口縁にかけて緩やかな内弯弧状で外上方に立ち上がる。底部は細小な断面三角形状の高台を付ける。内面は、底部を平行ナデ、体部を不定方向ナデ、口縁部を横ナデした後、口縁部から体部にかけて渦巻状のヘラ磨きで見込みは連結輪状と考えられる暗文を加える。外面については、体部に指頭圧痕が残り口縁部は横ナデする。10は、復元口径15.8cmを測り口径が広い。口縁に向かうに従い器厚を減じ端部は若干肥厚し丸く整える。内面は円圏状のヘラ磨きが施され、外面は体部に指頭圧痕が残り口縁部は横ナデされる。11は復元口径14.6cmを測り、口縁部はやや外反する。内面は円圏状のヘラ磨きを施した後横斜めのヘラ磨きを重ねる。外面については体部に指頭圧痕が残り口縁部は横ナデである。12は復元口径13.8cmで、体部外面に小さな縦書きの墨書の一部が見られる。内面は、口縁部から見込みにかけて渦巻状のヘラ磨きが施される。外面は、口縁部が横ナデで体部から底部にかけて指頭圧痕が残り底部は細紐状の高台を付ける。13は、復元口径14.9cmでやや深めの碗である。器壁が口縁部になるとやや薄くなる。内面は、体部下方を縦方向のヘラ磨き、体部上方から口縁にかけて横方向のヘラ磨きが施された後、見込みは連結輪状と見られる暗文を重ねる。外面については口縁部を横ナデし、体部には指頭圧痕が残る。14は底部の破片である。輪高台貼付の断面形状は、部分によって逆台形状、あるいは逆三角形を呈する。見込みは、平行線条の暗文を重ねている。15～19までは、全体の形態がわかる。15は口径12.8cmを測り、器高は3.0cmである。器壁の厚みは均等で、高台は断面逆三角形を呈し位置的に中心を離れている。内面は、平行状や円圏状のヘラ磨きが施される。外面は体部に指頭圧痕が残り、口縁部は横ナデとする。16は口径13.2cm、器高3.2cmである。器壁の厚みは、底部に比して上方の器壁が薄い。断面が逆三角形を呈する径2.7cmの小さな輪高台を付ける。内面については、口縁部から体部にかけて渦巻状のヘラ磨きが施され、見込みは連結輪状の暗文を重ねる。外面は指頭圧痕が残り口縁部は横ナデである。17は口径15.3cmで器高3.6cmであり、やや大型の製品である。口縁部に沿って器壁の厚みを減じ、やや外反する形態を有する。内面底部から口縁部にかけて円圏状のヘラ磨きと見込みには連結輪状の暗文が施される。外面は他の製品と変わらないが口縁部の横ナデが強く施される。18は口径15.4cm、器高4.3cmを測り17よりやや器高が高い。底部から体部にかけて器壁の厚みを均等とするが、口縁部に沿って減厚する。体部から口縁部にかけては円圏状のヘラ磨きが施され、見込みは平行線状の暗文が重なる。19は口径14.4cm、器高3.8cmと18に比べてやや小さい。内外面の調整は18と変わらない。

貿易陶磁器・緑釉陶器 (Fig. 39-1~6)

貿易陶磁器は青磁の碗片が4点と、緑釉陶器は細片2点が出土している。1は、青磁蓮弁文碗である。復元口径16.2cmを測り、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる形態を呈する。外面は片切彫りの手法によって弁稜を浅く浮き立たせ弁先の輪郭を鋭くしている。2は、青磁劃花文の碗である。復元口径15.0cmで、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部外面は無文で、内面は口縁端下に圏線が施されその下方に草葉文の一部と考えられる文様を劃花される。3は、底部破片であるが劃花文の碗である。底部の器壁は厚く、高台は浅く掘り出され断面方形状を呈し畳付けは広い。

釉は高台を乗り越えて内面の一部までかかるが、外底は無釉である。見込みは、片切彫りの文様が施される。4は、体部の破片であるが青磁劃花文碗である。体部外面は無文で、内面には浅い片切彫り手法の文様が見られる。5・6は摩耗が著しいが、軟質緑釉陶器の破片である。5はわずかに内弯気味に外傾する形態を呈するが、器種は不明である。内面の所々に着釉を留め釉層は極めて薄く、灰緑色を呈し微細な貫入が入る。6も器種は不明である。内弯気味に外傾する体部破片である。既に外面の施釉は完全に剥落しており、内面の所々に着釉を留める。釉には微細な貫入が入る。

木製品 (Fig. 40~44)

木製品は、SR1の遺構からのみ出土している。出土状況は、溝の上・中層に土器・陶磁器とともに廃棄された状況である。各製品の用途については、欠損している部分が多いためすべてを詳細に分類することが不可能である。また部材の一部や、破損した一部品については、製品名を判断することが困難であり誤認している点はお許し願いたい。ここでは、生活用具、服飾具、信仰・呪術具、籠編物、その他と大きく分類するに留め概略を述べていくことにする。法量等は、木製品一覧表を参照願いたい。

生活用具と考えられる製品は、箸状木製品、漆椀、曲物などである。箸状木製品 (Fig. 41-1~15) は、出土点数が比較的多い。ほとんどの製品は、木片を小割りにした後、棒状に整形し両端を細めたものが多い。細く丸棒状に削り込み両端を尖らすように2cmの範囲で深く削り込んでいる。削りは極めて雑である。断面は不整形なものが多く、厚さ0.3~0.5cmを測る。今回出土した箸状木製品の

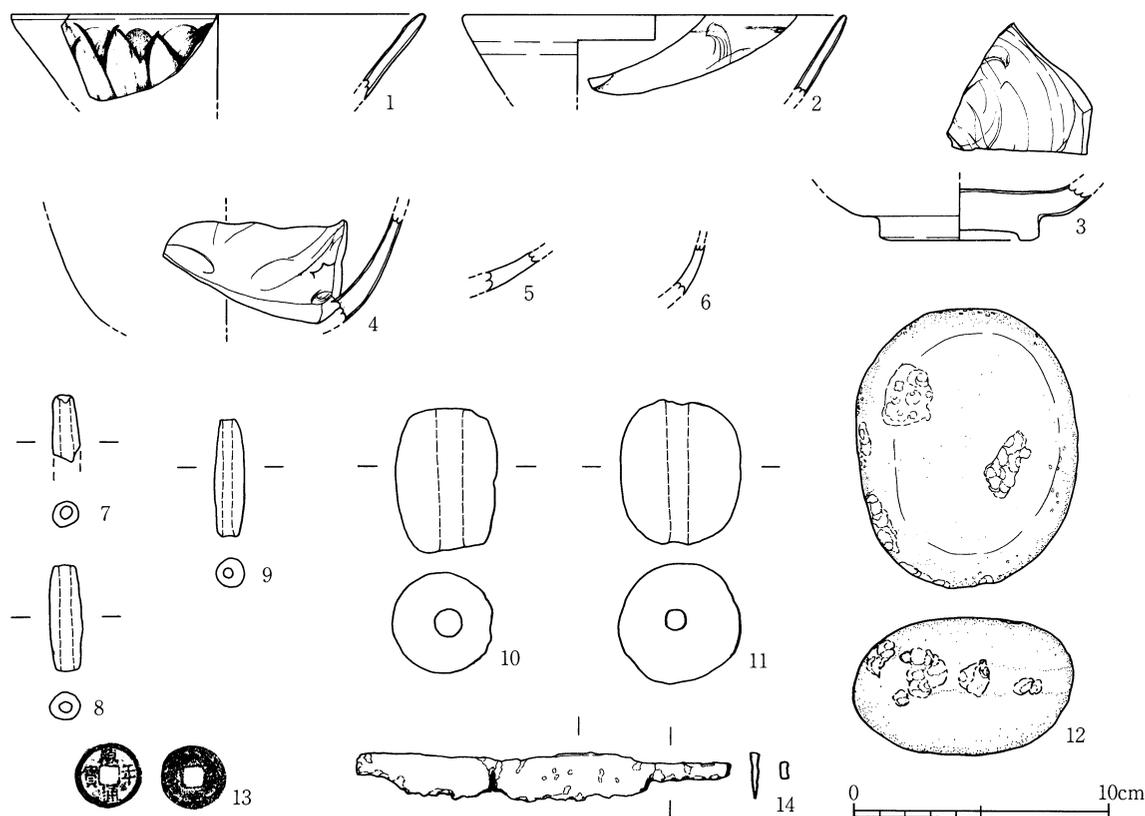


Fig. 39 SR1 出土遺物 4

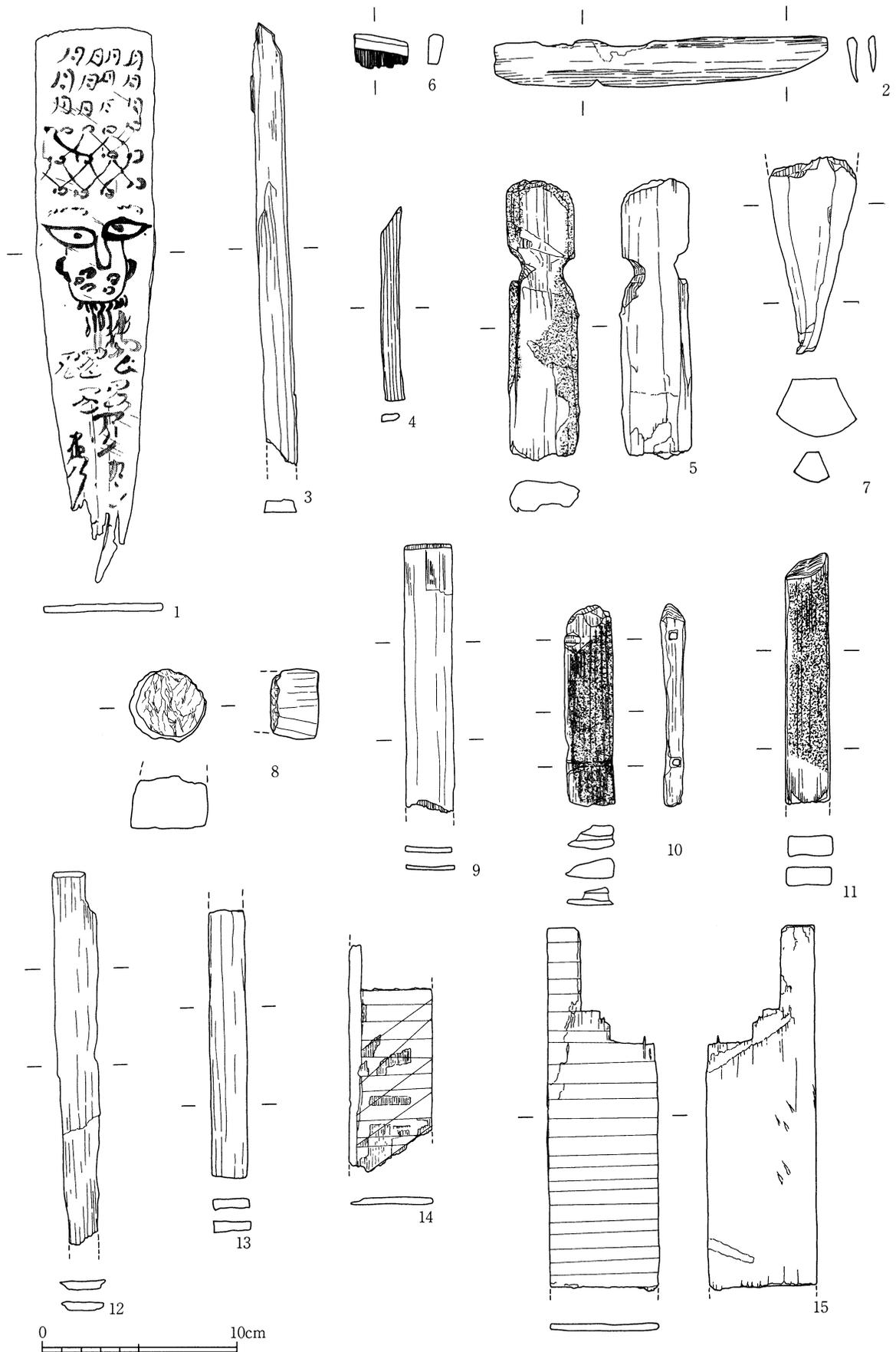


Fig. 40 SR1 出土遺物 5

最大の長さは、19.7cmである。完形品が7点（Fig. 41-4・6～11）出土しているが、その長さを見ると17～20cmに含まれるものである。この数値が、船戸遺跡で使用された箸の標準的な長さである。

漆器は、容器として椀・皿など挽物の食器類を対象にし、本遺跡出土品の中では口縁部が欠損しているものが多いため漆椀として説明していく。漆椀は3点（Fig. 41-16～18）出土しており、すべて口縁部が欠損しているが内外面に黒漆が施される。16は、底部を円盤状に整形しており底部外面はやや窪んでいる。底径は8.0cmで残存器高は2.7cmである。18は底径9.8cmを測り、断面三角形の小さい高台が付く。体部は内弯して立ち上がり、外面には轆轤の削りが顕著で円形状の文様が描かれる。残存器高は、4.0cmである。17も同様に、断面三角形の高台を削りだし外面には轆轤の削り痕が明瞭に残る。その他細片で実測不可能であるが、黒漆の上から赤漆で亀甲文が描かれる漆器がある。

曲物は、曲物容器の円形板（底板・蓋板）や側板を接合した容器の総称である。Fig. 41-19・20、Fig. 42-1は、曲物の一部品と考えられる円形板と判断した。すべて1/3程度が残存している。19は、2孔1対の木釘・釘孔が穿たれている。20は小型品であるが底板の円形板である。

服飾具と認められるものには、櫛・下駄などがある。Fig. 40-6は横櫛で、板片の一側縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に研ぎあげている製品である。横櫛の破片で全体の形状は不明であるが、長方形の形態で肩部に丸みをもたせたものと考えられる。切通し線は、背の上縁に平行して直線的に挽いている。背の断面は、厚さ0.8cmで方形を呈する。

下駄は、台と歯を一木からつくる連歯下駄が2点出土している。Fig. 42-3は、平面形が隅丸長方形を呈し、前歯から両端にかけて幅を狭めている。鼻緒孔の位置は、前壺を台の中央にあけ後壺を歯の内側にあけている。歯の作り方は、歯の下辺幅を台の幅より広く造り歯の高さは7.3cmを測る。台部の右側面から後方にかけて消失しており炭化している。Fig. 42-2の平面形は、隅丸長方形を呈し前歯・後歯の両端から幅を狭めている。鼻緒孔の位置は、前壺を台の中央部にあけ後壺を歯の内側にあけている。後壺の方が穴が大きい。歯の作り方は、歯の下辺幅を台の幅より広く造り歯の高さは5.9cmを測る。

今回最も注目される遺物として、呪符や、人形・刀形の出土がある。Fig. 40-1の呪符は、中央には鬼面が描かれておりその上には「月」が4文字3段に書かれている。さらに下方には「鬼」の文字が3文字、2文字、1文字と3段に書かれている。下端部は欠損している部分もあり、墨痕も薄く明瞭に積読できないが、「九々八十一」と「急急如律令」が並んで書かれていたものと考えられる。Fig. 40-2は、刀をかたどった形代で刀形か刀子形と考えられる。細板を荒く削り込み、刀身のみを表現している。刀身は、一面の片側を薄く削って刃をつけており、刀先は内弯気味に斜めに削り落としている。Fig. 40-3は人形かどうか不明確なものであるが、先端部の両側縁から削りだしている。頭部は一側面から鋭く斜めに切り落としており、下方になるにつれやや幅広になるが下端部は欠損している。Fig. 40-4は、薄く細長い材の片端を尖らせており、斎串とも考えられる。Fig. 40-5の人形は、断面方形の板材から側縁を抉りとり頭部を造りだしている。頭部は両端を削り取り丸く仕上げる工夫をしており、下端部は欠損している。

その他の木製品の中で、現存している形態で用途が分かるものは杭1本のみである。その他は板状

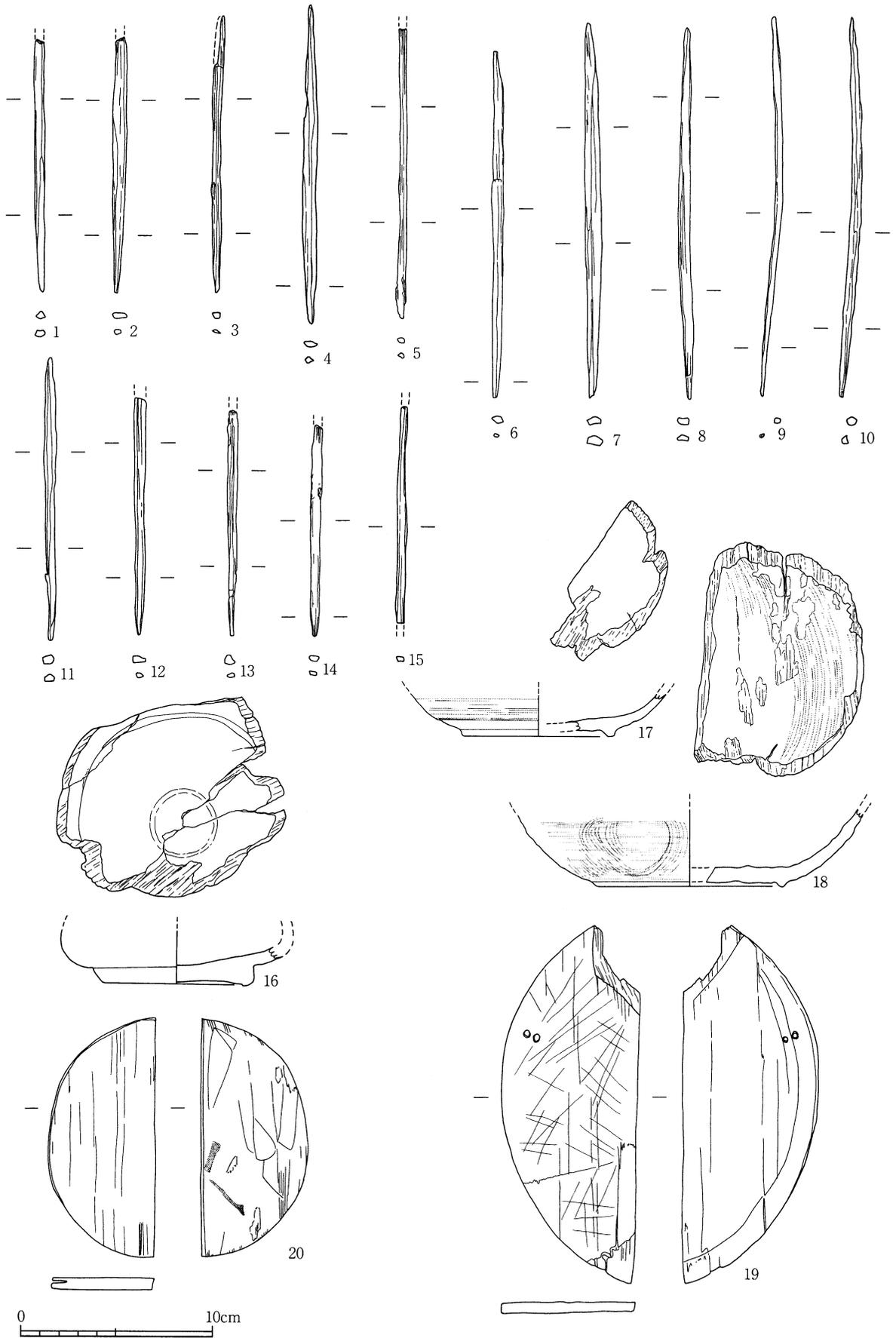


Fig. 41 SR1 出土遺物 6

の木製品が多く、製品は不明であるが他の部材と組合さって製品を構成するものが多いと考えられる。Fig. 40-7は杭先で、三面を削り尖らせている。Fig. 40-8は直径4cmを測る柱状製品で、上面は欠損しており下面は水平に切断されている。Fig. 40-9は、薄く扁平な板材でやや弯曲している。欠損していない端面は面取りされている。Fig. 40-10は、両端部の側面から方形の孔が穿たれており、片面は焼けて炭化している。Fig. 40-11は10と同じ部材と考えられ、片面が焼けて炭化している。上端は斜めに削られている。Fig. 40-12は、9と同じ製品で上端部が面取られている。13は両側面を面取りしている。14・15は薄板で、同じ製品の一部と考えられる。横方向に7~10mm間隔で切り目の刻み線がはいる。Fig. 43-1~8:1はやや丸みを持った扁平な板材であるが、上端部に3ヶ所、下端部に2ヶ所の穿孔が見られる。2は下端部が欠損しているが、表面は丸みを持たせ丁寧に削られている。上端部には、2ヶ所の穿孔が見られ1ヶ所に木釘が残る。3~7は、扁平な板材であるが同じ用途に利用されたものと考えられる。3は大部分が欠損しているが、その他は下端部が斜めに鋭く削られている。8は下端部が欠損しており、上端部に一孔が穿たれる。Fig. 44-1~5:1は、扁平な板材の上端部に切り目を入れ段差を付ける。下端部は両端から斜めに鋭く削り込み尖らせている。2は扁平で薄い板材であるが上端部に若干斜めの削りを入れ整える。3は厚さが6~7mmで幅2.1cmの棒状のものである。先端部のみ炭化しており、上下面から削り尖らせている。4は、厚さ1.2mmの細板材で一端部を斜めに削る。一側面の4ヶ所に切欠きを入れている。5は、扁平で薄い板材であるが先端部を削り尖らせている。

竹で編みあげた籠編物が出土しているが、多くは断片であり原形を知り得る物は少ない。また製品が貧弱であるため取上げ中に変形したりし実測に耐えうるものは少ない。PL. 33の出土籠-2は竹の表皮を取りのけた各幅7mmの竹状2本で「2本越え、2本潜り、1本送り」で編んでいる。この籠状製品の縁部分は、竹条2本を湾曲させて桜の革で固定させている。PL. 33の出土籠-1は、魚籠と考えられる。籠の口縁部分は、葛を2本組み合せ桜の革で固定し、中央に幅1.3cmの木渡しをしている。胴部の編み方は、幅7mmの竹条2本で「2本越え、2本潜り、1本送り」で編んでいる。

その他の遺物 (Fig. 39-7~14)

その他の遺物として、土製品・石製品・金属製品が出土している。土製品は、7~11まで土錘である。7~9までは、細長い円管状を呈し中央部がわずかに膨らむ形態である。8・9の完形品をみると、重量が5.4・5.6gを測りこの土錘形態の標準的な重さである。10・11は、大型の土錘である。

12の石製品は、古墳時代以前の叩石が1点出土しているのみである。扁平な楕円形状を呈し、使用による敲打痕は平面の一部と側縁の約1/3周到わたって観察できる。

金属製品は、銭貨と刀子が出土している。13の銭貨は、皇朝十二銭の一種で「萬年通宝」が出土している。四文字を施読の配字で隸書・陽鑄する。背面は無文である。径は2.6cmで、方孔0.8cm、銭厚0.12cm、重量3.6gである。14は刀子で、刃部は切先を欠くが上反りする。現存する刃渡りは、11.5cm、刃幅1.9cmの細形の刀子で、茎はほぼ完形で残存している。(松田)

7) SR2 (Fig. 45~47・49・50)

SR2からは5300点余りの土器が出土している。土師器、須恵器が主体であり、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、土錘等もみられる。これらは下層よりまとまった状況で検出された。

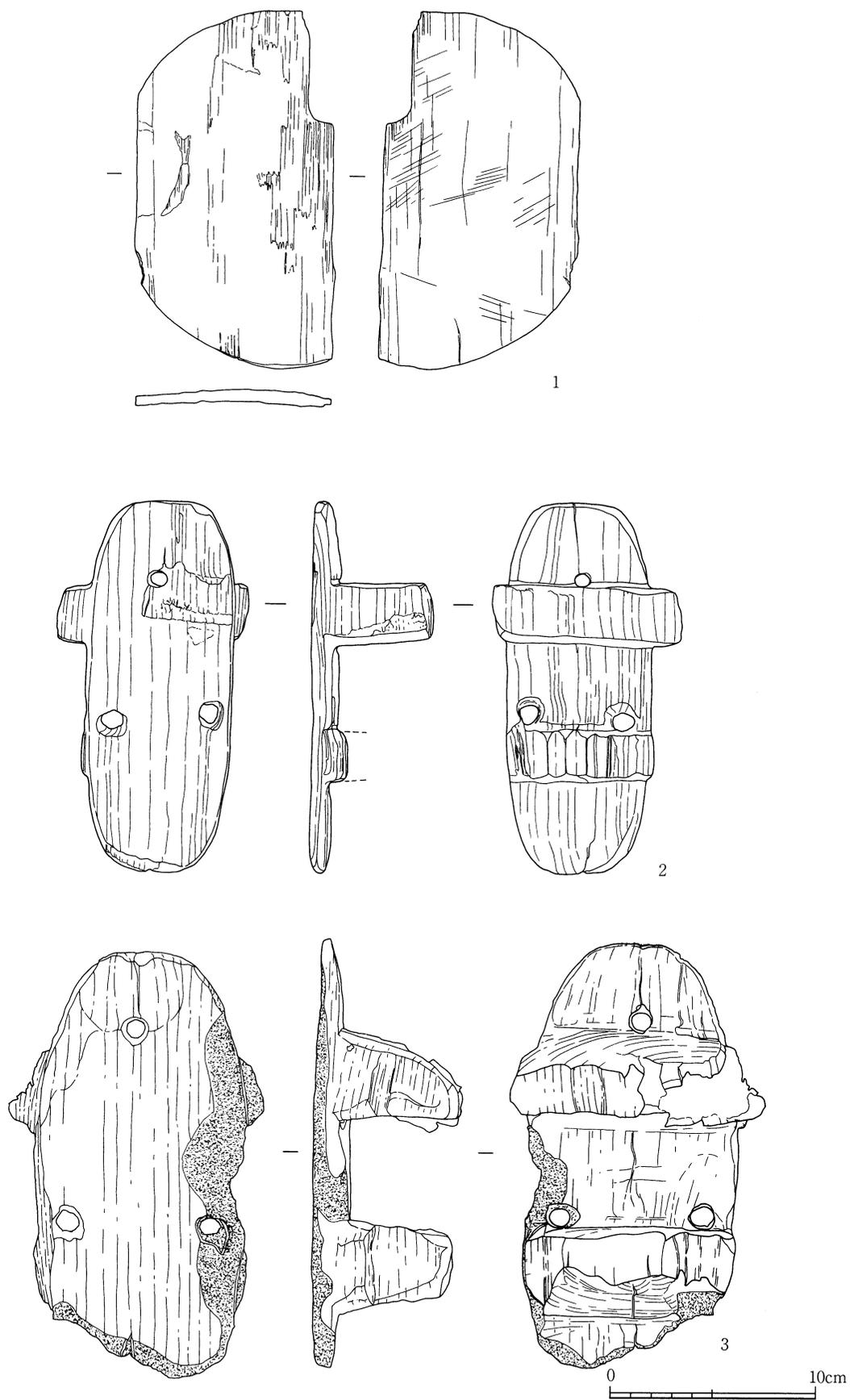


Fig. 42 SR1 出土遺物 7

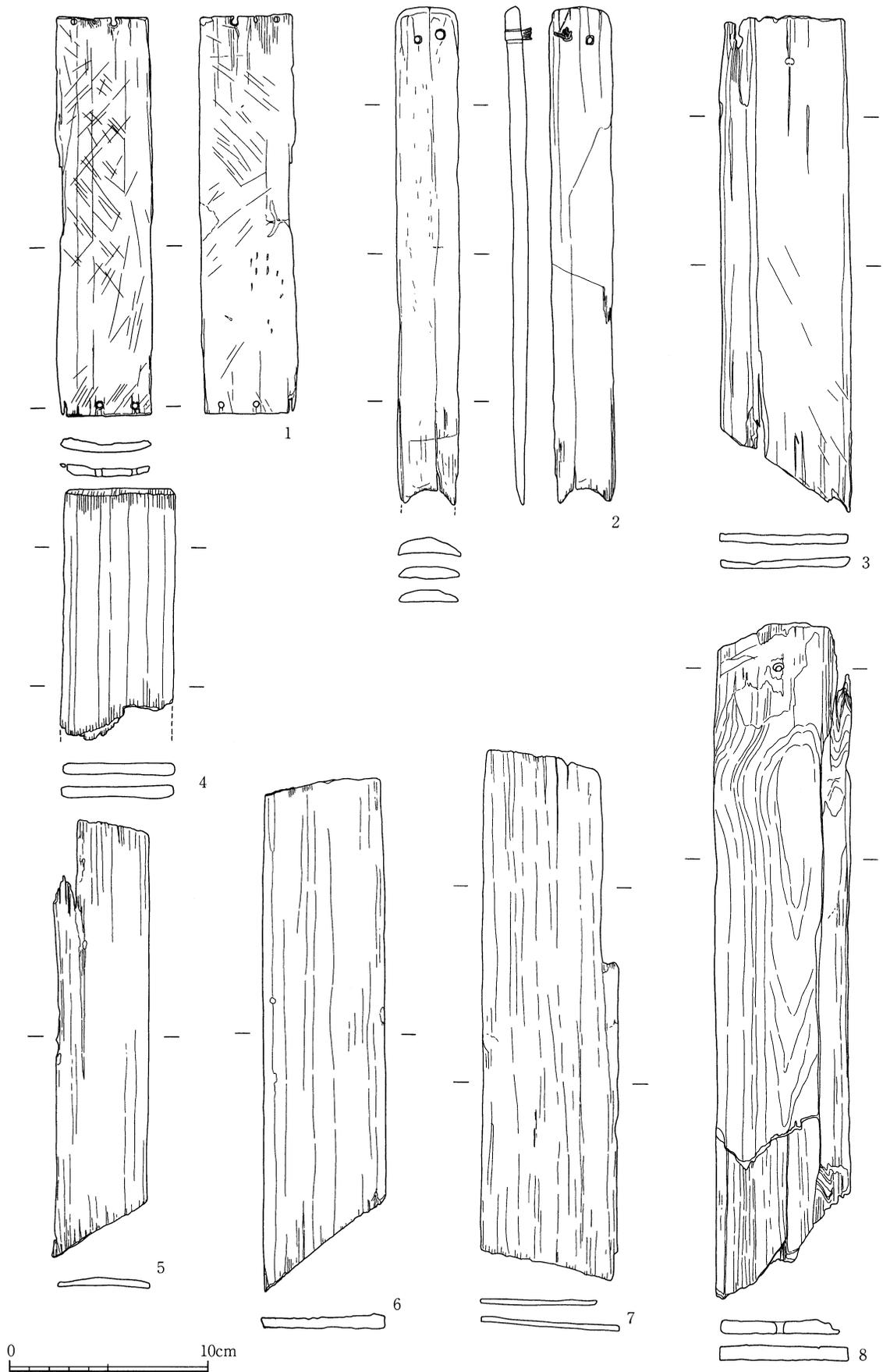


Fig. 43 SR 1 出土遺物 8

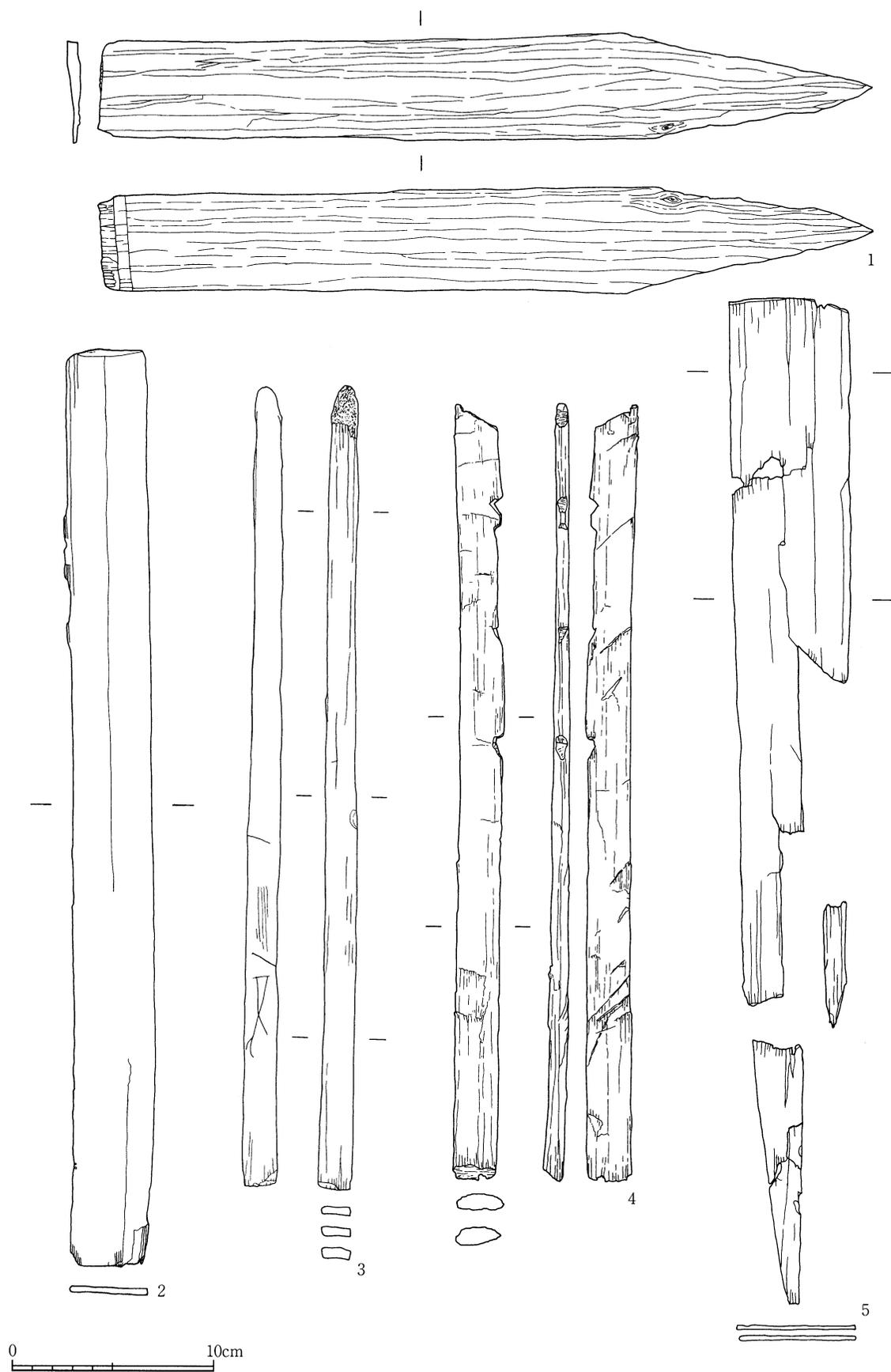


Fig. 44 SR1 出土遺物9

土師器 (Fig. 45・46)

皿、坏が出土している。坏の出土数が多く、底部が平坦であるタイプ、円盤状であるタイプ、輪高台を張り付けているタイプの3形態分類できるものが出土している。

Fig. 45-1~42: 1~13は土師器の皿である。1は底部が欠損しており、底部外面にはナデ調整による凹線がみられる。色調は灰白色を呈し、全体に磨耗が著しい。2は底部途中で欠損している。平坦な底部から斜め上方に直線的に伸びるタイプである。にぶい黄橙色の色調を呈す。3は底部途中まで残存しており、平坦な底部より斜め上方に体部は伸びる。口縁端部は断面方形状を呈す。灰黄色の色調を呈す。4は底部途中で欠損し、底部外面には粘土紐渦巻き痕がみられる。平坦な底部から体部は斜め上方に伸び口縁部は外反する。7は底部途中で欠損しており、体部は底部より斜め上方に伸びるタイプである。体部は丸みをもって立ち上がり伸びる。口縁端部は丸くおさめる。色調は浅黄橙色を呈す。8は底部外面に粘土渦巻き痕とヘラ状痕がみられる。平坦な底部から斜め上方に伸び、口縁部は外反している。全体に薄い作りであり、色調は鈍い黄橙色である。9は底部途中で欠損している。体部立ち上がり部分は丸みをもち、口縁端部は丸くおさめている。内面にはナデ調整がみられ、色調は灰白色を呈す。10は底部途中で欠損しており、底部外面には粘土紐痕がみられる。平坦な底部から体部は斜め上方に伸びる。色調は灰白色を呈する。11は体部のみ残存し、底部は欠損する。口径は16.2cmと広く、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。全体に磨耗が著しいため調整は不明である。色調は浅黄橙色を呈する。12は体部が底部より斜め上方に伸びるタイプである。口径は16.2cmと広く口縁端部は丸くおさめている。色調はにぶい黄橙色を呈する。13は底部外面に粘土紐痕とヘラ切り痕が残る。

14~18は平高台の坏である。14・15は平坦な底部から屈曲して斜め上方に直線的に伸びる。底部外面には粘土渦巻き痕が残り、ヘラ切り痕がみられる。色調は浅黄橙色を呈する。16は底部が欠損しているが平高台になると思われる。体部外面にはナデ調整による凹凸がみられる。17・18は底部が欠損している。体部は斜め上方に直線的に伸びる。19~30は底部外面に輪高台を貼り付けた坏である。19・20・22~29は底部のみである。断面方形状の高台を貼り付けている。貼り付け部分より体部が斜め上方に伸びる。19・20・22~24・26~28の色調はにぶい黄橙色を呈する。21は底部途中で欠損している。貼り付け部分より斜め上方に直線的に伸び口縁部に至る。体部外面にはナデによる凹凸がみられる。色調は灰白色を呈する。30は他と比べ薄く高い高台を貼り付けている。高台接合部はナデ消している。31~42は底部円盤状高台の坏である。31は内底が高台内に落ち込まない。高台外面には粘土渦巻き痕とヘラおこし痕がみられる。高台と体部の接合痕が明確に残る。色調は灰白色を呈する。32は内底が高台内に落ち込まない。底部外面には粘土渦巻き痕とヘラ切り痕が残る。高台と体部の接合部分は明確に残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。33は内底が高台内に落ち込まない。底部外面には粘土渦巻き痕とヘラおこし痕が残る。高台接合部分はナデ消しており、色調はにぶい黄橙色を呈する。34は内底が高台内に落ち込まず平坦である。底部外面には粘土紐痕とヘラおこし痕が残る。高台と体部の接合部は明確である。35は内底が少し高台内に落ち込む。全体に磨耗が著しく調整は不明である。色調はにぶい黄橙色を呈する。36は内底が高台内に少し落ち込んでいる。底部外面には粘土紐痕が残り、立ち上がり付近は強い横ナデによる凹状を呈す。色調は

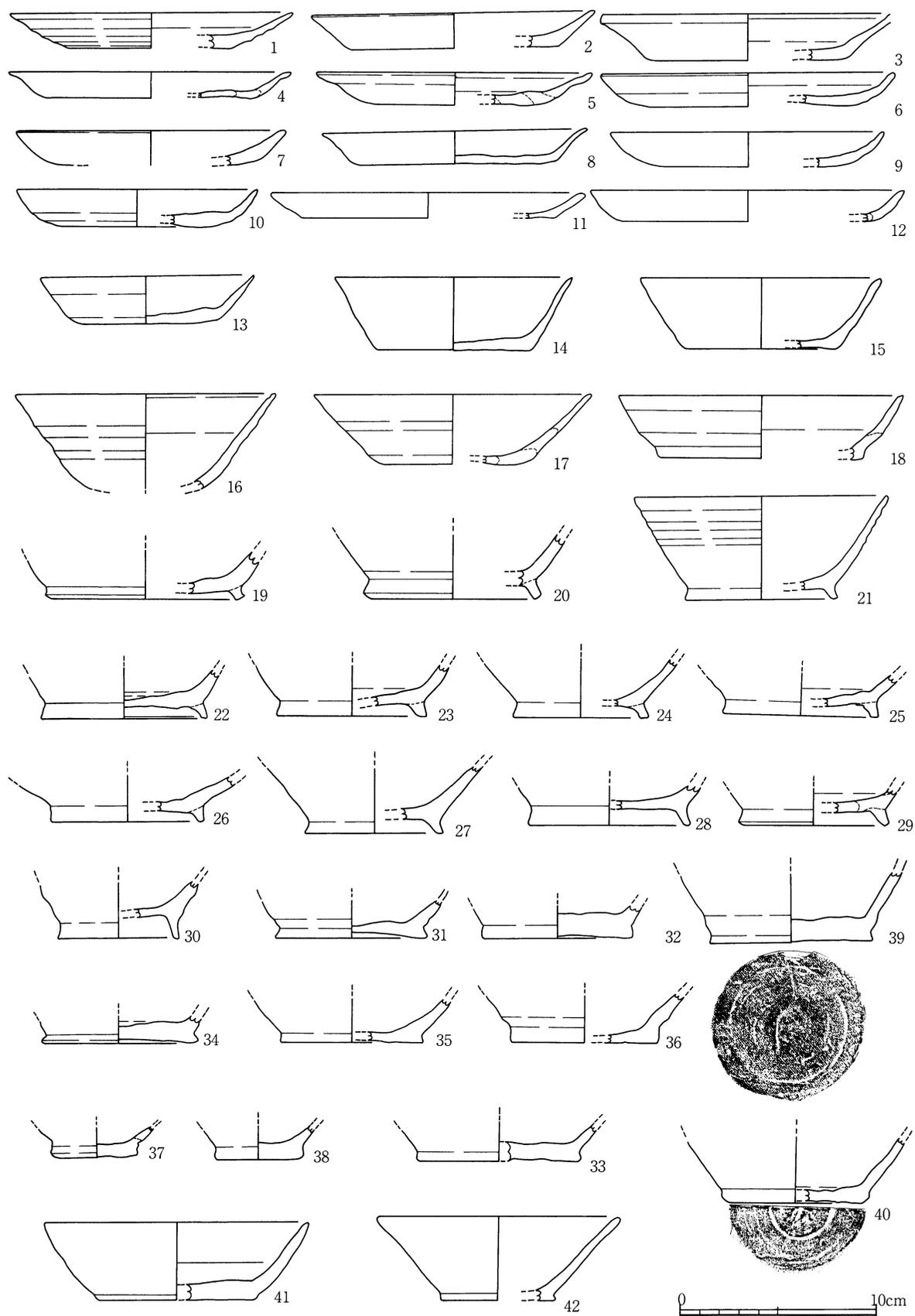


Fig. 45 SR 2 出土遺物 1

にぶい黄橙色を呈する。37・38は底径が4.5cmを測る小坏である。内底は高台内には落ち込まず平坦である。全体に磨耗が著しく調整は不明である。41は内底が高台内に落ち込まず平坦である。高台接合部分より斜め上方に伸びる。40は底部外面に粘土紐痕が残り、底部内面は平坦である。体部は底部より直線的に伸びる。42は底径5.8cm、口径12.3cm、器高4.5cmを測る。底部は残存している部分が少ないため調整は不明である。体部は斜め上方に直線的に伸び、端部は丸くおさめる。

Fig. 46-1~11: 1~8は甕の口縁部である。1は口縁部がL字状に屈曲し端部は上方につまみあげている。2~5は口径21~24cmを測る。口縁部の形態は「く」の字に曲がり、端部は上方につまみあげている。胴部は長胴になるタイプと思われる。内面には横方向のハケ調整、外面には縦方向のハケ調整が施されている。6は口径が21cmを測り、口縁部は「く」の字に曲がり、端部は平坦である。体部は球形になるものと考えられる。7・8も同じく長胴甕の口縁部である。口径は27cm大と他の甕と比べて大きい。内面には横方向のハケ調整、外面には縦方向のハケ調整がみられる。9・10も土師器の甕である。9は口縁部は「く」の字状になり、端部は丸くおさめ胴部は球形状になる。10は口径28.8cmを測り口縁部は「く」の字状になる。色調は黒褐色を呈しており炭素が吸着している。外面にはヘラ痕が見られる。11は土師器羽釜の口縁部である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部下に断面方形の鑿がつく。口縁端部は平面をなしている。体部外面には荒いハケ目が施され、内面には煤が付着している。撰津C型の羽釜に属す。

須恵器 (Fig. 47・49・50-3・4)

皿、坏、蓋が出土している。坏は底部が平坦なタイプと底部に輪高台を張り付けたタイプの2形態に分かれる。

Fig. 47-1~31: 1~12は須恵器の皿である。1は平坦な底部より斜め上方に伸び、口縁端部は内面に向かってつまみあげている。体部内外面には轆轤痕が残り、底部外面にはナデ調整が施されている。色調は灰色を呈する。2は平坦な底面より体部は斜め上方に伸び、口縁端部はつまみあげている。底部外面にはヘラ状痕がみられる。底面には粘土紐痕がみられ、体部内外面には横ナデ調整がみられる。色調は灰色を呈す。3は体部が斜め上方に伸び、口縁端部は丸くおさめる。体部内外面にはナデ調整がみられる。4は平坦な底面から体部は斜め上方にのびる。口縁端部はつまみ上げ、口縁部内面には一条の沈線が施されている。体部には横ナデ調整が施され、底部外面にはヘラ痕が残る。5は平坦な底部より体部はやや丸みをもって立ち上がる。体部にはナデによる凹凸がみられる。口縁端部は内側につまみ出しており、内面には一条の沈線が入る。内面には円形状のナデ調整、外面には粘土紐痕と不定方向のナデ調整がみられる。胎土には1mm大の黒色、白色砂粒を含む。6は平坦な底部より体部はやや丸みをもって立ちあがり口縁部にいたる。口縁部内側にはナデ調整による凹凸がみられる。体部内外面には横方向のナデ調整、底部外面には指頭圧痕、底部内外面には不定方向のナデがみられる。7は平坦な底部より体部は斜め上方に立ち上がり伸びる。体部内外面には横ナデ調整、底部内外面にはヘラ痕がみられる。8は底部が欠損している。体部は内弯して伸び、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面には一条の沈線が入る。9は底部が欠損しており、厚く平坦な底部から体部は斜め上方に伸び口縁部にいたる。体部には強いナデ調整による凹凸がみられる。胎土は軟質である。10、11は底部が欠損している。平坦な底部から直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。12も

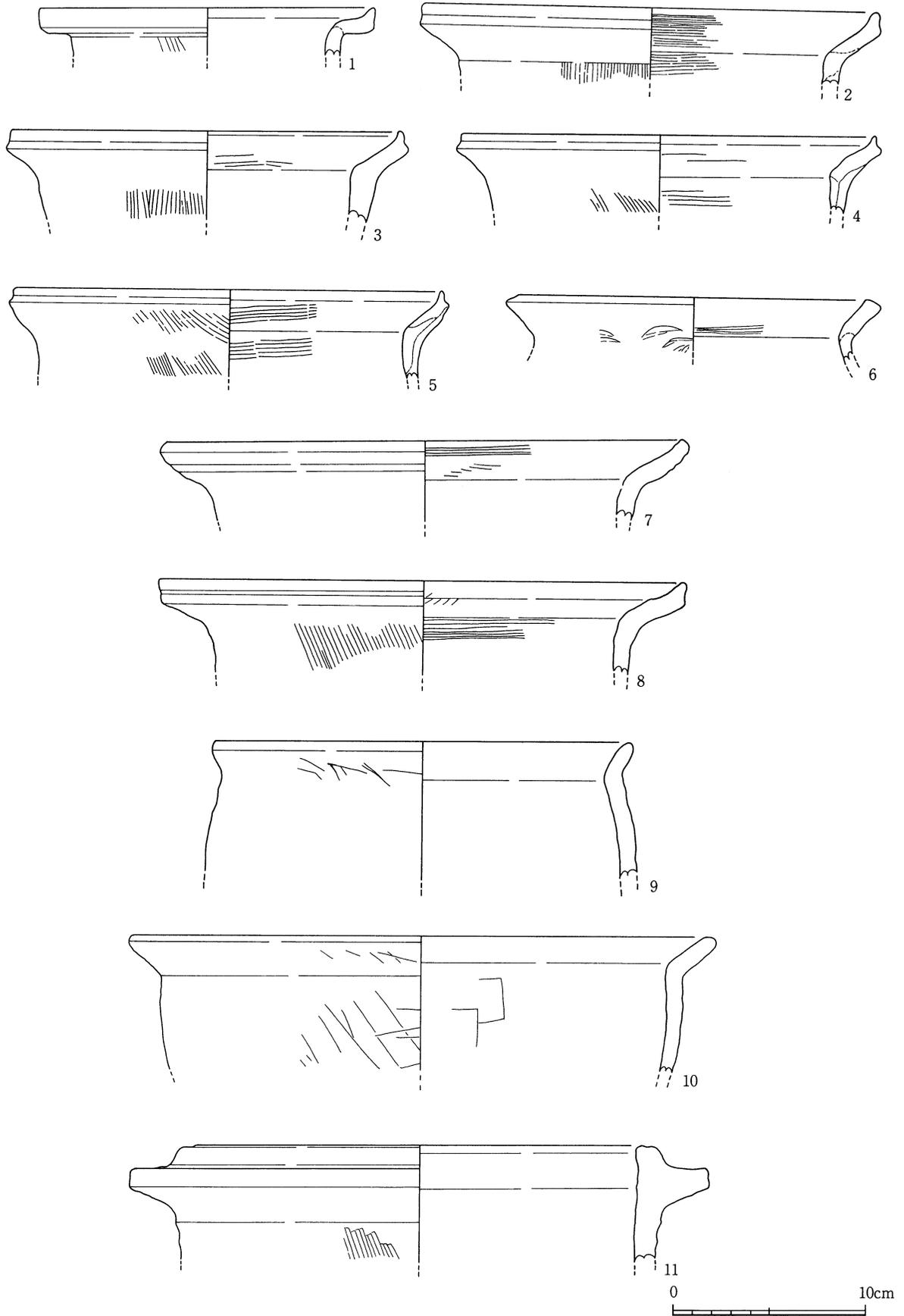


Fig. 46 SR 2 出土遺物 2

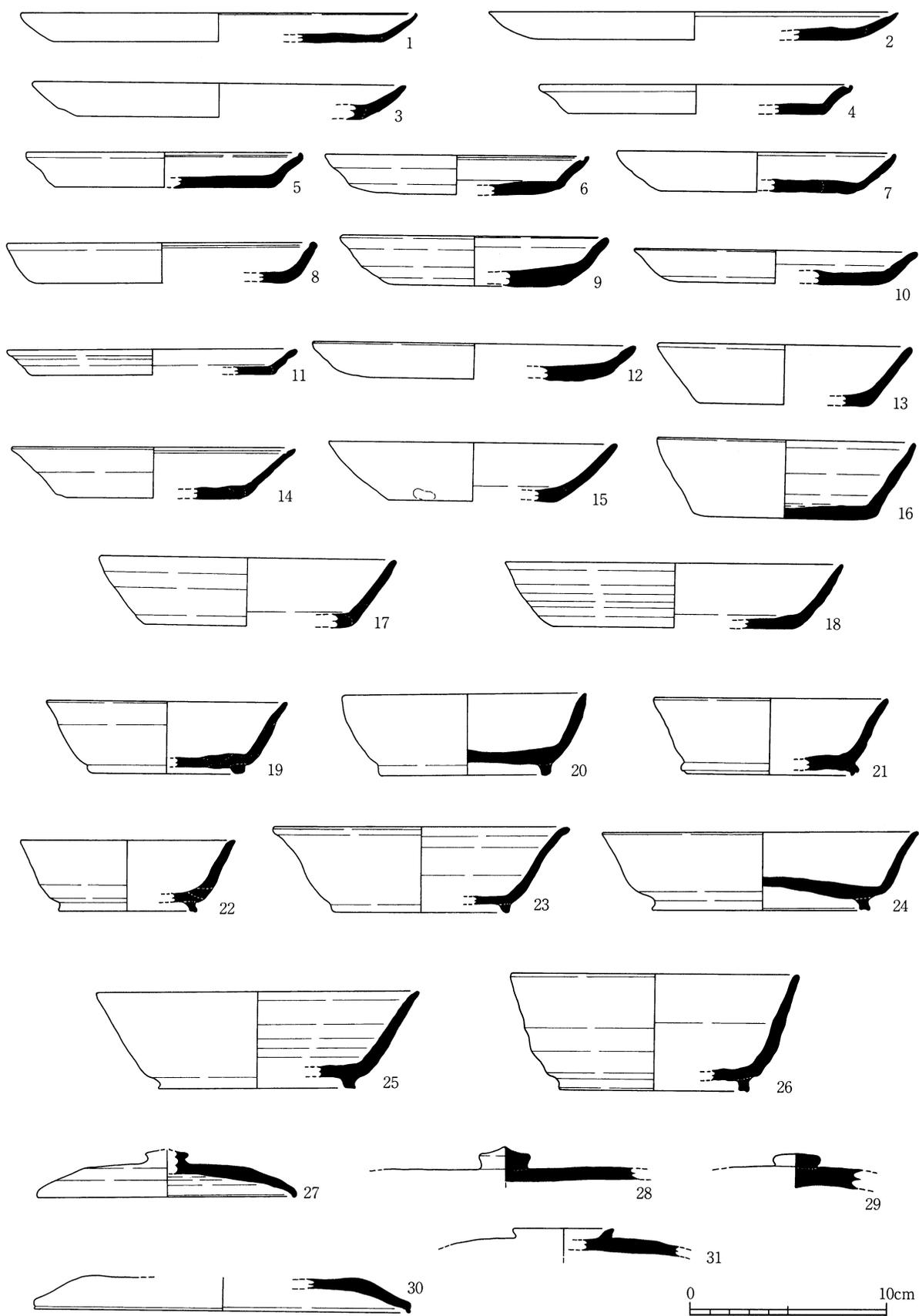


Fig. 47 SR 2 出土遺物 3

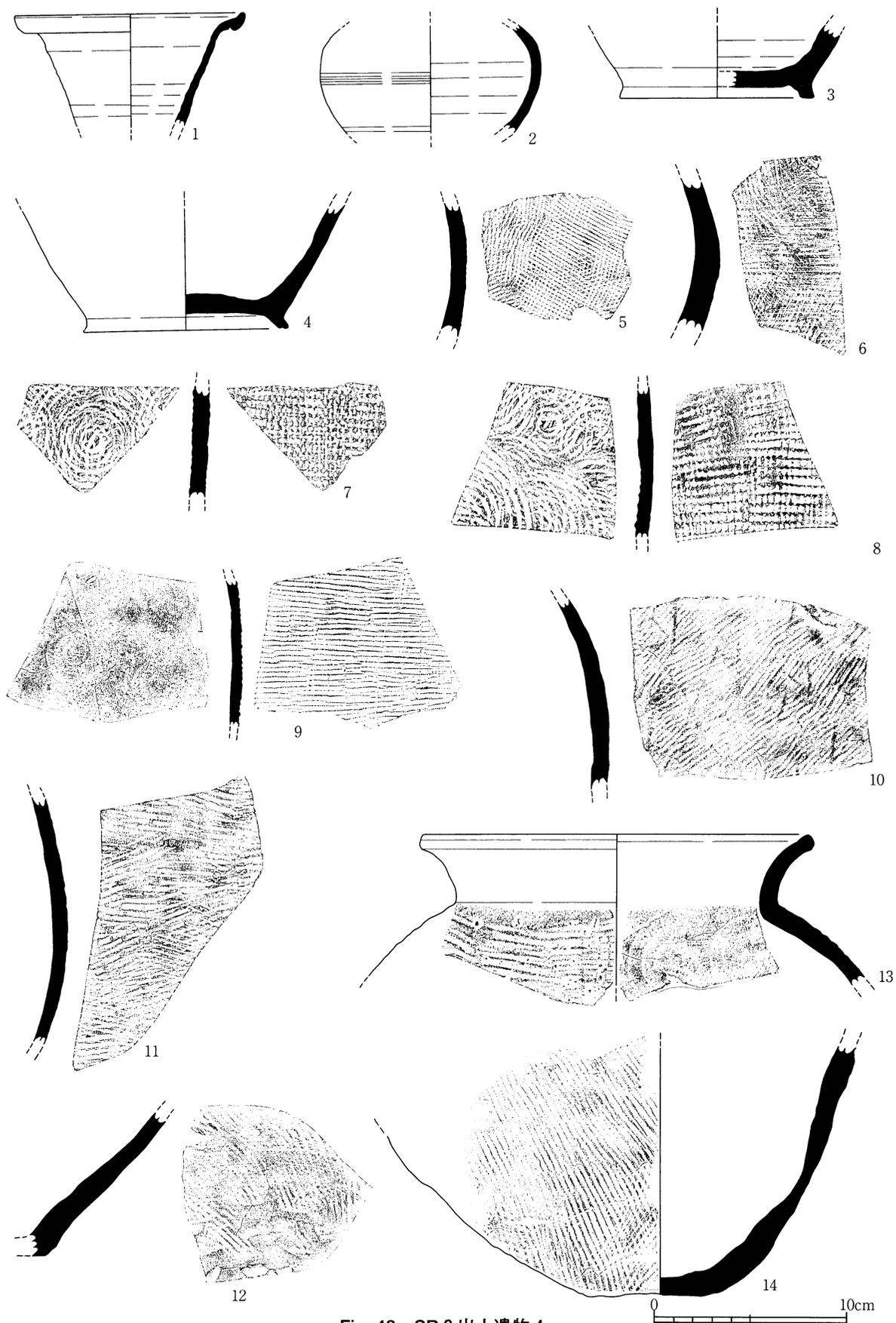


Fig. 48 SR 2 出土遺物 4

底部が欠損しており、体部は斜め上方に伸びる。

13～18は底部平高台の坏である。13は底部が欠損しているが体部は斜め上方に直線的に伸びる。14は平坦な底部から斜め上方に伸び、口縁部内面には浅い沈線が入る。底部外面には粘土紐痕が残る。15も体部は斜め上方に直線的に伸び口縁部にいたる。16は平坦な底部から体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。底部外面にはヘラおこし痕がみられ、体部内外面には横方向のナデ、底部内外面には不定方向のナデが施される。17・18は底部が欠損している。平坦な底部から斜め上方に伸び口縁部にいたる。18は底部外面にヘラ痕が残る、体部内外面には横方向、底部内外面には不定方向のナデ調整が施される。19～26は底部外面に輪高台が付く坏である。19は断面方形の高台を貼り付けている。体部は斜め上方に伸び口縁部にいたる。20は断面方形の高台が斜め外方に付く。平坦な底部から体部は丸みをもって立ち上がり、上方に伸びる。体部、底部内外面にはナデ調整が施される。高台底面には一条の抉りが入る。底部外面にはヘラ削りが円形状に施されている。22は断面方形の高台を貼り付けており、体部は斜め上方に伸び口縁部にいたる。23は断面方形の高台が付き体部は丸みをもって立ち上がり伸び、口縁部にいたる。口縁部は外反する。24は断面方形の高台が付く。高台底面には一条の抉りが入る。体部は直線的に外方に伸びる。器形には焼成時の歪みがみられる。25は断面方形の高台が付く。平坦な底部から斜め上方に伸び、口縁部は丸くおさめる。高台貼り付け部分はナデ消している。26は断面方形の高台が付き体部は斜め上方に立ち上がり伸び、口縁端部は丸くおさめる。高台外面には一条の抉りが入り、体部外面にはナデ調整による凹凸がみられる。底部内面には不定方向のナデ調整が施される。

27～31は蓋である。27・28は宝珠形のつまみを貼り付けている。27は平坦な天井部から口縁部にかけてゆるやかに下がり、口縁端部は下方につまみ出す。内外面とも円形状のナデ調整が施される。29は円形状のつまみが付き、胎土は軟質で土師質に類似している。30は天井部分は欠損しており、口縁端部は下方につまみ出している。31は円圈状（輪状）のつまみを天井部に貼付している。内面には円形状のナデ調整がほどこされる。Fig. 48-1～14:1は須恵器の壺の口縁部である。口縁は「ハ」の字状に開く。口縁端部は上部につまみ上げる。2は壺の体部である。3・4は壺の底部である。3は底部外面に断面方形の高台を貼り付けている。高台貼り付け部分痕はナデ消している。4は底部が「ハ」の字状に開く断面方形の高台を貼り付けており、高台部底面には一条の抉りが入る。高台接合部分痕はナデ消している。内面はナデ調整され、内面底部には指頭圧痕が見られる。5～12は体部片である。5～8は外面格子叩き目が施されている。7・8の内面には同心円文が残る。9は外面平行叩き目、内面同心円文が施されている。10～12は外面に平行叩き目が施される。13は口縁部が「く」の字に開き、体部にいたる甕である。外面には平行叩き目、内面は同心円文が残る。14は甕の底部である。底面は丸底であり、全体に焼成段階の火膨れを起こし、歪んでいる。外面には平行叩き目が残る。

Fig. 49-3・4:3・4は須恵器の鉢の口縁部である。口縁端部は丸く肥厚しており、断面はT字状になる。京都の篠窯の製品である。編年ではH期に属す。

緑釉陶器 (Fig. 49-6)

6は緑釉陶器の底部である。底部外面には断面方形の輪高台が貼り付けられている。畳付は平坦

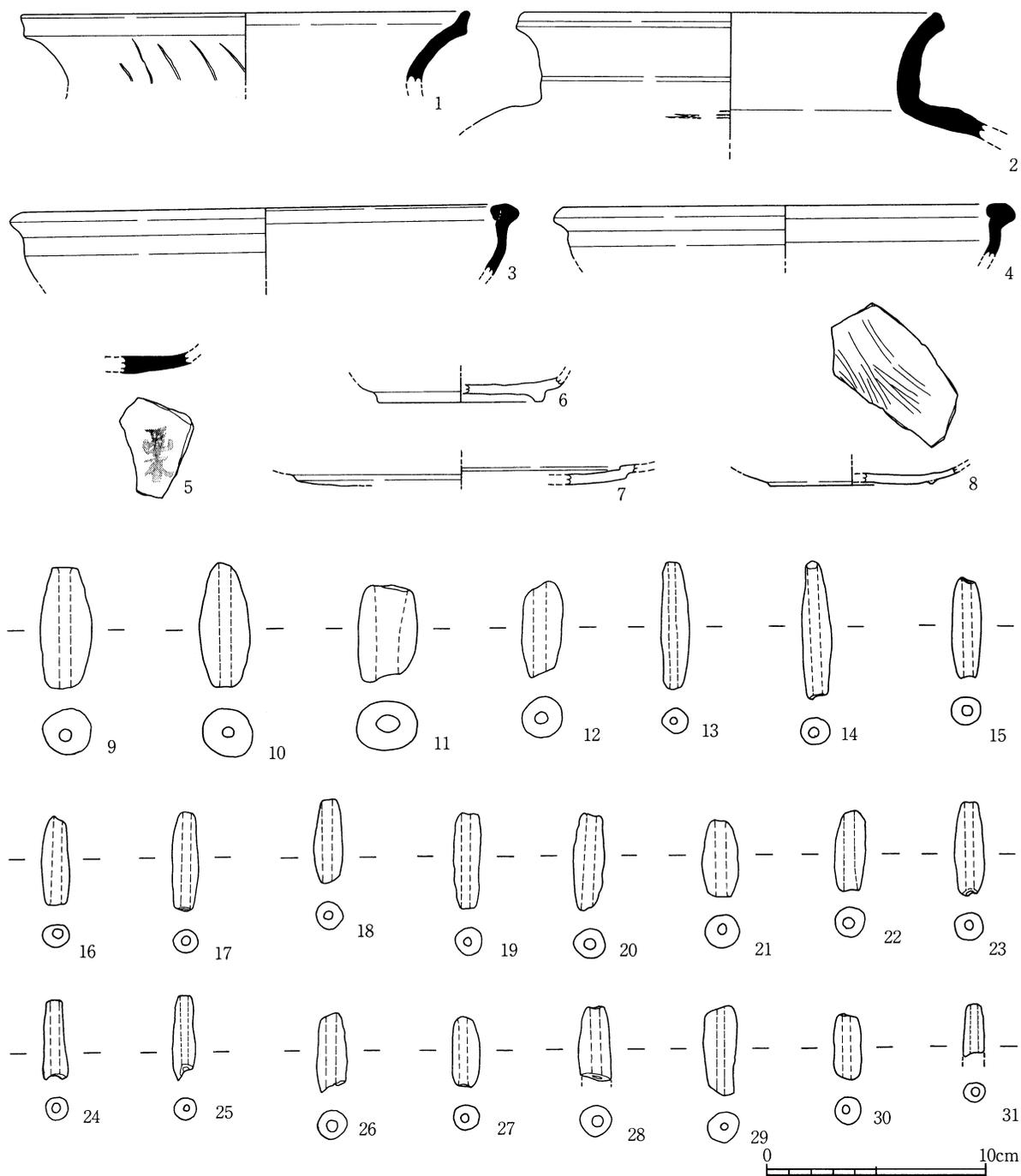


Fig. 49 SR 2 出土遺物 5

面をなす。内面と高台途中まで薄黄緑色の釉が施されている。全体に磨耗が著しいが近江産の緑釉陶器である。

灰釉陶器 (Fig. 49-7)

7は灰釉陶器の段皿片である。体部のみで底部は欠損しているが、高台が付くタイプと思われる。体部途中までハケで施釉されている。猿投の黒笹90窯式の製品である。

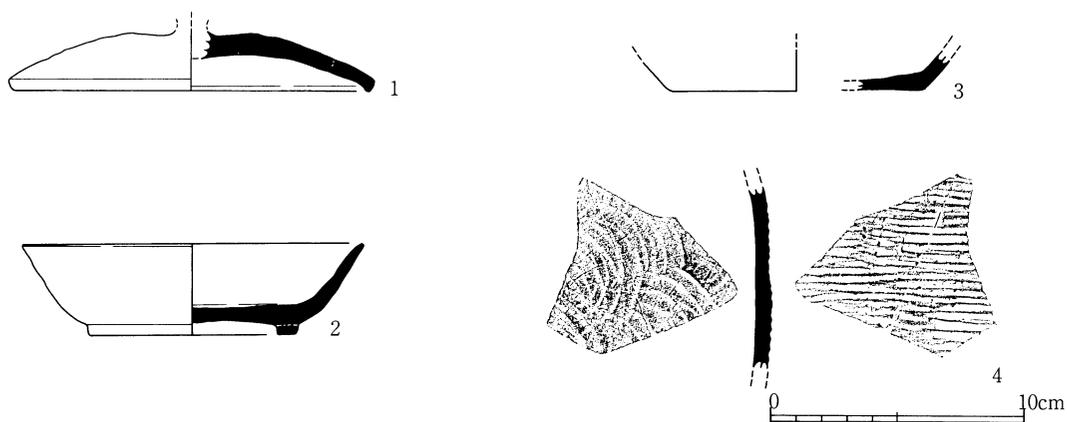


Fig. 50 SR3 出土遺物 1

黒色土器 (Fig. 49-8)

8は黒色土器の底部である。底部外面には微隆起帯状の高台を貼り付けている内面内黒の坏である。内面にはヘラ状の磨き痕が施されており、胎土は緻密で雲母片が混入している。畿内産黒色土器である。

墨書土器 (Fig. 49-5)

5は須恵器の底部片である。細片であるため器種は特定出来ない。墨書で薄く「栗」の文字が書かれている。

土錘 (Fig. 49-9~31)

9~31を含め34点出土している。細長くやや丸みをもつタイプが多く出土している。数点ではあるが、厚みがあり丸いタイプが出土している。(竹村)

8) SR3 (Fig. 50)

SR3の出土遺物には、4点の須恵器片が含まれる。上層からの出土は3の1点であり、下層からの出土は1・2・4の3点である。

1は蓋であり、つまみ部分を欠損する。水平で狭い天井を経て、蓋縁を内弯気味に斜降し、端部を僅かに下屈する。鉄分の多い素地で、紐巻き成型した後、回転ナデを加えて器型を整える。蓋縁端を除く内面には、平滑なミガキ調整を施す。褐灰色の堅硬な器胎には、微細な気孔が密生している。外面には煤を巻いて黒化した自然釉を生じるため、天井部表面の調整痕は観察し得ない。2は、器高の低い輪高台付坏であり、強い外傾で体部を直伸し、外底縁辺の内側に偏平な輪高台を貼付する。内底面には、横斜のナデ調整を加え、輪高台内部の外底面には、回転台右施のヘラ切り痕を遺留する。この器片は、SR2から出土した破片と接合している。3は、平底坏の下部片であり、内面には縦横のナデ調整を加える。鉄分が少なく、長石質成分に富む優白質の粘土を可塑剤とする。4は甕の体部片であり、内面には同心円の当て具痕、外面には刻み目入りの平行叩き目を鮮明に遺留する。

これら須恵器片の年代については、次のように推考する。1の蓋では天井部が狭く、蓋縁が比較的深い形態を持つ。また、内面のミガキ調整の他、蓋縁内端には蓋身共焼の形跡を留めており、丁寧な手法が見受けられる。これらの点を合わせると、8世紀前半から中葉頃の位置付けが可能と思われる。

る。2の坏では、外底縁辺の内側に輪高台を貼付する8世紀中葉以前に濃厚な形態要素と、体部を大きく外傾する8世紀末以後の傾向が混在することから、凡そ8世紀後半、或いは8世紀末のものと推定する。3の平底坏では、胎土の性状や焼結状態が、包含層やSR2で見られる火礫を生じた平底型須恵器坏や皿のグループと一致しており、それらと同じ8世紀中葉から後半頃の年代に属す可能性が考えられる。4の甕体部片については、年代の手掛かりを欠く。(武吉)

9) ピット内出土遺物 (Fig. 51・52)

調査区のピット内から出土した遺物の総点数は871点を数える。土師質土器、須恵器、貿易陶磁器国内産陶磁器、黒色土器、瓦器、土錘、鉄滓フィゴの羽口等が出土している。中でも土師質土器の出土点数が812点と最も多く全体の93%を占める。しかし、ほとんどが細片であり実測可能な遺物は少数である。ここでは実測可能であった柱穴23基の遺物について述べる。

Fig. 51-1~19: 1はP1から出土した土師質土器の小皿である。底部途中で欠損しているが、底部には糸切り痕が残る。黄橙色の色調を呈す。2・3はP2から出土した土師質土器の小皿である。2は平坦な底部より体部は斜め上方に伸びる。3は底部途中で欠損しているが、2と同じく体部は斜め上方に伸びる。共に灰白色の色調を呈す。4はP3から出土した土師質土器の坏である。底部途中で欠損している。平坦な底部より体部は内弯気味に立ち上がり口縁部にいたる。5はP4から出土した瓦質土器である。口縁から体部にかけて残存しており、体部外面には指頭圧痕が残る。6はP5から出土した須恵器の皿である。体部途中から強いナデ調整により屈曲し、口縁部にいたる。口縁端部はつまみ上げており、内面には一条の沈線が入る。7はP6から出土した青磁碗である。内外面ともオリーブ色の厚い釉が施されており、外面には鎬蓮弁文がみられる。8はP7から出土した土師質土器

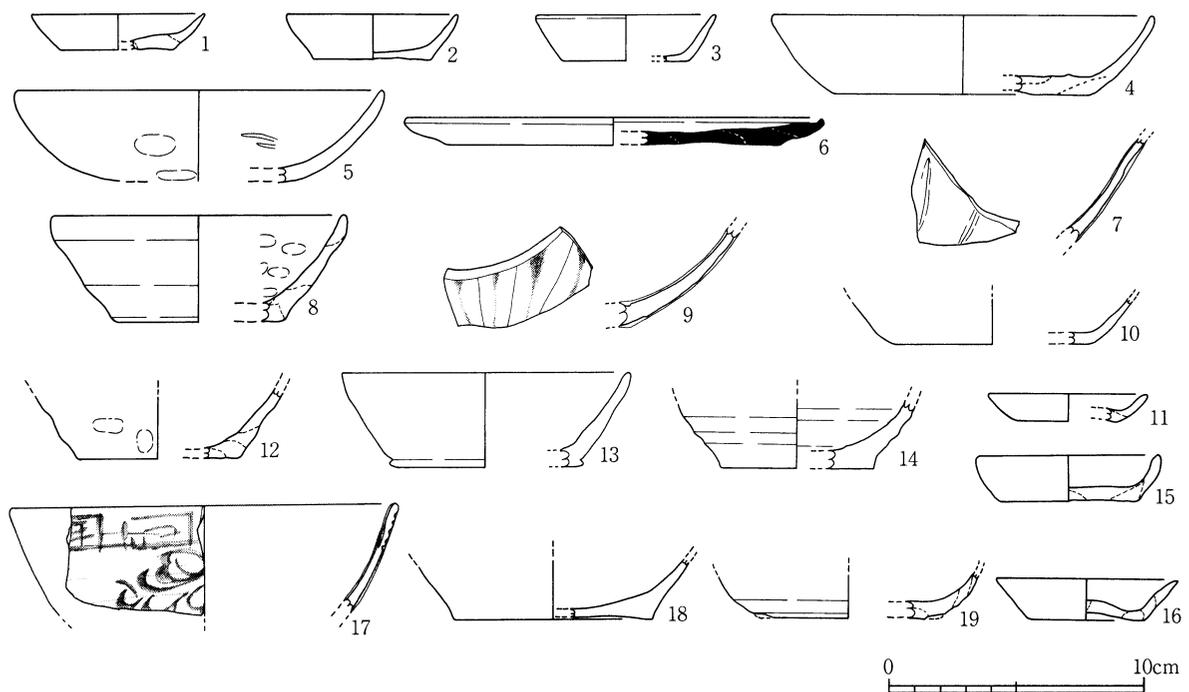


Fig. 51 ピット群出土遺物 1

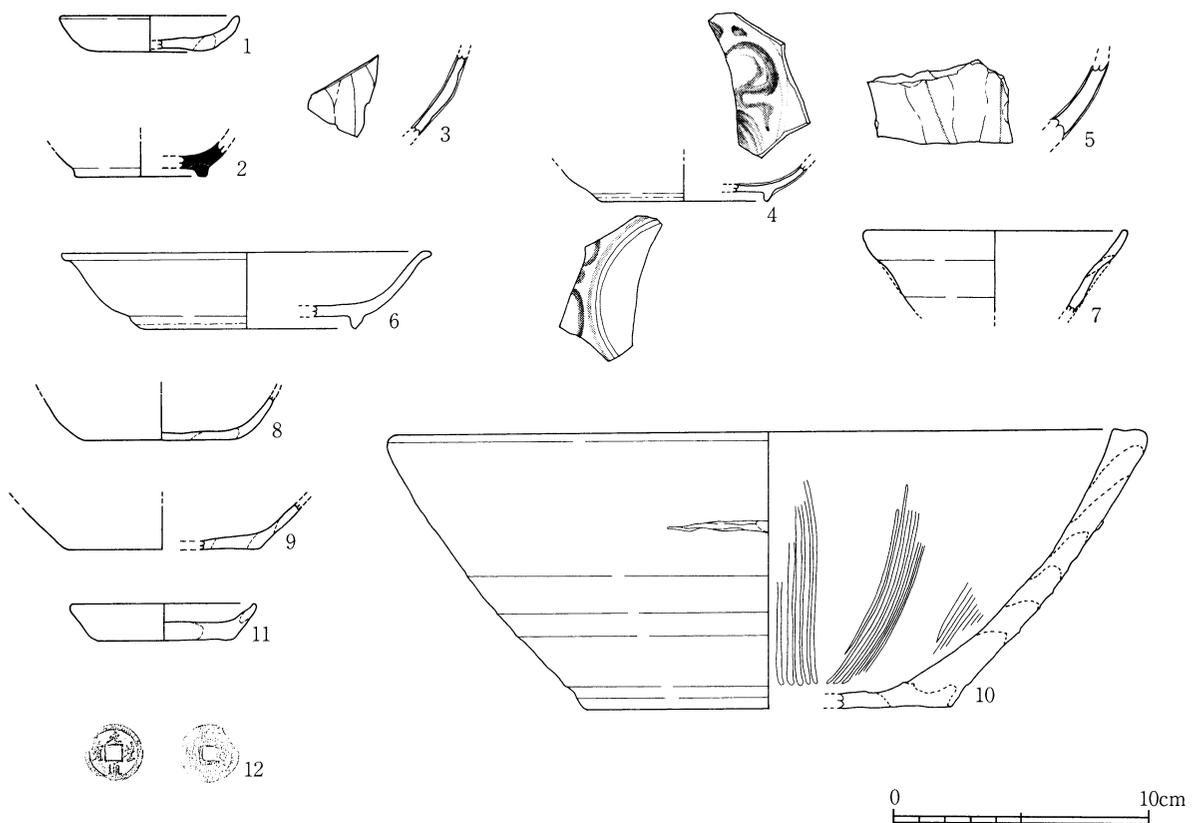


Fig. 52 ピット群出土遺物 2

の坏である。9～11はP8から出土している。9は青磁碗の体部片で内外面ともオリーブ灰色の厚い釉が施されている。外面には鎬蓮弁文がみられる。10・11は土師質土器片である。10は坏になると思われるが、細片であるため、調整は不明である。11は小皿である。底部途中で欠損しているが体部は斜め上方に伸び、口縁端部は丸くおさめている。12～15はP9より出土した土師質土器である。12～14は坏である。13は体部は斜め上方に伸び、口縁部にいたる。15は小皿である。平坦な底部から体部は屈曲し直線的に上方に伸びる。摩耗のため調整は不明である。16・18・19はP10から出土した土師質土器である。16は小皿で、底部中央は外面から内面にへこんでいる。体部は斜め上方に伸び、口縁部にいたる。18・19は坏になると考えられる。共に灰白色の色調を呈する。17はP11から出土した青磁碗の口縁部である。口縁部外面には雷文、体部外面には草花の文様が印刻されている。内外面ともオリーブ色の釉が施されている。

Fig. 52-1～12：1はP12から出土した土師質土器の小皿である。平坦な底部から体部は内弯気味に立ち上がり伸びる。色調は橙色を呈する。2はP13から出土した須恵器の底部である。底部外面には輪高台を張り付けており、坏になると考えられる。3はP14から出土した青磁の体部片である。外面には連弁文が施されおり、オリーブ灰色の釉が薄く施釉されている。貫入は入らない。4はP15より出土した染付の皿である。内面見込み部分には玉取獅子の文様が描かれている。全体に明青灰色の釉が薄く施されているが、高台畳付の部分は釉を掻き取っており、砂粒が付着している。小野氏編年のB1群に属する。5はP16より出土した青磁の体部片である。外面には連弁文が施されており、

碗と考えられる。オリーブ灰色の釉が薄く施釉されており、全体には細かい貫入がはいる。6はP17より出土した口縁が外反する端反りの白磁皿である。全面に透明度の高い灰白色の釉が施されているが、高台壘付の部分の釉は掻き取っている。高台内面には白色砂粒が付着している。森田氏編年のE-2類に属する。7はP18より出土した土師質土器片である。口縁部から体部にかけて残存しており、坏になると考えられる。口縁部外面には煤が付着している。8はP19より出土した土師質土器である。底部のみ残存している。9はP20より出土した土師質土器片である。共に摩耗が著しいため調整は不明である。10はP21から出土した備前焼の擂鉢である。口縁部から底部途中まで残存する。平坦な底部から体部にかけてはやや丸みを持ちながら立ち上がる。口縁部は肥圧するが端部は平坦に成形しており、内面には6条単位の条線が入る。編年ではⅢ期の製品に属する。11はP22より出土した土師質土器の小皿である。平坦な底部から斜め上方に伸び口縁部に至る。12はP23より出土した元豊通宝である。外径2.35cm、内径1.85cmを測り、初鑄年次は北宋時代（1078年）のもので読み方としては順読である。（竹村）

10) 包含層出土遺物 (Fig. 53~68)

自然流路を除く遺物包含層の場合も、浮流性のシルトや粘質土を堆積成分とするうえ、中位段丘面に対する削整や搬土等が加わり、純粹な時代累層を留めていない。これら第I層（表土）から第Ⅷ層に到る各層で、縄文後期から中世に到る範囲内での各様の遺物混在が見られる。このため、包含層出土遺物の図示や説明に際しては、全層を一括して扱い、各遺物の出土層位は法量表に付載する。ここでは、奈良時代から中世に属す出土遺物の中で、遺存の比較的良好なものを主な対象とし、時代推定の依拠を欠く若干の遺物や、上位の堆積層に混在した少数の近世遺物を付け加える。これらの遺物は、土師器や須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、鉄釉陶器、その他の国産品の他、中国産の白磁や青磁、青花磁等に大別し得る。

土師器 (Fig. 53~56)

土師器には、皿、坏、蓋、甕、羽釜、鍋の器種が有る。

皿は全て平底型に属す。Fig. 53-1は、素地紐巻き成型後に回転ナデを加え、口縁端を外折した後、端部を小さく上屈する。口縁部の内面に放射状のヘラ磨きを加え、外底をヘラ削整しており、形態や手法が畿内の製品と同軌である。その他の皿類は、口縁を低角度で直線的に立ち上げる形態 (Fig. 53-2~9) と、高角度で内弯気味に立ち上げる形態 (Fig. 53-10・12~16) に分かれる。前者に属す7~9ではヘラ切り痕、後者に属す15・16では糸切り痕を留め、回転台の旋向は全て右旋である。なお、15の外底には、糸切りに続く棚板安置の痕跡と見られる板目状の圧痕が重なる。また、後者は小皿に類するが、14・15では低温焼結を来すと共に海綿状の気孔を群生する点から、アルカリ成分過多の粘土を用いたと見られる。この二個体は、内面に横ナデを加える調整手法の点でも、他の個体とは異質の要素を持つ。

坏についても、全般的に成型段階に於ける素地紐巻きと回転ナデの併用が認められる。これらは、底部の形態によって平底型、輪高台型、及び円盤状高台型に分類し得る。

平底型に属すものは、Fig. 53-17~Fig. 54-6である。この内、Fig. 53-17~19・22・28・29、及びFig. 54-2の底部にヘラ切り痕を認める一方、糸切り痕を遺留するものは、Fig. 54-6の一点に止

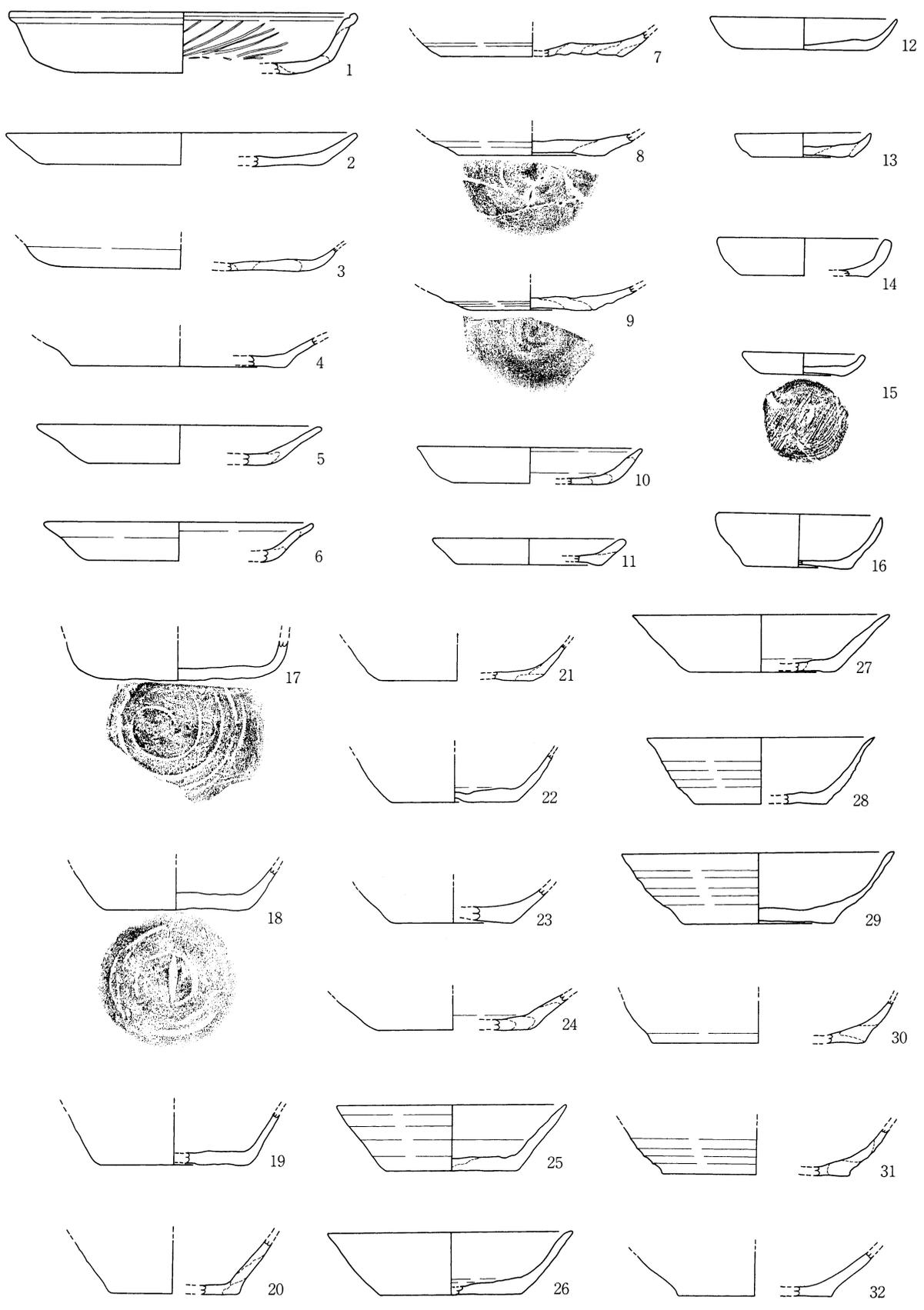


Fig. 53 第 I 区包含層出土遺物 1

まり、回転台の旋向は全て右旋である。Fig. 53-17は、丸みを持つ底部際より体部を垂直に立ち上げるタイプであり、一点のみの出土である。この外底に遺留する鮮明な高速旋回のヘラ切り痕（5回転以上）は、注目に値する。Fig. 53-18～20では体部の立ち上げ角度が強めであり、Fig. 53-21～Fig. 53-24は体部を斜直するタイプと見られるが、やはり口縁部を欠く。Fig. 53-25～27は体部を斜直し、29～31では体部の中位が僅かに膨らむ。Fig. 54-3～6では、体部を僅かに内弯する。なお、Fig. 54-6の個体は、小皿に類するFig. 53-16の個体と形態的相似の関係に在る。また、未焼結ながらアルカリ過多の粒子成分を含み、内底面に横ナデを加える点や、外底の糸切り痕に板目状の圧痕が重なる点では、Fig. 53-15の個体と同軌である。

輪高台型に属すものは、Fig. 54-7～20であり、断面に成型時の素地粘接痕や輪高台貼付痕を留めるものが多い。Fig. 54-7は、内面に横斜のヘラ磨きを施し、外底の縁辺に外開気味の輪高台を貼付するタイプであり、畿内の要素を濃厚に具える。しかし、所用の素地は、有機成分を含む二次堆積粘土に石英や長石の粗粒砂を交える常見の種類であり、外見による産地の判断は困難である。Fig. 54-8は、底壁の垂下が著しく、摩耗も激しいが、胎土や焼成は前者と同様であり、本来は相似形の作りを意図した可能性が考えられる。Fig. 54-9は、前二者に比べ底径を半減すると共に、体部の立ち上げ角度が弱まる。この個体も摩耗が激しく、調整痕を留めない。これら三点は、いずれも低温酸化焰の焼成である。Fig. 54-10～12では、須恵器坏との基本的形態差を認め得ないが、いずれも輪高台が狭小であり、一定範囲の低温中性気氛下で焼かれる点を考慮して、土師器に類した。Fig. 54-18は、体部の立ち上げ角度が弱く、外底の縁辺に垂直或いは外開の輪高台を貼付する。これらの内、Fig. 54-13・16の個体では輪高台内部に回転ヘラ切り痕の遺留が見られる。いずれも低温の焼成であり、Fig. 54-13・14が酸化気氛を反映する他は、全て中性気味の焼成結果を表す。Fig. 54-19・20は、細長い輪高台を付ける高足型に類するが、底足部のみの遺存であり、器種が定かでない。輪高台は、前者では垂直、後者では外開とする。焼成気氛は前者が酸化、後者が中性気味である。

円盤状高台型に属すものは、Fig. 54-21～Fig. 55-5であり、復元底径は8cm余りが多い。Fig. 54-21・27やFig. 55-4等の断面には、素地紐巻の粘接痕を累重しており、同様の成型手法の一端を捕捉し得る個体の割合は高い。また、摩耗の軽微な個体では、いずれも内底や体部に水挽き回転ナデの整形痕が認められる。外底に切離痕を遺留する個体は、Fig. 54-24・29及びFig. 55-2・3であり、いずれも回転台右旋のヘラ切りとする。口縁の遺存する個体は、Fig. 54-21の一点のみであり、底部の上縁から立ち上げた体部を、口縁端に到るまで斜直する。他の個体についても、遺存体部は同様の斜直を呈す。これらは全て低温焼成の部類であり、Fig. 54-24・29とFig. 55-1～3が酸化気氛を表す他は、概ね中性気氛を反映している。

蓋は、宝珠形つまみが付く天井中央部の破片を一点得ており、低温酸化焰の焼成である。

甕は、球胴型と長胴型に分け得る。いずれも低温の酸化焰で焼かれ、粘接痕が不明瞭なFig. 56-4の一例を除くと、全て素地紐巻き成型の形跡が見られる。

球胴型に属すものは、Fig. 55-7～12及びFig. 56-4である。Fig. 55-7・8は、外折した口縁の上端を水平に整える形態であり、体部の外面に重弧状の叩き目を留める。また、前者では内面と口縁

外面を横ナデ調整とするほか、口縁外面に「×」形の線刻印を施す。後者では口縁内面に横ナデ調整痕を遺留する。この二個体は、胎土に多量の石英礫砂を含み、赤桃色の珪酸塩粒子や黒雲母片を交える点でも共通性を持つ。Fig. 56-4も、この形態に相似するが、口径が約1/2と小さく、ハケ目は見られない。また、胎土には石英礫砂や黒雲母片を多含する一方、赤桃色系粒子の含有を見ない。Fig. 55-9~12は、口縁を外折した後、端部を鋭く上屈する形態であり、体部外面には縦斜のハケ目を施す。また、これら球胴甕の口縁外面は、全て横ナデ調整痕を留め、摩耗の著しいFig. 55-10を除いて、内面には横或いは横斜のハケ目を遺留する。なお、Fig. 55-9では、口胴粘接部の外面が、回転運動を用いる強圧の横ナデによって凹線状に窪む。

長胴型に属すものは、Fig. 56-1~3・5である。1~3の口縁形態は、球胴型で見た外折口縁の先端を上屈するタイプと同様であり、いずれの外面にも横ナデ調整痕が見られる。1では、内面に横位のハケ目を留める。2・3では、体部外面に縦位のハケ目を施し、3の内面は横ナデ調整とする。5の口縁は、外折して端部を斜平とする形態を採り、その内外面を横ナデする。この個体では、内面に縦斜のナデを施すが、上胴部の素地紐粘接箇所に沿った押さえの圧痕が横列を成し、体部外面には縦位のハケ目を留める。なお、この個体の胎土組成は、Fig. 56-4の小型球胴甕と一致する。また、Fig. 55-9~12の球胴甕とFig. 56-1~3の長胴甕の対比でも、胎土組成の点では基本的な共通性が見られる。ここに図示する甕類11点の内、胎中に炭化有機成分が残留するものは7点に及び、含鉄量も高めと見られることから、所用の可塑剤は二次堆積性の赤土系粘土と考え得る。

Fig. 56-6は摂津型の羽釜である。口縁端下の外壁に厚手の鏝を貼付し、口縁端から鏝部にかけて横ナデを施す。鏝下には浅い凹線を一周し、その下方には、縦位のハケ目を施す。また、内面には横斜のヘラナデ調整を加える。胎土の組成は、赤桃色系粒子を含む上記の甕類と同様であり、胎中には炭化有機成分の残留が見られる。

Fig. 56-7は鍋であり、口径の大きさに比して器壁が薄い。口縁を強く外折した後、斜直に転じ、端部を水平に整える。断面が摩耗するため、成型手法は捕捉し得ない。内面を横ナデとし、体部外面には縦位のハケ目を施す。胎土は優白質の粘土を可塑剤とし、石英、長石粒子の外、若干の黒雲母片等を交える。外面には、使用の結果と見られる炭素附着の形跡を留める。

須恵器 (Fig. 57~65-2)

須恵器には、皿、坏、高坏、蓋、壺、甕、鉢、瓦の器種が有る。

皿は全て平底型に属し、口縁端を内屈或いは上屈する形態と、口縁を端部に到るまで斜直する形態に分かれる。前者はFig. 57-1~10であり、後者はFig. 57-11・12である。2・3の個体では、焼結の進行によって成型痕を捕捉し得ないが、他の個体では、いずれの断面にも素地紐巻きの形跡を認め得る。また、整形手法に関しては、全ての個体で回転ナデの調整痕を留める外、8の内底には横ナデ、10の内底には縦横のヘラ磨きを重ねている。いずれの外底にも切離痕の遺留は見られず、5・7~10の外底には、回転ヘラ削り痕を留める。焼成に関しては、10の個体が酸化気味の焼成気氛を反映する他は、全て還元焰焼成を受けており、1・10の胎土が未焼結に止まる他は、全て堅硬な焼結に達している。また、1~6・9・10の個体では、内外両面或いは片面に火襷を生じており、藁敷重ねの窯内置勢を物証する。

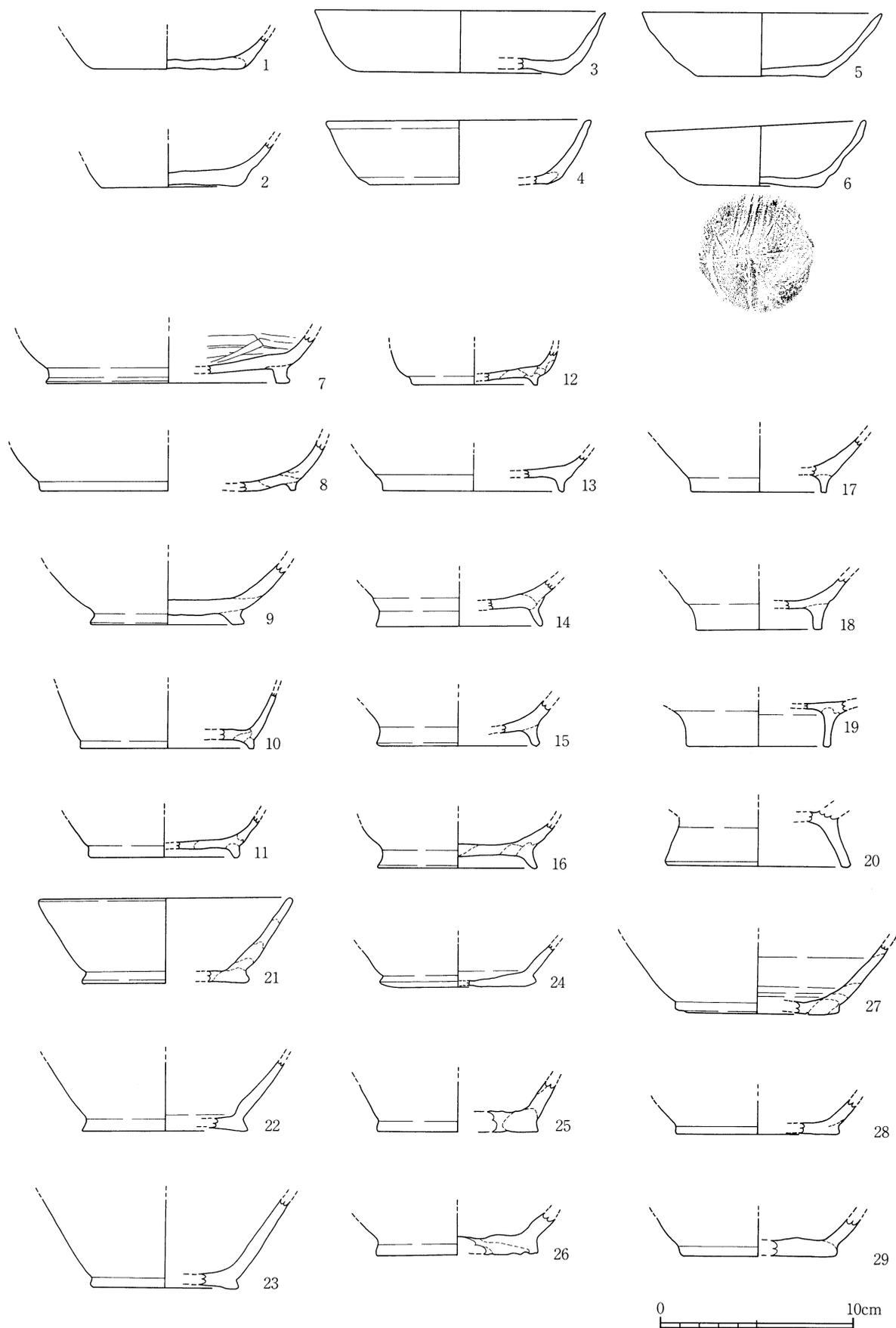


Fig. 54 第I区包含層出土遺物2

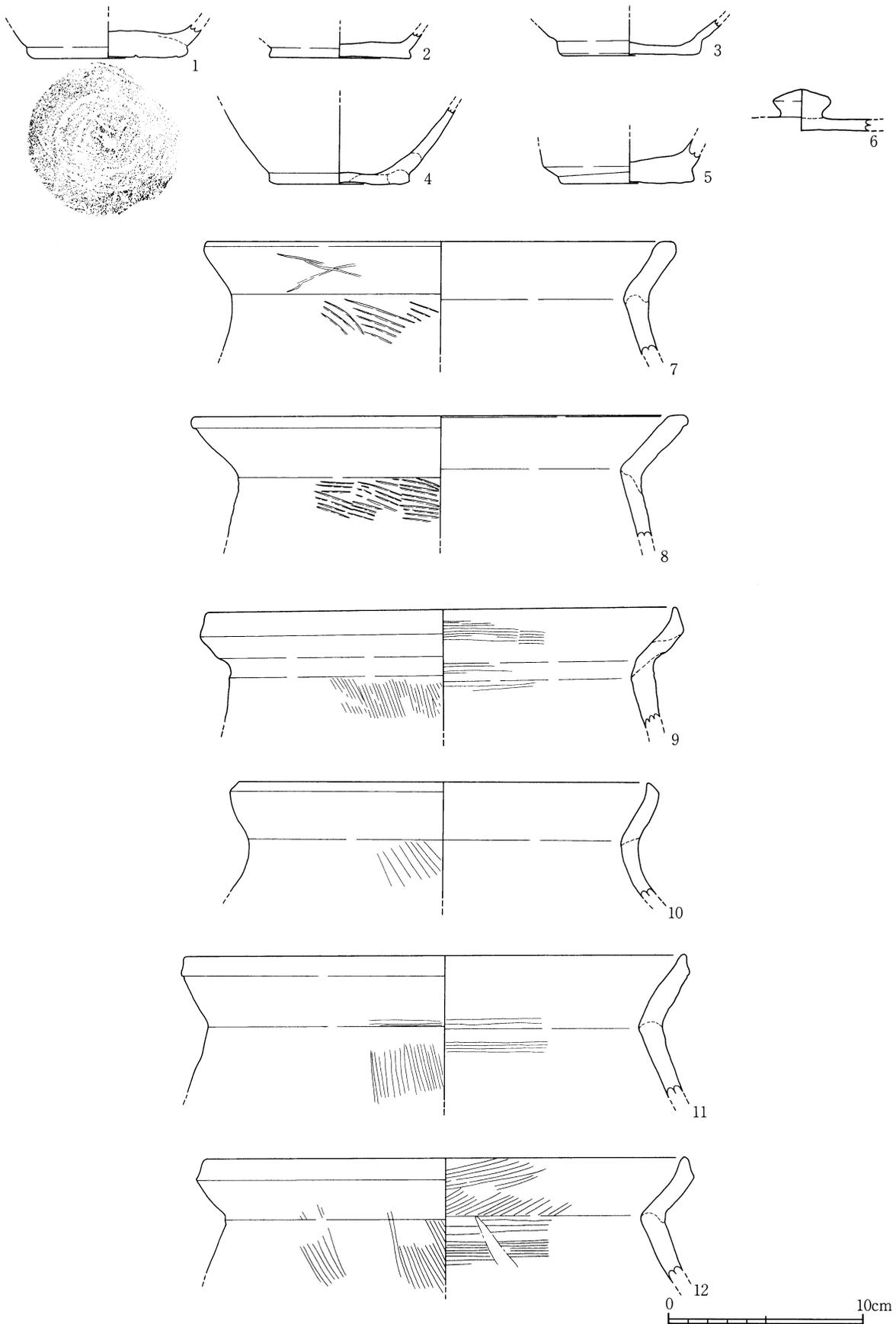


Fig. 55 第 I 区包含層出土遺物 3

坏は、丸底型、平底型、及び輪高台型に分かれる。

丸底型は、Fig. 57-13~19であり、いずれも14cm前後の口径と4cm前後の器高を測る。また、胎中には石英粒子と共に比較的多量の長石粒子を交え、還元気氛ながら低めの温度で焼成し、未分解の炭化有機成分を残留する点でも共通性を持つ。13~15は、底部と体部の境界で曲率を強めるが、全体として弧状の内弯形を呈す形態である。17~19では、底体移行部に弯曲を残し、体部の斜直化が見られる。摩耗の進行や観察条件の制約から、断面に成型痕を捕捉し得る個体は無い。呈色成分の偏在に起因する胎土縞の方向性や、胎土の凹凸状況から推定すると、15の底部については右巻き成型、13・18の体部については左巻成型の可能性が高い。18の底部には回転台右旋のヘラ切り痕を留め、19の底部には粗略なヘラ削り痕が認められる。また、技法との関係は不明であるが、15の個体では、口縁端を除く外表全面に3~4mm径前後の圧痕状の窪みが密在する。なお、Fig. 57-20・21は、丸底型と平底型の間形態であり、それぞれ還元気氛を反映した堅硬質、半硬質の焼結段階に在る。20の底壁には素地紐巻きの間凹を留め、内底面には縦横ナデを施す。21の外底には、回転台右旋のヘラ切り痕を留め、底部際から体部下半には、回転ヘラ削りを加えるものと見られる。

平底型は、Fig. 57-22~28である。いずれも素地紐を巻いて基本形を作り、回転ナデを加えて整

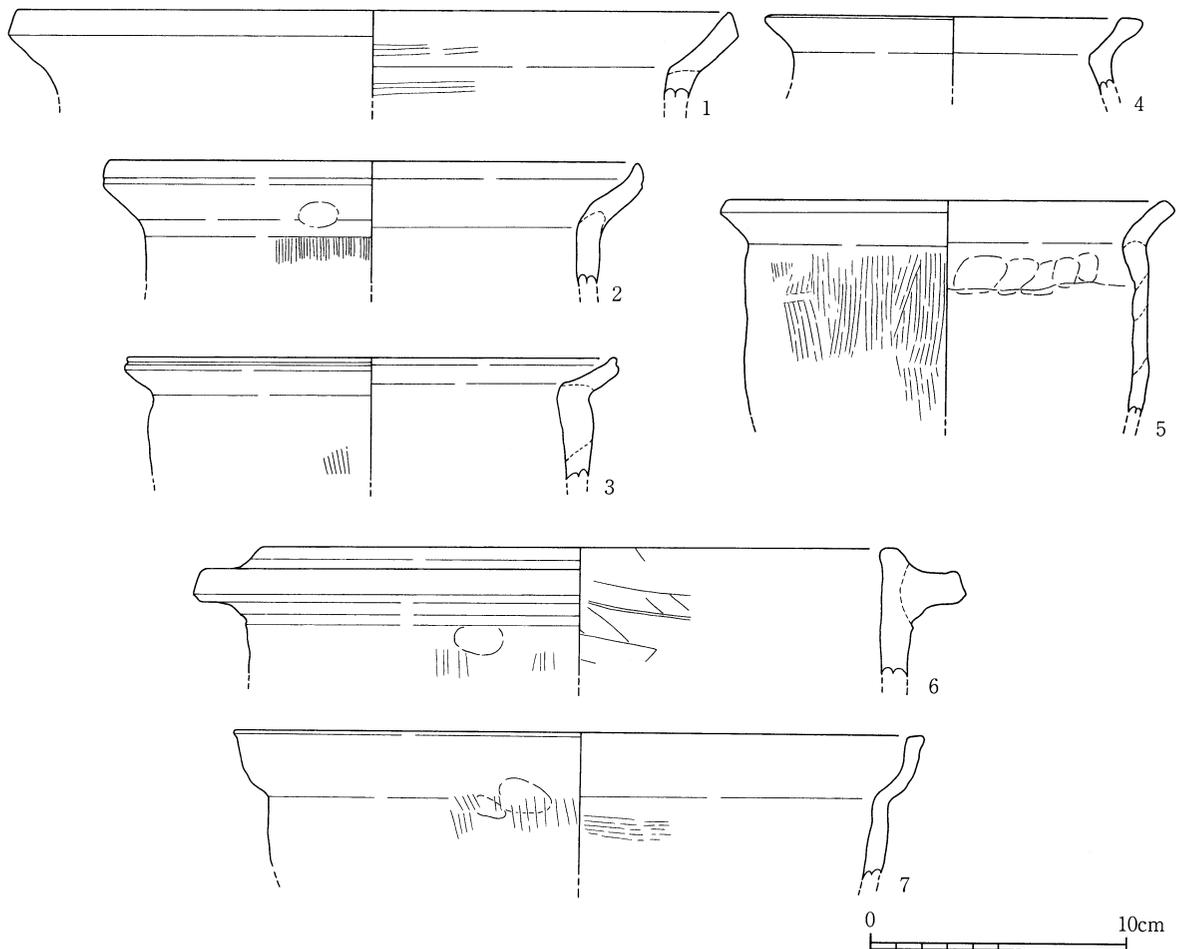


Fig. 56 第I区包含層出土遺物4

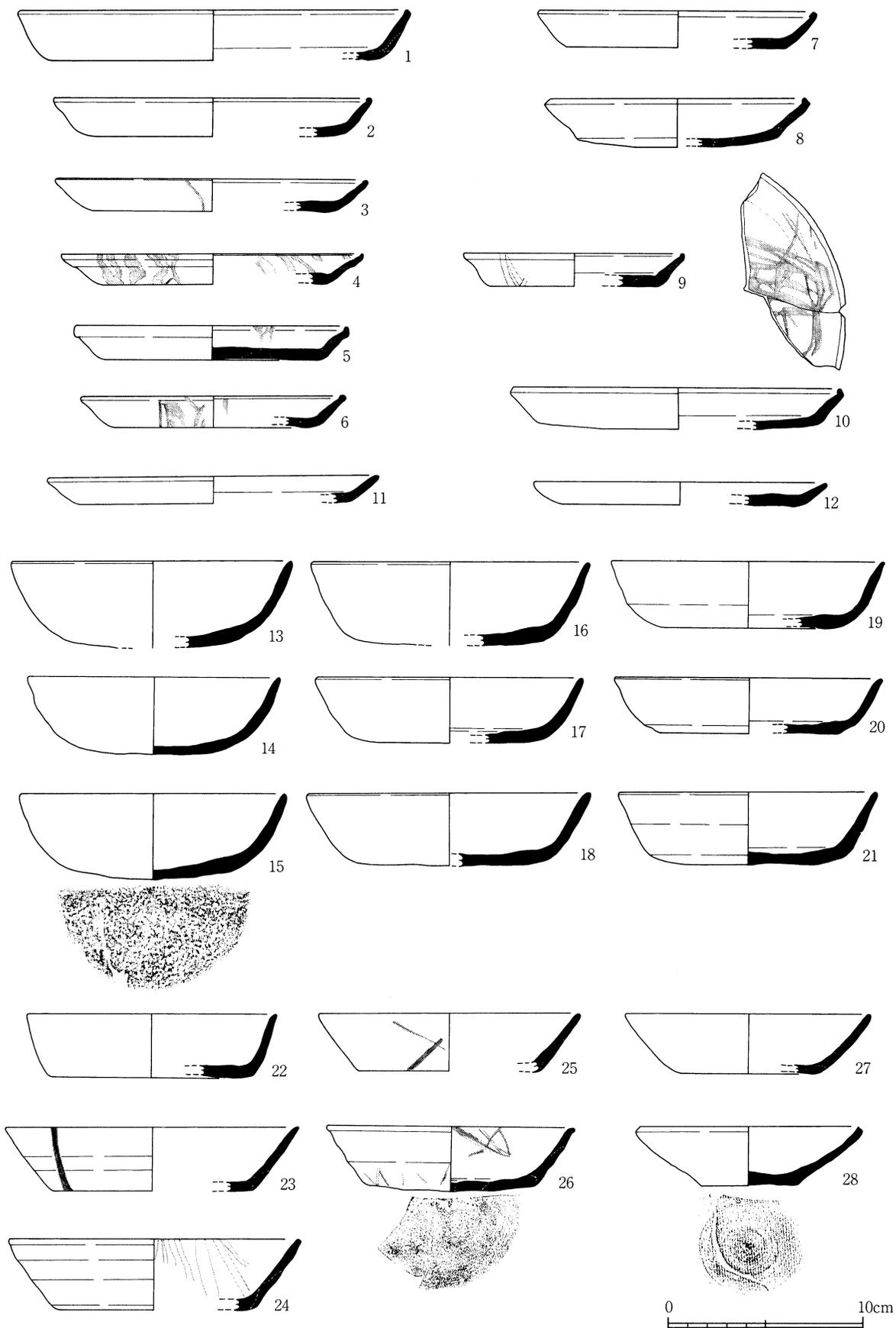


Fig. 57 第 I 区包含層出土遺物 5

形する。全て堅硬な焼結に達しており、22・28が酸化気影の影響を受ける他は、全て還元焰で焼かれる。22は、強い角度で体部を直伸する形態をとり、外底には回転台右旋のヘラ切り痕を留める。

23～26は体部を斜直する形態であり、26の場合は口縁端を短く反る。また、26の外底にも回転台右旋のヘラ切り痕（3回転）が見られる。これら四点の胎土組成や焼結状況は、上述したFig. 57-1～10の皿類と同様であり、内外両面或いは片面に遺留する火襷の発色状況も一致する。また、それら皿類の一点（Fig. 57-8）で、内底の横ナデ調整を見ているが、23の平底坏でも口縁を除く内面に同様の調整痕を認め得る。27の個体も体部を斜直する形態をとるが、胎土の含砂量が多く、火襷も見られない。28は、小径の平底部より低角度で体部を斜直し、口縁附近で内弯気味に転じる形態であり、口縁内端が刃先状に上凸する。この個体の外底には、回転台右旋の糸切り痕が遺留する。胎土は比較的低温で焼結しており、口縁外端の胎表には、気孔を多発する。

輪高台型は、Fig. 58-1～Fig. 59-2であり、形態や法量のみならず、胎土組成の点でも比較的多様性に富む。Fig. 58-1は、内弯気味の体部を経て、口縁を緩やかな外反に転じ、底縁の内側に短小な輪高台を貼付する形態であり、口径に対する器高の割合が最も高い。この器片と胎土や焼成が均しく、同類と見られるFig. 58-2では、遺存体部は口縁に到るまで斜直を呈す。Fig. 58-3・4は、体部を緩弯して立ち上げる形態であり、底縁の内側に輪高台を貼付する。いずれの底壁も若干の下垂を呈す。Fig. 58-5では、底縁内部の深い位置に輪高台を貼付し、内面の回転ナデに直線的な縦横ナデを重ねる。Fig. 58-6の形態も前者に近いが、縦横ナデは見られない。Fig. 58-7・8は、体部を内弯伸した後、口縁端を小さく外反しており、器高が低く、内底に縦横ナデを重ねる。Fig. 58-9も前者に類し、同法量ながら、口縁を外反しない。Fig. 58-10・21・22は、体部を斜直し、外底の縁辺に輪高台を貼付する形態であり、内底に縦横ナデを重ねる。Fig. 58-11～14は、体部を斜直し、外底縁辺の内側に輪高台を貼付する形態であり、法量の大きい13の個体が摩耗する他は、いずれの内面にも縦横ナデが重なる。Fig. 58-15の個体は、高台の復元径が8cmに満たないが、底壁の下垂が著しい。Fig. 58-16は口縁を極端に減厚し、Fig. 58-17・18・20では口縁内端に浅い凹線を一周する。また、Fig. 58-16～19の個体は、長石質成分に富む胎土を共有しており、17・19の内底には、縦横ナデを重ねる。Fig. 58-23・24は、体部を内弯する形態であり、器高が低く、法量も近似する。また、Fig. 58-25・26の胎土は、24の胎土と酷似する。Fig. 58-27は、丸みを持つ底部際を経て体部を斜直し、器厚を漸減する。Fig. 58-28～31は、体部を斜直し、外底の縁辺に短小な輪高台を貼付する。これらは器壁が薄く、耐火度の高い胎土を共有している。Fig. 58-32は、低温の酸化焰焼成に止まり、摩耗が著しい。Fig. 58-33～35は、底径の小さい個体であり、底縁もしくは底縁の内側に輪高台を貼付する。このうち、33と34の胎土は、火襷を生じた皿や平底型坏の胎土と一致する。Fig. 59-1は、高台径が大きく、体部の立ち上げは丸い。Fig. 59-2は、底壁が極端に薄く、体部を低角度で斜直する。

以上の輪高台付き坏について成型手法を綜観すると、断面の状況から素地紐巻の粘接痕を捕捉し得る個体は、Fig. 58-1・2・5・6・8～10・14・18・25・27～30・33～35及びFig. 59-12の18点であり、図示する類器37点の約半数に及ぶ。また、軟胎ゆえに摩耗の著しいFig. 58-4・13・32・34を除くと、全ての個体で回転ナデの整形痕を認め得る。外底に切離痕を遺留するものは、Fig. 58-5・

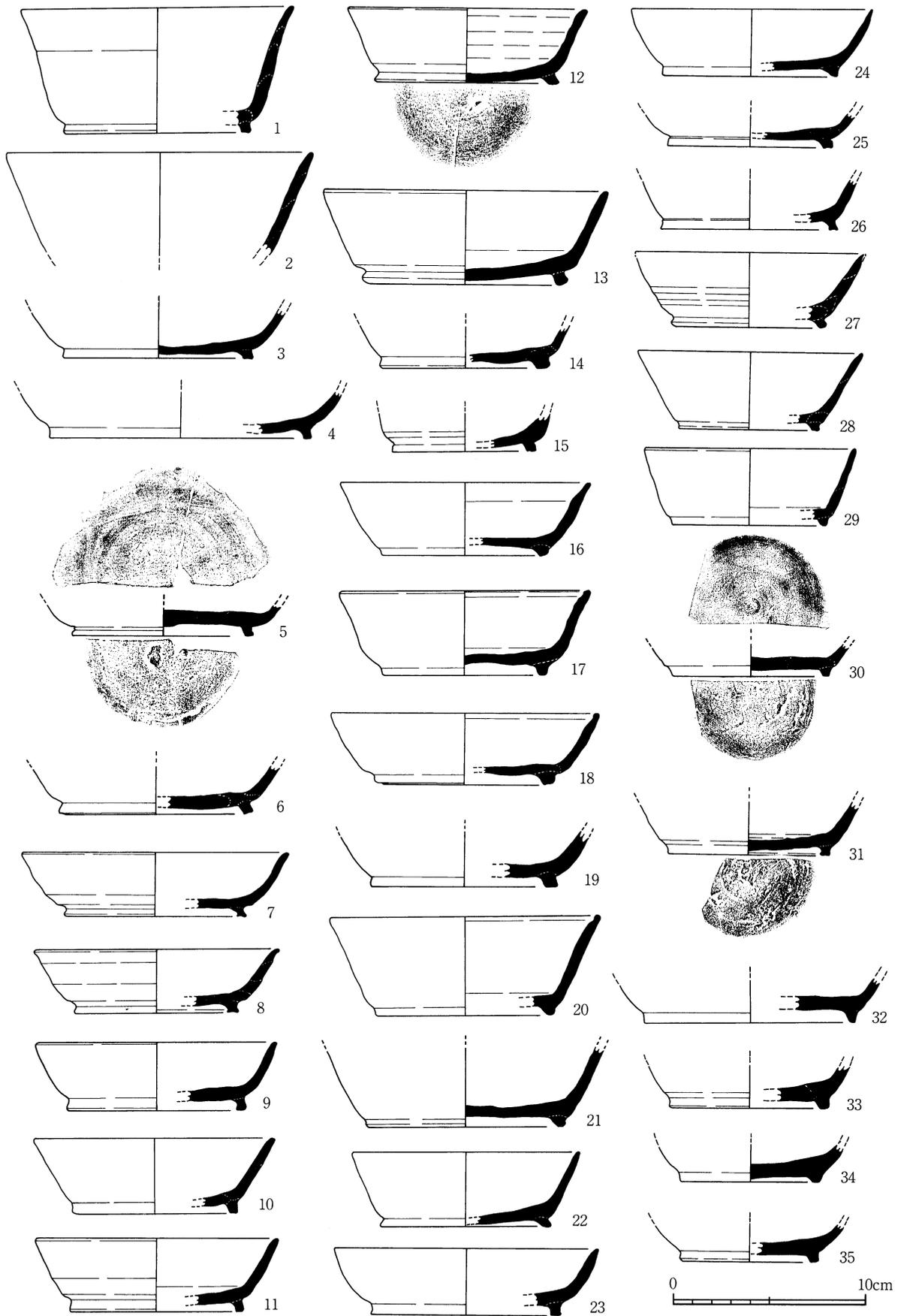


Fig. 58 第 I 区包含層出土遺物 6

13・21・30・31・33・34の7点であり、全て回転台右旋のヘラ切りとする。この他、水挽き痕から回転台の右旋を特定し得る個体には、Fig. 58-7・8・29が有り、左旋を特定し得る個体は、Fig. 58-18の一点に過ぎない。また、Fig. 58-3・6~9・11・12・21・22・23の個体で、外底面に対する回転ヘラ削りの形跡を認め得る。削整が体部下位に及ぶものは、Fig. 58-22の一点を数えるのみである。また、調整手法の点で多見した、内底に縦横ナデ痕を留める個体を整理すると、Fig. 58-5・7~12・14・17・19・21・22の12点であり、類器の約1/3を占める。なお、焼成について概観すると、低温酸化気氛を反映する軟脆質のFig. 56-32、及び中性~還元気氛を反映する未焼結のFig. 58-4・13・20・24・25を除く個体は、還元気氛下で堅硬な焼結に達している。

包含層出土の高坏は、Fig. 59-3の1点のみであり、第V層に所属する。短脚型であり、坏身は浅い。坏底を水平に張り出した後、体部を緩やかに上弯し、口縁端部を軽度肥厚して、口唇面を水平に整える。口縁端下の外面には、約2mm幅の浅い沈線が一周する。脚裾は水平に開き、垂直に屈下した脚端の接地とする。素地紐巻の成型とし、水挽き回転ナデによって器形を整える。また、坏身の外底面には、回転ヘラ削りを施す。回転台の旋向は、いずれの工程も右旋とする。概ね中性焰気氛下で焼かれ、焼結度は低めである。

蓋は形態や法量、胎土組成の点で多様性に富み、円圈状のつまみを貼付する仕様形態の高率が目を引く。Fig. 59-4~9は、宝珠形及び擬似宝珠形のつまみを貼付する仕様形態である。このうち、7では天井部と蓋縁部の境界に段差を設けるが、同様の段差はFig. 60-10でも見られる。8は、水平な天井部を経て蓋縁を直斜降し、肥厚気味の端部を下屈する。9は、広い天井部を経て蓋縁端を曲屈する偏平な形態であり、つまみを欠損する。これと相似の形態は、Fig. 60-11の小型品でも見られる。Fig. 59-10~19は、円圈状のつまみを付ける形態である。遺存部の多い10~14の例では、水平に近い天井部から蓋縁を直斜降し、端部を下屈する。これらの蓋縁径には大差が見られず、疑似宝珠形のつまみを付けるFig. 59-8の値に近い。Fig. 59-20~22は、伏碗形を呈し、21の天井外面には沈線が一周する。23~25では、天井部が緩斜降を呈す。Fig. 59-26~31は、水平な天井部から蓋縁部を直斜降し、端部を下屈する形態である。このうち、30では端部の側縁に沈線状の窪みを一周しており、同様の端部形はFig. 60-9でも見られる。Fig. 60-12は、蓋縁を弯降した後、外反に転じる。Fig. 60-13は分厚い水平な天井部から蓋縁を直斜降し、端部を肥厚気味に下屈する。Fig. 60-14・15では、端部の下屈が極めて軽微である。これらの技法を綜観すると、断面に素地紐巻の粘接痕を捕捉し得る個体は、Fig. 59-9・14・18・19・23~29；Fig. 60-1・2・4・5・7・10・11・15の19点であり、図示する類器43点の半分弱を数える。外面に回転ヘラ削り痕を留める固体は、Fig. 59-8・12~14・21・22・26；Fig. 60-5の8点を数え、静止ヘラ削りの痕跡を留めるものは、Fig. 59-10・11・20の3点に留まる。内面の調整に関しては、Fig. 59-5・7；Fig. 60-4の3点に於いて天井部のヘラ磨きが見られ、放射状ナデ或いは横斜ナデの形跡を留めるものは、Fig. 59-7・8・11・14・26；Fig. 60-4の6点である。次に、使用素材との関係に言及すると、長石質成分に富むFig. 59-10・11・18・20の胎土は、輪高台付き坏に属すFig. 58-16~19の胎土と同質である。また、円圈状のつまみが付くFig. 59-12・13・15・16・17・19と、つまみの有無が不明確な29の胎土は、相互に酷似する。なお、焼成に関しては未焼結品の高率が際立ち、図示する個体の40%に当たる17点に及ぶ。

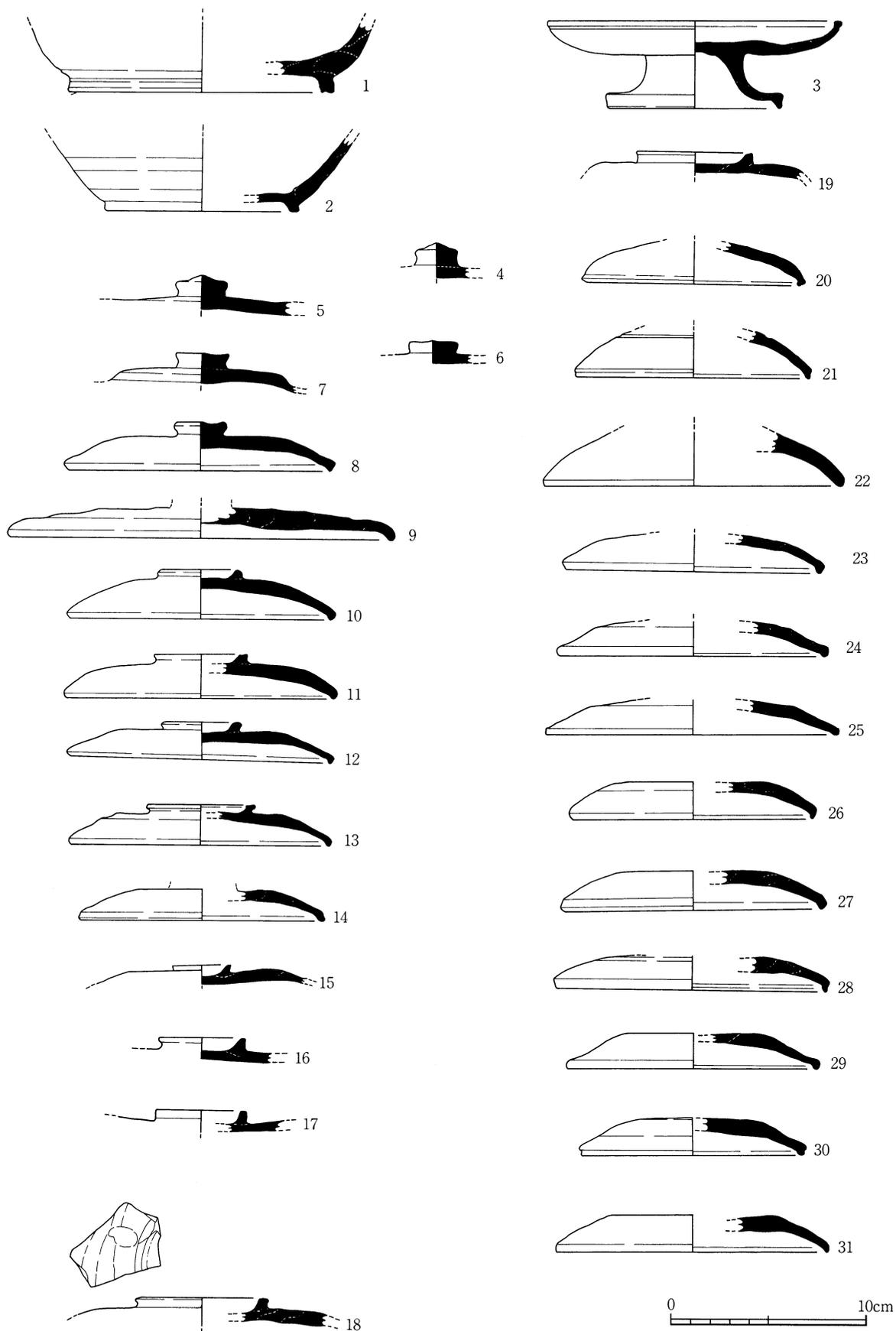


Fig. 59 第 I 区包含層出土遺物 7

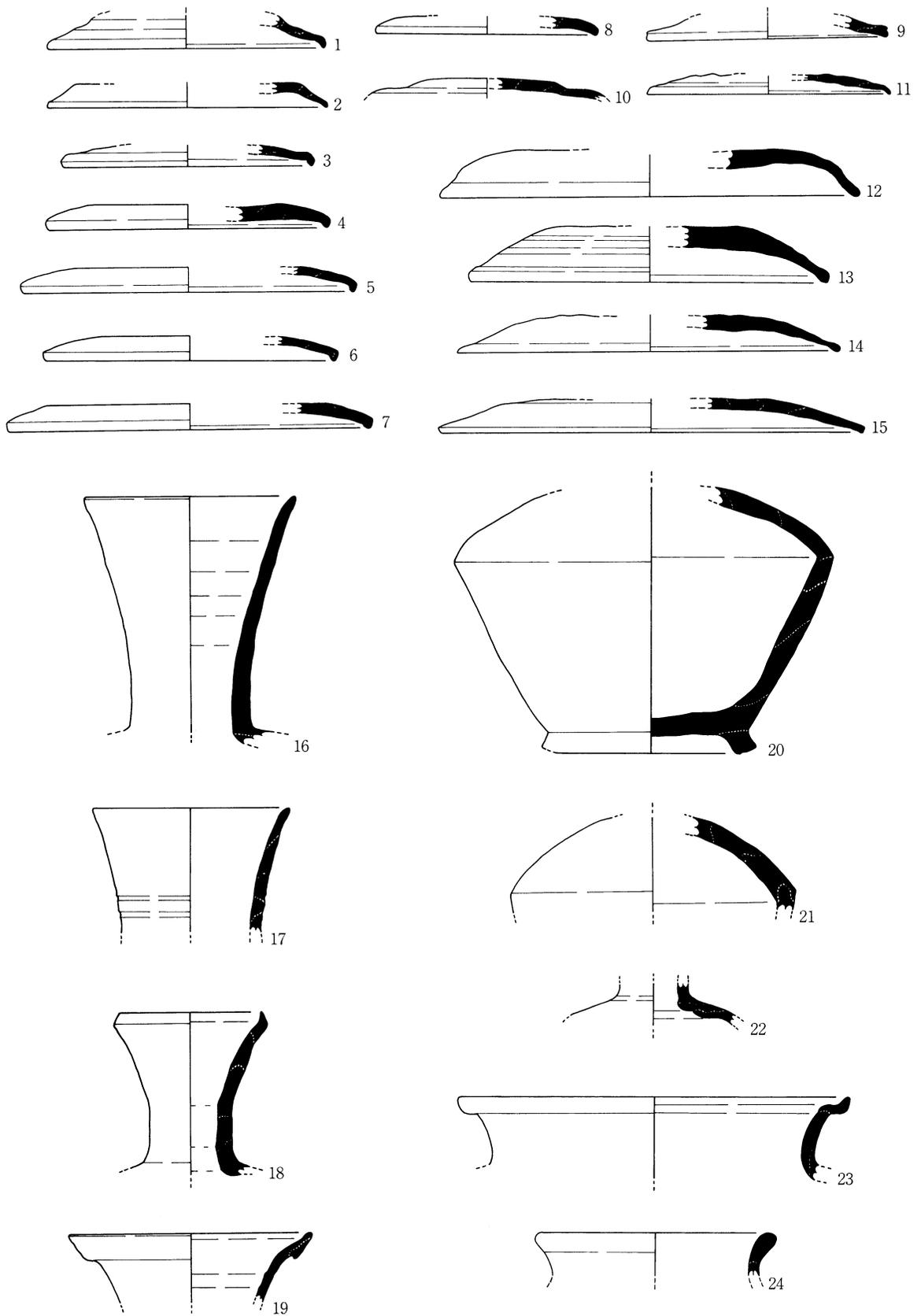


Fig. 60 第I区包含層出土遺物 8

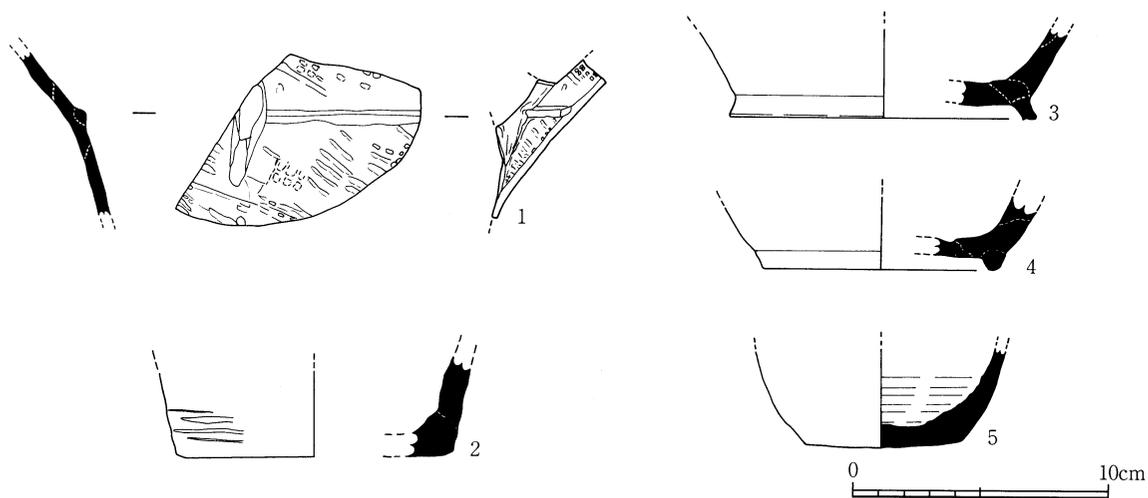


Fig. 61 第I区包含層出土遺物9

これら焼温と還元気氛が不十分な個体以外は、概ね堅硬な焼結に達している。

Fig. 60-16~22は、長頸壺に属す。口頸部の破片は、いずれもラッパ形を呈し、17では頸部の外面に二条の沈線が巡る。18では口縁端を鋭く内屈し、19では強く外反した口縁の端部を外肥する。20・21は折肩型の壺身であり、外底の縁辺に輪高台を貼付する20の壺身は、16の口頸片と同胎である。21は肩部の破片であり、内面に二次被焼の煤が附着する。22は小型長頸壺の肩頸部である。Fig. 60-23は広口折肩壺の口頸部であり、口縁を水平に外折した後、端部を上屈する。24は口縁片であり、円唇形を呈す。Fig. 61-1は、凸帯付き有耳壺の肩部片と見られ、器壁の外面には平行叩き目と格子叩き目が混在し、凸帯を貼付した後、耳部を上貼りしている。Fig. 61-2は平底壺の下部片であり、外面の底部際に平行叩き目を遺留する。Fig. 61-3・4は輪高台付壺の下部片である。Fig. 61-5は小型平底壺の下部片であり、体部内外面に回転ナデ痕を留め、底部際にはヘラ削りを施す。焼結の進行によって成型痕を捕捉し得ないFig. 60-19；Fig. 61-5を除いて、断面には素地紐巻きの成型痕が認められる。いずれの器胎も堅硬であり、Fig. 60-19が酸化気氛を反映する他は、全て還元気氛下の焼成状態を表している。

甕の小片は多数出土しているが、ここでは比較的大きな破片のみを図示する。Fig. 62-1の口縁片は斜直を呈し、端部が僅かに外凸する。Fig. 62-2の口縁片はラッパ状に開き、口唇面の中央が凹線状に窪む。Fig. 62-3は、肩の張り口部の開きが強く、頸部の屈折が鋭角を成し、体部の内面には布目、外面には綾杉状の叩き目を留める。Fig. 62-4は、丸い肩部を経て口縁を斜直し、口縁端を僅かに外凸する。内外面には、全て回転ナデ痕を留める。Fig. 62-5・6は体部片であり、5の外面には放射綾杉状の叩き目、内面には同心円紋を留め、両面とも部分的に回転ナデを重ねている。Fig. 62-7は水平に近い角度で反る口縁端であり、横向き口唇面が凹線状に窪む。Fig. 63-1は丸底甕の下部であり、外面には平行叩き目を交差し、内面には同心円紋を遺留する。器胎は全面的に火膨れを生じている。胎土の組成自体は、Fig. 62-7の口縁片やFig. 63-2の体部片と同質である。Fig. 63-3の体部片では、外面に縞格子状の叩き目、内面には同心円紋を施す。Fig. 63-4は底部際の破片であり、外面に平行叩き目を施した後、ヘラ削整を加える。焼成は、Fig. 63-2が未焼結に止まり、

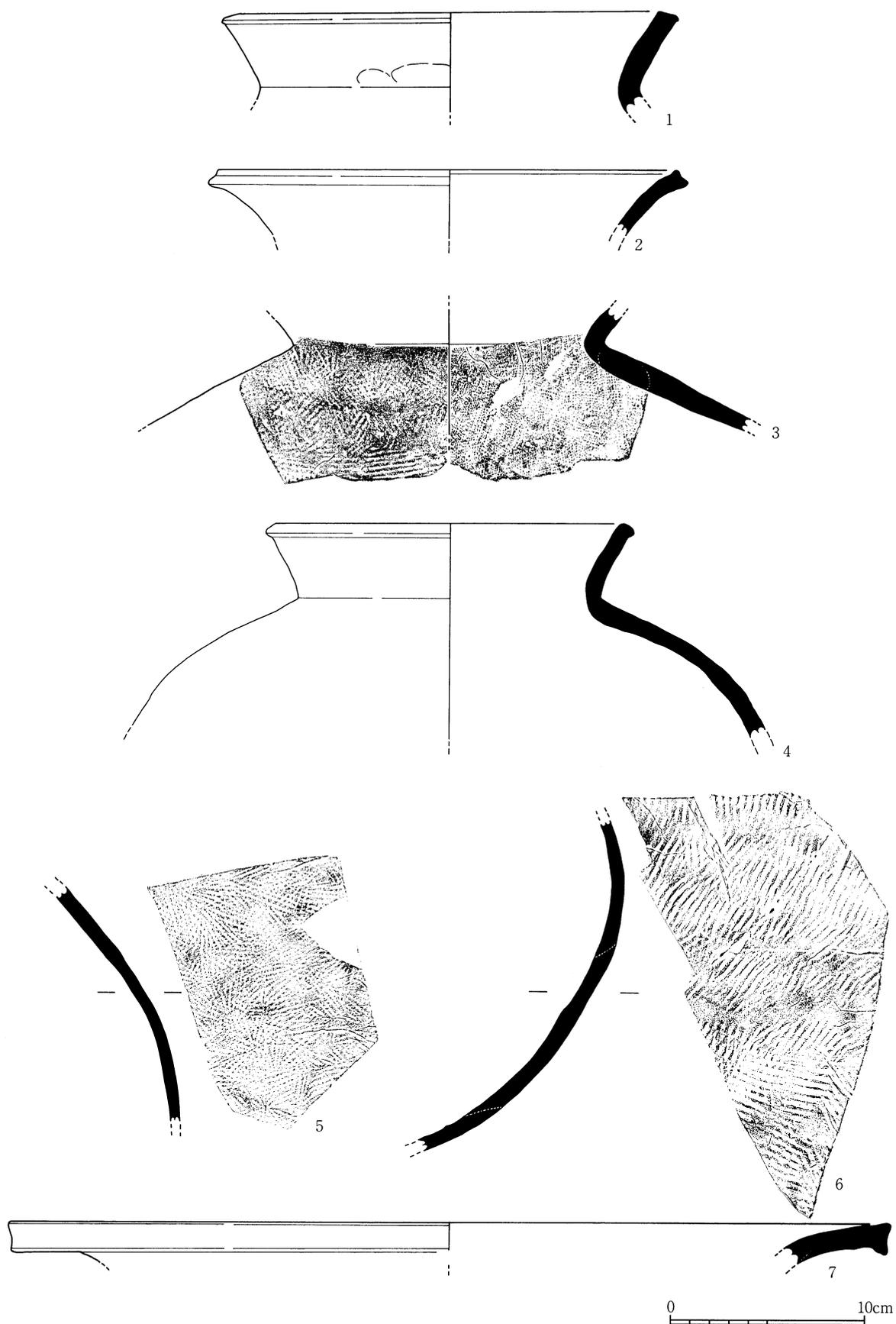


Fig. 62 第I区包含層出土遺物10

Fig. 63-4が中性気氛を反映する他は、全て還元気氛下の焼結に達している。

鉢は東播系の製品が50片出土しており、口縁片が多い。Fig. 63-5~7は口縁の肥厚が軽微で、口唇面が斜平を呈す形態であり、6の内外面と口唇面には約1mm単位の花目状の擦痕が認められる。いずれも低温度帯・酸化焰の焙焼に止まると共に、炭化冷却の形跡を留める。Fig. 64-1・2も口縁の肥厚が軽微な形態であるが、口唇面は弧形を呈す。いずれも高温の強還元焙焼に続く炭化冷却を受け、それぞれの口唇面には、自然釉の煤巻きと胎素地への炭素吸着を生じている。Fig. 64-3~10は、

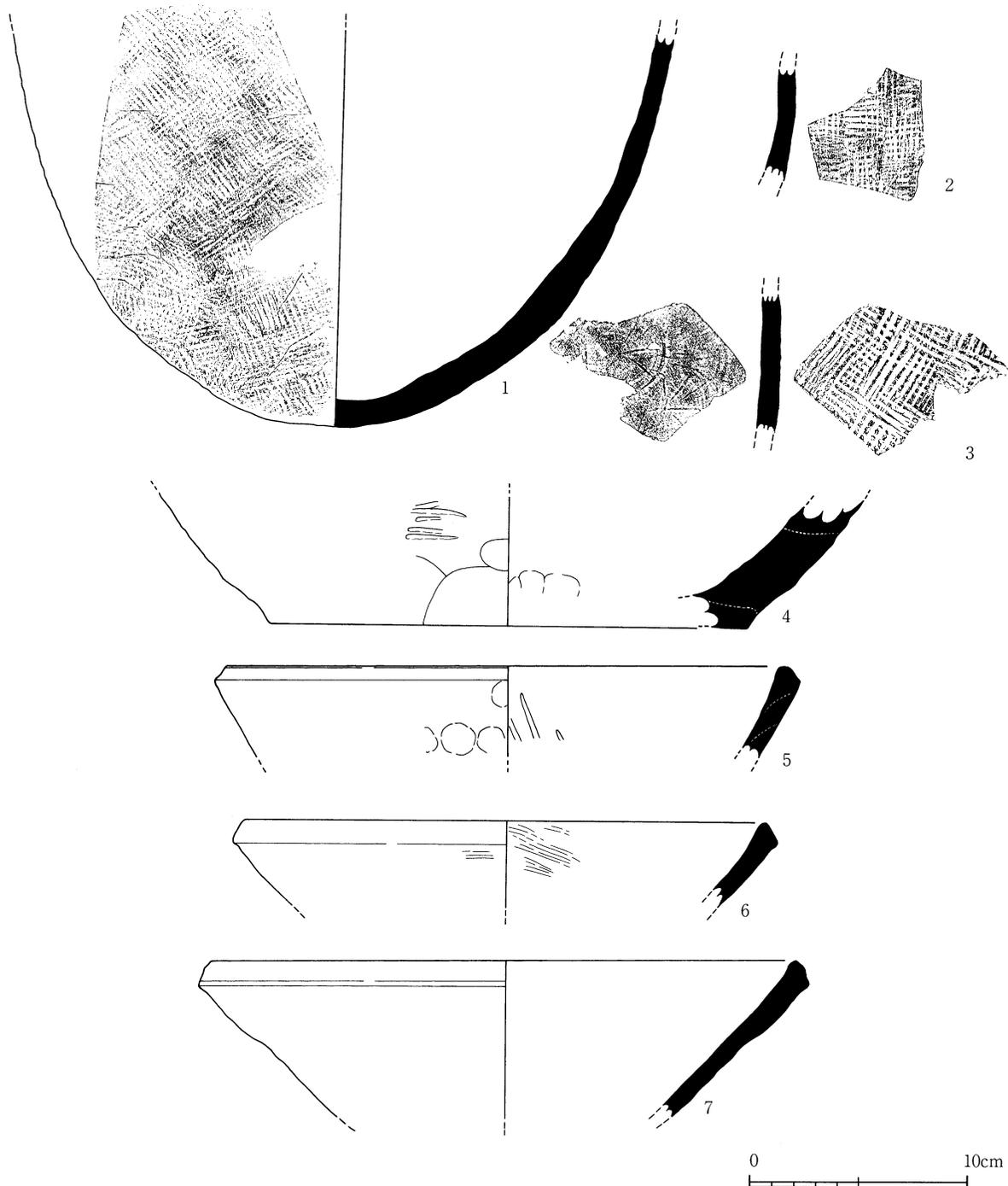


Fig. 63 第I区包含層出土遺物11

口縁を玉縁状に肥厚する形態であり、いずれも肥厚部直下の断面に素地紐粘接の形跡を認め得る。なお、10の口縁には片口部の屈曲が見られる。全て強めの還元焰で焼かれ、器表の被焼状況が均等な4・7の破片を除いて、口唇面或いは外面に炭素吸着を生じている。11・12は下部の破片であり、一様に還元気氛を反映する。これらの胎土は礫砂の含率が高く、いずれも堅硬ながら多孔質である。

瓦類 (Fig. 65-1・2)

平瓦片であり、第I区を通じて二片のみの出土である。いずれも軟質であり、酸化気氛を反映する。1の表面は既に摩耗し、側縁寄りに凹溝が見られる。裏面には菱格子の叩き目を施し、側面には切削痕を微かに遺留する。また、2の破片は、表面に布目を留める。

緑釉陶器 (Fig. 65-3~6)

洛北産緑釉陶器の碗片である。いずれも低温度帯の酸化焰で焼かれ、薄い釉層は銅緑色～黄緑色を呈し、微細な貫入を密生する。3は上部部を内弯した後、口縁を外反に転じる。4では斜直の上部部を経て、口縁を微反する。5・6は円盤状形態の底部片であり、着釉の風化、剥落が著しい。いずれの外底にも、回転ヘラ切りの形跡を微かに遺留する。

灰釉陶器 (Fig. 65-7・8)

瀬戸系の灰釉陶器片であり、共に長石質成分に富み、石英粒子を交える素地を用いて、高温度帯の還元焰焼成を行なっている。7は器種を特定し難いが、段皿類に属す可能性も考えられる。特に外面に於ける着釉の風化、剥落が著しい。8は卸し皿であり、口縁内端に短小な立ち上がりを受け、内面から口縁外面にかけて施釉する。

黒色土器 (Fig. 65-9)

黒色土器碗の体部片であり、口縁に到るまで斜直とする。胎中には石英粒子の他、金雲母片の混在が目立ち、内面のみ炭素吸着を生じている。

瓦器 (Fig. 65-10~12)

和泉型の瓦器碗である。いずれの体部も外面に指頭押圧痕を留めており、10では素地紐巻の成型痕を捕捉し得る。また、10の内面には上位に重圈状、下位に連結輪状のヘラ磨き痕を遺留する。他の二片は摩耗を受け、内面の調整は不明である。

瓦質土器 (Fig. 65-13~15)

13・14は瓦質甕の体部片と見られる。それぞれの外面には3mm、4mm方面前後の格子叩き目を留め、内面については、前者では同心円紋を殆どナデ消し、後者ではナデ調整の痕跡のみを遺留する。また、前者では内外両面、後者では内面に炭化冷却時の炭素吸着を留め、後者の外面には二次被焼による煤の附着が見られる。15は瓦質播鉢の下部片であり、優白質の粘土を可塑剤とする。摩耗の進行により、器表の吸着炭素は殆ど失われている。素地紐巻の成型とし、間隔の狭い九歯の櫛篋で放射状の条線を刻む。

国産焼締陶器 (Fig. 65-16~Fig. 66-2)

Fig. 65-16は常滑産陶器甕の口縁帯であり、断面に素地帯粘接の形跡が見られる。

Fig. 65-17は、備前産陶器の鉢であり、口縁の内端が鋭角を成す。Fig. 65-18~20 ; Fig. 66-1・2は備前産陶器の播鉢である。Fig. 65-18は、微かに肥厚する口縁端を斜平に整える。Fig. 65-19は、

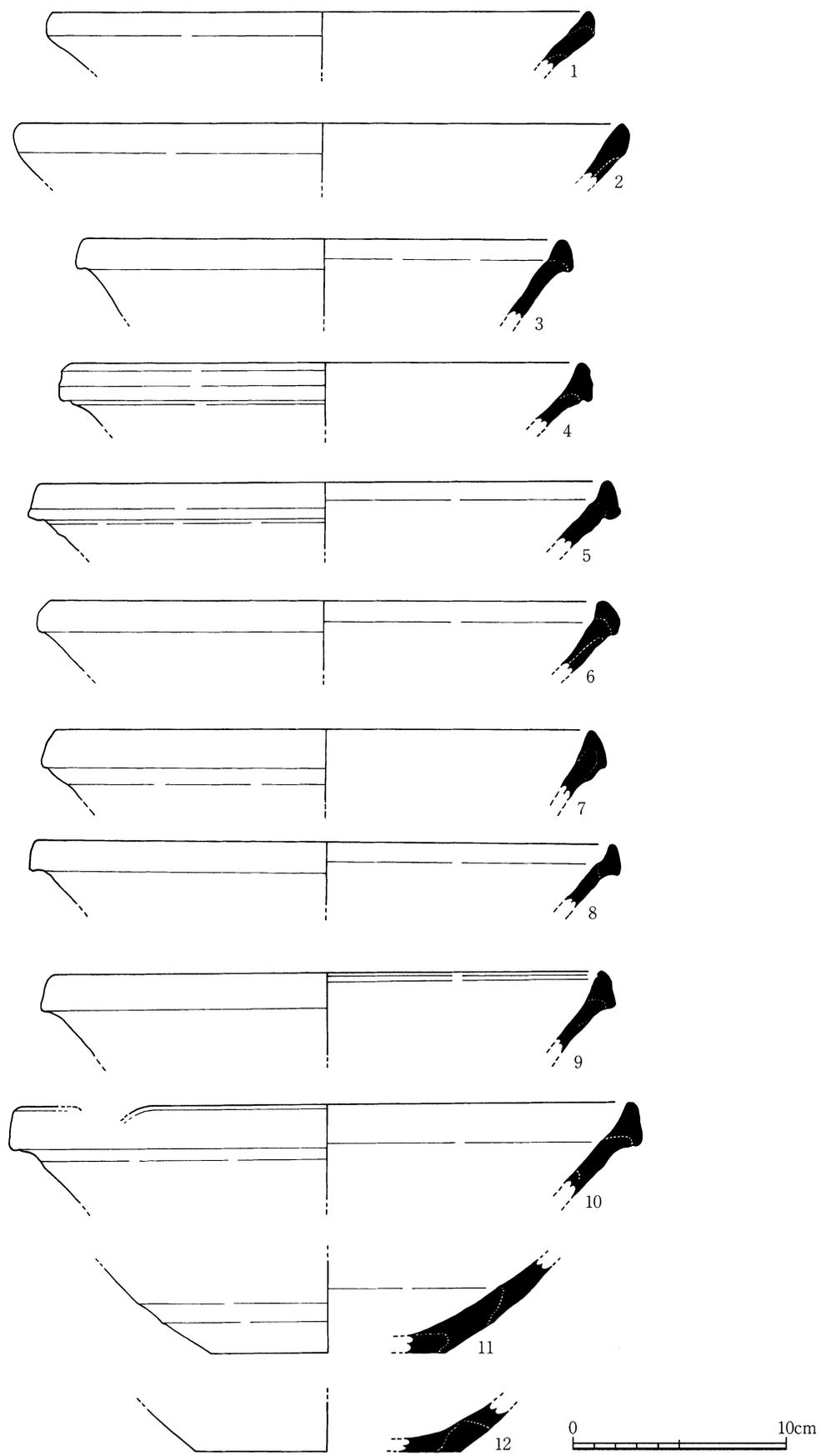


Fig. 64 第 I 区包含層出土遺物12

口縁端を僅かに上屈する形態とし、条刻の単位は九条を数える。Fig. 65-20では、厚手の口縁帯を垂直に付け、その側面に二段の段差を巡らし、口唇面の内端を下凹する。条刻の単位は十条を超すと見られる。Fig. 66-1では、垂直の口縁帯が減厚して長化する。Fig. 66-2は下部片であり、条刻の単位は九条を数える。いずれの胎土にも耐火度の高い白色の粒塊が目立ち、Fig. 65-18が還元気氛を反映する他は、全て酸化気氛下の焼結を表す。

鉄釉陶器 (Fig. 66-3~5)

包含層からは三点の鉄釉陶器片を得たが、いずれも産地は不明である。Fig. 66-3は天目形碗の口縁片であり、雑鉄に富む胎素地は、0.2mm以下の石英粒子を多含する。胎はガラス化の進行段階に在り、灰色を呈す。釉厚は0.2mmを測り、層色は褐色である。Fig. 66-4は天目形碗の底足片であり、輪高台を轆轤左旋の刀削によって削り出す。素地の可塑剤としては、シルト成分を主用すると見られるが、さらに0.5mm径以下の石英粒子を多混する。高温の還元焰で焼かれ、胎色は暗灰色を呈し、約0.2mm厚を測る鉄釉の層色は褐黒色である。Fig. 66-5は皿と見られ、内深外浅形に輪高台を削り出し、全面に鉄釉を施す。高台接地箇所は、珪砂が熔着する。雑鉄に富む胎中には、2mm以下の石英粒子を多含し、還元気味の高温下で焼成した胎の呈色は、やや褐色味を帯びた灰色である。釉層は薄層箇所では褐色、厚層箇所では暗緑色を呈し、釉中には斜長石の針晶を微発している。

貿易磁器 (Fig. 67-1~39)

包含層からは中国産の磁器類を得ているが、やはり第V層からの出土が圧倒的に多く、第I層所属が次位を占める。これらは白磁、青磁を主体とする他、青白磁1点と青花磁2点を含む。白磁には碗、皿、杯の器種が有り、青磁では洗、盤の器種が加わる。青白磁は皿であり、青花磁は碗、皿を得ている。

白磁：Fig. 67-1~4は、玉縁状口縁を持つ碗器の口縁片、及び底足片であり、いずれも白磁碗Ⅳ類に分類し得る。口縁外肥帯の幅には大差を見ないが、1・2・3の順に厚みを増し、3では下凸状の形態となる。また、3の断面には、成型段階に於ける素地折り返しの形跡を捕捉し得る。4の底足片では、内面にのみ施釉が見られ、遺存部の外面は露胎である。釉は粘性が強く、3・4では約0.2mm厚の釉層に、それぞれ粗間、細密な貫入を起生する。また、釉層色は透光質の灰白を基本とするが、2が風化の影響から黄色味を視感させる他は、僅かに青味を帯びる。Fig. 67-5~8は、施釉後に口縁部の釉薬を旋削して剝除する芒口器の一種である。「口禿げ皿」の和名を持ち、白磁皿Ⅸ類に分類される。5~7は、口縁を強く外反する。口縁端下の胎表に若干程度の凹削を施し、端部の旋削剝釉に当たって露胎を尖角構成する技法からは、覆焼（伏焼）時に於ける流釉や熔結の防止を意図した高度な計算を看取し得る。8は底縁部の破片であり、外底を含む内外面は青みを帯びた失透釉に覆われる。また、内底縁辺の胎表には、浅い単圈線を旋劃する。Fig. 67-9・10は、アーチ状の挟入高台を持つ小皿であり、白磁D類に分類される。9は折腰八角壁・四稜縁の形態に復元し得る。内面から口縁外端、或いは面取り壁にかけて透明釉を施すが、高台際まで流釉の及ぶ箇所も見られる。胎は堅緻であり、純白を呈す。10は高台付き底部片であり、高台を含む内外面に透明釉を施す。胎の焼結度は低めである。Fig. 67-11は碗器の口縁片であり、端部を円唇形に外反する。口縁端下の内面胎表には、幅1mmの凸圈線を一条削り残し、内外面に透明釉を施す。Fig. 67-12は杯器に当たると考え

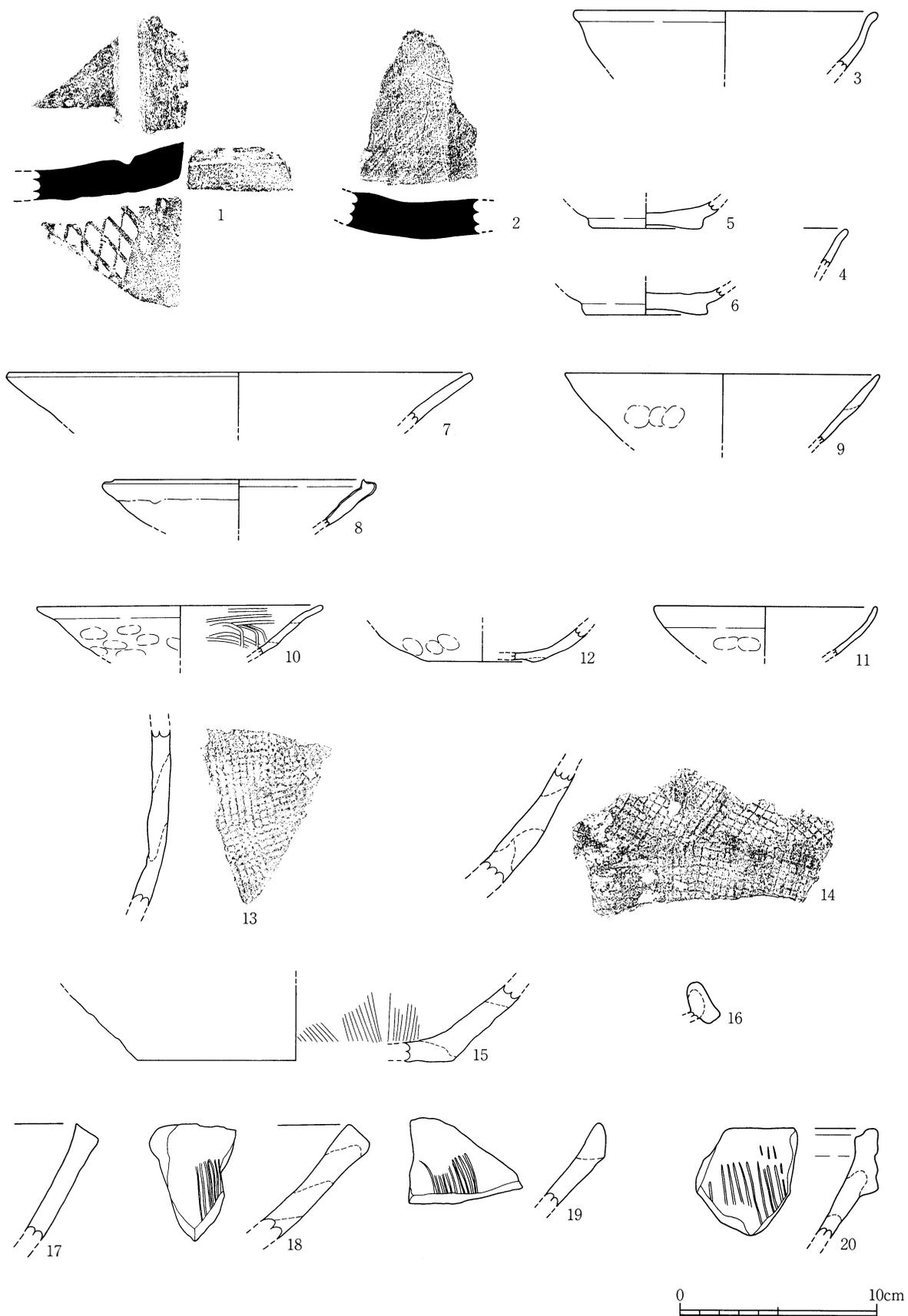


Fig. 65 第 I 区包含層出土遺物13

られる。内弯気味の上体部を経て、口縁を外反する。胎は堅緻で純白を呈するが、挟雑鉄の偏在も目立つ。内外面に透明釉を施し、細密な貫入を生じている。Fig. 67-13は小皿の口縁片である。胎はガラス化を達成し、内外面の釉層には貫入の多発が見られる。Fig. 67-14は小型皿の底足片であり、削り出し輪高台の内部には、顕著な兜巾を遺留する。轆轤の旋向は左旋である。概ね内面から外面高台際にかけての施釉とするが、外面では着釉の状況が不揃いである。Fig. 67-15は、皿の底足片であり、腰部の張り出しが大きい。外底の輪高台際以内と内底中央部を露胎とする他は、透明釉を施す。素地の耐火性が強く、焼結度は低めである。Fig. 65-16~18は薄胎型に類する白磁皿の口縁、及び底足片である。いずれの口縁も外反し、底足片の輪高台は狭小である。胎のガラス化度は高く、灰白色を呈す。高台下端を露胎とする他は、透明釉を施している。

青白磁：Fig. 67-19は折腰型の青白磁と見られる。また折腰箇所の内面胎壁には、劃線を施すものと見られる。内面には蛇の目の露胎を設け、外面の施釉は折腰箇所の下には及ばない。胎はガラス化度が高く、純白に近い。露胎部表面は明褐色を呈す。

青磁：Fig. 67-20~22は、福建南部沿海地区で産したと見られる折腰型青磁器であり、同安窯系青磁皿I類に該当する。いずれも胎色は灰白であり、釉色は透光性の高い灰緑を呈す。20の折腰部内面には劃圈線を施し、その内部に窺点劃紋を配す。外底を露胎とする他は、内外面の施釉とする。底部を欠損する21・22でも、折腰部の内面には劃圈線が見られる。Fig. 17-23~36は、龍泉地区を始めとする浙江省南部諸窯の所産と見られる青磁であり、白胎に属す31の例を除き、いずれの胎土も灰白色の範囲に在る。23~27は碗の下部片であり、このうち、23~25には龍泉窯系青磁碗I類の特徴が明瞭である。高台部の削り出しは、これを欠損する23を除くと全て内浅外深としており、いずれも高台際の張り出しが強い。23の内面では、底部と体部の劃花紋を中間の劃圈線で隔て、施紋の手法は浅い片切り彫りとする。釉の層色は灰緑を呈し、細密な貫入を起生する。この破片は、B-7グリッドの洪積砂礫面で検出している。24の内面でも、底部と体部の境界に浅い劃圈線の施紋が見られる。また、釉質や呈色状況も23の場合と同様である。25の破片では、二面に削り分けた高台底の内側接地としており、接地面以内を露胎とする。強還元気氛の焙焼に続き徐冷を受けた釉層は、微細な気泡を密留して粉青色を呈する一方、貫入の起生も細密である。26は下腹を丸く内弯する円腹型に属し、輪高台の内部を露胎とする。高台の外壁から高台際にかけて、釉薬浸掛けの指跡に釉漿を補填した顕著な凹痕の横列を留める。熔釉は粘性に富み、微細な気泡を密留する。釉層色は灰緑を呈す。胎釉中間層の発達が弱く、破碎箇所では釉層の剝離を生じている。遺存部には、施紋が見られない。27の破片では25と同様の高台整形を施すが、より狭細であり、高台底以内を露胎とする。高台際の外面には刻劃紋の一部を遺留するが、紋飾の構成は特定し難い。釉質や呈色状況は、23・24と同様である。Fig. 67-28~30は、刻花蓮弁紋青磁碗の上部片であり、龍泉窯系青磁碗I-5類に分類し得る。いずれも斜直を呈し、外面の胎壁には弁先の鋭利な蓮弁を浮き彫りするが、遺存する範囲では、28を除いて弁稜の刻出が比較的不顕著である。内外面の施釉とし、釉層は微細な気泡を密留して粉青色を呈す。Fig. 67-31は、「外折寛平口蓮弁紋洗」の中国名称を持つ洗浄器の上部片である。口縁を水平に外折する形態をとり、上体部には、刻出した蓮弁の先端を遺留する。含鉄の極少な素地を用いる白胎器に属し、精巧な旋削によって器胎を薄く整える。厚い釉層には気

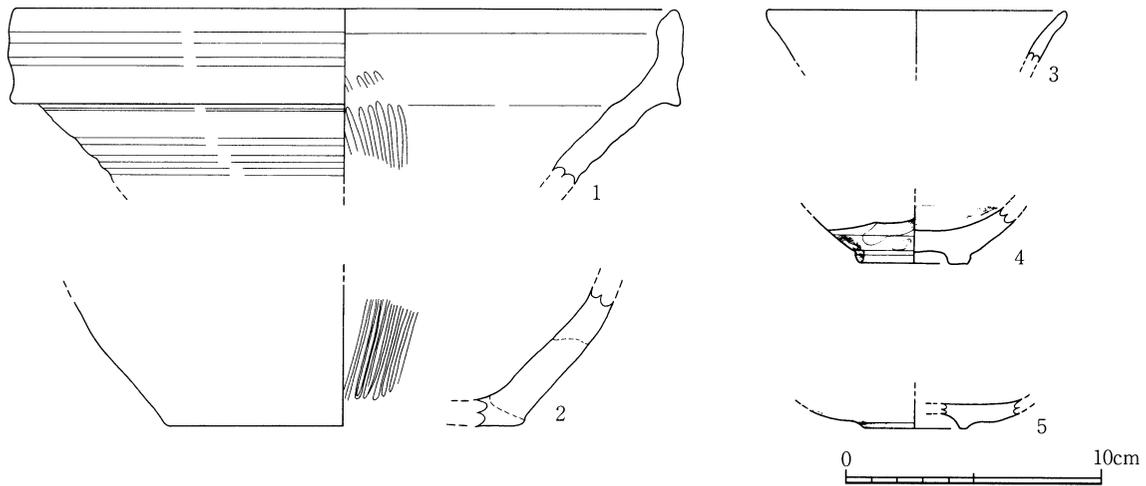


Fig. 66 第I区包含層出土遺物14

泡の層界状分布が見られ、層色は灰緑を呈し、貫入を生じていない。Fig. 67-32も洗浄器の一種であり、口縁を盤形に作る所から、「盤口洗」の中国名称を持つ。口縁を強く外折した後、端部を上屈し、体部の内面には狭幅の槽紋（溝状の紋飾）を施す。微細な気泡が密留する厚い釉層は、淡い緑青色を呈し、貫入の多生が見られる。これら二点と形態や刻紋が一致する洗器の産地出土例は、いずれも龍泉金村第16号窯址の発掘報告に見られ、それぞれ第5トレンチ第1層とY2第1層からの出土としている。Fig. 67-33は底足片であり、底径の大きさから盤類に属すと考えられる。輪高台を内収形に削り出し、全面施釉の後、輪高台内部の着釉を旋削剝除する。釉質や呈色及び貫入の状況は、32の盤口洗と同様である。なお、露胎面は酸化を受けて褐色を呈す。Fig. 67-34は小型器の口腹片であり、杯や小碗等の可能性を考え得るが、帰属を特定し難い。内弯形の腹部を経て、口縁を強く外反し、端部を丸く整える。内外面を覆う厚い釉層には、微細な気泡が密留する。釉質や呈色は、32・33の器片と同様であり、貫入の間隔は粗めである。胎釉は中間層が厚く、結合が強い。Fig. 67-35は小型碗の口縁片であり、外面に雷紋帯を陰刻する。熔釉の粘性は強く、特に着釉の厚い外面では、釉層の剝離を生じた箇所も見られる。釉層には中小の気泡が密留し、層色は淡い緑青を呈す。Fig. 67-36は碗の腹部片であり、外面に施す放射状の線刻は、中国では「菊弁」、日本では「細蓮弁」と主流解釈を異にする紋様の下部と見られる。内外面の釉層は均等に厚く、気泡密度が高目であり、釉層色は淡い灰緑を呈す。Fig. 67-37は、産地不明の青磁器碗である。灰白色の胎層は、基本的に磁器化の段階を迎えているが、未熔の石英粒子を多見する。釉層は薄く、形成の弱い中間層の直上に気泡が留まる。加えて、微細な貫入を密生するため、釉層の剝落を来している。釉色は、若干酸化気味の淡い緑褐を呈す。

青花磁：Fig. 67-38・39は、江西・景德鎮諸窯系の青花磁である。いずれも、白色の胎にコバルト系青料で絵付けし、透明釉を施した後、還元焰で焼き上げる。38は皿であり、胎の焼結は堅緻ながら透光性が低く、耐火度の高い珪酸アルミナを多含するものと見られる。輪高台の削り出しは斜削とし、深めに削る外側壁には跳刀痕を留める。内底の縁周を双圈線で画した後、その内部に獅子滾繡球紋（和名では「玉取獅子文」）を絵付けすると見られるが、双鉤画きの結帯（リボン）と点画

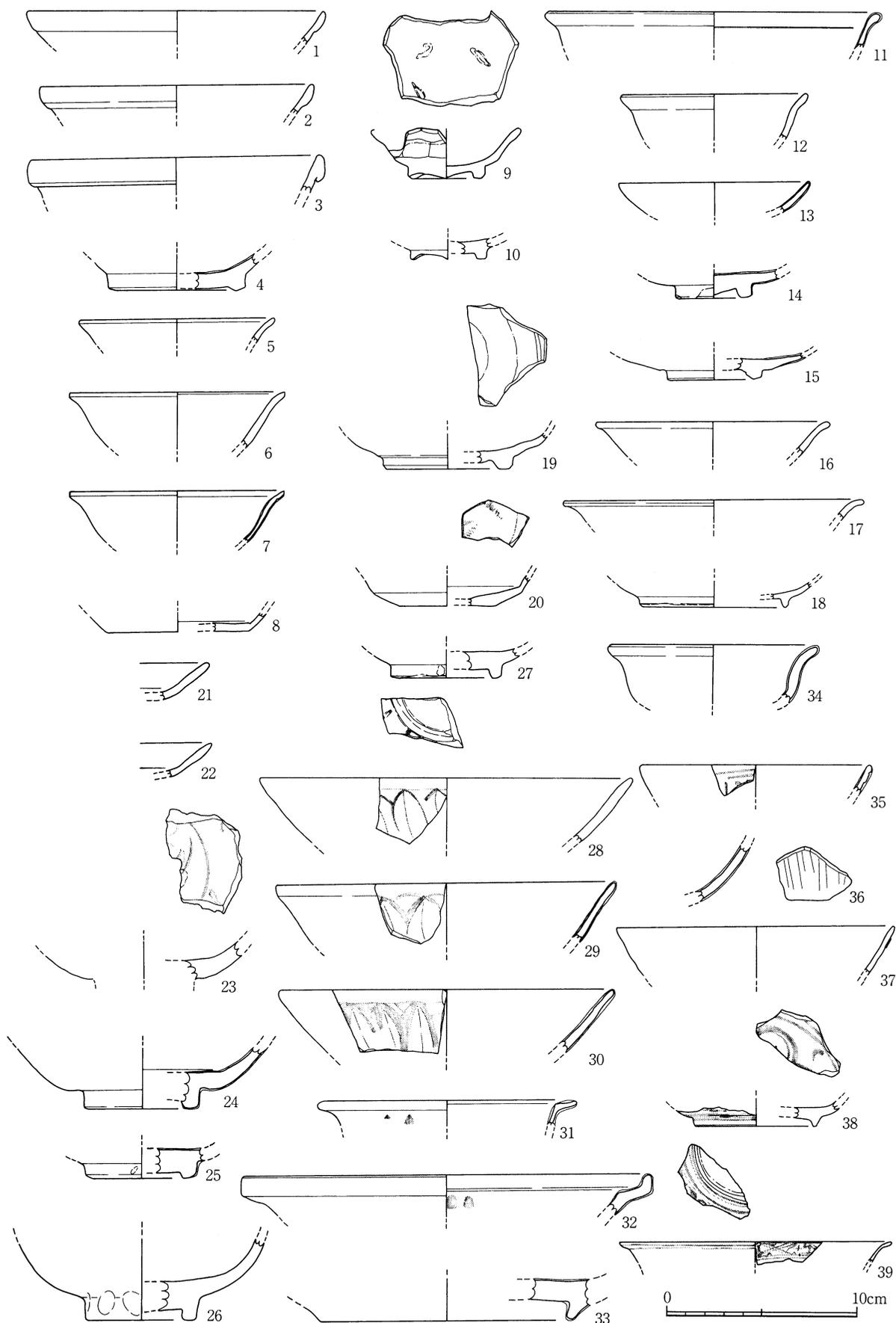


Fig. 67 第I区包含層出土遺物15

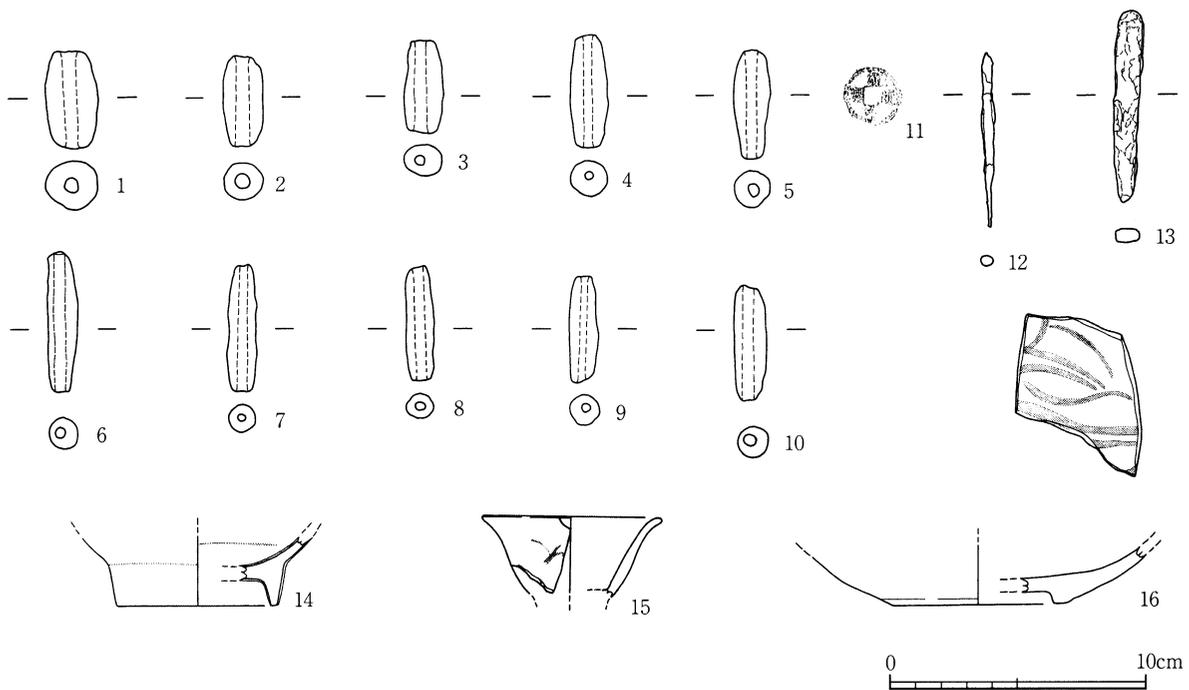


Fig. 68 第I区包含層出土遺物16

雲紋の一部のみが遺留する。外面は、高台際と腰部に各々薄濃の細圈線を一周した後、それらの直下に各2mm幅の単圈線を旋画する。上位の細圈線の直上には、紋飾の一部を僅かに留めるが、その図案構成は不明である。39は端反形を呈す碗若しくは皿の口縁であり、胎の透光性が高い。内面には重十字菱形錦紋を画筆して刃飾帯とし、その直下に単圈線を旋画する。外面には、口縁端下に単圈線の旋画のみを留める。画筆箇所では、全て青料の拡散が釉表に及ぶ。また、内面の刃飾帯では、連続菱形錦地や直下の単圈線が清澄な淡青色を呈す一方、それら以外の重十字や正逆二様のV形間飾に於いて、随所に暗褐色の鉄錆斑を浮現する濃青の発色を見せている。

その他の遺物 (Fig. 68-1~16)

土製漁猟具：包含層からも円管状土錘を得ているが、やはり第V層からの出土が多い。日本では弥生時代以降に通見する形態の土製品であり、時代推定の依拠を欠く所から、とりあえず本節の図版・Fig. 68に収める。個体重量の最大値と最小値は、それぞれ、1の14gと8の4gであり、10個体の平均は6.6gを測る。また、胎土は顕著な多孔質のものが多く、1・7・9が中性気氛を表し、6が炭化を呈す他は、全て酸化気氛を反映する。

金属製品：Fig. 68-11は寛永通宝の銅一文銭であり、第III層の出土である。Fig. 68-12・13は鉄製の工具と見られる。いずれも第I層からの出土であり、錆化が激しい。前者は錐先状の形態であり、後端が角錘形を呈す。後者は、断面が長方形で先端が鋭利な楔状を呈し、後端は薄く丸い。

国産磁器：Fig. 68-14~16は、肥前系若しくは肥前の影響を受けた磁器類である。14は広東型染付碗の下部片であり、外底の高台際と内底の縁周に、それぞれコバルト系青料で単圈線を旋画する。15は染付盃の体部片であり、口縁を外反する。体部外面には、飛雁と見られるコバルト系青料の絵付けを留める。16は掛け分け青白磁皿の下部片である。碁笥底の形態を採り、内面に片切り彫りの

紋飾を刻む。施釉に当たっては、内面に青白釉、外面には粘性の強い白色半透明釉を掛け分け、接地部を無釉とする。

なお、包含層からは、製鉄によって廃出した総計706塊、総重量25.477kgの鉄滓を検出しているが、第V層所属が、圧倒的な数量を占め、686塊、24.902kgに及ぶ。また、製鉄操作に関連すると見られる被熱耐火粘土材の検出は、包含層全体で194塊、1.105kgを計測する。(武吉)

Tab. 11 第I区古代・中世土器量表1

図版番号	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	備考
Fig. 35-1	SB1	土師器	坏	—	(1.4)	7.8	不良	灰白色	
Fig. 35-2	SB1	土師器	坏	—	(1.5)	5	不良	浅黄橙色	
Fig. 35-3	SB4	土師器	坏	—	(2)	6.9	不良	浅黄橙色	
Fig. 35-4	SB4	青磁	碗	—	(1.7)	—	良好	灰白色, 灰緑色	
Fig. 35-5	SB4	土師器	坏	—	(3.4)	6	不良	浅黄橙色	
Fig. 35-6	SB5	土師器	坏	—	3.6	6.7	不良	黄橙色	
Fig. 35-7	SB5	土師器	坏	—	(1.6)	9.4	不良	灰白色	
Fig. 35-8	SB8	瓦器	碗	—	(0.6)	5	良	灰白色	
Fig. 35-9	SB8	白磁	碗	12	(2.3)	—	良好	灰白色	
Fig. 35-10	SB8	青磁	碗	—	(3.6)	(4.5)	良好	灰オリーブ色 (灰白色)	
Fig. 35-12	SB10	陶器	壺	10	(4)	—	良好	灰オリーブ色 (灰色)	
Fig. 36-1	SR1	土師器	坏	—	(2.8)	6.2	不良	灰白色	
Fig. 36-2	SR1	土師器	坏	12.2	3.9	6.3	良	灰白色	
Fig. 36-3	SR1	土師器	坏	15	3.5	10	良	にぶい褐色, 灰黄褐色	
Fig. 36-4	SR1	土師器	坏	—	(2.5)	7.2	良	浅黄橙色	
Fig. 36-5	SR1	土師器	坏	—	(1.8)	(8.8)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 36-6	SR1	土師器	坏	—	(2.7)	(7.8)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 36-7	SR1	土師器	坏	—	(2.2)	(7.6)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 36-8	SR1	須恵器	坏	—	(2.8)	(9.9)	良	灰白色	輪高台
Fig. 36-9	SR1	土師器	坏	—	(2.9)	7.8	不良	灰白色	
Fig. 36-10	SR1	土師器	坏	—	(1.9)	7.4	不良	灰白色	
Fig. 36-11	SR1	土師器	坏	—	(1.8)	5.2	不良	灰白色	
Fig. 36-12	SR1	土師器	坏	—	(1.7)	8.7	良	にぶい黄橙色	
Fig. 36-13	SR1	土師器	坏	—	(2.2)	9	良	にぶい黄橙色	
Fig. 36-14	SR1	土師器	坏	—	(2.4)	8.7	良	にぶい黄橙色	
Fig. 36-15	SR1	土師器	坏	—	(6.2)	6.4	不良	灰白色	
Fig. 36-16	SR1	土師器	手づくね	—	(4.6)	3	不良	にぶい褐色	
Fig. 36-17	SR1	土師器	皿	—	(1.3)	(14.0)	不良	にぶい黄橙色	
Fig. 36-18	SR1	土師器	甕	13.6	(3.3)	—	良	にぶい黄色	
Fig. 36-19	SR1	土師器	羽釜	22	(4.2)	—	良	にぶい黄橙色	
Fig. 36-20	SR1	土師器	羽釜	23.3	(5.2)	—	良好	黒色, にぶい黄橙色	
Fig. 36-21	SR1	土師器	甕	26	(4.3)	—	不良	にぶい黄橙色	
Fig. 36-22	SR1	土師器	甕	29.4	(9)	—	良	灰黄褐色	
Fig. 37-1	SR1	須恵器	蓋	13.6	3.1	—	良好	灰白色	
Fig. 37-2	SR1	須恵器	皿	12.6	2	10.4	良好	灰色	
Fig. 37-3	SR1	須恵器	皿	13.5	2.3	9	良	灰白色	
Fig. 37-4	SR1	須恵器	皿	17.4	2	14.6	良好	灰白色	
Fig. 37-5	SR1	須恵器	坏	—	(2.6)	6.3	良	にぶい褐色, 浅黄褐色	
Fig. 37-6	SR1	須恵器	坏	14.1	3.9	(9.4)	良好	青灰色	輪高台
Fig. 37-7	SR1	須恵器	甕	—	(5.1)	—	良好	灰色	
Fig. 37-8	SR1	須恵器	甕	—	(9.8)	—	良好	灰色, 黒色	
Fig. 37-9	SR1	須恵器	甕	—	—	—	良好	暗灰色, 灰色	
Fig. 37-10	SR1	須恵器	甕	—	(4.6)	—	良好	灰色, 黒色	
Fig. 37-11	SR1	須恵器	甕	—	(2.8)	—	良好	灰色, 灰オリーブ色	
Fig. 37-12	SR1	須恵器	甕	—	(3.7)	—	良好	灰色	
Fig. 37-13	SR1	須恵器	鉢	24.8	(3.6)	—	良好	灰白色	東播系須恵器
Fig. 37-14	SR1	瓦質土器	鉢	—	(3.5)	8.4	良	灰白色・灰色	
Fig. 37-15	SR1	須恵器	鉢	26	(5.4)	—	良	灰黄褐色	東播系須恵器
Fig. 38-1	SR1	瓦器	小皿	8.2	(1.6)	5.4	良好	灰白色	
Fig. 38-2	SR1	瓦器	碗	14.6	(4.4)	—	良	灰色	楠葉型
Fig. 38-3	SR1	瓦器	碗	12.9	(3.8)	—	良	灰白色	和泉型
Fig. 38-4	SR1	瓦器	碗	13.1	3.4	—	良	灰白色, 灰色	和泉型
Fig. 38-5	SR1	瓦器	碗	12.8	3.3	(4.3)	良	灰色, オリーブ黒色	和泉型
Fig. 38-6	SR1	瓦器	碗	13	3.2	(2.5)	良	黒色	和泉型
Fig. 38-7	SR1	瓦器	碗	11.4	(3.8)	—	良	黄灰白色	和泉型
Fig. 38-8	SR1	瓦器	碗	14	(2.8)	—	良	灰白色, 灰色	和泉型
Fig. 38-9	SR1	瓦器	碗	13.6	3.1	(2.4)	良	灰白色, 暗灰色	和泉型
Fig. 38-10	SR1	瓦器	碗	15.8	(7.5)	—	良	黄灰色, 灰白色	和泉型
Fig. 38-11	SR1	瓦器	碗	14.6	(2.7)	—	良	暗灰色	和泉型
Fig. 38-12	SR1	瓦器	碗	15.4	(3)	—	良	暗灰色, にぶい黄橙色	和泉型
Fig. 38-13	SR1	瓦器	碗	14.9	(4.2)	—	良	暗灰色	和泉型
Fig. 38-14	SR1	瓦器	碗	—	(1)	(4.6)	良	暗灰色	和泉型
Fig. 38-15	SR1	瓦器	碗	12.8	3	(3.4)	良	灰色	和泉型
Fig. 38-16	SR1	瓦器	碗	13.2	3.2	(2.4)	良	黒色	和泉型
Fig. 38-17	SR1	瓦器	碗	15.3	3.6	(3.5)	良	灰白色	和泉型
Fig. 38-18	SR1	瓦器	碗	15.4	4.3	(3.3)	良	黒色	和泉型
Fig. 38-19	SR1	瓦器	碗	14.4	3.8	(3.3)	良	灰色	和泉型
Fig. 39-1	SR1	青磁	碗	16.2	(3.4)	—	良好	オリーブ灰色	鎗蓮弁文
Fig. 39-2	SR1	青磁	碗	15	(3.2)	—	良好	灰白色, 緑灰色	
Fig. 39-3	SR1	青磁	碗	—	(2.2)	(6.2)	良好	灰白色, 浅黄色	
Fig. 39-4	SR1	青磁	碗	—	(4.3)	—	良好	灰白色, オリーブ灰色	
Fig. 39-5	SR1	緑釉陶器	不明	—	(1.6)	—	不良	灰白色, オリーブ灰色	
Fig. 39-6	SR1	緑釉陶器	不明	—	(2)	—	不良	灰白色, オリーブ灰色	
Fig. 45-1	SR2	土師器	皿	14.4	1.8	8	不良	灰白色	
Fig. 45-2	SR2	土師器	皿	14.1	(1.8)	10.3	良	灰黄色	
Fig. 45-3	SR2	土師器	皿	14.6	2.3	10.2	良	灰白色	
Fig. 45-4	SR2	土師器	皿	14.5	1.3	10	良	灰白色	
Fig. 45-5	SR2	土師器	皿	14	1.7	8.6	良	浅黄褐色	
Fig. 45-6	SR2	土師器	皿	14.8	1.55	10.2	良	灰白色	

() は現存値及び復元値

Tab.12 第I区古代・中世土器量表2

図版番号	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	焼成	色 調	備 考
Fig.45-7	SR2	土師器	皿	13.3	(1.7)	(9.2)	良	浅黄橙色	
Fig.45-8	SR2	土師器	皿	13.4	1.65	9.9	良	浅黄橙色, 灰黄褐色	
Fig.45-9	SR2	土師器	皿	13.8	1.7	8.4	良	灰白色	
Fig.45-10	SR2	土師器	皿	12.2	1.9	9.4	良	灰白色	
Fig.45-11	SR2	土師器	皿	15.8	1.3	12.8	良	浅黄橙色	
Fig.45-12	SR2	土師器	皿	15.2	1.6	12.6	良	灰白色	
Fig.45-13	SR2	土師器	皿	10.8	2.4	7.2	良好	明褐灰色	
Fig.45-14	SR2	土師器	坏	12	3.7	7.8	良	灰白色	
Fig.45-15	SR2	土師器	坏	12.1	3.6	7.5	良	灰白色	
Fig.45-16	SR2	土師器	坏	13.2	(4.8)	—	不良	にぶい黄橙色	
Fig.45-17	SR2	土師器	坏	14	3.5	7	良	淡黄色	
Fig.45-18	SR2	土師器	坏	14.4	3.2	10.4	不良	灰白色	輪高台
Fig.45-19	SR2	土師器	坏	—	(1.9)	(10.0)	不良	灰白色	輪高台
Fig.45-20	SR2	土師器	坏	—	(3)	(8.4)	不良	灰白色	輪高台
Fig.45-21	SR2	土師器	坏	12.8	5.25	(7.6)	良	浅黄橙色	輪高台
Fig.45-22	SR2	土師器	坏	—	(3.3)	6.9	良好	灰白色	輪高台
Fig.45-23	SR2	土師器	坏	—	(2.5)	7.6	良	灰白, 浅黄色	輪高台
Fig.45-24	SR2	土師器	坏	—	(3)	6.8	良	灰白色	輪高台
Fig.45-25	SR2	土師器	坏	—	(1.9)	(8.0)	良	灰白色	輪高台
Fig.45-26	SR2	土師器	坏	—	(2.3)	8.1	良	灰白色	輪高台
Fig.45-27	SR2	土師器	坏	—	(2.3)	7.8	良	灰白色	輪高台
Fig.45-28	SR2	土師器	坏	—	(2.2)	7.9	良	灰白色	輪高台
Fig.45-29	SR2	土師器	坏	—	(2)	(7.0)	良	灰白色	輪高台
Fig.45-30	SR2	土師器	坏	—	(2.9)	6.2	良	灰白色	
Fig.45-31	SR2	土師器	坏	—	(1.8)	7.7	良	浅黄橙色	円盤状高台
Fig.45-32	SR2	土師器	坏	—	(1.7)	7.6	良	にぶい黄橙色	円盤状高台
Fig.45-33	SR2	土師器	坏	—	(1.9)	8.3	良好	にぶい黄褐色	円盤状高台
Fig.45-35	SR2	土師器	坏	—	(2.2)	7.2	良	灰黄, 灰白色	円盤状高台
Fig.45-36	SR2	土師器	坏	—	(2.5)	7.4	良	にぶい黄褐色	円盤状高台
Fig.45-37	SR2	土師器	小坏	—	(1.5)	4.4	良	浅黄橙色	円盤状高台
Fig.45-38	SR2	土師器	坏	—	(1.7)	4.5	良	灰白色	円盤状高台
Fig.45-39	SR2	土師器	坏	—	(3.5)	8.2	良	灰黄色	円盤状高台
Fig.45-40	SR2	土師器	坏	—	(3.4)	6.4	良	浅黄橙色	円盤状高台
Fig.45-41	SR2	土師器	坏	13.4	4	8	良	にぶい黄褐色	
Fig.45-42	SR2	土師器	坏	12.1	4.3	5.7	良	灰白色	円盤状高台
Fig.46-1	SR2	土師器	甕	17.2	(2.5)	—	不良	にぶい黄橙, 橙色	
Fig.46-2	SR2	土師器	甕	23.3	(3.8)	—	良	にぶい黄褐色	長胴甕
Fig.46-3	SR2	土師器	甕	20.1	(4.8)	—	良	灰黄褐色	長胴甕
Fig.46-4	SR2	土師器	甕	21.3	(4)	—	良	灰黄褐色・にぶい黄褐色	長胴甕
Fig.46-5	SR2	土師器	甕	22	(4.5)	—	良		長胴甕
Fig.46-6	SR2	土師器	甕	17.9	(3.4)	—	不良	緑黒, 黒褐色	球胴型
Fig.46-7	SR2	土師器	甕	26.6	(4.2)	—	良	浅黄橙色	長胴甕
Fig.46-8	SR2	土師器	甕	27	(4.9)	—	良	にぶい黄褐色	長胴甕
Fig.46-9	SR2	土師器	甕	21.4	(7.1)	—	良	灰黄褐色	
Fig.46-10	SR2	土師器	甕	27.6	(7.1)	—	良	灰褐色, 黒色	
Fig.46-11	SR2	土師器	釜	22.6	(6.1)	—	良	黒褐色, 暗灰黄色	
Fig.47-1	SR2	須恵器	皿	20.3	(1.5)	12	良好	灰色	
Fig.47-2	SR2	須恵器	皿	20.7	1.4	16	良好	青灰色	
Fig.47-3	SR2	須恵器	皿	19	(1.7)	—	良好	灰白色, 灰色	
Fig.47-4	SR2	須恵器	皿	16	1.5	13	良好	灰色	内面火襷
Fig.47-5	SR2	須恵器	皿	14	1.8	11.1	良	灰白色	
Fig.47-6	SR2	須恵器	皿	13.4	2	11	良好	灰色	
Fig.47-7	SR2	須恵器	皿	14.1	2	9.7	良	灰黄, 灰白色	
Fig.47-8	SR2	須恵器	皿	15.8	2	15.8	良	灰白色	
Fig.47-9	SR2	須恵器	皿	16	2.5	10.8	良	灰黄色	
Fig.47-10	SR2	須恵器	皿	14.4	1.7	10.2	良好	灰白色	
Fig.47-11	SR2	須恵器	皿	14.7	1.3	12.1	良好	灰白色, 灰色	
Fig.47-12	SR2	須恵器	皿	16.4	1.8	11.7	不良	灰色	
Fig.47-13	SR2	須恵器	坏	12.8	3.05	8.6	良好	灰色	
Fig.47-14	SR2	須恵器	坏	14.4	2.6	9	不良	灰白色	
Fig.47-15	SR2	須恵器	坏	14.6	3	8.4	良好	青灰色	
Fig.47-16	SR2	須恵器	坏	13	4	9.2	良	灰白色	
Fig.47-17	SR2	須恵器	坏	15	(3.5)	—	良	灰色	
Fig.47-18	SR2	須恵器	坏	17.2	3.3	(12.2)	良	灰白色, 灰白	
Fig.47-19	SR2	須恵器	坏	12	3.7	(8.0)	良好	青灰色	輪高台
Fig.47-20	SR2	須恵器	坏	12	4	(8.4)	不良	灰色	輪高台
Fig.47-21	SR2	須恵器	坏	11.6	3.9	(8.2)	良好	褐灰色	輪高台
Fig.47-22	SR2	須恵器	坏	11	3.7	(7.0)	良好	灰白色, オリーブ灰色	輪高台
Fig.47-23	SR2	須恵器	坏	15	4.4	(9.0)	良好	灰色	輪高台
Fig.47-24	SR2	須恵器	坏	15.8	4	(11.0)	良好	青灰色	輪高台
Fig.47-25	SR2	須恵器	坏	16.4	4.95	10	良好	灰色	輪高台
Fig.47-26	SR2	須恵器	坏	14.4	6	(9.7)	良好	灰色, 灰褐色	輪高台
Fig.47-27	SR2	須恵器	蓋	12.6	(2.4)	—	良	灰色	
Fig.47-28	SR2	須恵器	蓋	—	(1.8)	—	良	灰黄褐色	
Fig.47-29	SR2	須恵器	蓋	—	(0.8)	7.4	不良	灰白色	
Fig.47-30	SR2	須恵器	蓋	19	(1.7)	—	良好	灰白色	
Fig.47-31	SR2	須恵器	蓋	—	—	—	良好	灰白色	
Fig.48-1	SR2	須恵器	壺	11.7	(5.9)	—	良好	灰色	
Fig.48-2	SR2	須恵器	壺	—	(5.5)	—	良	灰色, 紫灰色	

() は現存値及び復元値

Tab. 13 第 I 区古代・中世土器量表 3

図版番号	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	焼成	色 調	備 考
Fig. 48-3	SR2	須恵器	壺	—	(3.8)	(10.0)	良好	灰色	
Fig. 48-4	SR2	須恵器	壺	—	(6.4)	(10.6)	良好	灰色	
Fig. 48-5	SR2	須恵器	甕	—	(6.9)	—	良	灰色	
Fig. 48-6	SR2	須恵器	甕	—	(7.9)	—	良好	灰色	
Fig. 48-7	SR2	須恵器	甕	—	(5.8)	—	良好	灰色	
Fig. 48-8	SR2	須恵器	甕	—	(7.8)	—	良	灰色	
Fig. 48-9	SR2	須恵器	甕	—	(7.5)	—	良好	灰色	
Fig. 48-10	SR2	須恵器	甕	—	(9.9)	—	良好	灰色	
Fig. 48-11	SR2	須恵器	甕	—	(13)	—	良好	灰色	
Fig. 48-12	SR2	須恵器	甕	—	(7.4)	—	良	灰色	
Fig. 48-13	SR2	須恵器	甕	20.1	(7.9)	—	良	灰色	
Fig. 48-14	SR2	須恵器	甕	—	(13)	6	良好	灰色・暗灰色	
Fig. 49-1	SR2	須恵器	甕	19	(5.9)	—	良	灰色	
Fig. 49-2	SR2	須恵器	甕	20.2	(3.3)	—	良好	暗灰、褐灰、暗灰色	
Fig. 49-3	SR2	須恵器	鉢	22	(3.2)	—	良好	灰色	篠窯産鉢
Fig. 49-4	SR2	須恵器	鉢	20.2	(2.4)	—	良好	灰色	篠窯産鉢
Fig. 49-5	SR2	須恵器	—	—	—	—	不良	灰白色	(栗)黒書土器
Fig. 49-6	SR2	緑釉陶器	皿	—	(1.1)	(7.4)	不良	灰オリーブ色、灰白色	近江産
Fig. 49-7	SR2	灰釉陶器	皿	—	(0.9)	—	良好	明オリーブ灰、灰白色	段皿
Fig. 49-8	SR2	土師器	碗	—	(0.8)	7.4	良	にぶい黄褐色、暗褐色	畿内産黒色土器
Fig. 50-1	SR3	須恵器	蓋	15	(2.4)	—	良好	灰色・暗灰色	つまみ欠損
Fig. 50-2	SR3	須恵器	坏	13	3.6	8	良好	灰色	輪高台
Fig. 50-3	SR3	須恵器	坏	—	(1.5)	10	良好	灰白色	
Fig. 50-4	SR3	須恵器	甕	—	(7.5)	—	良好	灰色	
Fig. 51-1	P1	土師器	皿	6.8	1.4	4.4	不良	黄褐色	
Fig. 51-2	P2	土師器	皿	6.6	1.8	4.6	不良	灰白色	
Fig. 51-3	P2	土師器	皿	7	1.8	4.8	不良	灰白色	
Fig. 51-4	P3	土師器	坏	14.8	3.1	10	不良	浅黄褐色	
Fig. 51-5	P4	瓦質土器	碗	14.4	(3.6)	—	良	灰白色	
Fig. 51-6	P5	須恵器	皿	16.6	1.1	13	良好	明オリーブ灰色	
Fig. 51-7	P6	青磁	碗	—	(4)	—	良好	灰オリーブ色 (灰色)	
Fig. 51-8	P7	土師器	坏	11.5	4.2	7	不良	黄褐色	
Fig. 51-9	P8	青磁	碗	—	(4)	—	良好	オリーブ灰色 (灰白色)	
Fig. 51-10	P8	土師器	坏	—	(1.7)	7.7	不良	浅黄褐色	
Fig. 51-11	P8	土師器	皿	6.2	1.1	3.8	不良	浅黄褐色	
Fig. 51-12	P9	土師器	坏	—	(2.6)	6.3	不良	浅黄褐色	
Fig. 51-13	P9	土師器	坏	11.2	(3.7)	—	不良	灰白色	
Fig. 51-14	P9	土師器	坏	—	(2.4)	6	—	浅黄褐色	
Fig. 51-15	P9	土師器	皿	7	1.8	5.5	不良	橙色	
Fig. 51-16	P10	土師器	皿	7.1	1.7	4.5	不良	灰白色	
Fig. 51-17	P11	青磁	碗	15.5	(3.5)	—	良好	明緑灰色 (灰白色)	
Fig. 51-18	P10	土師器	坏	—	(2.5)	7.8	不良	灰白色	
Fig. 51-19	P10	土師器	坏	—	(1.9)	7.6	不良	浅黄褐色	
Fig. 52-1	P12	土師器	皿	6.9	1.4	5.4	良好	橙色、にぶい黄褐色	
Fig. 52-2	P13	須恵器	坏	—	(1.7)	(5.2)	良	灰色	
Fig. 52-3	P18	青磁	碗	—	(3)	—	良好	オリーブ灰色 (灰色)	
Fig. 52-4	P16	染付	皿	—	(1.3)	(6.6)	良好	明青灰色 (灰白色)	
Fig. 52-5	P15	青磁	碗	—	(3)	—	良好	灰オリーブ色 (灰白色)	
Fig. 52-6	P16	白磁	皿	14.3	3	(8.3)	良好	灰白色	
Fig. 52-7	P17	土師器	坏	10.1	(3.2)	—	不良	灰白色	
Fig. 52-8	P19	土師器	坏	—	(1.7)	6	不良	浅黄褐色	
Fig. 52-9	P20	土師器	坏	—	(1.7)	7.5	不良	淡黄色	
Fig. 52-10	P21	備前焼	播鉢	27	10.9	14.2	良	にぶい黄褐色	
Fig. 52-11	P22	土師器	皿	7.2	1.5	5.3	不良	浅黄褐色	
Fig. 53-1	Ⅶ	土師器	皿	17.6	3.1	14.6	不良	にぶい褐色	
Fig. 53-2	V'	土師器	皿	18	1.7	14.4	良	にぶい黄褐色	
Fig. 53-3	Ⅶ	土師器	皿	—	(1.3)	12	不良	灰白色	
Fig. 53-4	Ⅶ	土師器	皿	—	(1.2)	10.9	不良	淡黄色	
Fig. 53-5	V'	土師器	皿	14.5	2	9.4	不良	灰白色、淡橙色	
Fig. 53-6	Ⅰ	土師器	皿	13.6	(2)	—	不良	淡黄色	
Fig. 53-7	Ⅶ	土師器	皿	—	(1.3)	9.2	不良	灰白色、淡橙色	
Fig. 53-8	Ⅶ	土師器	皿	—	(1.1)	7.4	不良	灰白色	
Fig. 53-9	V'	土師器	皿	—	1.2	6.2	不良	浅黄褐色	
Fig. 53-10	I	土師器	皿	11.4	1.8	7.7	不良	浅黄褐色	
Fig. 53-11	攪乱	土師器	皿	9.8	1.4	7.3	不良	にぶい橙色	
Fig. 53-12	V	土師器	皿	9.5	1.6	6.4	不良	橙色	
Fig. 53-13	V	土師器	皿	7	1.2	5.1	不良	浅黄褐色	小皿
Fig. 53-14	V	土師器	皿	8.5	1.9	6.5	良	にぶい橙色	小皿
Fig. 53-15	採取	土師器	皿	6	1.1	4.1	不良	浅黄褐色	小皿
Fig. 53-16	V	土師器	皿	7	2.8	5.3	不良	浅黄褐色	小皿
Fig. 53-17	V	土師器	坏	11.2	(2)	8	良	灰白色	
Fig. 53-18	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.2)	7.2	良	灰白色	
Fig. 53-19	V'	土師器	坏	—	(3.2)	7.6	良好	灰白色	
Fig. 53-20	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.7)	6.5	不良	灰白色	
Fig. 53-21	V	土師器	坏	—	(1.9)	7.8	良	灰白色	
Fig. 53-22	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.5)	6.4	不良	灰黄色	
Fig. 53-23	Ⅶ	土師器	坏	—	(1.7)	6	不良	灰白色	
Fig. 53-24	Ⅶ	土師器	坏	—	(1.8)	7.5	良	淡黄色	
Fig. 53-25	V	土師器	坏	11.6	3.4	6.7	不良	浅黄褐色	

() は現存値及び復元値

Tab. 14 第I区古代・中世土器法量表4

図版番号	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	備考
Fig. 53-26		土師器	坏	12.4	3.2	7.2	不良	浅黄橙色	
Fig. 53-27	採取	土師器	坏	13	2.9	7.4	不良	灰白色	
Fig. 53-28	イ	土師器	坏	11.6	3.4	6.7	良	灰白色	
Fig. 53-29	Ⅶ	土師器	坏	13.8	3.7	7.6	良	灰黄色	
Fig. 53-30	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.2)	10.8	良	にぶい黄橙色	
Fig. 53-31	Ⅵ	土師器	坏	—	(2.5)	9.5	良	灰白色	
Fig. 53-32	V	土師器	坏	—	(2.1)	7.8	不良	灰白色	
Fig. 54-1	Ⅶ	土師器	坏	10.7	(1.7)	8	良	淡黄色	
Fig. 54-2	V	土師器	坏	—	(2.3)	7	不良	浅黄橙色	
Fig. 54-3	V	土師器	坏	15	3.2	10.4	不良	灰白色	
Fig. 54-4	Ⅶ	土師器	坏	13.5	3.3	3	不良	黄橙色	
Fig. 54-5	V	土師器	坏	12.4	3.3	6.6	不良	浅黄橙色	
Fig. 54-6	V	土師器	坏	11	3.5	6.2	不良	浅黄橙色	
Fig. 54-7	V	土師器	坏	—	(1.4)	(12.6)	良	黄橙色	輪高台
Fig. 54-8	V	土師器	坏	—	(2.5)	(13.2)	不良	にぶい黄橙色	輪高台
Fig. 54-9	Ⅶ	土師器	坏	—	(3.2)	(8.0)	不良	浅黄橙色	輪高台
Fig. 54-10	V	土師器	坏	—	(3)	(8.9)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 54-11	V	土師器	坏	—	(1.9)	(7.7)	良	灰白色	輪高台
Fig. 54-12	V	土師器	坏	—	(1.8)	(6.5)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 54-13	V	土師器	坏	—	(2)	(9.3)	不良	浅黄橙色	輪高台
Fig. 54-14	I	土師器	坏	—	(2.4)	(8.7)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 54-15	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.4)	(8.4)	良	灰白色	輪高台
Fig. 54-16	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.3)	(8.3)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 54-17	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.9)	(7.0)	良	灰白色	輪高台
Fig. 54-18	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.6)	(6.5)	良	灰白色	輪高台
Fig. 54-19	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.4)	(7.5)	良	にぶい黄橙、にぶい橙色	輪高台
Fig. 54-20	採取	土師器	高足器	—	(3)	6.4	不良	灰白色	輪高台
Fig. 54-21	Ⅶ	土師器	坏	12.9	4.4	8.7	良	浅黄橙色	円盤状高台
Fig. 54-22	V'	土師器	坏	—	(3.7)	8.6	良	にぶい黄橙色	円盤状高台
Fig. 54-23	V	土師器	坏	—	(4.7)	13	不良	灰白色	円盤状高台
Fig. 54-24	V'	土師器	坏	—	(2.3)	8.1	不良	にぶい黄橙色	円盤状高台
Fig. 54-25	攪乱	土師器	坏	—	(2.6)	8.3	良	灰白色	円盤状高台
Fig. 54-26	V'	土師器	坏	—	(2.2)	8.3	不良	灰黄褐色	円盤状高台
Fig. 54-27	攪乱	土師器	坏	—	(1.1)	(5.4)	不良	黄橙色	円盤状高台
Fig. 54-28	採取	土師器	坏	—	(1.5)	8.1	不良	灰白色	円盤状高台
Fig. 54-29	Ⅶ	土師器	坏	—	(2)	8	良		円盤状高台
Fig. 55-1	Ⅶ	土師器	坏	—	(1.8)	8.3	不良	にぶい橙色	円盤状高台
Fig. 55-2	V	土師器	坏	—	(0.4)	7.3	不良	浅黄褐色	円盤状高台
Fig. 55-3	Ⅶ	土師器	坏	—	(1.8)	7.4	不良	淡橙、淡黄褐色	円盤状高台
Fig. 55-4	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.4)	8.4	良	灰白色	円盤状高台
Fig. 55-5	Ⅶ	土師器	坏	—	(2.3)	6.6	良	灰黄色	円盤状高台
Fig. 55-6	V	土師器	蓋	—	(2.1)	—	不良	浅黄橙、黄橙色	宝珠形つまみ
Fig. 55-7	Ⅶ	土師器	甕	24.2	(5.8)	—	良	褐灰、灰褐色	球胴型
Fig. 55-8	V	土師器	甕	25.4	5.6	—	不良	にぶい黄橙、にぶい褐色	球胴型
Fig. 55-9	V	土師器	甕	24.8	(6.2)	—	良	褐灰色、浅黄色	球胴型
Fig. 55-10	採取	土師器	甕	21.2	(5.8)	—	不良	にぶい橙、橙色	球胴型
Fig. 55-11	V	土師器	甕	25.5	(7.5)	—	不良	橙色	球胴型
Fig. 55-12	Ⅶ	土師器	甕	24.6	(6.5)	—	不良	にぶい黄橙、浅黄色	球胴型
Fig. 56-1	採取	土師器	甕	27.8	(3.4)	—	不良	橙色	長胴甕
Fig. 56-2	採取	土師器	甕	21.2	(5.1)	—	不良	にぶい橙色	長胴甕
Fig. 56-3	Ⅶ	土師器	甕	19.2	(4.9)	—	不良	にぶい橙色	長胴甕
Fig. 56-4	V	土師器	甕	14	(3)	—	不良	橙色	球胴甕
Fig. 56-5	V	土師器	甕	17.7	(8.5)	—	不良	褐、明赤褐色	長胴甕
Fig. 56-6	採取	土師器	釜	31	(5)	—	不良	褐灰、にぶい黄褐色	摂津型羽釜
Fig. 56-7	V	土師器	鍋	27	(5.7)	—	不良	灰白色	
Fig. 57-1	V	土師器	皿	20.2	2.6	16.6	良	灰白色	
Fig. 57-2	V	須恵器	皿	16.3	2	13	良好	灰色	
Fig. 57-3	V	須恵器	皿	15.2	1.7	12	良好	灰色	火襷
Fig. 57-4	Ⅶ	須恵器	皿	15.4	1.6	11.6	良好	灰色	火襷
Fig. 57-5	V'	須恵器	皿	14.1	1.8	11	良好	灰色	火襷
Fig. 57-6	V	須恵器	皿	13.6	1.6	10.8	良好	灰色	火襷
Fig. 57-7	V	須恵器	皿	14	(1.9)	—	良好	青灰色	火襷
Fig. 57-8	V	須恵器	皿	13	2.5	10.3	良好	灰色	
Fig. 57-9	採取	須恵器	皿	11.2	1.7	8.6	良	緑灰色	火襷
Fig. 57-10	V	須恵器	皿	17.5	2.1	15	良	灰白色	火襷
Fig. 57-11	V	須恵器	皿	16.9	(1.4)	—	良好	灰色	
Fig. 57-12	I	須恵器	皿	14.8	1.2	12	良	灰白色	
Fig. 57-13	V	須恵器	坏	14.3	4.4	6	不良	灰白色	
Fig. 57-14	V	須恵器	坏	13	4	6	良	灰色	
Fig. 57-15	V	須恵器	坏	13.5	4.4	6	良好	灰白色	
Fig. 57-16	V	須恵器	坏	14.3	4.3	9.8	不良	灰色	
Fig. 57-17	V	須恵器	坏	14	3.4	(10.1)	不良	灰白色	
Fig. 57-18	V	須恵器	坏	14.6	3.8	10	良	灰白色	
Fig. 57-19	Ⅶ	須恵器	坏	14	3.5	8.6	良	灰色	
Fig. 57-20	V	須恵器	坏	13.8	2.9	9.2	良好	灰色	
Fig. 57-21	V	須恵器	坏	13.4	3.7	10	良	灰白、灰色	
Fig. 57-22	V	須恵器	坏	12.8	3.3	10.4	良好	灰黄褐色	
Fig. 57-23	Ⅶ	須恵器	坏	15	3.3	10.2	良好	灰白色	火襷
Fig. 57-24	Ⅶ	須恵器	坏	14.8	3.7	10.4	良好	灰白色	火襷

() は現存値及び復元値

Tab. 15 第I区古代・中世土器量表5

図版番号	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	備考
Fig. 57-25	採取	須恵器	坏	13.4	(3)	—	良好	灰白色	火襪
Fig. 57-26	Ⅶ	須恵器	坏	12.7	3.4	8.5	良好	灰色	火襪
Fig. 57-27	V	須恵器	坏	12.6	3.1	7.1	良好	灰色	
Fig. 57-28	V	須恵器	坏	11.6	3	4.8	良好	橙色, にぶい橙色	
Fig. 58-1	V	須恵器	坏	14.2	6.5	(9.8)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-2	V	須恵器	坏	16	(5.3)	—	良好	灰, 暗灰黄色	
Fig. 58-3	V	須恵器	坏	—	(2.6)	(9.8)	良好	灰白, 灰色	輪高台
Fig. 58-4	V	須恵器	坏	—	(2.4)	(13.5)	良	灰白色	輪高台
Fig. 58-5	V	須恵器	坏	—	(1.6)	(12.4)	良	灰色	輪高台
Fig. 58-6	V	須恵器	坏	—	(2.5)	(10.1)	良好	灰白, 灰色	輪高台
Fig. 58-7	V	須恵器	坏	13.9	3.3	(9.5)	良好	暗灰色	輪高台
Fig. 58-8	V	須恵器	坏	12.8	(3.4)	(8.5)	良好	褐色, 灰色	輪高台
Fig. 58-9	V	須恵器	坏	12.6	3.6	(9.4)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-10	V	須恵器	坏	12.3	3.9	(8.7)	良	灰白色	輪高台
Fig. 58-11	V	須恵器	坏	12.7	3.9	(9.1)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-12	V	須恵器	坏	12.7	3.9	(9.8)	良好	灰白色	輪高台
Fig. 58-13	V	須恵器	坏	14.8	4.9	(10.7)	良	灰白色	輪高台
Fig. 58-14	V	須恵器	坏	—	(2.2)	(8.8)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-15	Ⅶ	須恵器	坏	—	(2)	(7.5)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-16	採取	須恵器	坏	13	3.8	(8.5)	良	灰白色	輪高台
Fig. 58-17	V	須恵器	坏	13	4.4	(8.6)	良好	灰白色	輪高台
Fig. 58-18	採取	須恵器	坏	13.7	3.7	(9.4)	良	灰白色	輪高台
Fig. 58-19	採取	須恵器	坏	—	(3)	(9.7)	良好	灰白色	輪高台
Fig. 58-20	V	須恵器	坏	14	5.2	(9.2)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 58-21	V	須恵器	坏	—	(4.2)	(10.4)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-22	V	須恵器	坏	11.9	4	(8.9)	良	灰白, 灰色	輪高台
Fig. 58-23	V	須恵器	坏	13.7	3.5	(9.9)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-24	V	須恵器	坏	12.5	3.5	(9.1)	良	灰白色	輪高台
Fig. 58-25	V	須恵器	坏	—	(1.7)	(8.6)	良	灰白色	輪高台
Fig. 58-26	V	須恵器	坏	—	(2.6)	(9.2)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-27	Ⅶ	須恵器	坏	12	3.9	(8.0)	良好	灰白色	輪高台
Fig. 58-28	V	須恵器	坏	11.7	4.1	(7.2)	良好	灰, 灰黄褐色	輪高台
Fig. 58-29	V	須恵器	坏	11	4	(8.1)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-30	V	須恵器	坏	—	(1.7)	(8.2)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-31	採取	須恵器	坏	—	(2.8)	(8.5)	良好	灰色	輪高台
Fig. 58-32	V	須恵器	坏	—	(2.3)	(11.0)	不良	灰白色	輪高台
Fig. 58-33	採取	須恵器	坏	—	(2.2)	(8.3)	良	灰色	輪高台
Fig. 58-34	V	須恵器	坏	—	(2)	(7.2)	不良	灰色	輪高台
Fig. 58-35	Ⅶ	須恵器	坏	—	(2)	(7.25)	良好	灰色	輪高台
Fig. 59-1	採取	須恵器	坏	—	(3.6)	(13.6)	良好	オリープ灰, 灰色	輪高台
Fig. 59-2	採取	須恵器	坏	—	(3.7)	(10.3)	良好	灰白色	輪高台
Fig. 59-3	V	須恵器	高坏	18.2	4.5	10	良好	灰色	
Fig. 59-4	V	須恵器	蓋	—	(1.8)	—	良好	灰色	宝珠形つまみ
Fig. 59-5	V	須恵器	蓋	—	(2)	—	良好	灰白色	宝珠形紐
Fig. 59-6	V	土師器	蓋	—	(1.2)	—	不良	灰白色	疑似宝珠形紐
Fig. 59-7	V	須恵器	蓋	—	—	—	—	—	—
Fig. 59-8	Ⅶ	須恵器	蓋	14.1	2.5	—	良	青灰色	擬似宝珠形
Fig. 59-9	採取	須恵器	蓋	19.7	(1.6)	—	良	灰白色	
Fig. 59-10	V	須恵器	蓋	14	2.5	—	良	灰白色	円圈状つまみ
Fig. 59-11	V	須恵器	蓋	14.2	(2.3)	—	良好	灰白色	円圈状紐付
Fig. 59-12	V	須恵器	蓋	13.8	2.1	—	良	灰白, 灰色	円圈状つまみ
Fig. 59-13	V	須恵器	蓋	13.4	2.1	—	良	灰白, 灰色	円圈状紐付
Fig. 59-14	V	須恵器	蓋	12.8	(1.7)	—	良好	灰色	円圈状つまみ
Fig. 59-15	V	須恵器	蓋	—	(1.1)	—	良	灰白色	円圈状つまみ
Fig. 59-16	V	須恵器	蓋	(4.45)	(1.2)	—	良	灰白色	円圈状紐接合
Fig. 59-17	V	須恵器	蓋	—	(1.1)	—	不良	灰白色	円圈状つまみ
Fig. 59-18	Ⅶ	須恵器	蓋	—	(1.4)	—	良好	灰色	円圈状紐付
Fig. 59-19	V	須恵器	蓋	—	(1)	—	良	灰白色	円圈状紐付
Fig. 59-20	Ⅶ	須恵器	蓋	11.6	(2.2)	—	良好	灰白色	
Fig. 59-21	V	須恵器	蓋	12.3	(2.4)	—	良好	灰色	
Fig. 59-22	V	須恵器	蓋	15.4	(2.8)	—	良	にぶい黄橙, 浅黄色	
Fig. 59-23	Ⅶ	須恵器	蓋	13.6	(1.9)	—	良	灰白色	
Fig. 59-24	V	須恵器	蓋	13.7	(1.8)	—	良好	灰白色	
Fig. 59-25	V	須恵器	蓋	15	(1.8)	—	良好	灰色	
Fig. 59-26	採取	須恵器	蓋	12.2	(1.9)	—	良好	灰白色	
Fig. 59-27	採取	須恵器	蓋	13.2	(2)	—	良	灰白色	
Fig. 59-28	V	須恵器	蓋	14	(1.8)	—	良好	灰白色	
Fig. 59-29	V	須恵器	蓋	13	(1.9)	—	良	灰色	
Fig. 59-30	V	須恵器	蓋	11.5	(2)	—	良	青灰色	
Fig. 59-31	Ⅶ	須恵器	蓋	14.2	(1.9)	—	良好	灰色	
Fig. 60-1	V	須恵器	蓋	13.9	(1.7)	—	良好	灰白色	
Fig. 60-2	V	須恵器	蓋	14.1	(1.2)	—	良好	灰白色	
Fig. 60-3	V	須恵器	蓋	12.5	(1)	—	良	灰色	
Fig. 60-4	V	須恵器	蓋	14.2	(1.2)	—	良	灰白色	
Fig. 60-5	V	須恵器	蓋	16.6	(1.35)	—	良好	灰白色	
Fig. 60-6	V	須恵器	蓋	14.2	(1.2)	—	良好	灰白色	
Fig. 60-7	採取	須恵器	蓋	18.2	(1.3)	—	良	明オリープ灰, 灰白色	
Fig. 60-8	V	須恵器	蓋	11	(0.9)	—	良好	灰色	
Fig. 60-9	Ⅶ	須恵器	蓋	12	(1.1)	—	良好	灰色	

() は現存値及び復元値

Tab. 16 第I区古代・中世土器量表6

図版番号	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	焼成	色 調	備 考
Fig. 60-10	V	須恵器	蓋	11.8	(1)	—	良好	灰白色	
Fig. 60-11	V'	須恵器	蓋	12.4	(1)	—	良好	青灰色	
Fig. 60-12	V	土師器	蓋	20.8	(2.2)	—	良	灰、浅黄色	
Fig. 60-13	Ⅶ	須恵器	蓋	18.1	(2.8)	—	良	灰色	
Fig. 60-14	V	須恵器	蓋	19	(1.8)	—	良	灰白色	
Fig. 60-15	V	土師器	蓋	21.2	(1.7)	—	良	淡黄色	
Fig. 60-16	V	須恵器	壺	10.7	(12.4)	—	良好	灰色	長頸壺
Fig. 60-17	V	須恵器	壺	10	(6.3)	—	良好	灰色	長頸壺
Fig. 60-18	採取	須恵器	壺	7.2	(8.3)	—	良好	褐色	長頸壺
Fig. 60-19	Ⅶ	須恵器	壺	12.3	(3.5)	—	良好	灰色、にぶい赤褐色	長頸壺
Fig. 60-20	Ⅶ	須恵器	壺	—	(13.4)	(10.8)	良好	灰白色	長頸壺、体部
Fig. 60-21	採取	須恵器	壺	—	(4.7)	—	良好	灰白色、灰色	長頸壺、体部
Fig. 60-22	攪乱	須恵器	壺	—	(2.2)	—	良好	灰色	長頸壺
Fig. 60-23	V	須恵器	壺	19.8	(4.1)	—	良好	灰色	広口折肩壺
Fig. 60-24	攪乱	須恵器	壺	11.4	(2.4)	—	良好	灰色	
Fig. 61-1	採取	須恵器	壺	—	(6.4)	—	良好	緑灰色	
Fig. 61-2	V	須恵器	壺	—	(3.8)	10.8	良好	灰色	底部
Fig. 61-3	V	須恵器	壺	—	(3.5)	(12.2)	良好	灰色	輪高台
Fig. 61-4	I	須恵器	壺	—	(2.9)	(9.3)	良好	オリーブ灰色	輪高台
Fig. 61-5	Ⅶ	須恵器	壺	—	(3.9)	6.4	良好	灰色	
Fig. 62-1	採取	須恵器	甕	23.2	(4.4)	—	良	灰色	
Fig. 62-2	V	須恵器	甕	23.5	(3.3)	—	良	灰白色	
Fig. 62-3	V	須恵器	甕	—	(6.4)	—	良好	灰白色	
Fig. 62-4	Ⅶ'	須恵器	甕	17.8	(11.1)	—	良	灰白色、灰白	
Fig. 62-5	V	須恵器	甕	—	(12)	—	良好	灰白色	
Fig. 62-6	Ⅶ	須恵器	甕	—	(17)	—	良好	灰色	
Fig. 62-7	Ⅶ	須恵器	甕	44.6	(2.1)	—	良好	灰色	
Fig. 63-1	Ⅶ	須恵器	甕	—	(18.3)	—	良好	灰白色	平行叩き目
Fig. 63-2	I	須恵器	甕	—	(5)	—	良好	灰色	格子状叩き目・同心円紋
Fig. 63-3	Ⅲ	須恵器	甕	—	(6.2)	—	良好	緑灰色	格子状叩き目
Fig. 63-4	採取	須恵器	甕	—	(6)	22	良	浅黄色	
Fig. 63-5	Ⅲ	須恵器	鉢	15.2	(4.3)	—	不良	灰色、にぶい黄褐色	東播系須恵器
Fig. 63-6	V	須恵器	鉢	23.8	(4)	—	良	浅黄色、灰白色	東播系須恵器
Fig. 63-7	V	須恵器	鉢	27.9	(7.2)	—	不良	にぶい黄、黄灰色	東播系須恵器
Fig. 64-1	V	須恵器	鉢	25.2	(2.4)	—	良	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-2	V	須恵器	鉢	28	(2.8)	—	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-3	V	須恵器	鉢	22.8	(3.6)	—	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-4	V	須恵器	鉢	24.6	(3.1)	—	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-5	V	須恵器	鉢	30.5	(3.1)	—	良	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-6	Ⅲ	須恵器	鉢	26	(3)	—	良	灰白色	東播系須恵器
Fig. 64-7	V	須恵器	鉢	25	(3.3)	—	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-8	V	須恵器	鉢	26.6	(3)	—	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-9	V	須恵器	鉢	26.2	(3.9)	—	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-10	V	須恵器	鉢	27	(4.5)	—	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 64-11	V	須恵器	鉢	—	(4.4)	11.1	良好	灰白色	東播系須恵器
Fig. 64-12	V	須恵器	鉢	—	(2.7)	12.6	良好	灰色	東播系須恵器
Fig. 65-1	V	須恵器	瓦	—	(2.9)	—	不良	灰白色	平瓦
Fig. 65-2	Ⅶ	須恵器	瓦	—	(2)	—	不良	灰白色	
Fig. 65-3	V	緑釉陶器	碗	15.8	(3)	—	良	浅黄、灰白色	洛北窯
Fig. 65-4	V	緑釉陶器	碗	—	(2)	—	良	銅緑色(灰白色)	洛北窯
Fig. 65-5	V	緑釉陶器	碗	—	(1.4)	5.8	不良	淡黄色(浅黄色)	洛北窯
Fig. 65-6	Ⅶ	緑釉陶器	碗	—	(1.4)	6.2	不良	灰白色(浅黄色)	洛北窯
Fig. 65-7	I	灰釉陶器	皿	23.8	(2.5)	—	良好	灰白色	
Fig. 65-8	V	灰釉陶器	皿	12.6	(2.4)	—	良好	オリーブ黄色(灰白色)	瀬戸焼、おろし皿
Fig. 65-9	採取	黒色土器	碗	15.9	(3.5)	—	良	黒色、淡黄色	黒色土器A類
Fig. 65-10	採取	瓦器	碗	14.6	(2.8)	—	良	灰白色、灰色	和泉型
Fig. 65-11	攪乱	瓦器	碗	11.4	(2.5)	—	良	灰色	和泉型
Fig. 65-12	V	瓦器	碗	—	(1.7)	(6.8)	良	灰白色、灰色	
Fig. 65-13	Ⅲ	瓦質土器	甕	—	(9)	—	良好	明青灰色、灰色	格子叩き目
Fig. 65-14	V	瓦質土器	甕	—	(5.8)	—	良好	黄灰色、灰白色	格子叩き目
Fig. 65-15	V	瓦質土器	鉢	—	(3.4)	16	不良	灰白色	搦鉢
Fig. 65-16	V	陶器	甕	—	—	—	良好	赤灰色	常滑焼
Fig. 65-17	I	陶器	鉢	—	(6)	—	良好	紫灰色	備前焼
Fig. 65-18	V	陶器	鉢	—	(6)	—	良好	緑灰、オリーブ灰色	備前焼搦鉢
Fig. 65-19	V	陶器	鉢	—	(4.3)	—	良	にぶい橙、灰黄色	備前焼搦鉢
Fig. 65-20	V	陶器	鉢	—	(5.5)	—	良	橙色	備前焼搦鉢
Fig. 66-1	攪乱	陶器	鉢	26.2	(6.85)	—	良好	明赤褐色	備前焼搦鉢
Fig. 66-2	採取	陶器	鉢	—	(5.5)	14	良好	にぶい赤褐色	搦鉢
Fig. 66-3	I	陶器	碗	11.8	(2)	—	良好	灰黄褐色(褐色)	鉄釉陶器
Fig. 66-4	採取	陶器	碗	—	(2.2)	(4.2)	良好	オリーブ黒色(灰色)	鉄釉陶器
Fig. 66-5	攪乱	陶器	皿	—	(1.2)	4	良好	オリーブ黒色(灰色)	鉄釉陶器
Fig. 67-1	V	白磁	碗	15.6	(1.7)	—	良好	灰白色	玉縁状口縁
Fig. 67-2	V	白磁	碗	14.4	(1.5)	—	良好	灰白色	玉縁状口縁
Fig. 67-3	V	白磁	碗	15.7	(2)	—	良好	灰白色	玉縁状口縁
Fig. 67-4	V	白磁	碗	—	(1.9)	(23.5)	良好	灰白色	
Fig. 67-5	V	白磁	皿	9.6	(1.3)	—	良好	灰白色	口壳皿
Fig. 67-6	I	白磁	皿	11.3	(2.9)	—	良好	明オリーブ灰(灰白色)	口壳皿
Fig. 67-7	V	白磁	皿	11.3	(2.7)	—	良好	明オリーブ灰(灰白色)	口壳皿
Fig. 67-8	V	白磁	皿	15.6	(0.9)	7.4	良好	灰白色	口壳皿、底部

() は現存値及び復元値

Tab. 17 第I区古代・中世土器量表7

図版番号	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	備考
Fig. 67-9	V	白磁	皿	7.9	2.6	(4.1)	良好	灰白色(白色)	八角皿、アーチ状高台
Fig. 67-10	V	白磁	皿	—	(1.1)	(4.0)	良好	灰白色	アーチ状高台
Fig. 67-11	V	白磁	碗	17.4	(2)	—	良好	灰オリーブ色(灰白色)	
Fig. 67-12	V	白磁	杯	9.8	2.6	—	良好	灰白色	
Fig. 67-13	V	白磁	皿	10	-1.6	—	良好	灰白色	
Fig. 67-14	採取	白磁	碗	—	(1.4)	(4.0)	良好	灰白色(白色)	
Fig. 67-15	I	白磁	皿	—	(1.3)	(5.3)	良好	灰色(灰白色)	見込み蛇の目釉
Fig. 67-16	V	白磁	皿	12.3	(1.9)	—	良好	灰白色	
Fig. 67-17	I	白磁	鉢	15.7	(1.1)	—	良好	灰白色	
Fig. 67-18	I	白磁	皿	—	(3.4)	(7.5)	良好	白色	
Fig. 67-19	V	青白磁	皿	—	(1.8)	(6.8)	良好	明緑灰色(灰白色)	折腰皿
Fig. 67-20	V	青磁	皿	—	(1.6)	4.8	良好	灰オリーブ色(灰白色)	同安窯系
Fig. 67-21	V	青磁	皿	—	(1.7)	—	良好	灰オリーブ色(灰白色)	同安窯系
Fig. 67-22	V	青磁	皿	—	(1.9)	—	良好	灰オリーブ色(灰白色)	同安窯系
Fig. 67-23		青磁	碗	—	(2)	—	良好	灰オリーブ、灰白色	龍泉窯系
Fig. 67-24	採取	青磁	碗	—	(3.2)	(6.0)	良好	オリーブ灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-25	V	青磁	碗	—	(1.6)	(5.8)	良好	オリーブ灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-26	V	青磁	碗	—	(4.2)	(5.8)	良好	緑灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-27	V	青磁	碗	—	(1.6)	(5.8)	良好	灰オリーブ色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-28	V	青磁	碗	19.4	(3.4)	—	良好	緑灰、灰白色	龍泉窯系
Fig. 67-29	V	青磁	碗	17.8	(3.2)	—	良好	緑灰、灰白色	龍泉窯系
Fig. 67-30	V	青磁	碗	17.6	(3.4)	—	良好	オリーブ灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-31	採取	青磁	洗	13.7	(1.5)	—	良好	緑灰色	龍泉窯系
Fig. 67-32	I	青磁	洗	21.6	(2.2)	—	良好	オリーブ灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-33	V	青磁	盤	—	(2.2)	(13.2)	良好	オリーブ灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-34	V	青磁	杯	11	(3)	—	良好	オリーブ灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-35	I	青磁	碗	11.9	(1.7)	—	良好	緑灰色(明緑灰色)	龍泉窯
Fig. 67-36	Ⅲ	青磁	碗	—	(2.8)	—	良好	オリーブ灰色(灰白色)	龍泉窯系
Fig. 67-37	V	土師器	坏	14.5	(2.6)	—	良好	オリーブ黄色(灰白色)	
Fig. 67-38	Ⅲ	染付	皿	—	(1.3)	(6.4)	良好	灰白色、暗青灰色	景德鎮窯
Fig. 67-39	V	染付	碗	14.2	(1)	—	良好	暗青灰、灰白色	景德鎮窯

Tab. 18 第I区ピット群土器破片出土表

ピット番号	出土遺物	出土点数	土層
1	土師質土器	1	黒褐色
2	土師質土器	48	黒褐色
3	土師質土器	7	黒褐色
4	瓦質土器・土師質土器	1・1	黒褐色
5	須恵器・土師質土器	2・3	黒褐色
6	青磁・土師質土器	1・7	黒褐色
7	土師質土器	26	黒褐色
8	青磁	1	黒褐色
9	土師質土器・鉄滓	72・1	黒褐色
10	土師質土器	27	黒褐色
11	青磁・瓦質土器・土師質土器	1・1・7	黒褐色
12	土師質土器	6	黒褐色
13	須恵器・土師質土器	1・2	黒褐色
14	青磁	1	黒褐色
15	染付・白磁	2・1	茶褐色
16	青磁・土師質土器	1・1	黒褐色
17	白磁	1	黒褐色
18	土師質土器	13	黒褐色
19	土師質土器	4	黒褐色
20	瓦器・土師質土器	1・5	黒褐色
21	備前焼鉢・土師質土器	1・3	黒褐色
22	土師質土器	10	黒褐色
23	古銭 なし	1	黒褐色

Tab. 19 第I区土錘法量表・木製品一覧表
土錘法量表

図版番号	遺構名	全長 (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	色 調	図版番号	遺構名	全長 (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	色 調
Fig. 39- 7	SR1	(2.7)	1.05	0.45	(1.6)	にぶい黄橙色	Fig. 49-23	SR2	(4.3)	1.4	0.4	(6.5)	灰白色
Fig. 39- 8	SR1	4.2	1.25	0.5	5.4	灰白色	Fig. 49-24	SR2	(3.2)	1.1	0.4	(2.7)	にぶい黄橙色
Fig. 39- 9	SR1	4.6	1.15	0.35	5.7	灰白色	Fig. 49-25	SR2	(4.0)	1.5	0.3	(3.15)	灰白色
Fig. 39-10	SR1	5.6	4.0	1.1	85.1	浅黄色	Fig. 49-26	SR2	(3.6)	1.4	0.5	(4.6)	にぶい橙色
Fig. 39-11	SR1	5.6	4.8	0.8	118.5	にぶい黄橙色	Fig. 49-27	SR2	3.3	1.2	0.5	4.25	黄灰色
Fig. 49- 9	SR2	5.6	2.4	0.5	24.95	黒色	Fig. 49-28	SR2	3.5	1.5	0.5	(6.1)	灰白色
Fig. 49-10	SR2	(5.8)	2.3	0.5	(25.95)	灰黄褐色	Fig. 49-29	SR2	(4.2)	1.5	0.35	(6.55)	黄灰色
Fig. 49-11	SR2	(4.45)	2.7	1.0	(20.6)	灰黄色	Fig. 49-30	SR2	(3.1)	1.3	0.35	(3.8)	黄灰色
Fig. 49-12	SR2	4.5	1.9	0.6	(12.3)	にぶい橙色	Fig. 49-31	SR2	(2.4)	1.0	0.4	(1.7)	黄灰色
Fig. 49-13	SR2	5.9	1.3	0.3	8.0	黄灰白色	Fig. 68- 1	V層	3.8	2.1	0.6	13.7	灰白色
Fig. 49-14	SR2	(6.4)	1.3	0.5	(7.1)	灰白色	Fig. 68- 2	V層	3.5	1.55	0.6	5.9	浅黄褐色
Fig. 49-15	SR2	4.2	1.3	0.45	6.1	灰白色	Fig. 68- 3	V層	(3.65)	1.55	0.4	(5.0)	橙色
Fig. 49-16	SR2	(4.1)	1.2	0.5	(4.4)	灰白色	Fig. 68- 4	V層	4.4	1.5	0.35	7.0	黄橙色
Fig. 49-17	SR2	4.6	1.1	0.4	4.65	灰白色	Fig. 68- 5	I層	4.3	1.45	0.4	6.0	橙色
Fig. 49-18	SR2	(3.9)	1.25	0.4	(4.85)	灰黄色	Fig. 68- 6	Ⅶ層	5.5	1.2	0.45	6.5	褐灰色
Fig. 49-19	SR2	(4.4)	1.25	0.4	(5.15)	灰黄色	Fig. 68- 7	V層	(5.0)	1.1	0.3	(5.0)	灰白色
Fig. 49-20	SR2	(4.5)	1.4	0.5	(5.8)	にぶい黄橙色	Fig. 68- 8	V層	4.45	1.1	0.35	4.0	明黄褐色
Fig. 49-21	SR2	3.5	1.6	0.45	6.7	浅黄褐色	Fig. 68- 9	V層	4.15	1.25	0.3	5.0	灰黄色
Fig. 49-22	SR2	3.7	1.4	0.5	6.3	灰白色	Fig. 68-10	I層	4.5	1.3	0.5	7.7	褐灰色

() は現存値

木製品一覧表

挿図番号	品 種	寸法 (cm) () は現存値	挿図番号	品 種	寸法 (cm) () は現存値
Fig. 40- 1	呪符	長(28.5)、幅6.0、厚0.4	Fig. 41-12	箸状木製品	長(12.3)、幅0.65、厚0.45
Fig. 40- 2	刀子形	長17.1、幅1.8、厚0.4	Fig. 41-13	箸状木製品	長(11.7)、幅0.5、厚0.5
Fig. 40- 3	人形	長(23.1)、幅1.7、厚0.4	Fig. 41-14	箸状木製品	長(11.0)、幅0.5、厚0.3
Fig. 40- 4	斎串	長(10.0)、幅1.2、厚0.3	Fig. 41-15	箸状木製品	長11.2、幅0.4、厚0.25
Fig. 40- 5	人形	長14.4、幅3.5、厚1.5	Fig. 41-16	漆椀	器高(2.7)、底径8.0
Fig. 40- 6	横櫛	長2.7、幅1.7、厚0.8	Fig. 41-17	漆椀	器高(2.2)、底径8.0
Fig. 40- 7	枕先	長9.8、幅4.5、厚3.0	Fig. 41-18	漆椀	器高(4.0)、底径9.8
Fig. 40- 8	柱状木製品	径4.0、厚(2.7)	Fig. 41-19	円形板	径(18.7)、厚0.6
Fig. 40- 9	板状木製品	長(13.7)、幅2.4、厚0.2	Fig. 41-20	円形板	径(12.4)、厚0.6
Fig. 40-10	板状木製品	長10.3、幅1.9、厚1.0	Fig. 42- 1	円形板-底板	径(17.4)、厚0.6
Fig. 40-11	棒状木製品	長(12.8)、幅2.2、厚1.0	Fig. 42- 2	連菌下駄	長(23.1)、幅9.0、高5.9
Fig. 40-12	板状木製品	長(19.2)、幅2.3、厚0.4	Fig. 42- 3	連菌下駄	長20.7、幅12.3、高7.3
Fig. 40-13	板状木製品	長(13.8)、幅1.9、厚0.5	Fig. 43- 1	板状木製品	長20.1、幅4.8、厚0.5
Fig. 40-14	板状木製品	長(11.6)、幅4.2、厚0.4	Fig. 43- 2	板状木製品	長(24.9)、幅3.1、厚0.7
Fig. 40-15	板状木製品	長(18.5)、幅5.6、厚0.4	Fig. 43- 3	板状木製品	長(24.6)、幅6.4、厚0.5
Fig. 41- 1	箸状木製品	長(13.1)、幅0.5、厚0.4	Fig. 43- 4	板状木製品	長(12.6)、幅5.7、厚0.5
Fig. 41- 2	箸状木製品	長(13.3)、幅0.7、厚0.35	Fig. 43- 5	板状木製品	長(21.4)、幅4.8、厚0.4
Fig. 41- 3	箸状木製品	長14.3、幅0.4、厚3.0	Fig. 43- 6	板状木製品	長25.1、幅6.0、厚0.5
Fig. 41- 4	箸状木製品	長16.7、幅0.65、厚0.35	Fig. 43- 7	板状木製品	長25.5、幅6.8、厚0.2
Fig. 41- 5	箸状木製品	長15.0、幅0.4、厚0.3	Fig. 43- 8	板状木製品	長(32.8)、幅6.5、厚0.7
Fig. 41- 6	箸状木製品	長17.9、幅0.6、厚0.4	Fig. 44- 1	板状木製品	長51.0、幅6.7、厚0.8
Fig. 41- 7	箸状木製品	長19.4、幅0.8、厚0.5	Fig. 44- 2	板状木製品	長(60.5)、幅5.6、厚0.4
Fig. 41- 8	箸状木製品	長19.2、幅0.6、厚0.3	Fig. 44- 3	板状木製品	長53.3、幅2.15、厚0.7
Fig. 41- 9	箸状木製品	長19.5、幅0.4、厚0.25	Fig. 44- 4	板状木製品	長52.1、幅3.1、厚1.2
Fig. 41-10	箸状木製品	長19.7、幅0.5、厚0.4	Fig. 44- 5	板状木製品	長(66.1)、幅8.0、厚0.3
Fig. 41-11	箸状木製品	長14.7、幅0.6、厚0.5			

第5章 第Ⅱ区の調査

第1節 検出遺構

1 中世 (Fig. 7・Fig. 69)

第Ⅱ区の東半部において、地震に伴う地割れ跡数箇所を確認した。地割れはⅣ層上面で発生している。検出面における平面形は不整楕円形あるいは不整舟形などで、地割れが生じて陥没した箇所に拳大以上の円礫を投入して周囲との高低差を解消させようとしたものとみられる。戦国期の南海地震に関連するものであろう。

地割れ部分の層序は、a：円礫（褐灰色粘土混）、b：褐灰色粘土、c：褐色粘質土、である。

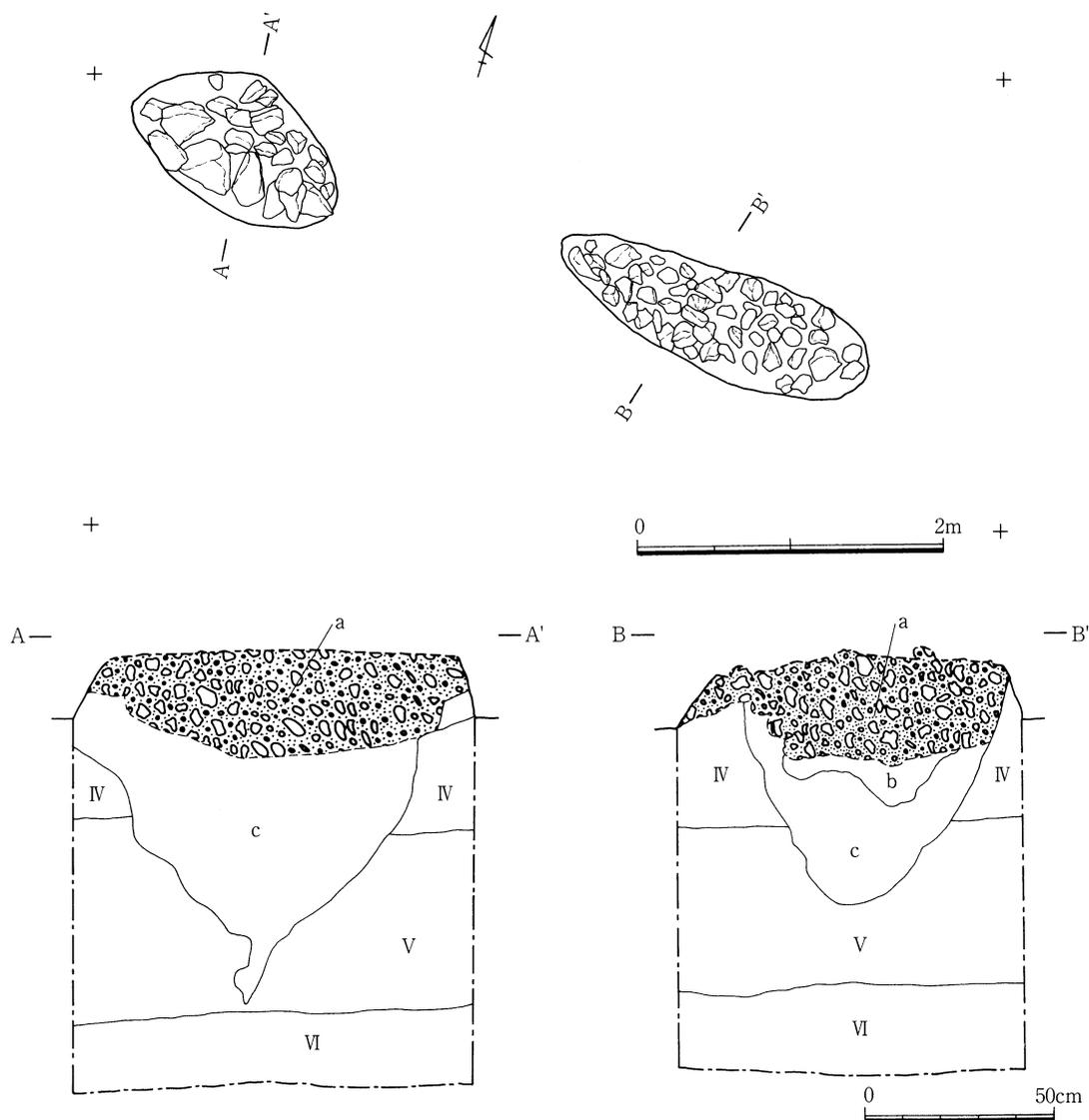


Fig. 69 第Ⅱ区地震跡実測図

第2節 出土遺物

1 縄文時代

第Ⅱ区の縄文時代遺物は、調査区東端部の岩盤面の立ち上がり部分に堆積したJ層群から出土したものが殆どである。第Ⅱ区における縄文時代の遺物包含層の遺存範囲は、Fig. 70に示したとおりであり、その面積は約80m²である。遺物包含層からの出土遺物は土器・石器・骨片等で、土器は破片点数で2000点以上、石器は約500点を数える。

以下には、これらの概要を伝え得るような、代表的なごく一部の資料のみを提示する。

1) 縄文土器 (Fig. 71~Fig. 81)

片粕式・北久根山式系統の土器群 (Fig. 71・72)

Fig. 71-1~12は有文深鉢の口縁部片である。Fig. 71-1・6は口縁端部端面に「S」字もしくは逆「S」字のヘラ描き文を施す。Fig. 71-9~12は縄文地に沈線及び波状の沈線を描く。

Fig. 71-13; Fig. 72-1~10は有文深鉢の胴部片である。Fig. 71-13; Fig. 72-3は逆三角形のモチーフ内に「S」字状沈線を描く。Fig. 72-5・6は逆三角形のモチーフであるが、沈線の結節部を曲線的に閉じている。Fig. 72-7は縄文・沈線のモチーフとともに異質であり、法量的にも大型の器種とみられる。Fig. 72-8~10は縄文を欠く。

Fig. 72-11~13は有文浅鉢・口縁部片である。11・12は磨消縄文土器で、同一個体の可能性がある。13は沈線・波状沈線を施文している。

Fig. 72-14・15は壺状の器種の口縁部片である。

西平式・伊吹町式土器 (Fig. 73~Fig. 77)

Fig. 73~Fig. 76; Fig. 77-1は有文深鉢・口縁部片である。

Fig. 73-4は波頂部で沈線が渦状に入り組む。Fig. 73-1~9; Fig. 74は口縁部の文様帯に刺突文を欠く。Fig. 74-15は口縁部の沈線がループ状に閉じて途切れる。Fig. 73-10~13; Fig. 75; Fig. 76は口縁部文様帯にも刺突文を施す。

Fig. 77-2・3は有文深鉢・胴部片である。

Fig. 77-4~12は有文浅鉢である。4~8は沈線・刺突施文のもので、沈線は4~6本と多条である。9~11も沈線・刺突施文であるが、沈線が三角形もしくは斜方向のモチーフとなるものである。

12は沈線施文の薄手の浅鉢で、きわめて異質である。

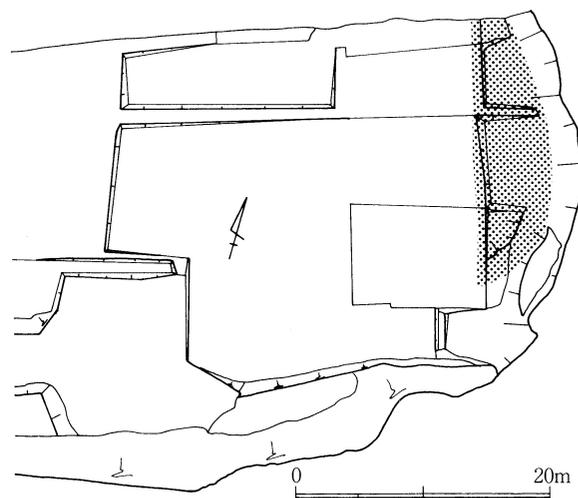


Fig. 70 第Ⅱ区縄文時代遺物包含層遺存範囲

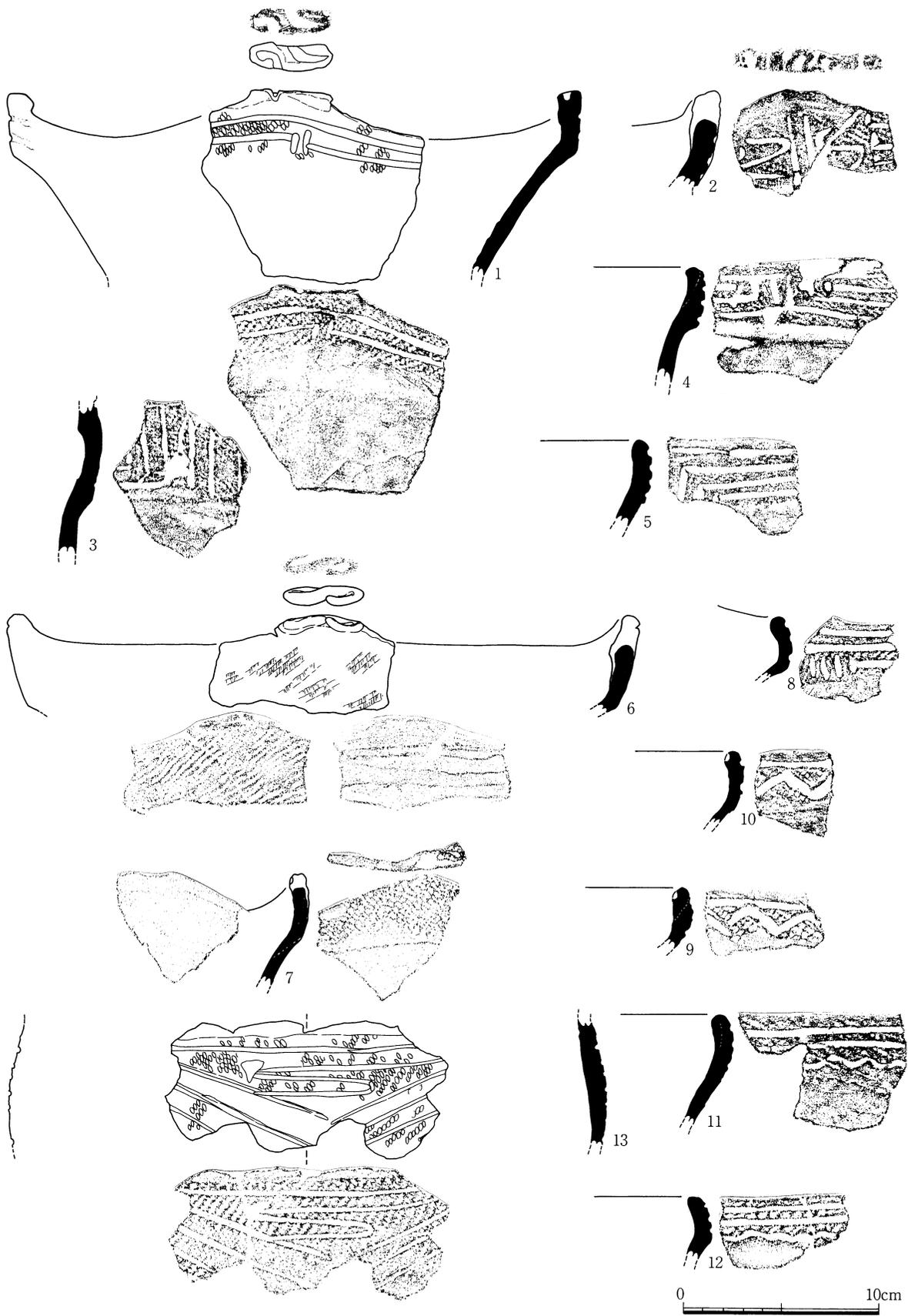


Fig. 71 第Ⅱ区出土縄文土器実測図1

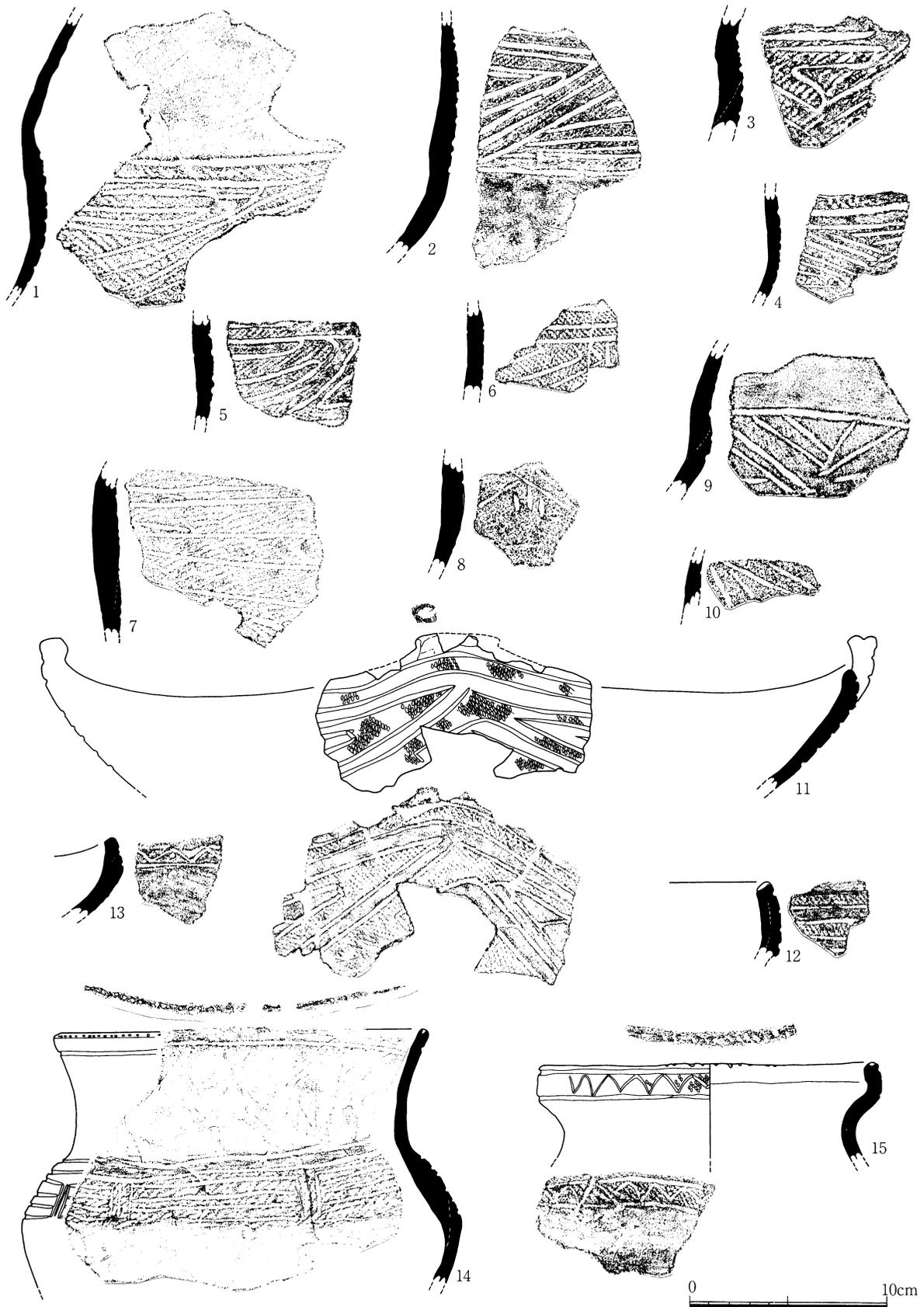


Fig. 72 第Ⅱ区出土縄文土器実測図 2

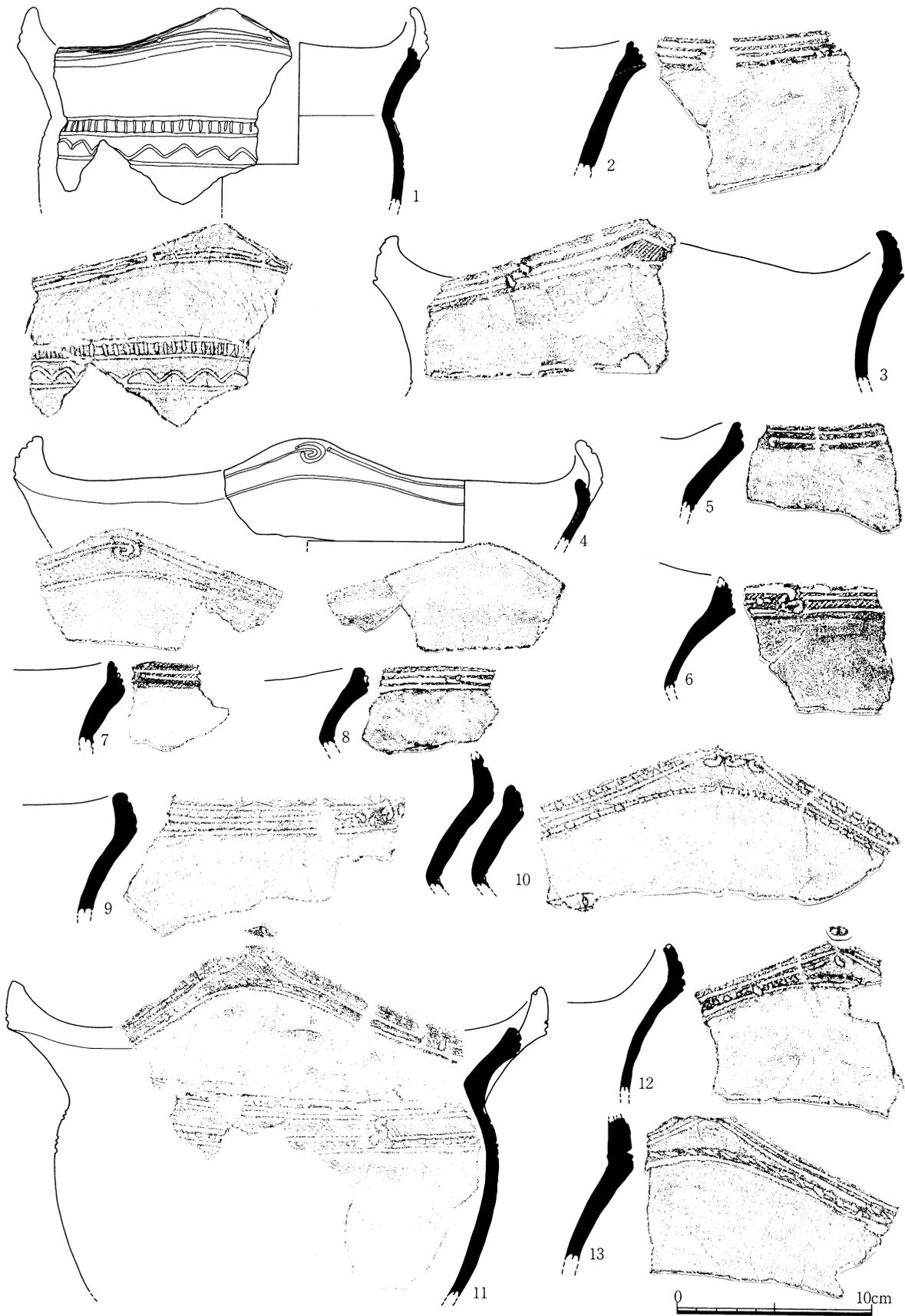


Fig. 73 第Ⅱ区出土縄文土器実測図 3

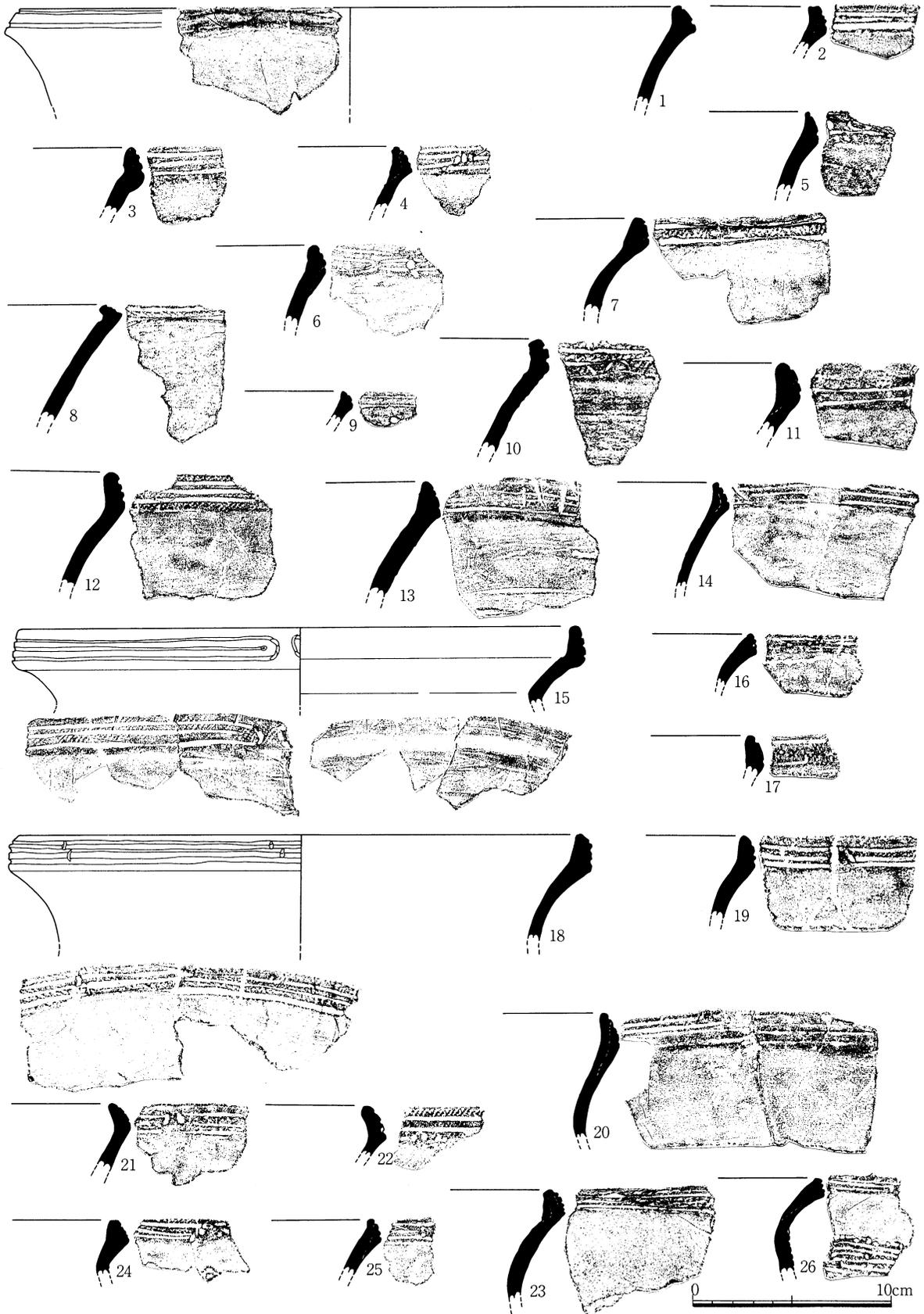


Fig. 74 第Ⅱ区出土縄文土器実測図 4

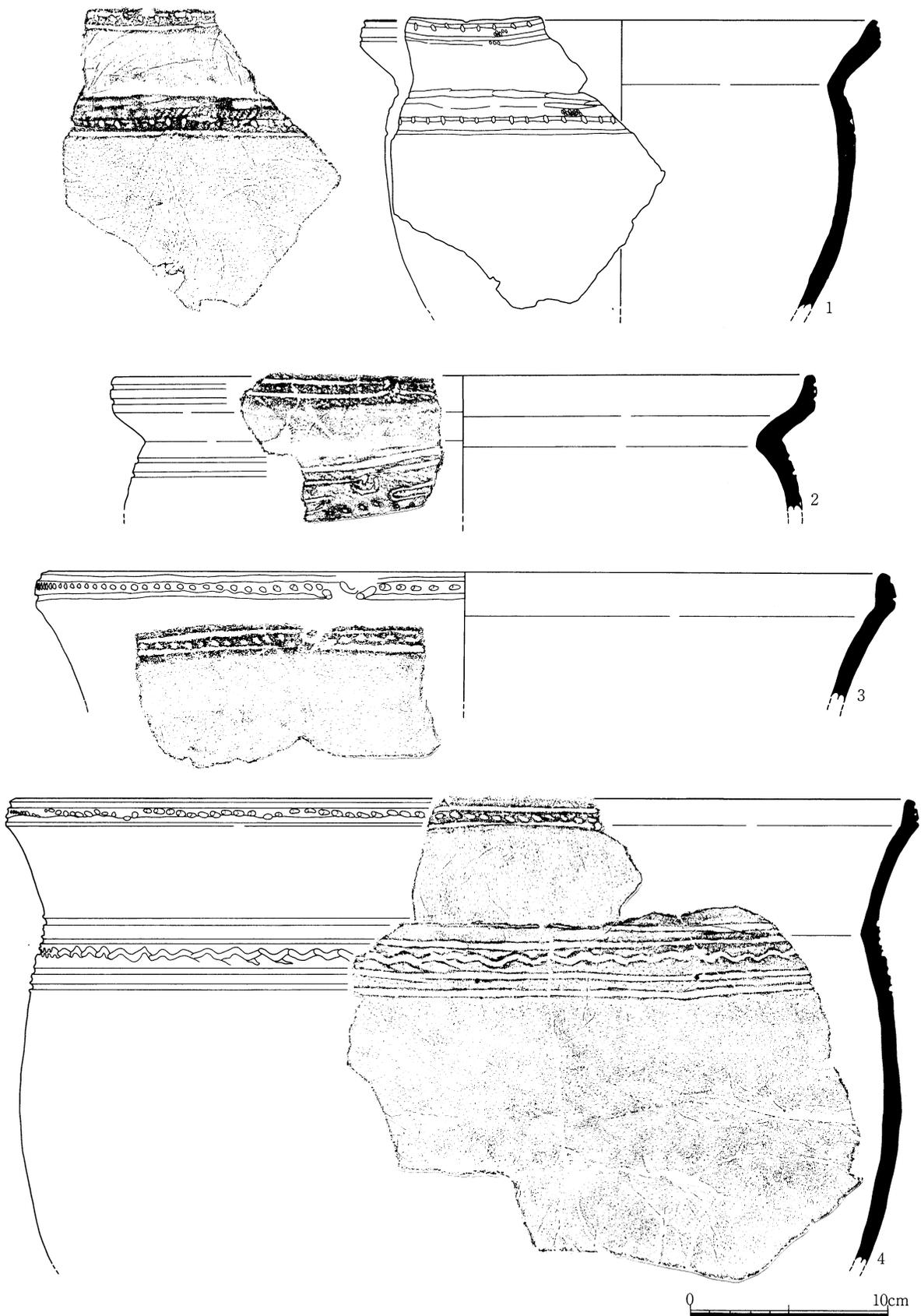


Fig. 75 第Ⅱ区出土縄文土器実測図5

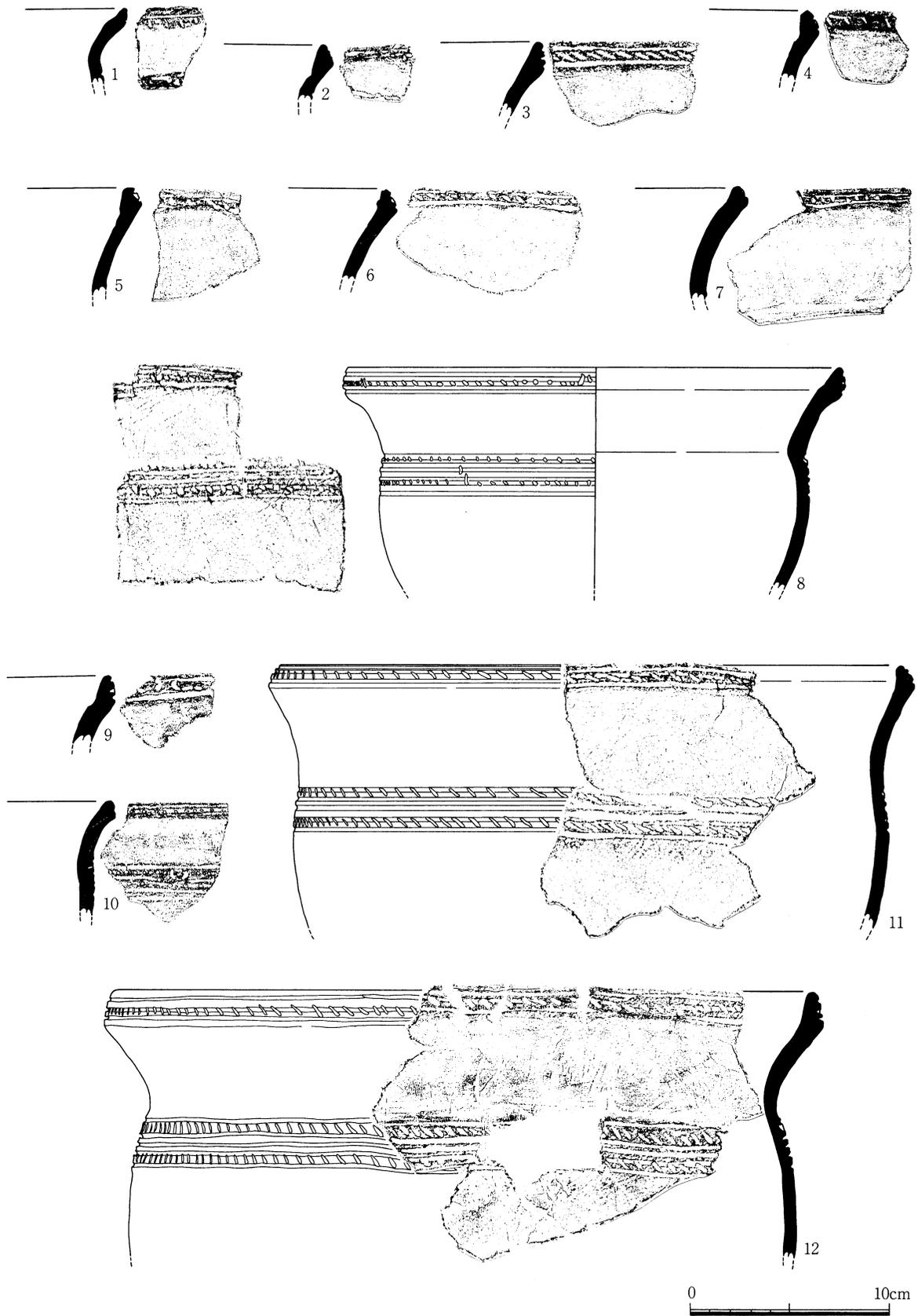


Fig. 76 第Ⅱ区出土縄文土器実測図6

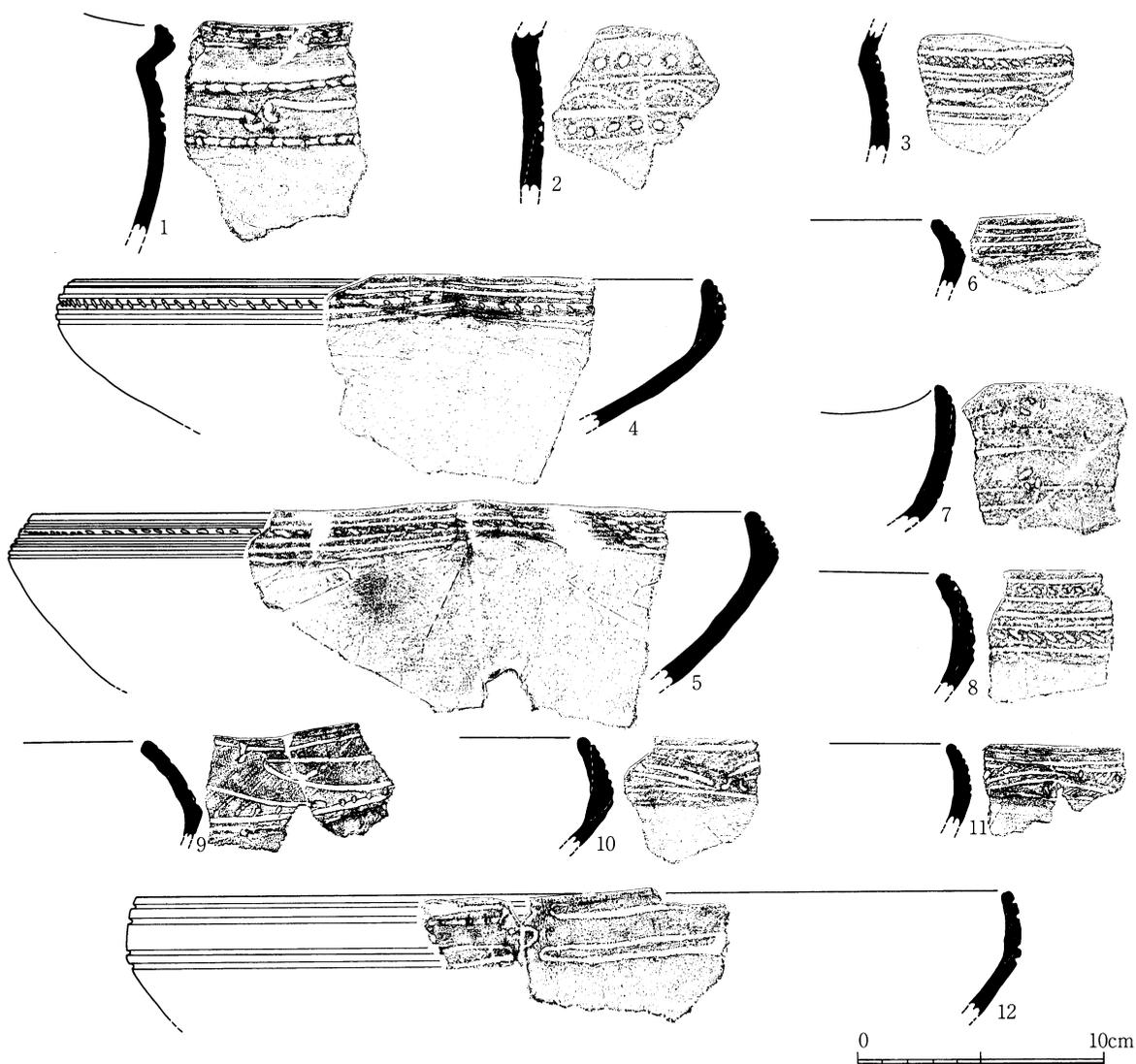


Fig. 77 第Ⅱ区出土縄文土器実測図 7

その他の後期土器 (Fig. 78~Fig. 80-5)

Fig. 78-1・2は隆起帯をもつ口縁部片である。

Fig. 78-3・4は有文浅鉢・胴部片である。

Fig. 78-5は有文鉢で、小型品である。

Fig. 78-6・7は注口土器・口縁部片である。

Fig. 78-8・9; Fig. 79は縄文施文の深鉢・鉢である。Fig. 79-4・5は口縁部内面及び外面に沈線を施す。

Fig. 80-1~5は無文深鉢の口縁部片である。

晚期土器 (Fig. 80-6~12)

7~12は刻目突帯を有する深鉢で、7~10は口縁部片、11・12は頸部片である。6は無文深鉢の口縁部片である。

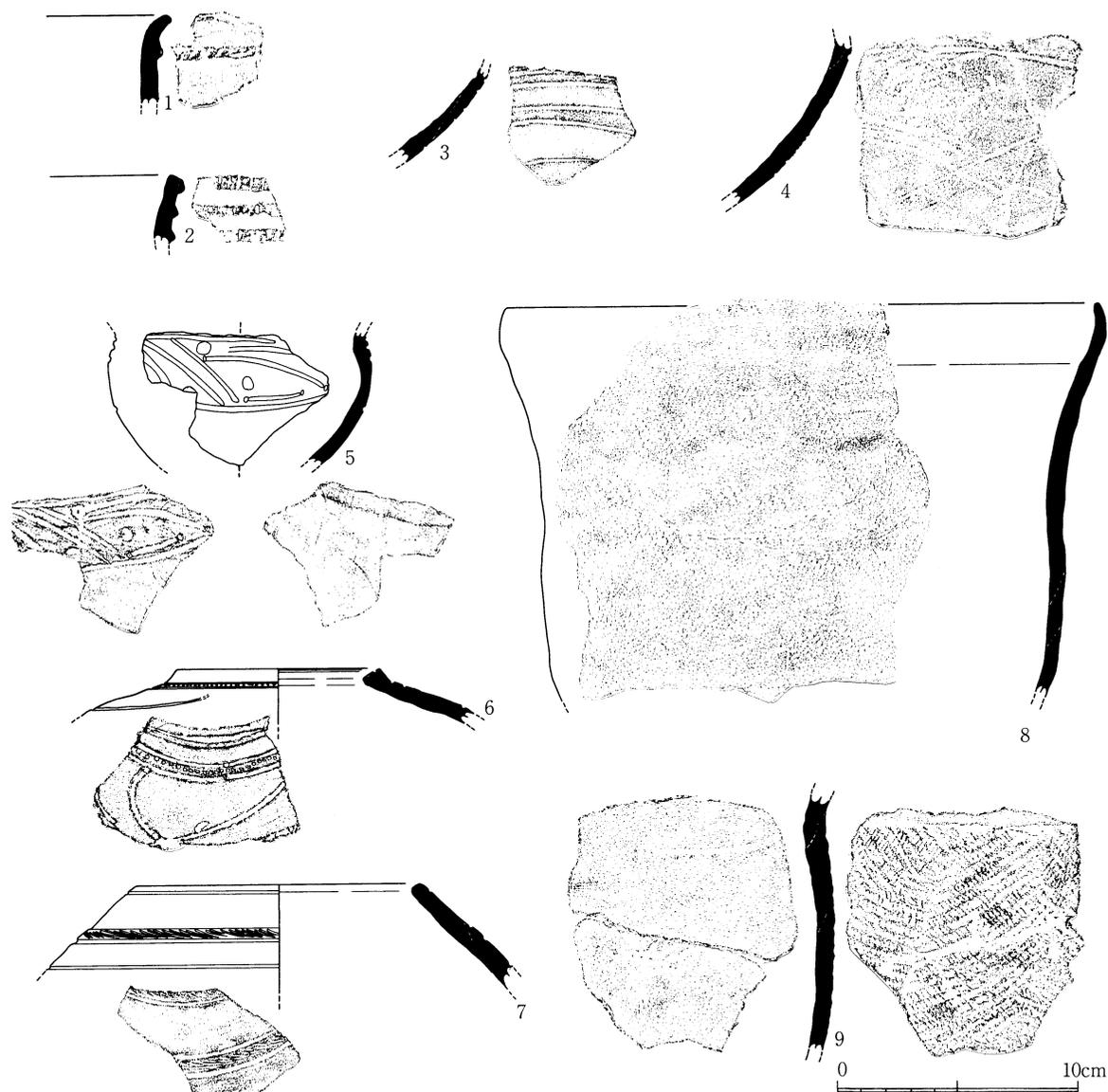


Fig. 78 第Ⅱ区出土縄文土器実測図 8

土器底部片 (Fig. 80-13~Fig. 81)

Fig. 80-13~16 ; Fig. 81-1~24は上げ底で, Fig. 80-13~16 ; Fig. 81-2・4・7~10・13~16は高台状を呈する。Fig. 81-25~28は平底, Fig. 81-29・30は丸底状である。Fig. 81-26は底部外面に植物・葉脈の押圧痕がみられる。

2) 石器 (Fig. 82)

1~7は石鏃, 8は尖頭器である。9は石銛(?)とみられる。

10は楔形石器(?)である。11~14はスクレーパーで, 12は十字形石器の転用品の可能性がある。

15は石錘である。

16は石核で, 横長の剥片を剥取している。

17は打製石斧で, 刃部は磨製によっている。

18は石棒の一部である。(曾我)



Fig. 79 第Ⅱ区出土繩文土器実測図9

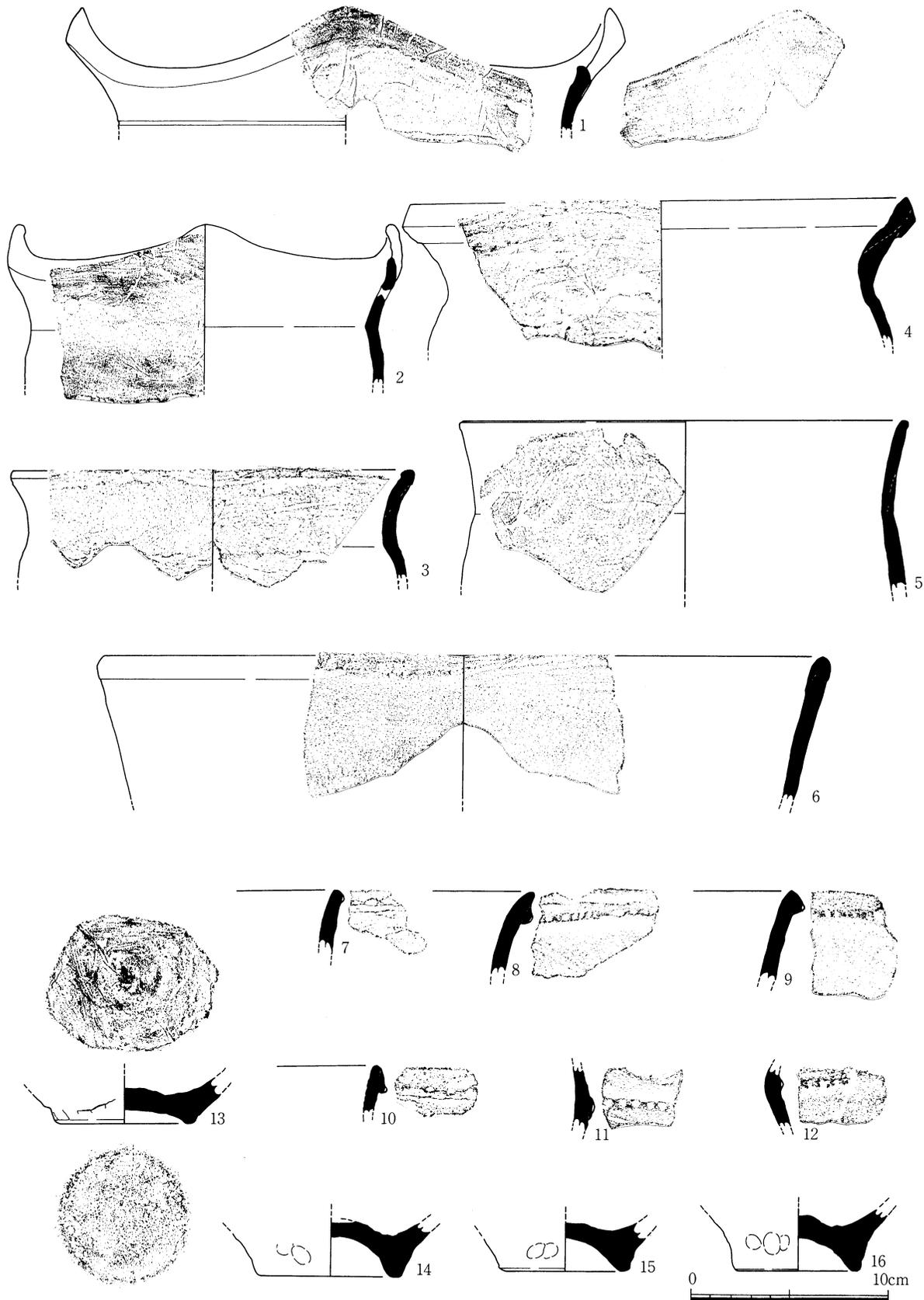


Fig. 80 第Ⅱ区出土縄文土器実測図10

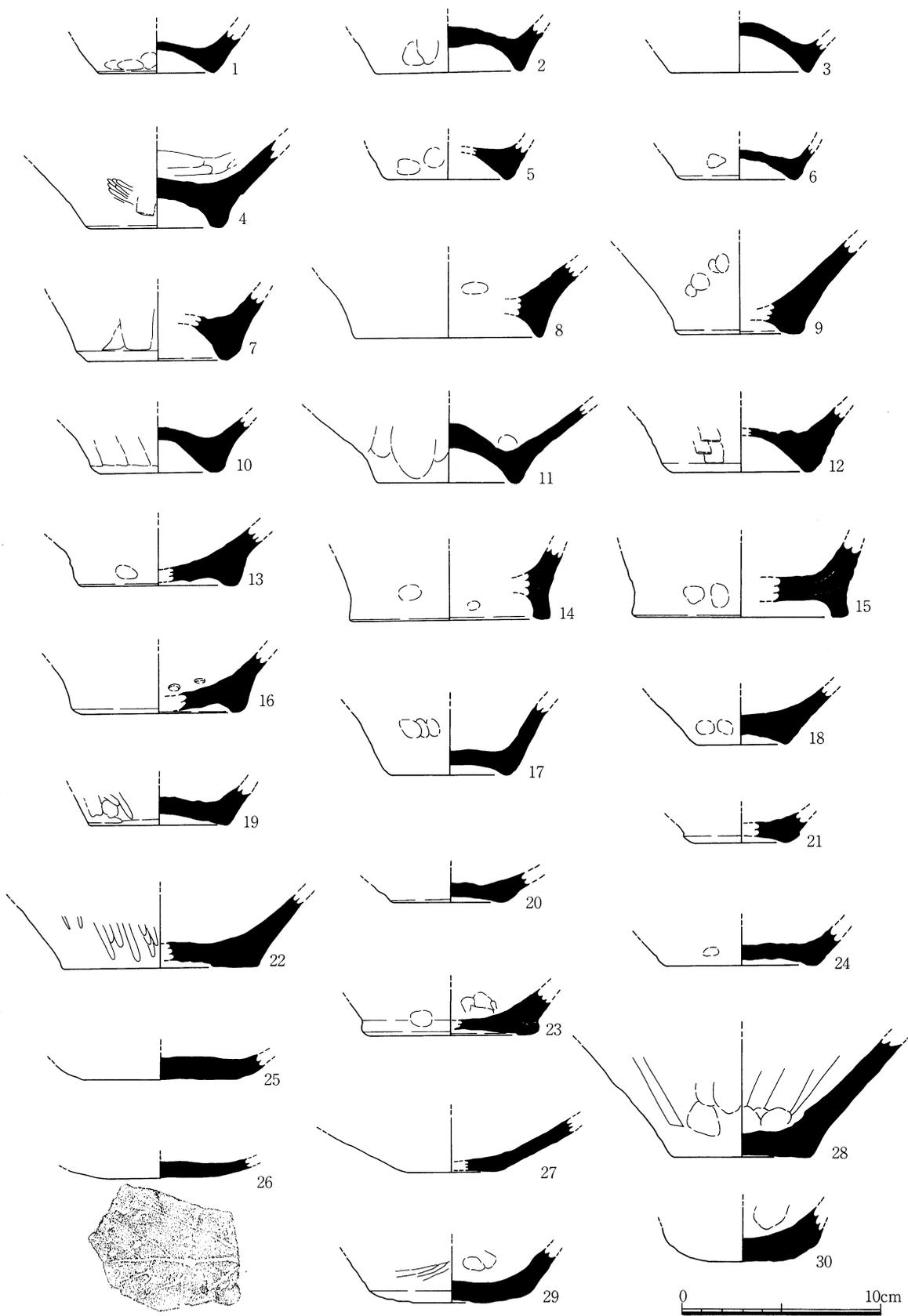


Fig. 81 第Ⅱ区出土縄文土器実測図11

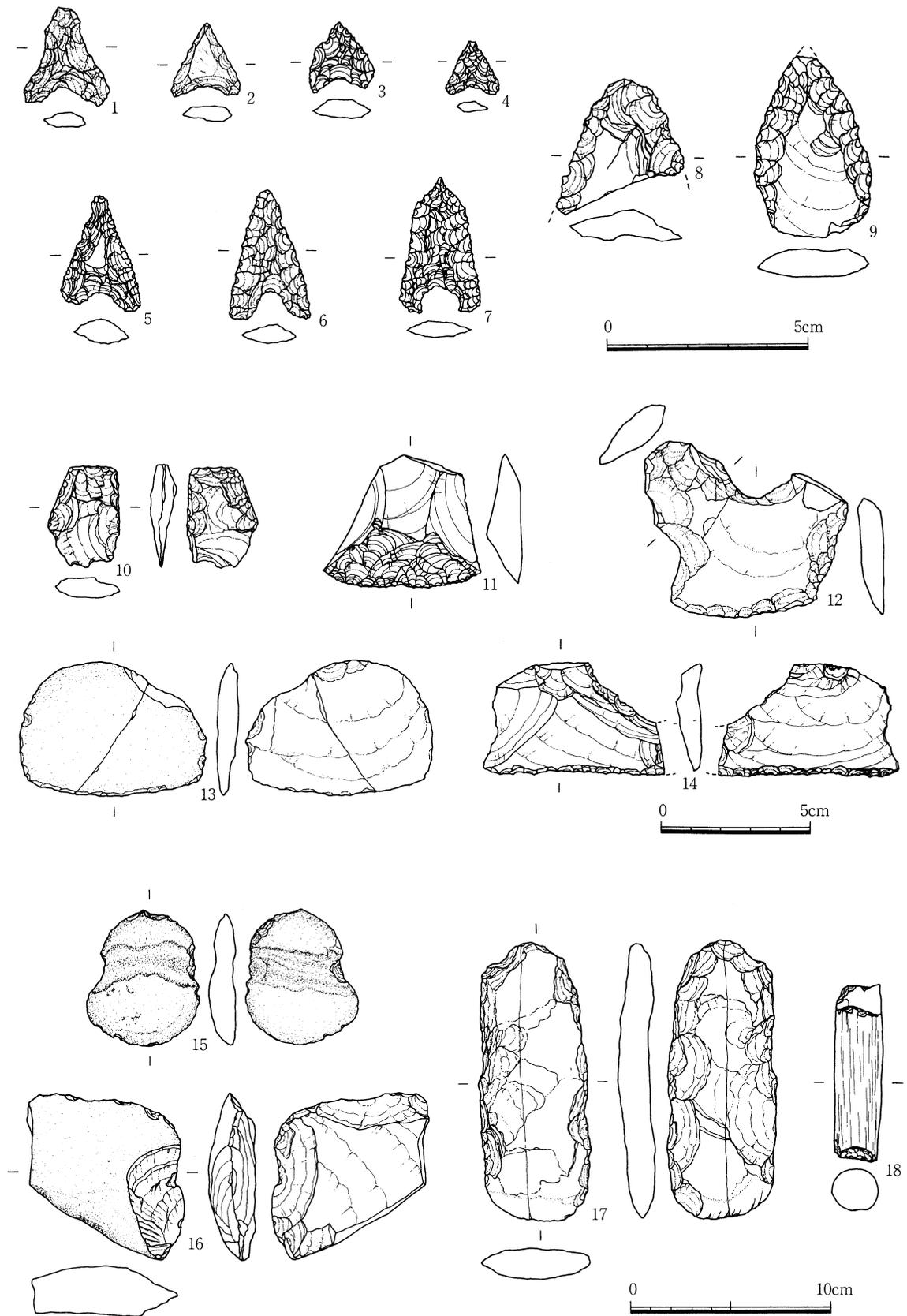


Fig. 82 第Ⅱ区出土石器実測図

Tab. 20 第Ⅱ区縄文土器観察表 1

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	文様・調整 外面 内面	色調 外面 内面	胎土	備考
Fig. 71-1	J層	有文深鉢・口縁部片	口径 26.8 残高 9.3	沈線, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6	雲母	山形口縁, 端面ヘラ描き文 後期, 片舶式
Fig. 71-2	J層, J層(褐)	〃	残高 4.8	沈線, 刺突文, 縄文RL, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6	長石, 石英	山形口縁, 端面ヘラ描き文 後期, 片舶式
Fig. 71-3	J層	〃	残高 7.6	沈線, 縄文RL, ナデ ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3	長石	内外面黒変 後期, 片舶式
Fig. 71-4	〃	〃	残高 5.9	沈線, 刺突文, 縄文RL, ナデ ナデ	褐 にぶい黄橙 7.5YR 4/3 10YR 6/4	長石, 石英, 雲母	後期, 片舶式
Fig. 71-5	〃	〃	残高 4.3	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ	明褐 赤褐 7.5YR 5/8 5YR 4/8	長石, 石英, 雲母	後期, 片舶式
Fig. 71-6	〃	〃	口径 30.8 残高 4.9	縄文LR, ナデ ナデ	にぶい赤褐 赤褐 7.5YR 4/3 5YR 4/6	石英	山形口縁, 端面「S」字状文 後期, 片舶式
Fig. 71-7	VI層	〃	残高 5.7	縄文LR, ナデ ナデ	暗褐 にぶい赤褐 7.5YR 3/3 5YR 4/4	長石, 雲母	山形口縁, 端面縄文原形押捺文 後期, 片舶式
Fig. 71-8	J層	〃	残高 3.1	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/6	石英, 雲母	後期, 片舶式
Fig. 71-9	〃	〃	残高 3.1	沈線, 縄文RL, ナデ ナデ	暗赤褐 にぶい赤褐 2.5YR 3/2 5YR 4/4	長石, 石英	端部刺突文 後期, 片舶式
Fig. 71-10	〃	〃	残高 3.6	沈線, 縄文RL, ナデ ナデ	黒褐 赤褐 7.5YR 3/2 2.5YR 4/6	石英	端部刺突文 後期, 片舶式
Fig. 71-11	〃	〃	残高 5.6	沈線, 縄文RL, ナデ ナデ	暗赤褐 赤褐 5YR 3/2 4/6	長石, 石英	後期, 片舶式
Fig. 71-12	〃	〃	残高 3.2	沈線, 縄文RL, ナデ ナデ	明赤褐 5YR 5/6	長石, 石英, 雲母	後期, 片舶式
Fig. 71-13	〃	〃 胴部片	残高 6.4 胴径 29.4	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ ナデ	暗赤褐 赤褐 2.5YR 3/6 4/6	長石, 雲母	後期, 片舶式
Fig. 72-1	〃	〃	残高 13.8	沈線, 刺突文, 縄文RL, ナデ ナデ	赤褐 明赤褐 2.5YR 4/6 5YR 5/8	長石	後期, 片舶式
Fig. 72-2	〃	〃	残高 11.7	沈線, 縄文LR, ナデ ナデ	にぶい赤褐 明赤褐 2.5YR 4/4 5YR 5/6	雲母, 石英	後期, 片舶式
Fig. 72-3	〃	〃	残高 5.7	沈線, 縄文LR, ナデ ナデ?	赤褐 5YR 4/6	長石, 石英	後期, 片舶式
Fig. 72-4	〃	〃	残高 5.1	沈線, 縄文LR, ナデ ミガキ	暗赤褐 5YR 3/4	長石, 石英	後期, 片舶式
Fig. 72-5	〃	〃	残高 5.1	沈線, 縄文LR ミガキ, ナデ	明赤褐 黄褐 5YR 5/6 10YR 5/6	長石, 石英, 雲母	後期, 片舶式
Fig. 72-6	J層下層	〃	残高 4.1	沈線, 縄文RL, ナデ ナデ	明赤褐 にぶい黄褐 5YR 5/6 10YR 4/3	長石, 石英	後期, 片舶式
Fig. 72-7	J層	〃	残高 8.3	沈線, 縄文(無節?), ナデ ナデ	明赤褐 赤褐 2.5YR 5/8 4/8	雲母, 石英	後期, 片舶式?
Fig. 72-8	〃	〃	残高 5.4	沈線, ナデ ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/4	長石, 石英	後期, 片舶式?
Fig. 72-9	〃	〃	残高 6.9	沈線, 縄文RL, ミガキ, ナデ ナデ	明赤褐 褐 5YR 5/8 7.5YR 4/3	長石, 石英	後期, 片舶式
Fig. 72-10	Jc層	〃	残高 2.7	沈線, 縄文LR ナデ	赤褐 明赤褐 5YR 4/8 5/6	石英	後期, 片舶式
Fig. 72-11	〃	有文浅鉢・口縁部片	口径 39.4 残高 7.7	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ	明赤褐 5YR 5/6	長石, 雲母	山形口縁, 端面刺突文 後期, 片舶式
Fig. 72-12	J層下層	〃	残高 3.8	沈線, 縄文LR, ミガキ ナデ	赤褐 5YR 4/8	長石, 石英	山形口縁, 端面刻目文 後期, 片舶式
Fig. 72-13	J層(黒)	〃	残高 4.0	沈線, 縄文LR?, ミガキ ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 黒褐 5YR 4/4 10YR 3/1	長石, 石英	後期, 片舶式?
Fig. 72-14	J層	有文深鉢(壺?)	口径 18.2 残高 12.9 胴径 22.2	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 にぶい黄褐 2.5YR 3/3 10YR 4/3	長石, 雲母	端部刺突文 後期, 片舶式?
Fig. 72-15	〃	有文深鉢・口縁部片	口径 16.4 残高 5.0	沈線, 縄文RL, ミガキ ナデ	暗赤褐 赤黒 2.5YR 3/3 2/1	長石, 石英	端部刺突文 後期, 片舶式?
Fig. 73-1	J層(黒)	〃	口径 19.0 残高 10.0	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/4 5/4	雲母	後期, 西平式
Fig. 73-2	J層	〃	残高 7.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	黒褐 赤褐 5YR 2/2 4/6	長石, 雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-3	〃	〃	残高 7.6 胴径 23.2	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	灰褐 黒 7.5YR 4/2 2/1	雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-4	VI層下	〃	口径 27.4 残高 5.2	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ミガキ, ナデ ナデ	にぶい褐 5YR 5/4	石英	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-5	J層	〃	残高 4.6	沈線, 刺突文, 縄文RL?, ナデ ナデ	暗赤褐 5YR 3/3 3/6	長石, 石英, 雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-6	Jc層	〃	残高 5.6	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 にぶい赤褐 5YR 3/4 2.5YR 4/3	雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-7	J層(黒)	〃	残高 4.3	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ ミガキ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/6 3/4	長石, 雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-8	〃	〃	残高 4.0	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	褐 5YR 4/3	長石, 雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-9	〃	〃	残高 6.2	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐 5YR 4/8	長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-10	J層	〃	残高 7.0	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐 5YR 4/6	長石, 雲母	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 73-11	VI層, J層	有文深鉢	口径 25.7 残高 15.9 胴径 22.4	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ ナデ	暗赤褐 5YR 3/4	長石, 雲母	山形口縁, 端面刺突文 後期, 西平式

Tab. 21 第Ⅱ区縄文土器観察表 2

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	文様・調整 外面 内面	色調 外面 内面	胎土	備考
Fig. 73-12	J層	有文深鉢・口縁部片	残高 7.5	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/4	長石, 雲母	山形口縁, 端面刺突文後期, 西平式
Fig. 73-13	J層 (黒)	〃	残高 8.0	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ	褐 7.5YR 4/3 黒褐 2/2	長石, 雲母	山形口縁, 端面刺突文後期, 西平式
Fig. 74-1	J層	〃	口径 32.8 残高 4.8	沈線, ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/8 明赤褐 5YR 5/6	雲母	後期, 西平式
Fig. 74-2	J層 (黒)	〃	残高 2.1	沈線, ナデ	にぶい赤褐 5YR 5/4 褐灰 7.5YR 4/1	石英, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-3	J層	〃	残高 3.2	沈線, 不明 (剥落) ミガキ, ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3 褐 7.5YR 4/3	石英, 長石	後期, 西平式
Fig. 74-4	J層 (黒)	〃	残高 3.1	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ	にぶい黄褐 10YR 5/3 〃 4/3	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-5	J層	〃	残高 3.9	沈線, ミガキ, ナデ	黒褐 10YR 3/2 赤褐 5YR 4/8	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-6	〃	〃	残高 4.0	沈線, 刺突文, ミガキ	明褐 7.5YR 5/6	石英, 長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-7	〃	〃	残高 4.5	沈線, 縄文RL, ミガキ, ナデ	明赤褐 5YR 5/6 にぶい褐 7.5YR 5/4	雲母	後期, 西平式
Fig. 74-8	〃	〃	残高 5.8	沈線, 縄文RL, ミガキ	灰褐 7.5YR 4/2 にぶい赤褐 5YR 5/4	雲母	後期
Fig. 74-9	〃	〃	残高 1.5	沈線, 縄文LR, ナデ	にぶい赤褐 2.5YR 4/4 灰褐 5YR 4/2	長石	後期, 西平式
Fig. 74-10	J層 (黒)	〃	残高 5.4	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/3	石英, 長石	端面縄文体押捺後期, 西平式
Fig. 74-11	J層	〃	残高 3.7	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6	長石	後期, 西平式
Fig. 74-12	〃	〃	残高 5.8	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/3 にぶい赤褐 〃 4/3	長石	後期, 西平式
Fig. 74-13	〃	〃	残高 5.7	沈線, 縄文LR, ミガキ	赤褐 5YR 4/6	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-14	J層 (黒)	〃	残高 5.3	沈線, 縄文RL?, ミガキ, ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-15	攪乱層	〃	口径 27.8 残高 3.9	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 にぶい赤褐 5YR 4/3	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-16	J層	〃	残高 2.6	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ	暗赤褐 5YR 3/4	石英, 長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-17	〃	〃	残高 2.1	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/4	長石	後期, 西平式
Fig. 74-18	Ⅶ層, J層	〃	口径 28.0 残高 5.3	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ	極暗赤褐 2.5YR 2/3 赤褐 〃 4/6	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-19	J層	〃	残高 4.1	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ	暗赤褐 2.5YR 3/4	石英, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-20	〃	〃	残高 6.3	沈線, 刺突文, 縄文RL?, ミガキ	暗赤褐 5YR 3/6 〃 3/4	長石, 石英	後期, 西平式
Fig. 74-21	〃	〃	残高 3.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ	暗赤 10R 3/4	石英, 長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-22	J層 (黒)	〃	残高 2.6	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ	明赤褐 5YR 5/6 にぶい赤褐 〃 5/4	石英, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-23	〃	〃	残高 5.6	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ	にぶい黄褐 10YR 5/4 にぶい黄橙 〃 6/4	長石	後期, 西平式
Fig. 74-24	J層	〃	残高 2.8	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/4	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 74-25	〃	〃	残高 2.8	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ	暗赤褐 5YR 3/2 黒褐 〃 3/1	雲母	後期, 西平式
Fig. 74-26	Ⅶ層	〃	残高 4.8	沈線, 刺突文, 縄文RL, ナデ	暗赤褐 5YR 3/2	長石	後期, 西平式
Fig. 75-1	J層	有文深鉢	口径 25.4 残高 14.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ	暗赤褐 2.5YR 3/3 赤褐 〃 4/6	長石	後期, 西平式
Fig. 75-2	〃	有文深鉢・口縁部片	口径 35.2 残高 6.8	沈線, 刺突文, 縄文RL, ナデ	暗赤褐 5YR 3/3 にぶい赤褐 〃 4/4	長石	山形口縁? 後期, 西平式
Fig. 75-3	〃	〃	口径 41.9 残高 6.5	沈線, 刺突文, ミガキ	赤褐 2.5YR 4/6 赤黒 〃 7/1	石英	後期, 西平式
Fig. 75-4	〃	有文深鉢	口径 44.7 残高 23.7 胴径 44.1	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 黒褐 5YR 2/2	石英, 雲母	後期, 西平式
Fig. 76-1	〃	有文深鉢・口縁部片	残高 3.7	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ	明赤褐 5YR 5/8	雲母	後期, 西平式
Fig. 76-2	J層 (黒)	〃	残高 2.7	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/3	長石	山形口縁? 後期, 西平式
Fig. 76-3	J層	〃	残高 3.7	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 暗赤褐 〃 3/4	長石	後期, 西平式
Fig. 76-4	J層 (黒)	〃	残高 3.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ	明赤褐 2.5YR 5/6	長石	後期, 西平式
Fig. 76-5	J層	〃	残高 5.4	沈線, 刺突文, 縄文RL, ミガキ, ナデ	黒褐 5YR 2/2 赤褐 〃 4/6	長石	後期, 西平式
Fig. 76-6	〃	〃	残高 4.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ	黒褐 10YR 2/2	雲母	後期, 西平式
Fig. 76-7	〃	〃	残高 5.5	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/6 にぶい赤褐 〃 4/4	長石, 雲母	山形口縁? 後期, 西平式

Tab. 22 第Ⅱ区縄文土器観察表3

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	文様・調整 外面 内面	色調 外面 内面	胎土	備考	
Fig. 76-8	J層, J層(黒)	有文深鉢	口径 24.5 残高 11.0 胴径 21.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ ナデ	暗赤褐 極暗褐	5YR 3/4 7.5YR 2/3	石英, 長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 76-9	J層	有文深鉢・口縁部片	残高 3.4	沈線, 刺突文, 縄文RL?, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	褐 赤褐	7.5YR 4/3 5YR 4/8	長石	後期, 西平式
Fig. 76-10	表採	〃	残高 5.8	沈線, 刺突文, ナデ?	橙 極暗褐	5YR 6/6 7.5YR 2/3	石英, 雲母	後期, 西平式
Fig. 76-11	J層(黒)	有文深鉢	口径 30.1 残高 13.1 胴径 29.8	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 〃	5YR 3/2 〃 3/3	長石	後期, 西平式
Fig. 76-12	J層	〃	口径 35.0 残高 13.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ケズリ ナデ	赤褐 〃	5YR 5/6 〃	長石	後期, 西平式
Fig. 77-1	J層(黒)	有文深鉢・口縁部片	残高 8.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	暗赤褐 〃	5YR 3/4 〃 3/3	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 77-2	J層	〃・胴部片	残高 6.6	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	赤褐 〃	5YR 4/6 2.5YR 4/8	石英, 長石	後期, 西平式
Fig. 77-3	〃	〃	残高 4.8	沈線, 刺突文, ナデ	明褐 〃	7.5YR 5/8 〃	石英, 長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 77-4	〃	有文浅鉢・口縁部片	口径 25.6 残高 5.9	沈線, 刺突文, 縄文LR?, ミガキ ミガキ, ナデ	赤褐 にぶい赤褐	2.5YR 4/6 5YR 5/4	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 77-5	VI層, J層	〃	口径 28.8 残高 7.0	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ	赤褐 〃	2.5YR 4/8 〃	石英, 長石	後期, 西平式
Fig. 77-6	J層	〃	残高 2.7	沈線, 縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	黒褐 〃	5YR 2/2 〃	雲母	後期, 西平式
Fig. 77-7	J層(黒)	〃	残高 5.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ ミガキ	赤褐 〃	5YR 4/6 〃	長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 77-8	J層	〃	残高 4.7	沈線, 刺突文, 縄文LR, ナデ ミガキ, ナデ	黒 黒褐	7.5YR 7/1 〃 2/2	長石	後期, 西平式
Fig. 77-9	TR	〃	残高 4.0	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ ミガキ	橙 明赤褐	2.5YR 6/6 〃 5/6	長石, 石英	外面黒変 後期, 西平式
Fig. 77-10	J層	〃	残高 4.4	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ ミガキ, ナデ	明赤褐 暗赤褐	2.5YR 5/6 5YR 3/2	長石	後期, 西平式
Fig. 77-11	〃	〃	残高 3.5	沈線, 刺突文, 縄文LR, ミガキ ミガキ, ナデ	黒褐 にぶい褐	7.5YR 3/1 〃 5/4	長石	後期, 西平式
Fig. 77-12	J層(黒)	〃	口径 34.8 残高 4.6	沈線, 刺突文, ミガキ, ナデ ナデ?	灰黄褐 にぶい黄褐	10YR 5/2 〃 5/3	長石, 雲母	後期, 西平式併行
Fig. 78-1	Ⅶ層	有文深鉢・口縁部片	残高 3.6	刻目突帯, ミガキ, ナデ ナデ	にぶい黄橙 〃	10YR 6/3 〃	雲母, 角閃石	後~晩期?
Fig. 78-2	〃	〃	残高 2.8	刻目突帯, ナデ ナデ	にぶい赤褐 明赤褐	5YR 4/4 〃 5/6	長石, 石英	後~晩期?
Fig. 78-3	J層	有文浅鉢・胴部片	残高 3.8	沈線, 擬縄文, ミガキ ナデ	褐灰 灰黄褐	10YR 4/1 〃 6/2	長石, 雲母	後期
Fig. 78-4	〃	〃	残高 6.8	沈線, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	黄灰 〃	2.5Y 5/1 〃 4/1	長石, 石英	後期, 西平式併行?
Fig. 78-5	TR	有文鉢・胴部片	残高 5.5 胴径 10.7	沈線, 刺突文, ミガキ ナデ	明赤褐 暗赤褐	2.5YR 5/8 〃 3/3	長石	後期
Fig. 78-6	Ⅶ層	注口土器・口縁部片	口径 8.5 残高 2.3	沈線, 刺突文, 擬縄文, ミガキ ナデ	オリーフ黒 灰	5Y 3/1 〃 4/1	長石	後期, 彦崎Ⅱ式併行?
Fig. 78-7	TR	〃	口径 11.7 残高 4.3	沈線, 擬縄文, ミガキ ミガキ, ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	10YR 5/2 〃 7/2	長石, 雲母	後期, 西平式併行?
Fig. 78-8	J層	縄文深鉢	口径 24.4 残高 16.3 胴径 21.6	縄文RL, ナデ ナデ	褐灰 灰黄褐	10YR 4/1 〃 4/2	長石, 石英, 雲母	後期, 西平式併行?
Fig. 78-9	〃	縄文深鉢・胴部片	残高 10.6	縄文RL, ナデ ナデ, 指頭押圧	橙 〃	5YR 6/6 2.5YR 6/6	長石, 石英, 雲母	後期, 片箱式併行
Fig. 79-1	〃	縄文深鉢	口径 27.9 残高 14.1 胴径 26.1	沈線, 縄文RL, ミガキ ミガキ	赤褐 〃	5YR 4/6 〃	長石	後期, 片箱式併行
Fig. 79-2	〃	縄文深鉢・口縁部片	口径 28.0 残高 8.5	縄文RL, ミガキ, ナデ ナデ	灰褐 灰黄褐	7.5YR 4/2 10YR 5/2	長石	後期
Fig. 79-3	〃	〃	残高 3.2	縄文RL, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 橙	5YR 4/3 〃 6/6	雲母	後期
Fig. 79-4	Ⅵ層	有文深鉢・口縁部片	残高 4.8	縄文RL, ミガキ 沈線, ミガキ	灰褐 にぶい赤褐	7.5YR 4/2 5YR 4/4	石英, 雲母, 長石	後期
Fig. 79-5	J層	有文浅鉢・口縁部片	残高 3.5	沈線, 縄文RL, ナデ ミガキ, ナデ	灰黄褐 〃	10YR 4/2 〃	石英, 雲母, 長石	後期
Fig. 79-6	〃	縄文深鉢	口径 26.4 残高 14.0 胴径 24.6	縄文LR, ミガキ, ナデ ミガキ, ナデ	にぶい赤褐 〃	5YR 4/3 〃	石英, 長石	後期, 片箱式併行
Fig. 79-7	JB層	縄文深鉢・胴部片	残高 10.0	縄文LR, ナデ ナデ, 指頭押圧	にぶい赤褐 暗褐	5YR 4/4 7.5YR 3/3	石英, 雲母, 長石	後期, 片箱式併行
Fig. 80-1	J層	無文深鉢・口縁部片	口径 26.6 残高 4.6	ミガキ ミガキ	暗赤褐 にぶい褐	5YR 3/4 〃	長石	山形口縁 後期, 西平式
Fig. 80-2	〃	〃	口径 18.6 残高 8.1	ナデ ナデ	灰黄褐 〃	10YR 5/2 〃	長石	山形口縁, 補修孔1, 端部黒変 後期, 西平式
Fig. 80-3	〃	〃	口径 25.0 残高 7.4	ヨコナデ ナデ	明赤褐 〃	5YR 5/6 〃	長石, 雲母	後期, 西平式併行
Fig. 80-4	〃	〃	口径 19.4 残高 5.5	ナデ ナデ	黒褐 〃	7.5YR 3/1 〃 2/2	石英, 雲母, 長石	内面黒変 後期, 西平式併行
Fig. 80-5	〃	〃	口径 22.4 残高 8.6	ナデ ナデ	にぶい黄橙 〃	10YR 6/4 〃	砂岩	後期

Tab. 23 第Ⅱ区縄文土器観察表 4

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	文様・調整 外面 内面	色調 外面 内面	胎土	備考
Fig. 80-6	J層	無文深鉢・口縁部片	口径 36.2 残高 7.2	ナデ? ヘラナデ, ナデ	暗赤褐 5YR 3/4 暗褐 7.5YR 3/3	石英, 長石, 雲母	晩期?
Fig. 80-7	Ⅶ層下	有文深鉢・口縁部片	残高 3.5	刻目突帯, ナデ ナデ	灰褐 7.5YR 4/2 〃 〃 〃	長石	晩期
Fig. 80-8	J層	〃 〃 〃	残高 4.2	刻目突帯, 条痕, ナデ 不明 (摩滅)	にぶい橙 7.5YR 7/4 にぶい褐 〃 5/4	雲母	晩期
Fig. 80-9	〃	〃 〃 〃	残高 4.5	刻目突帯, ナデ? ナデ? (摩滅)	にぶい橙 7.5YR 6/4 にぶい褐 〃 6/3	長石	晩期
Fig. 80-10	〃	〃 〃 〃	残高 2.4	刻目突帯, ナデ? 条痕?	橙 5YR 6/6 〃 〃 〃	雲母	端部に刻目? 晩期
Fig. 80-11	〃	有文深鉢・胴部片	残高 3.3	刻目突帯, ナデ? 条痕?	赤褐 2.5YR 4/3 にぶい赤褐 5YR 4/3	長石	晩期
Fig. 80-12	〃	〃 〃 〃	残高 3.0	刻目突帯 ナデ? (摩滅)	暗灰 N 3/ 〃 〃 〃	石英	晩期
Fig. 80-13	〃	底部片	残高 2.3 底径 6.7	ナデ, ミガキ ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 〃 5YR 4/6	石英, 長石, 雲母	内外面にスス 後期, 西平式
Fig. 80-14	〃	〃	残高 2.8 底径 7.1	ナデ, 指頭押圧 ナデ, 指頭押圧	明赤褐 5YR 5/6 にぶい黄橙 10YR 6/3	雲母, 角閃石	後期, 西平式
Fig. 80-15	〃	〃	残高 2.5 底径 6.2	ナデ, 指頭押圧 ナデ	にぶい赤褐 2.5YR 4/3 〃 〃 〃	長石	後期, 西平式
Fig. 80-16	〃	〃	残高 3.1 底径 6.1	ナデ ナデ	橙 5YR 6/8 〃 〃 6/6	雲母	後期, 西平式
Fig. 81-1	J層 (黒)	底部片 (浅鉢)	残高 2.1 底径 5.8	ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/8 灰褐 7.5YR 4/2	石英	後期, 西平式
Fig. 81-2	J層	底部片	残高 2.3 底径 7.2	ナデ, 指頭押圧 ナデ	明褐 7.5YR 5/6 〃 〃 〃	石英, 長石	後期, 西平式
Fig. 81-3	〃	底部片 (浅鉢)	残高 2.4 底径 6.4	ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/6 褐 7.5YR 4/3	石英	後期, 西平式
Fig. 81-4	〃	底部片	残高 4.3 底径 6.8	ミガキ, ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/8 明赤褐 〃 5/6	石英, 長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 81-5	〃	〃	残高 1.8 底径 6.0	ナデ, 指頭押圧 ナデ	赤褐 5YR 4/6 褐 7.5YR 4/3	長石	後期, 西平式
Fig. 81-6	〃	〃	残高 1.7 底径 5.8	ナデ, 指頭押圧 ナデ	赤褐 5YR 4/8 橙 7.5YR 6/6	長石	後期, 西平式
Fig. 81-7	〃	〃	残高 3.4 底径 7.0	ナデ ナデ?	橙 5YR 6/6 〃 〃 〃	長石	後期, 西平式
Fig. 81-8	〃	〃	残高 3.7 底径 9.2	ナデ ナデ, 指頭押圧	赤褐 2.5YR 4/6 黒褐 5YR 3/1		後期, 西平式
Fig. 81-9	J層 (黒)	〃	残高 4.6 底径 5.8	ナデ, 指頭押圧 ナデ	明赤褐 5YR 5/8 にぶい黄橙 10YR 6/3	長石	後期, 西平式
Fig. 81-10	J層	〃	残高 2.7 底径 5.9	ナデ ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 にぶい赤褐 5YR 4/4	長石	後期, 西平式
Fig. 81-11	J層 (黒)	底部片 (浅鉢)	残高 3.9 底径 7.0	ナデ, 指頭押圧 ナデ, 指頭押圧	赤褐 5YR 4/8 〃 〃 〃	長石	後期, 西平式
Fig. 81-12	J層	底部片	残高 3.2 底径 7.0	ナデ, 指頭押圧 ナデ	明赤褐 5YR 5/6 〃 〃 〃	雲母	後期, 西平式
Fig. 81-13	J層 (黒)	〃	残高 2.9 底径 7.6	ナデ, 指頭押圧 ナデ	赤褐 5YR 4/8 にぶい褐 7.5YR 5/4	石英, 雲母	後期, 西平式
Fig. 81-14	J層	〃	残高 3.6 底径 9.6	ナデ, 指頭押圧 ナデ	赤褐 5YR 4/8 明赤褐 〃 5/6	長石, 石英	後期, 西平式
Fig. 81-15	〃	〃	残高 3.8 底径 10.4	ナデ, 指頭押圧 ナデ	赤褐 2.5YR 4/6 〃 〃 〃	雲母, 長石	内面黒変 後期, 西平式
Fig. 81-16	〃	〃	残高 3.0 底径 7.8	ナデ ナデ, 指頭押圧	赤褐 2.5YR 4/6 にぶい赤褐 5YR 5/4	石英	後期, 西平式?
Fig. 81-17	〃	〃	残高 3.6 底径 5.8	ナデ, 指頭押圧 ナデ, 指頭押圧	赤褐 5YR 4/8 灰黄褐 10YR 4/2	長石, 雲母	後期, 西平式
Fig. 81-18	〃	〃	残高 2.8 底径 4.4	ナデ, 指頭押圧 ナデ	橙 5YR 6/6 にぶい橙 7.5YR 7/4	雲母	後期, 西平式
Fig. 81-19	J層 (黒)	〃	残高 2.0 底径 6.8	ミガキ, ナデ ナデ	赤褐 5YR 4/8 褐 7.5YR 4/3	長石, 石英, 雲母	後期, 西平式
Fig. 81-20	J層	底部片 (浅鉢)	残高 1.5 底径 5.4	ナデ ナデ, 指頭押圧	赤褐 2.5YR 4/6 褐 7.5YR 4/3	長石, 石英	後期, 西平式
Fig. 81-21	〃	底部片	残高 1.5 底径 4.6	ナデ ナデ, 指頭押圧	赤褐 5YR 4/6 にぶい赤褐 〃 4/4	長石	後期, 西平式
Fig. 81-22	〃	底部片 (浅鉢)	残高 3.6 底径 9.8	ミガキ ナデ	橙 7.5YR 6/6 黄灰 2.5YR 4/1	長石	後期, 西平式?
Fig. 81-23	〃	底部片	残高 2.3 底径 7.8	指頭押圧 ナデ	明赤褐 2.5YR 5/8 にぶい赤褐 5YR 5/4	長石, 石英	後期, 西平式
Fig. 81-24	〃	〃	残高 1.9 底径 7.4	ナデ, 指頭押圧 ナデ, 指頭押圧	明赤褐 2.5YR 5/8 褐 7.5YR 4/3	長石, 石英	後期, 西平式
Fig. 81-25	J層 (黒)	〃	残高 1.3 底径 7.6	ナデ, 指頭押圧 ナデ	褐 7.5YR 4/3 〃 〃 〃	雲母	後期
Fig. 81-26	J層	〃	残高 0.9 底径 5.0	木葉圧痕 ナデ	にぶい赤褐 5YR 4/3 〃 〃 4/4	石英	後期, 西平式?
Fig. 81-27	〃	底部片 (浅鉢)	残高 2.6 底径 4.4	ナデ ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4 〃 〃 6/3	雲母	後期, 西平式?
Fig. 81-28	〃	底部片	残高 5.9 底径 6.6	ナデ ナデ	明赤褐 5YR 5/6 明褐 7.5YR 5/6	長石	後期, 西平式
Fig. 81-29	〃	底部片 (鉢)	残高 2.7 底径 3.8?	ミガキ, ナデ ナデ, 指頭押圧	赤褐 5YR 4/6 〃 2.5YR 4/8	長石	後期, 西平式
Fig. 81-30	〃	〃	残高 2.8 底径 4.0?	不明 (剥落) ナデ, 指頭押圧	橙 7.5YR 6/6 〃 〃 〃	長石	後期, 西平式

Tab. 24 第Ⅱ区縄文石器観察表1

挿図番号	出土地点・層位	器種・器形	法量 (cm)	形態・調整等	石材	備考
Fig. 82-1	表採	石鏃	全長 2.5 全幅 2.1 全厚 0.4 重量 1.4g	凹基	サヌカイト	
Fig. 82-2	J層	〃	全長 1.8 全幅 1.7 全厚 0.4 重量 1.0g	凹基 正三角形状	サヌカイト	完存 表面の風化顕著
Fig. 82-3	VI層	〃	全長 1.8 全幅 1.6 全厚 0.5 重量 1.2g	凹基	チャート	完存
Fig. 82-4	〃	〃	全長 1.3 全幅 1.4 全厚 0.3 重量 0.4g	凹基 正三角形状	姫島黒曜石	
Fig. 82-5	〃	〃	全長 2.9 全幅 2.0 全厚 0.6 重量 2.7g	凹基	石英	ほぼ完存
Fig. 82-6	J層	〃	全長 2.6 全幅 1.7 全厚 0.6 重量 2.4g	凹基, 凹み深い	頁岩	ほぼ完存
Fig. 82-7	J層 (黒)	〃	全長 3.4 全幅 2.0 全厚 0.4 重量 2.3g	凹基	チャート	完存
Fig. 82-8	V層	尖頭器	全長 3.4 全幅 3.1 全厚 0.8 重量 5.4g	扁平	頁岩	下半部欠失
Fig. 82-9	J層	石銛	全長 4.5 全幅 2.9 全厚 0.7 重量 8.8g	扁平, 木葉形	姫島黒曜石	ほぼ完存
Fig. 82-10	〃	剝片	全長 3.4 全幅 2.4 全厚 0.8 重量 5.8g	縦長剝片素材 楔形石器?	頁岩	ほぼ完存
Fig. 82-11	VI層	スクレーパー	全長 4.5 全幅 5.3 全厚 1.4 重量 23.1g	撥形, 片刃	姫島黒曜石	完存?
Fig. 82-12	〃	〃	全長 5.9 全幅 6.7 全厚 0.9 重量 40.0g	十字形石器の再利用?	砂岩	
Fig. 82-13	〃	スクレーパー (剝片)	全長 4.5 全幅 6.2 全厚 0.8 重量 24.0g	礫皮面を残す 側縁部に使用痕	頁岩	完存
Fig. 82-14	J層 (黒)	スクレーパー	全長 3.6 全幅 6.0 全厚 0.7 重量 15.8g	両面調整 横長剝片素材	頁岩	
Fig. 82-15	表採	石錘	全長 6.8 全幅 5.6 全厚 1.3 重量 58.0g	紐掛け部のみ調整	頁岩	完存
Fig. 82-16	J層	石核	全長 7.1 全幅 7.3 全厚 2.4 重量 175.0g	横長剝片石核 左・上方より打剝	頁岩	
Fig. 82-17	VI層	打製石斧	全長 14.0 全幅 5.5 全厚 1.6 重量 183.1g	扁平, 短冊形 刃部に使用痕 両側縁調整	頁岩	完存
Fig. 82-18	J層	石棒	全長 8.9 全幅 2.4 全厚 2.1 重量 80.0g	表面の研磨痕顕著 断面形やや楕円	泥岩	両端部は欠失

2 古墳時代

1) 土師器集中出土地点SX1 (Fig. 7・Fig. 83)

第Ⅱ区の北東部，Ⅶ層上面において確認できた。出土地点の規模は，東西約0.5m，南北約1mで，10個体程度の土師器と叩石から構成される。土師器の器種内容は，壺・甕・坏等である。

なお，このSX1から南西側にかけての約4m四方の範囲内には，同時期とみられる土師器の壺・甕・高坏・器台・坏など30個体分以上が配置（投棄）されていた。SX1ほどの集中度ではないが，これらについてもSX1周辺部出土土器として一括して扱った。(Fig. 85) (曾我)

2) 包含層出土の遺物

Ⅳ～Ⅶ層中より弥生土器、古式土師器、須恵器が出土しているが、これらの遺物は混在した状況を示している。以下弥生土器と古式土師器、須恵器について述べる。出土量の多い古式土師器は第Ⅰ区で行った分類をもとに述べる。

①弥生土器 (Fig. 89)

壺、甕、鉢が見られる。1・2は中期の壺で、2の口縁外面には粘土帯を貼付している。4は後期の広口壺である。3・5は後期の甕、6は鉢である。7～13は壺・甕の底部である。

②古式土師器

壺、甕、鉢、高坏、甗、手捏ね土器が出土している。

壺：B類 (Fig. 87-4・8)、C-2類 (Fig. 87-2・3)、E類 (Fig. 87-1・6)、この他頸部下端に刻み目を施した扁平な突帯をもつもの(Fig. 87-5) や同様の突帯を胴部に巡らした大型壺の胴部(Fig. 89-14)が見られる。

甕：A類 (Fig. 87-23～25)、B類 (Fig. 87-18・20・26・28)、C類： (Fig. 87-9・11～14・16・

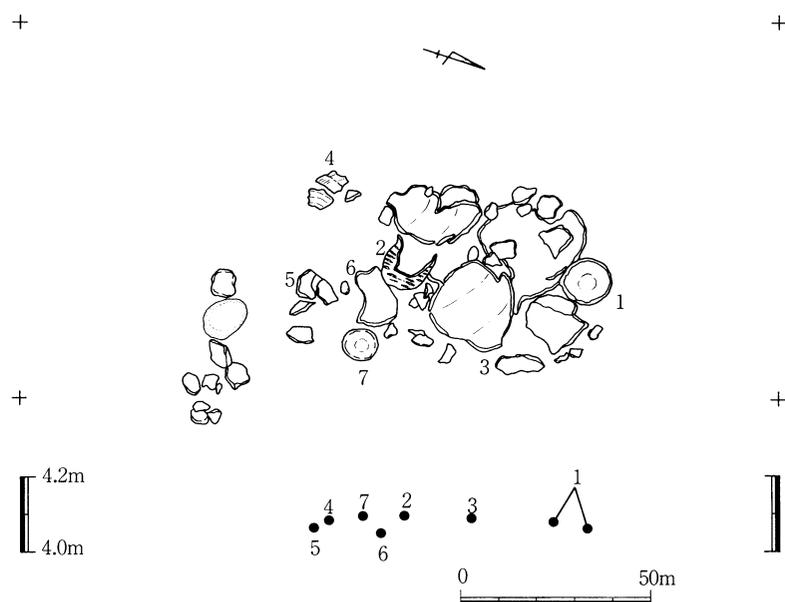


Fig. 83 第Ⅱ区土師器集中出土地点SX1

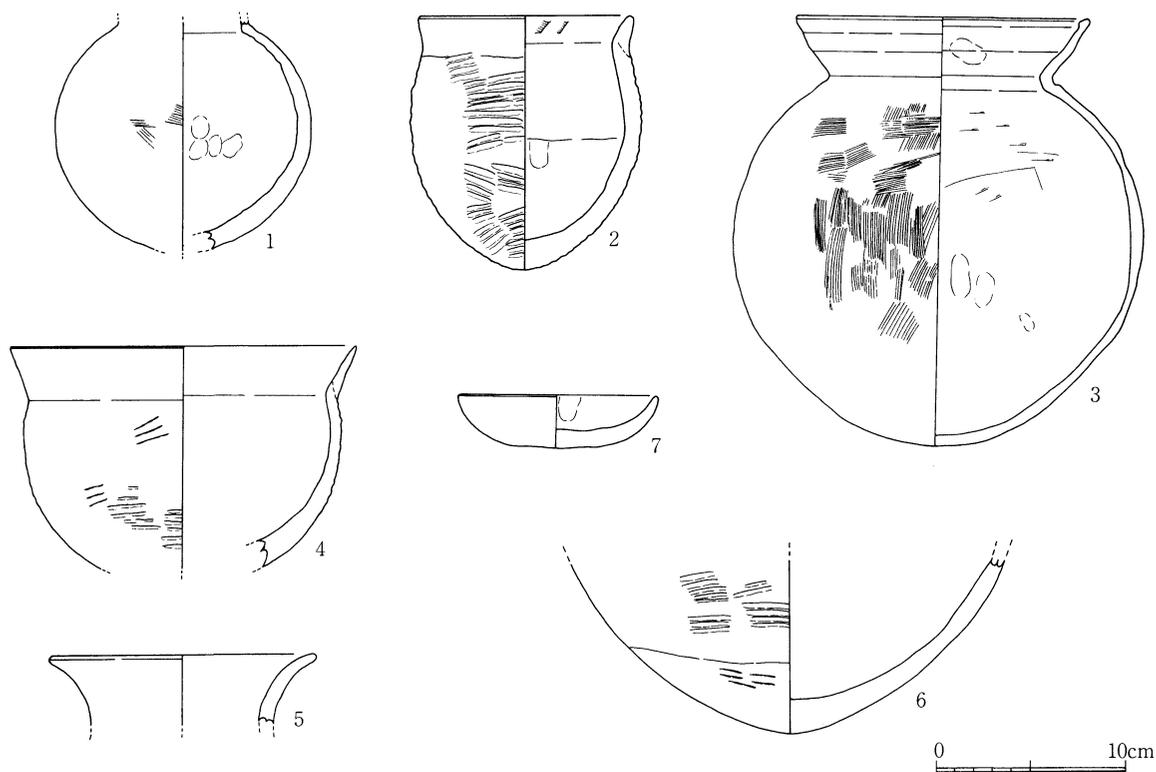


Fig. 84 第Ⅱ区SX1 出土土器実測図

17・21・27)、D類 (Fig. 87-7・15・19)、E類 (Fig. 87-10・22) がある。C類は総じて口縁部が外反し、D類の中には7のように口縁部が長く伸びるものもある。

鉢：A類 (Fig. 86-7・9・10~12・14・15)、B類 (Fig. 86-3~5・8)、C類 (Fig. 86-16)、D類 (Fig. 86-6) がある。

高坏：A類 (Fig. 86-20~24、26・34・35・37)、B類 (Fig. 86-36) がある。A類は、脚裾部が強く「ハ」字状に開くタイプとスカート状に開くタイプがあるが、前者が多い。

甗：Fig. 86-13・18がある。前者は鉢状の器形に焼成前穿孔を施し、後者は深鉢状の器形に焼成前穿孔を施してゐる。

手捏ね土器：A類が2点 (Fig. 86-1・2) が出土している。

須恵器：無頸壺 (Fig. 88-15) と提瓶或いは壺口縁部 (Fig. 88-16) 及び大型甗 (Fig. 88-17) が出土している。

3) 集中出土地点の遺物 (Fig. 84)

壺、甗、鉢が出土している。

壺：B類 (1) がある。

甗：B類 (2)、F類 (3)、E類 (5) と底部 (6) がある。

鉢：B類 (7)、C類 (4) がある。

4) 集中出土地点周辺の遺物 (Fig. 85)

甗、鉢、高坏、器台、手捏ね土器が出土している。

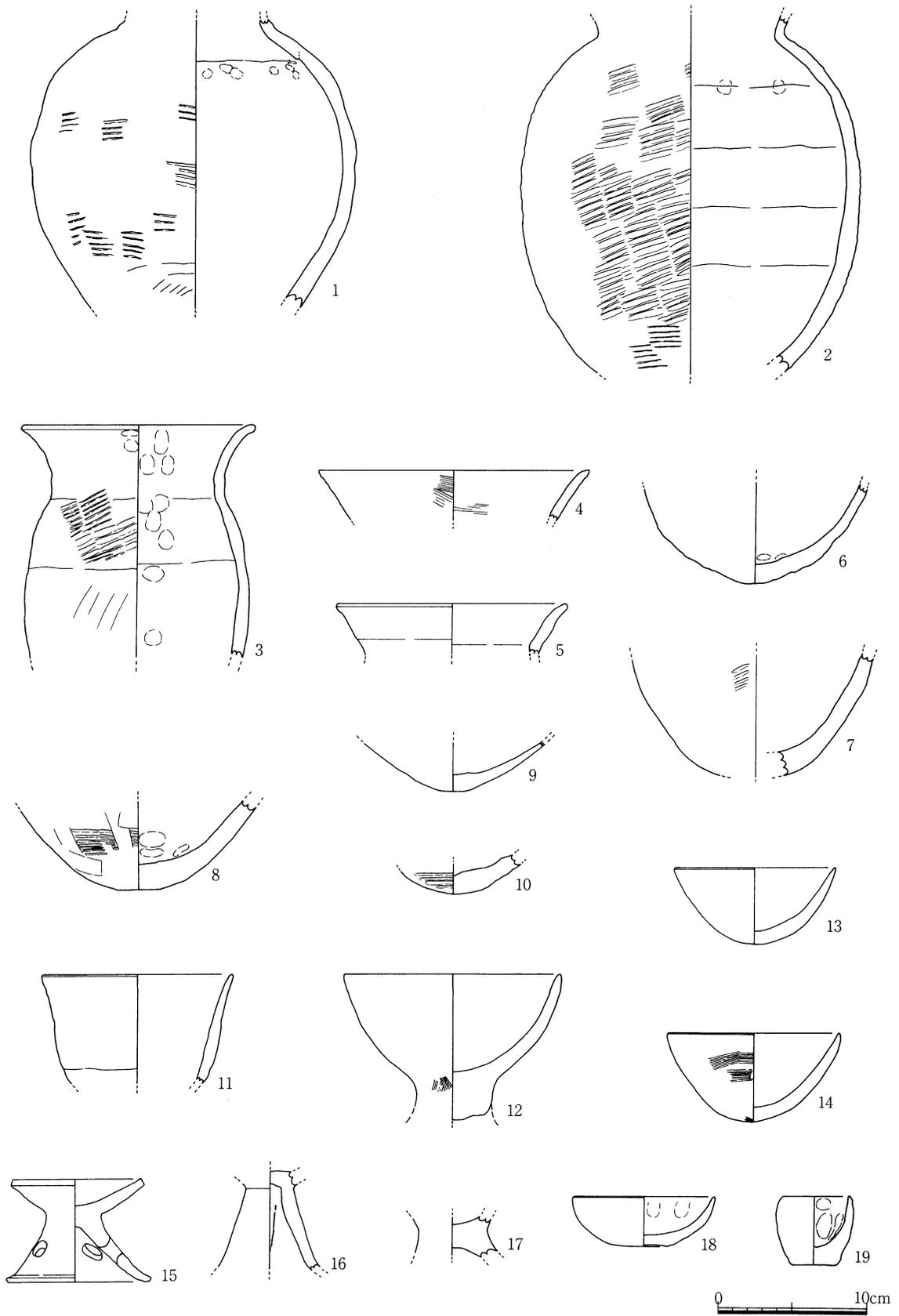


Fig. 85 第Ⅱ区SX1 周辺部出土土器実測図

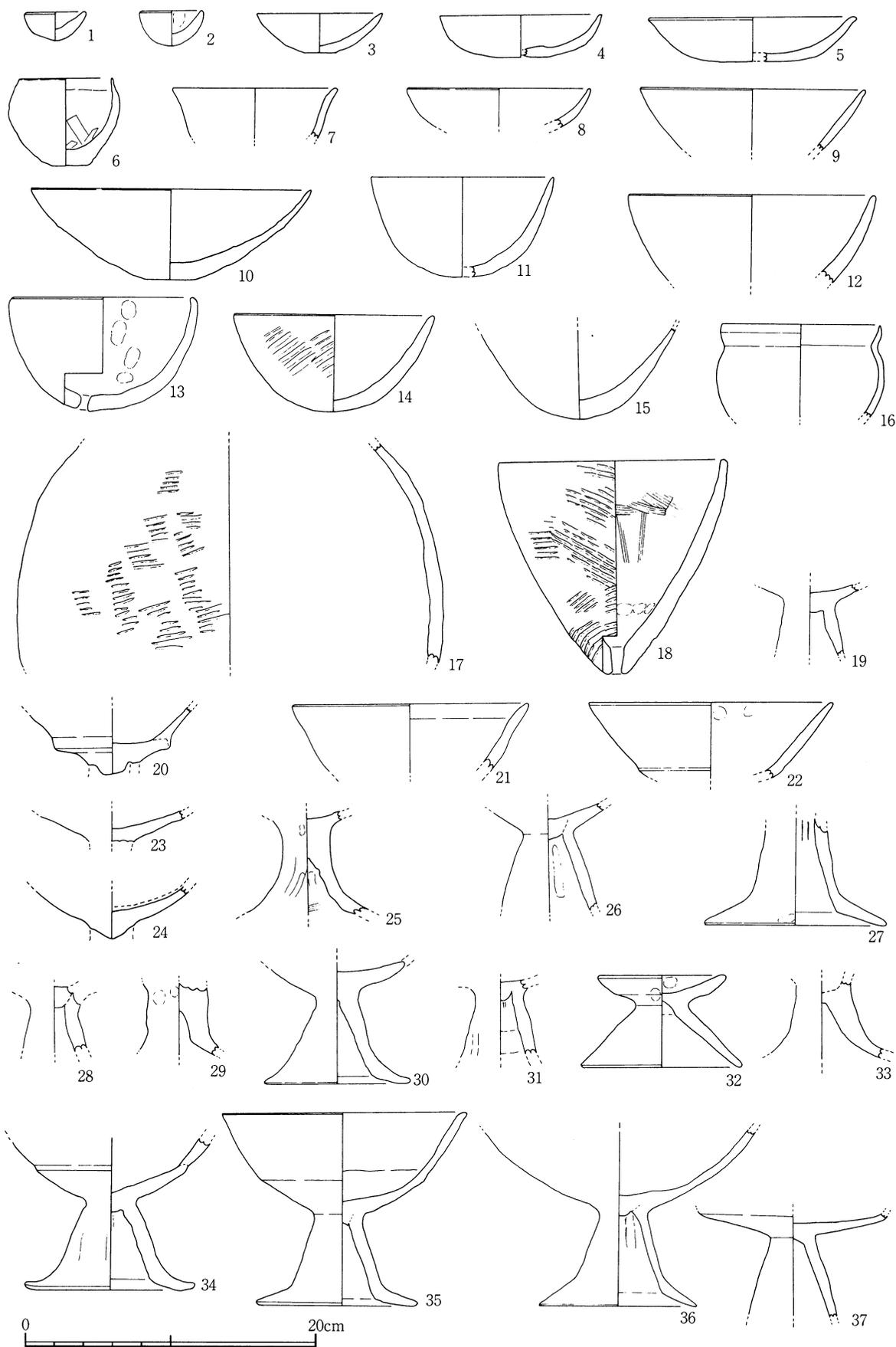


Fig. 86 第Ⅱ区包含層出土遺物 1

古式土師器：鉢A類 (7·9·10~12·14·15)·同B類 (3~5·8)·同C類 (16)·同D類 (6)、高坏A類 (20~24、26·34·35·37)·同B類 (36)、甑 (13·18)、手捏ね土器A類 (1·2)

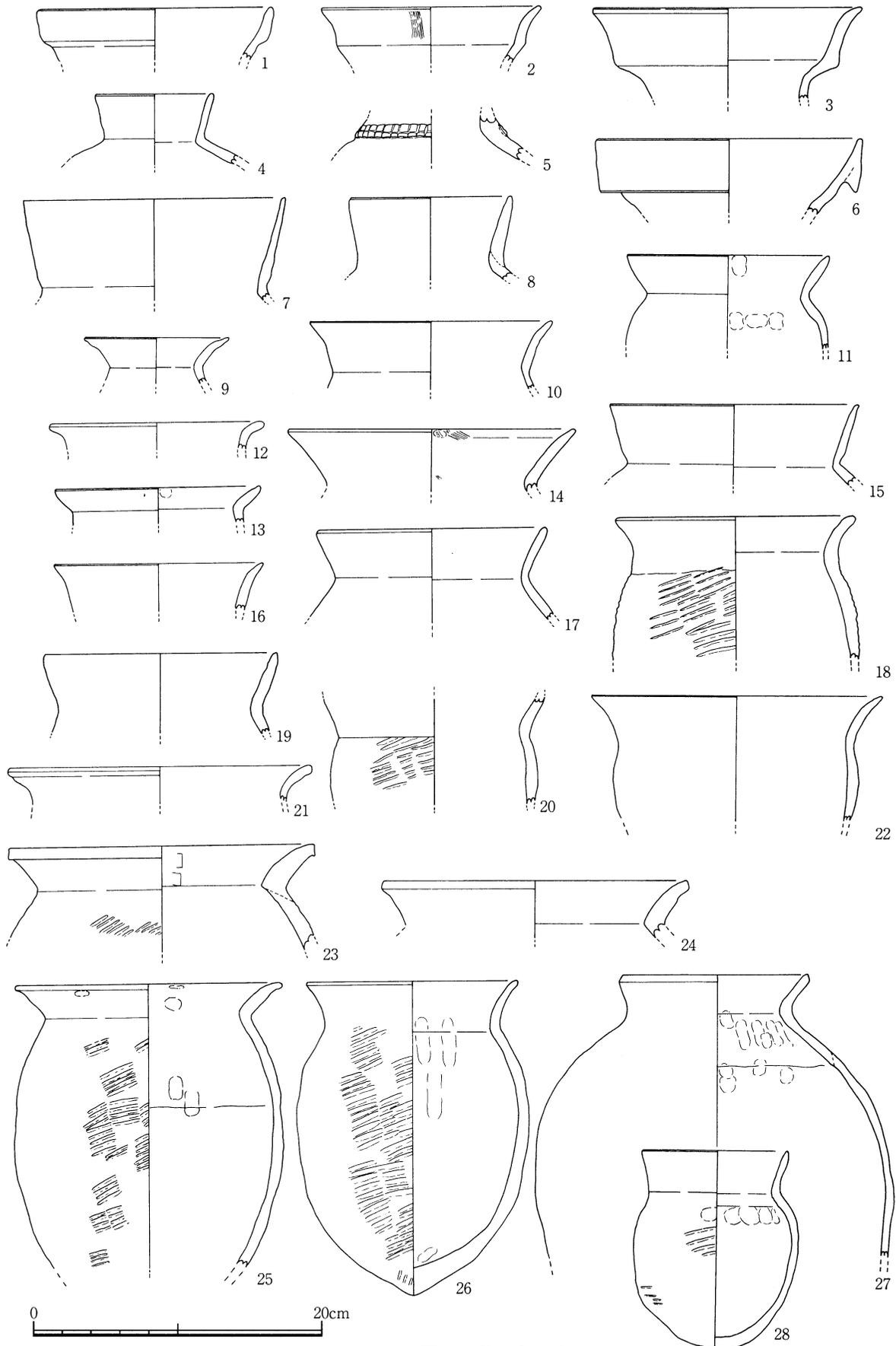


Fig. 87 第Ⅱ区包含層出土遺物 2

古式土師器：甕B類 (4・8)・同C-2類 (2・3)・同E類 (1・6・5)、甕A類 (23~25)・B類 (18・20・26・28)・C類 (9・11~14・16・17・21・27)・同D類 (7・19・15)・E類 (10・22)

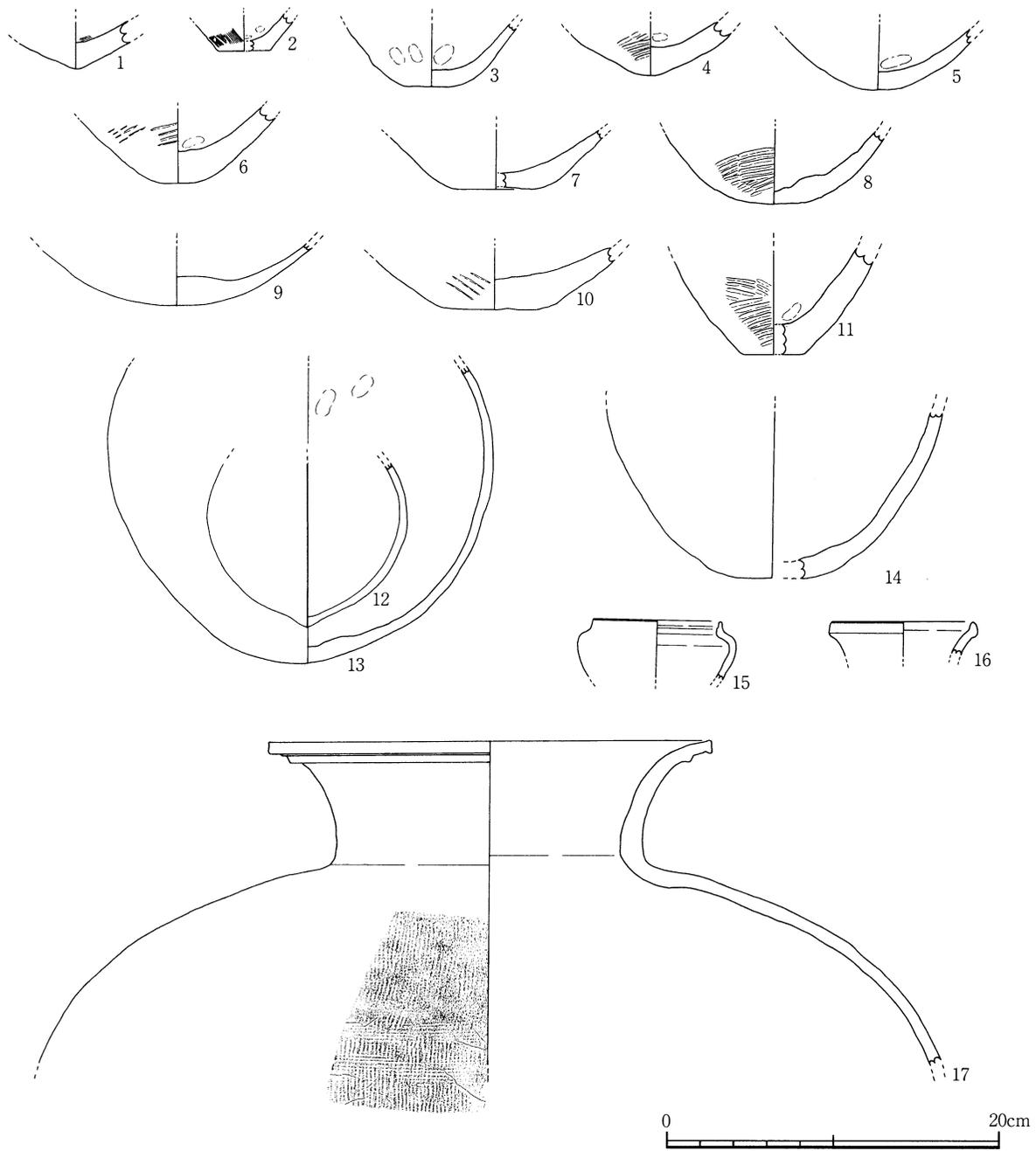


Fig. 88 第Ⅱ区包含層出土遺物3

古式土師器・弥生土器底部（1～14）、須恵器（15～17）

甕：A類（2・4）、B類（5）、E類（3）がある。この他胴・底部（1・6～10）が出土している。

鉢：A類（11・13・14）、B類（18）、E類（12）がある。

高坏：脚部（16・17）が2点出土している。

器台：緩やかに外反する脚部に3個の円孔を穿っている。（15）

手捏ね土器：B類が1点出土している。（19）（出原）

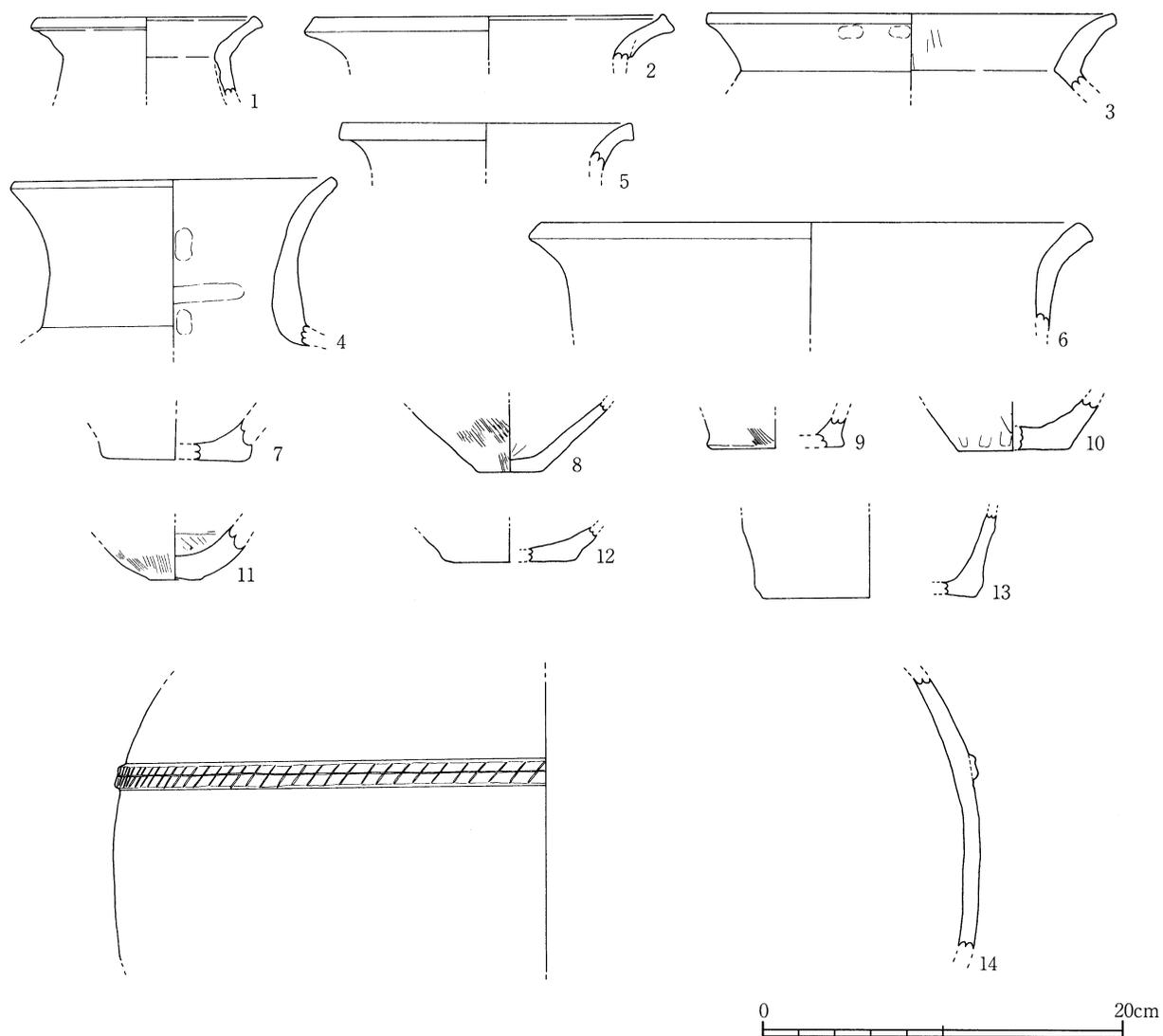


Fig. 89 第Ⅱ区包含層出土遺物 4

弥生土器：壺（1・2・4）・甕（3・5）・底部（7～13）、古式土師器壺（14）

Tab. 25 第Ⅱ区古墳時代観察表1

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 84-1	Ⅵ層	壺			13.4		チャート、赤色風化礫を含む。橙色。外面不定方向のハケ調整。	外面煤ける。
〃 2	〃	甕	11.0	13.3	12.0		頁岩、赤色風化礫の小礫、粗粒砂を含む。桃茶色。丸底。胴部外面中位以上水平方向の叩き、下半は斜め方向の叩き。	外面煤ける
〃 3	〃	〃	15.2	22.5	21.5		石英、調査黄、角閃石の砂粒を含む。浅黄色。口縁部内面肥厚。口頸部横ナデ調整、胴部内面ハケ調整、内面上半横方向のヘラ削り、下半指頭圧痕。内底に炭化した腐食した炭化物が付着。	外面煤ける。
〃 4	〃	〃	18.2		16.7		チャート、頁岩、角閃石の砂粒を含む。橙色。胴部外面叩き。口縁部外面ナデ調整。	
〃 5	〃	壺	13.6				チャートの粗粒砂を多く含む。桃茶色。ナデ調整。	
〃 6	〃	甕					頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き後ナデ調整。丸底。	
〃 7	〃	鉢	10.4	2.8			頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。	
Fig. 85-1	Ⅶ層	壺			21.6			
〃 2	〃	甕			22.6		頁岩、チャートの小礫、粗粒砂をおおく含む。橙色。外面底部付近水平方向の叩き、それより上は、右上がりの叩き。内面に粘土の接合部を明瞭に認める。	
〃 3	〃	〃	15.4		15.4		風化礫の小礫を多く含む。橙色。内外面に粘土の接合痕を顕著に認める。胴部中位以下擦痕、上位は右上がりの叩き。	
〃 4	〃	〃	18.0					
〃 5	Ⅵ層	〃	15.2				石英、角閃石、赤色風化礫を含む。橙色。内外面強いナデ調整。	
〃 6	〃	〃					頁岩その他の風化礫の粗粒砂を含む。橙色。丸底。	
〃 7	〃	〃					頁岩その他の風化礫の粗粒砂を含む。橙色。叩き成形。丸底。	
〃 8	〃	〃					チャート、砂岩の小礫、粗粒砂を多く含む。褐色。丸底。外面叩き、内面指頭圧痕顕著。内面煤ける。	
〃 9	Ⅵ層	〃				1.0	風化頁岩粗粒砂をおおく含む。橙色。	

Tab. 26 第Ⅱ区古墳時代観察表 2

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
〳 10	Ⅵ層	甕					頁岩の細粗粒砂を多く含む。橙色。丸底。外面叩き、内面指頭圧痕顕著。	
〳 11	〳	鉢	12.8				頁岩、チャートの小礫をおおく含む。灰茶色。	
〳 12	〳	〳	14.4				チャート、長石、砂岩、その他の細粗粒砂を多く含む。橙色。	
〳 13	Ⅵ層	〳	10.7				風化頁岩、チャートの粗粒砂を含む。橙色。	
〳 14	〳	〳	11.4	5.9			角閃石、長石、砂岩の粗細粒砂を多く含む。黄橙色。外面ハケ調整。内面丹が付着。	外面煤ける。
〳 15	〳	器台	8.6	6.9		9.4	頁岩、赤色風化礫を多く含む。桃色。脚部の円孔3個、径1.2cm。全面ナデ調整。	
〳 16	〳	高坏					風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。	
〳 17	〳	〳					頁岩の粗粒砂を多く含む。橙色。	
〳 18	〳	鉢	9.4	3.4		4.0	頁岩の小礫を多く含む。	
〳 19	Ⅵ層	手捏土器	4.4	4.7		2.9	頁岩、チャートの細粗粒砂を多く含む。	
Fig. 86-1	Ⅵ層	〳	4.0	2.0	6.9		頁岩、長石などの砂粒を多く含む。手づくね。橙色。	
〳 2	〳	〳	4.2	2.3			チャート、頁岩の粗粒を多く含む。黄橙色。	
〳 3	Ⅶ層	古式土師器 鉢	8.6	2.7			チャート、頁岩その他の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。	二次的な火を受けている。
〳 4	〳	〳	11.0	4.0			チャートその他の小礫、粗粒砂を含む。橙色。	
〳 5	〳	〳	14.0	3.0			チャート、長石、頁岩の小礫、風化礫・粗粒砂を含む。内外面ナデ調整。	
〳 6	Ⅵ層	〳	6.4	6.0	7.2	2.4	頁岩、チャート、その他の風化礫を含む。黒色。内外面ナデ調整。	
〳 7	〳	〳	10.1				精選された胎土。灰色。	
〳 8	〳	〳	12.4				頁岩、チャートの砂粒を含む。橙色。	
〳 9	〳	〳	15.4				長石、頁岩などの粗粒砂を含む。橙色。	
〳 10	〳	鉢	19.0	3.0		3.4	砂岩、チャートの小礫を多く含む。黄茶色。叩き成形後。縦ハケ調整	
〳 11	Ⅶ層	〳	12.4	6.8			チャート、頁岩などの細粗粒砂を含む。橙色。	

Tab. 27 第Ⅱ区古墳時代観察表 3

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
◇ 12	Ⅵ層	鉢	16.8				チャートの粗粒砂を含む。内外面ナデ調整。橙色。	
◇ 13	Ⅶ層	◇	12.2	7.8			チャート、風化礫の細粗粒砂を含む。灰黄褐色。外面ナデ調整。底部焼成前穿孔、孔径7。	外面煤ける。
◇ 14	◇	◇	13.5	6.6			チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を含む。橙色。丸底。叩き成形。	
◇ 15	◇	甕					1~5の砂粒を多く含む。橙色。内外面器表の荒れが激しい。	
◇ 16	◇	鉢	12.6		11.4		精選された胎土。茶色。内外面ナデ調整。	胴部の一部に黒斑あり。
◇ 17	◇	壺					赤色風化礫、頁岩の粗粒砂を含む。灰茶色。叩き成形。	
◇ 18	◇	甗	15.6	14.6		1.0	角閃石、頁岩の細素粒砂を含む。橙色。叩き成形、内ハケ調整。焼成前穿孔、孔径8。	底部外面付近大きな黒斑あり。
◇ 19	Ⅵ層	高坏					頁岩の小礫を多く含む。黄橙色。	
◇ 20	Ⅶ層	◇					頁岩の風化礫を多く含む。脚部接合部から剝離。	
◇ 21	Ⅵ層	◇	16.0				砂岩、頁岩の粗粒砂、小礫を含む。橙色。	
◇ 22	Ⅶ層	◇	16.4				風化した頁岩、チャートの小礫を含む。橙色。	
◇ 23	◇	◇					風化した頁岩、チャートの小礫を含む。橙色。	
◇ 24	Ⅵ層	◇					チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。脚部との接合部で剝離。	
◇ 25	攪乱層	◇					砂粒をほとんど含まない。橙色。	
◇ 26	Ⅵ層	◇					赤色の風化礫、粗粒砂を多く含む。橙色。内外面ナデ調整。	
◇ 27	◇	◇				12.4	長石、赤色の風化礫を多く含む。橙色。内外面調整不明。	
◇ 28	◇	◇					風化砂岩、赤色風化土、チャートの粗粒砂を含む。	
◇ 29	Ⅶ層	◇					チャートの粗粒砂、頁岩粗粒砂を含む。橙色。	
◇ 30	Ⅵ層	◇				10.0	頁岩、砂岩、石英の細粗粒砂を多く含む。坏部が底部との接合部から剝離。脚部上端内面に径4mmの小孔あり。	
◇ 31	◇	◇					頁岩、チャートの粗粒砂、小礫を含む。橙色。	

Tab. 28 第Ⅱ区古墳時代観察表 4

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 86-32	Ⅵ層	器台	8.6	6.4		10.6	風化小礫を多く含む。内外面ナデ調整。橙色。	外面煤ける。
〃 33	〃	高坏					チャート、砂岩などの小礫を含む灰黄褐色。	
〃 34	Ⅱ層	〃				13.6	チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。淡黄色。柱状部はわずかにエンタシス状を呈す。坏部の接合部を明瞭にとどめる。	
〃 35	Ⅵ層	〃	16.4	13.3		11.0	頁岩の小礫を多く含む。赤茶色。内外面器表の荒れが激しい。	
〃 36	〃	〃				10.8	頁岩、砂岩の小礫を多く含む。器表の剝離が激しい。	
〃 36	〃	〃					角閃石、風化礫の粗粒砂を多く含む。灰黄褐色。内外面横ナデ調整。	
〃 37	Ⅵ層	〃					チャート、風化砂岩などの小礫を多く含む。器表の荒れが激しい。	
Fig. 87-1	〃	壺	16.0				結晶片岩の小礫を多く含む。橙色。口縁部を肥厚させている。	
〃 2	Ⅵ層	〃	14.8				頁岩その他の小礫粗粒砂を多く含む。黄橙色。外面ハケ調整。	
〃 3	Ⅵ層	〃	18.4				石英、長石粒を多く含む。灰橙色。	
〃 4	Ⅵ層	〃	8.0				赤色風化礫、頁岩粗粒を多く含む。器表の荒れが激しい。	
〃 5	Ⅵ層	〃					風化砂岩の小礫、チャートの粗粒砂を含む。橙色。頸部に扁平な粘土帯を貼付。	
〃 6	Ⅵ層	〃	18.0				チャート、砂岩、風化礫などの小礫を多く含む。橙色。口縁部に粘土を貼付し下垂させる。	
〃 7	〃	〃	18.0				頁岩などの細粗粒砂を多く含む。橙色。	
〃 8	〃	〃	11.0				赤褐色の風化礫を多く含む。黄橙色。器表の荒れが激しい。	
〃 9	Ⅵ層	甕	9.9				頁岩の砂粒を多く含む。	
〃 10	Ⅵ層	〃	16.6				頁岩の細粗粒砂、小礫を含む。橙色。	
〃 11	Ⅵ層	〃	13.8				小礫、粗粒砂を多く含むが、石質不明。	
〃 12	〃	〃	13.8				頁岩の小礫を含む。橙色。ナデ調整。	
〃 13	Ⅱ層	〃	14.0				頁岩、赤色風化礫の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。	

Tab. 29 第Ⅱ区古墳時代観察表 5

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 87-14	Ⅶ層	甕	19.6				頁岩その他の細粗粒砂を含む。橙色。	
〃 15	〃	〃	17.0				頁岩の小礫、細粗粒砂を多く含む。橙色。頸部外面強い横ナデ調整。	
〃 16	Ⅵ層	〃	14.4				頁岩の粗粒砂を多く含む。橙色。	
〃 17	Ⅶ層	〃	15.5				チャート、長石、その他の粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ調整。	
〃 18	〃	〃	16.0				チャートの細粗粒砂を多く含む。赤橙色。胴部外面右上がりの叩き、口縁部外面ナデ調整。叩きだし口縁部に有らず。	
〃 19	〃	〃	16.0				頁岩その他の細粗粒砂を含む。橙色。	
〃 20	〃	〃					頁岩その他の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。胴部外面右上がりの叩き。	
〃 21	〃	〃	20.4				角閃石、石英の砂粒を含む。黄橙色。口縁部外面横ナデ調整。	
〃 22	〃	〃	10.0		17.0		チャート、頁岩の小礫粗粒砂を多く含む。橙色。内外面剝離が激しい。	外面煤ける。
〃 23	〃	〃	21.0				角閃石、頁岩、その他の風化礫の細粗粒砂礫小礫を多く含む。橙色。胴部外面右上がりの叩き、内面ナデ調整。口縁部内面横ハケ調整後ナデ調整。	
〃 24	〃	〃	20.8				赤色風化礫を多く含む。橙色。外面縦、内面横ハケ調整。	
〃 25	〃	〃	18.0		16.6		風化小礫を多く含む。橙色。口縁部内外面ナデ調整。胴部外面右上がりの叩き。	外面煤ける。
〃 26	〃	〃	14.4		16.0		チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内外面ナデ調整。胴部外面右上がりの叩き。尖底。	
〃 27	〃	〃	12.7			24.2	頁岩の風化礫、粗粒砂を多く含む。	
〃 28	〃	〃	9.9		11.2		角閃石、長石粗粒砂を含む。橙色。胴部外面叩き後ナデ調整。	
Fig. 88-1	〃	〃					砂岩、チャート、角閃石の粗粒砂を多く含む。黄橙色。尖底。	
〃 2	〃	〃				3.2	チャート、角閃石、その他の細粗粒砂を含む。淡茶色。	
〃 3	〃	〃					チャート、その他の小礫を多く含む。内外面ナデ調整。	
〃 5	〃	〃					風化礫を多く含む。灰桃色。尖底。	

Tab. 30 第Ⅱ区古墳時代観察表 6

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 88-5	Ⅶ層	甕					石英、長石、風化礫を多く含む。淡茶色。丸底。	
〃 6	〃	〃					チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。灰桃色。叩き成形。	
〃 7	〃	〃					頁岩、チャートの細粗粒砂を多く含む。橙色。	
〃 8	〃	〃					頁岩、チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。灰色。丸底。叩き成形。	外面煤ける。
〃 9	〃	〃					頁岩の小礫を多く含む。橙色。丸底。	
〃 10	〃	〃				6.0	チャート、頁岩の砂粒を含む。黄橙色。叩き成形。	
〃 11	〃	〃				3.4	風化小礫を含む。橙色。叩き成形。	
〃 12	Ⅳ層	壺					頁岩の粗粒砂、小礫を多く含む。橙色。尖底。	
〃 13	Ⅵ層	甕				22.0	頁岩の風化礫を多く含む。黄橙色。内外面器表のあれが激しい。丸底。	
〃 14	Ⅶ層	〃					頁岩の風化礫を多く含む。黄橙色。内外面器表のあれが激しい。丸底。	
〃 15	Ⅵ層	須恵器 壺	7.6				精選された胎土。灰色。全面横ナデ調整。	
〃 16	表採	〃	8.2				精選された胎土。灰色。全面横ナデ調整。	
〃 17	Ⅵ層	甕	26.0				精選された胎土。黒灰色。断面セピア色。口頸部横ナデ調整。口縁部外面に断面三角形の鋭い稜を持った突帯が巡る。	
Fig. 89-1	Ⅵ層	弥生土器壺	12.0				チャートの小礫を多く含む。口縁部内外面ナデ調整。	
〃 2	〃	〃	19.4				チャートの砂粒、赤色風化礫を含む。黄橙色。口縁部外面粘土帯貼付。	
〃 3	〃	甕	22.2				赤色風化礫を多く含む。内外面ナデ調整。	
〃 4	Ⅶ層	壺	17.5				長石、石英、雲母の細粗粒砂を多く含む。灰黄褐色。	
〃 5	Ⅵ層	〃	16.0				結晶片岩、チャートの粗粒砂をおおく含む。黄橙色。	
〃 6	攪乱層	鉢	29.4				頁岩、チャート、赤色風化礫の粗粒砂をおおく含む。内外面横ナデ調整。	
〃 7	Ⅵ層	甕				8.0	チャート、頁岩の小礫をおおく含む。黄橙色。	

Tab. 31 第Ⅱ区古墳時代観察表 7

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)		胴径	底径	特 徴	備 考
			口径	器高				
Fig. 89-8	表採	壺				3.4	チャート、頁岩の小礫、粗粒砂をおおく含む。黄橙色。	
〃 9	Ⅵ層	甕				7.4	チャート、頁岩、角閃石の粗粒砂を含む。	
〃 10	Ⅶ層	壺				6.0	チャート、石英、角閃石の粗粒砂を含む。	
〃 11	Ⅴ層	〃				3.0	角閃石、石英、長石の細粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ調整。	
〃 12	表採	〃				7.2	チャート、頁岩の粗粒砂をおおく含む。黄橙色。	
〃 13	Ⅵ層	甕				11.6	チャート、赤色砂粒をおおく含む。黄橙色。	
〃 14	Ⅶ層	壺					石英、長石、の細粗粒砂を多く含む。黄茶色。胴部外面に扁平な突帯を貼付する。古式土師器の可能性有り。	

3 古代・中世

1) 第Ⅱ区包含層出土の古代～中世の遺物

Ⅱ区では、遺構は確認されずⅠ区からの流れこみと思われ基本的には、Ⅰ区出土の土器と器種、時期ともに同じといえる。出土した土器では最も土師器が多く、ついで須恵器が出土している。注目される土器として、緑釉陶器、灰釉陶器が挙げられる。時期的には、古代、9世紀から10世紀にかけての時期、中世13世紀、また15世紀代と考えられる。

土師器

土師器では、小皿、皿、坏、甕、摺鉢が出土している。

土師器小皿、皿

小皿は、2点出土しており、1点は、やや内弯気味に立ち上がるもの、もう1点は、底部から大きく外反気味に開く体部を持つものである。皿でも同じく内弯気味に立ち上がる体部のものと、外反するものが出土している。両方ともに回転台成形と考えられる。底部の切り離しは回転糸切りと思われるが残存状態が良好でないため不明である。手捏ねのものは出土せず京都系のものは見られない。

土師器坏

土師器坏は、底部の形態によって高台のつかない平底のもの、円盤状高台のもの、輪高台のものに大きく3つに分類した。円盤状高台のものは、内面見込みの落ち込んだもので播磨模倣の坏である。輪高台のものは残存状態の良好な資料が少なく形態が復元できるものはない。残存する底部は比較的大きな径を持つ輪高台が貼り付けられる。Fig. 91-7は碗形態の可能性も考えられる。平底の坏は形態的には、器高は低く底径が大きくやや外反気味に直立する体部をもつもの、器高は低く直線的に斜め上方に伸びる体部をもつもの、やや器高が高く直線的に斜め上方に伸びる体部をもつもの、小坏に分類できるもの、Fig. 90-20は円盤状の粘土の上に粘土紐巻き上げで成形したと考えられ内面見込みが落ち込む。

土師器甕

砂粒の多い荒い胎土を持つ煮炊き用の甕である。口縁部は比較的つよく屈曲する。口縁部下外面には斜めのハケ目、内面は横方向のハケ目が見られる。

土師器釜

口縁部外面には、凹線がめぐり、その下の肩部には、やや上方に向く齔が付く。畿内の影響を受けた釜である。

土師器摺鉢

胎土は荒く焼き締まっている。内面には4条単位の摺り目が入る。外面には粗い布状の調整痕が残る。土師器の摺鉢はこの1点のみである。

須恵器

坏、蓋、壺、甕、コネ鉢が出土している。

須恵器坏

土師器と同じく底部の形態によって、平底と輪高台の2つに分けることができる。円盤状高台ものは出土しないが、Fig. 92-17・18は残存部が少なく形態の復元は困難であるが、体部はわずかに内

穹気味で碗状の可能性があり、その底部は円盤状の可能性が高いと考えられる。

平底のものは器高が低いFig. 92-1~7と底径に比してわずかに器高が高いFig. 92-8・9とに分けることができる。

輪高台のものは、断面方形の高台のものと断面逆台形状のものに分けられる。

須恵器蓋

蓋は、つまみが付くものと付かないものに分けられる。つまみが付くものは外面に轆轤痕が明瞭に残る。形態は、平坦な天井部から直線的に緩やかに下方に伸び端部は下につまみ出すもの、丸みを帯びた天井から緩やかに下方に下るものがある。

須恵器壺

底部に高台の付いたものが大半である。長頸壺は口縁端部をつまみ上げる。

須恵器甕

口縁の一部しか残存していないため全体は不明である。口縁部は内外面とも回転ナデ調整、Fig. 93-11は肩部の一部に叩き目が残る。

須恵器コネ鉢

東播系の片口鉢である。口縁端部が上方のみに拡張されるものと、上下に拡張されるものが出土する。

緑釉陶器

上げ底状を呈する円盤状高台をもつもの、輪高台のもの、蛇の目高台のものに分けられる。全て京都系と考えられ、釉調は淡緑色で薄い。ハケ塗りと考えられる。Fig. 94-1はほぼ完形の皿である。底部は削り出しの上げ底状の円盤状高台でヘラ切りである。須恵質で薄い淡緑色の釉が高台外面まで施されている。Fig. 94-2はやや白色の胎土をもち薄い淡緑色の釉が高台外面まで施される。内面見込みはヘラ磨きが施される。底部はヘラ切り。Fig. 94-4は蛇の目高台が削りだされる。須恵質で薄い淡緑色の釉が底部まで施されている。Fig. 94-5・6は同一個体の可能性が高いと考えられる。須恵質で焼き締まっている。他のものと比べてやや濃く釉が施されている。

灰釉陶器

胎土は白色で焼き締まる。内面に濃緑色の釉が施されるが、外面は釉は施されない。底部は断面方形の輪高台である。黒笹14号窯の灰釉陶器の碗と考えられる。Fig. 94-7・8は同一個体の可能性が高い。

瓦器碗

断面三角形の輪高台が貼り付けられる。

瓦質釜

口縁部はやや内傾しており口縁部下には断面三角形の小さな鐙が付く。Fig. 94-12の鐙はほとんど退化している。口縁部はほぼ直立している。

石鍋

断面三角形の鐙、頂部は尖らない。木戸分類Ⅲ-e1類。

瀬戸焼

Fig. 94-14・16は外面には灰釉がかかる大皿である。Fig. 94-15は釉が施されず焼き締まって赤っぽい発色を呈する。器形は折縁皿と考えられ瀬戸と思われるが検討の余地がある。Fig. 94-10は皿底部で糸切り痕が残る。硬く焼き締まり白色の胎土で内面に釉が施されている。

備前焼

底部だけの出土であり時期は不明である。

白磁

Ⅱ類、Ⅳ類の碗、Ⅸ類の口禿の皿と考えられる底部が出土する。

青磁

鎬連弁が施された青磁がほとんどで、わずかに無文のものが見られる。(坂本)

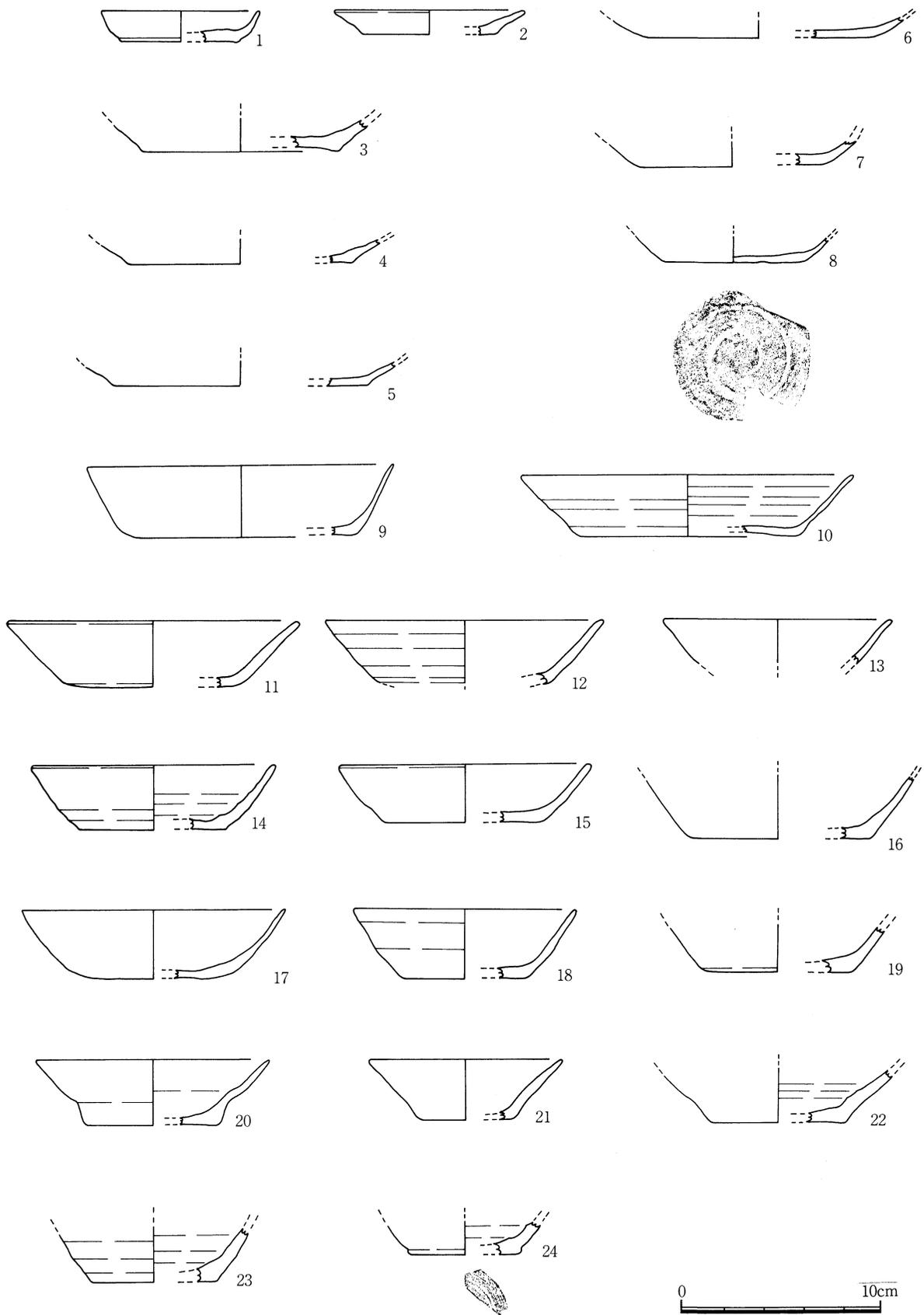


Fig. 90 第Ⅱ区古代·中世包含層出土遺物 1

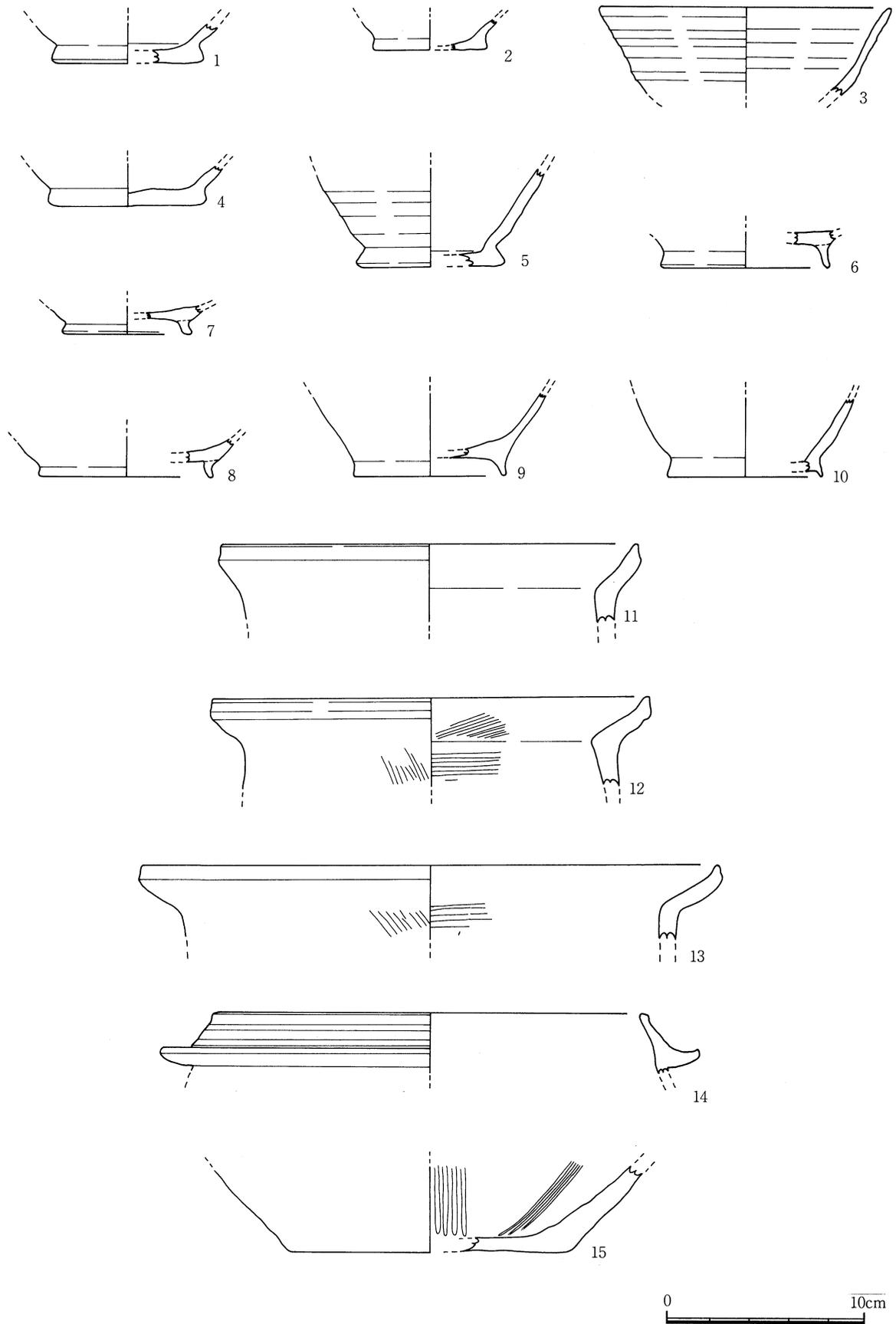


Fig. 91 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 2

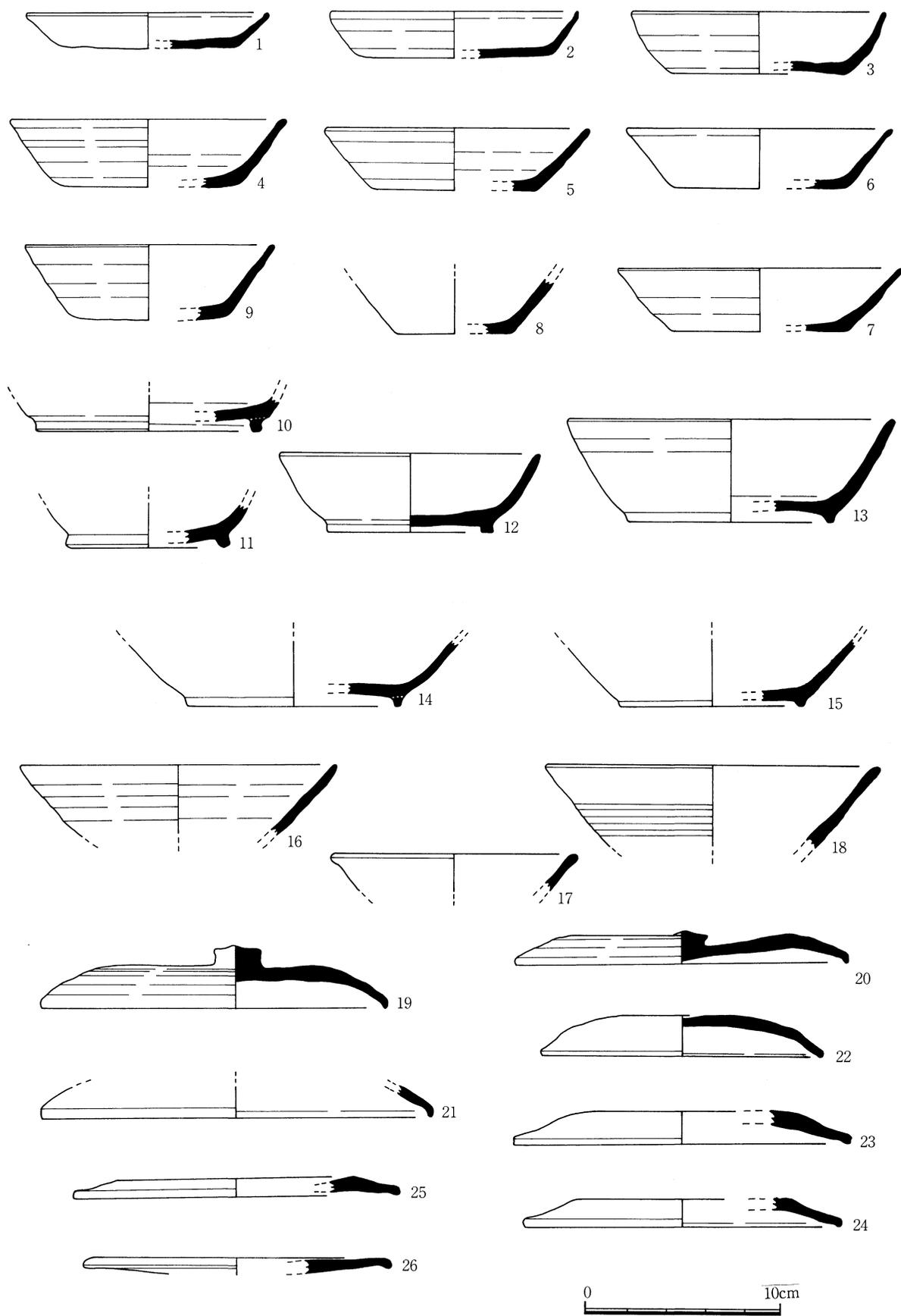


Fig. 92 第Ⅱ区古代·中世包含層出土遺物 3

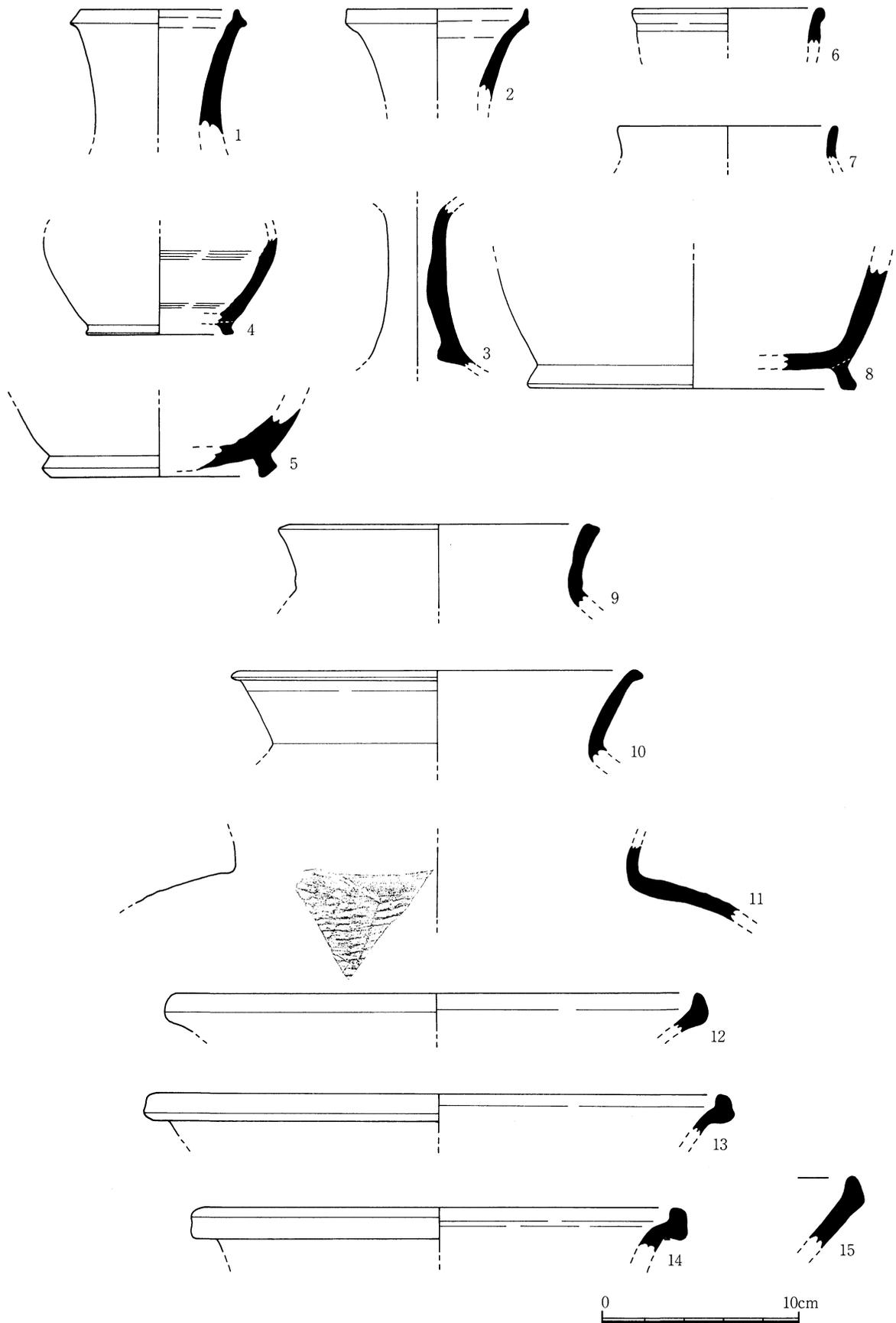


Fig. 93 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物 4

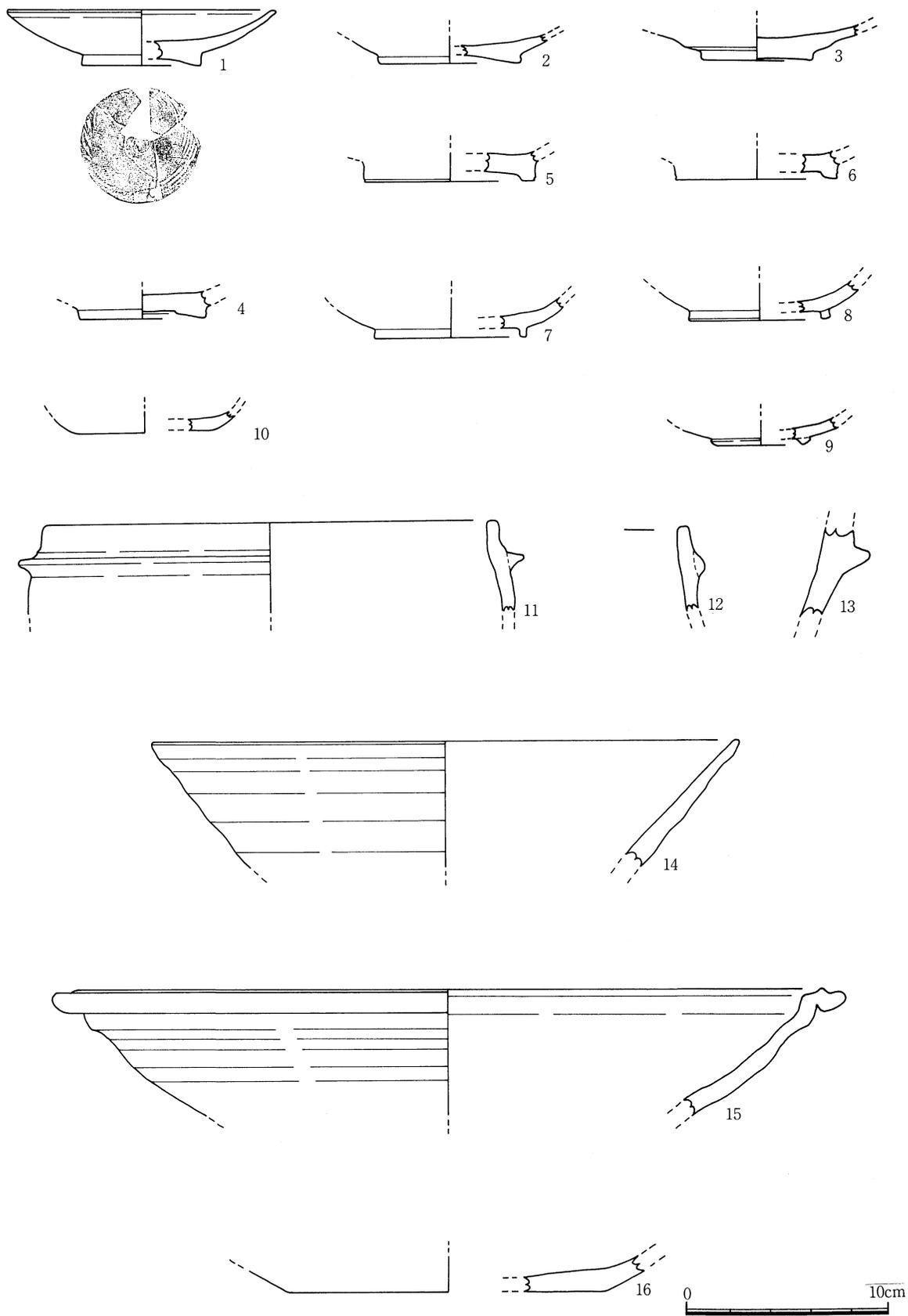


Fig. 94 第Ⅱ区古代·中世包含層出土遺物5

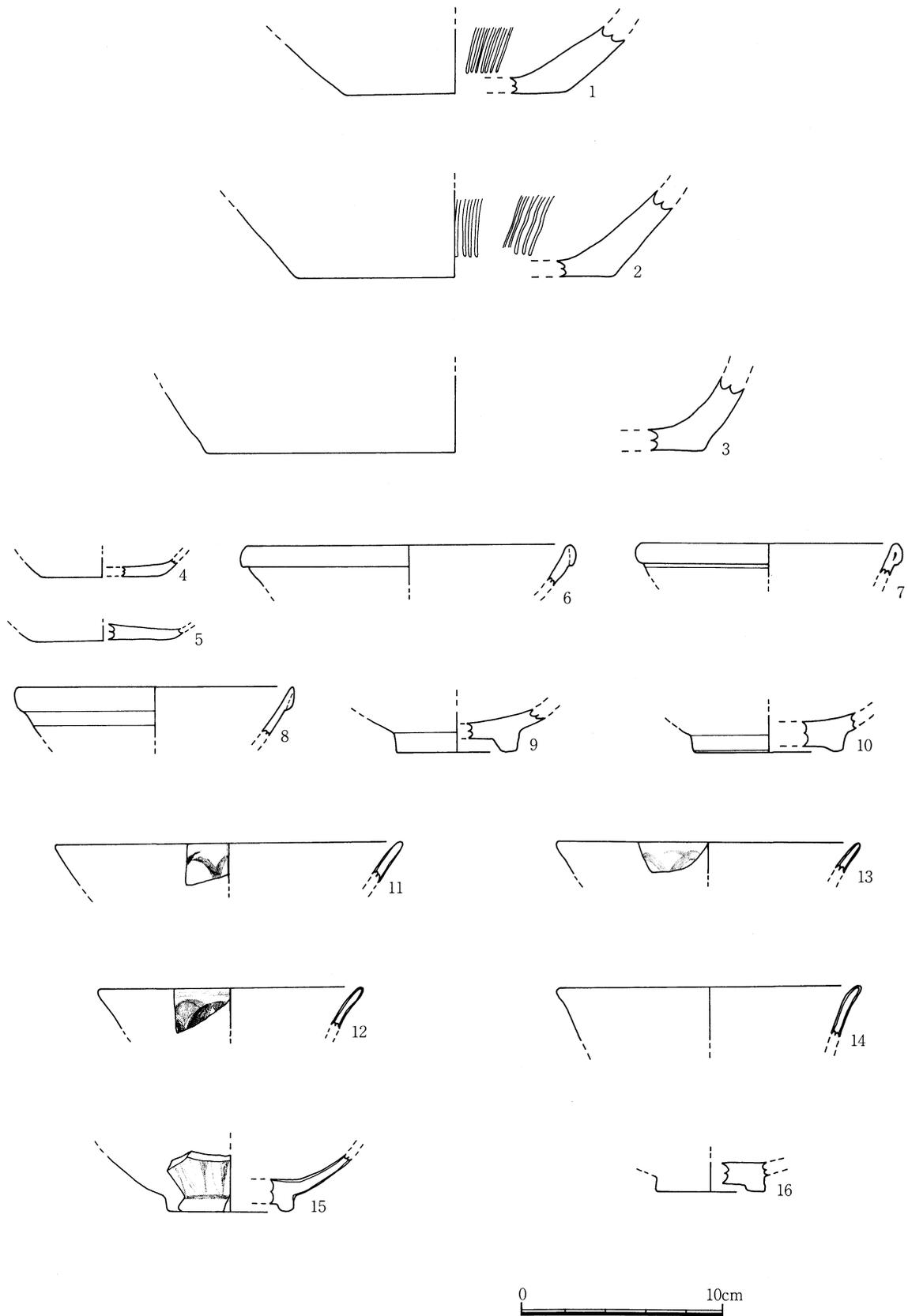


Fig. 95 第Ⅱ区古代・中世包含層出土遺物6

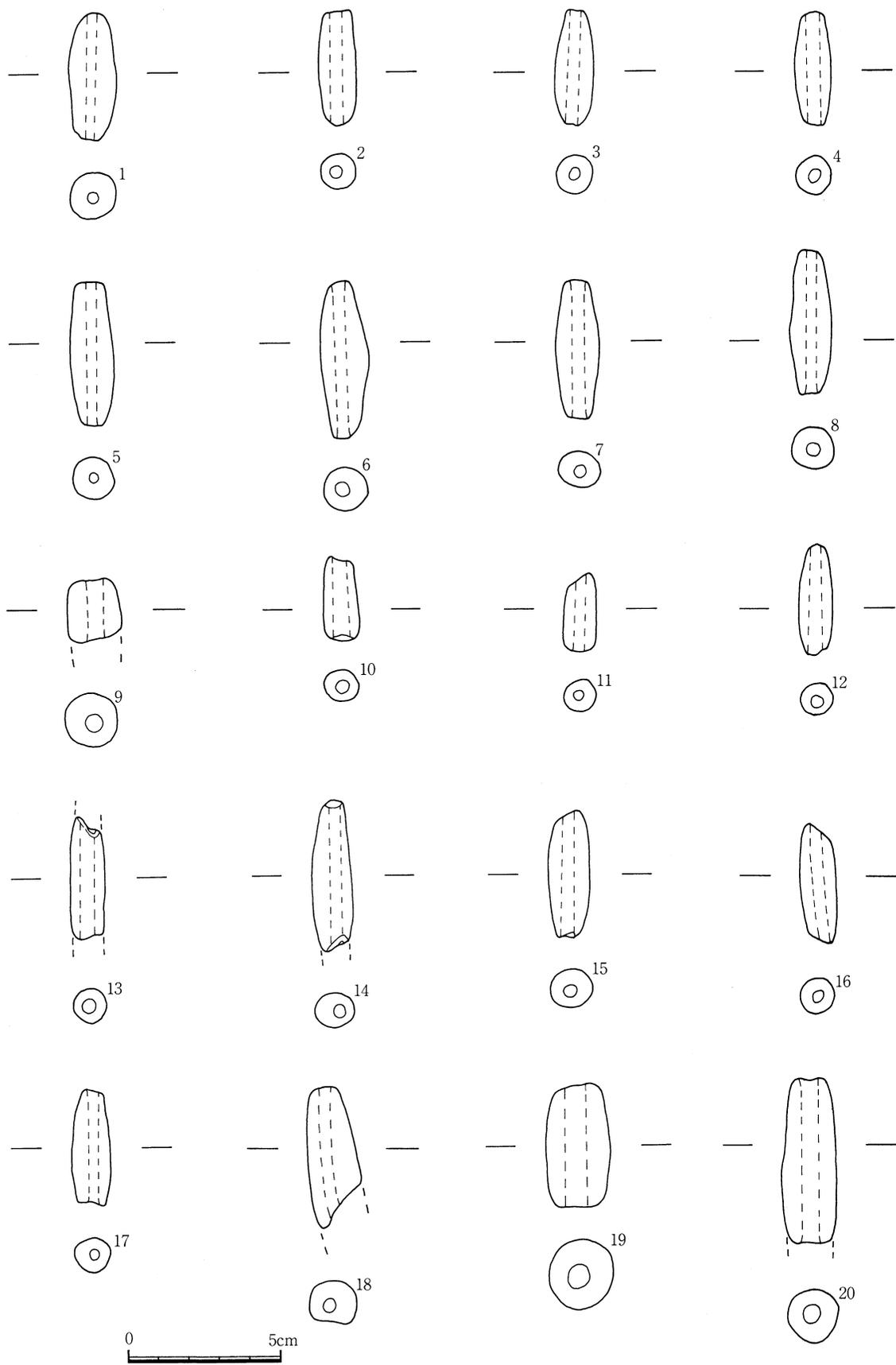


Fig. 96 第Ⅱ区古代·中世土錘実測図1

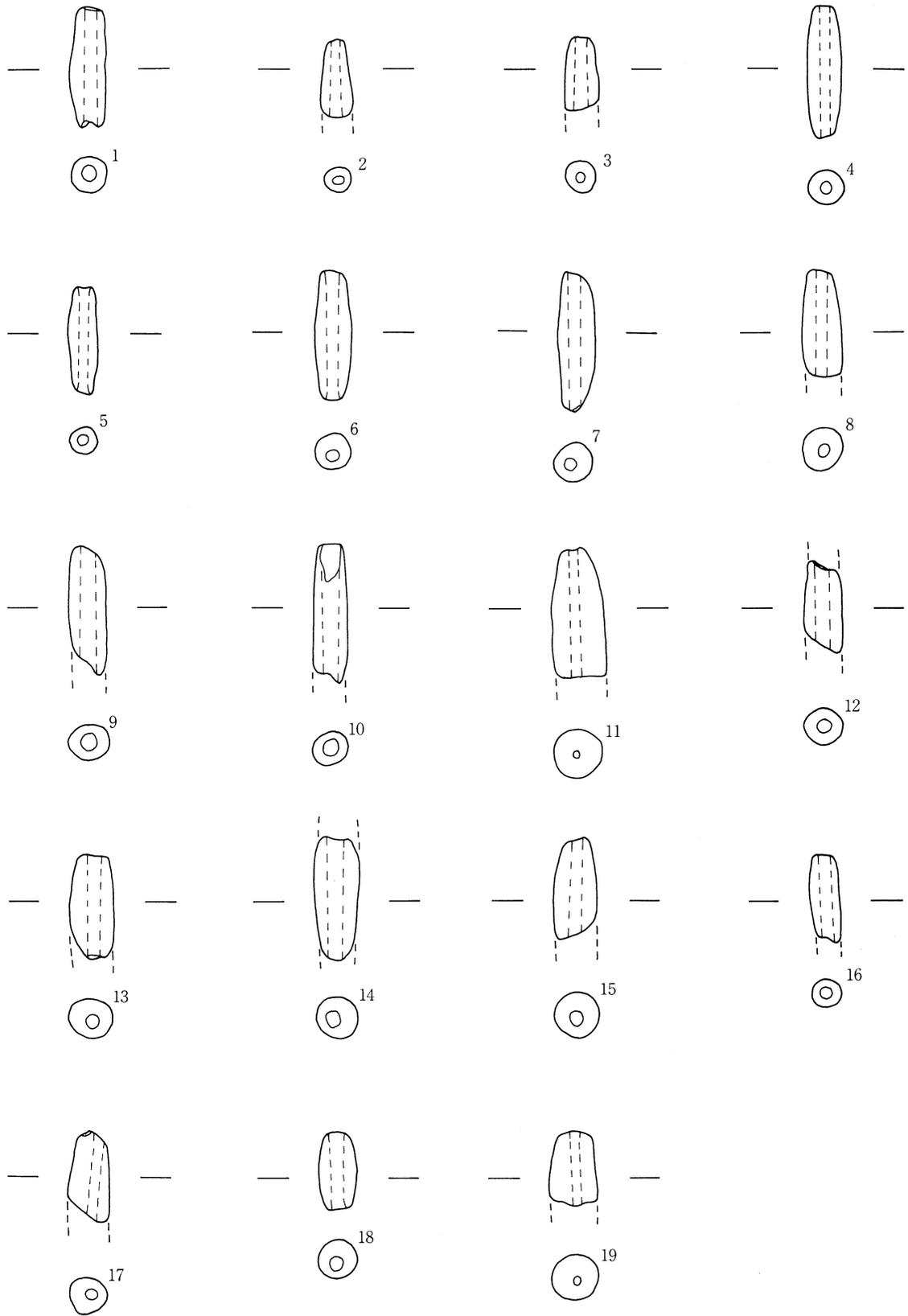


Fig. 97 第II区古代・中世土錘実測図2

Tab. 32 第Ⅱ区古代・中世土器法量表1

図版番号	出土区	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調
Fig. 90-1	E-24	V	土師器	小皿	(8.0)	1.5	(6.0)	良	7.5YR
Fig. 90-2	F-24	VI	〃	〃	(9.6)	1.2	(6.8)	〃	5YR
Fig. 90-3	—	表採	〃	皿	—	(1.5)	(10.0)	〃	7.5YR
Fig. 90-4	F-24	VI	〃	〃	—	(1.1)	(11.4)	〃	10YR
Fig. 90-5	〃	〃	〃	〃	—	(1.2)	(13.0)	〃	〃
Fig. 90-6	E-23	攪乱	〃	〃	—	(0.9)	(11.6)	〃	7.5YR
Fig. 90-7	—	表採	〃	〃	—	(1.2)	(10.0)	〃	5YR
Fig. 90-8	F-23	VI	〃	〃	—	(1.3)	(7.0)	〃	10YR
Fig. 90-9	D-23	〃	〃	杯	(15.4)	3.6	(11.8)	不良	2.5YR
Fig. 90-10	F-24	〃	〃	〃	(16.8)	3.1	(11.0)	〃	〃
Fig. 90-11	〃	〃	〃	〃	(14.6)	3.3	(9.0)	良	5YR
Fig. 90-12	G-23	V	〃	〃	(14.0)	(3.1)	(8.8)	〃	2.5YR
Fig. 90-13	G-24	VI	〃	〃	(11.4)	(2.2)	—	〃	2.5YR
Fig. 90-14	F-29	V	〃	〃	(12.1)	3.2	(7.3)	〃	7.5YR
Fig. 90-15	F-23	〃	〃	〃	(12.6)	2.9	(8.0)	〃	10YR
Fig. 90-16	G-24	VI	〃	〃	—	(3.2)	(9.0)	〃	〃
Fig. 90-17	F-23	〃	〃	〃	(13.4)	3.5	(8.2)	〃	〃
Fig. 90-18	G-23	〃	〃	〃	(11.2)	3.5	(6.0)	〃	5Y
Fig. 90-19	F-23	VI	〃	〃	—	(2.4)	(7.2)	〃	10YR
Fig. 90-20	G-24	V	〃	〃	(11.7)	3.3	(6.6)	〃	2.5YR
Fig. 90-21	E-26	VI	〃	小坏	(9.3)	3.0	—	〃	7.5YR
Fig. 90-22	H-28	V	〃	坏	—	(2.7)	(6.8)	〃	10YR
Fig. 90-23	D-28	VI	〃	〃	—	(2.8)	(6.4)	〃	10YR
Fig. 90-24	F-26	〃	〃	〃	—	(1.6)	(5.7)	〃	7.5YR
Fig. 91-1	F-24	〃	〃	〃	—	(1.9)	(7.8)	〃	10YR
Fig. 91-2	E-24	〃	〃	〃	—	(1.5)	(5.8)	〃	5YR
Fig. 91-3	G-24	〃	〃	〃	—	(2.1)	(8.1)	〃	2.5Y
Fig. 91-4	F-24	〃	〃	〃	—	(5.0)	(7.6)	〃	7.5YR
Fig. 91-5	〃	VII	〃	〃	(14.8)	(4.4)	—	〃	7.5YR
Fig. 91-6	E-24	VI	〃	〃	—	(1.9)	(8.6)	〃	5YR
Fig. 91-7	F-23	〃	〃	〃	—	(1.4)	(6.4)	〃	10YR
Fig. 91-8	F-24	〃	〃	〃	—	(2.0)	(9.0)	〃	5YR
Fig. 91-9	H-24	〃	〃	〃	—	(4.2)	(7.8)	〃	10YR
Fig. 91-10	〃	〃	〃	〃	—	(4.0)	(8.0)	〃	10YR

Tab. 33 第Ⅱ区古代・中世土器法量表2

図版番号	出土区	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調
Fig. 91-11	H-25	V	土師器	甕	(16.2)	(4.0)	—	良	7.5YR
Fig. 91-12	F-23	〃	〃	〃	(22.4)	(4.6)	—	〃	5YR
Fig. 91-13	〃	VI	〃	〃	(29.6)	(3.8)	—	〃	5YR
Fig. 91-14	B-25	表採	〃	釜	(21.6)	(3.1)	—	〃	10YR
Fig. 91-15	C-30	VI	〃	摺鉢	—	(4.4)	(14.2)	〃	5YR
Fig. 92- 1	E-23	攪乱	須恵器	坏	(12.4)	1.8	(5.2)	〃	7.5YR
Fig. 92- 2	F-23	V	〃	〃	(12.8)	2.4	(10.0)	〃	N
Fig. 92- 3	—	—	〃	〃	(13.0)	3.2	(9.0)	〃	5B
Fig. 92- 4	F-24	VI	〃	〃	(14.2)	3.5	(9.4)	〃	N
Fig. 92- 5	F-24他	V,VI	〃	〃	(13.5)	3.2	(8.3)	〃	7.5YR
Fig. 92- 6	F-24	VI	〃	〃	(13.6)	3.1	(8.8)	〃	N
Fig. 92- 7	F-24	〃	〃	〃	(14.6)	3.2	(9.0)	〃	N
Fig. 92- 8	F-24	〃	〃	〃	—	(2.8)	(6.0)	〃	5Y
Fig. 92- 9	H-24	〃	〃	〃	(3.0)	3.9	(8.2)	〃	7.5YR
Fig. 92-10	G-25	V	〃	〃	—	(1.8)	(11.6)	〃	N
Fig. 92-11	F-23	VI	〃	〃	—	(2.3)	8.6	〃	N
Fig. 92-12	G-25他	〃	〃	〃	(13.3)	4.1	(8.6)	〃	2.5YR
Fig. 92-13	G-24他	〃	〃	〃	(16.7)	5.3	(10.6)	〃	2.5GY
Fig. 92-14	G-24	〃	〃	〃	—	(3.4)	(11.0)	〃	N
Fig. 92-15	E-24	〃	〃	〃	—	(3.5)	(9.6)	〃	7.5Y
Fig. 92-16	E-24他	V,VI	〃	〃	(16.4)	(3.7)	—	〃	N
Fig. 92-17	E-24	IV, V	〃	〃	(12.4)	(1.9)	—	〃	N
Fig. 92-18	F-24	V,VI	〃	〃	(17.2)	(4.2)	—	〃	10YR
Fig. 92-19	F-23	V	〃	蓋	(18.0)	3.2	—	〃	10Y
Fig. 92-20	F-24	VI	〃	〃	(17.1)	1.7	—	〃	10Y
Fig. 92-21	F-23	V	〃	〃	(20.2)	(1.6)	—	〃	7.5Y
Fig. 92-22	G-25他	VI	〃	〃	(14.4)	2.1	—	〃	N
Fig. 92-23	D-28他	V,VI	〃	〃	(17.3)	(1.7)	—	〃	N
Fig. 92-24	—	ベルト	〃	〃	(16.4)	(1.4)	—	〃	N
Fig. 92-25	G-27	VI	〃	〃	(17.0)	(0.9)	—	〃	5Y
Fig. 92-26	D-24	〃	〃	〃	(15.6)	(0.7)	—	〃	N
Fig. 93- 1	G-24	〃	〃	壺	(8.0)	(6.3)	—	〃	N
Fig. 93- 2	G-24他	〃	〃	〃	(9.2)	(4.7)	—	〃	N
Fig. 93- 3	C-30	V	〃	〃	—	(8.2)	—	〃	5Y

Tab. 34 第Ⅱ区古代・中世土器法量表3

図版番号	出土区	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調
Fig. 93-4	F-23他	V, VI	須恵器	壺	—	(5.0)	(7.6)	良	2.5GY
Fig. 93-5	D-23他	VI	〃	〃	—	(3.5)	(11.0)	〃	N
Fig. 93-6	—	表採	〃	〃	—	(1.8)	—	〃	—
Fig. 93-7	—	〃	〃	壺	(11.2)	(1.8)	—	〃	N
Fig. 93-8	E-27	IV, V	〃	壺	—	(6.4)	16.6	〃	N
Fig. 93-9	F-24	VI	〃	甕	(15.3)	(4.3)	—	〃	7.5Y
Fig. 93-10	〃	〃	〃	〃	(20.2)	(4.7)	—	〃	N
Fig. 93-11	F-24他	VI	〃	〃	—	(3.8)	—	〃	2.5Y
Fig. 93-12	F-24	V	〃	捏鉢	(26.8)	(2.0)	—	〃	5PB
Fig. 93-13	H-29	VI	〃	〃	(29.0)	(2.0)	—	〃	5R
Fig. 93-14	F-25	IV	〃	〃	(24.0)	(2.3)	—	〃	〃
Fig. 93-15	G-24	V	〃	〃	—	(3.7)	—	〃	5Y
Fig. 94-1	D-24他	VI	緑釉	皿	(13.2)	2.8	6.0		5B
Fig. 94-2	F-24	〃	〃	〃	—	(1.4)	(7.0)		7.5YR
Fig. 94-3	H-25	〃	〃	〃	—	(1.8)	(5.6)		
Fig. 94-4	F-24	〃	〃	不明	—	(1.3)	(6.4)		N
Fig. 94-5	E-24	V	〃	〃	—	(1.5)	(8.6)		7.5Y
Fig. 94-6	F-28他	IV, V	〃	〃	—	(1.3)	(8.0)		〃
Fig. 94-7	D-23	VI	灰釉	碗	—	(2.0)	(7.6)		7.1Y
Fig. 94-8	E-24	〃	〃	〃	—	(1.9)	(7.0)		N
Fig. 94-9	G-9	VII	瓦器	〃	—	(1.3)	(4.3)		2.5Y
Fig. 94-10	F-22	VI	瀬戸	皿	—	(1.0)	(6.8)		濃綠色
Fig. 94-11	H-24	〃	瓦質土器	羽釜	(21.8)	(4.6)	—		5Y
Fig. 94-12	G-24	V	〃	〃	—	(4.2)	—		5Y
Fig. 94-13	G-24	表採		石鍋	—	(4.5)	—		
Fig. 94-14	D-24	V	瀬戸	大皿	(29.2)	(6.3)	—		10Y
Fig. 94-15	E-2	IV	〃	折縁鉢	(37.4)	(6.3)	—		7.5Y
Fig. 94-16	B-26	V	〃	大皿	—	(1.8)	(16.0)		10Y
Fig. 95-1	D-27	IV	備前	擂鉢	—	(3.3)	11.0		2.5YR
Fig. 95-2	H-28	V	〃	〃	—	(4.3)	16.0		2.5Y
Fig. 95-3	H-25	〃	〃	甕	—	(3.8)	(25.0)		5YR
Fig. 95-4	G-24	〃	白磁	皿	—	(0.9)	(6.0)		
Fig. 95-5	F-24	〃	〃	〃	—	(0.7)	(7.0)		
Fig. 95-6	E-24	〃	〃	碗	16.3	(2.0)	—		

Tab. 35 第Ⅱ区古代・中世土器法量表4

図版番号	出土区	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調
Fig. 95-7	E-26	Ⅳ	白磁	碗	(13.0)	(1.6)	—	良	10Y
Fig. 95-8	H-26	Ⅵ	〃	〃	(14.0)	(2.5)	—		10Y
Fig. 95-9	H-27	Ⅴ	〃	〃	—	(2.1)	(6.0)		7.5Y
Fig. 95-10	G-25	〃	〃	〃	—	(1.9)	7.6		5GY
Fig. 95-11	Ⅱ区	表採	青磁	〃	(17.4)	(2.1)	—		10Y
Fig. 95-12	D-24	Ⅴ	〃	〃	13.4	(2.0)	—		7.5GY
Fig. 95-13	E-26	〃	〃	〃	15.2	(1.6)	—		10GY
Fig. 95-14	D-24	Ⅳ	〃	〃	15.0	(2.6)	—		5G
Fig. 95-15	E-26	〃	〃	〃	—	(2.9)	6.4		5G
Fig. 95-16	D-24	表採	〃	〃	—	(1.5)	5.6		

Tab. 36 第Ⅱ区土錘法量表

図版番号	全長(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土層位	出土地点
Fig. 96- 1	4.2	1.5	0.4	8.2	V層	G-24
Fig. 96- 2	3.8	1.2	0.4	4.4	V層	F-24
Fig. 96- 3	3.8	1.3	0.4	4.8	V層	E-25
Fig. 96- 4	3.7	1.2	0.5	3.6	V層	F-26
Fig. 96- 5	4.7	1.4	0.3	10.1	V層	E-25
Fig. 96- 6	5.2	1.5	0.5	8.1	V層	G-26
Fig. 96- 7	4.5	1.4	0.4	5.9	V層	F-23
Fig. 96- 8	4.8	1.4	0.4	6.7	V層	F-25
Fig. 96- 9	2.1	1.8	0.6	5.4	VI層	H-26
Fig. 96-10	2.7	1.1	0.5	2.2	VI層	F-25
Fig. 96-11	2.7	1.0	0.4	2.4	VI層	H-25
Fig. 96-12	3.6	1.1	0.4	2.8	VI層	G-23
Fig. 96-13	4.0	1.1	0.5	—	VI層	F-26
Fig. 96-14	5.0	1.3	0.4	—	VI層	G-24
Fig. 96-15	4.1	1.4	0.5	6.0	VI層	E-24
Fig. 96-16	3.9	1.2	0.4	4.9	VI層	G-24
Fig. 96-17	3.8	1.2	0.4	—	VI層	G-24
Fig. 96-18	4.6	1.6	0.5	8.2	VI層	E-25
Fig. 96-19	4.1	2.1	0.7	18.8	VI層	F-29
Fig. 96-20	5.4	1.8	0.6	—	VI層	H-26
Fig. 97- 1	3.9	1.2	0.5	4.1	—	トレンチ内
Fig. 97- 2	2.5	0.9	0.4	1.5	—	表採
Fig. 97- 3	2.4	1.0	0.3	2.5	—	表採
Fig. 97- 4	4.2	1.2	0.4	4.4	IV層	E-26
Fig. 97- 5	3.5	0.9	0.4	1.7	IV層	E-24
Fig. 97- 6	4.2	1.2	0.4	4.2	IV層	F-23
Fig. 97- 7	4.5	1.2	0.4	4.2	IV層	F-24
Fig. 97- 8	3.4	1.4	0.5	5.3	IV層	F-24
Fig. 97- 9	4.2	1.4	0.5	4.1	IV層	F-26
Fig. 97-10	4.5	1.2	0.6	4.0	IV層	F-25
Fig. 97-11	4.3	1.6	0.2	11.4	IV層	F-25
Fig. 97-12	3.0	1.3	0.5	3.5	IV層	G-25
Fig. 97-13	3.4	1.5	0.5	5.7	IV層	E-26
Fig. 97-14	4.0	1.4	0.6	5.9	IV層	F-24
Fig. 97-15	3.3	1.4	0.5	5.5	IV層	E-25
Fig. 97-16	2.9	1.0	0.4	1.6	IV層	F-25
Fig. 97-17	2.9	1.2	0.4	3.9	IV層	F-23
Fig. 97-18	2.5	1.3	0.5	2.9	IV層	G-25
Fig. 97-19	2.4	1.5	0.2	5.4	IV層	H-25

第6章 考察

1 縄文時代

船戸遺跡の調査においては、本県とこれを取り巻く地域の縄文文化研究の進展に際してきわめて有意義かつ有効な、多量で良好な資料を採取し、蓄積することができた。しかし、本次の報告書には、それら良好な資料群に基づく分析・考察の成果は全く反映することができなかった。本次に言及できなかった数々の問題点と、今後早急に取り組むべき種々の課題等について整理しておくことで、考察に替えることとしたい。

1) 縄文土器について

①土器全点のデータ整理と定量的考察

今次の船戸遺跡の調査において採集された縄文土器は、破片点数で見ると、第Ⅰ区、第Ⅱ区合わせて数千点にのぼる。担当者の整理方法にも問題があったのだが、未だにこれらの全容を把握することができていない。整理の出発点に立ち戻り、資料の個別データを採取し直し、あるいは補完して、1点ずつ積み上げていくという作業が、まず必要である。

それを踏まえて、型式別・器種別等の量的な比率や相対的な位置付けなどの定量的な把握に取り組む必要がある。

②出土地点・出土層位の整理と純粋な遺物包含層の抽出

本報告では、各土器資料の3次元的な位置関係を明示することができていない。また、遺物包含層の評価についても不十分な状態である。主に斜面堆積という出土状態ではあるが、各層の遺物内容の比較が可能となるような整理をおこない、より小単位に資料を分類しなければならない。それによって、一括資料的な資料群の有無を確かめる必要がある。

③第Ⅰ区と第Ⅱ区の資料の関係について

本報告では、便宜的に第Ⅰ区と第Ⅱ区との資料を終始完全に分離して取り扱ったが、両調査区の位置関係からも自明なように、より親近性の強い資料群として相互に位置づけを新たにしなければならない。これによらなければ、縄文時代の船戸遺跡像には接近できない。

④片粕式土器と北久根山式土器、及び伊吹町式土器と西平式土器について

本編においては、非常に関連の深い上記の土器型式について、特に意図をもってどちらかを採用してはいない。しかし、従来県内では未検出であったような土器もいくつかみられることから、九州の土器型式との直接的な交流にも配慮しておかなければならない。石器にもあてはまることであるが、船戸遺跡の資料群には九州系の要素が多分に見受けられる、という印象が強い。

2) 石器について

①出土地点・層位等の基礎的整理の実施

土器と同じく、石器に関しても、出土地点・出土層位等の整理を十分におこない、一括資料に類するような資料群の抽出を試みる必要がある。

②頁岩を素材とするスクレーパー製作過程について

本次の出土石器資料の中で、頁岩製の石器・剥片及び石核の全体に占める割合は無視できるものではない。これら同一の石材を素材とする石器群に関しては、接合資料の確認を踏まえて、とりたてて論ずる必要があると考えられる。また、その製品に立脚した生業活動の中身についても論及しなければならない。

③土器型式とリンクした石器文化の波及などについて

上述したように、船戸遺跡の資料群からは九州系の要素が多分に見え隠れしている。当地域における九州系文化要素の受容の実体に迫るには、土器型式とセット関係として石器群を捉える必要があり、また比較資料を多数渉猟することが前提となる。そうして、縄文時代の船戸遺跡集団像にまで言及することが大きな課題である。(曾我)

2 古代・中世

1) 船戸遺跡の古代・中世

船戸遺跡から検出された古代から中世にかけての遺構は、掘立柱建物跡等、溝跡、ピット群である。高規格道路幅的部分的な調査であるため、遺跡の全貌を把握することは困難である。しかし船戸遺跡は、中筋川流域の古代から中世の様相を掴む上で重要な位置を占めている。

船戸遺跡の調査成果として、古代では今回の調査区ではSR2等の流路以外、遺構は検出することができなかった。しかしSR2・3及び包含層から古代の遺物が出土している。それぞれの古代に属する遺物についての詳細は前述したが、古代前半の須恵器については幡多地域のなかで最も多量に出土している。遺構も掘立柱建物跡など当該期に存在していたことは明確に言えるが、古代後半か中世前半の時期に削平された可能性が強い。しかし8～9世紀にかけて、この地域の様相を掴む考古資料は今回の出土遺物しか存在しない。ここでは、現段階で船戸遺跡の古代を語るには資料不足の感があるが、特に古代前半の須恵器についてと古代後半のSR2出土遺物について若干の考察を加えていきたい。

中世については、近年の中世都市研究で、津・泊・宿の性格を帯びた遺跡の位置付けについて活発に議論されている。津・湊の立地と交通体系に占める位置について、津・湊の立地としての自然条件として、潮流・風向き・地形や、その遺跡背後にある政治的・社会経済的条件を挙げている⁽¹⁾。さらに中世の流通問題に関して地方市場の問題が取上げられ、他地域から搬入された土器類が地方市場として機能していたことの目安とされている⁽²⁾。これらの視点から、船戸遺跡の立地する自然的・歴史的環境を含め検出遺構・出土遺物の検討を加え、本遺跡の位置付け及びその性格を追及し

ていきたい。(松田)

2) 古代前半の須恵器について

第I調査区から得た須恵器片の総数は3820点余りに上り、その73.2%を包含層所属が占め、次いでSR2:19.5%、SR1:6.1%、ピット:1.1%、SR3:0.1%の順である。それらのうち、底径あるいは口径を復原し得る180個体の例では、約58%に当たる104個体に8世紀前半から9世紀中葉にかけての形態要素が濃厚であり、この時期に属す遺物点数の割合は、実際には更に多いものと見られる。包含層所属の須恵器に関しては、既に「包含層出土遺物」の中で形態や胎質、焼成について整理すると共に、特徴的な器物を中心に年代観を述べている。各SRやピット出土の須恵器類も概ね包含層出土品の範疇に収まることから、ここでは、器種ごとに復原率の高い個体を若干抽出し、それらの形態に関して畿内や太宰府などの出土類器と比較し、編年分期との対照を行う。

皿: Fig. 37-4、Fig. 47-5、Fig. 57-5などのように斜直あるいは外弯した口縁の端部を上屈する例が多い。この形態は、早くも平城宮II期の資料中に少見するが、III期からVI期にかけて(8世紀中葉～末頃)類例を増す。Fig. 57-11・12など、口縁に外傾を強めて器高の低下を来たすものは、平安京I期以後(9世紀)の資料に多い。

平底杯: 体部の外傾度が小さいFig. 57-22と類似する例は、平城宮III期(8世紀第2四半期頃)の資料⁽³⁾に見られる。体部を30度前後の外傾で斜直するFig. 47-16、Fig. 57-23などは、平城宮VI期(8世紀末)の資料に近い。また、底部に各様の丸味を持つFig. 17-13～19は、平城宮VI期の長岡京左京南一条三坊三町SD8903下層の資料等に類似要素を小見するに止まり、今後の検討を要する。

輪高台付き杯: 器高の高いFig. 47-26、Fig. 58-1・2は、陶邑IV形式1～2段階(中村浩編年:以下同⁽⁴⁾)の形態を具え、8世紀前半の製品と見られる。これに続く3段階(8世紀第3四半期頃)の特徴は、器高を低めに抑え、外底の内寄りに輪高台を貼付するFig. 47-24、Fig. 58-7・8などに見られる。外底の縁辺に輪高台を貼付する形態は、第IV形式4段階(8世紀第4四半期頃)以後の特徴であり、口縁を外弯するFig. 47-21・23や、口縁を直伸するFig. 58-28・29など、多くの個体、破片を得ている。体部を強く外傾するFig. 59-1は、V段階の形態であり、9世紀の製品と見られる。

高杯: Fig. 59-3の一点のみを得ており、浅い皿状の坏身に短脚を付け、脚端を下屈する。近似する形態の早例は、陶邑梅地区70号窯跡の灰原出土資料⁽⁵⁾の中に見られるが、当該器との比較では、器高に占める脚部の割合が幾分増すほか、口縁外端に一条沈線を回らし、脚端を屈下する点で小異を持つ。脚部の長化や脚端の屈下は、太宰府跡SD2340などの出土類器で更に顕著化する点等から、本器の年代を、これら両例に挟まれた8世紀前半前後と推測するが、更に検討を要する。

蓋: 蓋高の大きいものが多く、陶邑IV型式1～3段階(概ね8世紀第1～第3四半期)の特徴を反映するものが主流と見られる。また、円圈状のつまみを付ける仕様形態の高率が目を引く。

壺: Fig. 60-16・20の長頸壺片は、同一個体に帰すると見られ、8世紀代の製品であろう。Fig. 60-23は広口型折肩壺の口頸片であり、陶邑光明地区の60号窯⁽⁶⁾(IV型式1～2段階)や平城宮跡SD485(平城宮II期)の資料に類型が得られ、8世紀前半～中葉頃の製品と考えられる。Fig. 48-1、Fig. 60-19⁽⁷⁾は、外折した口縁の端部を外肥する長頸壺片であり、口径値の極近い類型器が長岡京右京69次調査・百々遺跡Sk6901⁽⁸⁾の資料に見られる点から、それに近い9世紀中葉頃の年代が考えられる。(武吉)

3) 船戸遺跡SR2出土の土器について―篠窯鉢を中心に―

SR2からは約5300点余りの遺物が出土している。土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、灰釉陶器、土錘等であるが、ここで注目されるのは篠窯の須恵器である。篠窯須恵器の出土はまれであり、県内では船戸遺跡対岸に位置する風指遺跡⁽⁹⁾から篠鉢が出土しているのみでこの遺跡で第2例目となる。SR2は古代の包含層から掘り込まれており、土師器・須恵器は包含層遺物と同一のものが多く、包含層からの混入の可能性が高い。篠窯鉢については包含層からは確認されず、SR2のみからの出土である。ここでは篠窯鉢を中心にSR2出土遺物について述べていきたい。

①篠窯跡群の概要

篠窯跡群は丹波（京都府亀岡市篠町）に所在した須恵器窯である。8世紀中頃から11世紀前半頃まで操業したと考えられており、洛北窯跡群の後主に平安京に土器を供給した窯群として知られている⁽¹⁰⁾。器種は坏、皿、碗、蓋の供膳具と壺、鉢等の貯蔵、調理具を焼成し、10世紀段階では須恵器のみではなく緑釉陶器も焼成し供給している。昭和51年から約11年間発掘調査がされており、編年作業もなされている。篠窯製品の中でも鉢は九州地方、四国西南部で出土⁽¹¹⁾しており、広い範囲に製品が供給されていたことが確認されている。ここでは伊野・石井氏の編年⁽¹²⁾に添い船戸遺跡出土の鉢の時期にふれていく。

②船戸遺跡出土の篠窯鉢について

SR2からは篠窯で焼かれた鉢の口縁部、体部を合わせ3点出土（Fig49-3・4）している。口縁部は「く」の字状になり端部は玉縁状に肥厚するタイプで、鉢Ⅱ類に属する。鉢Ⅱ類は篠窯製品を特徴付ける器種で前述した口縁部をもち、底部はすべて糸切りである。篠窯製品の中でも鉢Ⅱ類は九州地方⁽¹³⁾、四国西南部で出土しており、広い範囲に製品が供給されていたことが確認されている。SR2の鉢は口縁部の形態からみるとH期に属する。風指遺跡は包含層からの出土で鉢の口縁部から体部にかけて確認されている。風指遺跡の鉢は口縁部が「く」の字に屈曲せず、端部は口縁部から直線的に肥厚するI期に属する。船戸の篠窯鉢は風指遺跡より一段階古く10世紀第二四半期に位置づけることができる。

③その他の遺物

船戸遺跡では土師器の皿、坏がSR1・2、包含層から多く出土している。SR2は前述したが、遺構の掘り込み段階で包含層遺物が混入した可能性が高いが、幡多地域では風指遺跡に次いで古代の遺物がまとまって出土しており、幡多の古代を考える上で、良好な資料を得ることができた。形態分類については詳しく後述するが、坏は底部が平坦なタイプ、底部外面に輪高台を張り付けたタイプ、底部が円盤状を呈するタイプの3形態に大別できるものが出土している。中にはFig45-14のように底部内外面に粘土紐を渦巻状に巻いた痕が確認できるもの、底部外面に成形後の切り離しの際のヘラおこし痕が残存しているものもみられ、土器成形過程を考えていく上で良好な資料といえる。篠鉢の他、搬入品としては黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器（Fig49-6～8）があげられる。黒色土器は内面のみ黒色処理した碗A類である。底部のみの出土で、外面には高台を貼付、内面には磨きが施され全体に薄いつくりである。包含層からも数点出土している。口縁部のみであるが、猿投窯（黒笹-90）で焼かれた灰釉陶器の段皿が出土している。緑釉陶器では底部のみであるが近江産の製品

が出土している。緑釉陶器の主要生産地としては畿内の洛北、洛西、篠、近江、東海地方の猿投が挙げられる⁽¹⁴⁾。SR2からの緑釉陶器はこの1点のみであるが、SR1と包含層からは京都洛北窯産が数点、第Ⅱ調査区では洛西窯産の皿が出土している。

風指遺跡でも同様に黒色土器椀A類、篠鉢、緑釉陶器の碗、皿、耳皿が数点出土している。緑釉陶器は洛北、洛西窯の製品で県内では最も多く出土しており、遺跡の概要、周辺遺跡との関連性から河川祭祀、律令体制下の管制の祭祀としての位置づけがなされている。船戸遺跡でも同様な遺物が出土しており、ほぼ同時期に営まれていたものと考えられる。また当時珍重品であった篠鉢、緑釉陶器等を10世紀を通して取得できた階級層がこの地域に存在していたことが窺え、船戸遺跡を含め、周辺遺跡に影響を与えていたと思われる。(竹村)

4) 船戸遺跡出土遺物の検討

①遺物の出土傾向

古代・中世の遺物では、土師器、須恵器、東播系須恵器、瓦器、貿易陶磁器、国内産陶器、石製品、金属製品、木製品等が出土している。遺構としては、SB、ピット、SR1は中世でSR2は古代後半の時期に考えることができる。

出土遺物の総点数は、破片数にして27461点である。その中で土器・陶磁器類の総破片数は26329点で、各遺構・包含層から出土した土器破片数データをTab37・38にまとめている。

出土遺物の内容としては、各遺構・包含層共に土師器類が最も多くその量を占めており各遺構別にその出土傾向の概要を見ていくことにする。SR1は、13世紀を中心に流れていた流路で、土器・陶磁器類の他に多量の木製品も出土している。遺構の性格上共伴する同時期の製品を抽出することは困難であるが、土師器の供膳具が最も多く次いで煮沸具となる。しかし下層にはSR2が同位置に流れているため遺物混入も認められ、土師器・須恵器類の形態・手法を見ると古代末に位置づけられるものが存在する。SR1では、全体の出土破片の8%を占めるのみの瓦器・貿易陶磁・東播系須恵器から流路の下限の年代を推定した。

SR2は、前述したとうりであるが、土師器の供膳具が53%で煮沸具が33%の破片数が出土している。土師器で実測図を掲載できたものの形態・手法を見ると10世紀前後のものが主体である。しかし須恵器も13%の量が出土しており8~9世紀のものも混ざっている。注目される点は、篠窯製品が搬入されていることで、四国西南部では風指遺跡と本遺跡のみである。掘立柱建物跡は、出土遺物が少なくすべて明確な時期を与えることができない。

出土破片比率を見ると、土師器が97%を占めているが細片が多く特徴も掴めないものが多い。わずかに3%弱の貿易陶磁・瓦器・国産陶器で時期をおさえている。

②土師器の形態分類

SR2及び包含層からの出土が多い土師器の供膳具について、口縁部や底部破片が多いが形態分類を行うことにより、瓦器、貿易・国産陶磁器等の搬入製品から、各遺構出土の土師器に時間的変遷及びその特徴を抽出してみたい。

土師器は、すべて回転台成形の坏、皿、小皿が出土しており、大きく底部形態の相違でA~C類に

大分類を行った。A類のみに関しては、底部の切り離し手法で細分した。皿・小皿も口縁部破片が多く復元口径になるが、口径の差によりⅠ～Ⅴ類に分類した。

土師器坏

A類…底部が平坦なもので、ヘラ切りをA-1類、回転糸切りをA-2類とする。

B類…底部に輪高台を張りつけているもの。

C類…底部が円盤状高台を呈するもの。

土師器皿

Ⅰ類…口径が17.5cm以上を測るもの。

Ⅱ類…口径が16cm以上を測るもの。

Ⅲ類…口径が14cm内外を測るもの。

Ⅳ類…口径が12～13cmを測るもの。

土師器小皿

Ⅰ類…口径が9cmを測るもの。

Ⅱ類…口径が7cm内外で、器高は1.5～1.8cmを測るもの。

Ⅲ類…口径が6cm内外で、器高は1cm内外を測るもの。

以上簡単に土師器の供膳具のみの形態分類を行ったが、既に行われているこの地域の中世土器研究を援用し各分類した土師器を見ていくことにする。⁽¹⁵⁾土師器坏B・C類に関しては、風指遺跡Ⅷ・Ⅸ層出土遺物と形態・手法が酷似しているため9世紀末から10世紀初頭の時期に押さえることができ、土師器坏類の中で最も多く出土している。土師器坏A類は、ヘラ切りのA-1類と糸切りのA-2類が出土しているが、その量としてはA-1類が圧倒的に多い。ヘラから糸切りの変化については、土佐中央部の国衙跡⁽¹⁶⁾やひびのきサウジ遺跡⁽¹⁷⁾で10世紀後半段階ではヘラ切りが認められることや、その後11世紀前半には小皿に糸切りが確認できることなども合わせ考えると坏においても同時期に糸切りが出現していると考えられる。A-1類は、10世紀代を通して認められるものと考えられる。A-2類は、11世紀以降であるが細片が多いため明確な時期をおさえることはできない。

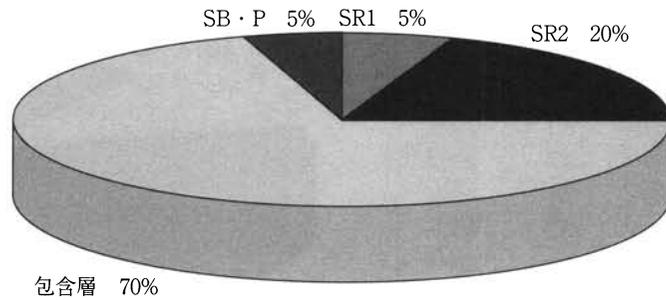
皿については、すべて9世紀から10世紀代に納まるものと考えられる。Ⅰ類からⅣ類へと法量の縮小が認められ、縮小に伴ない、時期的に新しくなる。小皿も同様であるが、Ⅰ類は底部ヘラ切りが多くⅡ・Ⅲ類は糸切りである。Ⅲ類については、13世紀から14世紀にかけての時期を考えておく。

SR1から出土している土師器は、坏A-1類 (Fig36-1~3)、A-2類 (Fig36-4)、B類 (Fig36-5~8)、C類 (Fig36-9~15) である。土師器類を見ると10世紀段階のものが多いが、しかしその他搬入品では和泉産の瓦器碗が埋土中層から上層にかけて出土している。和泉型瓦器碗の編年⁽¹⁸⁾で、Ⅲ-2・3とⅣ-1・2の製品で13世紀代に位置付けられるものである。貿易陶磁⁽¹⁹⁾は青磁で龍泉窯系の碗Ⅰ-2類からⅠ-5・b類が出土しているが細片が多い。時期的には瓦器碗とほぼ同時期に考えても可能である。

SR2出土の土師器は、坏A-1類 (Fig45-14~18)、A-2類は存在しない。B類 (Fig45-19~30)・C類 (Fig45-31~42) が最も多く出土している。さらに小皿が出土しておらず、皿はⅠ～Ⅳ類が認められる。搬入品では篠窯の鉢でH期の製品が出土していることや、黒色土器・灰釉陶器の

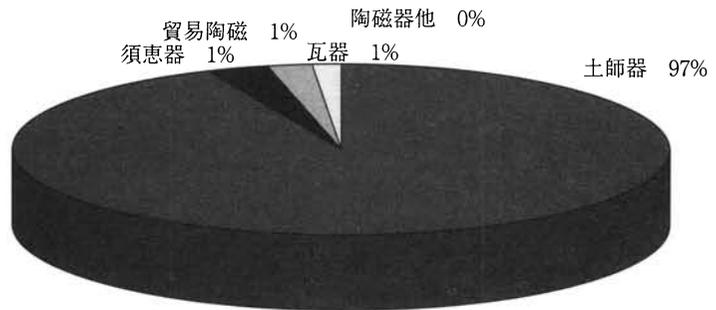
Tab. 37 船戸遺跡出土土器破片比率グラフ1
遺構別出土土器破片比率

遺構名	出土土器破片数	%
SR1	1389	5.28%
SR2	5286	20.08%
包含層	18364	69.75%
SB・P	1290	4.90%
計	26329	100%



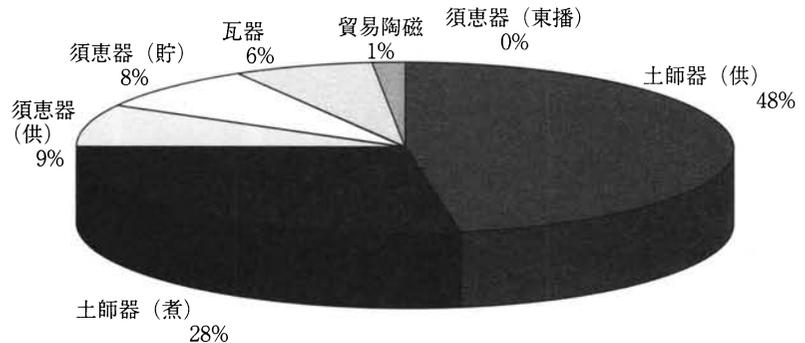
SB・Pit出土土器破片比率

遺物名	出土土器破片数	%
土師器	1237	95.89%
須恵器	19	1.47%
貿易陶磁	15	1.16%
瓦器	14	1.09%
国内産陶器他	5	0.39%
計	1290	100%



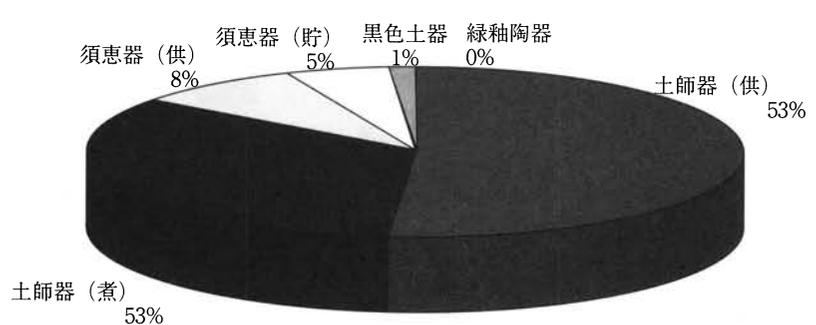
SR1出土土器破片比率

遺物名	出土土器破片数	%
土師器(供)	654	47.08%
土師器(煮)	391	28.15%
須恵器(供)	126	9.07%
須恵器(貯)	107	7.70%
瓦器	89	6.41%
貿易陶磁	20	1.44%
須恵器(東播)	2	0.14%
計	1389	100%



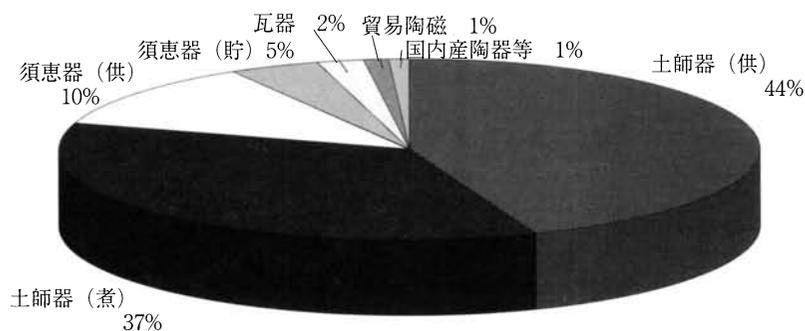
SR2出土土器破片比率

遺物名	出土土器破片数	%
土師器(供)	2827	53.49%
土師器(煮)	1729	32.72%
須恵器(供)	411	7.78%
須恵器(貯)	261	4.94%
黒色土器	55	1.04%
緑釉陶器	2	0.04%
計	5285	100%



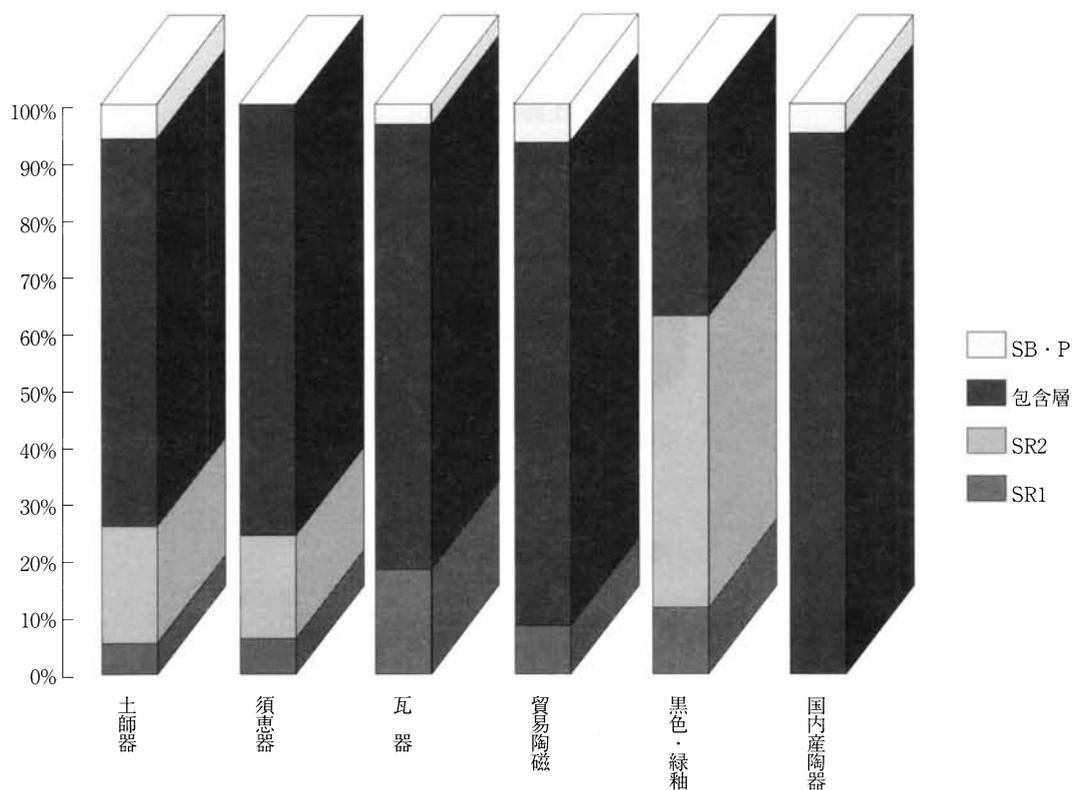
Tab. 38 船戸遺跡出土土器破片比率グラフ 2
包含層出土土器破片比率

遺物名	出土土器破片数	%
土師器(供)	8132	44.30%
土師器(煮)	6706	36.53%
須恵器(供)	1875	10.21%
須恵器(貯)	871	4.74%
瓦器	370	2.02%
貿易陶磁	201	1.09%
国内産陶器	109	0.59%
須恵器(東播)	52	0.28%
黒色土器	41	0.22%
計	18357	100%



種類別出土土器破片比率

遺構名	土師器	須恵器	瓦器	貿易陶磁	黒色・緑釉	国内産陶器	出土土器破片数
SR1	1045	233	89	20	13	0	1389
SR2	4556	672	0	0	57	0	5286
包含層	14838	2746	370	201	41	109	18364
SB・P	1237	19	14	15	0	5	1290
計	21676	3670	473	236	111	114	26329



段皿（黒笹⁽²⁰⁾90）が認められ流路としての性格も含めあわせ、概ね9世紀後半から10世紀前半の時期が考えられる。

掘立柱建物跡は、土師器では細片が多く時期的なものまで言及できないが、SB4の青磁劃花碗片（Fig35-4）やSB8の白磁Ⅸ類の皿（Fig35-9）、瓦器碗（Fig35-8）を見ると、13世紀から14世紀初頭にかけて建物跡が存続していることがわかる。

4）中筋川流域の中世集落出現の背景

中筋川流域の遺跡群は、中世寺院の香山寺を取り巻くように集落が展開している。香山寺は、『長宗我部地検帳⁽²¹⁾』にも記載され真言宗の金剛福寺に属しており、調査した船戸遺跡をはじめ周辺の具同中山遺跡・アゾノ遺跡・風指遺跡等は「足摺領」（金剛福寺領）の一部に含まれている。これらのことから、中世寺院である香山寺と周辺に所存する中世集落とは密接に関連していることが窺い知れる。これら集落の出現背景について歴史的背景も含め若干の予察をしていきたい。

古墳時代では、中筋川上流域で宿毛市平田町に所存する平田曾我山古墳や高岡山古墳⁽²²⁾などの5世紀前半代に位置付けられる古墳が造営されている。これら古墳群と、下流域に存在する4～6世紀にかけての祭祀跡との関係を考える必要がある。船戸遺跡でも祭祀遺物が出土しているが、対岸に位置する具同中山遺跡群では広く祭祀遺物が検出されている⁽²³⁾。下流域の祭祀遺跡は、上流域の古墳及びそれを生み出した集落の存在を考えていかなければならない。中筋川下流域の遺跡群は、少なくとも古墳時代以降上流域に存在した地域基盤を背景に文化流入の門戸としてひらかれていた場所と考えられる。

古代にはいと、律令体制下の中村は幡多郡に属し、『和名類聚抄』をみると幡多郡は5郷からなっており、中筋川流域は山田郷にはいつている。風指遺跡の性格は、官的祭祀施設の存在が考えられており、平安時代においても古墳時代以来の伝統的な祭祀の様相が認められる地域としておさえることができる。古代から中世にかかる時期の中村は、もともと国衙領で鎌倉初期には九条家の荘園となっている。この荘園は、『金剛福寺文書』によると1237年には既に成立しており、九条家から1250年には一条家へ譲渡されている⁽²⁴⁾。

船戸遺跡の対岸に位置する具同中山遺跡群は、県内で最も多く12～13Cにかけての貿易陶磁器や瓦器が出土している。この時期は、具同中山遺跡で最も多く建物跡を検出しており、九条家から一条家領として発展した時期と重なる。仮に「荘倉」的な機能を持ち合わせた集落として考えると、その機能を支えた人間こそ貿易陶磁を取得できた層である。またその中で平安時代末から鎌倉時代の中筋川下流域では、アゾノ遺跡や具重遺跡などの小集落も存在するが具同中山遺跡が中心的集落であることがわかる。

古墳時代から中世にかけて、下流域の遺跡群が存在する背景のひとつには、地理的に四万十川から支流の中筋川にはいるという交通手段の結節点として位置付けることができる場所と考えている。古墳時代以来上流域に所存する遺跡群は、畿内を中心とした地域と密接な関係が考えられる。畿内地方との交通手段を考えると、外洋から四万十川に入りさらに中筋川という水運ルートを頻繁に利用していたと推定できる。中筋川水系は、幡多郡の中でも広い平野部を有しており、中筋川も下流

域から中流域まで高低差が少ないため四万十川からの逆流現象が起⁽²⁵⁾こる。川船利用には適した条件を備えているが、しかし河川氾濫という自然災害も出てくる。これらのことから古墳時代には、河神に係わる祭祀が共同体の中で頻繁に行われ、その後古代国家の形成と共に祭祀権も権力によって掌握され形骸化されてくるが、中村地域の中では重要な場所として位置付けられている。中世においても、古代以来の経済基盤に支えられた流通ルートにのって、中筋川中・上流域に存在する集落の結節点として、中世集落が発展してくるのではないかと考えられる。

5) 船戸遺跡の性格とその役割

船戸遺跡の名称でも推察できるが、調査地点は「船戸」の小字を持ち中筋川を西から包み込む小さな入江のような地形をしている。出土遺物の中で石製の碇が出土したことで、地形、地名、環境から見て中筋川を往来する川船の停泊地のような役割をはたした遺跡と考えた。出土遺物から見ると古代、中世前期、戦国時代に盛行した時期を押さえることができる。

古代では8世紀後半を中心とした須恵器が出土しており、中筋川流域でこの時期の須恵器がまとめて出土したのは初めてである。馬家や津などの交通施設と郡衙の関係について、郡衙や別置された館・厩家と見られる遺跡は河川の縁辺に位置する例が多く、渡しや津に関わる宿泊・供給の役割も重視されていた点を山中敏史氏が指摘⁽²⁶⁾されている。船戸遺跡の北側2キロの場所には、足利健亮氏の想定した四国環状路と延歴廢駅配置の「馬越」の地名が残る場所がある⁽²⁷⁾。四国環状路の中村周辺では、四万十川を必ず渡らなければならず渡しの場所の必要性が考えられる。仮にその場所が船戸遺跡であるとすれば、風指遺跡で考えられている官的祭祀行為やその後具同中山遺跡群等の中世集落展開の基となる歴史的背景を推察することができる。

中世の船戸遺跡は、調査した範囲が限られているため遺跡の全貌は把握できないが、遺構のなかで掘立柱建物跡や、建物跡として復元できない多数のピット群を検出している。掘立柱建物跡は、小規模な1間×2間のものでその他ピット群にしてもブロックで集中して検出している。これらの遺構の検出状況を考えると、時期は明確にできないが簡単な施設が存在していた可能性を示している。遺跡の性格を推察するには時期尚早であるが、出土遺物の中で石碇は形状や重量から川船に使用されたものと考えられ、その他にも商品として瓦器製品や貿易陶磁などが出土していることや、下流に隣接して存在する具同中山遺跡やアゾノ遺跡の集落で大量の瓦器・貿易陶磁が出土していることと併せて考えてみても、鎌倉時代商品流通に関わった遺跡であることは指摘できる。(松田)

註

- 1 市村高男「中世後期の津・湊と地域社会」『津・泊・宿』第3回中世都市研究集会資料 1995年
- 2 橋本久和「土器論から中世前期商業史への展望」『展望考古学』考古学研究会 1995年
- 3 平城宮Sk820ほか。『古代の土器1・都城の土器集成』古代の土器研究会編（1992年）
- 4～6 『須恵器集成図録・第1巻・近畿編Ⅰ』中村浩編：雄山閣出版（1995年）
- 7 『奈良市埋蔵文化財調査報告書・昭和59年度』奈良市教育委員会（1985年）
- 8 『古代の土器2・都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会編（1993年）
- 9 出原恵三 「風指遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会 1989年
- 10 水谷寿克・岡崎研一 「篠窯跡群と亀岡盆地の遺跡」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 1991年
- 11 伊野近富 「篠原型須恵器の分布について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 1991年
- 12 石井清司 「篠窯須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 1995年
- 13 中島恒次郎 「太宰府における搬入土器－篠窯系資料」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 1990年
- 14 高橋照彦 「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 1995年
- 15 松田直則 「高知県に於ける古代末から中世の土器様相」『中世土器の基礎研究』Ⅴ 日本中世土器研究会 1989年
- 16 廣田佳久 『土佐国衙発掘調査報告書 第11集』 高知県教育委員会 1991年
- 17 高橋啓明 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』 土佐山田町教育委員会 1990年
- 18 尾上実 「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』1983年
- 19 森田勉・横田賢次郎 「太宰府出土の輸入陶磁器について－形態分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館 1978年
- 20 植崎彰一 「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3』小学館 1977年
- 21 『長宗我部地検帳』幡多郡中高知県立図書館 1964年
- 22 山本哲也 『高岡山古墳群発掘調査報告書』高知県教育委員会 1985年
- 23 出原恵三・廣田佳久・松田直則 「具同中山遺跡群・古津賀遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 高知県教育委員会 1988年
- 24 『中村市史』中村市 1969年
- 25 建設省四国地方建設局中村工事事務所『渡川改修40年史』1980年
- 26 山中敏史 「古代地方官衙論」『展望考古学』考古学研究会 1995年
- 27 足利健亮 「山陽・山陰・南海三道と土地計画」『新版古代の日本 中国・四国』角川書店 1992年

写真図版



船戸遺跡遠景（香山寺山頂より）



第I区調査前近景（東より）

PL.2



第 I 区航空写真 (ピット、SB、SR1完掘)



第 I 区SB1・2・3、ピット群完掘状態 (南より)



第I区SB4・5・6、ピット群、SR1完掘状態（西より）



第I区SB、ピット群完掘状態（東より）

PL.4



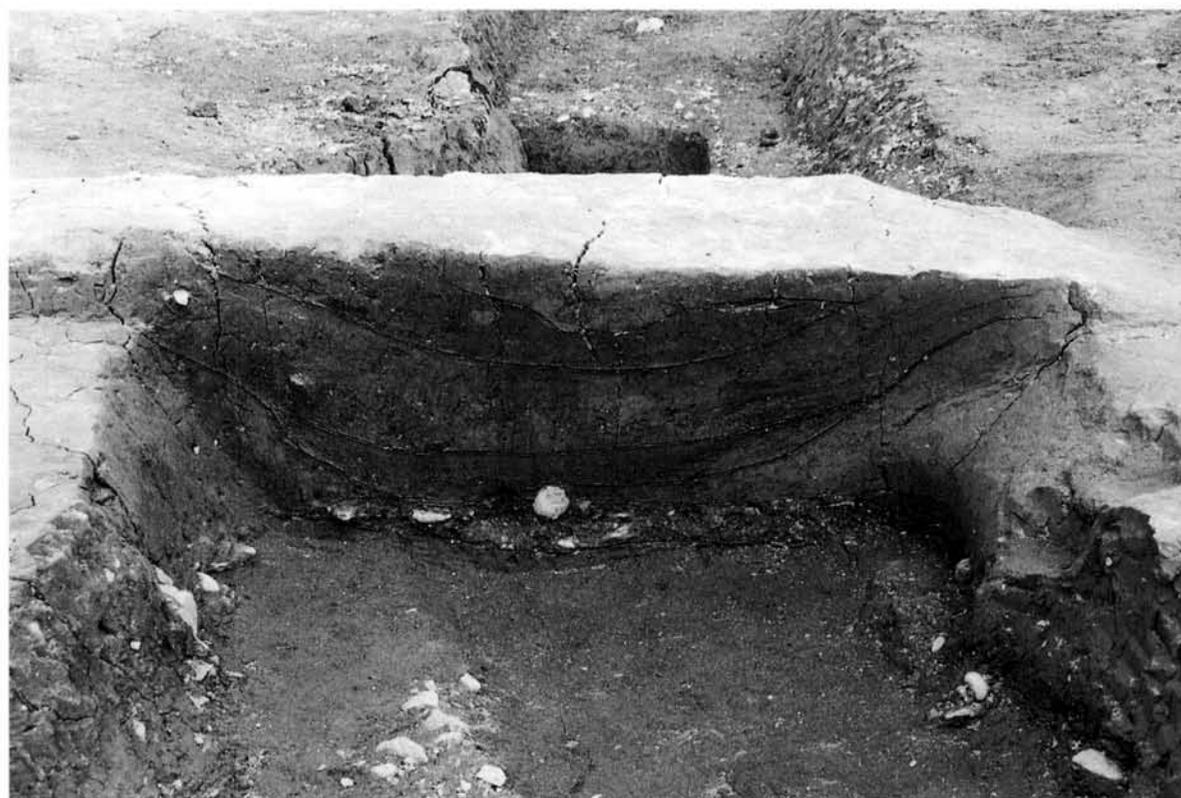
SR2完掘状態（東より）



SR3完掘状態（東より）

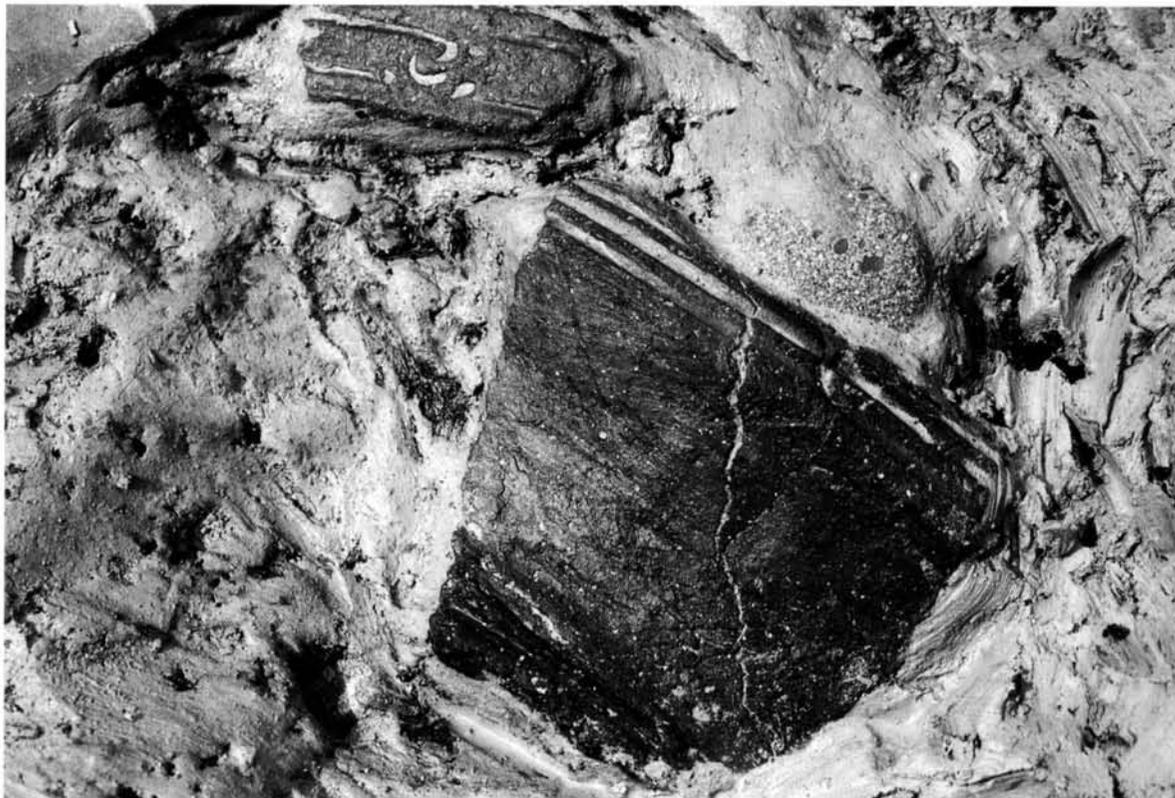


第I区南北セクション



SR1・2セクション

PL.6



縄文後期土器（深鉢）出土状態



縄文後期土器（鉢）出土状態



縄文後期土器（注口土器）出土状態

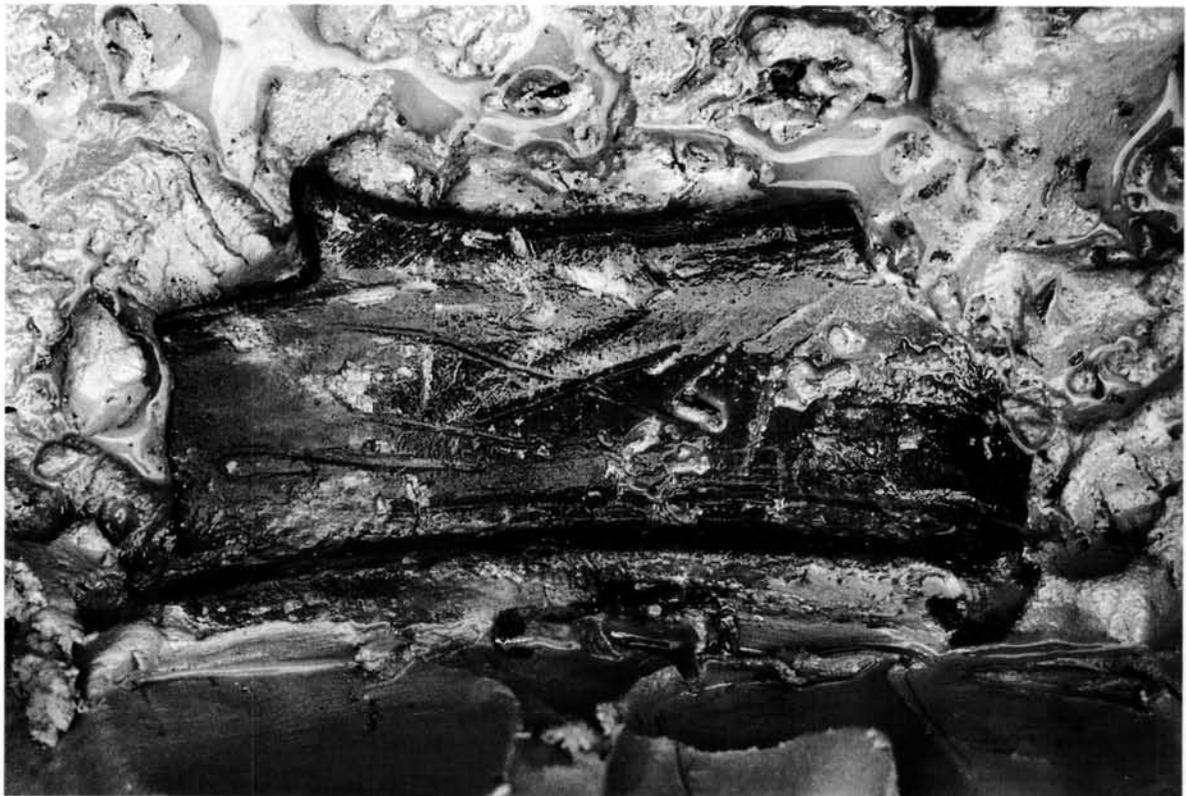


縄文後期土器（深鉢）剝片出土状態

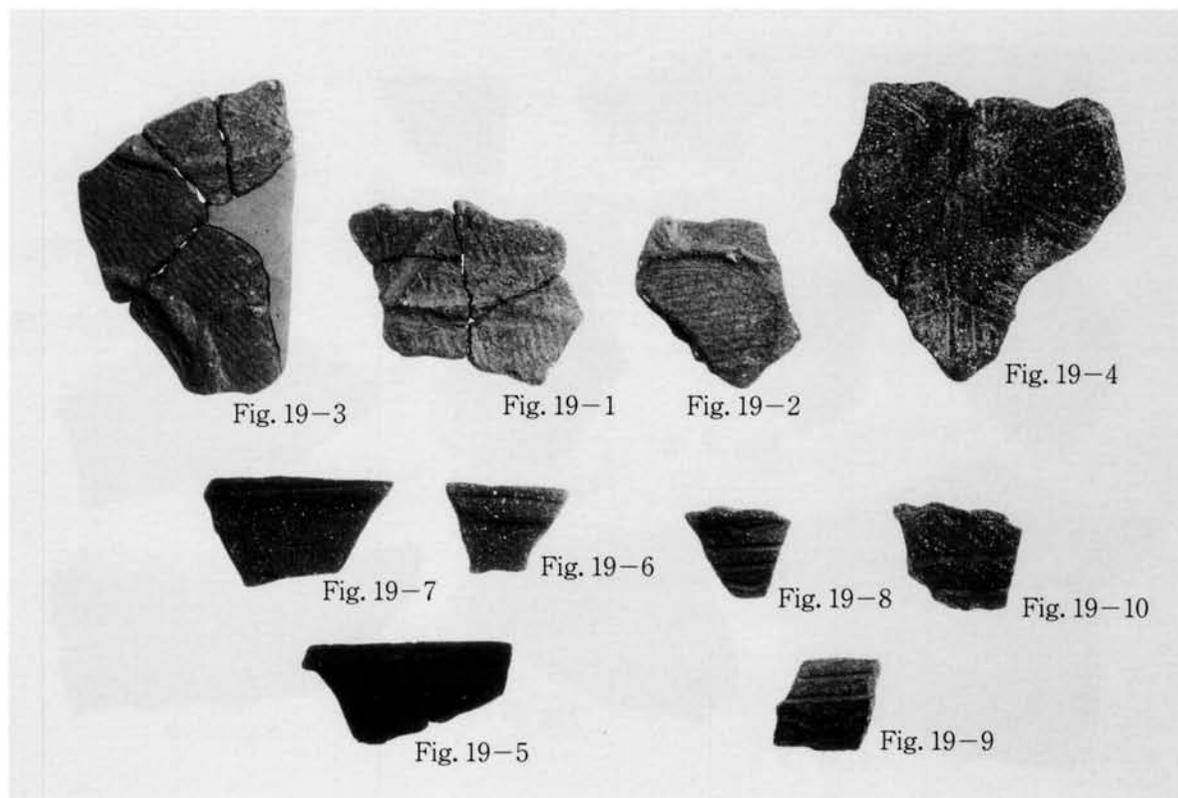
PL.8



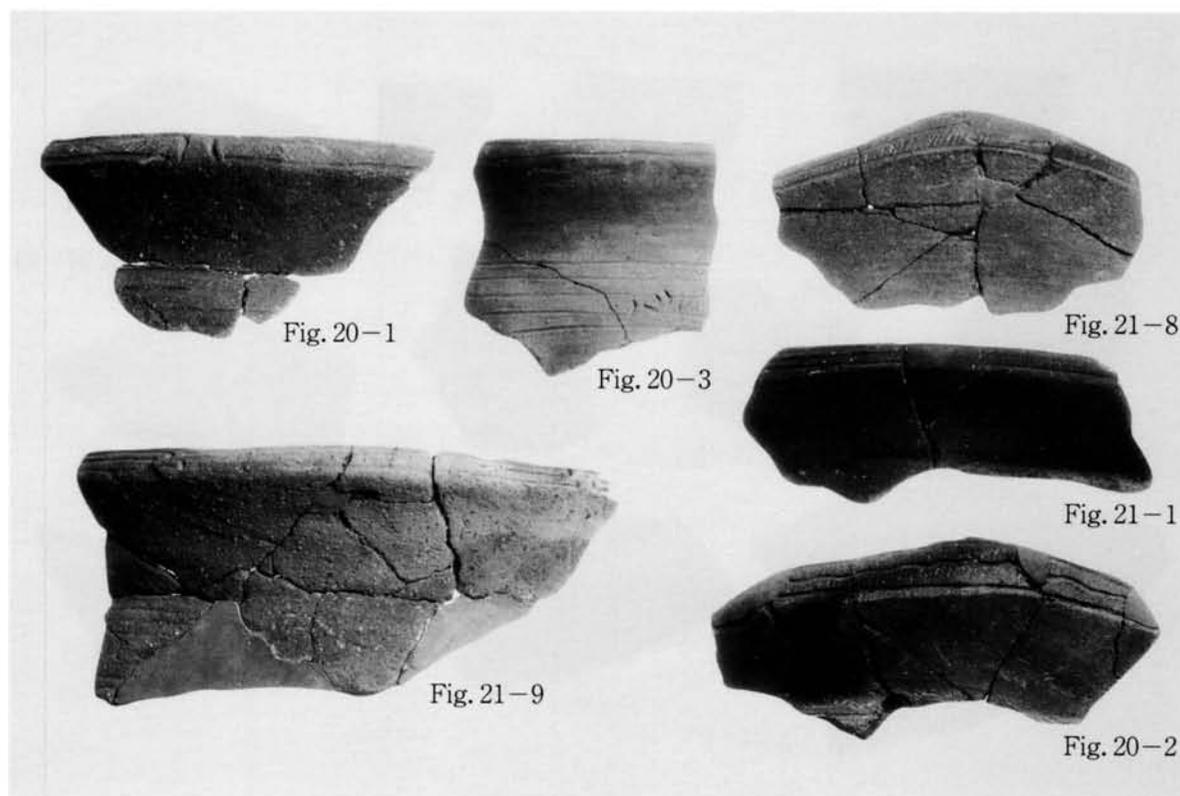
縄文後期土器（深鉢）出土状態



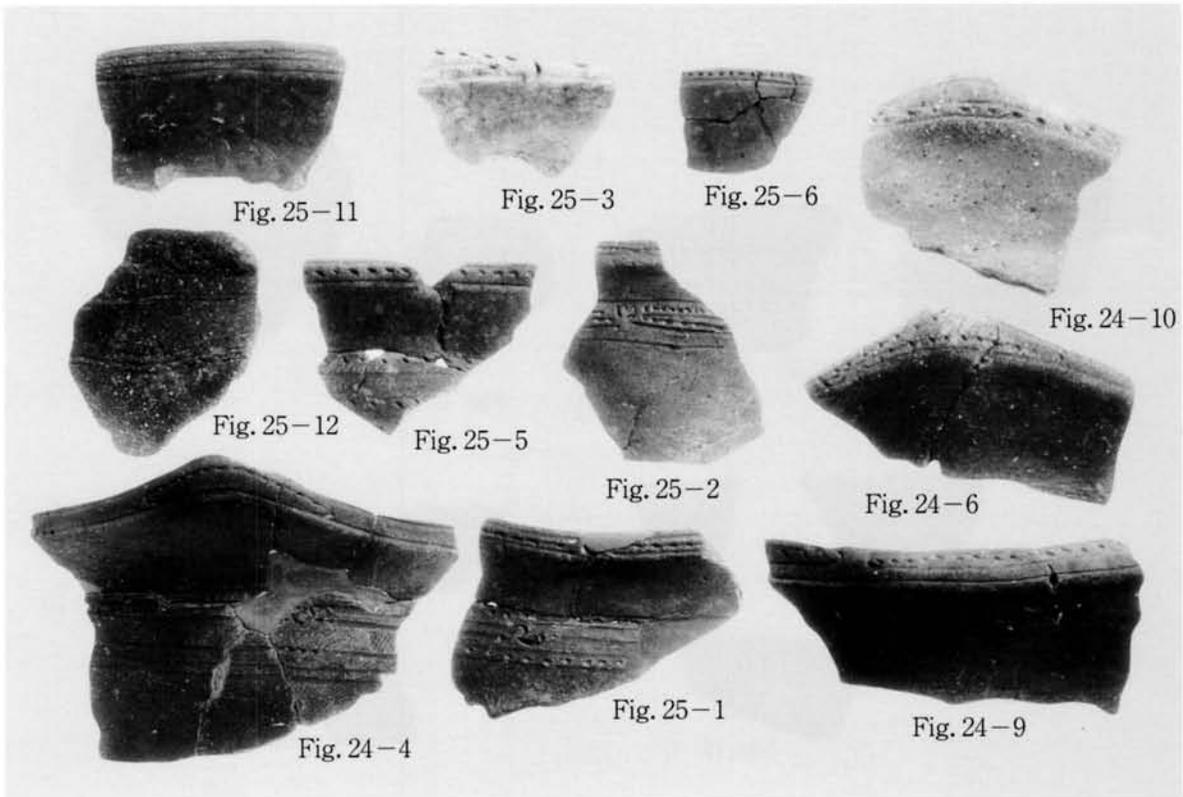
縄文晚期土器（浅鉢）出土状態



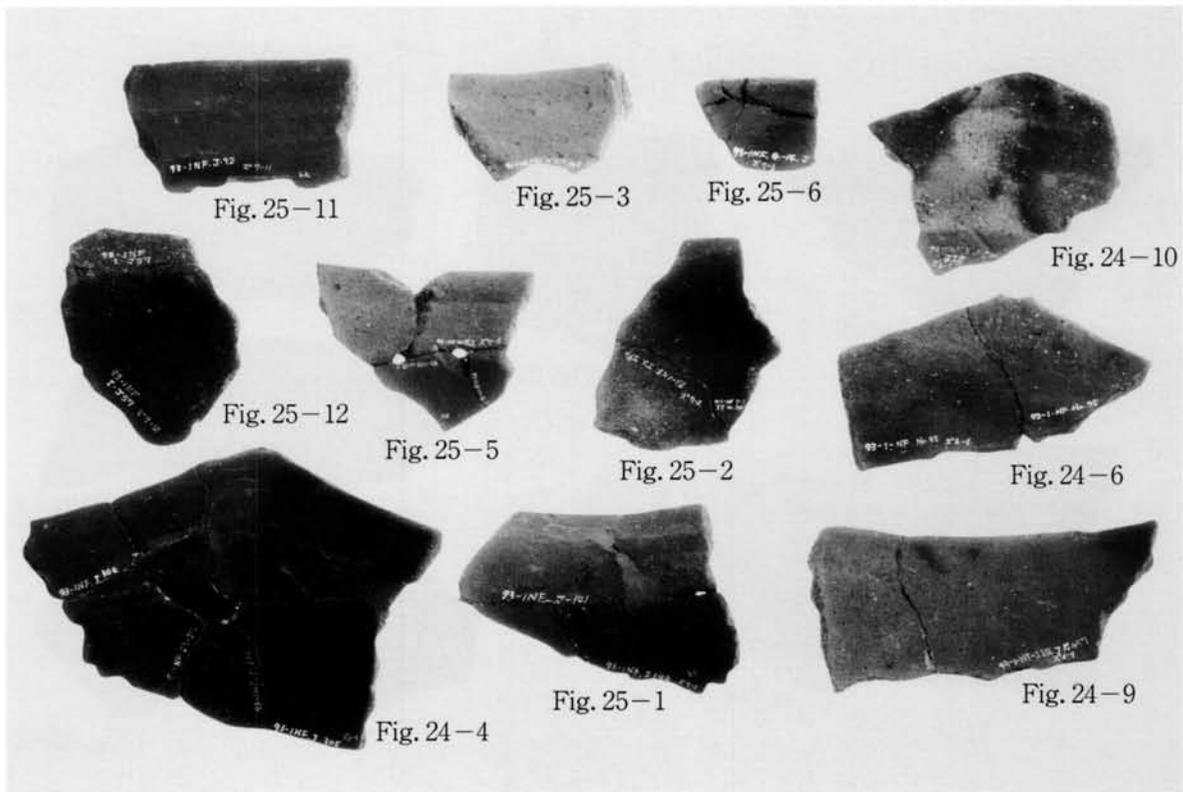
第 I 区出土縄文土器



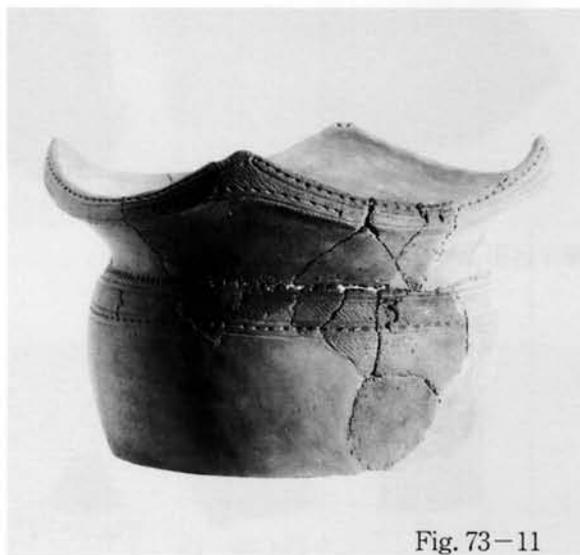
同 上



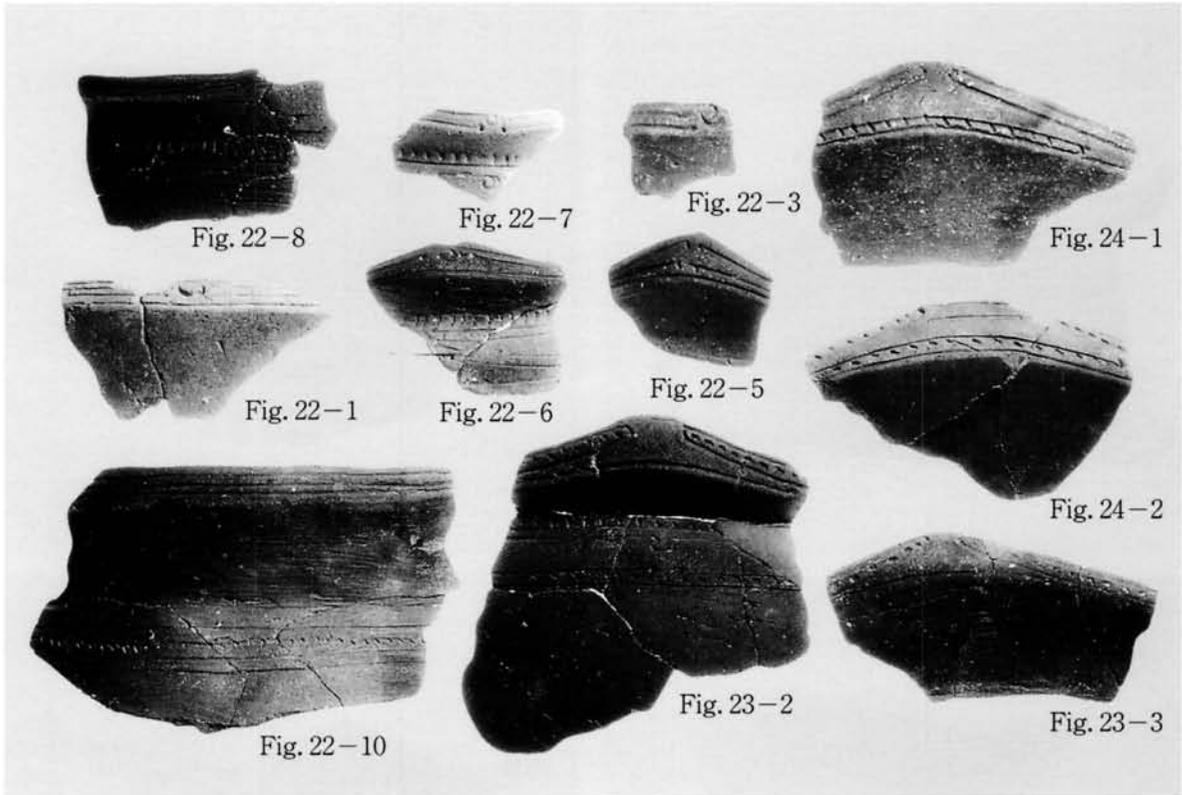
第 I 区出土縄文土器（外面）



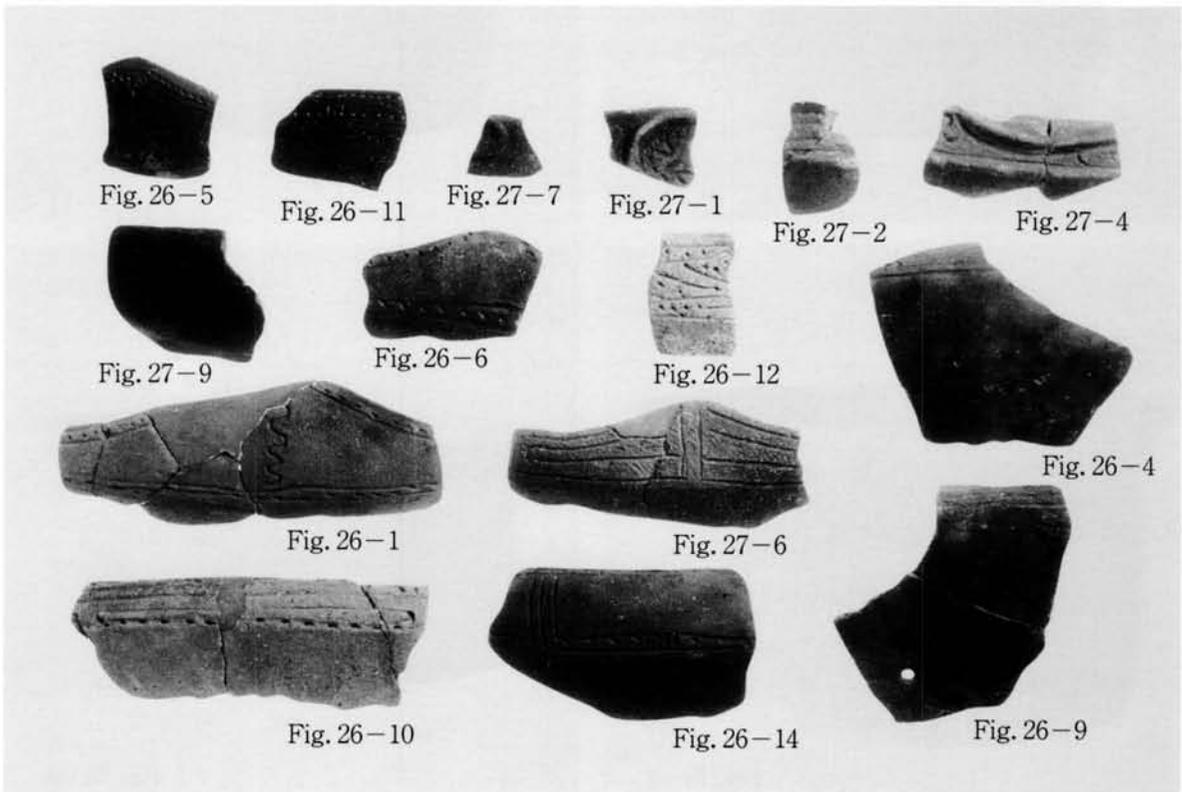
同上（内面）



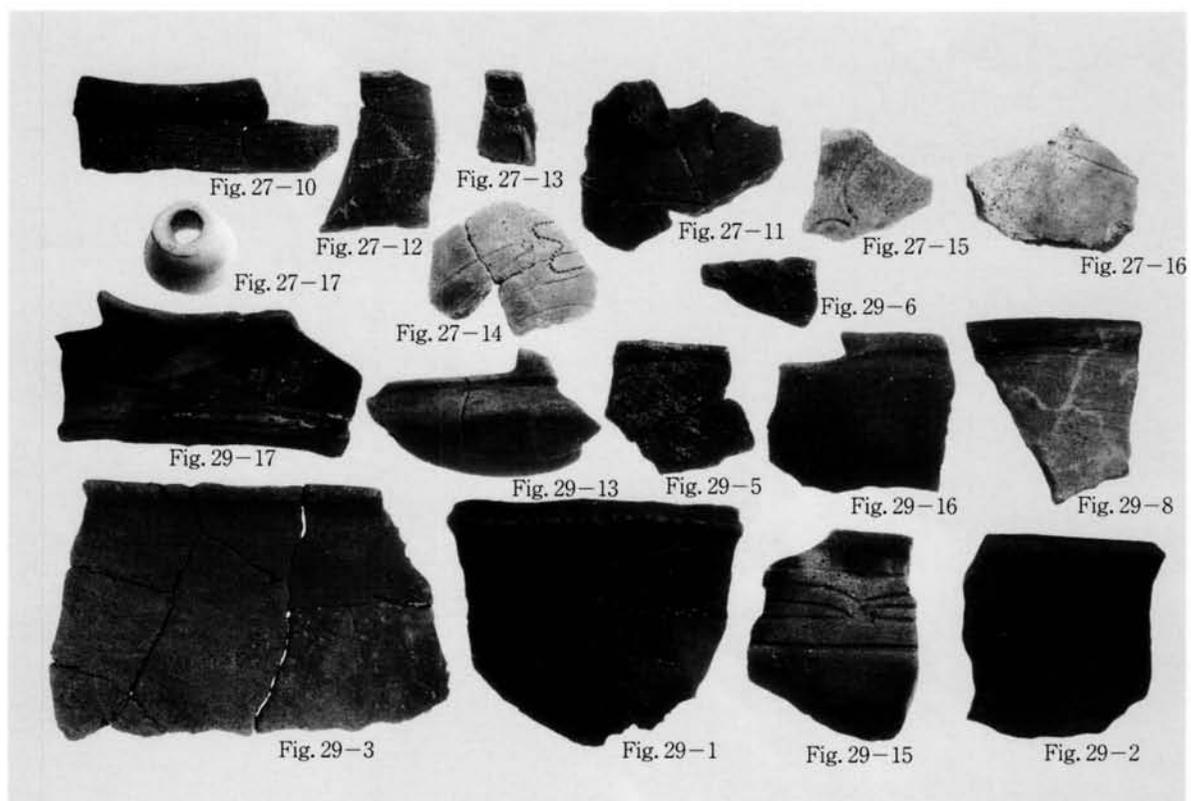
第 I · II 区出土繩文土器



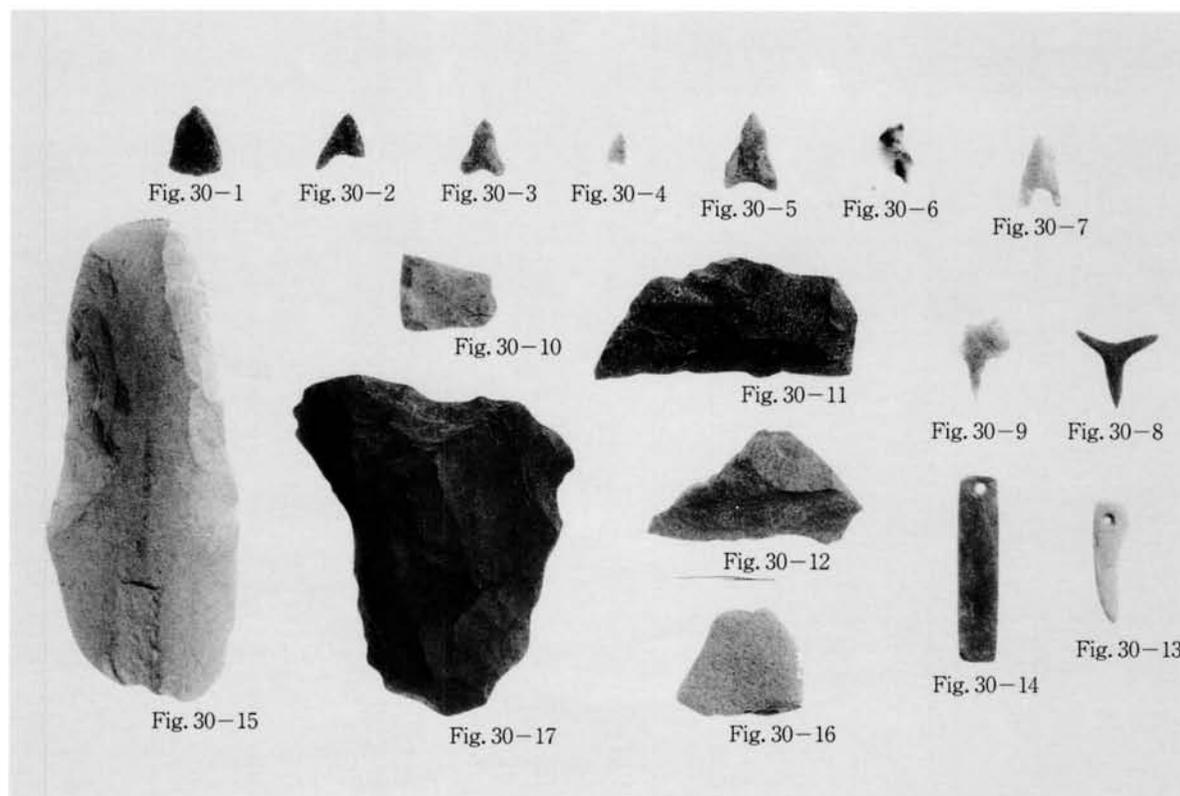
第 I 区出土縄文土器



同 上



第 I 区出土縄文土器



第 I 区出土石器（縄文時代）

PL.14



第 I 区古墳時代 高坏脚部出土状態



同 上



第 I 区古墳時代 高坏脚部出土状態



第 I 区古墳時代 甕底部出土状態



第I区古墳時代 甕出土状態



第I区古墳時代 勾玉出土状態

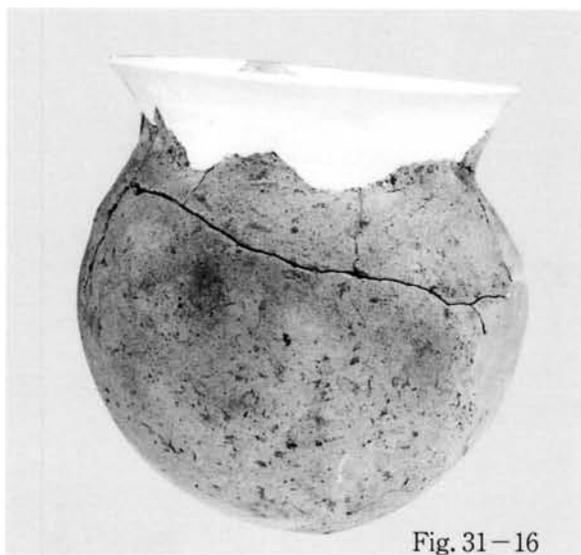
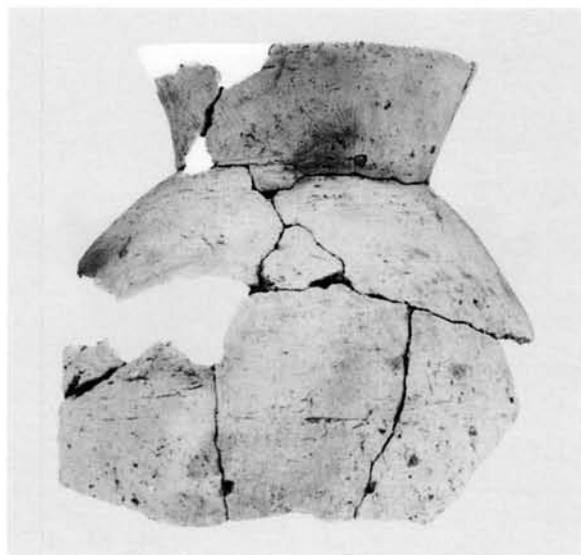


Fig. 31-16

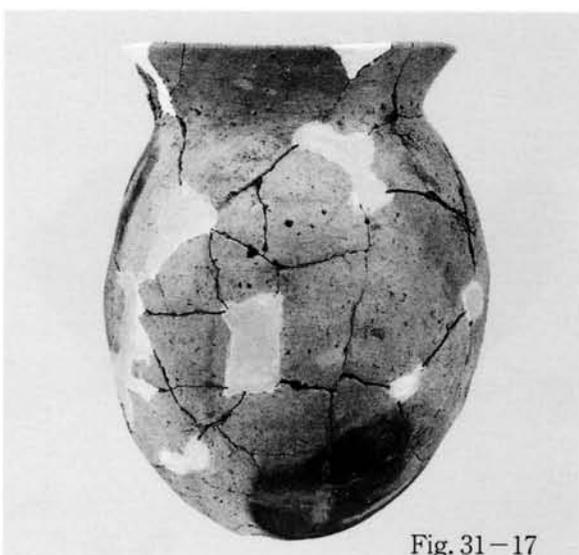


Fig. 31-17

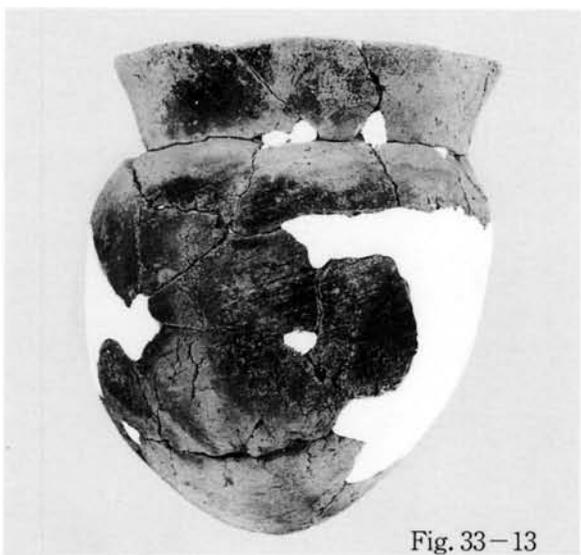


Fig. 33-13

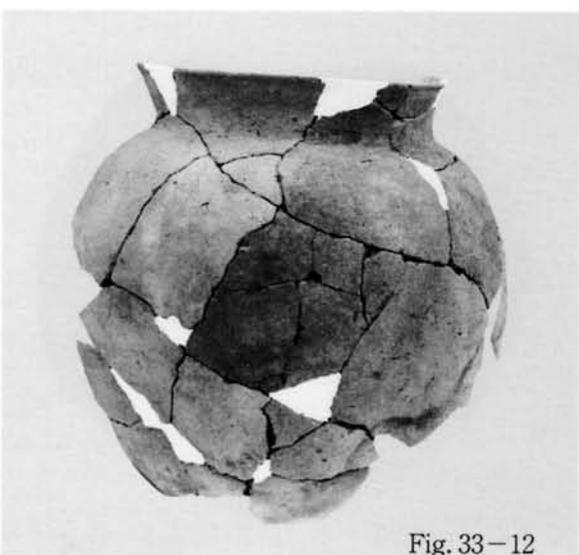


Fig. 33-12

第 I 区甕



Fig. 33-4



Fig. 33-5

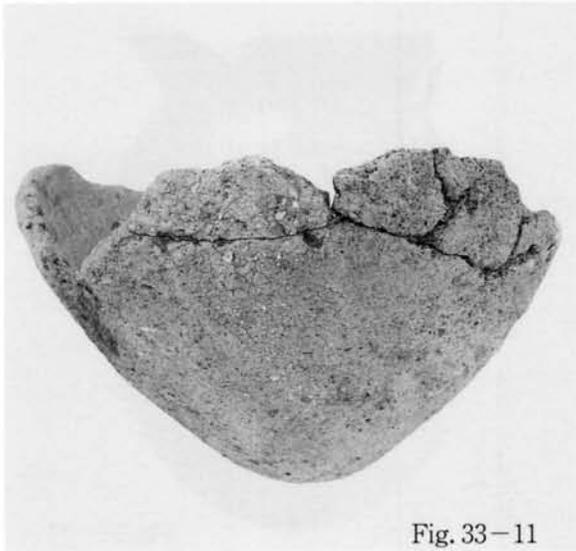


Fig. 33-11

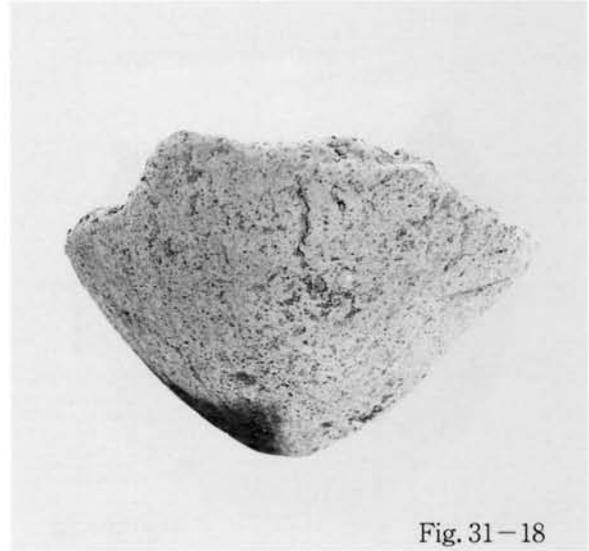
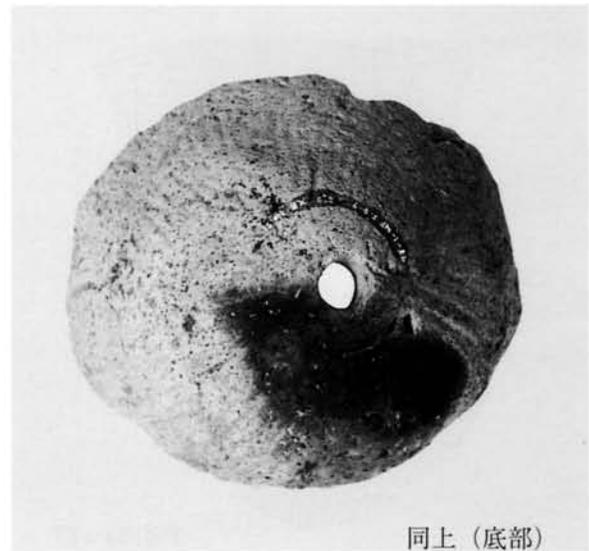


Fig. 31-18



同上 (底部)



同上 (底部)



Fig. 31-8

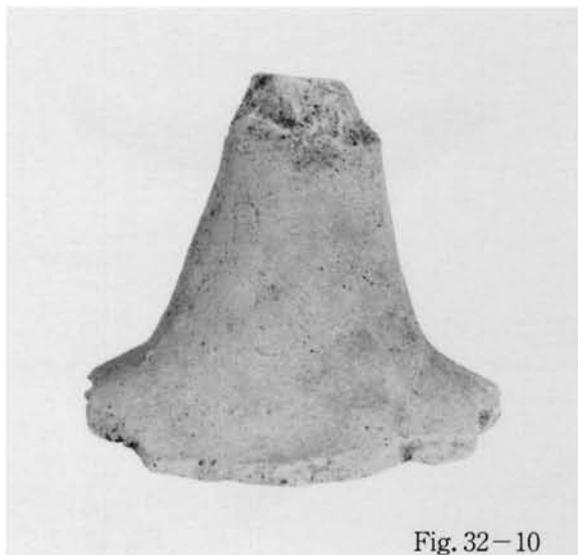


Fig. 32-10

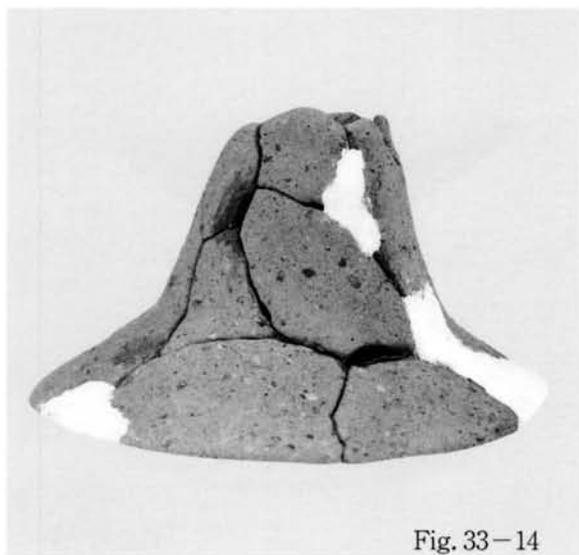


Fig. 33-14



Fig. 33-8

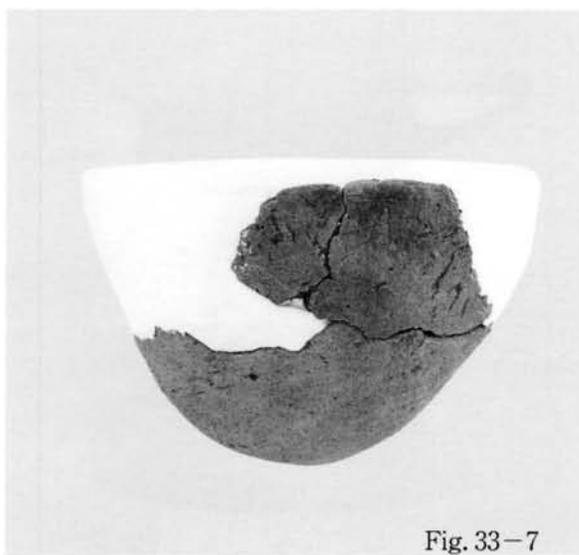


Fig. 33-7

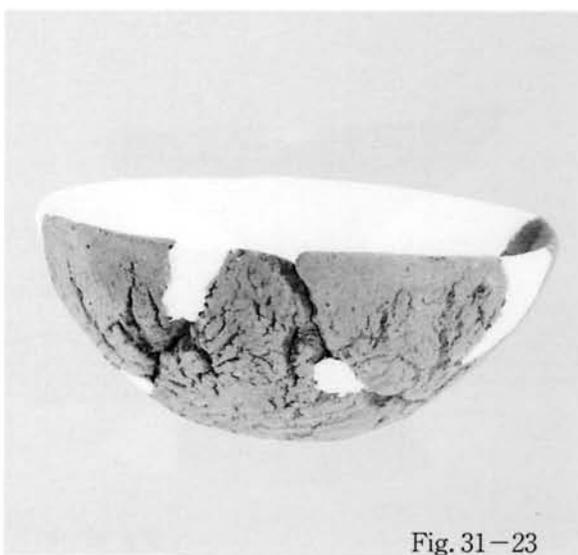


Fig. 31-23

第 I 区高坏・鉢 SR2出土遺物



Fig. 32-7



Fig. 32-12



Fig. 32-5



Fig. 32-9



Fig. 32-6



Fig. 32-4



Fig. 31-2



Fig. 32-11



Fig. 31-32

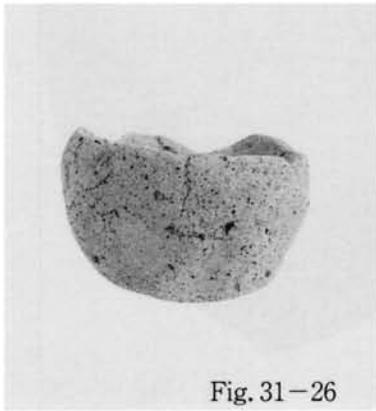


Fig. 31-26

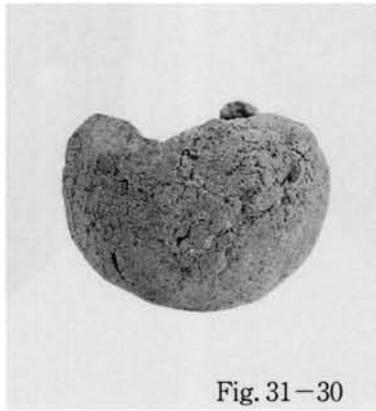


Fig. 31-30

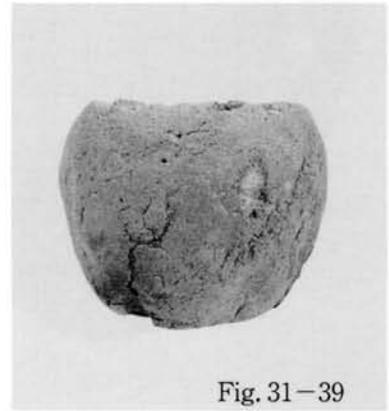


Fig. 31-39



Fig. 31-33

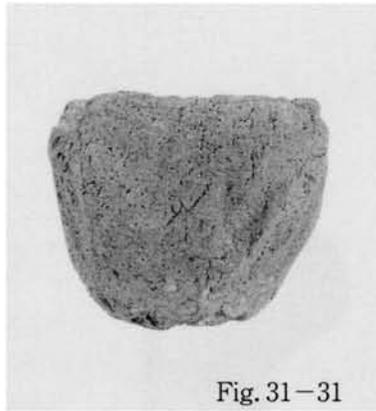


Fig. 31-31

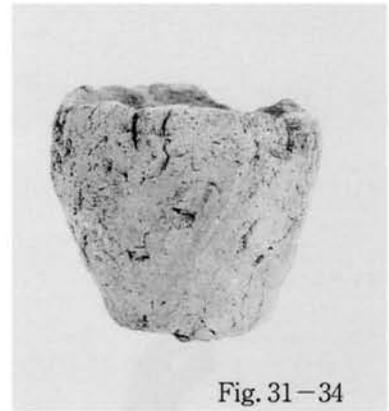


Fig. 31-34



Fig. 31-35 (表)



同左 (裏)



Fig. 34-7

第 I 区壺・高坏・手捏ね土器・土製模造鏡

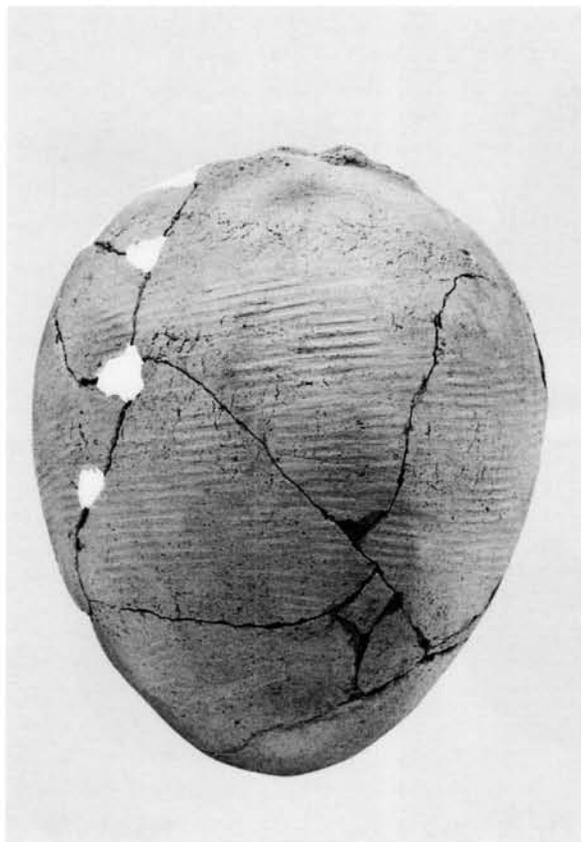


Fig. 87-26

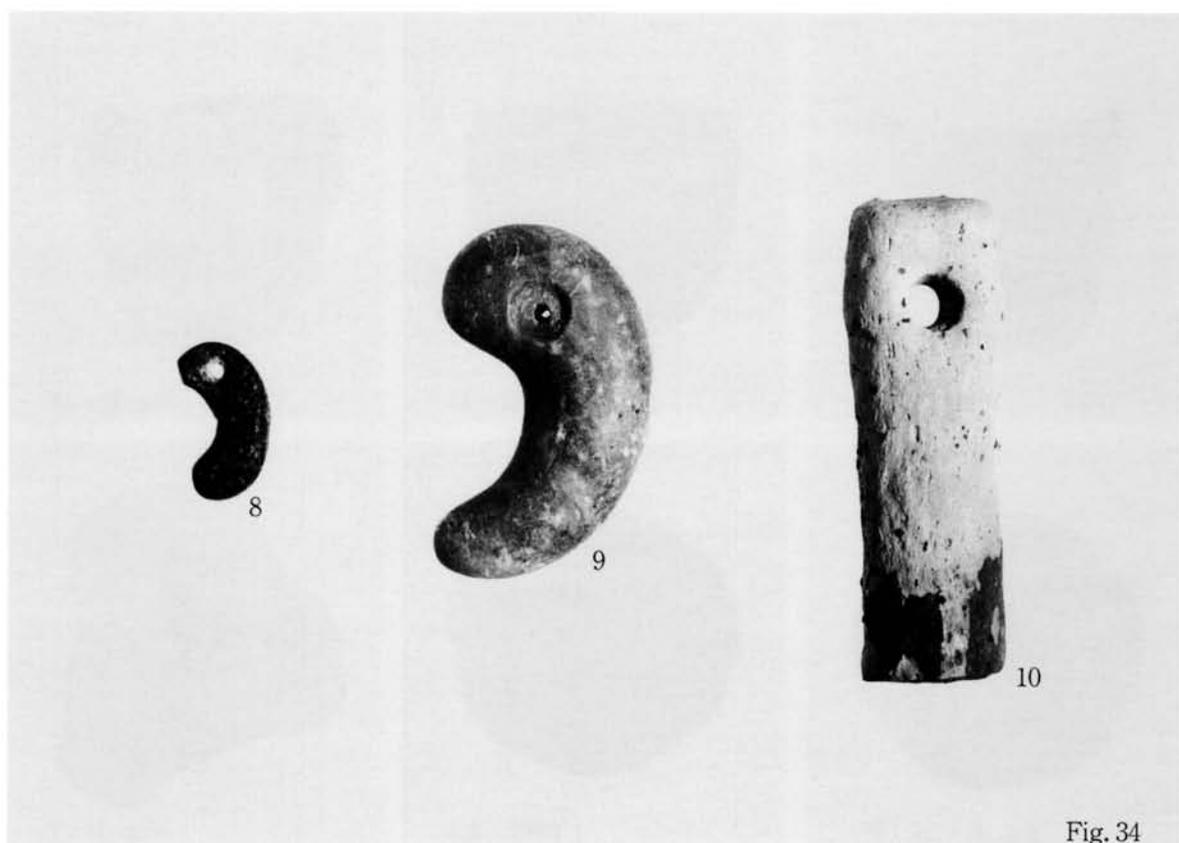
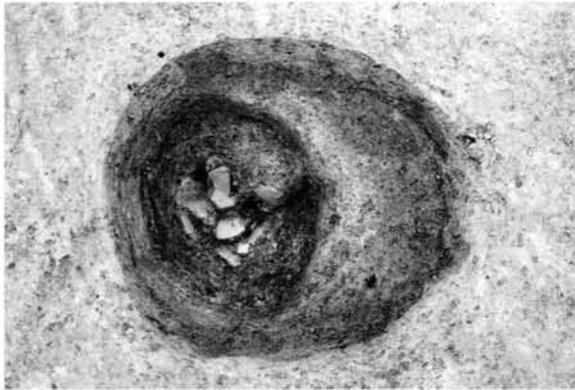


Fig. 34



土師質土器



青磁碗



備前插鉢



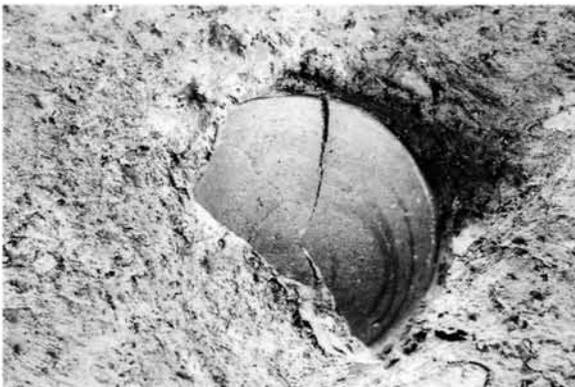
石碇



SR1 瓦器碗



SR1 瓦器碗 (墨書)



SR1 瓦器碗
ピット、SR1遺物出土状態



SR1 瓦器碗、木製品



土師器坏



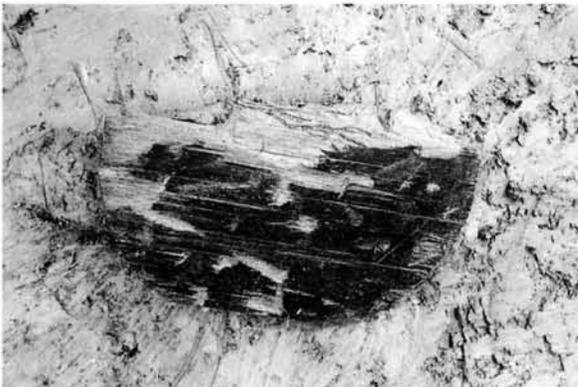
土師器



漆器



人形



曲物



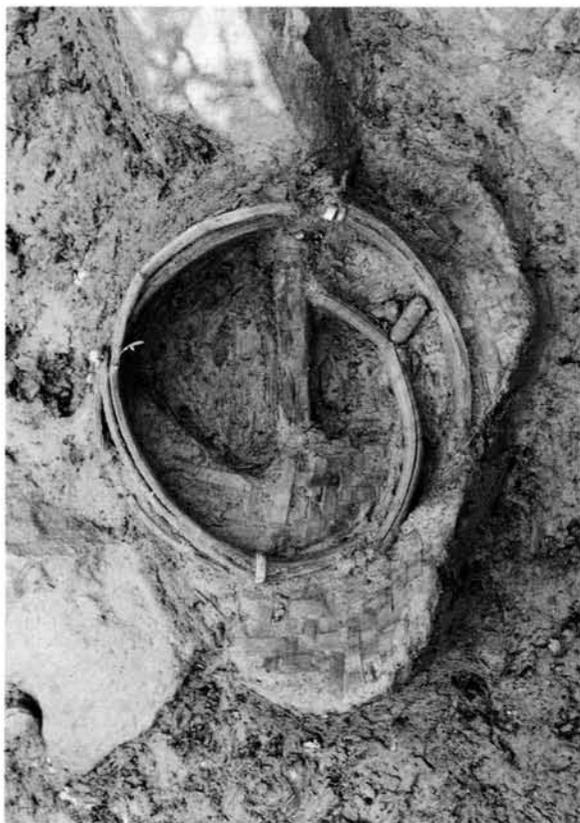
籠



漆器
SR1遺物出土状態



籠



籠



下駄



下駄
SR1木製品出土状態



呪符



SR1 須恵器甕



SR1 須恵器鉢 (東播磨系)



SR2 土師器、須恵器坏



SR2 土師器坏、須恵器鉢



SR2 須恵器坏



SR2 須恵器蓋

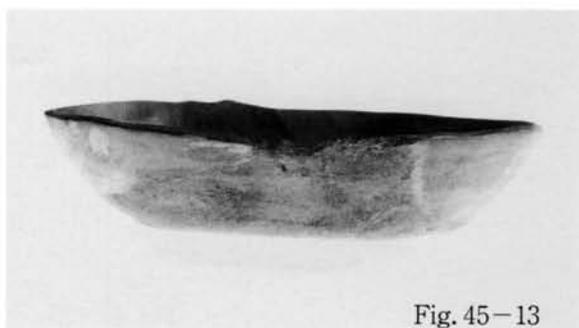
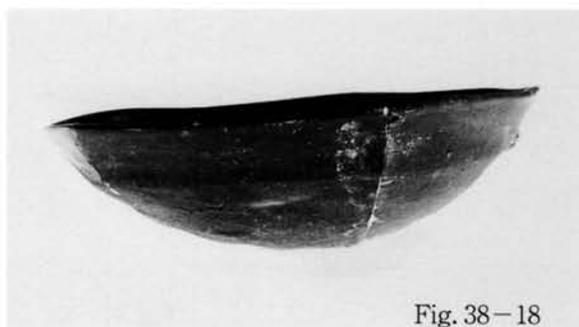
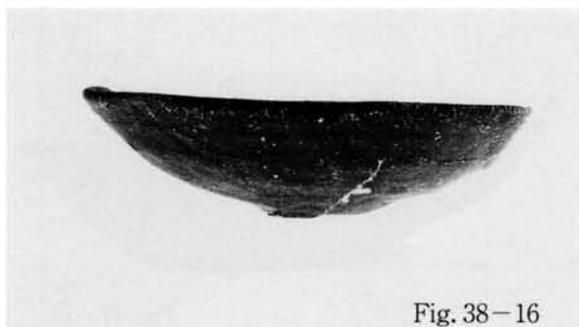
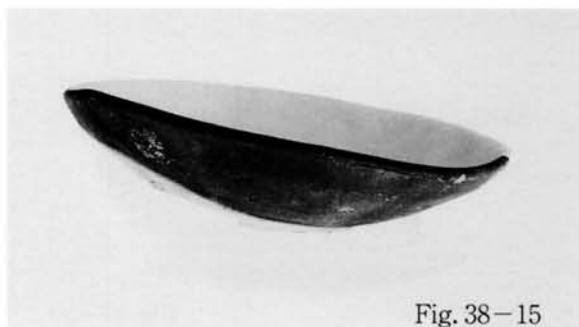
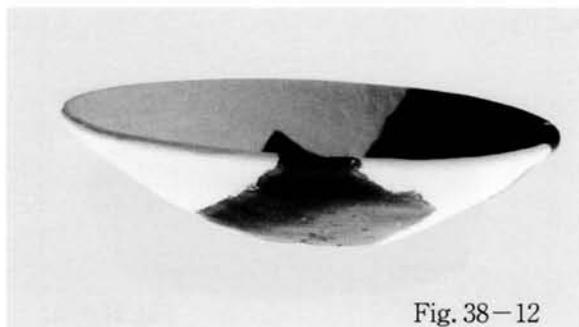
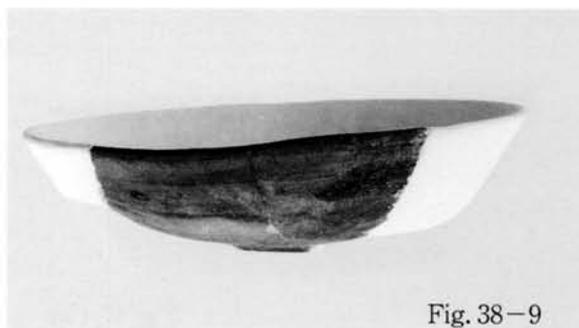
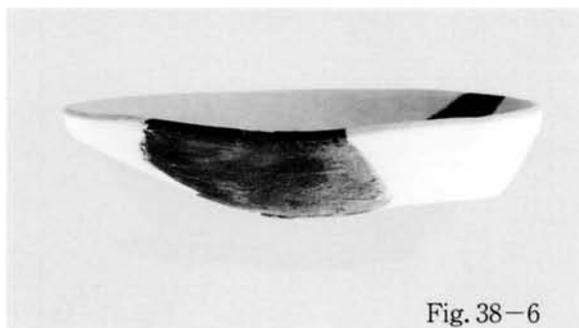
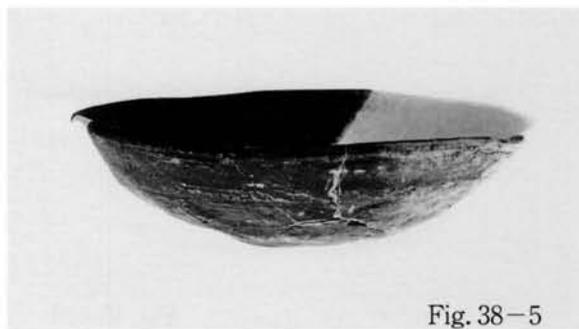
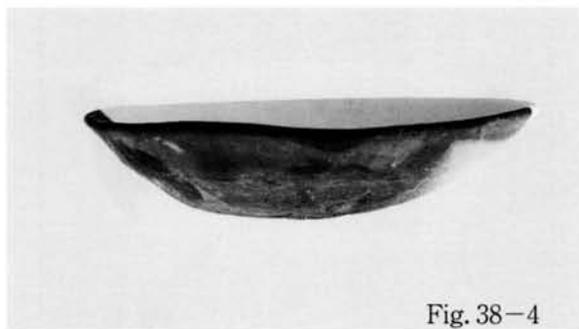


SR2 土師器、坏、須恵器壺



SR2 須恵器鉢 (京都篠窯)

SR1・2遺物出土状態



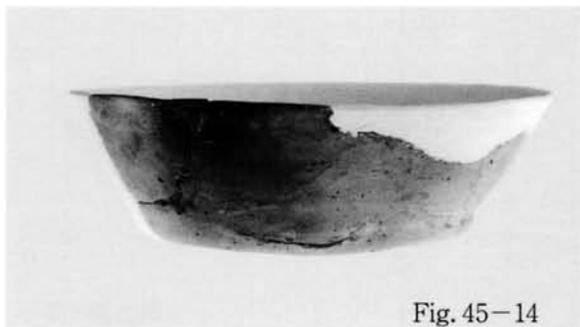


Fig. 45-14

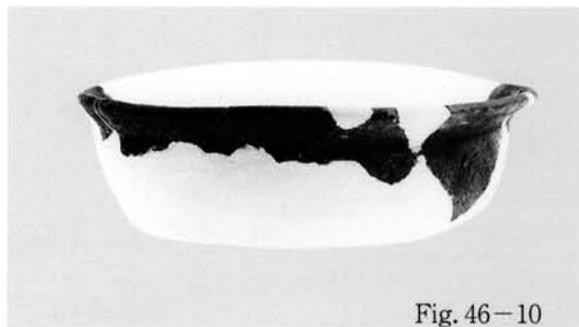


Fig. 46-10

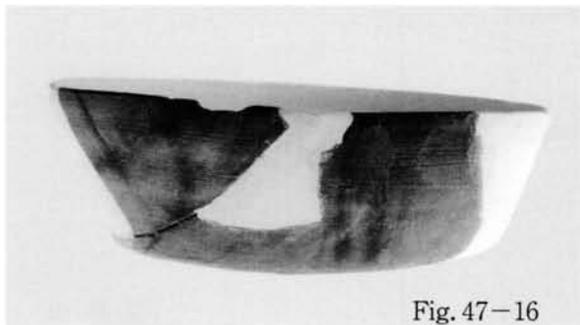


Fig. 47-16



Fig. 47-19

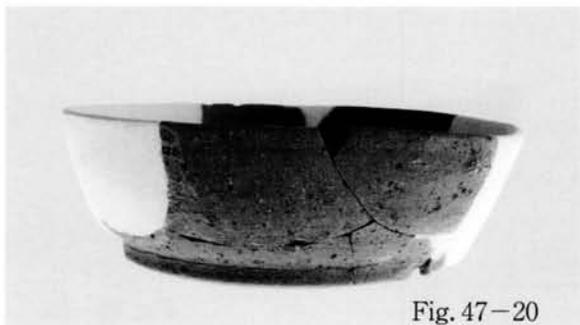


Fig. 47-20



Fig. 47-21

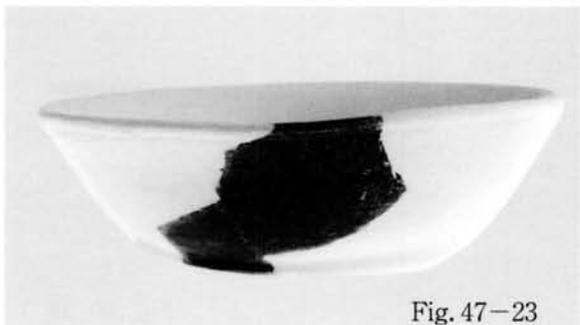


Fig. 47-23

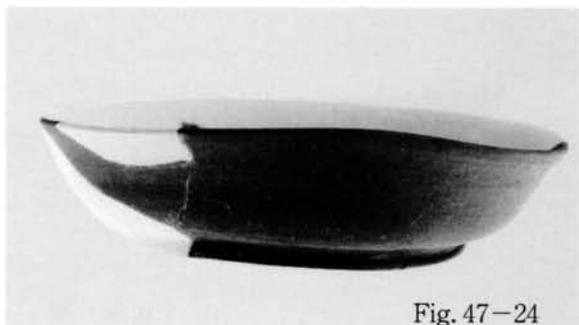


Fig. 47-24

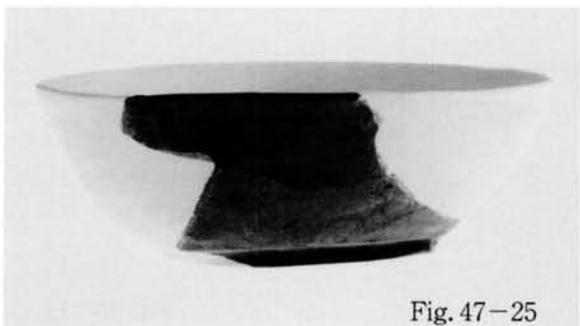


Fig. 47-25

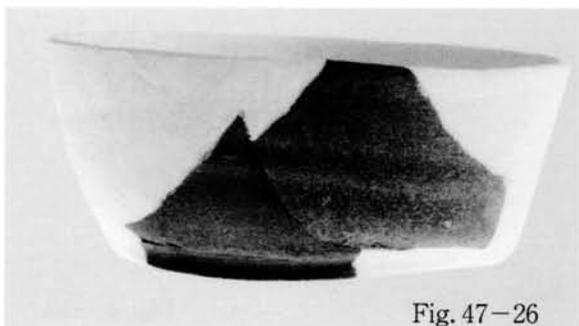


Fig. 47-26

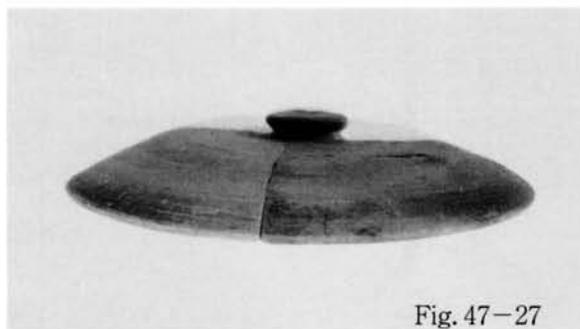


Fig. 47-27

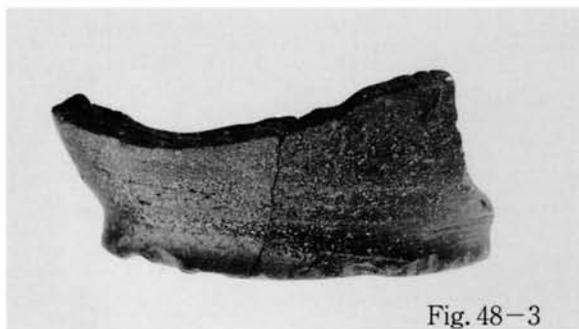


Fig. 48-3

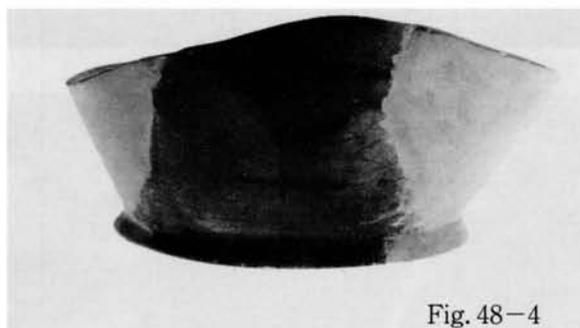


Fig. 48-4

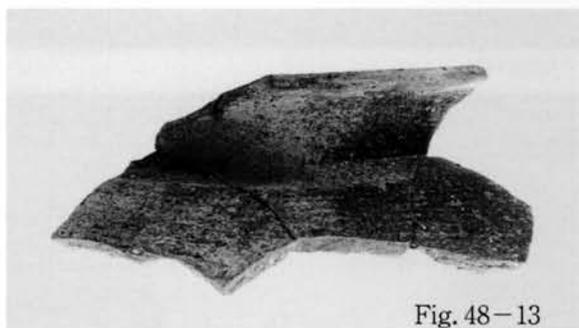


Fig. 48-13

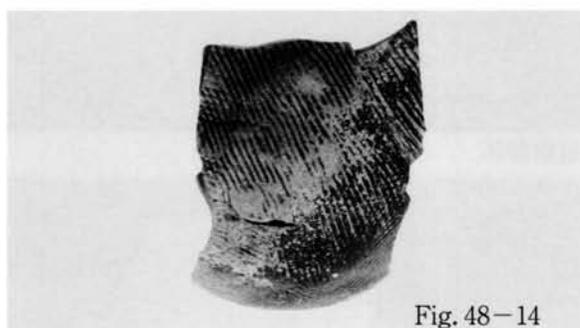


Fig. 48-14

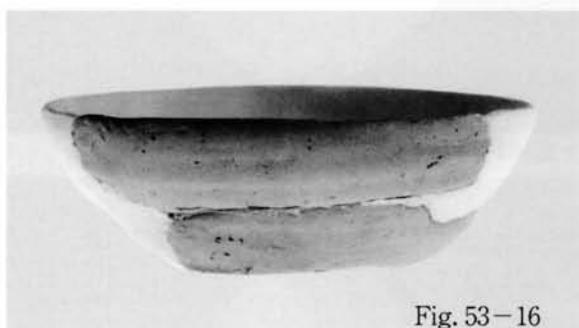


Fig. 53-16

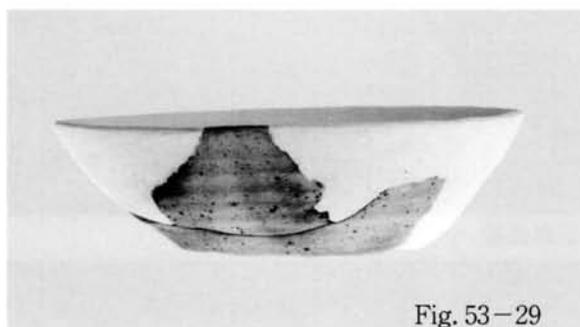


Fig. 53-29

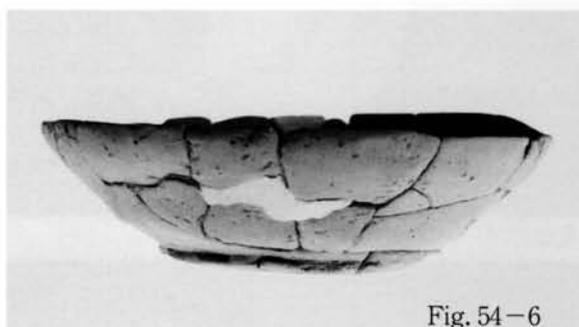


Fig. 54-6

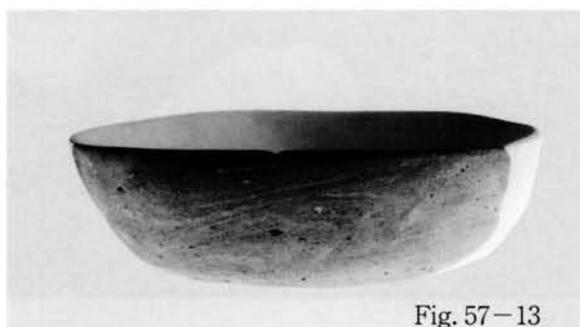


Fig. 57-13

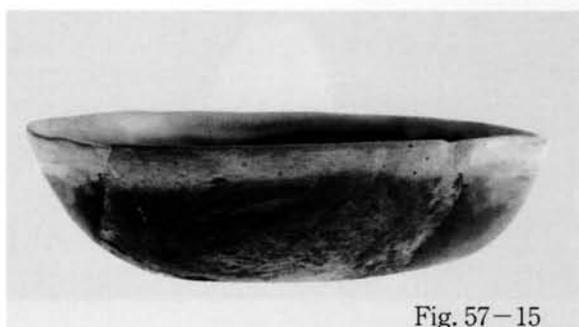


Fig. 57-15

SR2包含層出土遺物



土師器坏



土師器坏



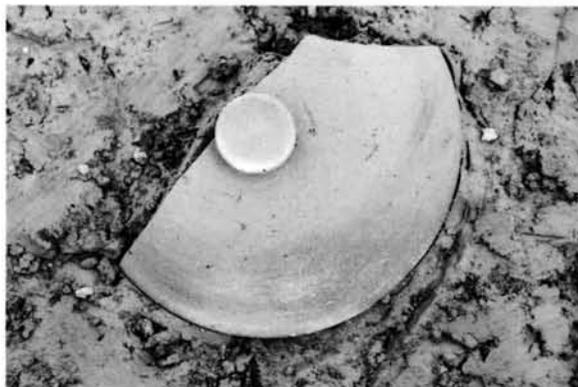
土師器坏



須恵器坏



須恵器坏



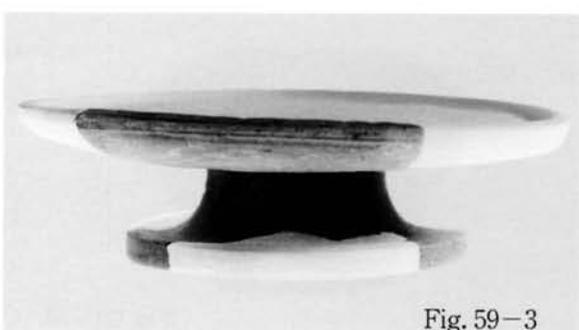
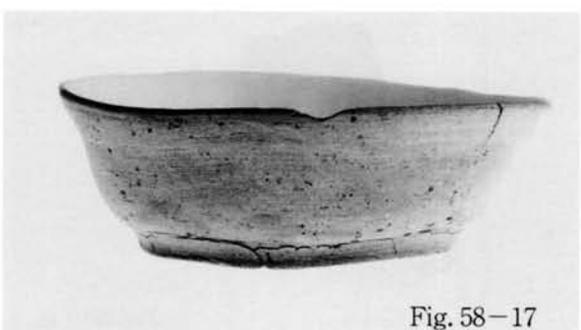
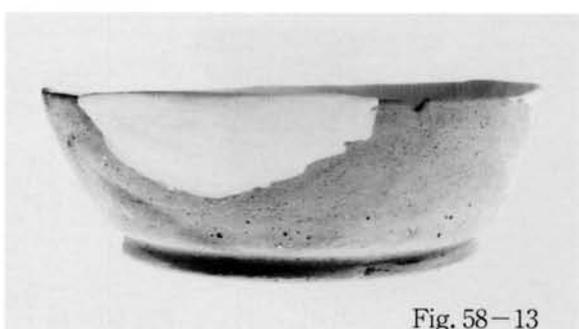
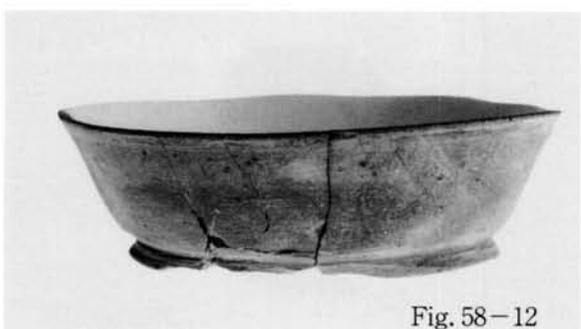
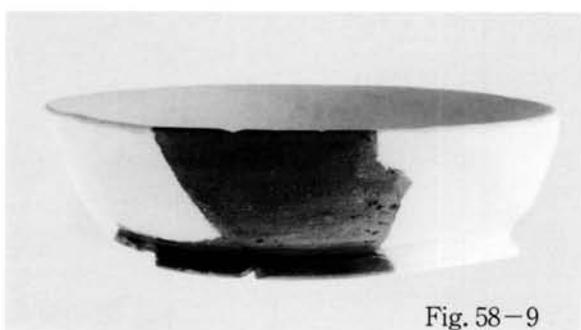
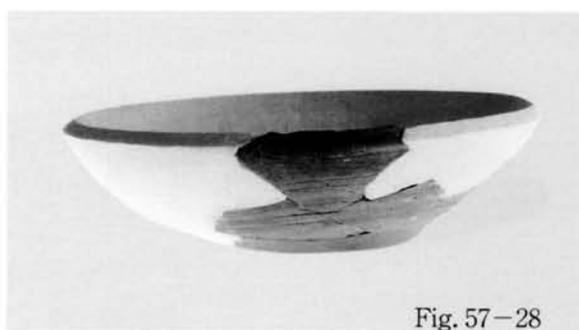
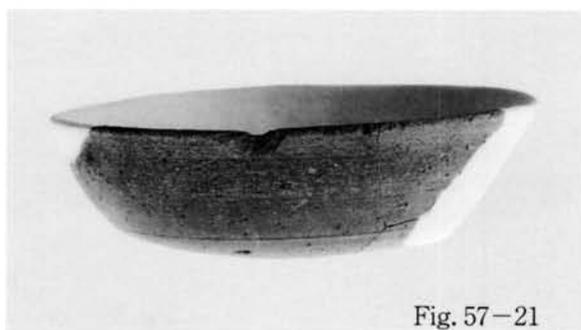
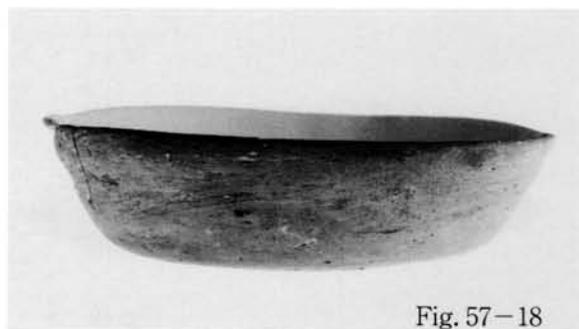
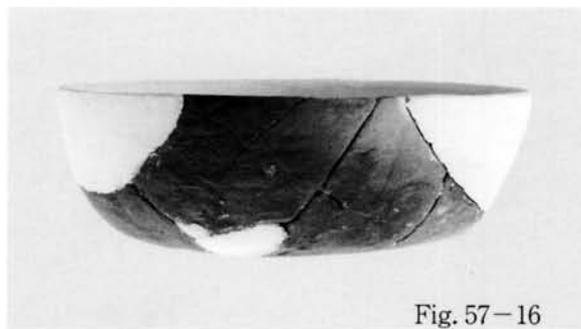
須恵器盖

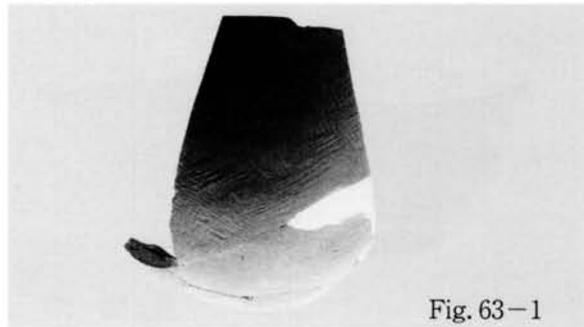
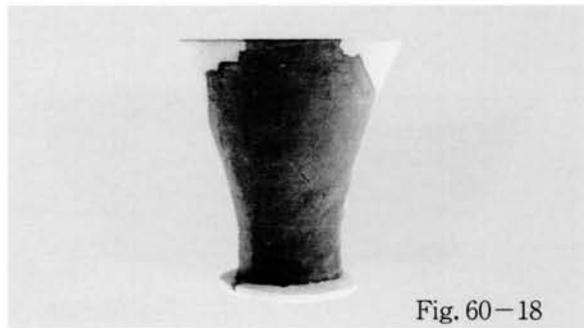
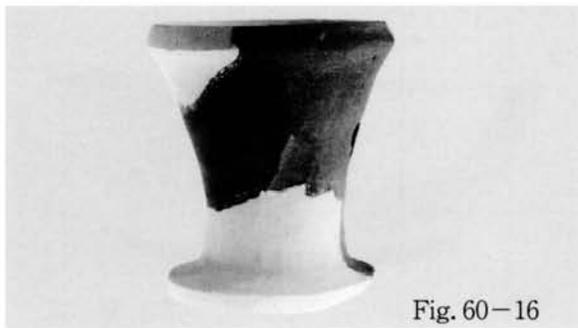
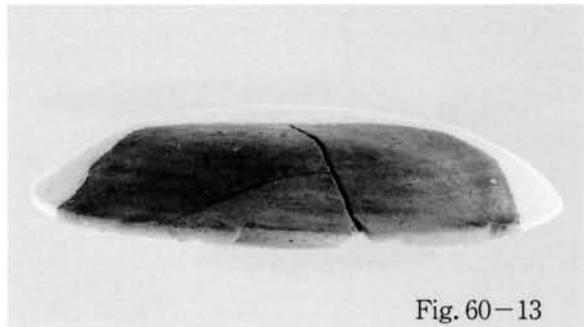
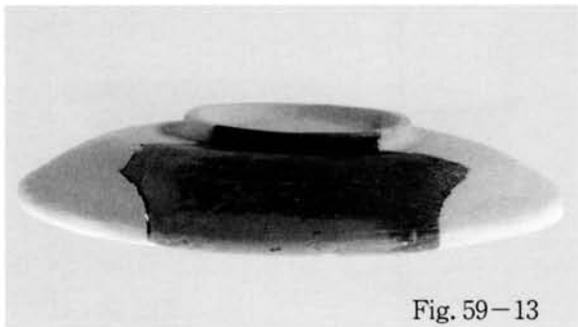
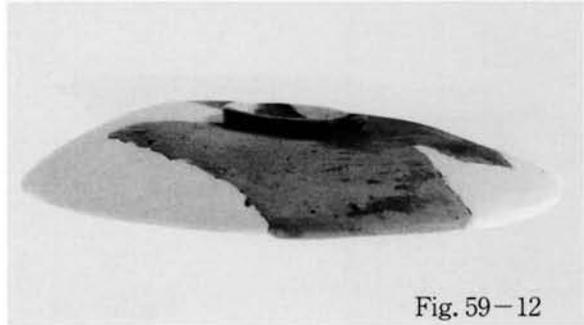
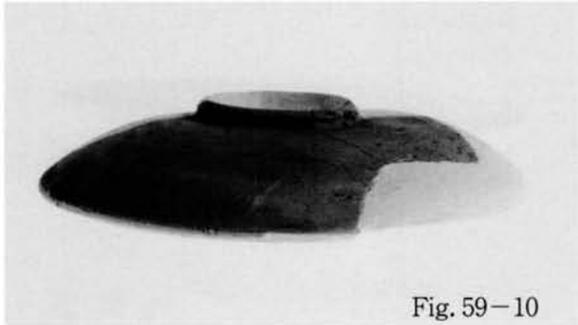
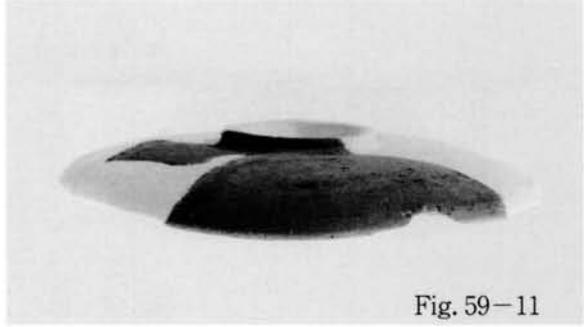
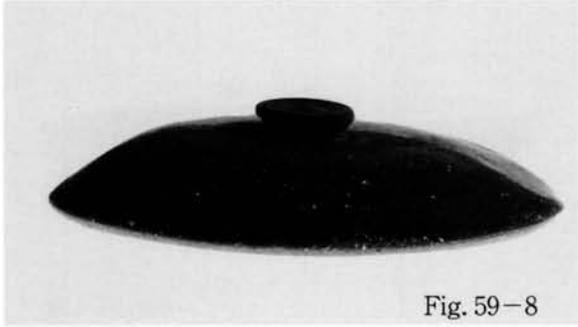


須恵器長頸壺
第I区包含層遺物出土状態



青磁







SR1 出土籠-1



SR1 出土籠-2

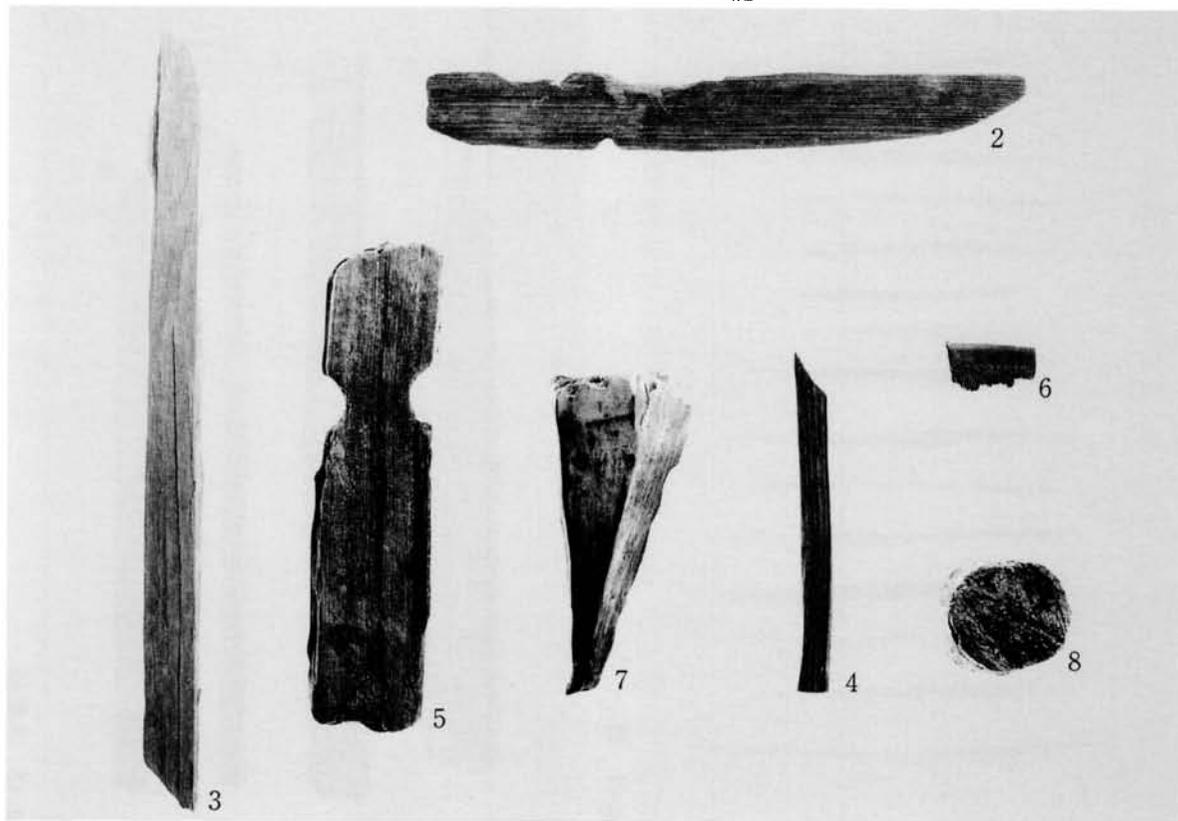


Fig. 40
SR1出土木製品 1

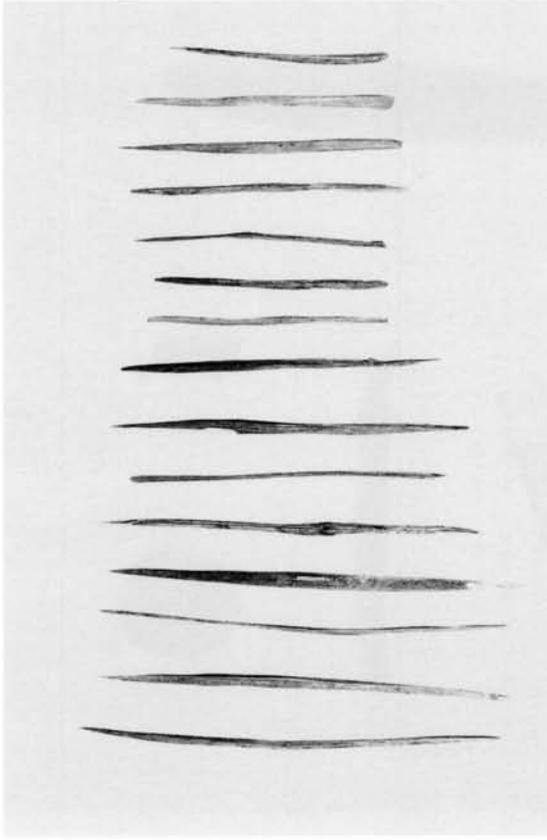


Fig. 41 簞

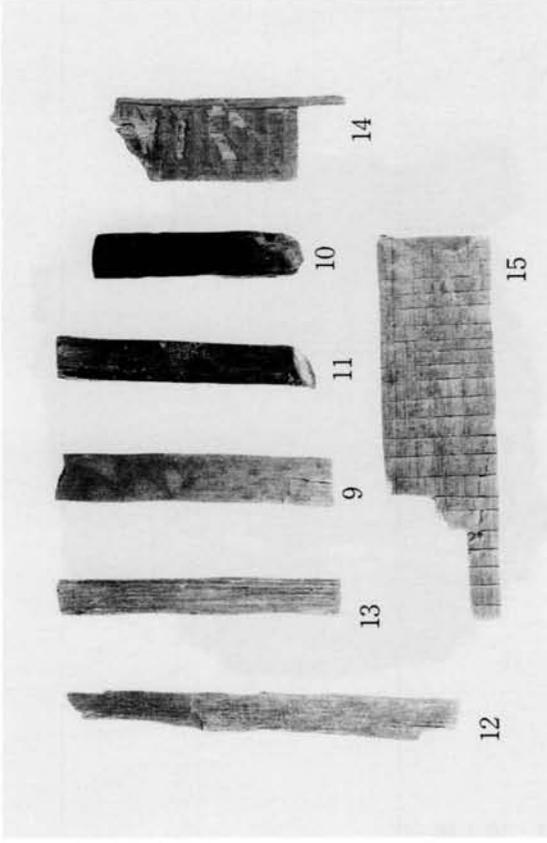


Fig. 40 木製品

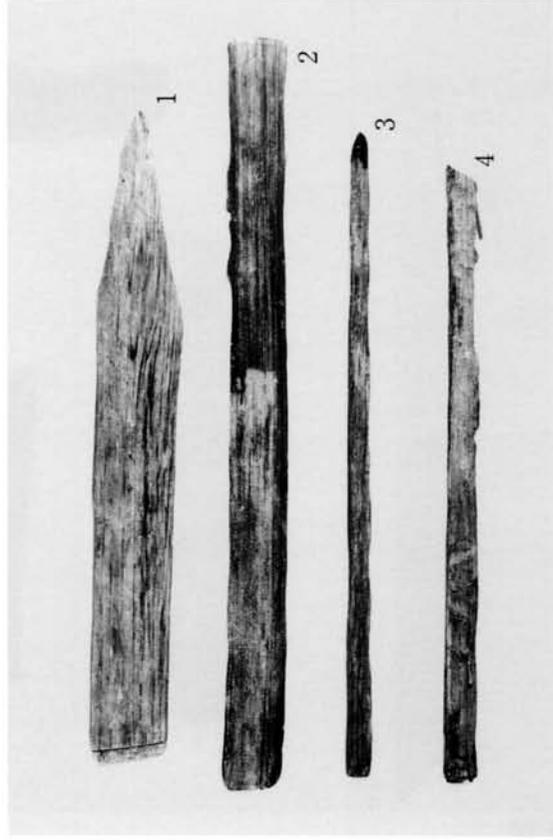


Fig. 44 木製品
SR1出土木製品 2

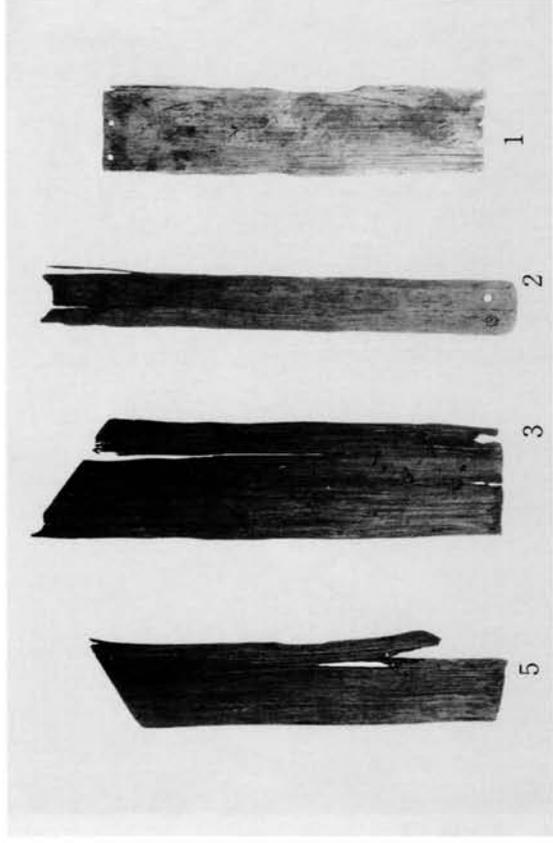


Fig. 43 木製品

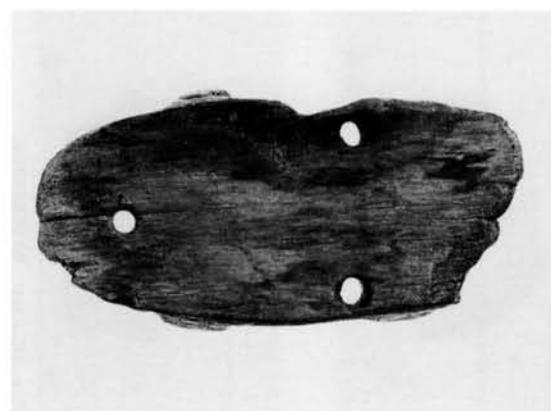
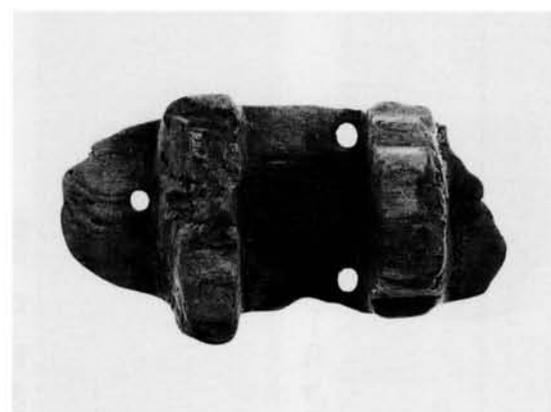
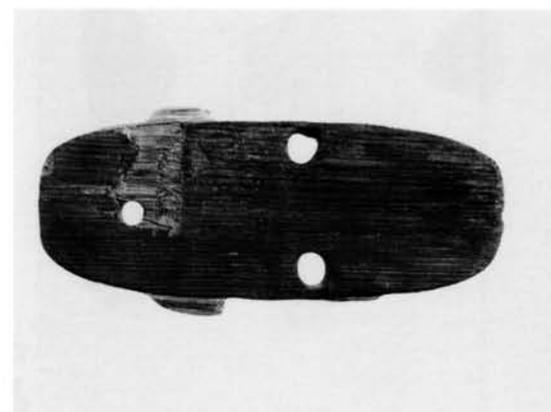
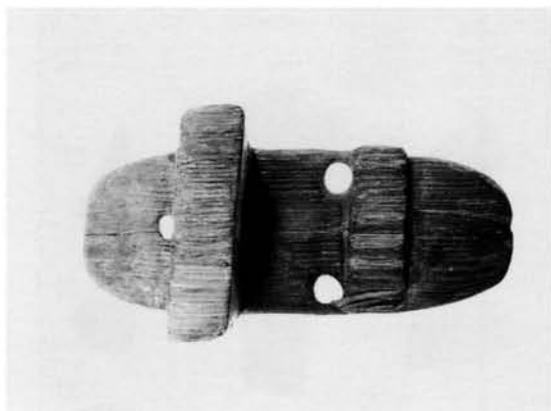
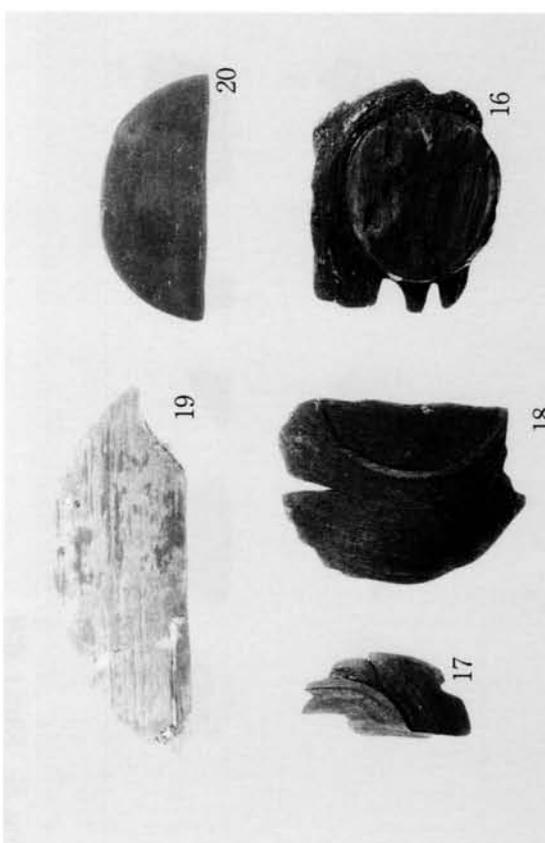
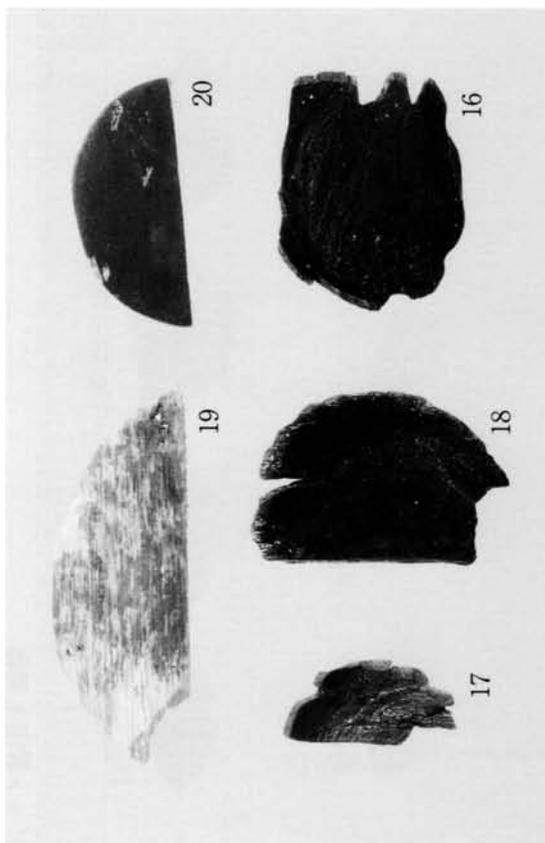


Fig. 42-2 下駄表

裏

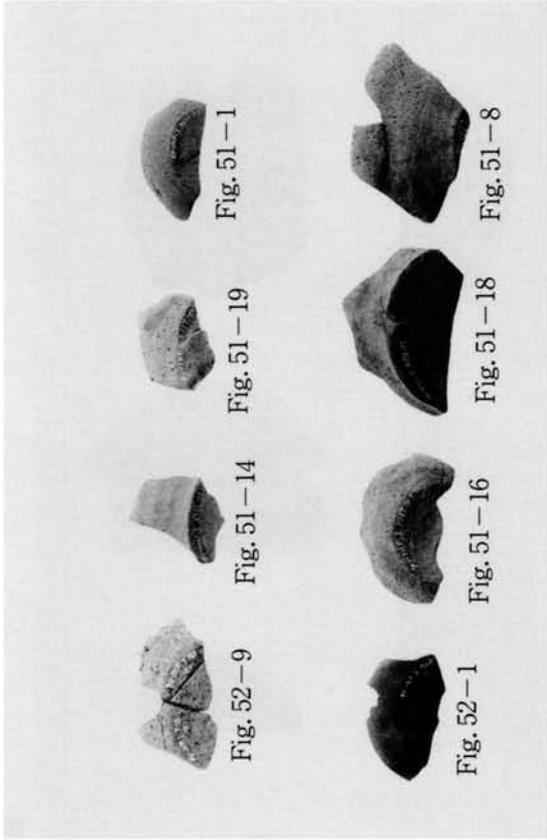
Fig. 42-3 下駄表



裏

Fig. 41-16~20 漆器16~18・曲物19・20表

SRI出土木製品 3



ピット群出土遺物

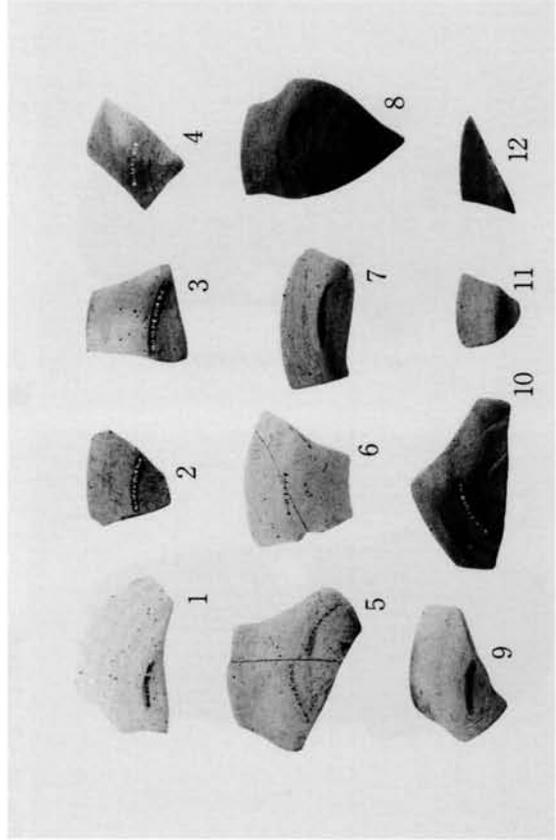


Fig. 45

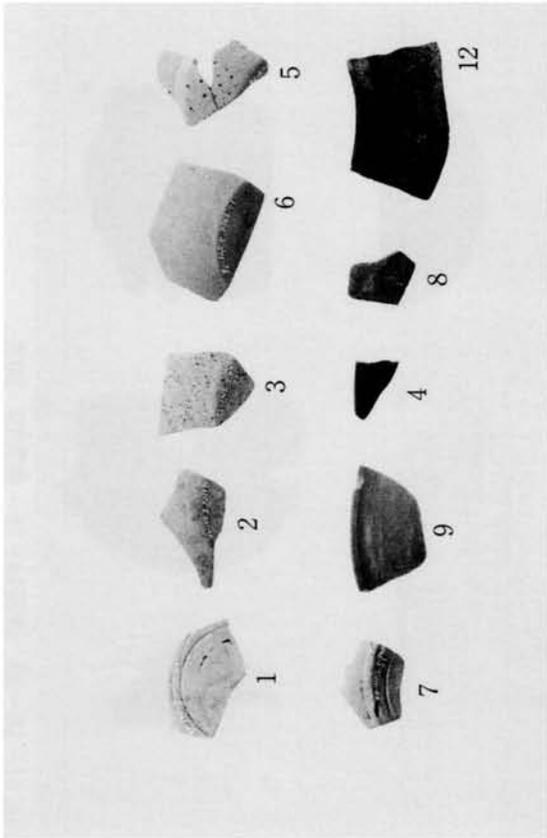


Fig. 35 SB出土遺物



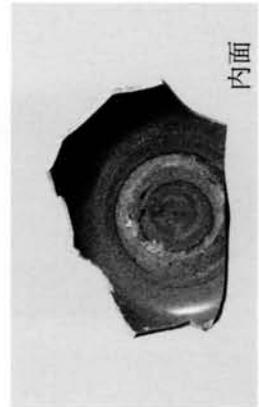
Fig. 35-11 砥石



Fig. 52-12 古銭



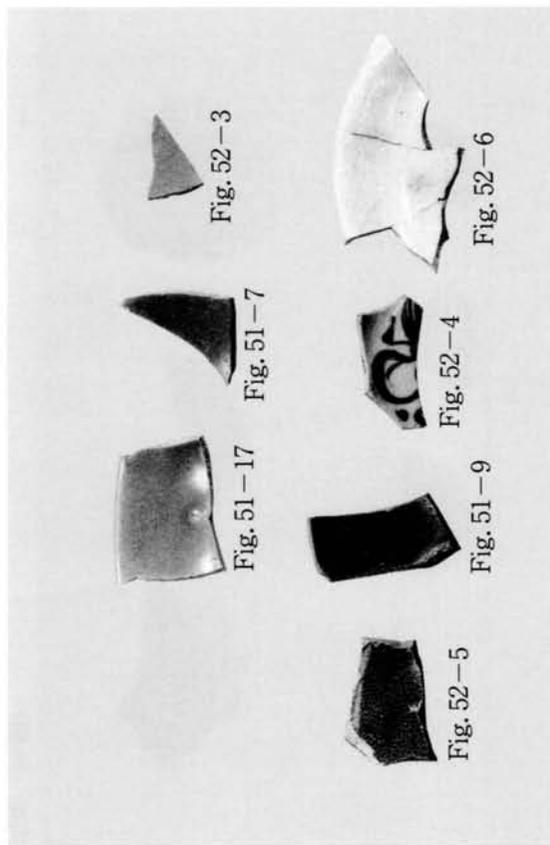
外面



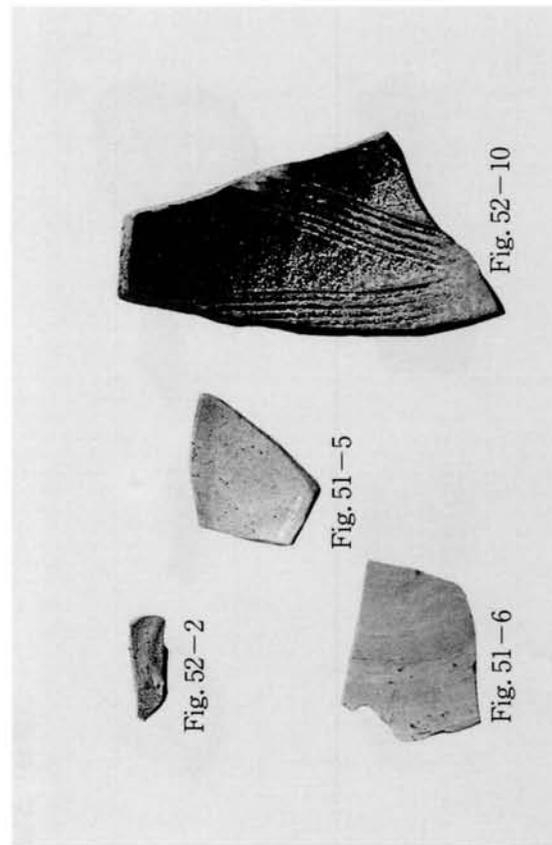
内面

Fig. 35-10 貿易陶磁器

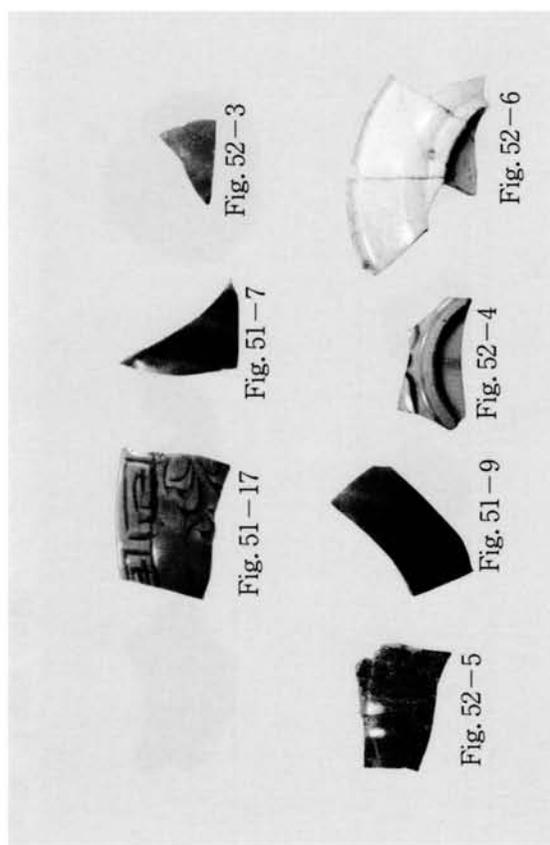
SB・SR2出土遺物



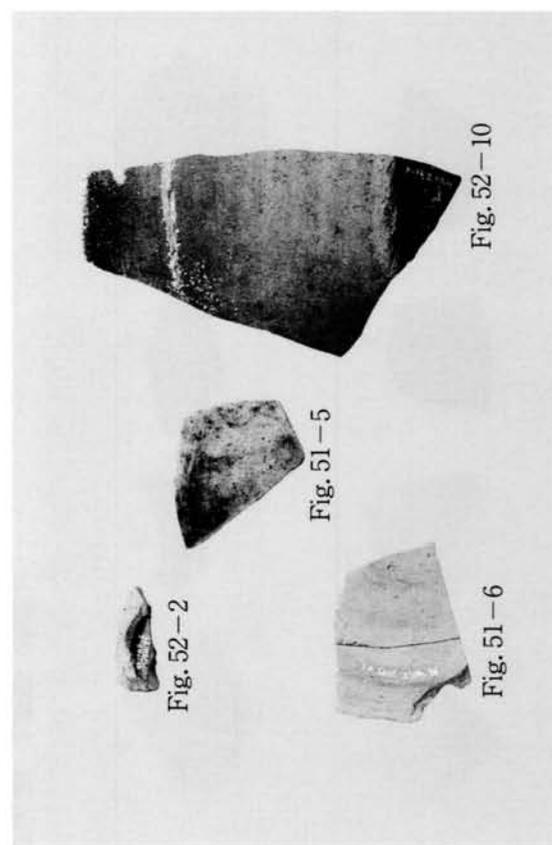
同左 (内面)



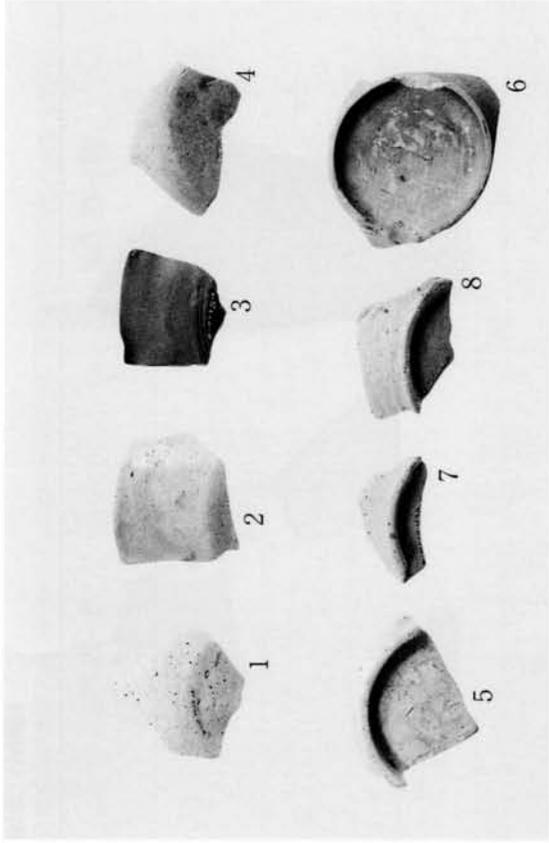
同左 (内面)



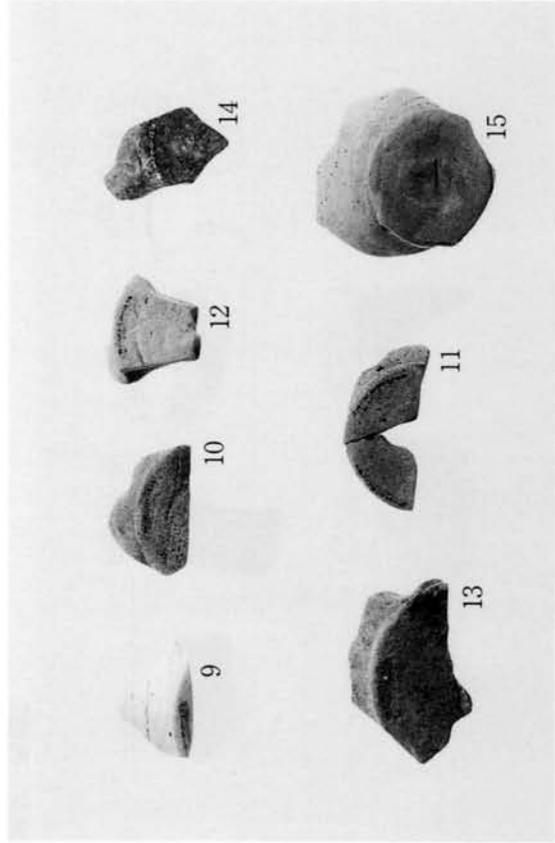
貿易陶磁器 (外面)



ピット群出土遺物 (外面)



同左 (外面)



同左 (外面)

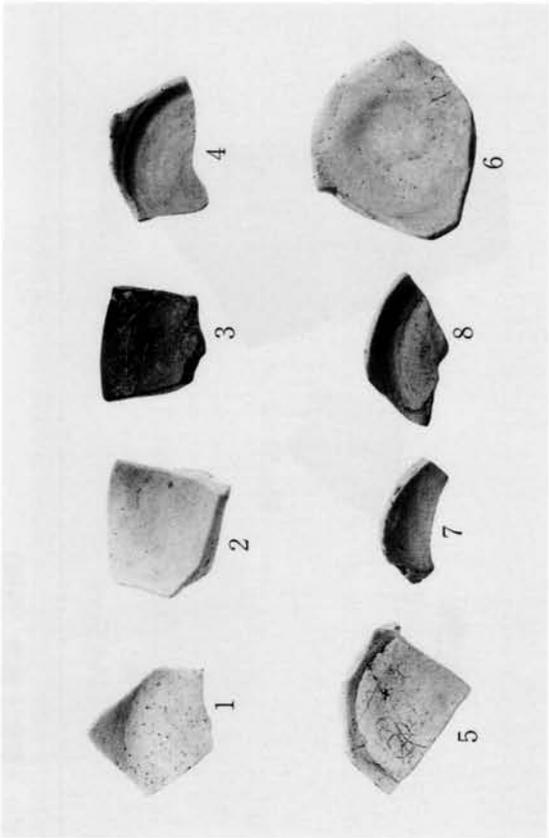


Fig. 36 土師器 (内面)

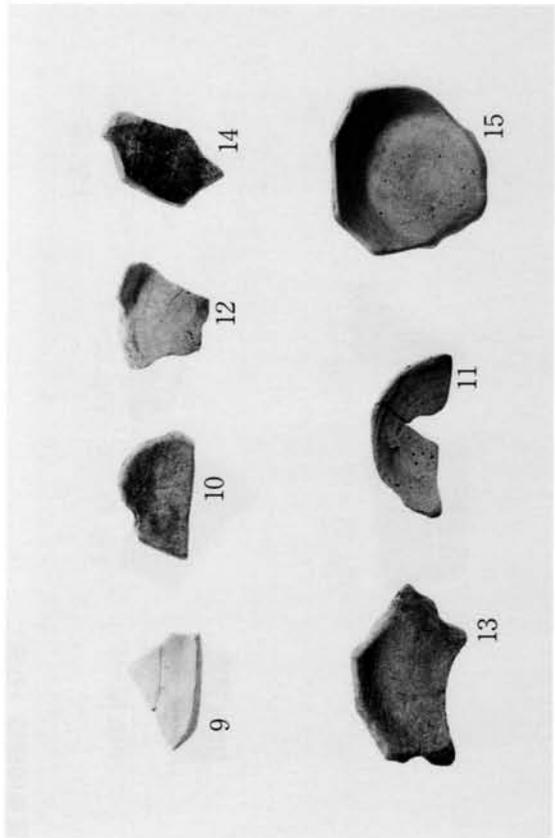


Fig. 36 土師器 (内面)
SR1出土遺物 1

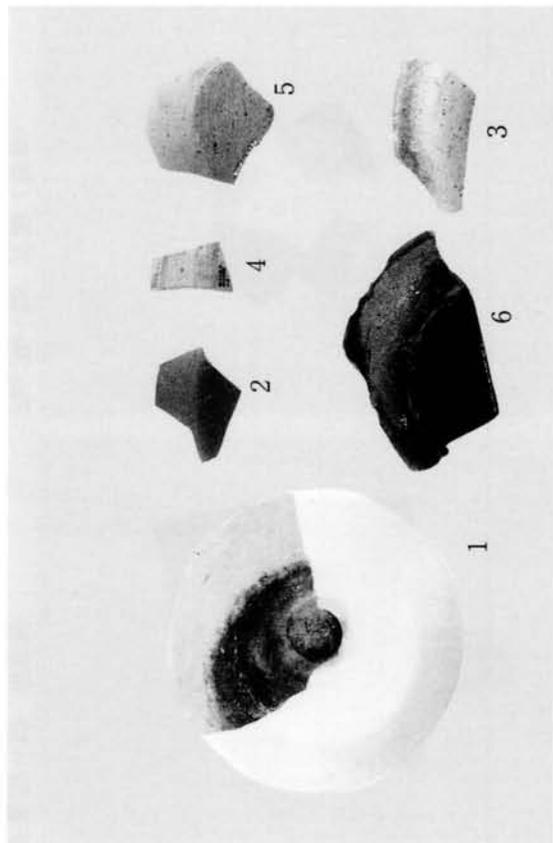


Fig. 37 須惠器

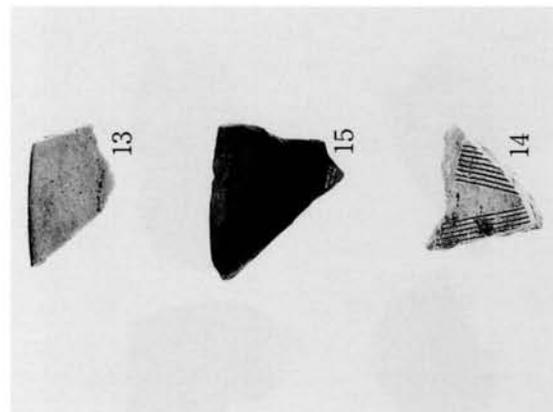


Fig. 37 須惠器・瓦質土器 (内面) 同左 (内面)

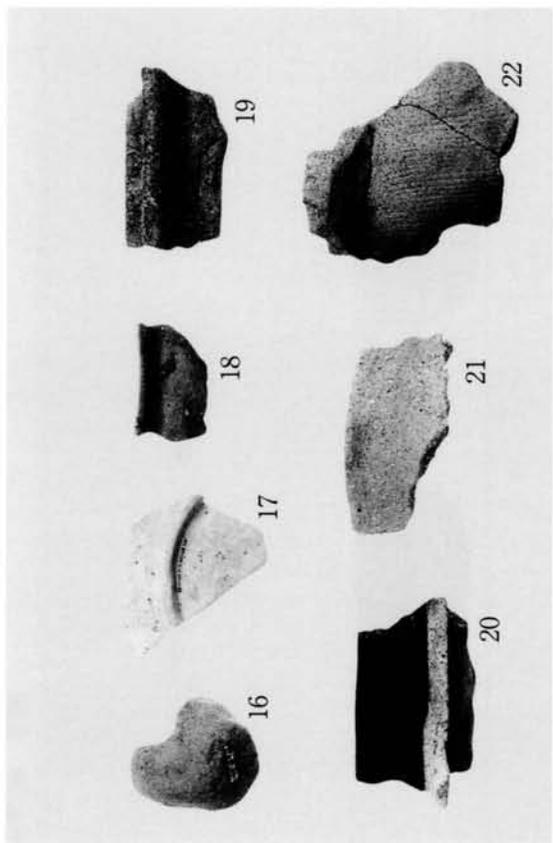


Fig. 36 土師器

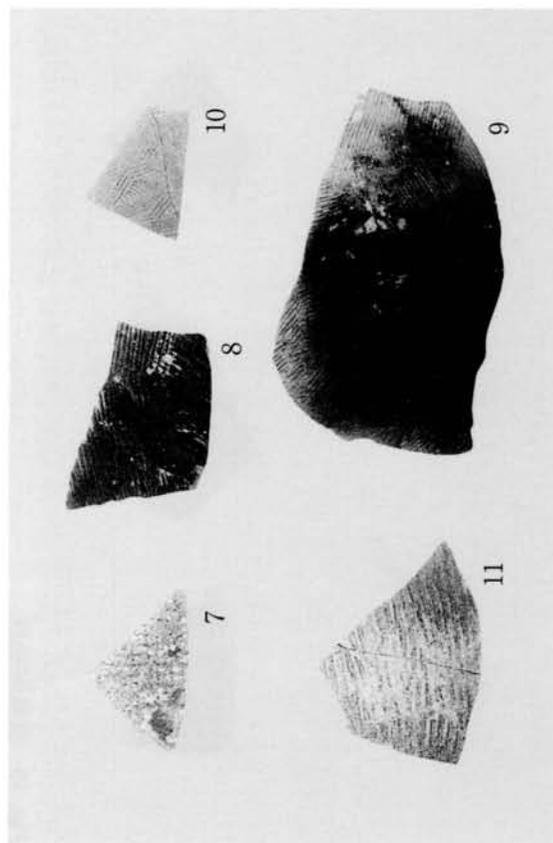


Fig. 37 須惠器 SRI出土遺物 2

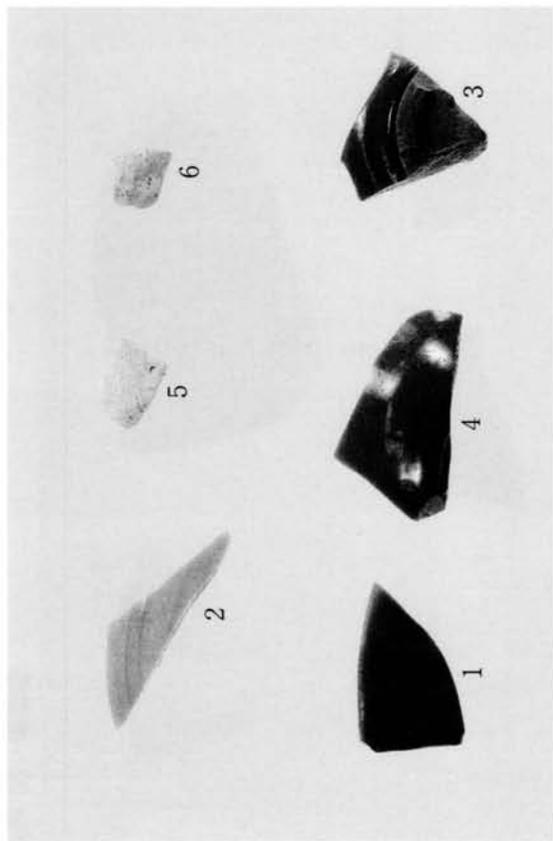


Fig. 39 貿易陶磁器

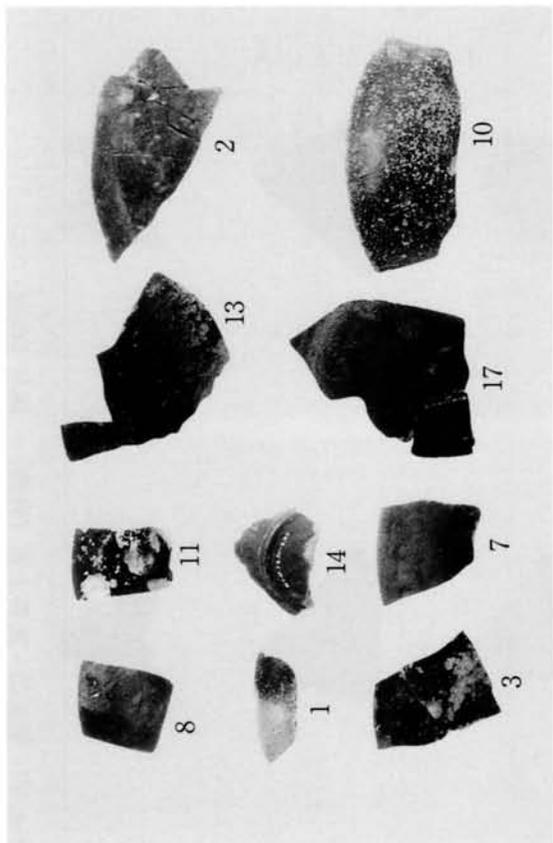


Fig. 38 瓦器

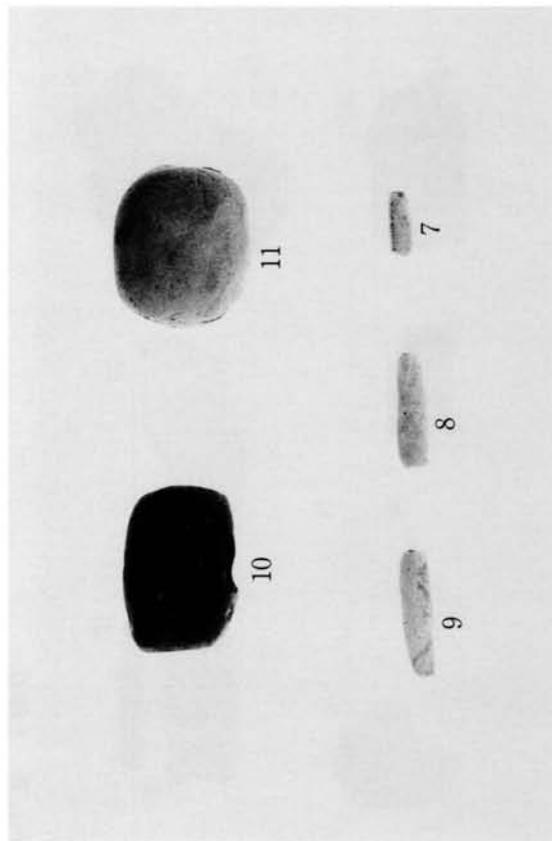


Fig. 39 土錘
SR1出土遺物 3

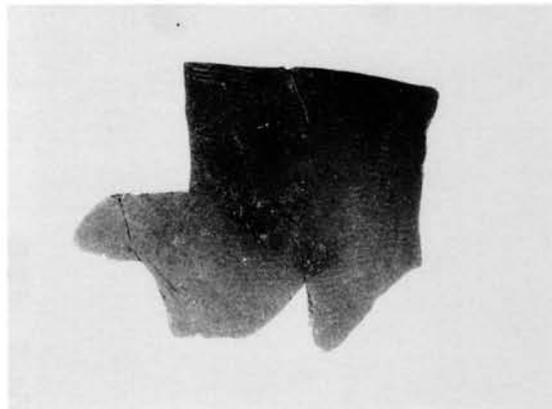


Fig. 37-12 須惠器



Fig. 38-12 瓦器 (墨書)

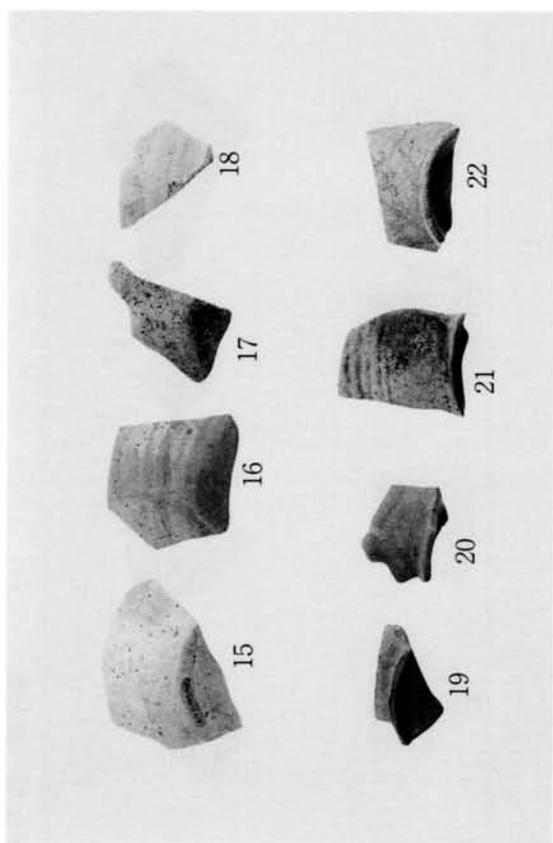


Fig. 45 土師器

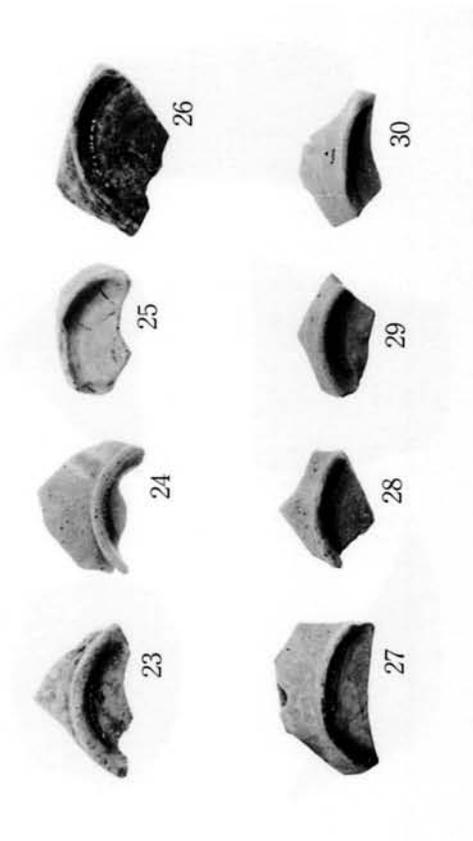


Fig. 45 土師器

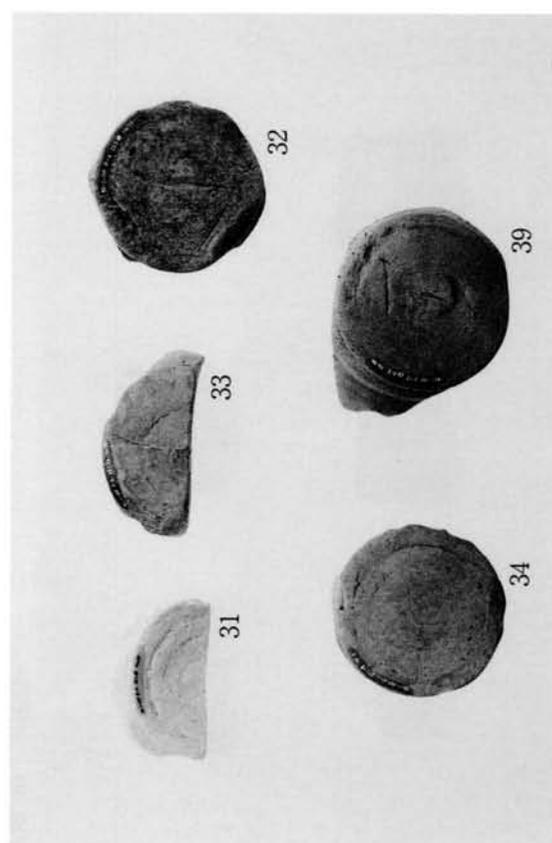


Fig. 45 土師器
SR2出土遺物 I

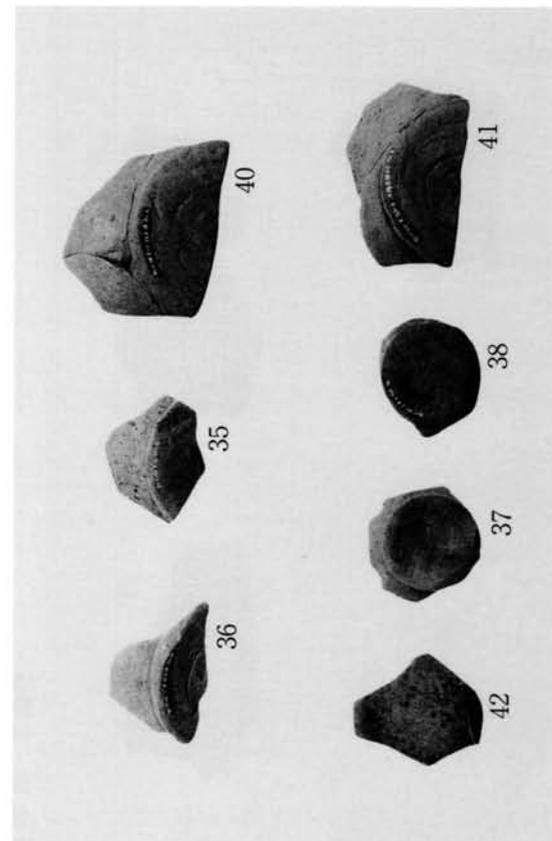


Fig. 45 土師器



Fig. 46 土師器

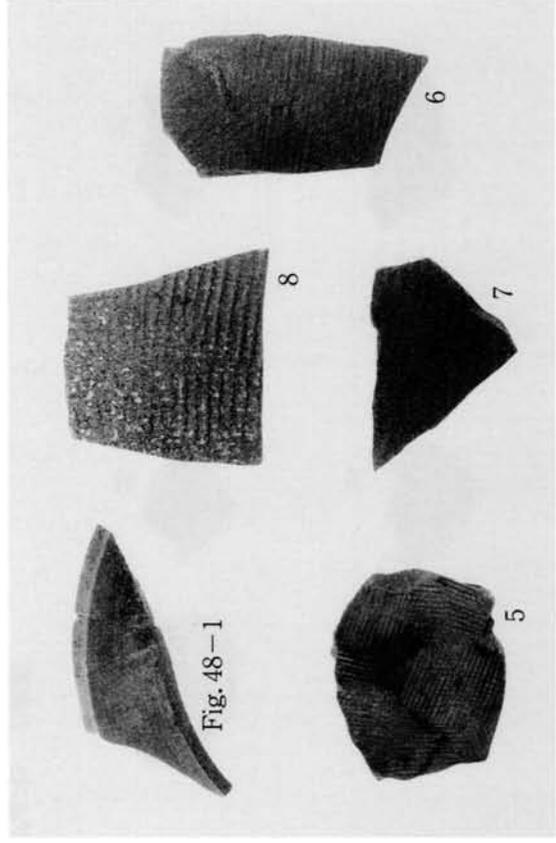


Fig. 47-5~8, Fig. 48-1 須恵器

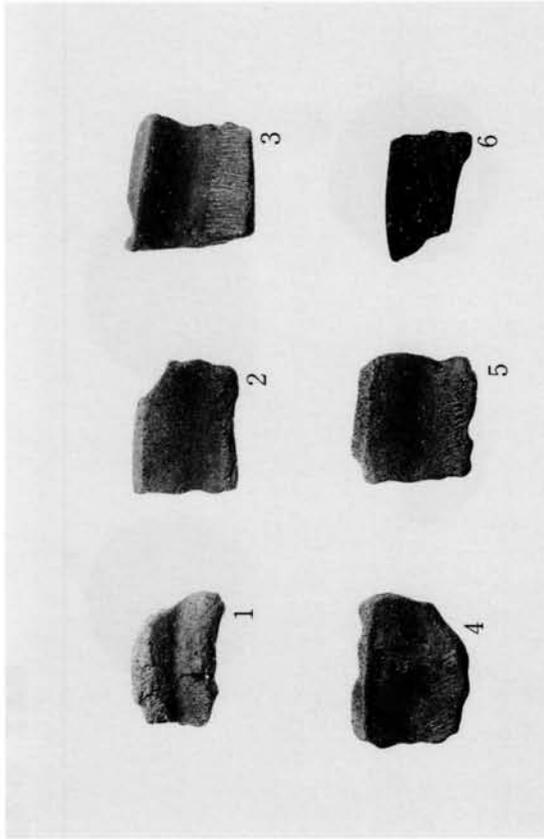


Fig. 46 土師器

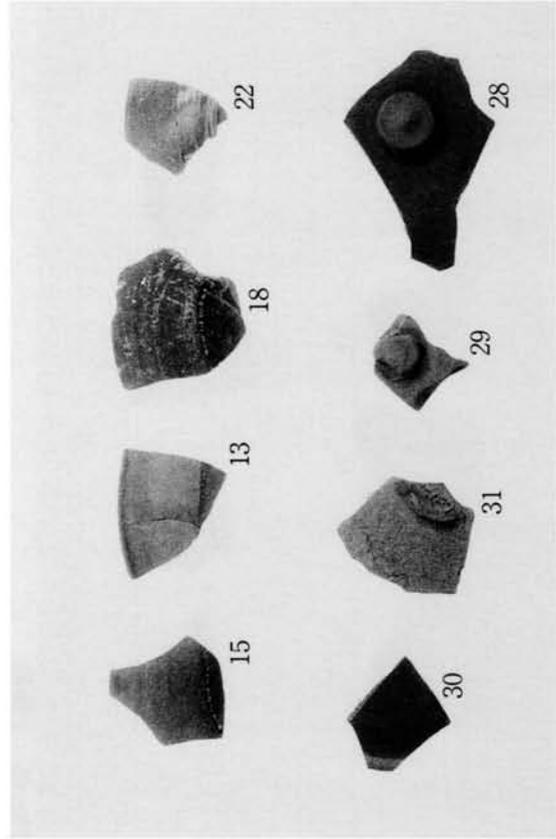


Fig. 47 須恵器
SR2出土遺物 2

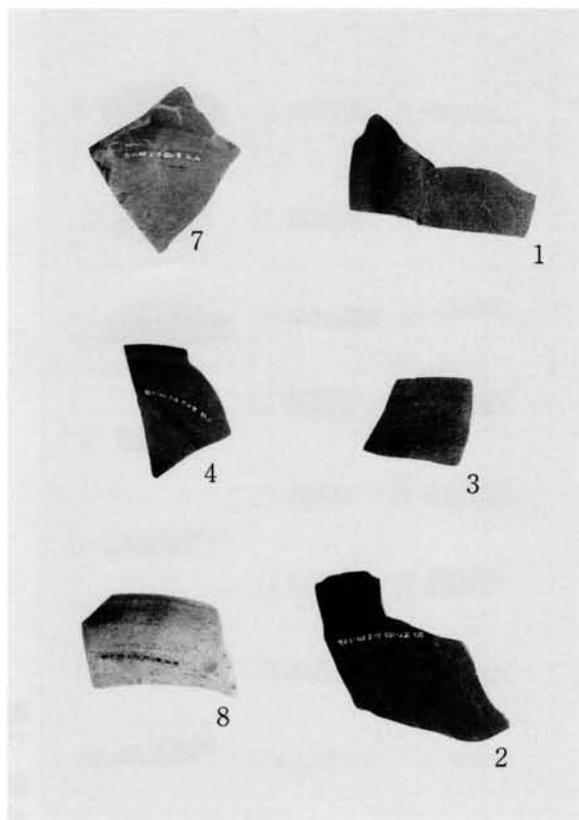
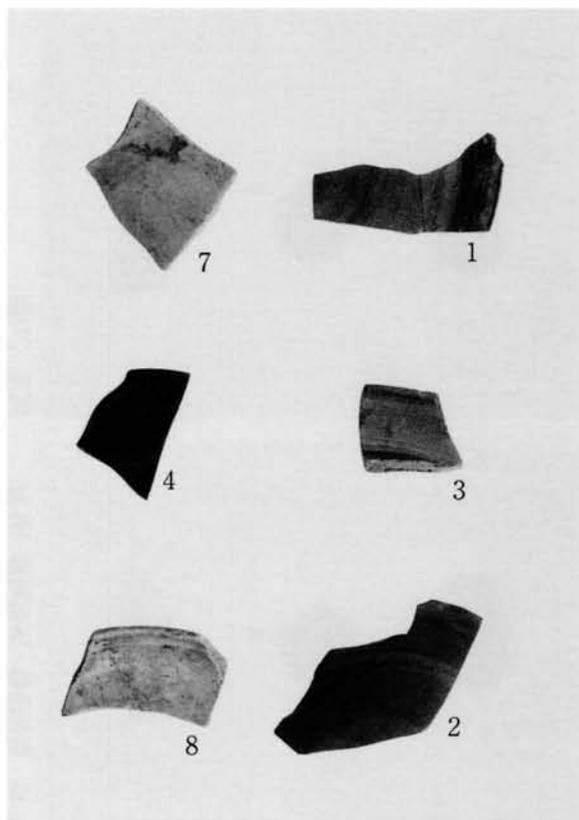


Fig. 47 須恵器 (外面)



同左 (内面)

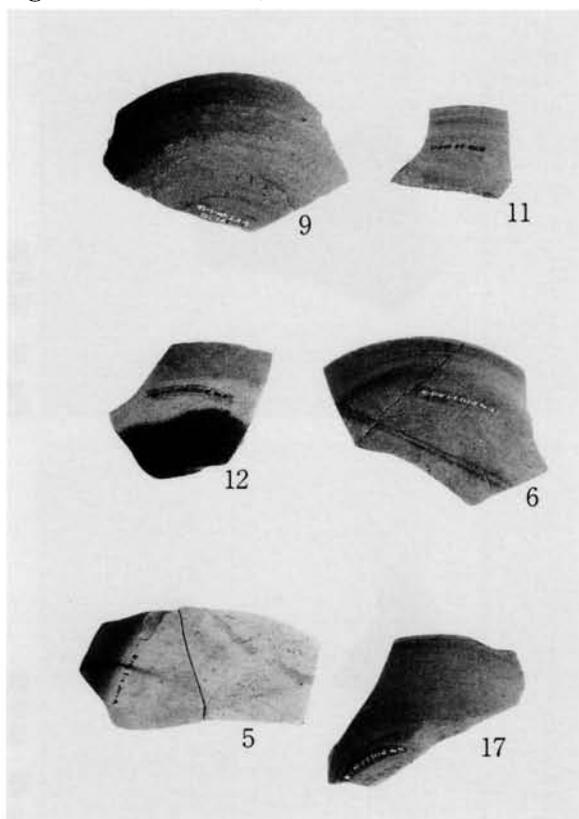
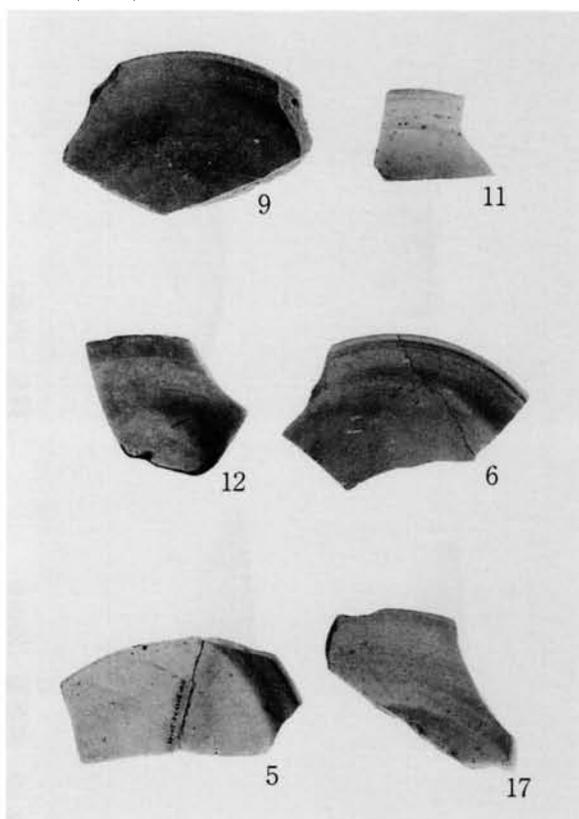
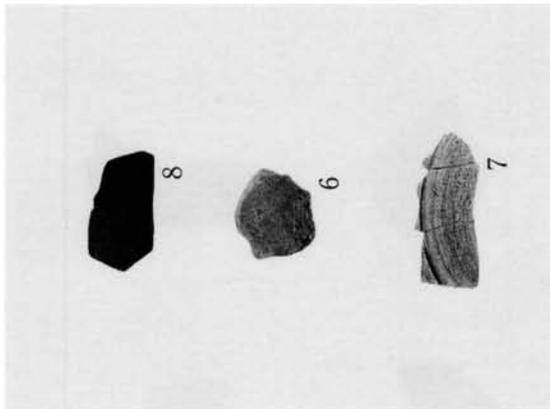


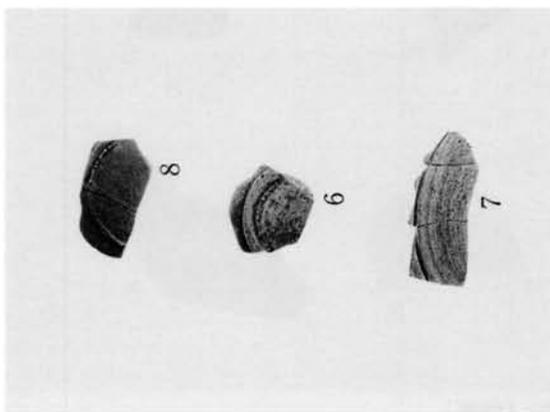
Fig. 47 須恵器 (外面)
SR2出土遺物 3



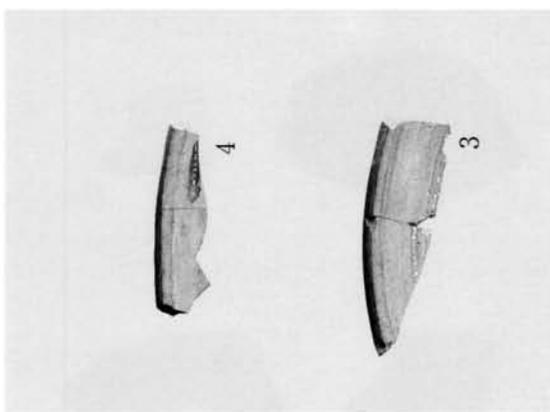
同左 (内面)



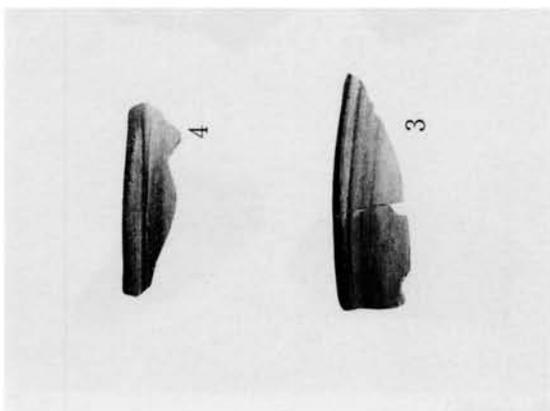
同左 (内面)



同左 (外面)



同左 (内面)



同左 (外面)

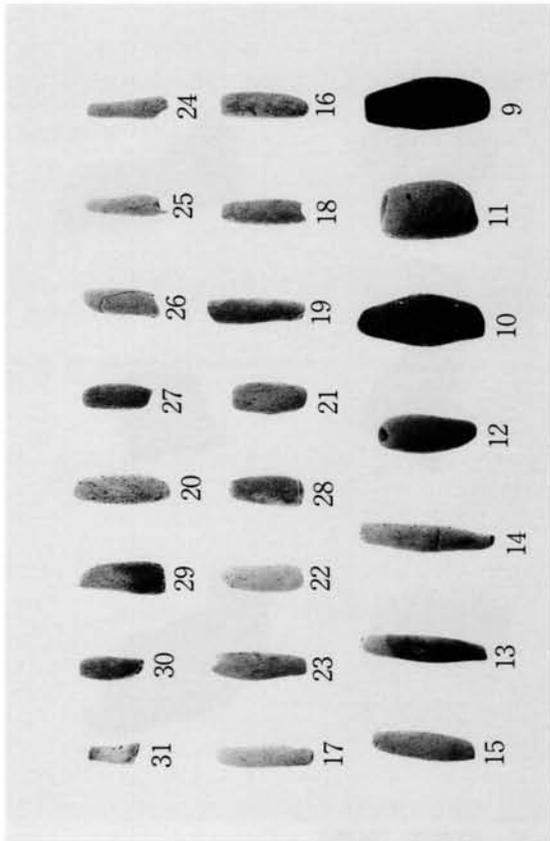


Fig. 48 須惠器
SR2出土遺物 4

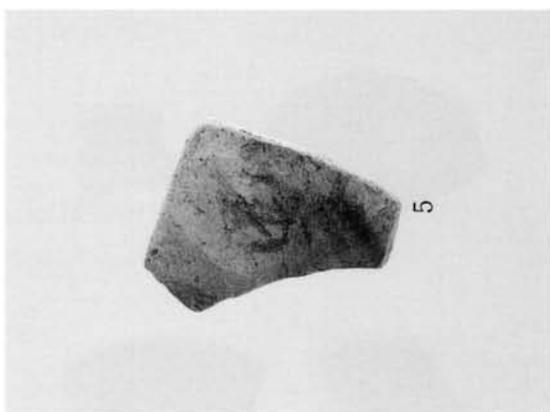


Fig. 49 須惠器

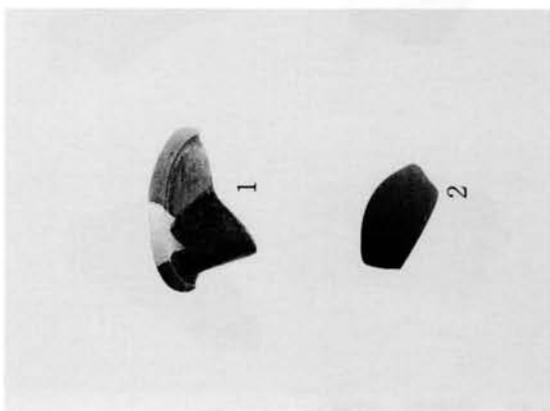


Fig. 49 土錘

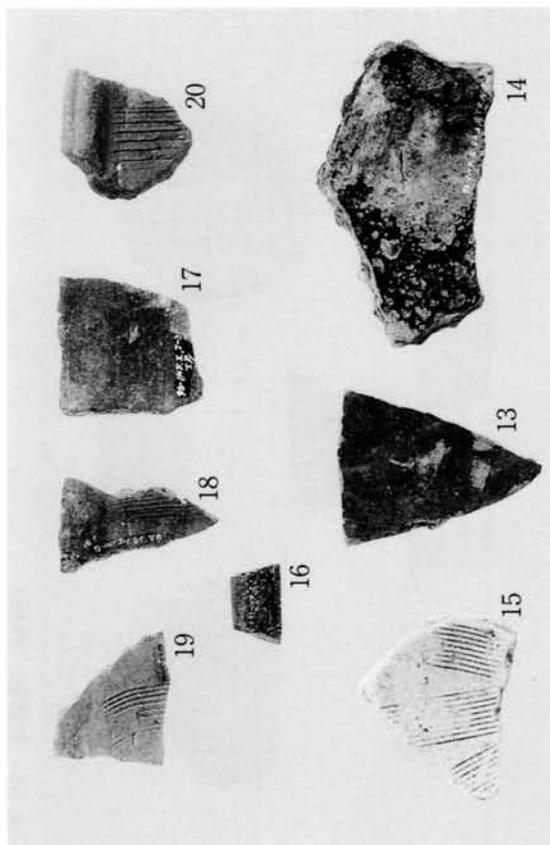
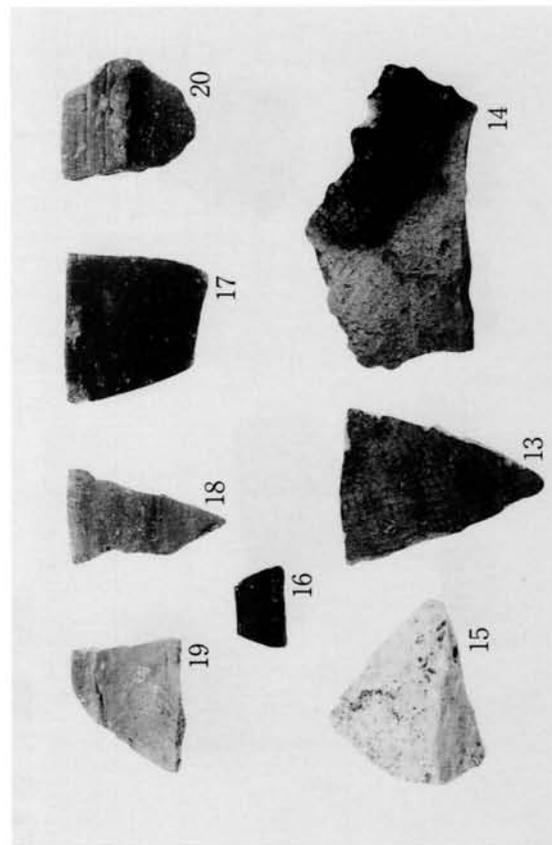


Fig. 65 (内面)



同上 (外面)

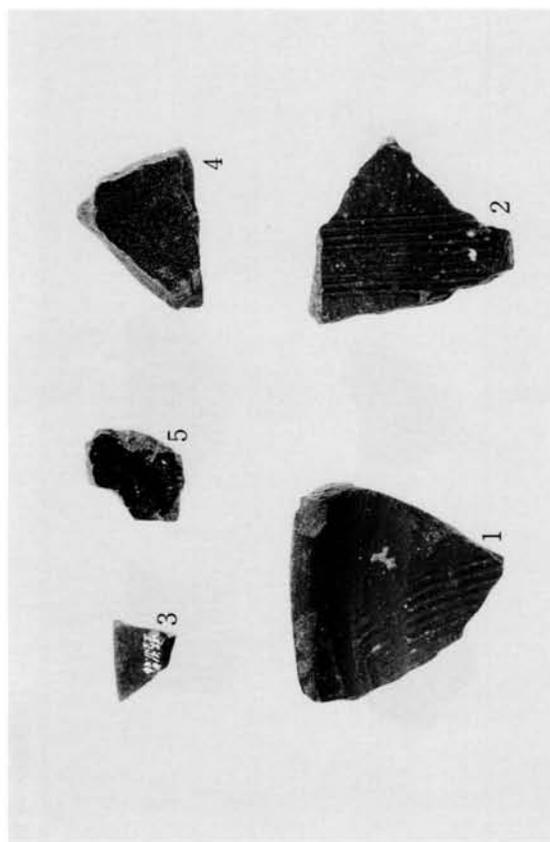
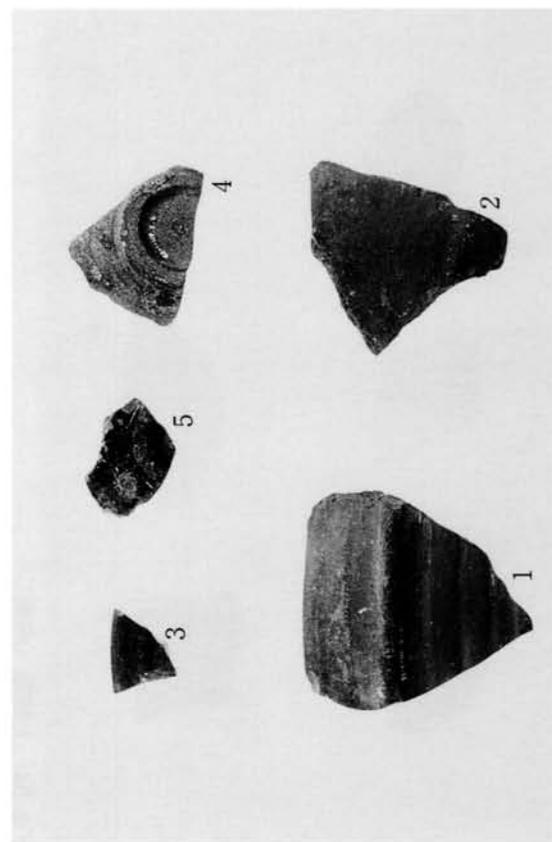


Fig. 66 (内面)



同上 (外面)

第I区包含層出土遺物 1

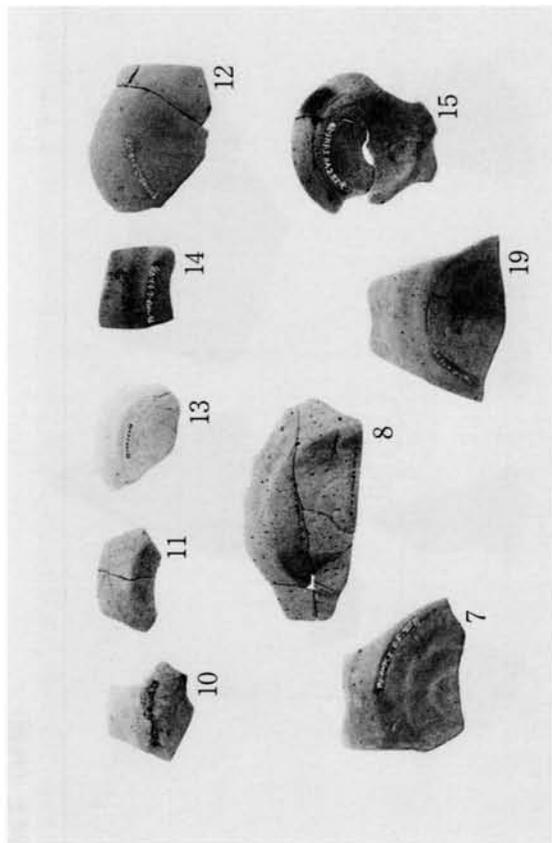


Fig. 53 土師器 (外面)

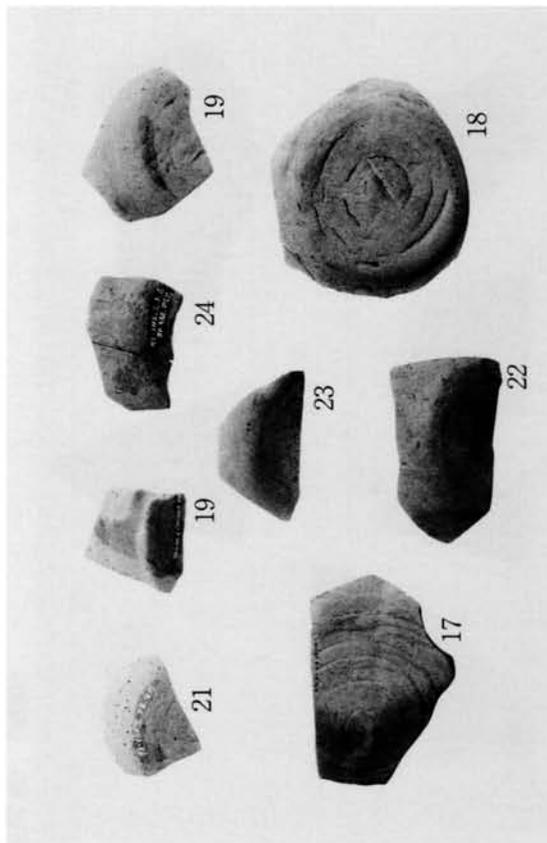


Fig. 53 土師器 (外面)

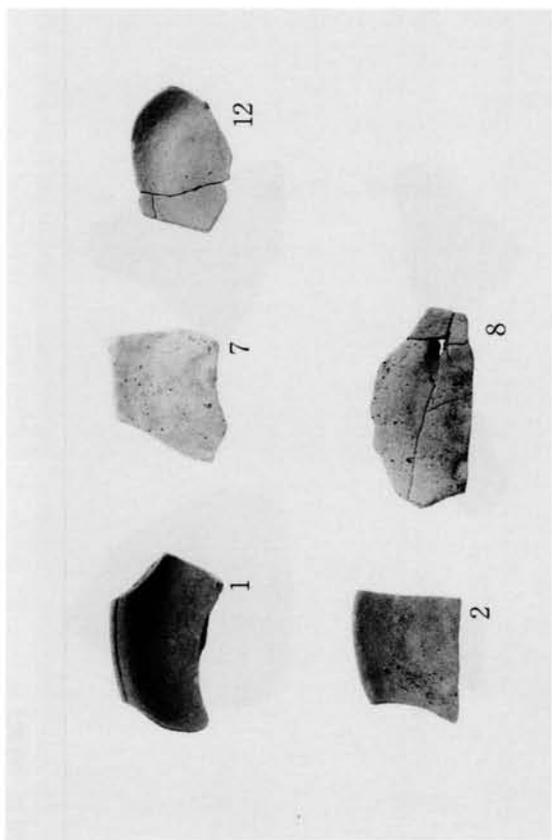
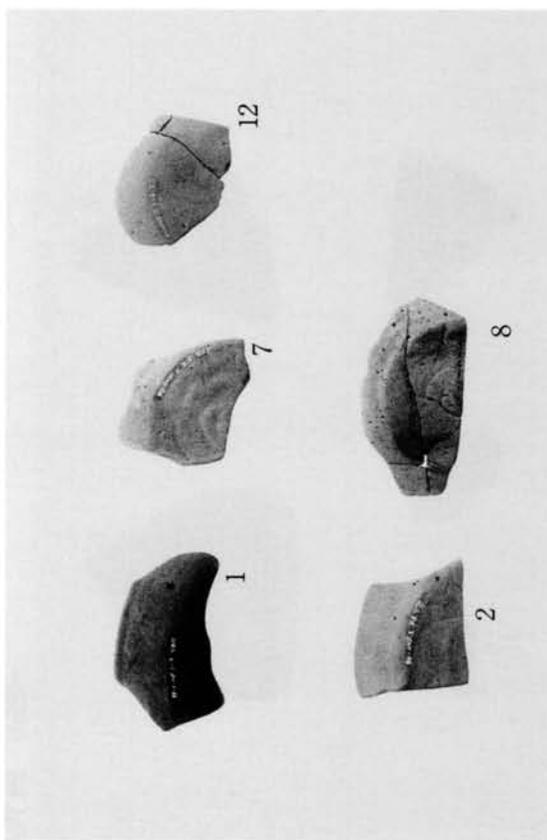


Fig. 53 土師器 (内面)



同上 (内面)
第I区包含層出土遺物 2

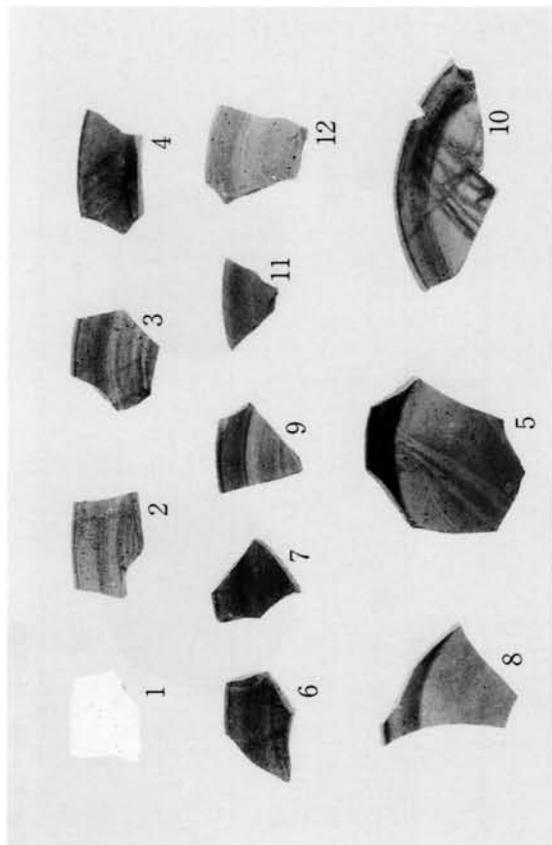
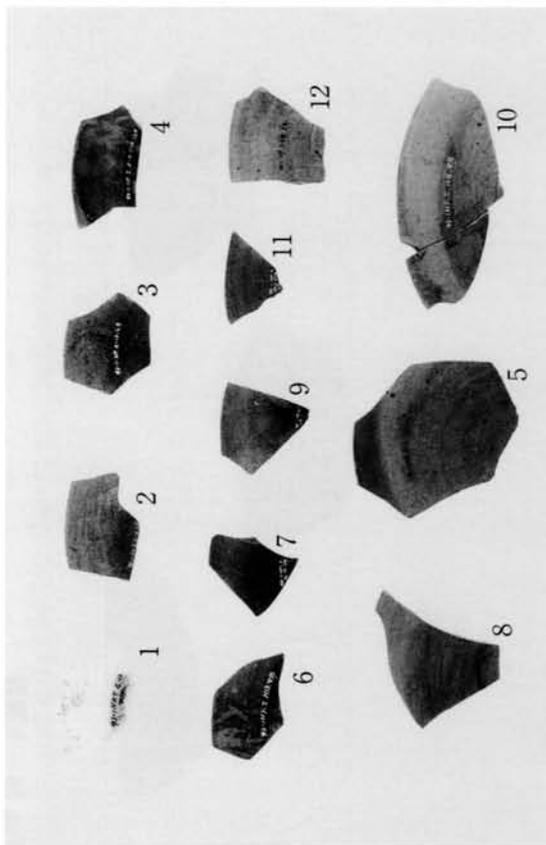


Fig. 57 須恵器 (内面)



同上 (外面)

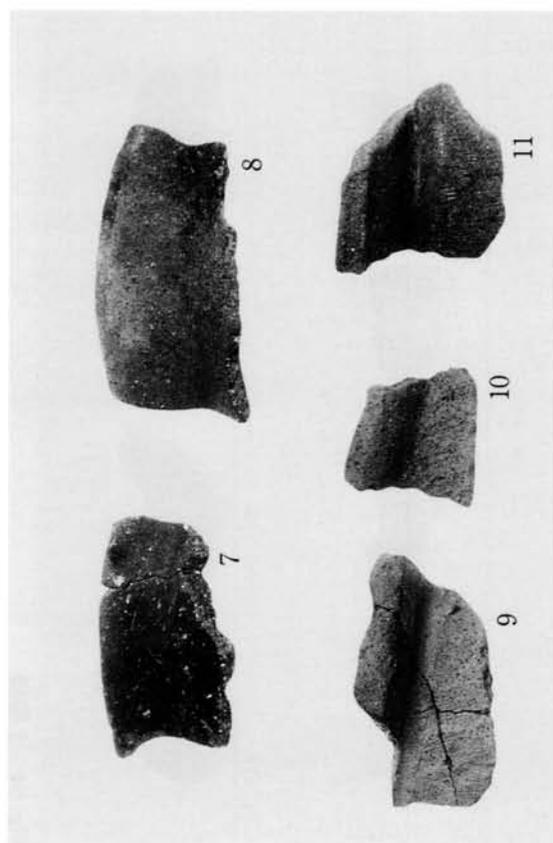


Fig. 55 土師器

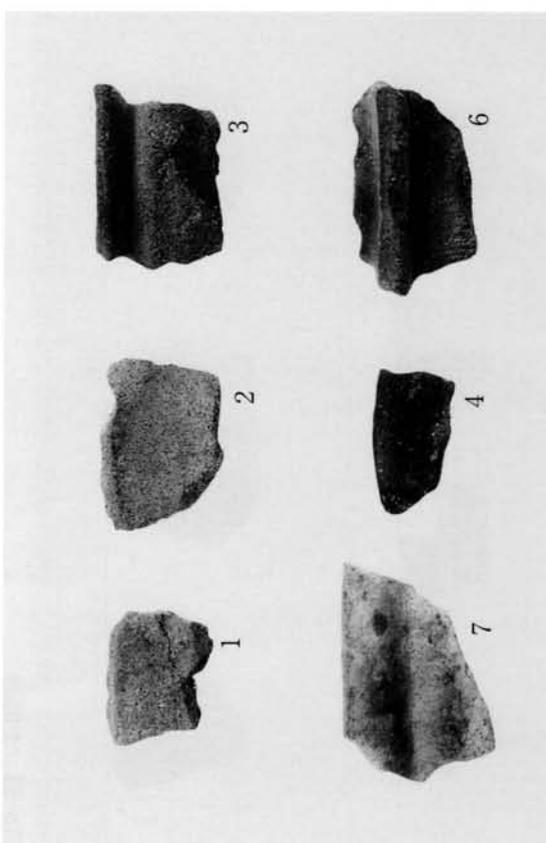


Fig. 56 土師器
第I区包含層出土遺物3

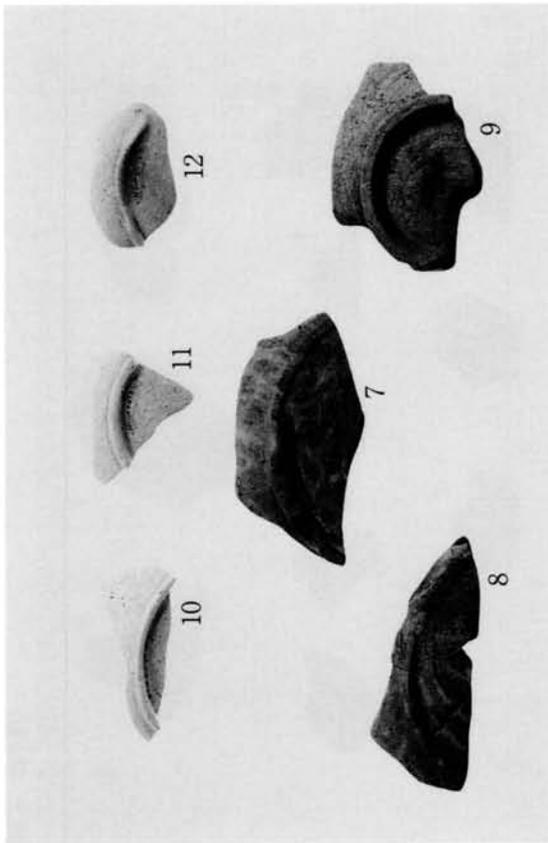


Fig. 54 土師器

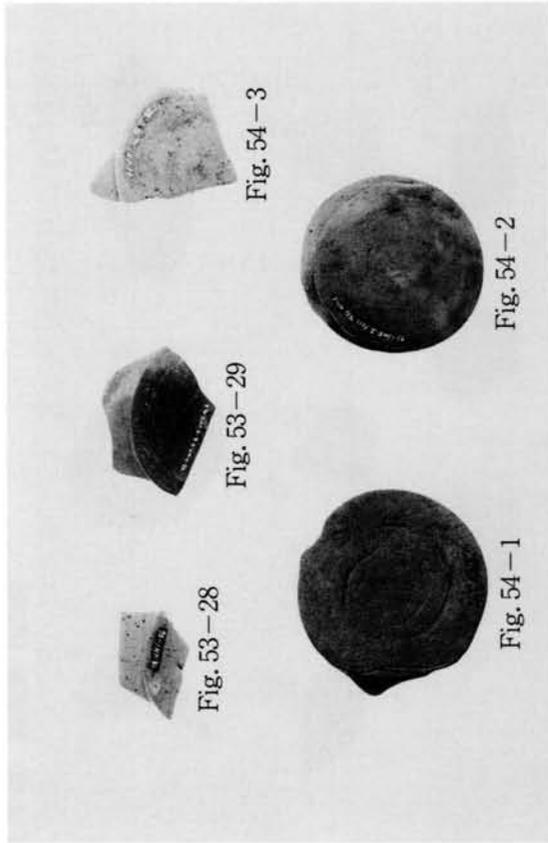


Fig. 53 · 54 土師器

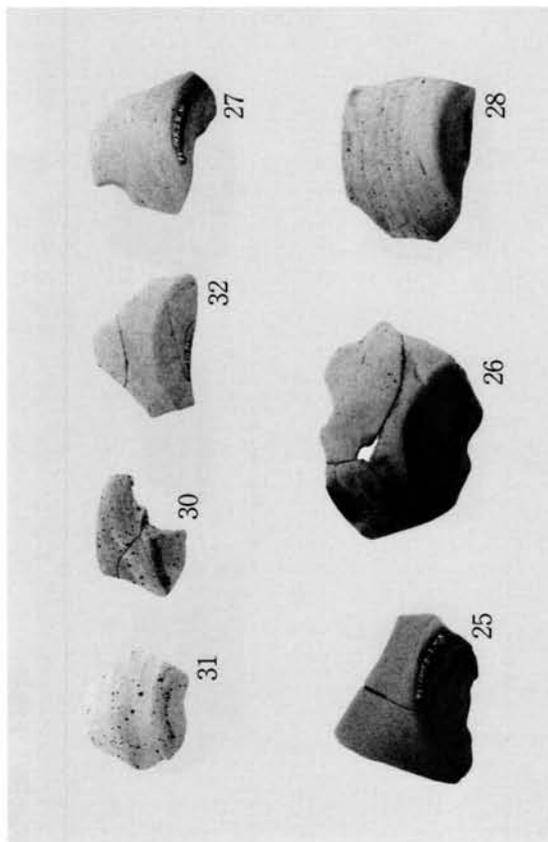


Fig. 53 土師器

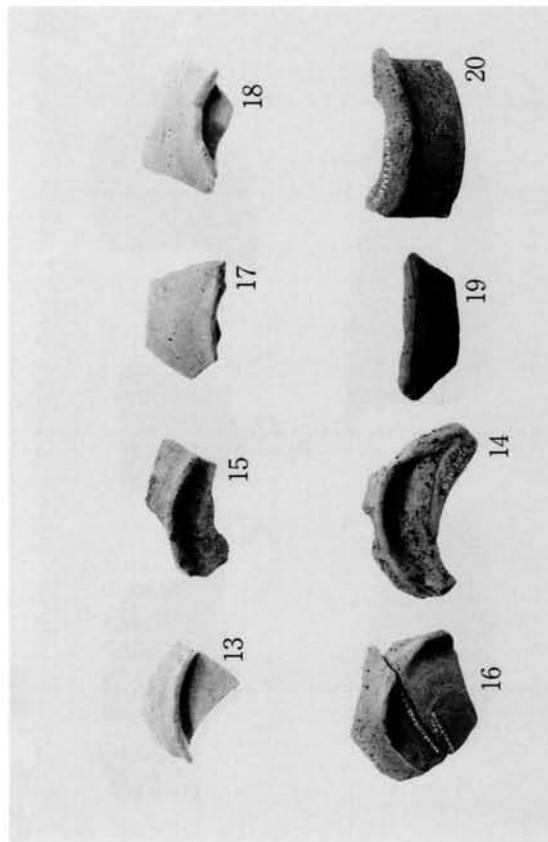


Fig. 54 土師器
第I区包含層出土遺物4

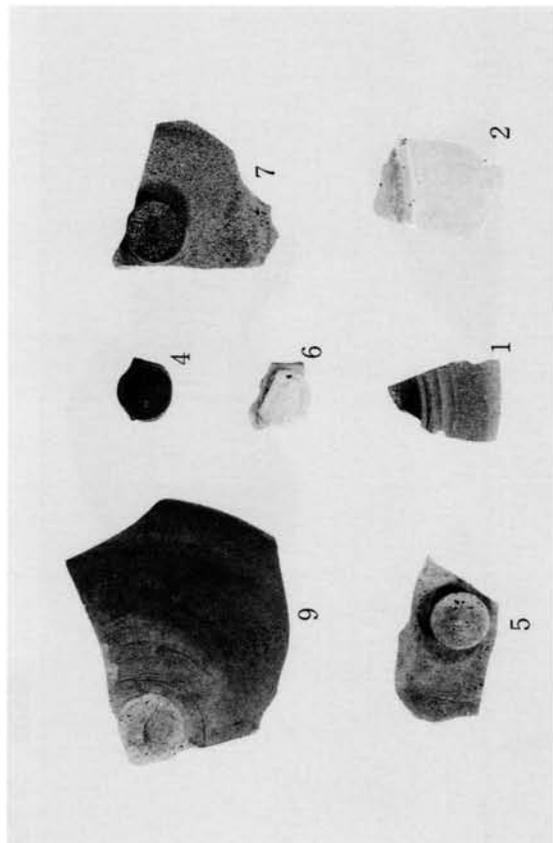


Fig. 59 (須恵器)

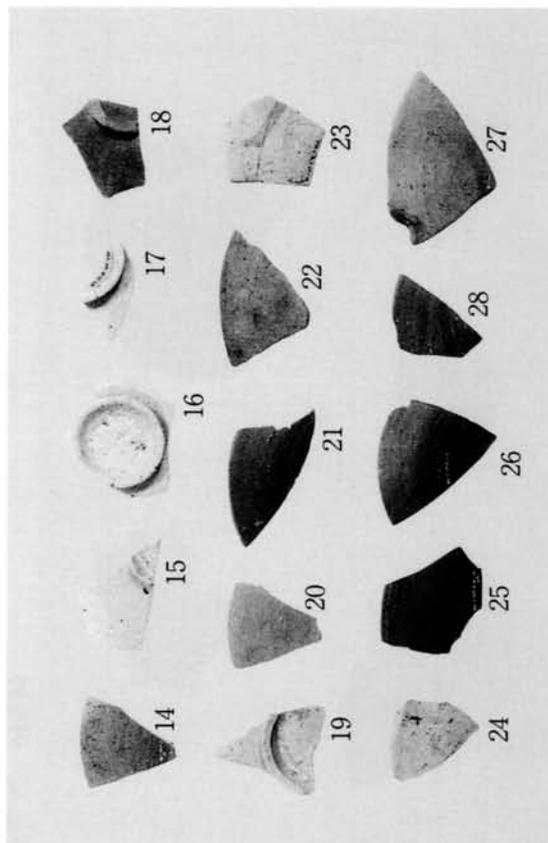


Fig. 59 (須恵器)

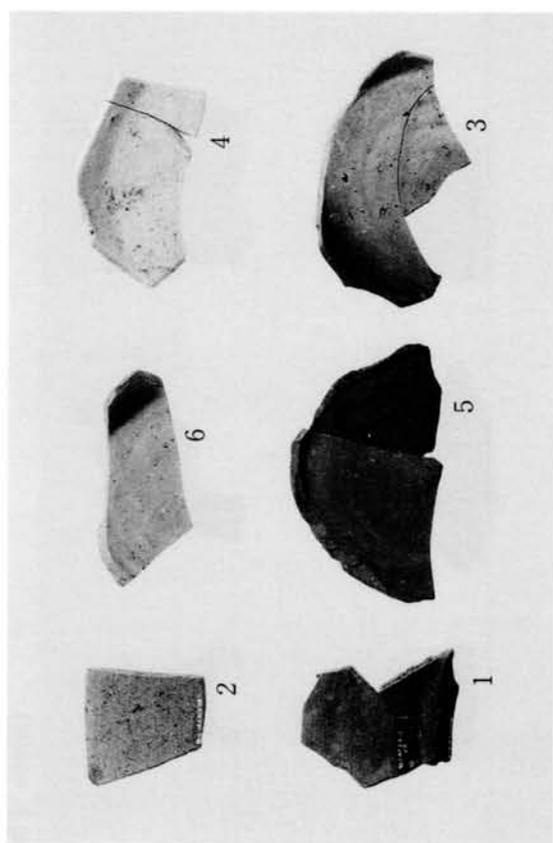
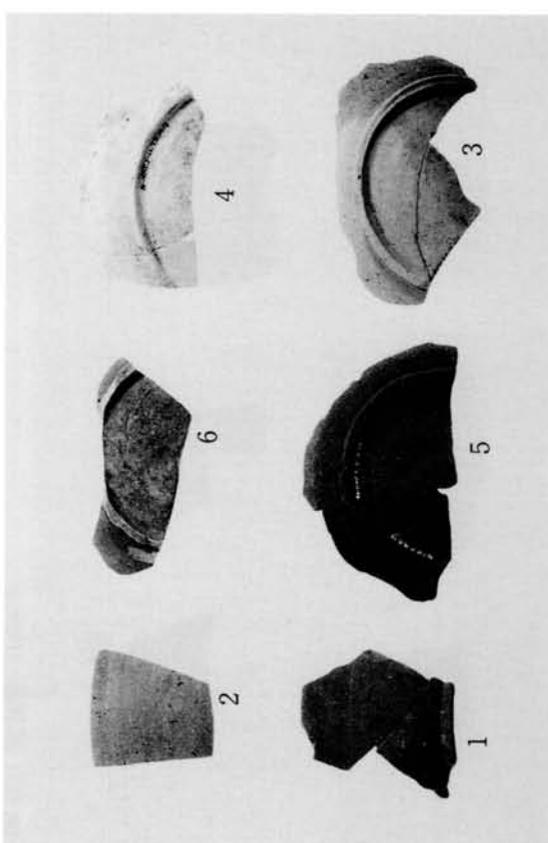


Fig. 58 (内面)



同上 (外面)
第 I 区包含層出土遺物 5

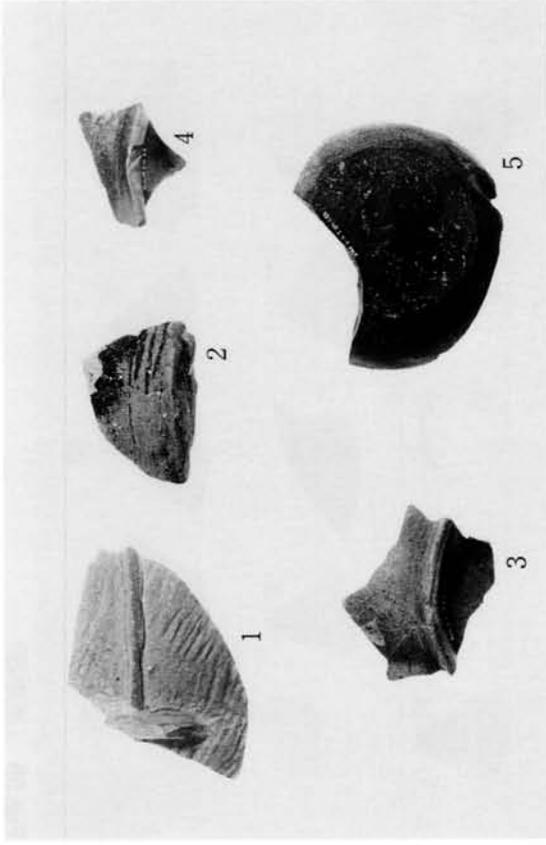


Fig. 62 須恵器

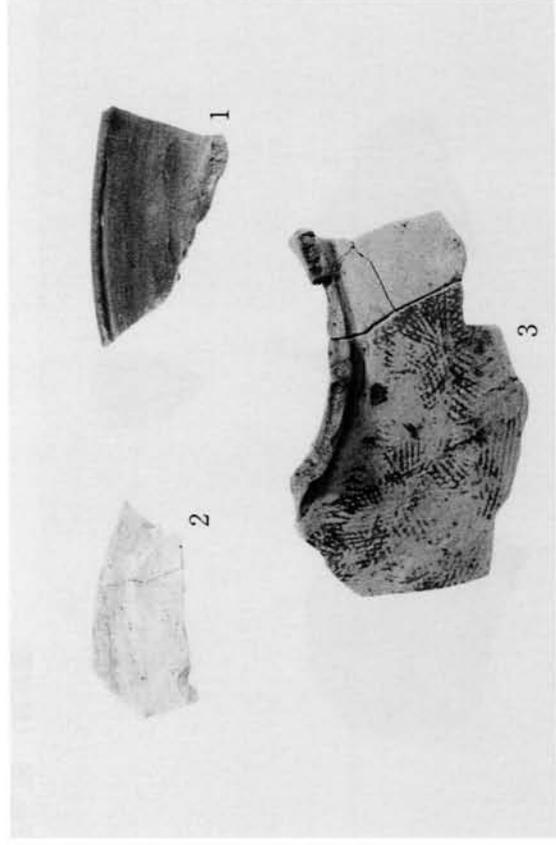


Fig. 61 須恵器

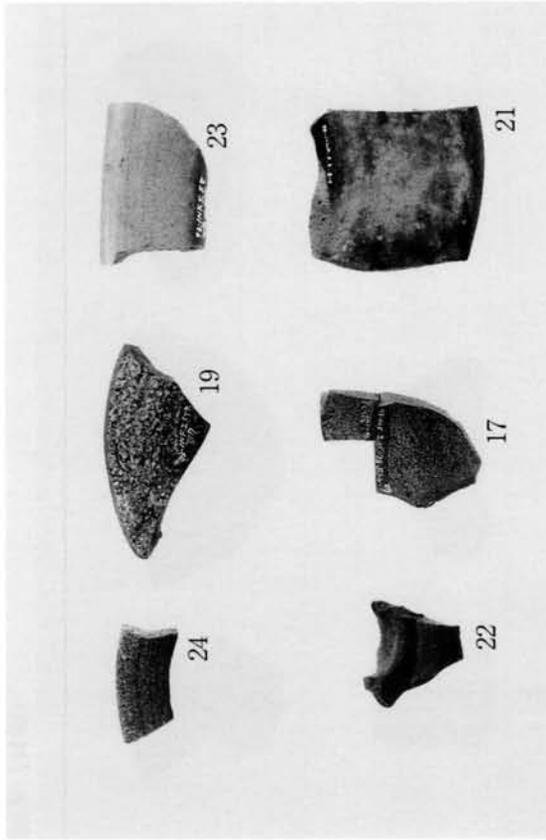
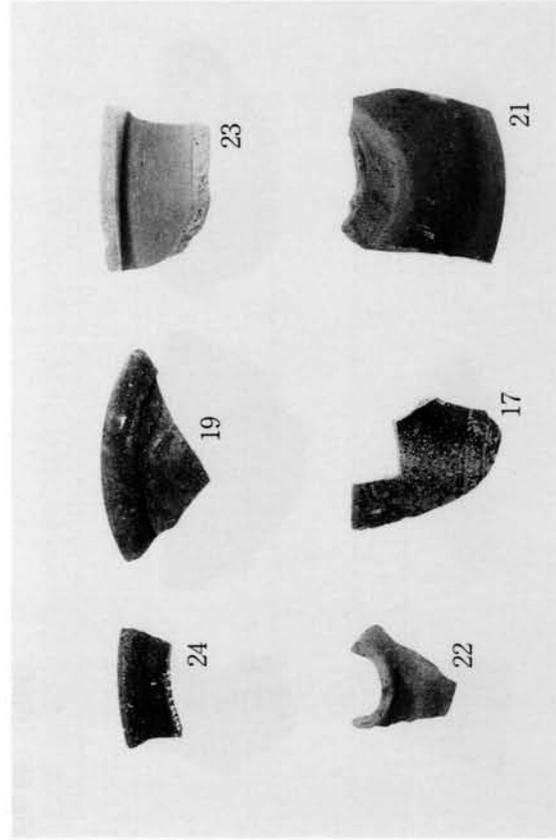


Fig. 60 須恵器 (内面)



同上 (外面)
第 I 区包含層出土遺物 6

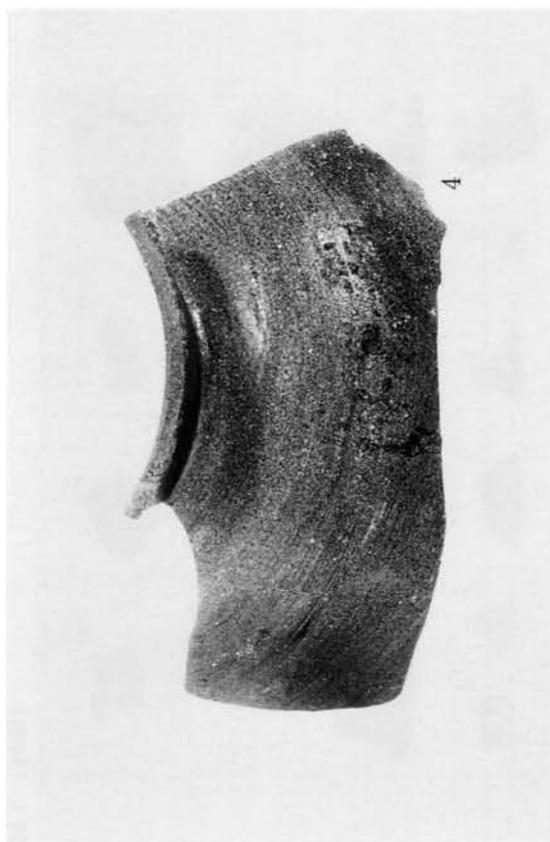


Fig. 61 須恵器

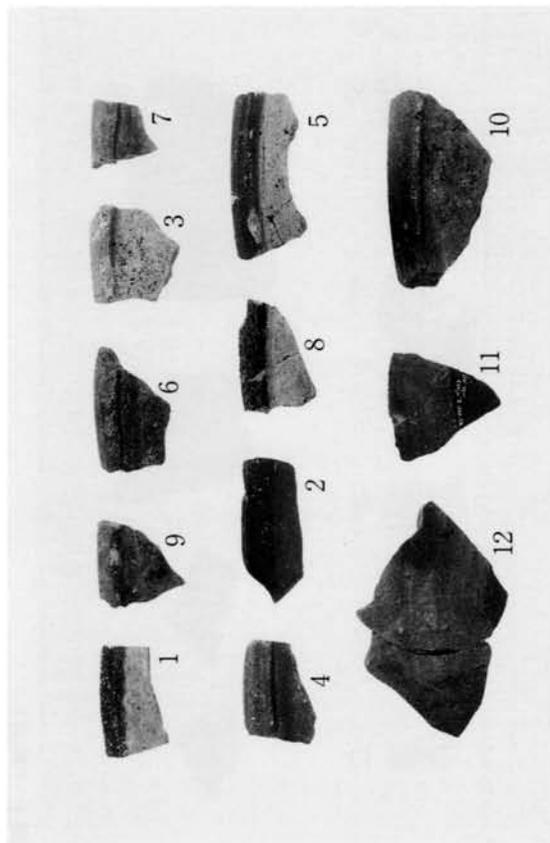


Fig. 64 須恵器

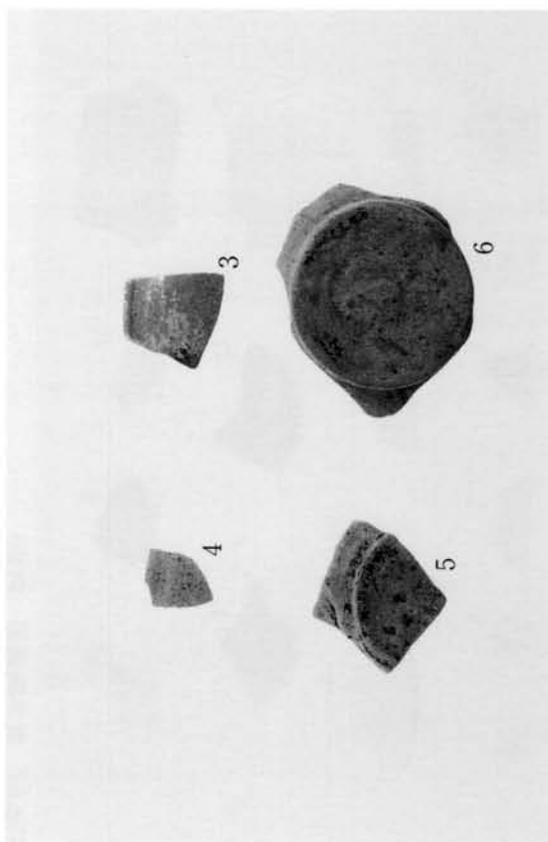


Fig. 65 緑釉陶器
第I区包含層出土遺物7

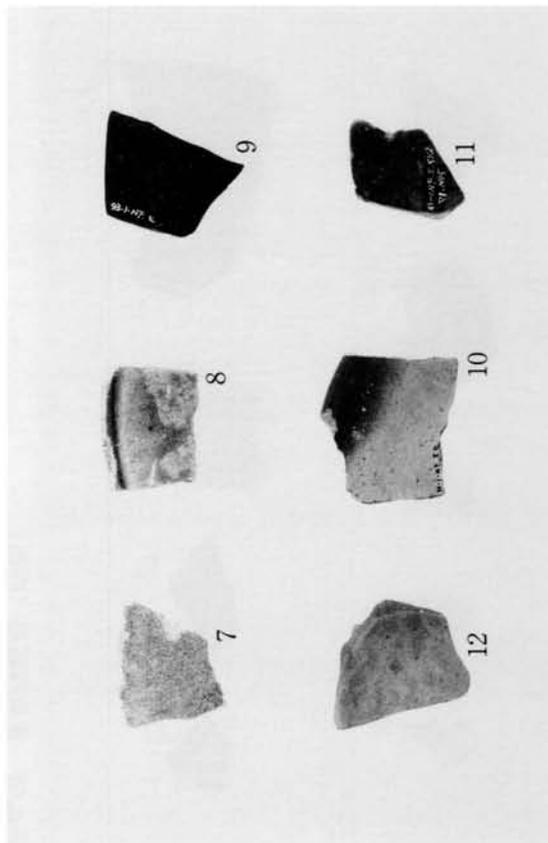


Fig. 65 灰釉陶器・黒色土器・瓦器

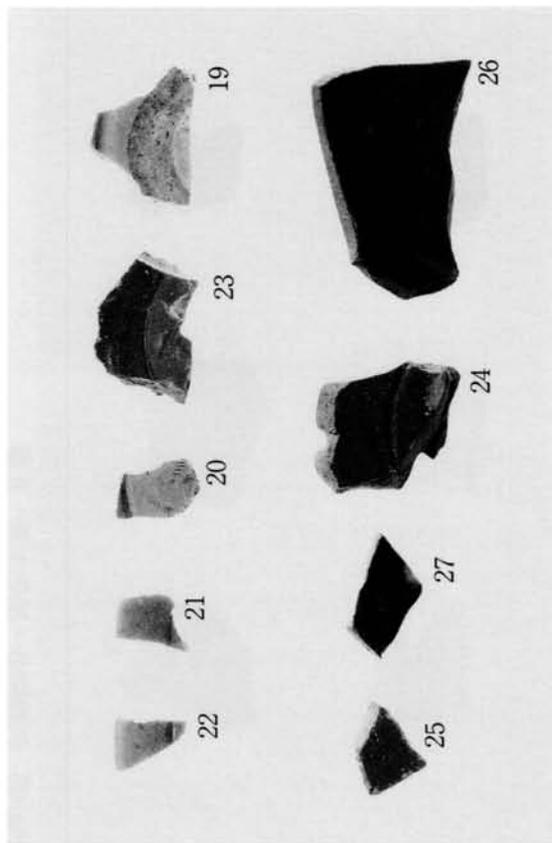
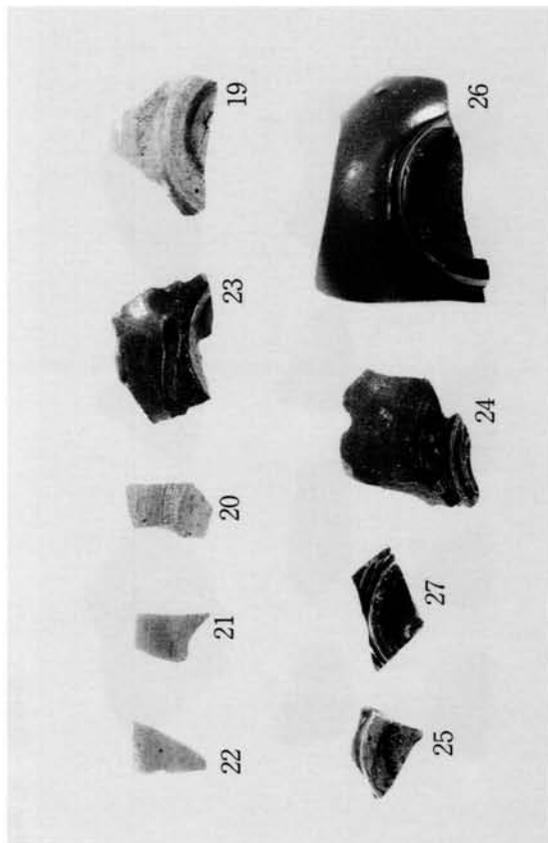


Fig. 67 貿易陶磁器 (内面)



同上 (外面)

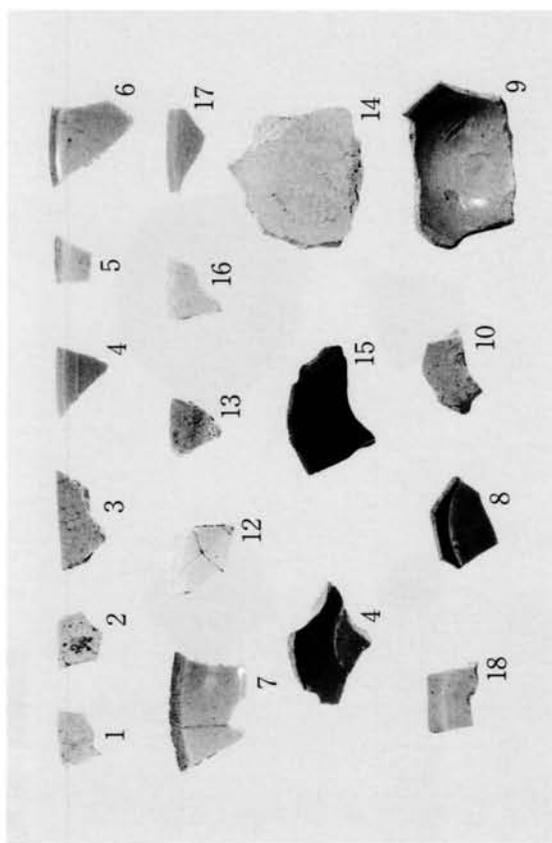
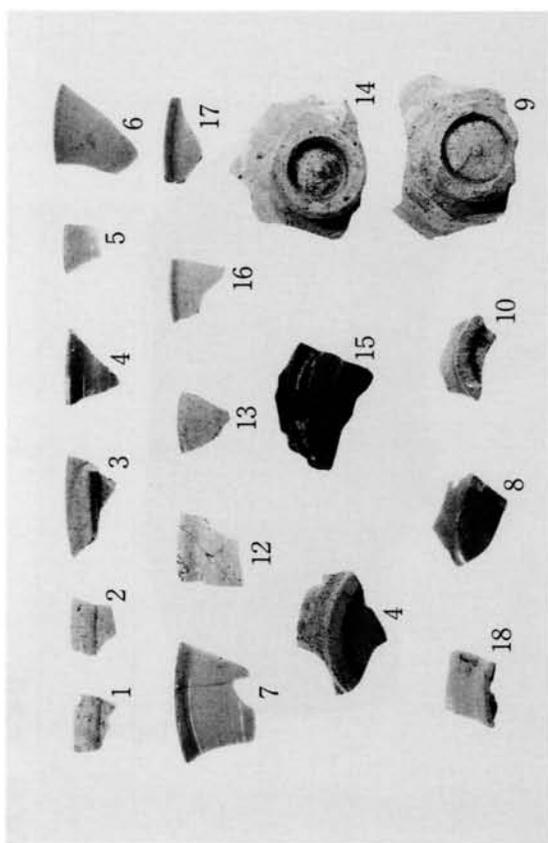


Fig. 67 貿易陶磁器 (内面)



同上 (外面)

第I区包含層出土遺物 8

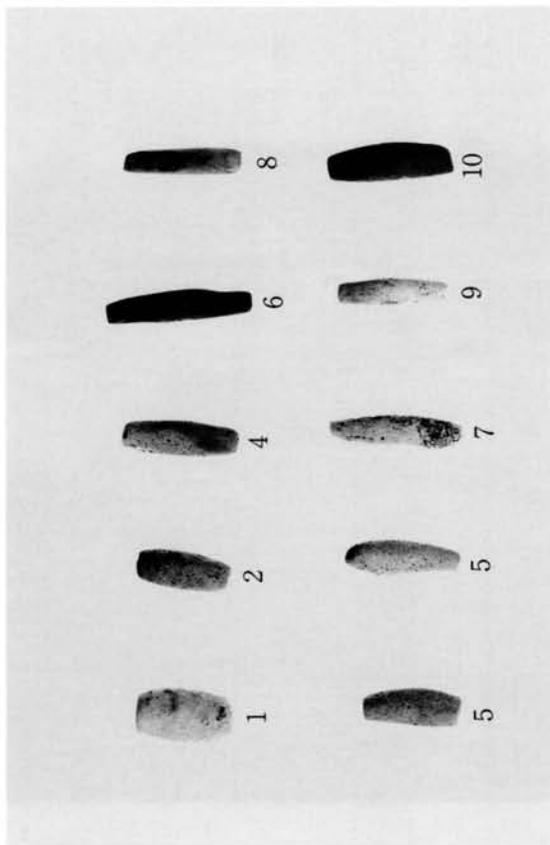
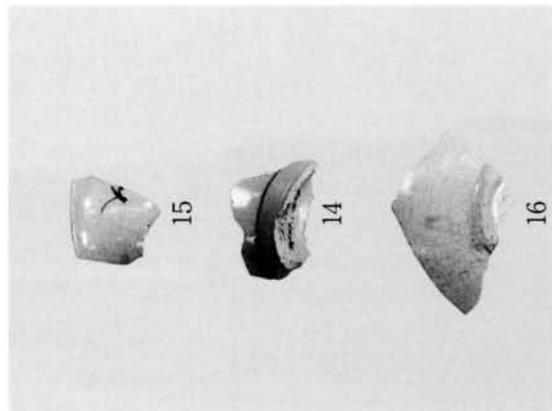


Fig. 68 土錘



同左 (外面)

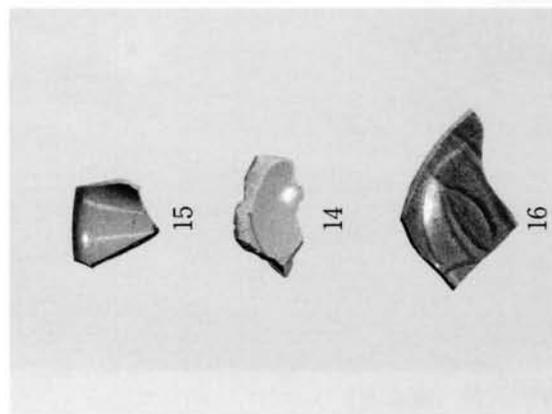


Fig. 68 近世陶磁器 (内面)

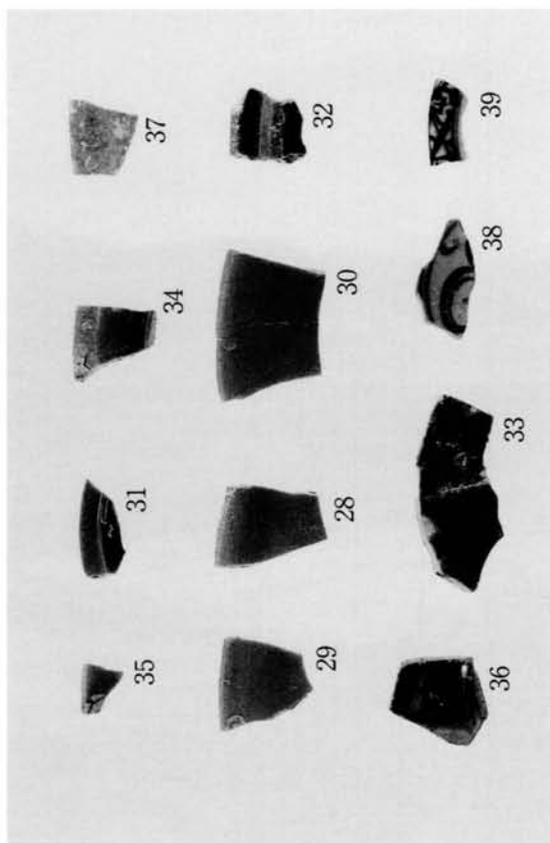
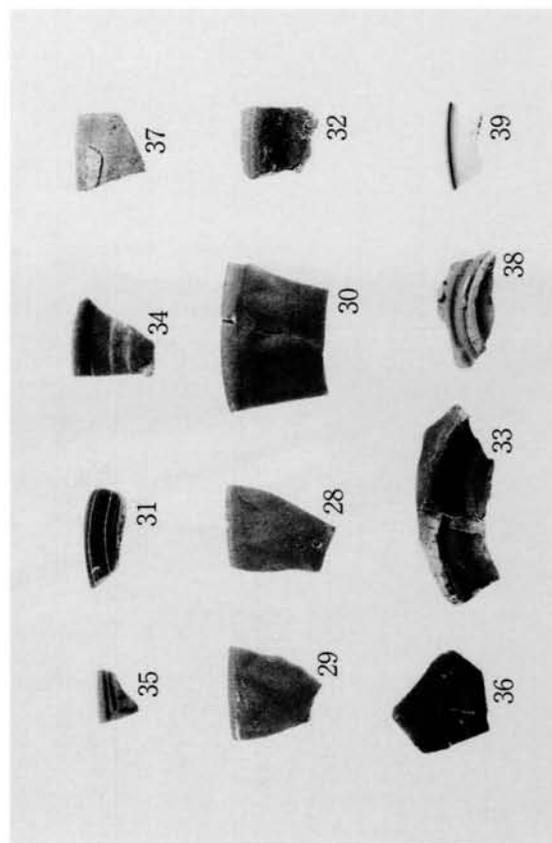


Fig. 67 貿易陶磁器 (内面)



同上 (外面)

第I区包含層出土遺物9



第Ⅱ区近景（南より）



第Ⅱ区近景（南東より）



第Ⅱ区東西ベルト土層断面（南より）



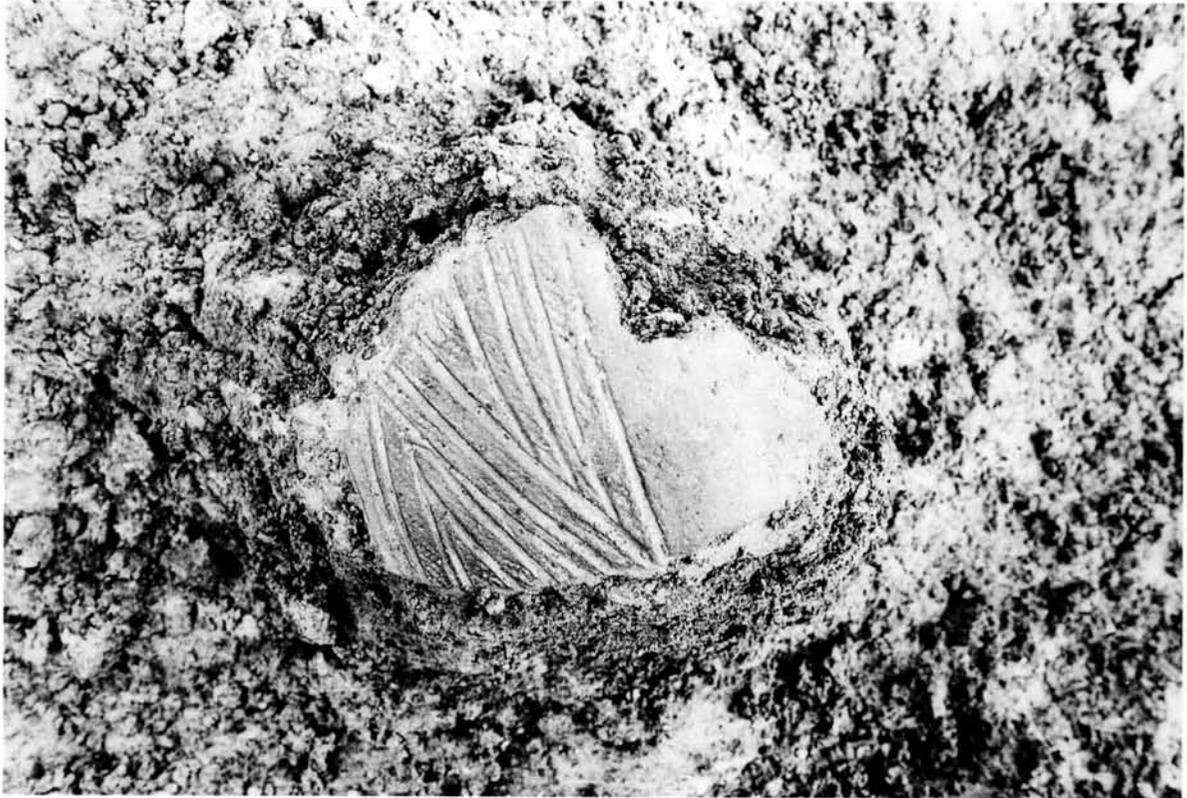
第Ⅱ区南北ベルト土層断面（東より）



第Ⅱ区縄文時代土層断面（南より）



第Ⅱ区縄文時代土層断面（南より）



縄文後期土器（深鉢）出土状態



縄文後期土器（浅鉢）出土状態



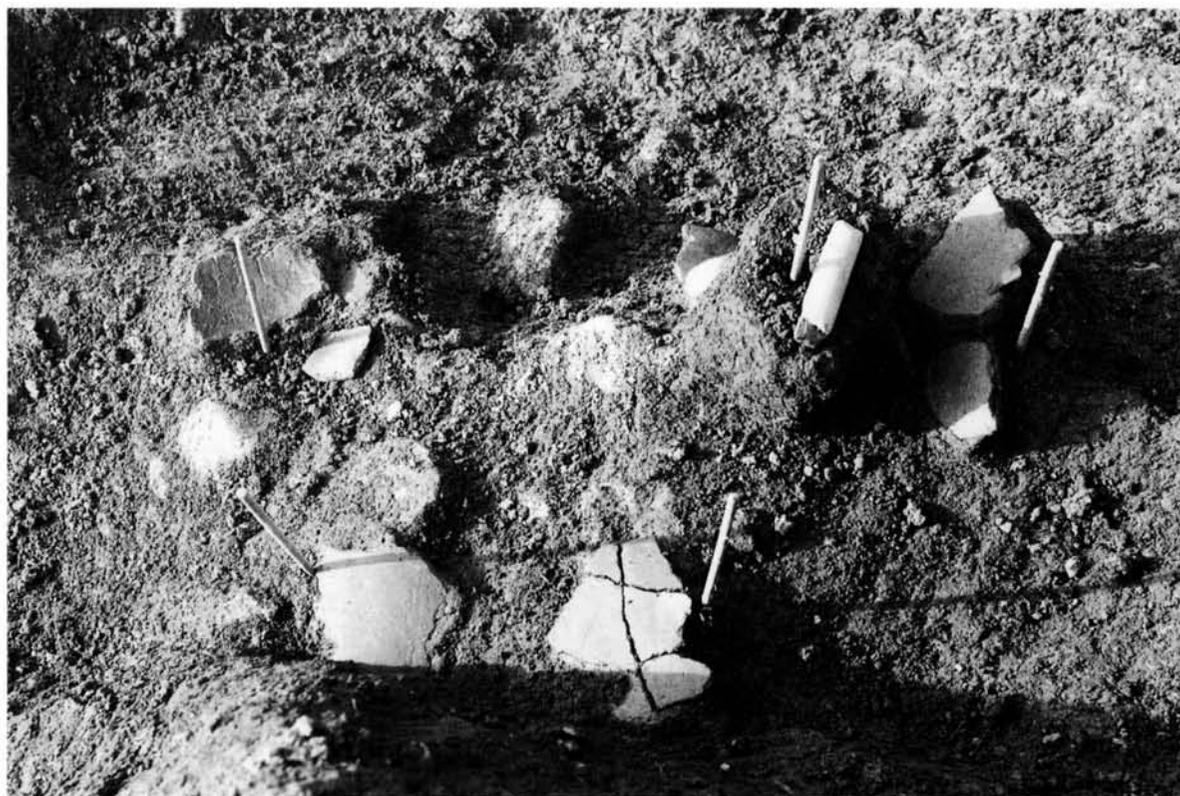
縄文後期土器（深鉢）出土状態



縄文後期土器（注口土器）出土状態



縄文後期土器（深鉢）出土状態



縄文後期土器（深鉢）・石棒出土状態

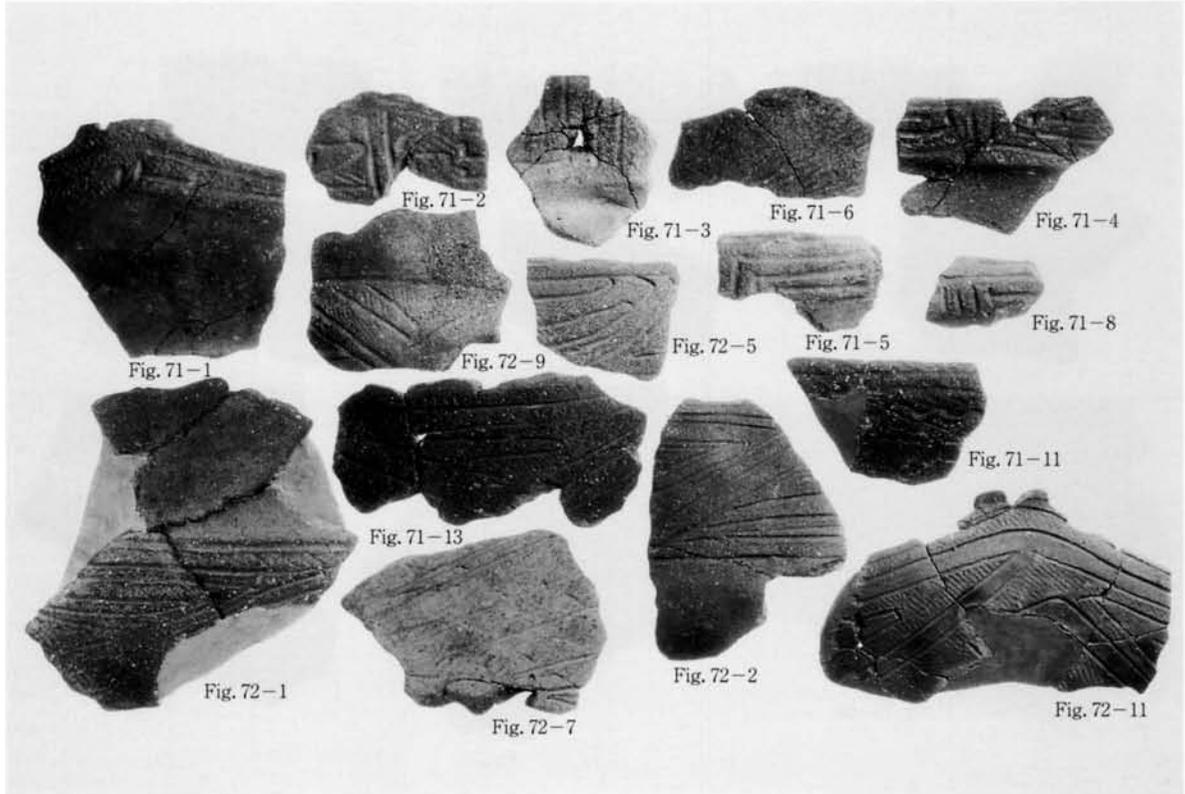
PL.60



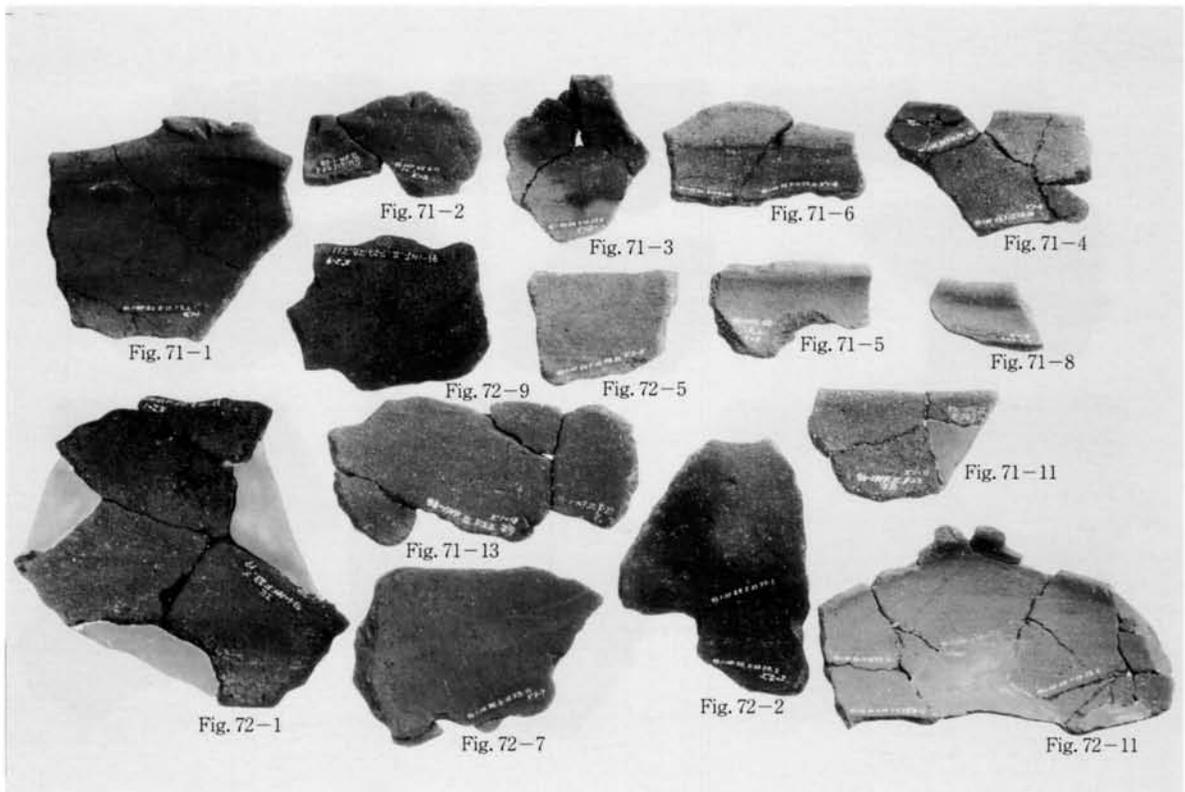
石鏃出土狀態



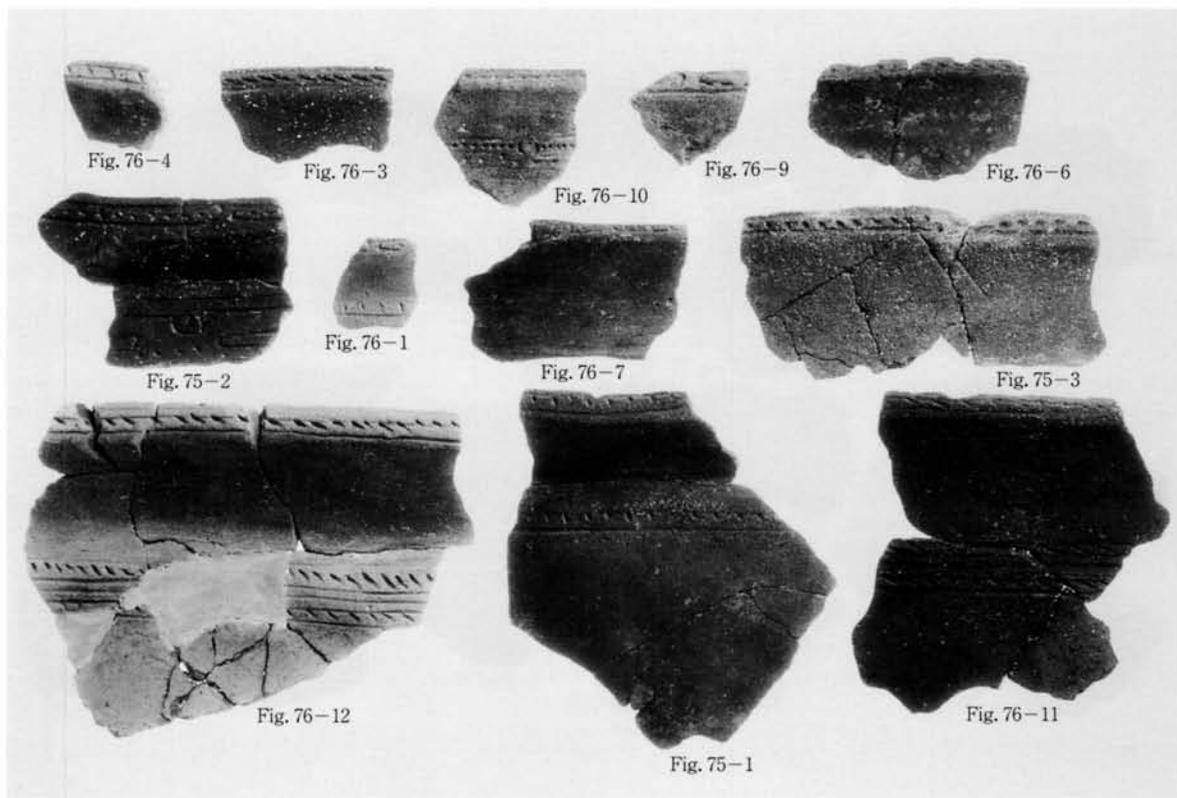
石器（石銛）出土狀態



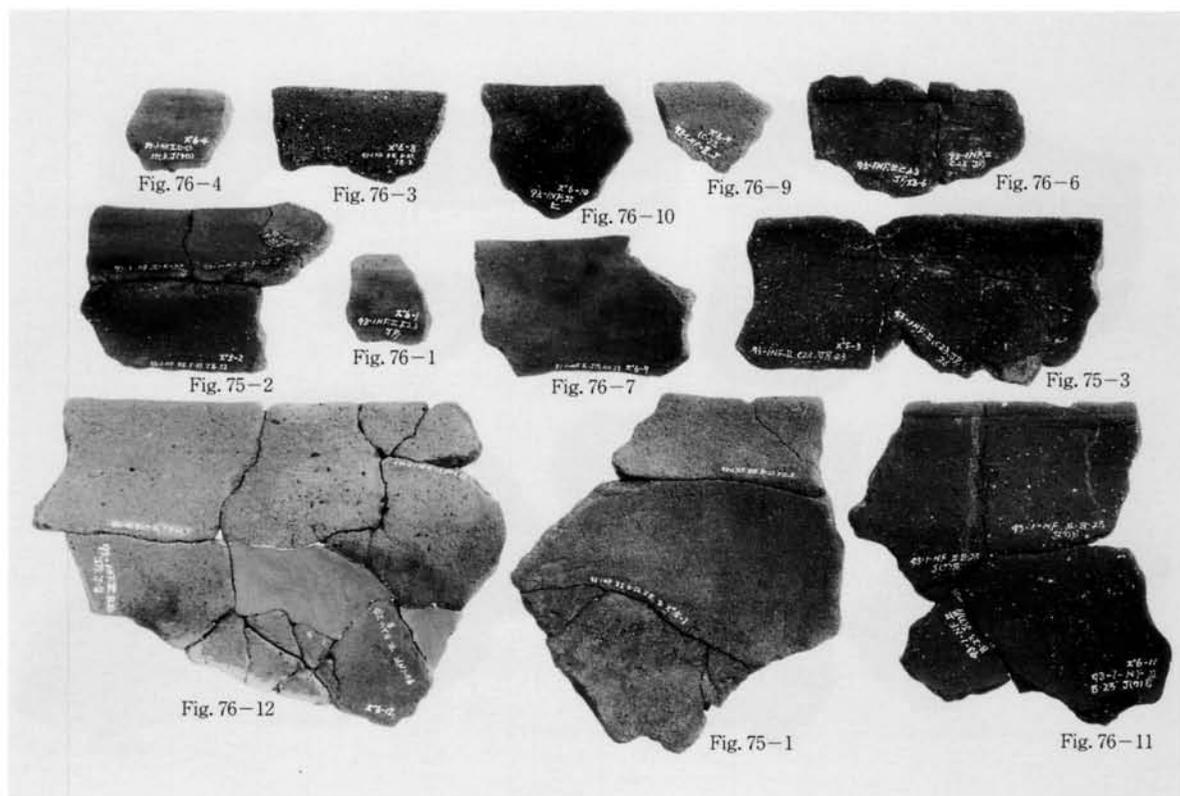
第Ⅱ区 出土縄文土器（外面）



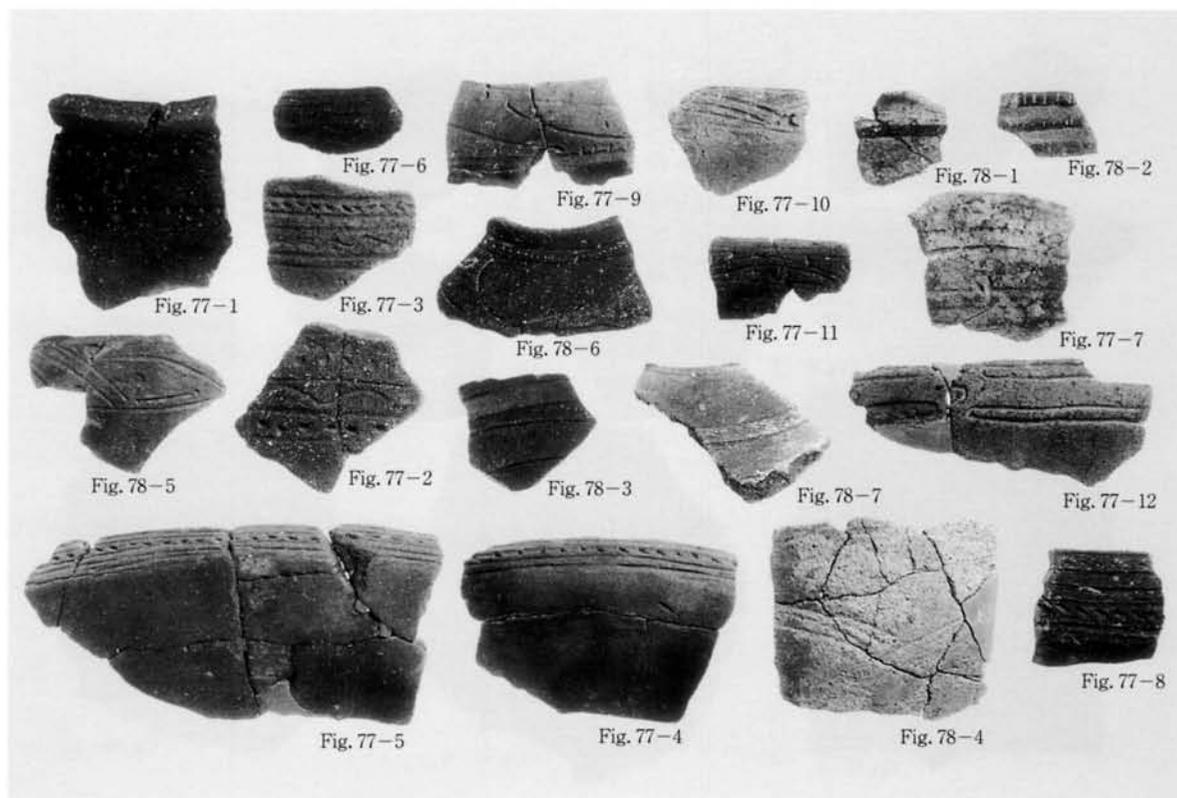
同上（内面）



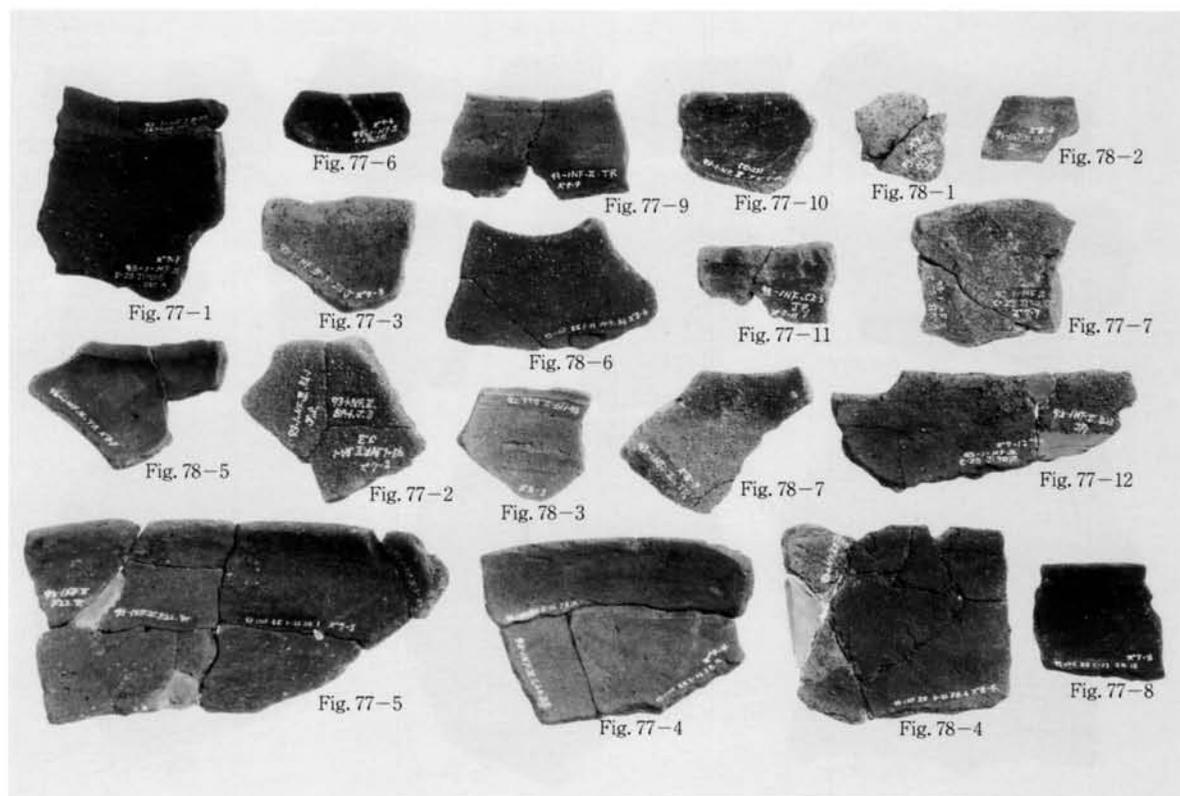
第Ⅱ区 出土繩文土器（外面）



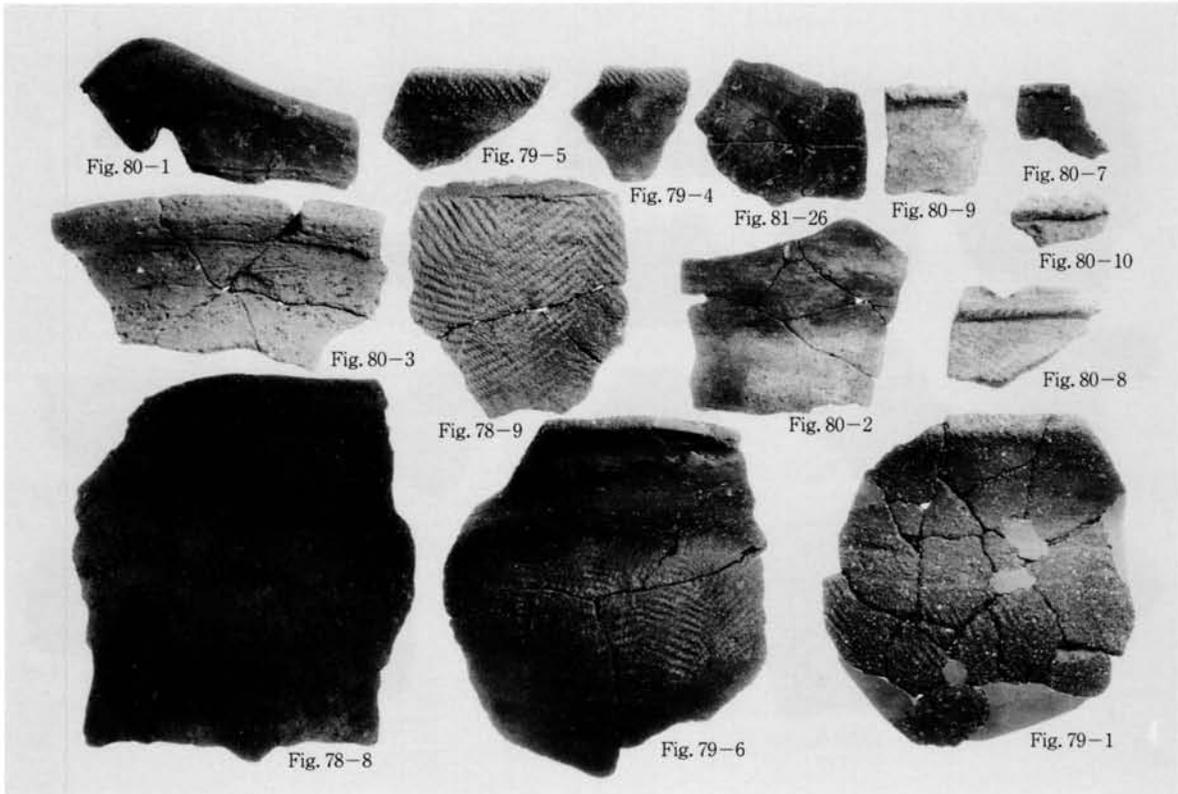
同上（内面）



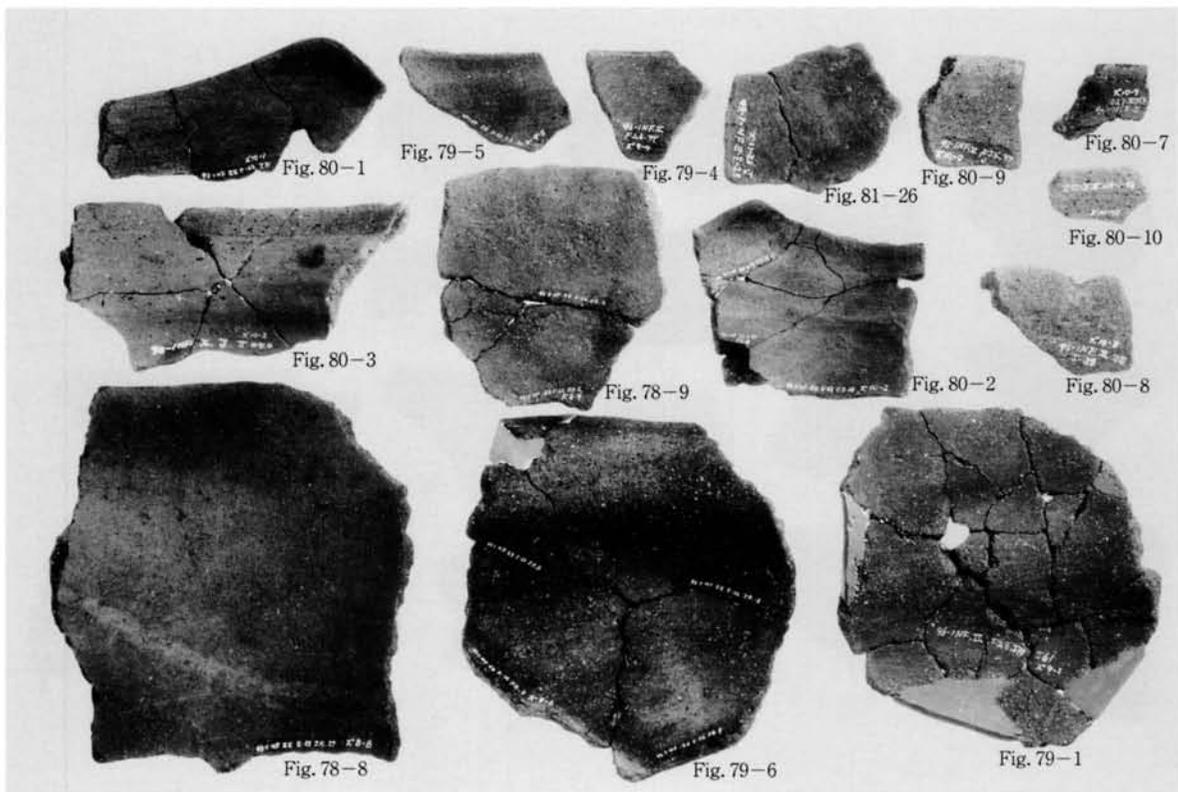
第Ⅱ区 出土縄文土器 (外面)



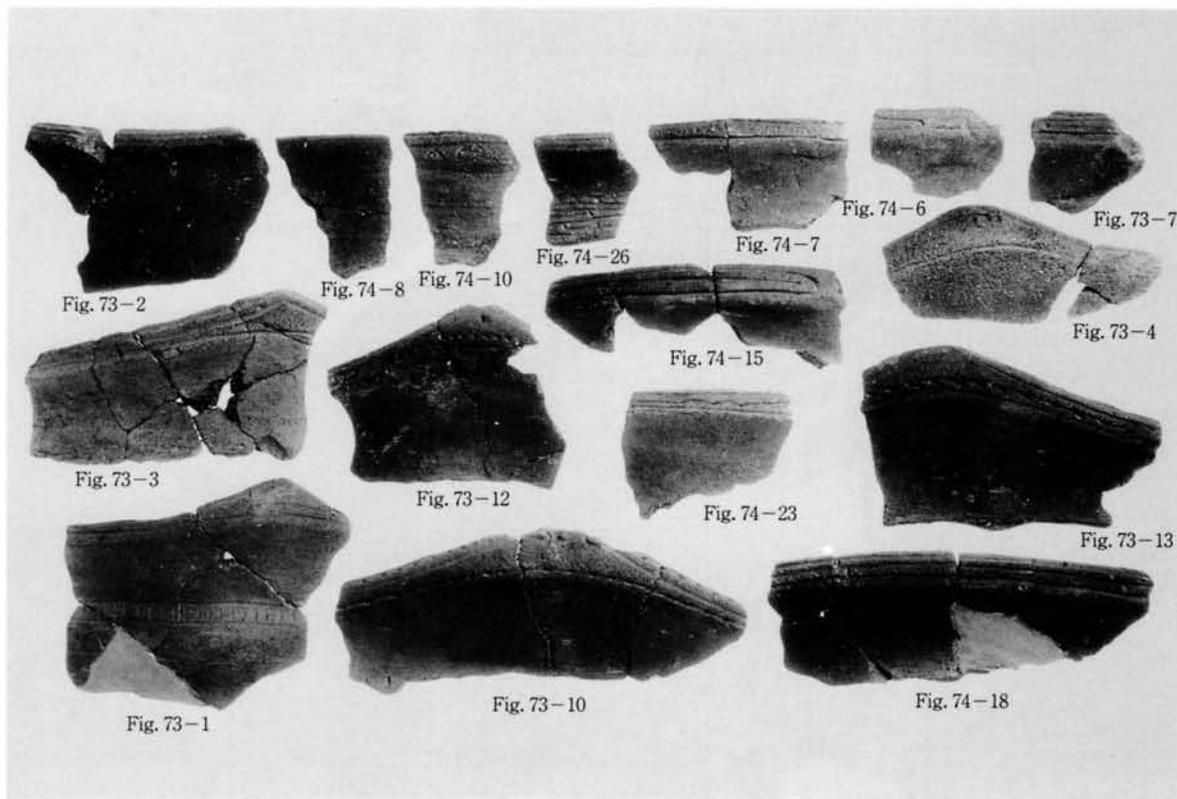
同上 (内面)



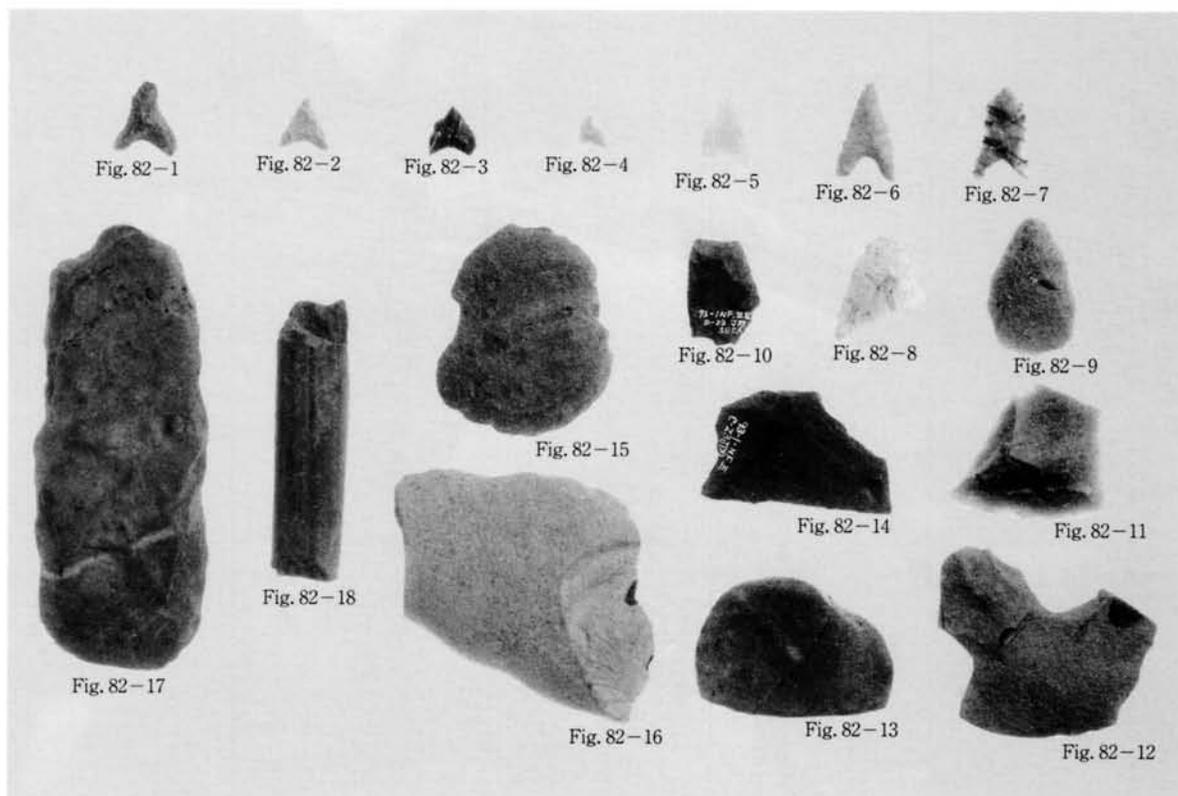
第Ⅱ区出土縄文土器（外面）



同上（内面）



第Ⅱ区出土縄文土器

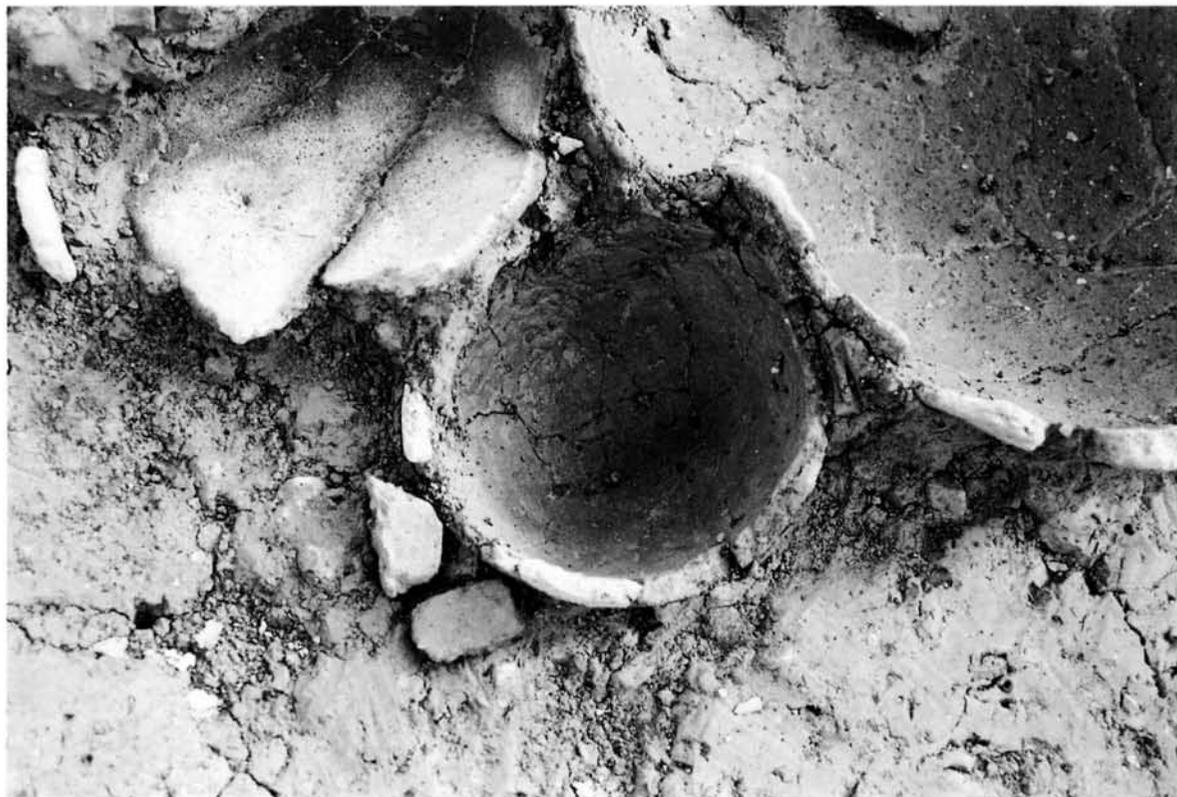


第Ⅱ区出土石器（縄文時代）

PL.66



第Ⅱ区古墳時代出土状態 1

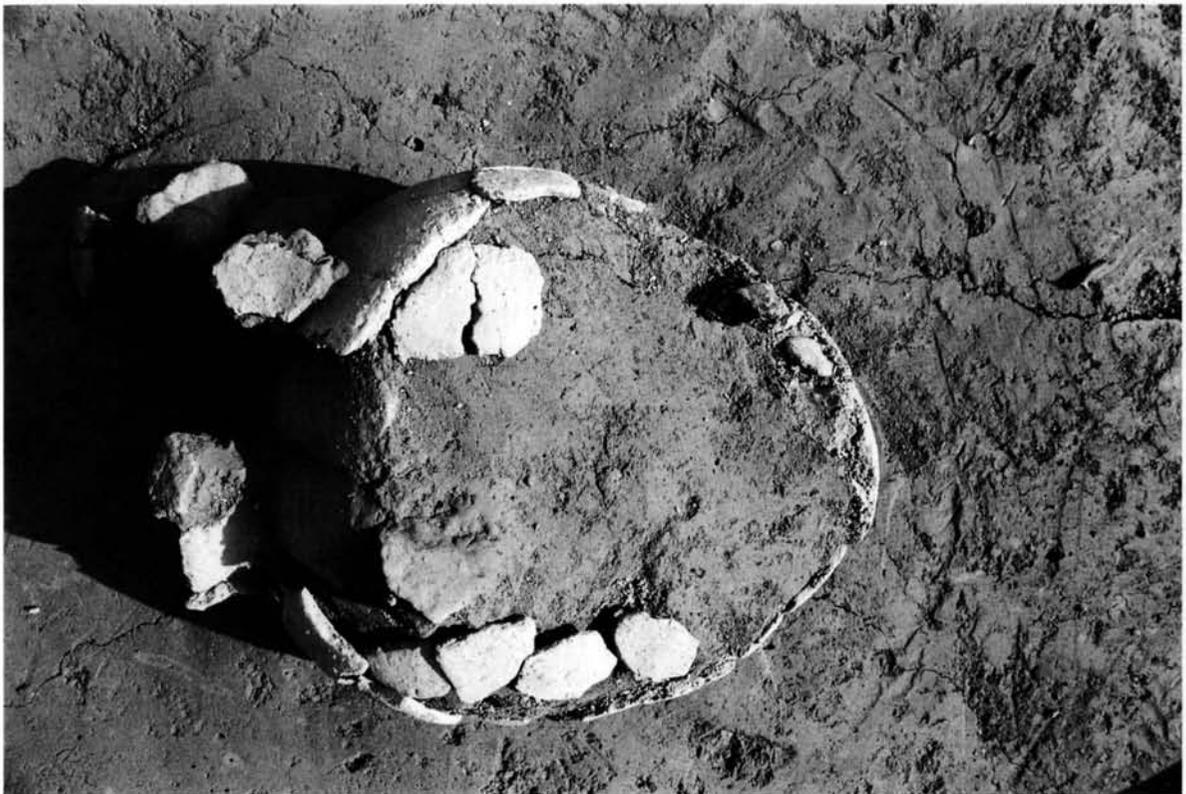


第Ⅱ区古墳時代出土状態2

PL.68



第Ⅱ区古墳時代出土状態 3



第Ⅱ区古墳時代出土状態 4

PL.70



第Ⅱ区古墳時代出土状態 5

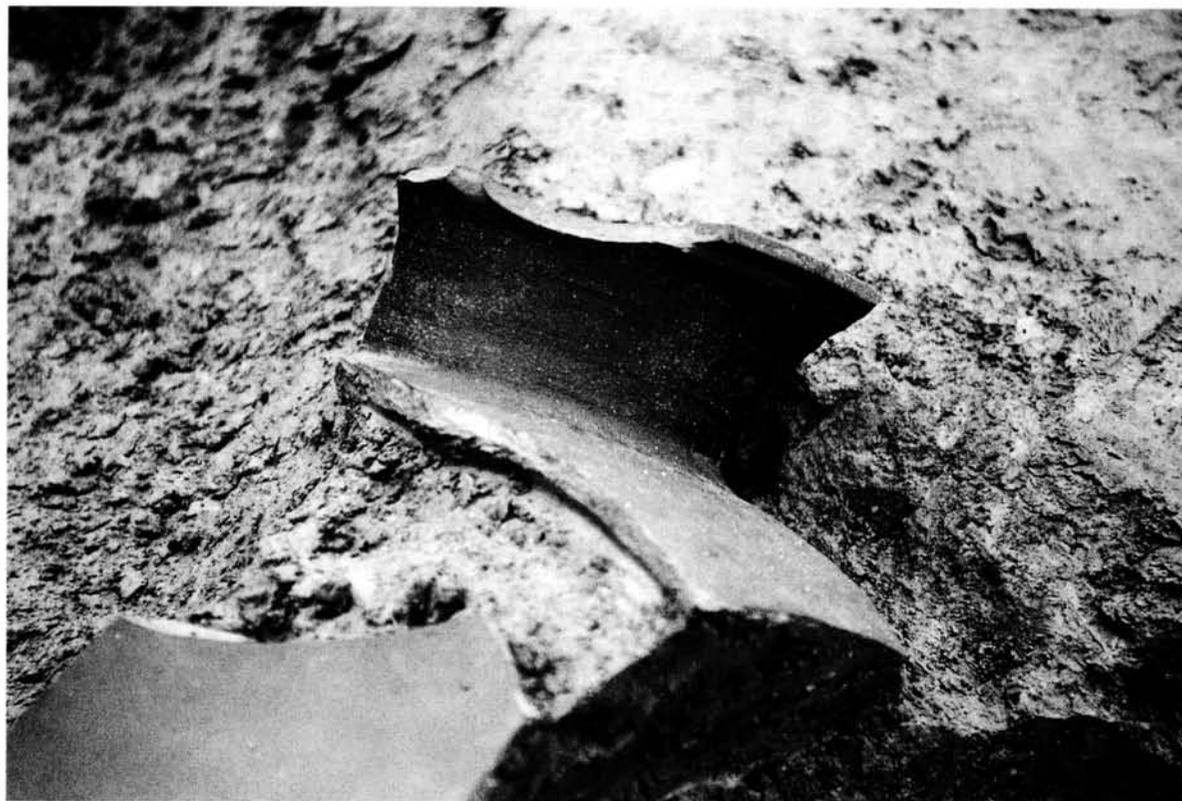


第Ⅱ区古墳時代出土状態 6

PL.72



第Ⅱ区古墳時代出土状態7



第Ⅱ区古墳時代出土状態 8

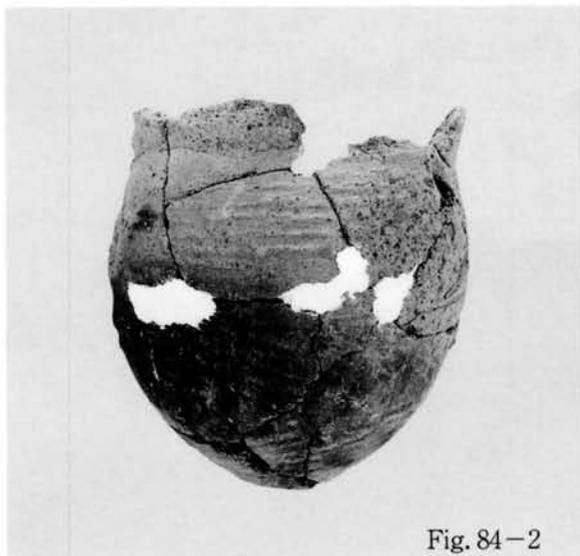


Fig. 84-2

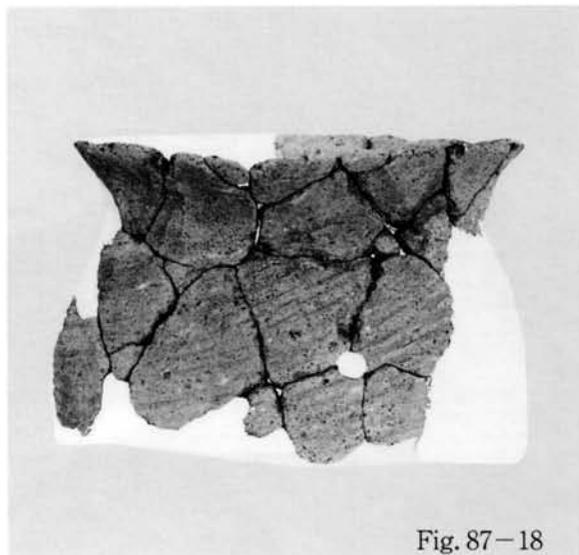


Fig. 87-18

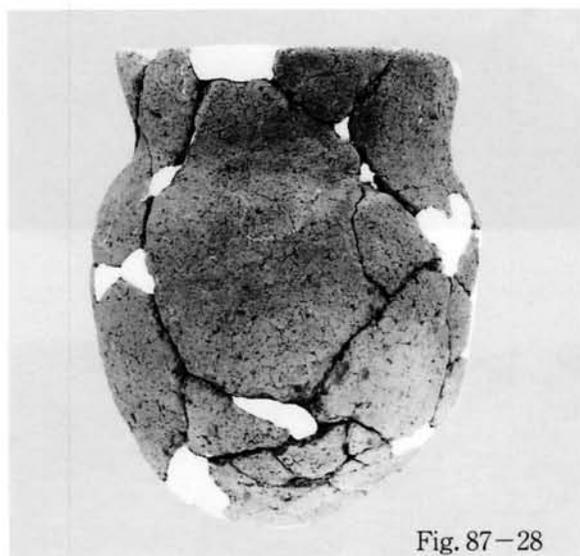


Fig. 87-28

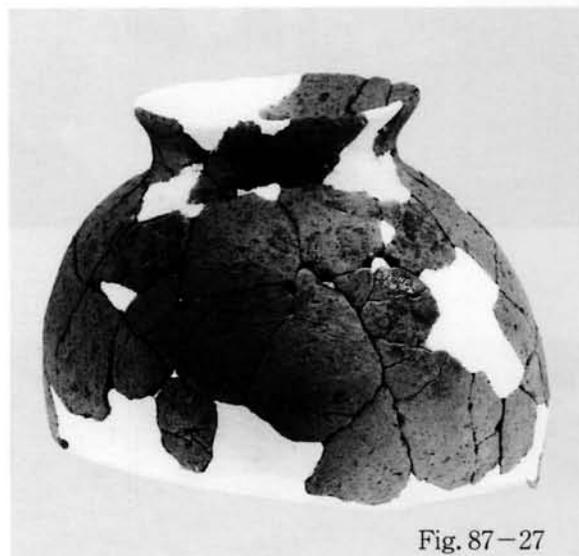


Fig. 87-27

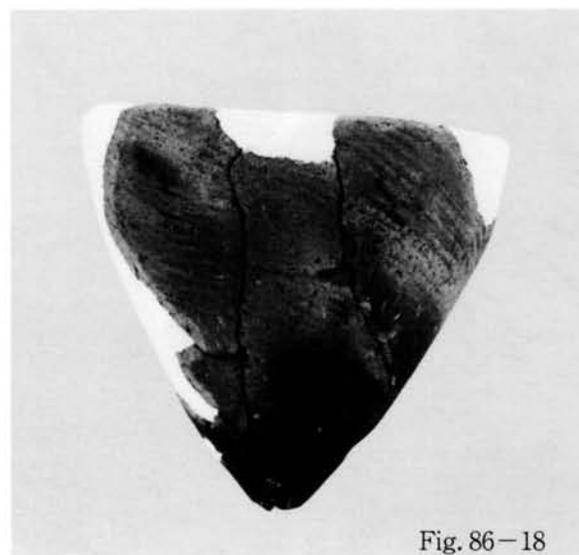
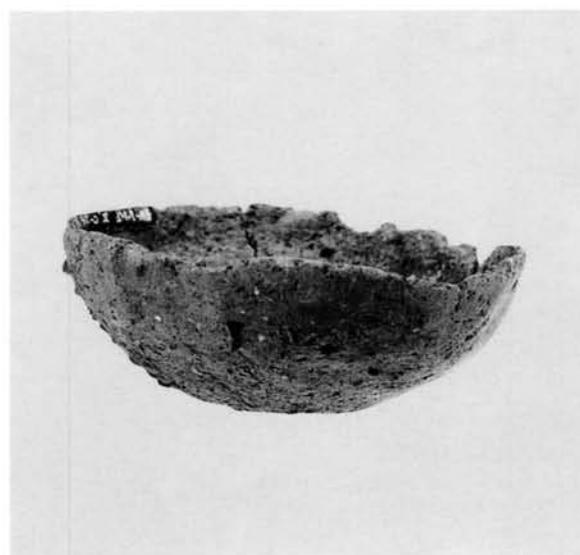


Fig. 86-18



Fig. 31-4



Fig. 33-16



Fig. 84-1



Fig. 86-11



Fig. 88-17



Fig. 84-3

第 I · II 区弥生土器壺 · 須恵器甕 · 古式土師器壺 · 鉢



Fig. 85-15



Fig. 86-32

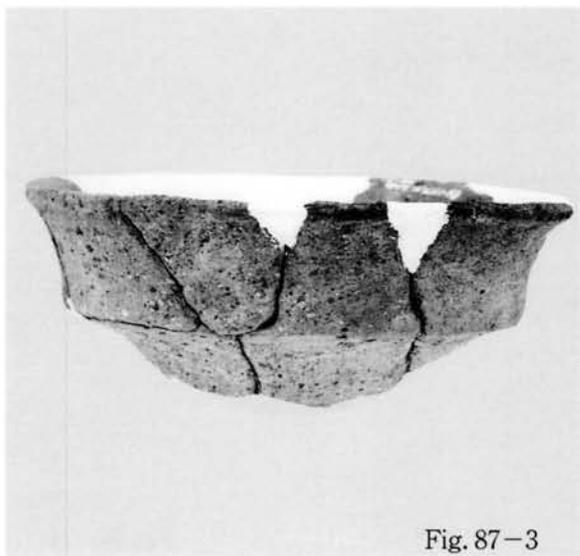


Fig. 87-3

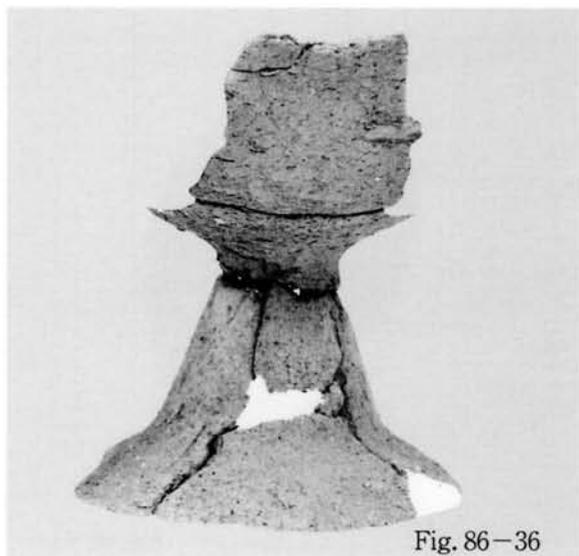


Fig. 86-36



Fig. 86-35

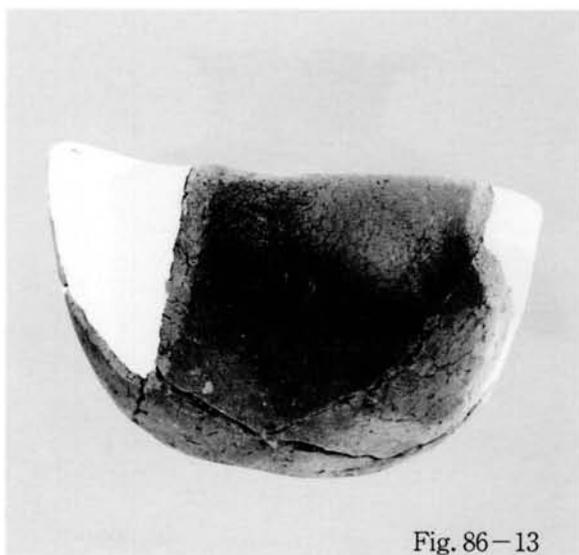
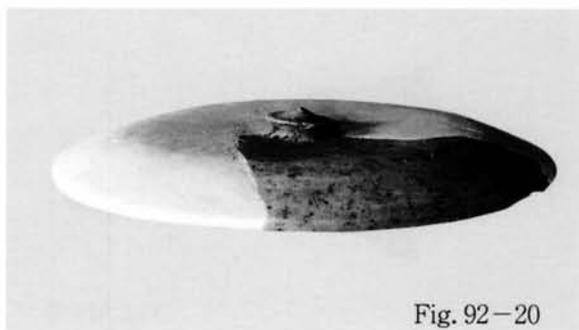
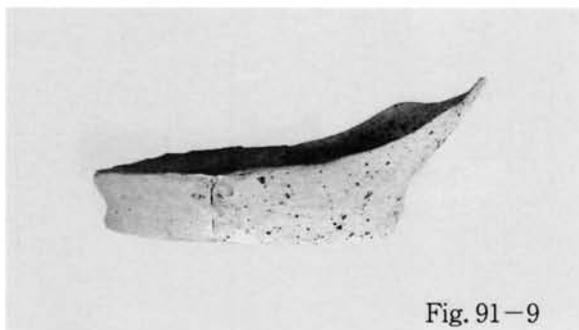
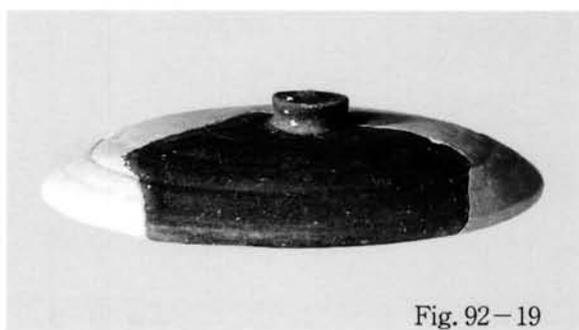
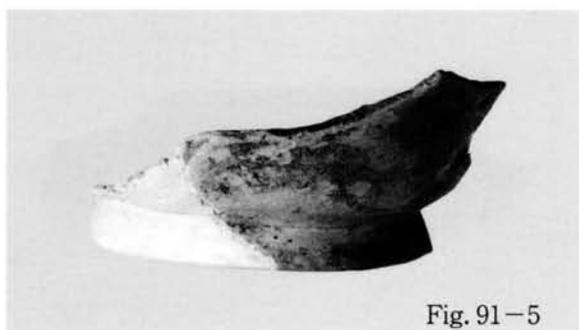
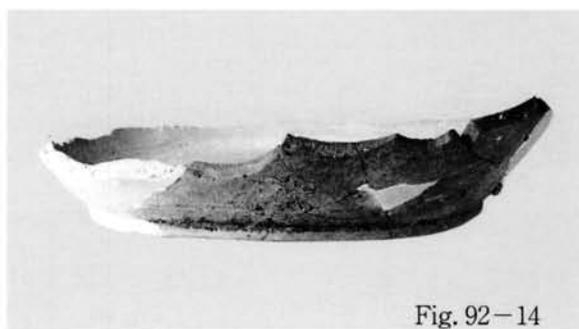
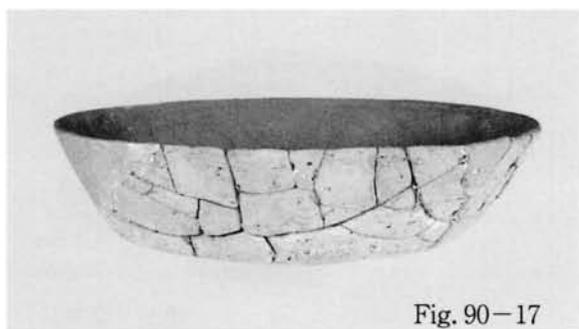
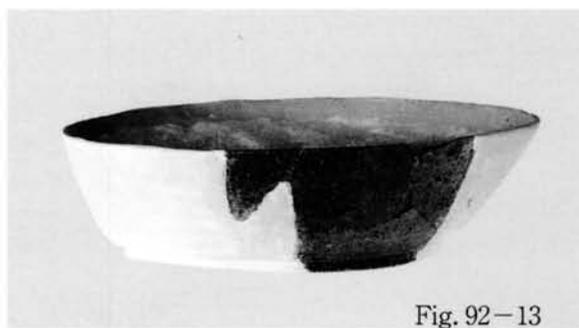
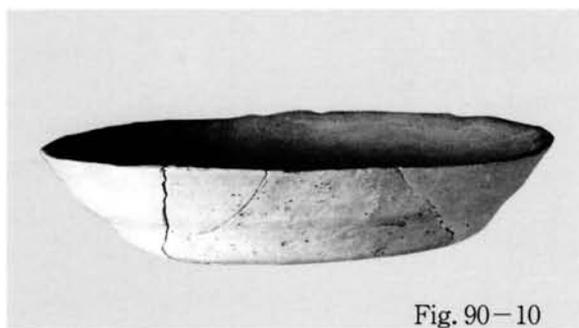
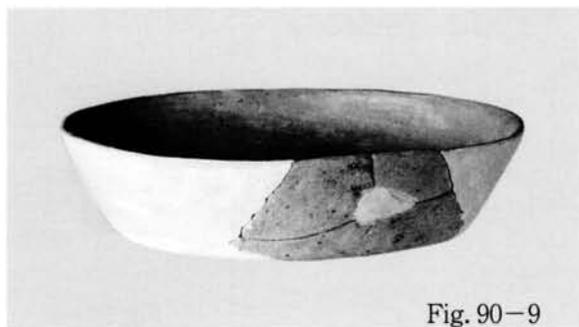


Fig. 86-13



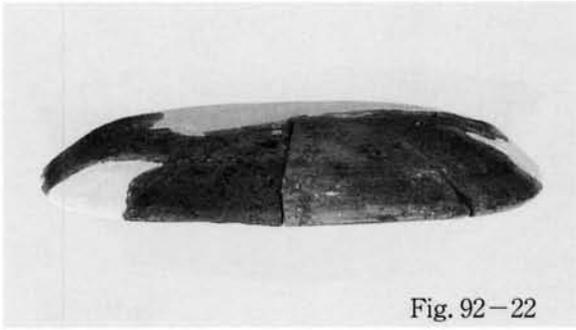


Fig. 92-22

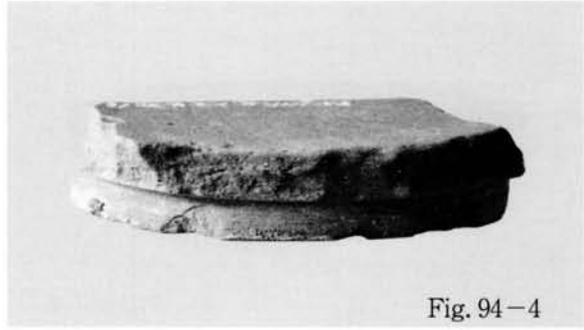


Fig. 94-4

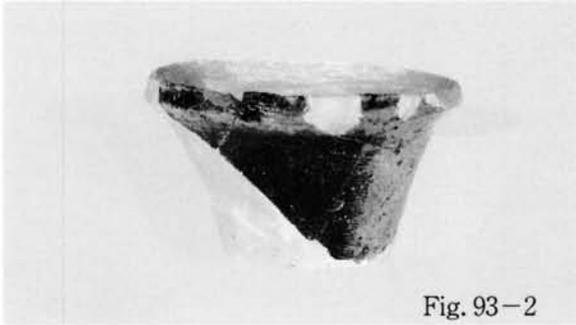


Fig. 93-2

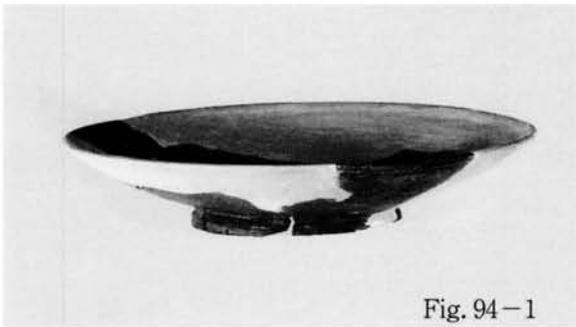
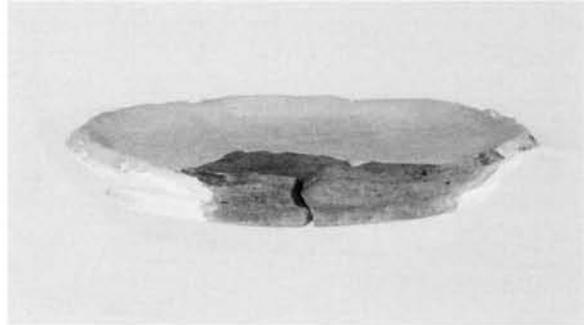
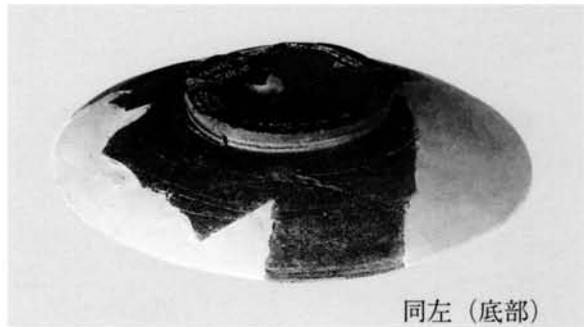


Fig. 94-1



同左 (底部)

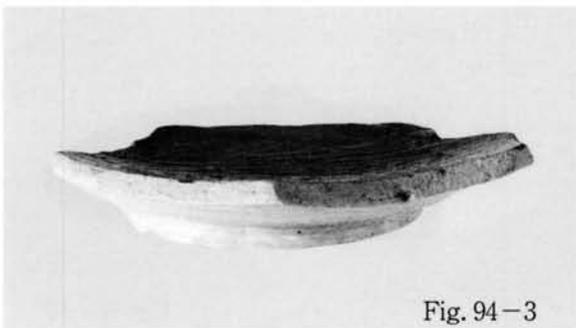
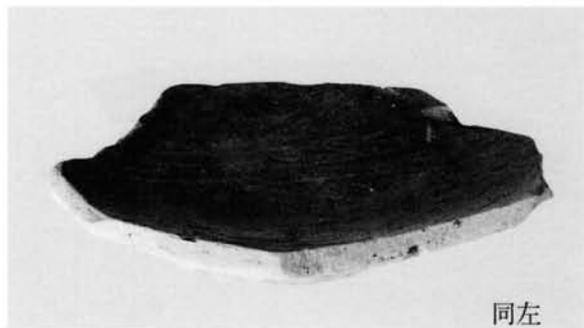


Fig. 94-3



同左

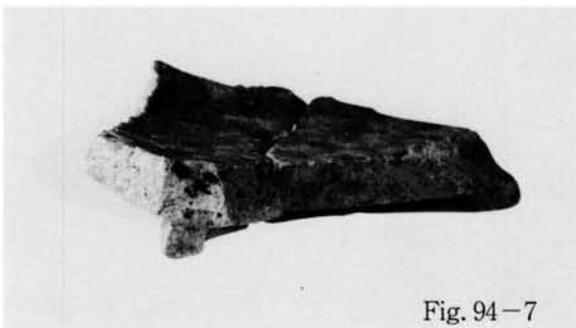
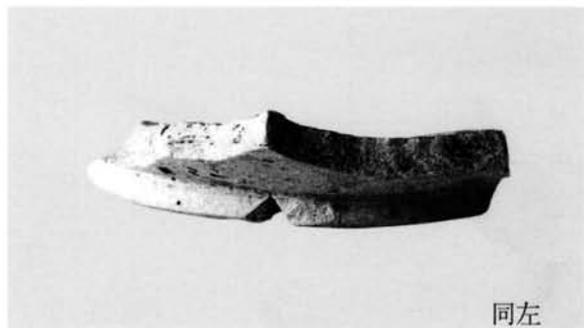


Fig. 94-7



同左

付 編

船戸遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

船戸遺跡（高知県中村市森沢に所在）は、四万十川の支流の一つの中筋川沿いに広がる中筋平野に位置する。本遺跡は、縄文時代後期の土器・石器、古墳時代～中世の遺構・遺物などが検出されている。高知県内では、山中ほか（1992）・中村（1965）などにより、高知平野において花粉分析結果により古植生の変遷が検討されている。しかし、四万十川流域では調査研究例がなく、植生変遷史が明らかにされていない。そこで、今回の自然科学分析調査では、縄文時代後期～近世における遺跡周辺の古植生を検討するために花粉分析をおこなった。

また、縄文時代後期の剥片などの岩石名を明らかにするために、岩石薄片作製鑑定を行うとともに、平安時代の須恵器などの土器を対象にして胎土の鉱物組織・組成を明らかにし、土器の焼成温度や素材となる粘土の原産地に関する資料を得るために、胎土薄片作製鑑定を行った。

1. 花粉分析

（1）試料

本遺跡の層序は、下位よりJ層・Ⅶ～Ⅲ層に分層されている。J層は調査区東端にみられ、暗灰黄色礫混じり粘土質シルト～砂混じりシルトが地山地形の傾斜に沿って堆積する。Ⅶ～Ⅲ層の層相は、Ⅶ層が黒褐色砂・礫混じりシルト、Ⅵ～Ⅲ層が灰色～灰褐色砂質シルトである。発掘調査の結果、J層で縄文時代後期の遺物、Ⅶ層下部で縄文時代晩期の遺物、Ⅵ層で4世紀の遺物、Ⅴ層で、4～9世紀の遺物、Ⅳ層で10～15世紀の遺物、Ⅲ層で近世水田跡がそれぞれ検出されている。

花粉分析試料は、Ⅱ区南北ベルト（A-A'）からⅥ～Ⅲ層を対象に15点（上位より試料番号1～15）、東西ベルト（B-B'）からJ層を対象に5点（上位より試料番号16～20）の合計20点である（図1・2）。

（2）分析方法

湿重約10gの試料について水酸化カリウム（KOH）処理、重液分離（臭化亜鉛、比重2.2）フッ化水素（HF）処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から花粉・孢子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

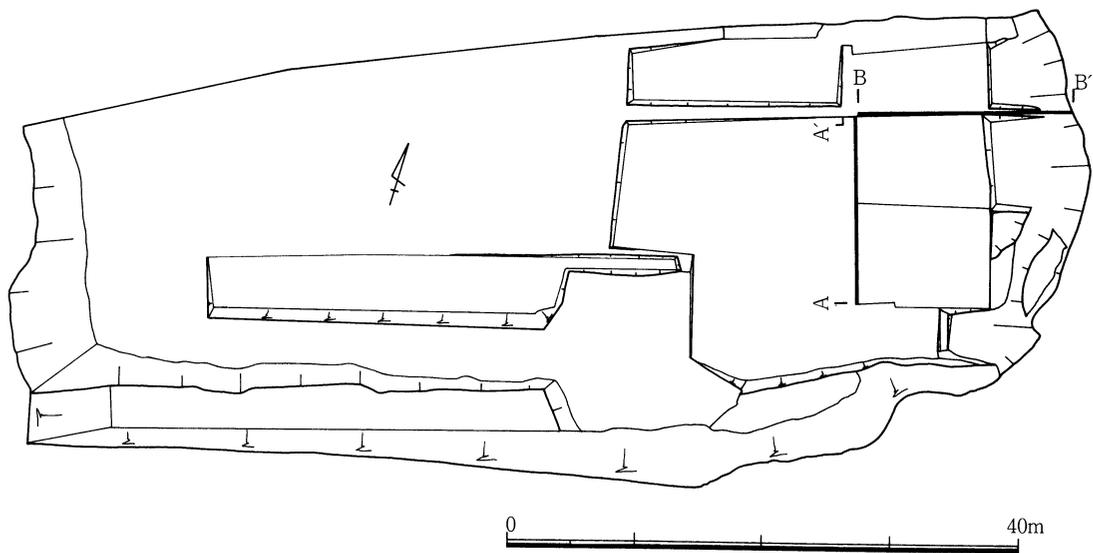


図1 試料採取地点

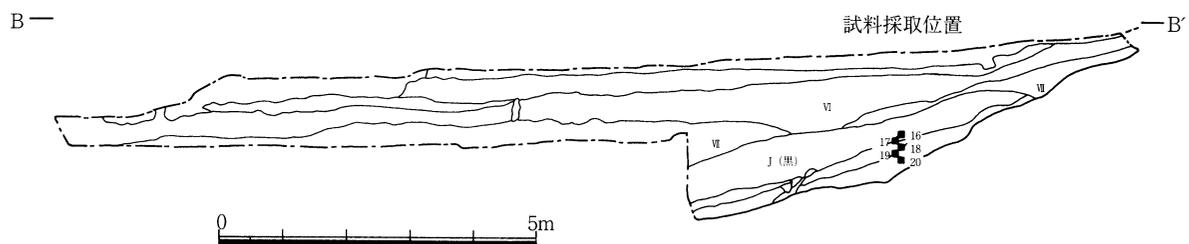
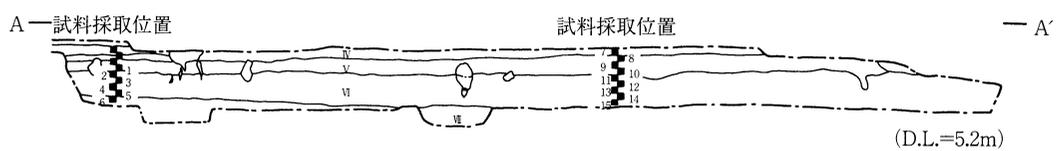


図2 試料採取地点の土層断面および試料採取層位

(3) 花粉化石の産状

結果は、表1に示す。花粉化石は保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたりする。各試料を通じて、花粉化石が統計的に扱えるほど検出されず、シダ類孢子が多産する。検出される種類は、木本花粉が10種類、草本花粉が4種類、シダ類孢子が2種類の合計16種類である。

(4) 考察

今回、分析試料中から検出された花粉・孢子化石は、遺跡周辺に生育していた母植物に由来していると考えられる。検出された種類の中でミズワラビ属が水生植物の一つであることから、周辺流域の水湿地にはミズワラビ属が生育していた可能性もある。しかし、花粉化石の保存状態が悪く、しかも検出個体数も統計的に扱えるほどのものでない。一般的に花粉化石は、種類により腐蝕に対する抵抗性が異なるとされており、針葉樹の花粉やシダ類孢子の方が広葉樹の花粉と比較して分解し難いとされている（中村、1967）。また、落葉広葉樹の花粉の大半に風化の痕跡がみられるならば、その試料は花粉分析に不適であるとされている（徳永・山内、1977）。これらのことを考えると、今回の花粉分析結果は、遺跡周辺の植生を十分に反映していないと考えられる。したがって、縄文時代後期・晩期～近世における調査地点周辺地域の古植生を検討することは差し控える。

表1. 花粉分析結果

種類 (Taxa) 試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
木本花粉																				
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
マツ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	51	4
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
スイカズラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
草本花粉																				
イネ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	39	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
不明花粉																				
シダ類孢子																				
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
他のシダ類孢子	18	32	125	180	55	12	102	73	64	40	147	67	7	10	9	2	3	1	436	94
合計																				
木本花粉	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	63	5
草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	44	0
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子	18	32	125	180	55	12	102	73	64	40	147	67	7	10	9	2	3	1	439	94
総花粉・孢子数	18	32	125	181	55	13	102	73	64	40	147	67	7	11	9	2	3	5	546	99

2. 岩石薄片作製鑑定

(1) 試料

試料は、縄文時代後期の剥片5点（試料番号1～5）である。その中で試料番号3は石鏃の未製品ではないかと考えられている。

(2) 方法

顕微鏡観察を行うために試料をダイヤモンドカッターで切断し、30 μ mの厚さに研磨して薄片を作製する。作製された薄片プレパラートを偏光顕微鏡下において、鉱物組織・組成を観察した。

(3) 顕微鏡観察結果

・試料番号1：シルト岩

岩石の組織

碎屑状組織（clastic texture）を示す。基質の粘土は雲母鉱物・珩長質鉱物等に変質している。

碎屑片（鉱物片）

斜長石：少量存在し、粒径0.17～0.04mmの他形粒状で集片双晶がみられる。曹長石質である。

カリ長石：少量存在し、粒径0.13～0.03mmの他形粒状で、灰色に汚染されているものがある。

石英：少量存在し、粒径0.2～0.02mmの他形破片状を示す。

基質

粘土：基質を構成するが、二次的な雲母鉱物（黒雲母）や微細な珩長質鉱物に変質し、弱い変成作用を受けている形跡がみられる。

変質鉱物

斜長石：少量～中量存在し、粒径最大0.02mmの他形粒状を呈する。基質を交代している

石英：少量～中量存在し、粒径最大0.03mmの他形粒状を呈する。基質を交代し、微粒集合状で斜長石と共生している。

黒雲母：中量存在し、粒径最大0.03mmの他形微粒状集合を作り、淡褐色～褐色の色調を呈する。基質を交代している。

緑簾石：少量存在し、粒径最大0.05mmの他形柱状・粒状を呈する。

不透明鉱物：少量存在し、粒径最大0.07mmの他形粒状を示す。

・試料番号2：泥岩

岩石の組織

碎屑状組織（clastic texture）を示す泥岩。大型の碎屑片は含まれない。

鉱物片

斜長石：少量存在し、粒径最大0.05mmの他形粒状で曹長石質である。セリサイト化作用を受けている。

石英：少量存在し、粒径最大0.04mmの他形破片状を示す。

黒雲母：少量存在し、粒径最大0.07mmの他形板状を呈し、淡色化している。無色～褐色の多色性を示す。

不透明鉱物：少量存在し、粒径最大0.07mmの他形不規則粒状を示す。

基質

粘土：多量存在し、岩石の主要部を構成する。淡褐色を示す非晶質粘土鉱物で、上記の鉱物片を含む。

変質鉱物

ゼオライト：微量存在し、粒径最大0.05mmの他形柱状を呈し、斜長石片を交代する。

ゼオライト脈：微量存在し、脈幅最大0.12mmである。脈を構成するゼオライト鉱物は半自形柱状を呈し、一部に双晶がみられる。なお、ゼオライトの鉱物種の識別にはX線回析による同定が必要である。

水酸化鉄脈：微量存在し、脈幅最大0.02mmの薄脈で、光学的に非晶質で、褐色の水酸化鉄で構成される。

・ 試料番号3：砂質泥岩

岩石の組織

碎屑状組織（clastic texture）を示す。変質鉱物としてゼオライトが生成している。

碎屑片（鉱物片）

斜長石：少量存在し、粒径最大0.23mmの他形破片状粒状で集片双晶がみられ、一部はゼオライト化している。

カリ長石：少量存在し、粒径最大0.2mmの他形破片粒状を呈する。

石英：少量存在し、粒径最大0.18mmの他形破片状を示す。

黒雲母：微量存在し、粒径最大0.05mmの他形板状を呈し、淡褐色～濃褐色の多色性が著しい。

ジルコン：微量存在し、粒径最大0.08mmの他形破片粒状を呈する。

基質

粘土：多量存在し基質を構成する。非晶質粘土鉱物である。

変質鉱物

ゼオライト：少量存在し、粒径最大0.04mmの半自形柱状を呈し、斜長石を交代する。斜消光し、（－）の伸長性を示す。光学性はスチルバイトを類似するが、ゼオライトの鉱物種の識別にはX線回析による同定が必要である。

ゼオライト脈：少量存在し、脈幅最大0.3mmである。脈を構成するゼオライト鉱物は半自形～他形柱状を呈し、上記の斜長石を交代するゼオライトと同質の光学性を有している。

・ 試料番号4：シルト岩

岩石の組織

碎屑状組織（clastic texture）を示す。基質の粘土は雲母鉱物等に変質している。

碎屑片（鉱物片）

斜長石：少量存在し、粒径最大0.47mmの他形破片状粒状で集片双晶がみられる。曹長石質である。

カリ長石：少量存在し、粒径最大0.2mmの他形粒状で一部はセリサイトに交代されている。

石英：少量存在し、粒径最大0.18mmの他形破片状を示し、波状消光する。

黒雲母：少量存在し、粒径最大0.31mmの他形板状を呈し、淡褐色～濃褐色の多色性が著しい。

白雲母：微量存在し、粒径最大0.15mmの半自形板状を呈する。

基質

粘土：中量存在し、基質を構成する。二次的な雲母鉱物（黒雲母）に変質し、弱い変成作用を受けている形跡がみられる。

変質鉱物

斜長石：少量～中量存在し、粒径最大0.02mmの他形粒状を呈する。基質を交代している。

黒雲母：中量存在し、粒径最大0.05mmの他形微粒状・繊維状集合を作り、淡褐色～褐色の色調を呈する。基質を交代している。

セリサイト：微量存在し、粒径最大0.15mmの繊維状を示す。

化石：微量存在し、粒径最大0.3mmの球状を呈する。

・試料番号5：シルト岩

岩石の組織

碎屑状組織（clastic texture）を示す。基質の粘土は雲母鉱物に変質している。

碎屑片（鉱物片）

斜長石：少量存在し、粒径最大0.15mmの他形破片状粒状・柱状で集片双晶がみられる。曹長石質である。

カリ長石：少量存在し、粒径最大0.13mmの他形粒状を呈する。

石英：少量存在し、粒径0.18mmの他形破片状を示す。一部は微晶に再結晶した組織がみられる。

黒雲母：少量存在し、粒径最大0.2mmの他形板状～紐状を呈し、淡褐色～濃褐色の多色性が著しい。

白雲母：微量存在し、粒径最大0.14mmの他形葉片状を呈する。

基質

粘土：基質を構成するが、二次的な雲母鉱物（黒雲母）に変質し、弱い変成作用を受けている形跡がみられる。

炭質物：少量存在し、粒径最大0.25mmの暗褐色他形シーム状・クロット状で層理に平行する。

変質鉱物

黒雲母：中量存在し、粒径最大0.02mmの他形微粒交代状を呈し、淡褐色～褐色の色調を示して基質を交代している。

(4) 剥片の岩種について

四国のほぼ中央部を東西に走る仏像構造線の南側の地帯を四万十帯、この地帯に分布する地層群を四万十累層群と呼んでいる。四国西部の四万十帯は宿毛―中村を結ぶ中筋構造線を境として、北側を主に白亜系が分布する北帯に、南側を主に古第三系が分布する南帯に区分されている。四万十累層群の地層は主に砂岩・シルト岩・泥岩で構成されるタービダイトで、一部に緑色岩類と層状チャートを伴っている。これらの地層には大型化石が乏しいため、地層区分や時代対比は困難であったが、最近では微化石層序学の進歩に伴い、その全容が明らかにされるようになってきた。

- 1) 剥片に使用している岩種は、シルト岩・泥岩・砂質泥岩で、中村市周辺に広く分布している四万十累層群を構成する堆積岩類とみなすことができる。しかし、北帯・南帯のいずれに属するかは明らかではない。
- 2) シルト岩は弱い変成作用を受け、基質が変質し、雲母鉱物（大部分は黒雲母）が生成されている特徴を有する。鉱物片として石英が多くみられ、また、基質には雲母鉱物が生成されているため、緻密で比較的堅硬な岩質となっている。今回は剥片を対象としたが、石材はこのような物理性を利用した石器に用いられたものと考えられる。
- 3) 泥岩・砂質泥岩は緻密な基質を有し、層理に平行な鉱物の配列がみられる。従って、いわゆる粘板岩と同様に、薄片状の切片が得られ易い岩質を有している。本岩の場合はこのような岩石の特性を利用することにより、石器製作が容易であることが原料として選択された理由と考えられる。

3. 須恵器等の薄片顕微鏡観察

(1) 試料

試料は、平安時代の須恵器などの土器5点（試料番号1～5）である。試料番号1・2・4は須恵器（器種不明）、試料番号3は瓦器と思われる土器、試料番号5は黒色土器である。

(2) 方法

岩石薄片作製鑑定と同様である。

(3) 結果

・試料番号1：須恵器

鉱物片

石英：中量存在し、粒径0.04mm～0.8mmの他形破片粒状を呈する。鉱物片内部に高温焼成で生じたクラックがみられ、クラックに沿って熔融した組織が観察される。

カリ長石：微量～少量存在したと推定されるが、高温焼成により溶化し、残晶はみられない。溶化状態から推定される鉱物の粒径は、最大0.5mm程度である。

斜長石（曹長石）：少量存在し、粒径最大0.5mmの他形粒状を呈す。斜長石の大部分は高温焼成を受けたため、非晶質化し、針状のムライトを生成しているが、一部に残晶が認められ、集片双

晶がみられる。

ジルコン：きわめて微量存在し、粒径最大0.05mmの半自形破片状を呈する。

不透明鉱物：微量存在し、粒径0.1mmの他形粒状を示し、基質中に点在する。

岩片

石英片岩：少量存在し、粒径最大2.2mmの角礫状を呈する。波状消光の著しく、定向配列する石英で構成されている。

チャート：微量～少量存在し、粒径最大0.3mmの亜角礫状を呈する。微晶質石英の集合体で構成されている。

泥岩：微量存在し、粒径0.2～0.4mmの亜円礫状～亜角礫状を呈し、一部は非晶質、一部は微細な珪長質鉱物に変質している。

基質

中量存在し、粒径0.03mm以下の石英破片粒と粘土で構成されるが、粘土は高温焼成され、非晶質化または溶化しているため、本来の光学性を示すものは認められない。基質の色調は淡褐色で、中程度の配向性を示し、淘汰性は不良である。

高温鉱物

ムライト：高温で焼成され、主として斜長石（曹長石）から長さ0.02mm以下の針状ムライトが生成されている。ムライトの生成状況は針状結晶の長さが短く、生成密度も粗である。おそらく、1,200℃±の焼成温度であろうと推定される。

溶化ガラス：少量存在し、カリ長石・基質中に円形を示している。

・試料番号2：須恵器

鉱物片

石英：中量存在し、粒径0.05～0.6mmの他形破片粒状を呈する。一部の石英は波状消光が著しい。しばしば高温焼成によるクラックが存在し、溶融組織がみられる。

カリ長石：少量存在し、粒径最大0.25mmの他形粒状を呈する正長石である。カリ長石粒外縁の劈開に沿って溶融した組織がみられる。

斜長石：微量～少量存在し、粒径最大0.17mmの他形破片粒状を呈する。集片双晶がみられるが、ムライト化・ガラス化などの加熱変化はみられない。

黒雲母：きわめて微量存在し、粒径最大0.1mmの他形長柱状を呈する。褐色を呈するが、多色性はきわめて弱い。

緑簾石：微量存在し、粒径最大0.05mmの他形粒状を呈する。

不透明鉱物：微量存在し、粒径最大0.07mmの他形粒状・長柱状を呈する。長柱状を呈するものは黒雲母からの変質物とみられる。

岩片

チャート：少量存在し、粒径最大2.3mmの亜角礫状を呈する。微晶質のカルセドニ質石英で構成されるものや、隠微晶質石英中にプール状の細晶質石英集合体を形成しているのがみられる。

花崗岩：少量存在し、粒径最大2.2mmの亜角礫状を呈する。粗晶質で、石英・カリ長石・斜長石で構成されるが、有色鉱物は含まれない。石英中にクラックが認められ、熔融組織を有している。

基質

基質は淡灰色を呈し、主に粒径0.05mm以下の石英と粘土鉱物で構成されるが、上記の大型の鉱物片・岩片を含み、淘汰性は不良である。粘土鉱物は高温焼成を受けているため、非晶質化し、原鉱物の光学性は残存していない。微量の化石を含み、骨片状・棒状を示すが、ガラス化している。鉱物の配向性は中程度である。

孔隙：少量存在し、長さ最大0.05mmに伸長した筋状を呈する。

その他

本試料は石英・カリ長石に熔融組織が認められるが、ムライトが生成されていないことから1,150℃程度の焼成温度と推定される。

試料番号3：瓦器？

鉱物片

石英：少量存在し、粒径0.03～0.3mmの他形粒状を呈する。まれに高温焼成によるクラックが存在するが、明瞭な熔融組織はみられない。

カリ長石：微量存在し、粒径最大0.1mmの他形粒状を呈する正長石である。カリ長石粒外縁の劈開に沿って熔融した組織がみられるが微弱である。

斜長石：微量～少量存在し、粒径最大0.28mmの他形粒状を呈する。集片双晶がみられる。ムライト化・ガラス化などの加熱変化はみられない。

黒雲母：きわめて微量存在し、粒径最大0.1mmの他形長柱状を呈する。黒色の鉄鉱物が著しく、黒色不透明鉱物の内側に褐色を呈する残晶となっている。

不透明鉱物：微量存在し、粒径最大0.1mmの他形粒状・長柱状・粉状集合体状を呈する。長柱状を呈するものは黒雲母からの変質物とみられる。不透明鉱物の周縁の素地は熔融していることが多い。

岩片

チャート：きわめて微量存在し、粒径最大0.2mmの亜角礫状を呈する。微晶質のカルセドニ質石英で構成される。

泥岩：きわめて微量存在し、粒径最大0.15mmの亜円礫状を呈する。微晶質の珪長質鉱物に変質している。

片状石英岩：きわめて微量存在し、粒径最大0.18mmの亜角礫状を呈する。定向配列した細晶質石英の集合体で構成される。

花崗岩：微量存在し、粒径最大1.1mmの亜角礫状を呈する。粗晶質で、石英・カリ長石・斜長石で構成されるが、有色鉱物は含まれない。このほか、中晶質石英集合体で構成される岩片が存在する。

基質

基質は淡灰色を呈し、主に粒径0.03mm以下の石英と粘土鉱物で構成される。鉱物片・岩片を含み、淘汰性は中程度である。粘土鉱物は高温焼成を受けているため、非晶質化し、原鉱物の光学性は残存していない。鉱物の配向性はほとんど認められない。

孔隙：少量存在し、長さ最大0.4mmに伸長した筋状を呈する。

その他

本試料は石英粒中にクラックが、カリ長石に微弱な溶融組織が認められる。ムライト等の高温鉱物は生成されていない。1,100～1,150℃程度の焼成温度と推定される。

なお、本薄片の一部表面にはシルト質粘土が付着している。

試料番号4：須恵器

鉱物片

石英：少量存在し、粒径0.03～0.3mmの他形粒状を呈する。まれに高温焼成によるクラックが存在するが、明瞭な溶融組織はみられない。

カリ長石：微量存在し、粒径最大0.15mmの他形粒状を呈する仮晶で、高温焼成されたため溶融し、残晶は認められない。

斜長石：微量～少量存在し、粒径最大0.12mmの他形粒状の仮晶を呈する。鉱物粒全体が褐色の非晶質に変質している。褐色仮晶を高倍率で観察すると、微細な針状ムライトが生成している。

不透明鉱物：微量存在し、粒径最大0.05mmの他形粒状を呈する。

岩片

チャート：きわめて微量存在し、粒径最大0.1mmの亜角礫状を呈する。微晶質のカルセドニ質石英で構成される。

高温鉱物

ムライト：斜長石の仮晶と考えられる淡褐色非晶質物質中に、長さ0.02mm程度の針状結晶が生成されている。また、素地の粘土部に低結晶度のムライトと思われる繊維状結晶が生成されている。

溶化ガラス：微量～少量存在し、主としてカリ長石の仮晶中に生成されている。

酸化鉄焼結体：微量存在し、粒径最大0.3mmの粒状を呈する。焼結体の内部は空隙となっている。

基質

基質は褐色を呈し、主に粒径0.03mm以下の石英と粘土鉱物で構成される。鉱物片・岩片を含み、淘汰性は中程度である。粘土鉱物は高温焼成を受けて、非晶質化し、低結晶度のムライトと思われる繊維状鉱物を生成している。粘土鉱物の配向性は強く、繊維状鉱物の生成および孔隙は配向性と平行している。

孔隙：少量存在し、長さ最大1.0mmに伸長した筋状を呈する。

その他

本試料は、カリ長石が完全に溶化し、斜長石が非晶質化し、内部に針状ムライトが生成されている。また、素地の粘土が低結晶度のムライトに変化していることから1,200℃程度の焼成温度と推定

される。

試料番号5：黒色土器

鉱物片

石英：少量～中量存在し、粒径最大0.6mmの他形破片粒状を呈する。溶融組織はみられない。

カリ長石：少量存在し、粒径最大0.3mmの他形粒状を呈する正長石である。一部は鉱物粒外縁の劈開に沿って、僅かに溶融した組織がみられる。

斜長石：少量存在し、粒径最大0.3mmの他形破片粒状を呈する。集片双晶がみられる。ムライト化・ガラス化などの加熱変化はみられない。

黒雲母：少量存在し、粒径0.05～0.5mmの他形長柱状・葉片状を呈する。黒色鉄鉱物化しているものが多いが、一部は淡色化し、淡褐色～褐色の多色性を有している。

白雲母：微量存在し、最大0.3mmに伸長した針状を呈し、加熱変化はみられない。

角閃石：微量存在し、粒径最大0.25mmの他形破片粒状を呈する。淡緑色～緑色の多色性が著しい。が、一部の角閃石は淡黄褐色～淡褐色の色調を示し、軽度の酸化角閃石化が認められる。

斜方輝石：微量存在し、粒径最大0.15mmの他形破片粒状を呈する。淡黄褐色～淡緑色の多色性を有する。

単斜輝石：きわめて微量存在し、他形粒状・他形破片状を呈する。淡緑色で、多色性はきわめて弱い。

緑簾石：きわめて微量存在し、粒径最大0.02mmの他形粒状を呈する。

不透明鉱物：少量存在し、粒径0.05～0.15mmの他形粒状・長柱状を呈する。長柱状を呈するものは黒雲母からの変質物とみられる。

岩片

凝灰岩：微量存在し、粒径最大0.35mmの垂円礫状を呈する。非晶質で、一部の凝灰岩片の外縁は溶融した組織を示している。

セリサイト岩：きわめて微量存在し、粒径0.18mmの垂角礫状を呈する。粒径0.02～0.03mmの葉片状セリサイトの集合体で、変質岩の岩片と判定される。セリサイトは新鮮で加熱変化はみられない。

基質

セリサイト：中量存在し、最大0.05mmに伸長した繊維状を呈して定向配列し、基質を構成している。セリサイトは酸化鉄に汚染され、淡褐色を帯びているが、光学性は残存されている。

試料表面から0.8mmの間は黒色化している。従って、本試料の表面の黒色部は鉄分が多いため焼結で、カーボンの付着膜ではない。

孔隙：少量存在し、長さ最大0.8mmに伸長した不定形を呈する。ほぼセリサイトの配列に平行している。

その他

本試料は本来土師器に属すると考えられる。原土は試料番号1～4と異なり、含鉄セリサイト質で、

セリサイトがほとんど完全に残留していること、角閃石の熱変化から判断すると、800～900℃程度の焼成温度と推定される。

(4) 考察

- 1) 顕微鏡観察を行った試料のうち、試料番号1～4は比較的高温で焼成され、試料番号5は比較的低温で焼成されたと判断される。
- 2) 試料番号1～4に含まれる鉱物片は、石英・カリ長石・斜長石の他に黒雲母・ジルコン・緑簾石が認められる。
- 3) 長石類と黒雲母は焼成温度が高いほど変化を起し、試料番号1および試料番号4では、カリ長石は完全溶化（ガラス化）し、斜長石は非晶質化して新たに高温鉱物としてムライトを生成している。実験的に、石英・粘土鉱物等が共生する系におけるカリ長石の溶融温度は1,150℃、ムライトが顕在化する温度は約1,200℃程度、石英が溶融し始める温度は1,150℃とされていることから、試料番号1および試料番号4の焼成温度は約1,200℃と推定される。また、試料番号1および試料番号4では、黒雲母も鉄鉱物化し、不透明鉱物に変質し、一部に残晶が認められるものの、原鉱物は残留していない。
- 4) これに対し、試料番号2および試料番号3では、石英中に高温焼成によるクラックが存在するものの明瞭な溶融組織が認められず、カリ長石は鉱物粒周縁の劈開に沿って微弱な溶融組織を示すが、斜長石に顕著な変化が認められず、ムライト等の高温鉱物は生成されていない。これらの現象から、試料番号2は1,150℃程度、試料番号4は1,100～1,150℃の焼成温度が推定される。
- 5) 試料番号1～4に含まれる岩片はチャート・石英片岩・片状石英岩などの古期岩層の破片と花崗岩類で、一部に泥岩が含まれる。
- 6) 試料番号5の原料粘土・焼成温度は試料番号1～4と異なっている。
 - (a) 鉱物片に石英・カリ長石・斜長石・黒雲母が含まれるのは共通しているが、この他に、いずれも微量～きわめて微量の斜方輝石・単斜輝石・角閃石・白雲母・緑簾石が認められる。斜方輝石・単斜輝石・角閃石は通常安山岩などの火山岩に由来することが多い鉱物種で、試料番号1～4には認められていない。
 - (b) 岩片として非晶質の凝灰岩が含まれる。凝灰岩は試料番号1～4には認められていない。(a)と関連する岩種で、試料番号1～4の原土採取地とは全く異なる地域の原土であると判定される。
 - (c) 素地も試料番号1～4と異質で、淘汰性の不良な含鉄セリサイト質粘土を使用している。この種の粘土はいわゆる「土師器」に多様されている低温焼成に適する性質を有している。含鉄量が多いと焼結温度を下げる効果がある。この原料を用いて試料番号1～4のような高温焼成を行った場合は、耐火度が低いため製品の製造は不可能である。
 - (d) 試料番号5にはセリサイトが光学性を保ったままその大部分が残存している。セリサイトなどの雲母鉱物は約900℃で、本来の性質を失い、さらに温度を上げると、非晶質化・ガラス化などの現象を示す。また、含まれる角閃石の一部は弱い酸化角閃石化を示している。この変化

は角閃石は800℃以上で加熱した場合にみられる現象である。従って、本試料の焼成温度は800～900℃と推定するのが妥当であろうと考えられる。

引用文献

中村純（1967）花粉分析．232p．，古今書院

徳永重元・山内輝子（1977）花粉・孢子．「化石の研究法」、化石研究会編著、p．50-73、共立出版株式会社

偏光顕微鏡写真説明

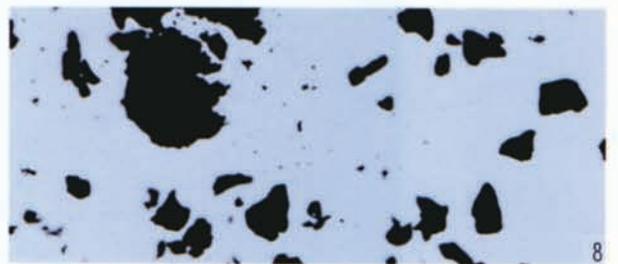
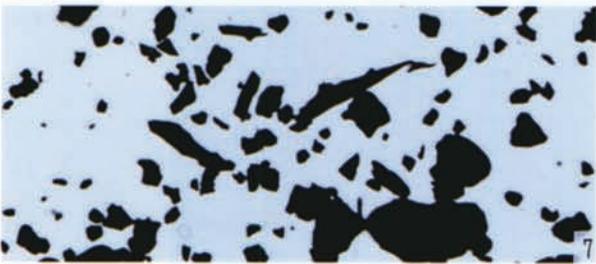
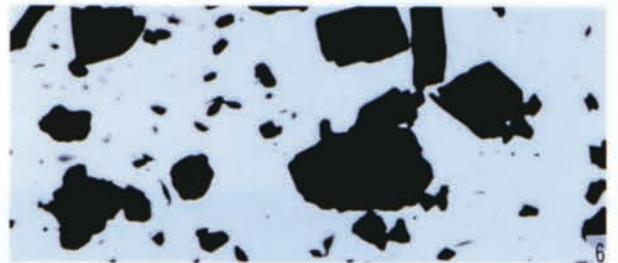
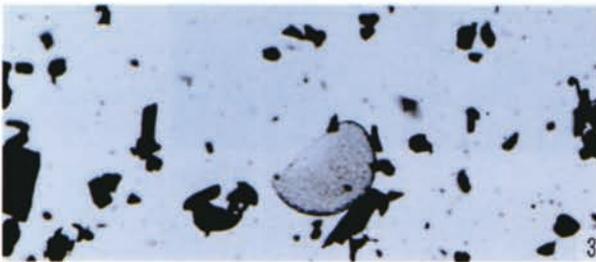
鉱物・岩片等の略号

Qz	：石英 (quartz)
Kf	：カリ長石 (potassium feldspar)
Pl	：斜長石 (plagioclase)
Bi	：黒雲母 (biotite)
Ho	：角閃石 (hornblende)
Ze	：ゼオライト (zeolite)
Z-v	：ゼオライト脈 (zeolite vein)
Op	：不透明鉱物 (opaque mineral)
Mu	：ムライト (mullite)
Gl	：ガラス (glass)
Chr	：チャート (chert)
Q-s	：石英片岩
Gm	：基質 (matrix)
P	：孔隙 (pore)

顕微鏡写真一覧

図版番号	写真内容	対物倍率	ニコル
1	花粉化石		
2	岩石薄片試料番号1シルト岩	×12.5	－
2	同 上	×12.5	＋
3	岩石薄片試料番号2泥岩	×12.5	－
3	同 上	×12.5	＋
4	岩石薄片試料番号3砂質泥岩	×12.5	－
4	同 上	×12.5	＋
5	岩石薄片試料番号4シルト岩	×12.5	－
5	同 上	×12.5	＋
6	岩石薄片試料番号5シルト岩	×12.5	－
6	同 上	×12.5	＋
7	須恵器等の薄片試料番号1須恵器	×12.5	－
7	同 上	×12.5	＋
8	須恵器等の薄片試料番号1 須恵器 (図版7の拡大写真)	×25	－
8	同 上	×25	＋
9	須恵器等の薄片試料番号2 須恵器	×12.5	－
9	同 上	×12.5	＋
10	須恵器等の薄片試料番号3 瓦器?	×12.5	－
10	同 上	×12.5	＋
11	須恵器等の薄片試料番号4 須恵器	×12.5	－
11	同 上	×12.5	＋
12	須恵器等の薄片試料番号5 黒色土器	×12.5	－
12	同 上	×12.5	＋

図版1 花粉化石



50 μ

(1)

100 μ

(2)

100 μ

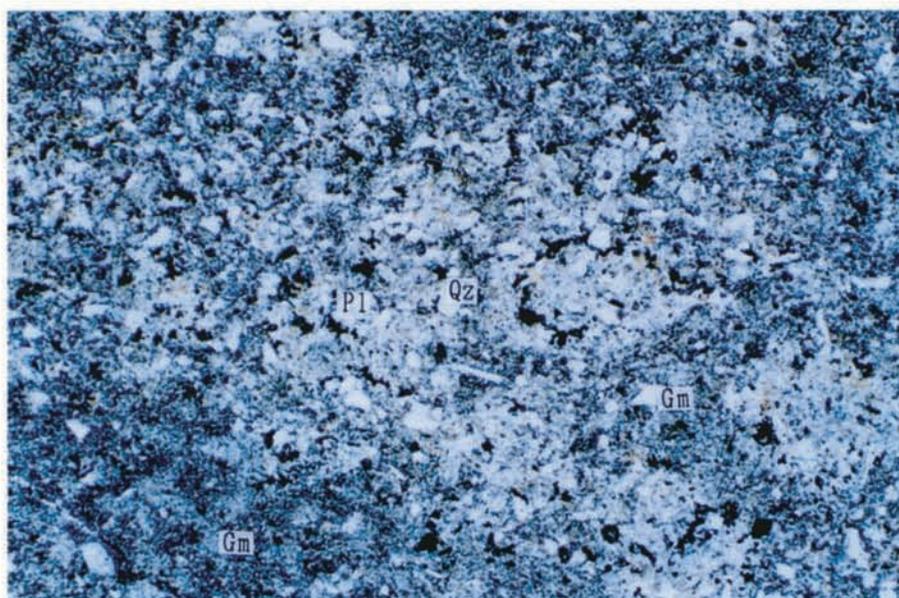
(3-10)

1. マツ属 (試料番号19)
3. 状況写真 (試料番号1)
5. 状況写真 (試料番号6)
7. 状況写真 (試料番号9)
9. 状況写真 (試料番号17)

2. ミズワラビ属 (試料番号19)
4. 状況写真 (試料番号3)
6. 状況写真 (試料番号7)
8. 状況写真 (試料番号13)
10. 状況写真 (試料番号19)

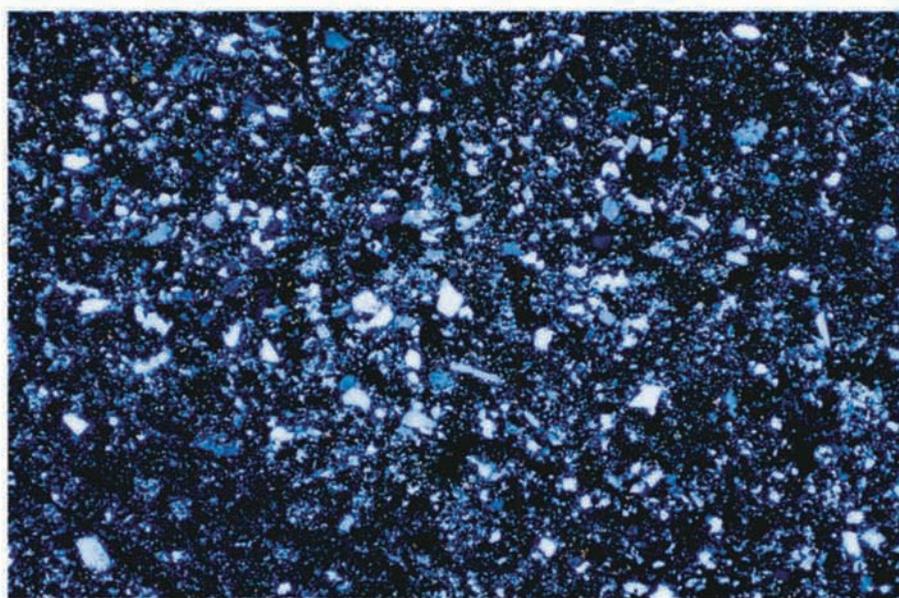
図版2 岩石薄片顕微鏡写真

資料番号1 シルト岩



下方ポーラー

0.5mm

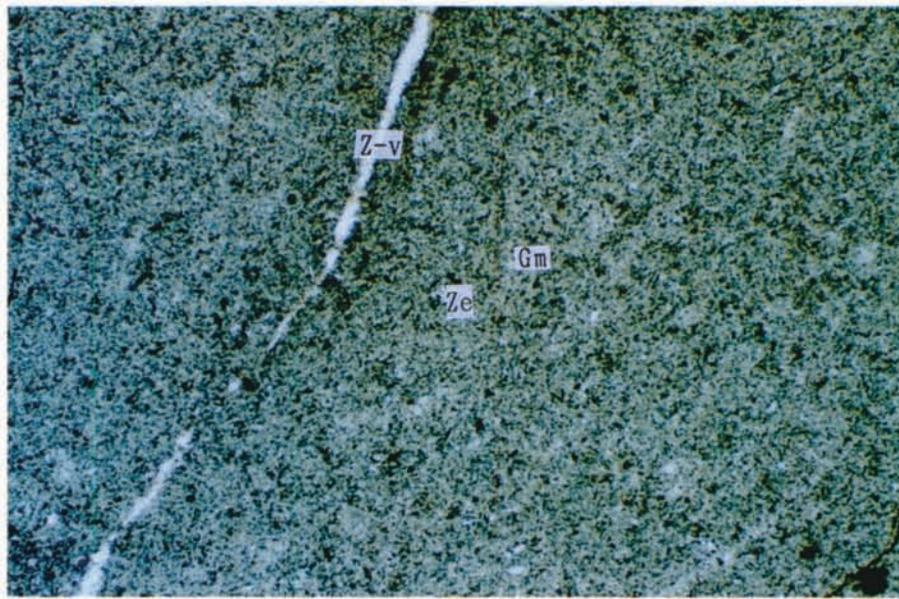


直交ポーラー

0.5mm

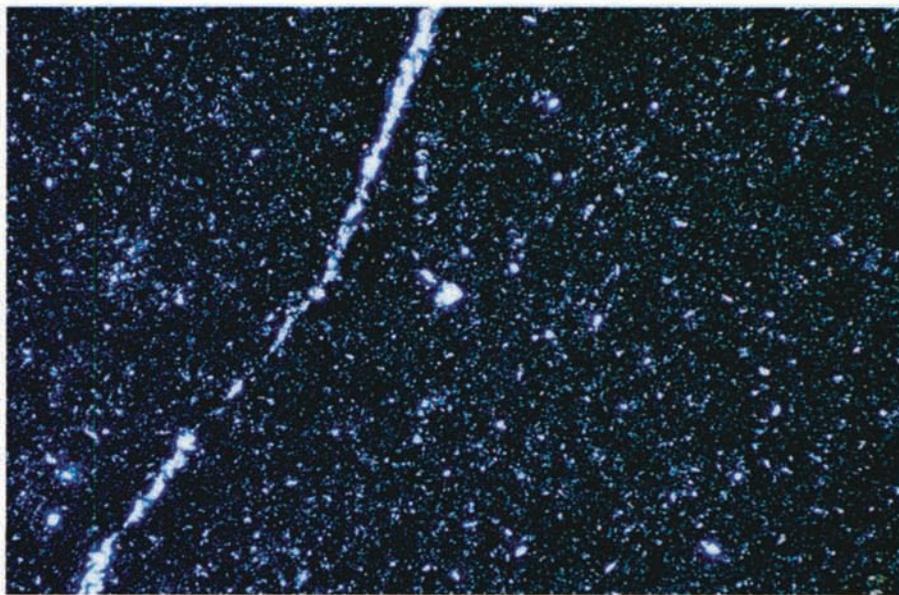
図版3 岩石薄片顕微鏡写真

試料番号2 泥岩



下方ポーラー

0.5mm



直交ポーラー

0.5mm

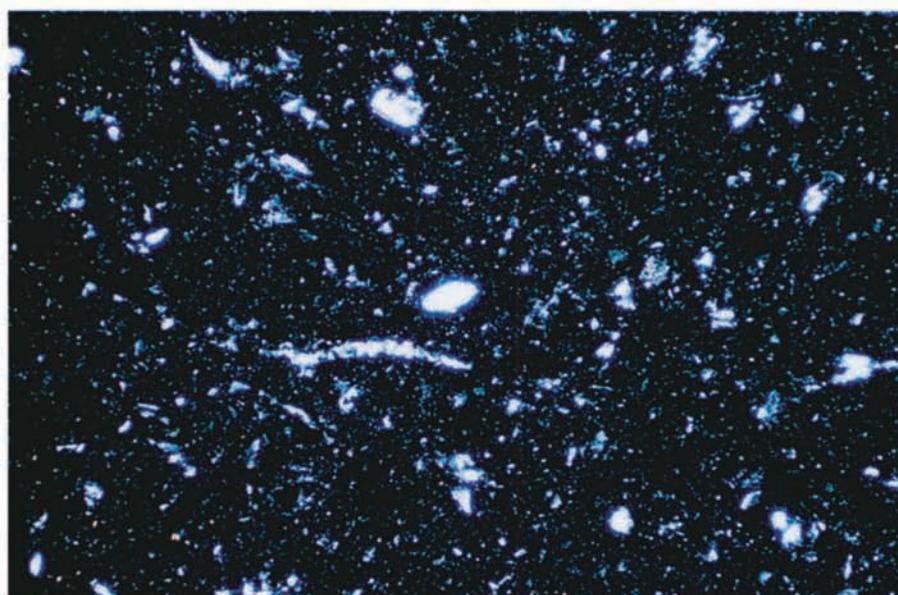
図版4 岩石薄片顕微鏡写真

試料番号3 砂質泥岩



下方ポーラー

0.5mm

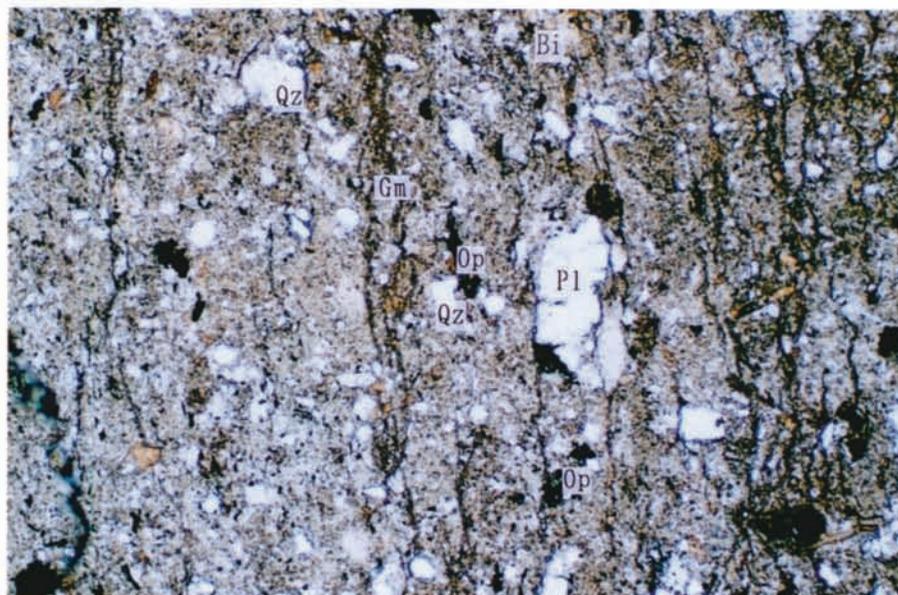


直交ポーラー

0.5mm

図版5 岩石薄片顕微鏡写真

試料番号5 シルト岩



下方ポーラー

0.5mm



直交ポーラー

0.5mm



図版6 岩石薄片顕微鏡写真

試料番号5 シルト岩



下方ポーラー

0.5mm



直交ポーラー

0.5mm

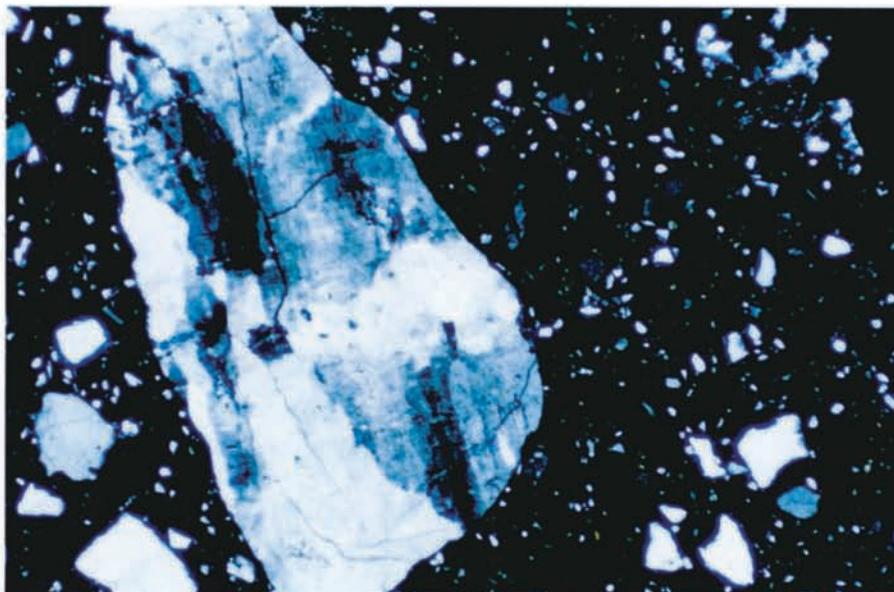
図版7 須恵器等の薄片顕微鏡写真

試料番号1 須恵器



下方ポーラー

0.5mm

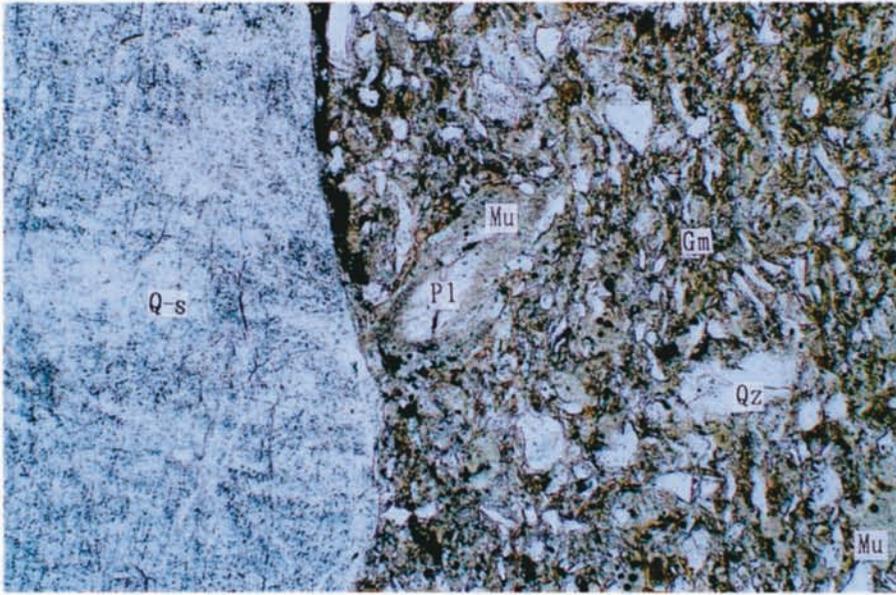


直交ポーラー

0.5mm

図版8 須恵器等の薄片顕微鏡写真

試料番号1 須恵器 (図版7の拡大写真)



下方ポーラー

0.2mm



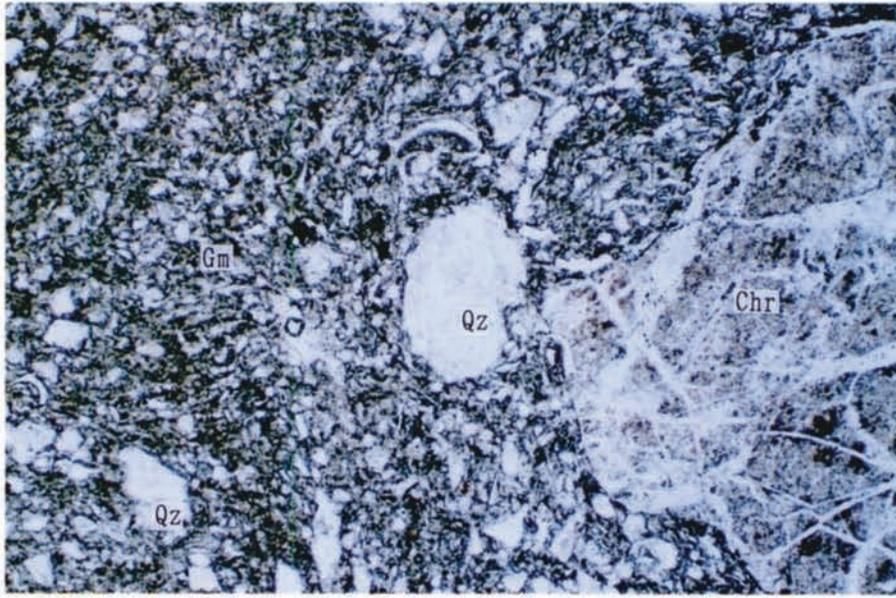
直交ポーラー

0.2mm



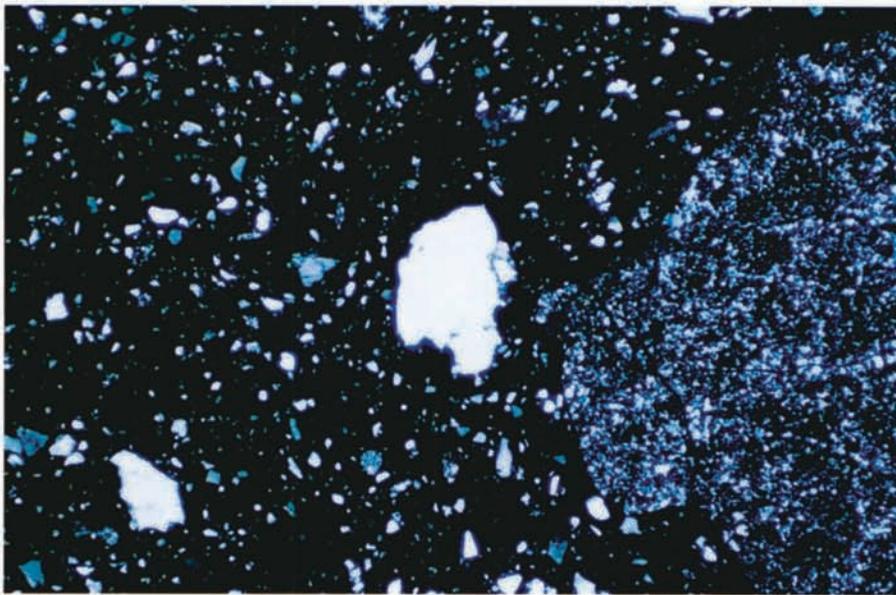
図版9 須恵器等の薄片顕微鏡写真

試料番号2 須恵器



下方ポーラー

0.5mm



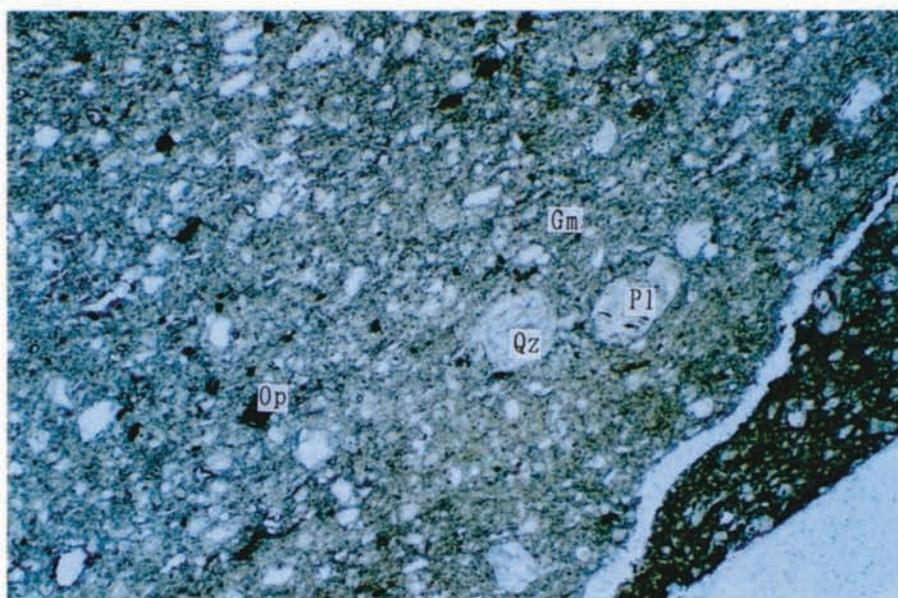
直交ポーラー

0.5mm



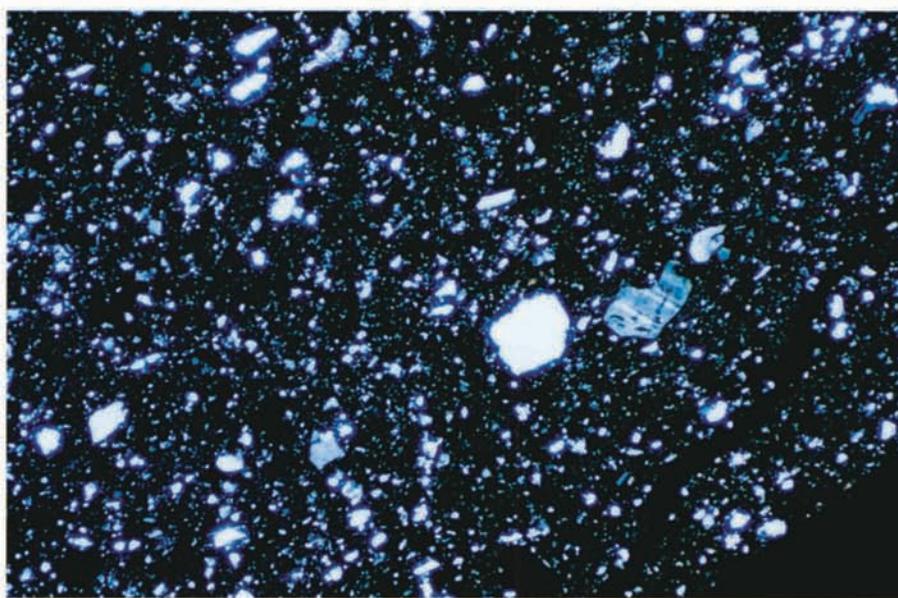
図版10 須恵器等の薄片顕微鏡写真

試料番号3 瓦器？



下方ポーラー

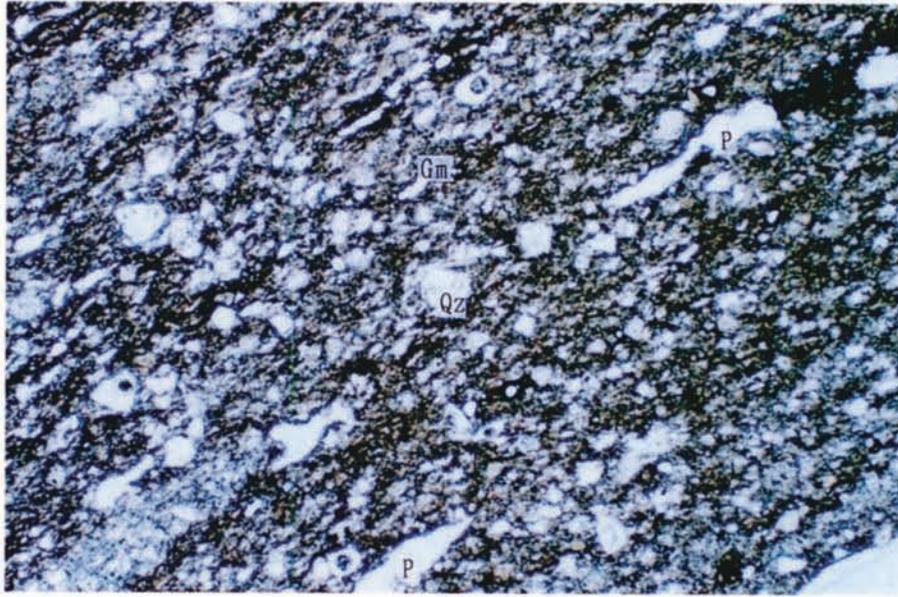
0.5mm



直交ポーラー

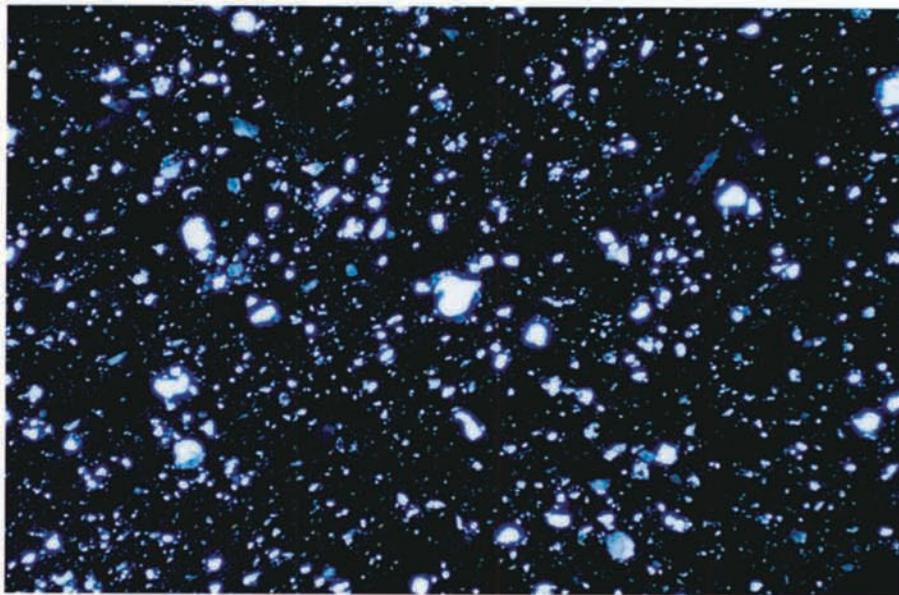
0.5mm

図版11 須恵器等の薄片顕微鏡写真
試料番号4 須恵器



下方ポーラー

0.5mm



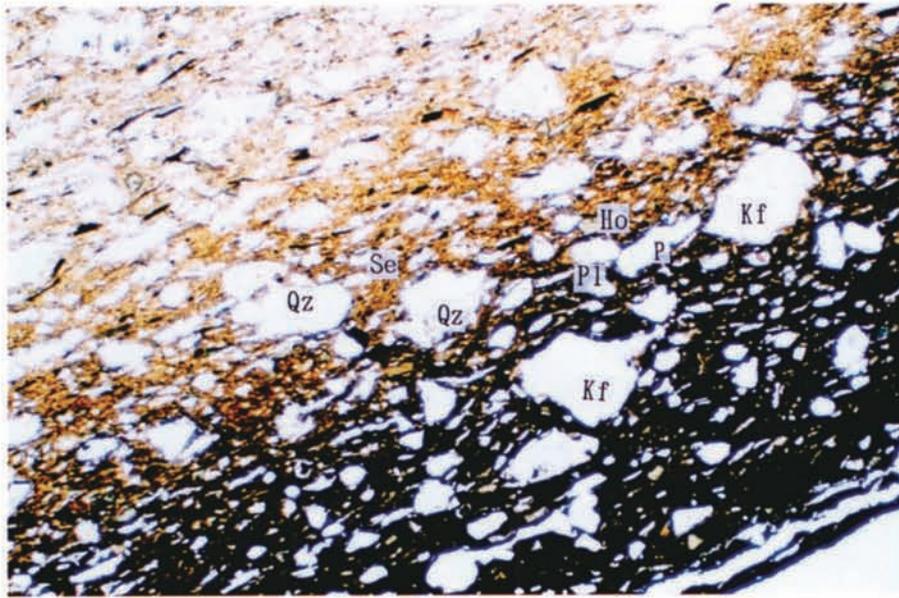
直交ポーラー

0.5mm



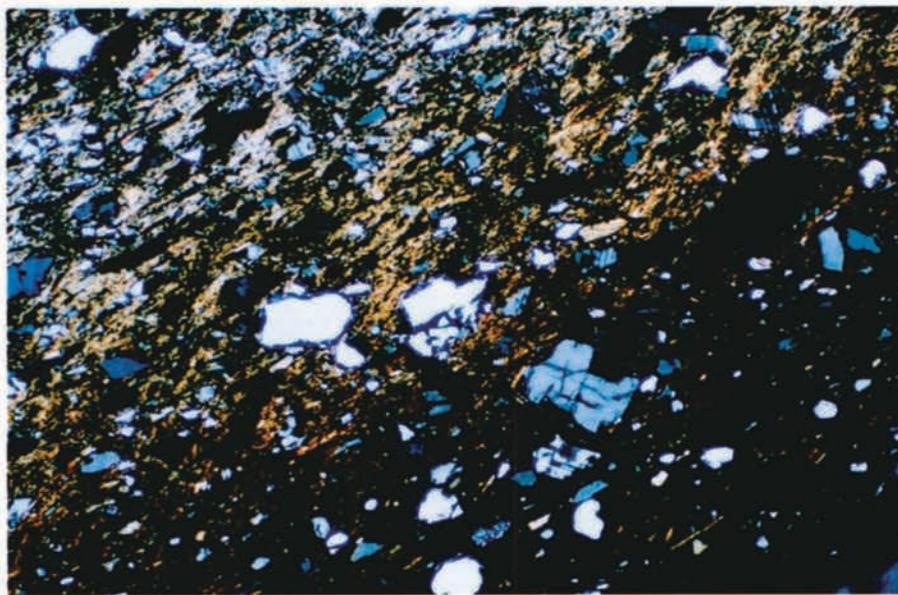
図版12 須恵器等の薄片顕微鏡写真

試料番号5 黒色土器



下方ポーラー

0.5mm



直交ポーラー

0.5mm

報告書抄録

ふりがな	ふなといせき							
書名	船戸遺跡							
副書名	中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	出原恵三・松田直則・曾我貴行・坂本憲昭・竹村三菜・武吉眞裕							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL. 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなといせき 船戸遺跡	〒783 高知県中村市 森沢	39207	070064	35° 58' 7"	132° 54' 17"	平成5年 5月12日) 平成6年 2月17日	6,000	中村宿毛道路高規格道路建設工事に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
船戸遺跡	集落跡	縄文 古墳 古代 中世	掘立柱建物跡 流路 土壇 地割れ跡		縄文土器・石器 土師器 須恵器 貿易陶磁器 瓦器 碇 金属製品		古代中世の河津の性格を持つ	

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集

船 戸 遺 跡

－中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－

1996年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社